

増補新版

一高寮歌解説書の

# 落穂拾い

虫の目と鳥の目で  
寮歌を読み解く

森下 達朗



増補新版

一 高寮歌解説書の落穂拾い

森下達朗

〈虫の目と鳥の目で寮歌を読み解く〉

## 序

園部達郎

(一高昭和七年文甲卒、  
二五 一高同窓会理事長)

私共一高卒業生にとり寮歌は生命である。だからこの歳になつても、「寮歌祭」はじめ、毎月のように行われる「木曜会」、「うたう会」が楽しみである。殊に、寮歌に心酔される会友の方々の熱心さから、その間に交される寮歌問答が関心を呼ぶ。私はつとに、作詞者からできるだけ作意を伺つてきたが、列席の方々の寮歌問答は素晴らしい。殊に数年前から会毎に頂戴してきた森下君の「落穂拾い」は、一高生が当り前として見過してきた歌詞の典拠等を丁寧に拾い上げてくれるだけでなく、斬新な視点からの解釈をいくつも披露してくれる。寮歌は一高生全体のものとして観てきた私も、眼を見張つてきた。

その刺戟から、私自身も、雑ながら「寮歌こぼればなし」をものしてしまつた。これも、皆で寮歌を議論し合い掘り下げたいという思いからであつた。「寮歌解説書」を主宰した安川定男君とも大いに言い合いをしたし、その結果おのおのの見解を了解し合つてきた。こうしたことからも、今後とも「解説書」、「寮歌私観」(井上司朗氏)などを取り上げ、寮歌に更なる深みを増したら、と念じている。

以上は寮歌を歌う毎にいつも思うことであるが、今般、森下君が、その「落穂拾い」を集大成されると伺い、両手を挙げて賛成し、その再読により、益々寮歌論議の高まらんことを期待している。

森下君の御努力を讚美し、更に他の研究者の方々の発表を待望したい。そして、寮歌の今後を安んじて歌い続けたい。有難う、有難う。

(平成二十一年十二月)

## 増補新版 自序

森 下 達 朗

旧版『落穂拾い』の初版を刊行してから早くも五年余の歳月が経過した。この間、拙著について読者諸賢から過分のお言葉を頂戴するとともに、いろいろと有益なご示唆・ご教示を賜ったことについて、心から感謝の意を捧げる次第である。

旧版は、平成十六年夏から約五年間（三十四回）にわたって筆者が詠帰会で発表した一高寮歌の歌詞の研究成果を取りまとめて発表したものであるが、詠帰会における研究発表はその後も継続し、平成二十六年十一月には通算七十回に達した。未採録の寮歌がまだ残ってはいるものの、筆者が私見を世に問いたいと意図していた一高寮歌の範囲はほぼカバーできたので、この段階で区切りをつけることとし、旧版の内容と最後の五年間の研究成果とを併せて新たに編集し、「増補新版」と銘打って刊行することとした。

増補新版では、著名な一高寮歌でありながら旧版では十分意を尽くせなかったものを中心とその後の研究成果を盛り込んで大幅に増補・改稿するとともに、新たに三十七篇の寮歌についての研究成果を採録したことから、ページ数は旧版のほぼ二倍に達することとなった。

本書の内容は一高寮歌を対象としたものであるが、一高に有縁の方々はもとより、旧制高校寮歌を愛唱される皆様にもぜひご一読いただきたいと願っている。

（平成二十七年三月）

## 例言（平成二十二年十二月）

一、本書は、平成十六年十一月一日発行の『第一高等学校寄宿寮歌 解説』（一高同窓会）（以下、『解説書』という）の論述を補充することによって、一高寮歌に関心を持つ方々のお役に立てていただくとともに、一高寮歌のすばらしさを後世に伝えるよすがとしたいという願いをこめて執筆した。本書のタイトル中の「落穂拾い」という表現は、このことを含意している。

一、具体的には、①同『解説書』において「不明」、「未詳」、ないし「後考を待つ」とされた事項、②『解説書』で言及されていない事項、及び、③筆者の見解が『解説書』のそれと異なる事項等について研究・調査を進め、私見として取りまとめたものである。

一、したがって、同『解説書』で十分な説明が加えられている事項や、『解説書』の解釈に筆者として異論がないものについては、煩を避けるため、本書では原則として記述の対象としないことをお断りしておきたい。

一、本書のレイアウトにおいては、本文を原則として上下二段に分けた。上段には本書で取り上げた寮歌の歌詞を掲げるとともに、下段のうち【解説】の項では研究の対象とした歌詞の部分についての『解説書』の説明を引用（または要約引用）し、次いで【私見】の項では、当該箇所の特長・解釈についての筆者の見解を述べることによって一覽して比較対照ができるように配慮した。また、文章や詩歌を引用した場合は、▼印で示し、出典を記載した。

一、一高寮歌の底本としては、平成十六年十一月一日発行の『寮歌集』（一高同窓会、三百六十五篇収録）を用いた。本書は寮歌の歌詞を研究の対象としていることから、作詞者名及び作曲者名は掲載したが、曲譜は割愛した。なお、本書で取り上げた寮歌の歌詞については、必ずしも全部の節ではなく、説明上必要と考えられる範囲のものを選択して掲載した。

一、配列の順序は底本通りとし、『解説書』と同じく冒頭の「全寮寮歌」を1とし、以下配列順に『解説書』と共通の「通し番号」を付して相互参照を容易にした。ただし『解説書』が底本とした昭和五十年版の寮歌集に掲載されていなかった昭和十八年五月の寄贈歌二篇については、枝番を付する方法により区別した。

一、本書で取り上げなかった一高寮歌についても、本文において題名および作詞者名は省略せず、底本の順序どおり小さい活字で掲載した。「目次」及び「歌い出し索引」の場合も全篇を順序どおり掲載した。ただし、本文でとりあげなかった寮歌については、小さい活字でページ番号抜きで掲載した。

一、一高寮歌の歌詞（及び作詞者・作曲者の固有名詞）の表記にあたっては、漢字は原則として新字体によることとし、仮名遣いは歴史的仮名遣い（旧仮名）によることを基本とした。底本に振り仮名が付されているものはそのまま採録したが、一部誤って新仮名が付されているものについては、旧仮名に修正した。

一、縦書き文における元号・年月日等の表記については、本来なら漢数字で統一することが好ましいと考えるが、スペース節約の必要等から、やむなく算用数字による表記を併用した。

一、本書のご利用にあたって、一高同窓会発行の『寮歌集』もしくは『解説書』を必要に応じて参照されると、

ご理解をいっそう深めていただくのに役立つと考える。

一、本書が取り上げた寮歌の数は、【寮歌・寄贈歌】の部では、明治期八十三篇、大正期五十四篇、昭和期五十九篇の計百九十六篇、【部歌・応援歌・頌歌】の部で八篇、合計では二百四篇に上る。

一、本書で割愛した寮歌の中には、未だ研究途上で結論を得るに至っていないものが含まれており、今後更に研究を続けてゆきたいと考えている。先学諸賢のご教示をお願いしたい。

## 増補新版 例言（平成二十七年三月）

一、旧版（平成二十一年十二月発行）の例言に記した編集方針については、増補新版においても基本的に踏襲した。変更のあった事項については、以下に掲げる。

(一) 一高寮歌の歌詞（及び作詞者・作曲者の固有名詞）の表記にあたっては、旧版においては、漢字は原則として新字体によることとしていたが、今回の増補新版においては、「寮歌の歌詞」及び「作詞者・作曲者の固有名詞」の漢字については、原則として旧字（正字）体によることに改めた。なお、寮歌の歌詞の仮名遣いについては、旧版に引き続き、音訓とも歴史的仮名遣い（旧仮名）によっている。

(二) 旧版で採録した寮歌のうち、今回の増補新版で大幅に記述を増補した主な寮歌を例示する。

【明治】「全寮寮歌」（明34）、「アムール川の」（明34）、「春爛漫の」（明34）、「嗚呼玉杯に」（明35）、  
「仇浪騒ぐ」（明40）、「春蟾かすむ」（明40）、「紅雲映ゆる」（明42）。

【大正】「さくら流れの」（大2）、「ありとも分かぬ」（大2）、「櫻真白く」（大6）、「いま京近き」（大7）、「一搏翱翔」（大8）、「東皇回る」（大8）、「一夜の雨を」（大9）、「榮華は古りし」（大12）、「しろがね遠く」（大14）、「烟争ふ」（大15）。

【昭和】「あしがれの唄」（昭3）、「大海原の」（昭10）、「新墾の」（昭12）、「返けくも」（昭12）、  
「運るもの」（昭17・6）、「榛薫る」（昭17・6）、「曙の燃ゆる息吹ゆ」（昭19）。



(三) 今回の増補新版で新たに採録した寮歌は三十七篇であるが、その中の主なものを例示する。

【明治】「曉寄する」(明36)、「彌生が岡に地を占めて」(明36)、「比叡の山の石だたみ」(明38)、「太平洋の」(明39)、「紫淡く」(明41)、「雲巻き雲舒ゆるぶ」(明44)。

【大正】「廣野ひろのをわたる」(大4)、「わがたましひの」(大5)、「比叡の山に雪消えて」(大6)、「朧月夜に仄ひら白く」(大7)、「あかつきつぐる」(大9)、「あゝ紫の」(大10)。

【昭和】「しづまなる」(昭4)、「春東海の」(昭5)、「彩雲あやは」(昭6)、「舊ふるき星」(昭7)、「空洞うつろなる」(昭9)、「嗚呼先人の」(昭10)、「櫻はな崩ゆる」(昭10)、「東天淡し」(昭11)、「春尚浅あはき」(昭12)、「光ほのかに」(昭14)、「時計臺あひだに」(昭16)、「嗚呼悠久ととの」(昭19)。

【部歌・應援歌・頌歌】「野球部部歌」、「陸上運動部部歌」、「日日かかなべて」。

一、今回の増補新版で採録した寮歌の数は、【寮歌・寄贈歌】の部では、明治期九十三篇、大正期六十三篇、昭和期七十三篇の計二百二十九篇、【部歌・應援歌・頌歌】の部で十二篇、合計では二百四十一篇に上る。全体のページ数は、旧版の概ね二倍となった。

【参考】旧版の例言では特に言及していなかったが、一高昭和23年入学(学制改革により同24年修了)の先輩の年次については、昭和26年卒業相当として、慣例に従い「一高昭26文甲」の例により表記している。

# 【目次】

序（園部達郎）

増補新版自序

例言・増補新版例言

## 【寮歌・奇贈歌】

全寮寮歌（明治34年）

1・闇の中なる……………3

寄宿寮歌（明治25年）

2・雪ふらばふれ……………6

第五回記念祭（明治28年）

3・たなびきわたる……………6

4・西に富士……………7

5・富士の高峰の

第六回記念祭（明治29年）

6・身を捨てゝ……………8

第八回記念祭（明治31年）

7・ニコライの

8・忠と勇との

9・我寄宿舎を……………8

10・我等はいかなる……………9

第九回記念祭（明治32年）

11・武成の昔……………10

12・一度搏てば

13・思へば遠し……………13

14・向が岡の春風に……………16

第十回記念祭（明治33年）

15・千代呼ぶ聲に……………17

16・あを大空を……………18

17・青く澄みたる

18・見よ甘泉の

第十一回記念祭（明治34年）

19・アムール川の……………19

20・春爛漫の……………26

21・輝き渡る……………31

22・世紀の流れ……………31

23・姑蘇の臺は……………33

第十二回記念祭（明治35年）

24・嗚呼玉杯に……………34

25・混濁の浪……………49

26・木の芽も春の……………52

27・大空ひたす……………52

28・暴風轟然

29・我一高は

第十三回記念祭（明治36年）

30・緑もぞ濃き……………54

31・曉寄する……………60

32・かつら花咲く……………63

33・彌生が岡に地を占めて……………66

34・春まだあさき……………67

35・筑波根あたり……………68

36	・比叡の山に我立ちて	
37	・春の日背を	68
第十四回記念祭(明治37年)		
38	・向が陵の自治の城	69
39	・明けぬと告ぐる	69
40	・春三月の	70
41	・亞細亞の東	72
42	・都の空に	73
43	・思ひ出づれば	75
44	・時は流れて十四歳	
45	・暁がたの	75
第十五回記念祭(明治38年)		
46	・王師の金鼓	76
47	・春燎爛の花霞	79
48	・平沙の北に	82
49	・香雲深く	86
50	・春長江の	87

51	・向ヶ丘に冬籠る	88
52	・比叡の山の石だたみ	88
53	・紫淡き春霞	
54	・武香が岡に春長けて	
第十六回記念祭(明治39年)		
55	・群り猛る	91
56	・太平洋の	92
57	・霞かぎれる	97
58	・波は逆巻き	99
59	・あゝ渾沌の	102
60	・都は春の綾錦	103
61	・花の香むせぶ	103
62	・みよしのの	
63	・柏の下葉	104
64	・春は櫻花咲く	
第十七回記念祭(明治40年)		
65	・仇浪騒ぐ	105

66	・紫金 <small>しこん</small> の彩羽 <small>あやは</small>	119
67	・春蟾 <small>せん</small> かすむ	119
68	・劍 <small>つるぎ</small> の前に <small>さき</small>	126
69	・朝金鶏 <small>あした</small> たかなきて	127
70	・嵐を孕み	129
71	・あゝ大空に	129
72	・思ふ昔の	
73	・袖が濱邊の	133
第十八回記念祭(明治41年)		
74	・譬 <small>たとへ</small> ば海の	
75	・蒼茫 <small>蒼茫</small> 遠く	
76	・彌生ヶ岡の花がすみ	133
77	・そよぐ橄欖	135
78	・巨大の天靈	135
79	・霞薫 <small>薫</small> する	136
80	・としはや已に	137
81	・いざ行かむ	138

82	・紫淡く……………	141
第十九回記念祭(明治42年)		
83	・わが行く方は……………	143
84	・闇の醜雲	
85	・潮高鳴り……………	143
86	・玉の臺の……………	144
87	・紅雲映ゆる……………	145
88	・緋臙着けし……………	148
89	・若草もえて	
90	・天路のかぎり……………	149
91	・をぐろき雲は	
第二十回記念祭(明治43年)		
92	・笛の音迷ふ……………	150
93	・青鸞精を啄みし……………	152
94	・新草萌ゆる……………	155
95	・煙に似たる……………	157
96	・颯風を孕み……………	158

97	・春の臺の	
98	・藝文の花……………	159
99	・武藏野分きて……………	161
100	・春の臙のよひにして……………	162
第二十一回記念祭(明治44年)		
101	・華陽の夢の……………	163
102	・月は臙に……………	164
103	・オウムパスなる	
104	・妖雲瘴霧……………	167
105	・八島を洗ふ……………	169
106	・光まばゆき……………	171
107	・雲巻き雲舒ぶ <sup>の</sup> ……………	175
108	・雪こそよけれ	
109	・雲や紫……………	178
第二十二回記念祭(明治45年)		
110	・しづかに沈む……………	178
111	・霧淡晴の……………	181

112	・春より暮れて……………	187
113	・天龍眠る……………	188
114	・あく平安の……………	189
115	・希望の光	
116	・春は來ぬ	
117	・花は櫻と	
118	・筑紫の富士に……………	190
119	・荒潮の……………	192
第二十三回記念祭(大正2年)		
120	・さくら流れの……………	193
121	・あく炳日の……………	197
122	・春の思ひの……………	197
123	・ありとも分かぬ……………	198
124	・夢ゆたかなる……………	202
125	・春、繚亂の……………	205
126	・暮靄罩れる……………	207
127	・天日はるかに	

142	・無言 <small>しごま</small> に憩 <small>ま</small> ふ……………	226
141	・見よ鞆 <small>しうぜん</small> に……………	226
140	・秋雲 <small>しげ</small> 稠 <small>しげ</small> き……………	224
139	・廣野 <small>ひろの</small> をわたる……………	222
第二十五回記念祭（大正4年）		
138	・まだうらわかき……………	
137	・彌生が岡にまかれにし……………	
136	・あゝ香蘭の……………	219
135	・大空舞ひて……………	
134	・ゆれて漂 <small>た</small> ぶ……………	212
133	・柏 <small>あかつき</small> の濃 <small>あかつき</small> 緑……………	
132	・春の光の……………	211
131	・黎明 <small>あかつき</small> の靄……………	211
130	・彌生が岡の夕まぐれ……………	
第二十四回記念祭（大正3年）		
129	・かをりのみたま……………	209
128	・御代諒蘭の……………	208

157	・われらの命の……………	
156	・わがたましひの……………	242
155	・橄欖 <small>しげ</small> のかげ……………	
154	・黄昏時の夢の國……………	241
153	・朧 <small>おぼろ</small> 月夜の花の蔭……………	240
152	・實る橄欖……………	240
151	・闇 <small>くろ</small> に陰 <small>くもり</small> れる……………	239
150	・朧 <small>おぼろ</small> に霞 <small>かすみ</small> む……………	237
149	・あゝ朝潮の……………	235
第二十六回記念祭（大正5年）		
148	・あゝ新緑の……………	234
147	・野路の小百合の……………	234
146	・散りし櫻を……………	
145	・晴るゝおもひに……………	229
144	・橄欖 <small>しげ</small> の森……………	228
143	・紫の暁……………	

172	・紫霧 <small>むら</small> ふ……………	276
171	・朧 <small>おぼろ</small> 月夜に仄 <small>く</small> 白 <small>く</small> ……………	272
170	・うらゝにもゆる……………	271
169	・悲風 <small>かな</small> 慘 <small>かな</small> 悴……………	
第二十八回記念祭（大正7年）		
168	・青葉山……………	
167	・つめたき冬の……………	269
166	・比叡 <small>ひ</small> の山に雪消えて……………	260
165	・とこよのさかえに……………	259
164	・櫻 <small>さくら</small> 真 <small>ま</small> 白 <small>しろ</small> く……………	256
163	・日は眠る……………	
162	・あゝ青春の驕 <small>あ</small> 楽 <small>は</small> は……………	255
161	・若紫 <small>わかし</small> に……………	247
160	・眞闇 <small>ま</small> の影 <small>かげ</small> は……………	
159	・圖南 <small>と</small> の翼……………	244
第二十七回記念祭（大正6年）		
158	・雲 <small>くも</small> ふみ分 <small>わ</small> けて……………	

173	霞一夜の……………	278
174	眠れる獅子の	
175	蘇る春の	
176	いま京近き……………	279
177	暗雲西に	
178	淡青春に	
179	東寮告別歌・月は老ゆるを・	284
第二十九回記念祭（大正8年）		
180	まじろみ深き	
181	一搏翱翔……………	284
182	時の流れもゆるやかに	
183	坤うちゝかに	
184	東皇回る……………	288
第三十回記念祭（大正9年）		
185	春甦る……………	294
186	一夜の雨を……………	297
187	のどかに春の……………	302

188	西明寮落成記念歌・	
	嗚呼東海の・	
189	あかつきつくる……………	304
190	漁火消えゆき	
第三十一回記念祭（大正10年）		
191	彌生が丘に洩れ出づる・	307
192	東海染むる	
193	あゝ紫の……………	308
194	春未だ若き……………	313
195	御空に映ゆる	
196	儉安の春も……………	313
第三十二回記念祭（大正11年）		
197	自治の流れは……………	314
198	紫烟る……………	316
第三十三回記念祭（大正12年）		
199	流れ行く……………	320
200	榮華は古りし……………	322

201	夕月丘に……………	326
第三十四回記念祭（大正13年）		
202	暁星の光消えゆき……………	330
203	白陽に映ゆる	
204	草より明けて	
205	宴して……………	331
206	今日回り来る	
207	春や加茂の	
第三十五回記念祭（大正14年）		
208	杳かなる日の	
209	橄欖の梢の尖に……………	332
210	しろがね遠く……………	332
第三十六回記念祭（大正15年）		
211	さ緑庭に	
212	あしたの星の	
213	烟り争ふ……………	336
214	生命の泉……………	343

- 215 ・人の世の小昏き山路
- 第二十七回記念祭（昭和2年）
- 216 ・たまゆらの
- 217 ・散り行く花の…………… 343
- 218 ・若き愁ひに…………… 347
- 第二十八回記念祭（昭和3年）
- 219 ・さ霧這ふ…………… 349
- 220 ・あこがれの唄…………… 351
- 221 ・仄々と朝明けにけり…………… 355
- 第二十九回記念祭（昭和4年）
- 222 ・白雲の…………… 356
- 223 ・しづまなる…………… 358
- 224 ・八重汐路
- 225 ・彼は誰の…………… 365
- 226 ・丘邊の春に
- 227 ・嗚呼繚亂の…………… 366
- 228 ・小萩露けき…………… 367
- 第四十回記念祭（昭和5年）
- 229 ・春東海の…………… 368
- 230 ・溟洋る胸の
- 231 ・群雲を紅染めて…………… 372
- 232 ・鯨波切りて
- 第四十一回記念祭（昭和6年）
- 233 ・彩雲は…………… 373
- 234 ・朝めくる…………… 382
- 235 ・濁りよ深き
- 236 ・ふるさこの
- 第四十二回記念祭（昭和7年）
- 237 ・吹く木枯に…………… 385
- 238 ・舊き星…………… 387
- 239 ・春は萬朶の…………… 394
- 240 ・白波騒ぎ…………… 395
- 第四十三回記念祭（昭和8年）
- 241 ・愁ひに悲し
- 242 ・古りし榮ある…………… 398
- 243 ・風荒ぶ
- 244 ・見よやく…………… 399
- 245 ・手折りてし…………… 401
- 第四十四回記念祭（昭和9年）
- 246 ・梓弓…………… 403
- 247 ・空洞なる…………… 403
- 248 ・あゝ如月の
- 249 ・縁なす…………… 409
- 第四十五回記念祭（昭和10年）
- 250 ・大風荒れて…………… 410
- 251 ・芙蓉の雪の
- 252 ・橄欖香る…………… 410
- 253 ・大海原の…………… 411
- 254 ・時永劫の…………… 415
- 255 ・ふりつめる
- 256 ・嗚呼先人の…………… 416

271	・ 春の日暮 <small>ひかげ</small> に……………	450
270	・ 武蔵野の……………	
269	・ 春尚浅き……………	447
268	・ 遐 <small>はる</small> げくも……………	442
267	・ 新墾 <small>にひはり</small> の……………	428
第四十七回記念祭(昭和12年)		
266	・ 陽は黄梢 <small>はる</small> に……………	427
265	・ 東天淡し……………	424
264	・ 春や朧 <small>はる</small> の夕まぐれ……………	424
263	・ 紫の叢雲 <small>はな</small> つきて……………	
262	・ 若駒の……………	
第四十六回記念祭(昭和11年)		
261	・ 櫻雨 <small>はな</small> ゆる……………	420
260	・ 薄蕩 <small>はな</small> こむる……………	
259	・ 嫩葉 <small>はな</small> 萌ゆ……………	
258	・ 彌生の丘四十五年……………	
257	・ 劫風寄する……………	

第四十八回記念祭(昭和13年)		
272	・ 怪鳥焦土 <small>わたつみ</small> に……………	
273	・ 蒼溟 <small>わだつみ</small> の……………	452
274	・ 雪鎖 <small>とび</small> す……………	452
275	・ 春こそは……………	455
276	・ 夕霧は……………	456
第四十九回記念祭(昭和14年)		
277	・ 光ほのかに……………	458
278	・ 仄燃 <small>しやうか</small> ゆる……………	
279	・ 上下 <small>しやうか</small> 茫茫……………	466
280	・ 春毎 <small>しやうか</small> に……………	467
281	・ 丘の雲……………	
282	・ ああさ丹 <small>あさ</small> づらふ……………	467
283	・ お <small>お</small> 呼ぶ聲……………	
第五十回記念祭(昭和15年)		
284	・ 清らかに……………	470
285	・ 嚴 <small>いつかし</small> 白樺の……………	472

286	・ 朝日影……………	
287	・ 瑞雲 <small>こ</small> 罩むる……………	475
288	・ 不知火の……………	
289	・ 時は流れぬ五十年……………	476
290	・ 人の世の岨 <small>こ</small> しき路に……………	477
第五十一回記念祭(昭和16年)		
291	・ 時計臺 <small>あらしぎ</small> に……………	479
292	・ あさみどり……………	486
293	・ ほのぼのと明け行く丘に……………	
294	・ 北海浪は……………	487
第五十二回記念祭(昭和17年)		
295	・ 彌生の道に……………	488
296	・ 障 <small>さ</small> え散 <small>な</small> へぬ……………	492
297	・ 向ヶ丘に吹き荒る……………	
298	・ 駒場野に……………	493
299	・ 月を背にして……………	496
300	・ 寒風颯 <small>あらし</small> 颯……………	498



- 301 ・ 嗚呼東の  
第五十三回記念祭(昭和17年6月)  
302 ・ 運めくるもの……………499  
303 ・ 若縁濃はしほみき……………514  
304 ・ 榛 薫る……………515
- 第五十四回記念祭(昭和18年)  
305 ・ 天つ日を……………521  
305 II ・ 春すぎて……………524  
305 III ・ 廣瀬の流れ……………525
- 第五十五回記念祭(昭和19年)  
306 ・ 曙の燃ゆる息吹ゆ……………526  
307 ・ 嗚呼悠久とはの……………535
- 第五十六回記念祭(昭和20年)  
308 ・ 日は夢み……………543  
309 ・ 曉星の淡あざき……………544
- 第五十七回記念祭(昭和21年)  
310 ・ 悲しみに……………545
- 311 ・ あくがれは……………544  
第五十八回記念祭(昭和22年)  
312 ・ 青旗の……………546  
313 ・ りよりりようと……………549
- 第五十九回記念祭(昭和23年)  
314 ・ ふりしきる……………552  
315 ・ 東の天地別きて……………553
- 第六十回記念祭(昭和24年)  
316 ・ いざさらば……………553  
317 ・ 日のしづく……………554
- 【部歌・應援歌・頌歌】  
318 ・ 端艇部部歌(花は櫻木)  
319 ・ 端艇部應援歌(嗚呼向陵に)  
320 ・ 祝勝歌(あゝ我勝ちぬ)……………559  
321 ・ 遠漕歌(紅香ふ)  
322 ・ 理端遠漕歌(戊戌の昔)……………563
- 323 ・ 野球部部歌(天地の正氣)……………568  
324 ・ 野球部新部歌(嵐が丘に)  
325 ・ 野球部應援歌(正氣あふるる)  
326 ・ 野球部凱歌(古都千年の)  
327 ・ 陸上運動部部歌(柏の旗の)……………573  
328 ・ 庭球部部歌(向ふが岡の新草に)  
329 ・ 庭球部應援歌(歴史は古りし)  
330 ・ 対三高戦四部全勝歌(橄欖永久に)  
331 ・ 柔道部部歌(時乾坤の)……………577  
332 ・ 柔道部凱歌(仇敵北に)  
333 ・ 擊劍部部歌(瑞雲映ゆる)……………579  
334 ・ 水泳部舊部歌(都の南)  
335 ・ 水泳部部歌(狭霧はれゆく)  
336 ・ 弓術部部歌(あゝ日は昇る)  
337 ・ 弓術部遠征歌(西のくらのいに)……………581  
338 ・ 御大典奉祝歌(東海波は)  
339 ・ 御大典奉祝歌(不二が嶺に)

340	・ 御大典奉祝歌 (神の代ながらに)		
341	・ 立太子奉祝歌 (いやさかえゆく)		
342	・ 征露歌 (ウラルの彼方)	582	
343	・ 旅順陥落歌 (北、窮髪の)		
344	・ 青島陥落捷歌 (寒燈夜は)	585	
345	・ 新渡戸校長惜別歌		
	(慕へどあはれ)	586	
346	・ 嘯雲寮寄贈歌 (金芙蓉の峯に)		
347	・ 對二三高戦應援歌 (蒼穹深く)		
348	・ 一高音樂班班歌 (駒場の原に)		
349	・ 春は春は		
350	・ マーナンジャエー		
351	・ 一つとせ		
352	・ 身體がデツカイばかりで		
353	・ 一つ出たわいな		
354	・ あゝ愉快なり		
355	・ 上村中將の歌		
356	・ 漢の高祖		
357	・ 河童踊の歌		
358	・ 銀波歌		
359	・ 日 <small>か</small> 日 <small>か</small> なべて	592	
360	・ ああわれら		
361	・ 一高水泳部の歌 (舟の上より)		
362	・ ラグビー部部歌 (下ラ、ラ、ラ、ラ)		
363	・ 桃太郎踊りの歌		
	<b>【歌い出し索引】</b>	595	
	<b>【あとがき】</b>	603	
	<b>【増補新版あとがき】</b>	605	

【寮歌・寄贈歌】



## 寮歌 寄贈歌

### 1 全寮寮歌『闇の中なる』(明34 / 大島正徳 作詞、島崎赤太郎 作曲)

一 「闇の中なる一すぢの

光なりけり天つ日の

向ヶ岡に霧晴れて

花やぎ渡る朝の色

志ある青年が

濁り行く世を嘆きつゝ

操と樹てし柏木の

旗風かをる寄宿寮

【解説】明治33年中に、それまで構外隣接地に借用していた南・北寮を構内に

新築、合わせて中寮を新築して五寮が成り、34年1月から全寮制(皆寄

寄宿制)が実現したのを機に「全寮寮歌」が作られた。本寮歌には寄宿寮

制度の意義、自治共同の精神、並びに明治23年の寄宿寮開設時に木下校長

が示した「四綱領」の趣旨が明快・的確に詠みあげられている。同寮会主

催の式典・集会等の場合には必ず冒頭に本歌を唱うのがしきたりである。

《筆者注：一高玉杯会主催の春秋の寮歌祭でもこの伝統は受け継がれている。》

「操と樹てし柏木の 旗風かをる寄宿寮」——明治19年に「東京大学

予備門」が独立して「第一高等中学校」と改称された際、帽章に柏葉と楸

欖を図案化して組み合わせ、更に明治22年、校旗として「護国旗」が作

られたとき、同じく柏葉と楸欖とが配された。「柏葉」は「武」の、「楸欖」

は「文」のシンボルとして採用された。以上を踏まえて「操と樹てし柏木

の 旗風かをる」と歌ったのである。

【私見】「闇の中なる一すぢの 光なりけり天つ日の」——「天つ日」は太陽

二「高き賤しきおしなべて

心は闇か濁江にこりえか

塵にも似たる輕薄は

我が世を遂に如何にせん

されば禍まが多くして

世の人皆は迷ふとも

我は迷はじ一すぢに

踏み行く道は四綱領

のこと。「自治の光」を「闇の中の一すぢの太陽の光」に喩える。

「操と樹てし柏木の 旗風かをる寄宿寮」——「操」は節操 心を変えないこと。「柏木の旗」とは校旗である護国旗を指す。

【解説】「高き賤しきおしなべて」——《言及なし。》

「四綱領」——明治23年2月24日の寄宿寮開設に際して木下校長が寮生活において守るべき精神として示した四項目を「四綱領」と称する。

即ち、第一 自重の念を起して廉恥の心を養成する事

第二 親愛の情を起して公共の心を養成する事

第三 辭讓の心を起して靜肅の習慣を養成する事

第四 攝生に注意して清潔の習慣を養成する事

【私見】「高き賤しきおしなべて」——「貴賤を問わず」との意を表わす。

▼「政自由なれば、國民和し、國民和すれば国治る、一人國を私して、

文を舞はし、權を弄する時んば、國立地に亂るてふ、貴き教をそのまま

に、高き賤き押なべて……」《坪内逍遙『該撒奇談 自由太刀餘波銳鋒』

「されば禍多くして」——「まがつみ」の「まが」は邪悪、災い。「つ

は連体修飾語を作る格助詞で「の」の意。「み」は神靈。「禍津日」ともい

う。

三「濁れる波を支へんに

城も櫓もなければ  
狂へる風を拒がん  
劍も櫓もあらざれど…」

五「いざや吾伴この草の

根ざしにあつく培ひて  
あだ波風を拒ぎつゝ  
かをりを廣く匂はせて  
頭にかざす柏木の  
ときはかきはに我寮の  
光を四方に傳へてむ

「踏み行く道は四綱領」——この寮歌の中心的位置を占める「四綱領」について、二番で正面から取り上げていることもあって、この寮歌はいつも二番までしか歌われない。

【解説】「濁れる波を支へんに」——《言及なし。》

【私見】「濁れる波を支へんに」——「支ふ」は「はばむ、ふせぎとめる」の意で使われており、「さまたたもつ」の意ではない。

▼「萬丈の山 千仞の谷 前に聳え後に支ふ」  
(前には萬丈の山が聳え、後には千仞の谷がはばんでいる)

《中学唱歌『箱根八里』／鳥居枕》

【解説】「ときはかきはに」——「かきは」の元は「堅磐」で固い岩の意。「常磐堅磐に」と重ねて、堅く永久に変わらない意。

【私見】「この草の根ざしにあつく培ひて」——「この草の根ざし」とは「自治の精神をさし」、「あつく培ふ」は大事に育てる意を示す。

「あだ波風」——第三節の「濁れる波」と「狂へる風」をさす。

「頭にかざす柏木のときはかきはに」——「帽章の柏が象徴するよう  
に永久に変わらぬ」の意。「の」は比喩の格助詞で「…のように」の意。

譽を世々に傳へてむ」

中国でいう「柏」はヒノキ科常緑高木のコノテガシワで、松とともに永遠性の象徴とされる。ちなみに、一高帽章の「柏」はブナ科の落葉中高木で品種が異なる。

## 2 寄宿寮歌『雪ふらばふれ』（明25／落合直文作詞、「月と花とは昔より」の譜）

一「雪ふらばふれふらばふれ……霜おかばおけ」——《言及なし。》

霜おかばおけおけおけおけ —— 次の歌を踏まえたものか。

下に春待つころろには 雨ふらばふれ風ふかばふけ」《一休》

何かいとはむ雪と霜 雨ふらば降り風ふかばふけ」《良寛》

▼「捨てし身をいかにと問はば久方の 雨ふらば降り風ふかばふけ」《良寛》

作者の落合直文はこの「雪ふらばふれ」という表現が気に入っていたらしく、この寮歌を作詞した十年後の明治35年に発表した『陸奥の吹雪』（八

甲田山死の彷徨）の悲劇の歌）の第四節でも次のように詠っている。

▼「雪ふらばふれ／われわれの／勇氣をここにためしめん

風ふかばふけ／さりとて／ゆく所までゆかではは

## 3 第五回紀念祭寮歌『たなびきわたる』（明28 東寮）

一「たなびきわたる薄霞」——【解説】「たなびきわたる薄霞」——《言及なし。》



しづけく吹けるこち風や」

【私見】「たなびきわたる薄霞」——新古今集に次の和歌がある。

▼「春霞たなびきわたるをりにこそ かかる山辺のかひもありけれ」

《新古今集・東三条入道前摂政太政大臣》

九「さはさりながら」たびも

破れし事のあらずして

【解説】「たびも破れし事のあらずして……」——《言及なし》

常にいみじき勝とるは  
如何にうれしき事ならむ」

【私見】「たびも破れし事のあらずして……」——『日清戦争を野球に譬えるなら、日本軍のパーフェクトゲームかノーヒットノーランの勝利と言うことが出来るだろう。三十近い戦闘のすべてに勝ったわけだから、それは決して大袈裟な表現ではない。』

《柘植久慶》あの頃日本は強かった」中公新書「ラクレ」

▼「千古にまれなる戦捷を／ねたみ羨む赤髻奴」

《一高寮歌4『西に富士』明28》

#### 4 第五回紀念祭寮歌『西に富士』（明28北寮／中山久四郎 作詞、「日清談判破裂して」の譜）

「自治の港を船出せし

【解説】「乗り出す長風千萬里」——《言及なし》

東西寮と南北寮

【私見】「乗り出す長風千萬里」——遠方まで吹いてゆく風に乗じて大海原の

双々並びし姉妹艦

かなたに船を走らせることで、大雄飛するたとえ。

乗り込む勇士千余人……

乗り出す長風千萬里

▼「願 乗<sup>ハクハシ</sup>ニ長風<sup>ニ</sup> 破<sup>ラント</sup>ニ萬里浪<sup>ノヨ</sup>」《南史・宋懿<sup>かく</sup>伝》

▼「扶桑の梢雄叫びて／長風萬里髪を吹く」《高寮歌 53 『紫淡き』明 38 橋大

5 第五回記念祭寮歌『富士の高峰の』（明 28 南寮）

6 第六回記念祭寮歌『身を捨てゝ』（明 29）

四「四面に起る楚歌の声

落日孤城に似たりしも

【解説】「落日孤城に似たりしも」——《言及なし。》

【私見】「落日孤城に似たりしも」——「孤城」——孤立している町。

▼「遥<sup>カニル</sup>知漢使蕭關外 愁<sup>ヘテル</sup>見孤城落日邊<sup>ハ</sup>」《王維『送韋評事』》

【第七回記念祭寮歌（英照皇太后陛下御大葬に際しこれを欠く）明 30】

7 第八回記念祭寮歌『ニコライの』（明 31 東寮）

8 第八回記念祭寮歌『忠と勇との』（明 31 西寮）

9 第八回記念祭寮歌『我寄宿舎を』（明 31 北寮）

一「我寄宿舎をたとふれば

磯邊にたてる岩根かも

【解説】「我寄宿舎をたとふれば」——《言及なし。》

【私見】「我寄宿舎をたとふれば」——土井晩翠の「詩人」に次の句がある。

浮世の浪はあらくとも

いかで動かん時じくに」

▼「詩人よ君を譬ふれば 八重の潮路の海原か

おもてにあるるあらしあり 底にひそめるまたまあり」

《土井晚翠『詩人』(『帝国文学』明30・4、「天地有情」明32・4)》

10 第八回紀念祭寮歌『我等はいかなる』(明31南寮ノ「ますらたけを」の譜)

『我等はいかなる』

明31 高南寮寮歌

「ますらたけを」の譜

一 「我等はいかなるともがらぞ

自治に浴する学生よ

いさみて守れや自治寮を

ますらたけをやよ

(以下四行再唱)

あらくく 見るもうれし

あらくく 聞くもたのし

自治寮守れるものよふの

『ますらたけを』

明25 東宮鐵眞呂 作詞

ワーク 作曲

一 「われらは如何なる國たみぞ

御國に生れし武士よ

勇みて守れや國のため

ますらたけをやよ

(以下四行再唱)

あらあら見るもうれし

あらあら聞くもたのし

御國を守るる武士の

【解説】《南寮居住者の応募作であること以外不詳。但し借用した「ますらたけを」

のメロディーはその快適なリズムが受け

て人口に膾炙していたもので、本歌の作

詞者もその快適なメロディーが有効に

發揮できるよう、作詞上の工夫を凝らし、

躍動感に満ちた表現に成功している。》

【私見】解説書では、この寮歌の曲「ますら

たけを」の譜によると述べているだけだ

が、実は上に掲げたように、この寮歌の

歌詞全体が「ますらたけを」の歌詞をな

ともないさましきよ」

二「身を切る寒さもものとせず

焼くる暑さも事とせず

いそしみ勵めや諸共に

ますらたけをやよ

(四行再唱)

三「こころの弊風一洗し

自治の効果を擧げん為め

勇みて盡せよ諸共に

ますらたけをやよ

(四行再唱)

11 第九回紀念祭寮歌『武成の昔』(明32東寮／植竹一陸 作詞、「黄海の役」の譜)

一「武成の昔ありきてふ

野邊に狂へる春駒の

春をし知せて皆人は

花の心となりにけり

尾の上の松のつれなくて

友の勇ましき」

二「寄せくる仇をば物とせず

うち出す矢玉もこととせず

勇みて進めやもろともに

ますらたけをやよ

(四行再唱)

三「あだなす物をば打ち拂ひ

刃向ふものをば切り拂ふ

勇みて進めやもろともに

ますらたけをやよ

(四行再唱)

ぞつたもので、いわば「国を守る武士」

を「自治寮を守る学生」と読み替えたただ

けだと言つても過言ではなからう。したが

つて、解説書のいう「躍動感に満ちた

表現に成功」云々は当たらない。

※『ますらたけを』の曲は、アメリカ

南北戦争のとき北軍兵士が歌った軍歌の

節で、原曲は南北戦争軍歌中の最高傑作

だとされる。

《偕行社版『軍歌「雄叫」』による》

【解説】「武成の昔ありきてふ」——「武成」は「書経」(周書)の篇名で、そ

こには周の武王が殷の紂王を伐ち、その武功が成就したことが記してある

ので、日清戦争の勝利を示しているかと思われる。

【私見】「武成の昔ありきてふ／野邊に狂へる春駒の」——「書経」武成篇に

は、武王の武功が成就した後、武器はしまつて文徳を布き、馬を華山の陽

(南)に帰し、牛を桃林の野に放つて、天下にもう用いないことを示たと記されている。「野邊に狂へる春駒の…」は、華陽に放たれた馬になぞらえて、平和に浮かれているさま(「花の心になりけり」)を示す。

【解説】「春をしよ知せて皆人は 花の心となりけり」——世人は日清戦争の戦勝に浮かれて軽佻浮薄な「花の心」になつているとし、次節以下では、一高生が孤高を守り、自治の精神を堅持し、武士の心を發揮し続けていることを寿いでいると解釈される、とする。

【私見】「春をしよ知せて皆人は 花の心となりけり」——「花の心」は「花を咲かせようとする心」のことであろうが、ここでは、平和に浮かれているさまを含蓄していると解する。

「尾の上の松のつれなくて 籬の竹の色あせぬ」——「尾の上の松のつれなくて」は松の色が変わらないことをいう。「尾の上」は単なる修飾辞。「松」は常緑なので、「いつとも分かぬ」、「散りうせず」、「久し」などにかかる枕詞、また、紅葉しないので「つれなし」にかかる枕詞とされる。「籬の竹の色あせぬ」は一見すると「竹の色があせた」といっているよう

二「人のふむべき道をとめ  
世の浪風にさからひつ  
散るを求めて古の  
武士の心を身にそへて  
太しく立てし寄宿寮

に見えるが、その意味ならば「籬の竹は色あせぬ」とするのが順当である。

「この」ぬは完了の助動詞「ぬ」の終止形ではなく、打消しの助動詞

「ず」の連体形と見て、「籬の竹の色があせないことだ」の意と解する。

あるいは倒置法と見て「色をあせない籬の竹」と読むことも可能である。

このように見てくると、松も竹も、ともに寒中でも色が変わらないこと

を強調していることになる。そしてその寒中に咲かせようとする花となれ

ば、やはり「梅」であろう。これで歳寒三友の「松竹梅」が揃う。

▼「高齋歌 51『向ヶ岡に』(明 38 朶寮)の歌詞の表現が参考になろう。

一「向ヶ岡に冬籠る 健兒一千梅なれや

雪と霜とを凌ぎつゝ 春去り來なば花咲かん」

【解説】「世の浪風にさからひつ」——《言及なし。》

【私見】「世の浪風にさからひつ」——「さからひつ」は、寮歌集初版から昭

和 42 年版まで「さかひつ」とであったものが、昭和 50 年版で「さからひ

つ」と改訂されている。しかし、「逆らう」という意味の古語は「さかひ

が本形で、「さからひ」の形を見出しに掲げる古語辞典はごく少ない。文脈

動きなきこそ嬉しけれ」

からみても、「さからひつ」と言い切るのではなく、「さかひつと」（さから  
いながら）↓「太しく立てし」と続くと見るのが順当ではないか。

12 第九回記念祭寮歌『一度搏てば』（明32 西寮／「大捷軍歌・水雷艇」の譜）

13 第九回記念祭寮歌『思へば遠し』（明32 南寮／「大捷軍歌 海城逆撃の譜」

一 「思へば遠し神の御代

たぐひなき香にさき出でて

いや年々に榮えゆく

吉野の山の山ざくら」

【解説】「思へば遠し神の御代」——《言及なし》

【私見】「思へば遠し神の御代」——次の和歌を参考にしたのであろう。

▼「世世かけて思へば遠し葦原や 中つ国よりならふことは」

《万代集・前大納言為家》

「たぐひなき香にさき出でて……吉野の山の山ざくら」——『日本書  
紀』(および『古事記』)の「神代」物語に登場する木花開耶姫(木花之佐  
くやひめ)という女性(天孫瓊杵尊の妻となった)が「サクラの精」で  
あったとする説を踏まえたものであろう。ただし吉野山が櫻の名所となっ  
た由来は、今から千三百年前、役行者(えんのをづぬ)が吉野山の金峯山寺を  
開くとき、感得した蔵王権現の尊像を桜の樹に刻んだことに始まると伝え  
られている。

二「根こじにこじて梓弓

彌生の岡に植ゑしより

あらぬ嵐をよそにして

今年第九の春の空」

【解説】「根こじにこじて梓弓 彌生の岡に植ゑしより」——「根こじにこじ

て」は木の根のついたまま掘り取る意で「梓」にかかり、語法の上では

「梓弓」は弓矢の関係で「彌生」の「や」にかかる。以下「彌生の岡に

……」と続けることよって、神聖な寄宿寮を彌生が岡の地に建てたこ

とを意味すると推測される。

▼「眞賢木を根こじにこじて」〔古事記〕「天の岩戸」の段

「あらぬ嵐をよそにして」——不明確ではあるが、「浮薄な世潮に惑

わされず」くらの意味か。

【私見】「根こじにこじて梓弓 彌生の岡に植ゑしより」——「根こじにこじ

て」について拾遺集及び万葉集の用例を引く。

▼「いにし年根こじに植ゑしわが宿の 若木の梅は花咲きにけり」

《拾遺集・安倍広庭》↓万葉集では「この春いこじて植ゑし」につくる。《

解説は「根こじにこじて」を「梓」にかかるとするが、「梓弓」は単に

「彌生」の「や」にかかる枕詞であって、「彌生の岡に植えた」のは「梓

ではなく、第一節終行の「吉野の山の山々へへ」と解するのが順当であら

う。ただし、現実に開寮時に吉野から山々へへを移植したとは限らず、寄



四「霞がくれに雲わきぬ  
今吹きくらんさよ風  
覺めよ世の人心せよ  
春時じくに春ならず」

宿寮建設の理念である「清き心」を象徴するものとして「吉野の山の山ざくら」を観念的に取り上げたものではないか。

ちなみに、一九九八年の調査によると、東大構内・農学部周辺地区のサクラの本数は、ソメイヨシノ25本、カスミザクラ8本、オオシマザクラ7本、ヤマザクラ2本、その他5本、計47本とされている(『東京大学本郷キャンパスの樹木』(東京大学大学院農学生命科学研究科森林化学専攻、二〇〇三)による)。

「あらぬ風をよそにして」——好ましくない世の風潮に関わりを持たないで。

【解説】「春時じくに春ならず」——「時じくに」はここでは「季節外れに」の意で、今は季節の上ではうららかな春であるにもかかわらず、。国家社会の状況はそれどころでなく険悪な状況を呈しているというのであろう。

【私見】「春時じくに春ならず」——「時じくに」はここでは「いつまでも」の意であり、第四節および第五節においては、「うららかな春がいつまでも続くわけではなく、嵐が吹き文明開化の夢から覚めれば、夏の野原にさまざまに露に濡れることになるのだ」と世の人々を戒めていると解する。

五 「文明の花風にちり

開化の眠夢さめば

いづち辿らん夏野原

露や千草に繁からし」

【解説】「文明の花」——《言及なし。》

【私見】「文明の花」——一高寮歌において、明治期には「文明の花」という表現が何回も登場し、文明讚美と文明批判とが交錯している。第一次大戦以後西洋文明の没落傾向が指摘され、大正10年の『あゝ紫の』で「頽れ果てたる文明の花」と表現されたのを最後に「文明の花」という表現は姿を消した。なお、「繁からし」は「繁くあるらし」の約。

▼「世は文明の花ざかり／打見めでたき色にゑひ」《13『思へば遠し』明32》

▼「榮華の夢をむさぼりて／文明の華に人酔へり」《20『春爛漫の』明34》

▼「あゝ文明の花いづこ／奮へ武陵のをのこらよ」《35『筑波根あたり』明36》

▼「空にあがれば文明の／花こそ香へ秋津州」《58『波は逆巻き』明39》

▼「頽れ果てたる文明の／花今まさに散らんとす」《193『あゝ紫の』大10》

九 「今年第九の春の空

枝もたわゝに敷島の

大和心の櫻花

咲くや彌生の岡の上」

【解説】「敷島の大和心の櫻花」——《言及なし。》

【私見】「敷島の大和心の櫻花」——第二節を受けて、彌生が岡に山ざくらが枝もたわわに咲いている（大和心を持つ寮生が大勢育っている）と歌う。

▼「敷島の大和心を人間はば 朝日に匂ふ山櫻花」《本居宣長『肖画自賛』》

二「隙ゆく駒の足はやみ…  
彌生の春もめぐり來て」

【解説】「隙ゆく駒の足はやみ」——時の流れの早いことの比喩的表現。

▼「人生天地之間、若<sup>シ</sup>白駒過<sup>ル</sup>隙<sup>ノ</sup>、忽然<sup>タル</sup>而已<sup>シ</sup>」《莊子「知北遊篇」》

【私見】「隙ゆく駒の足はやみ」——原典は『莊子』であるが、直接的には次の詩句を踏まえている。

▼「ひまゆくこまのあしはやみ……のどけき春のめぐりきぬ」

《落合直文『孝女白菊の歌』明21》

## 15 第十回紀念祭寮歌『千代よぶ聲に』(明33 東寮／武林盛一 作詞、「楠公」の譜)

一「千代よぶ聲に星はさり

見よ白梅の梢より

暗まだ西の空をこめ

二「北は夜寒と契れども

十九世紀はいつしかや

そこに我らの世を迎へ

かぐはしきかな春霞

麗はしきかな朝日影

南に風の尚黒く

軒端に獨り東の

十歳の春もいつしかや

茲に我等の春來る」

【解説】左の①、②については言及なし。

【私見】

①東西南北の旧四寮を詠み込んでいる。この年の九月には南北中の三新寮が完成し五寮となった。

②この寮歌は一節四句の十二節で作詞された(明治37年発行の初版寮歌集参照)が、「楠公」の譜(二節六句)で歌われたため、それに合わせて一節六句の八節に変えて、後の寮歌集に掲載されるに至ったものと思われる。このため、現行の節の区

16 第十回記念祭寮歌『あを大空を』(明33 西寮／植竹一陸 作詞、「大捷軍歌・澎湖島」の譜)

四 「岡邊の梅の春淺く

東風ふくのべに若草の  
燃ゆらむ望抱きつゝ  
静けき野面の夕なれや  
うちに平和のみのりあり  
はた又そとに自治の花  
うべ桃源の名にそひて  
武陵とこそは呼びつらめ

切り方では意味が通りにくくなっている。

【解説】「東風ふくのべに」——《言及なし》

【私見】「東風ふくのべに」——「のべ」は「なべ」の誤植であろう。明治37年版の寮歌集では「なべ」と表記されており、のちの版において意識的に改訂されたものと思われる。「野辺」の意味に解したもののか。

「なべ(なへ)」——「…とともに」、「…につれて」、「…と同時に」。

▼「秋風の寒く吹くなへ」 わが宿の浅茅がもとに蟋蟀鳴くも 《万葉卷10 2158》

▼「黄葉の散りゆくなへ」に 玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ 《万葉卷2 209》

【解説】「うべ桃源の名にそひて」武陵とこそは呼びつらめ

——(晋の陶潜の「桃花源記」に……)理想郷のことを「武陵桃源」と称した。他方、日本では江戸時代に「武陵」は武蔵国江戸の異称としても使われていた。そこで当時の一高寮生は寮の所在地「向ヶ岡」を中国風に「向陵」と言い表すとともに、武蔵国江戸、即ち東京を意味する「武陵」

と結びつけて『武蔵の向陵』即ち「武向陵」という呼称を案出したうえで、「向」に同音の「香」を当てることによつて……「武香陵」という美称を考案し、これを更に「桃花源記」に即して「武陵」とも称するようになったと推定される。これ以後の寮歌には「武陵」よりも「武香陵」の方が好んで使用されるようになった。

【私見】「うべ桃源の名にそひて／武陵とこそは呼びつらめ」

——「向ヶ岡(むこうががき)」に好字を当てて「武(む)香(かう)ケ陵(おか)」、これを音読して「武香陵(むかうりょう)又は(むかうりょう)」という美称が生まれ、さらには理想郷としての「武陵桃源」を意識して「武陵(むりょう)」という略称が使用されるようになったと見るのが順当ではなからうか。

17 第十回記念祭寮歌 『青くすみたる大空に』(明33 南寮／上小澤 潜作詞、久保田一藏作曲)

18 第十回記念祭寮歌 『見よ甘泉の花散りて』(明33 北寮／「大捷軍歌・「守永偵察隊」の譜」)

19 第十一回記念祭寮歌 『アムール川の』(明34 東寮／塩田 環作詞、栗林宇一作曲)

一 「アムール川の流血や

氷りて恨結びけむ

【解説】「アムール川の流血や」——前年の一九〇〇年、中国で義和団の反乱事件が勃発した。関連して七月中旬には中露国境を流れるアムール川(黒

二十世紀の東洋は  
怪雲空にはびこりつ

龍江)流域のロシア人と中国人(清国人)が混在する地域で紛争が起り、清国人三千名がアムール川の岸辺に集められ、河に突き落とされるという悲劇が発生した。この事件を指している。

【私見】「アムール川流血事件は「ブラゴヴェシチェンスク事件」とも呼ばれ、清国人の被害者は五千人ともいわれる。この事件でロシアの暴虐性は、世界中からの非難の的となった。土井晩翠は、『黒龍江上の悲劇』という長詩の中で、つぎのように歌っている。

▼「記せよ——西暦千九百年、なんじの水は墓なりき、五千の生命罪なく  
て、ここに幽冥の鬼となりぬ」《晩翠『黒龍江上の悲劇』明33・11》

【解説】「二十世紀」——《言及なし》

【私見】「二十世紀」——楽譜上に附された歌詞では「にじゅっせいき」と訓ませているが、これは誤りで、「にじっせいき」が正しい。常用漢字表の音訓欄に掲げられた「十」の読み方にも「ジッ」はあるが、「ジユツ」はない。数字譜の当時は「二十せいき」と表記されていたが、昭和10年版の寮歌集で五線譜に改めたときに「にじゅっせいき」と誤り、それが最終版まで引き継がれてしまった。

本寮歌は二十世紀の最初の年である一九〇一年(明治34年)に発表され

二「コサック兵の劍戟や

怒りて光散らしけむ

二十世紀の東洋は

荒浪海に立ちさわぐ」

た。当時、二十世紀の始まりを一九〇〇年とする俗説もあったようだが、一高寮歌においては、一九〇一年（明治34年）からが二十世紀だと正しく理解して作詞されている。

- ▼「門出を祝ふ一ふしに／＼世紀の城戸ぞ開きたる」《21「輝き渡る紅の」明34》
- ▼「世紀の流れ絶えずして／＼ふりし百年送りては」《22「世紀の流れ」明34》
- ▼「二十世紀に鞭打ちて／＼いでやためさん我腕」《23「姑蘇の台は」明34》
- ▼「二十世紀の初日出／＼祝ふや利根の波の上」《322「理端遠漕歌」明34》

【解説】「コサック兵の劍戟や 怒りて光散らしけむ」——スラブ系とトルコ系の混血から生まれた種族コサック人により結成された騎兵を主とする軍隊で、性極めて勇敢なので有名だった。

【私見】「コサック兵の劍戟や 怒りて光散らしけむ」——「劍戟」は武器又は戦のこと。「怒（いか）る」は、荒々しくふるまう、暴れる。「光散らす」は火花を散らすの意。「けむ」は過去の推量又は伝聞の助動詞。

【参考】吉田健彦氏によると、「怒りて光散らしけむ」の解釈として①アムール川対岸のロシア側都市を占拠した義和団暴徒への報復だった、②日本はじめ列強の轟轟たる非難を浴びたのだった、の二説があるとされ

三「満清既に力盡き」

末は魯縞も穿ち得で

仰ぐは獨り日東の

名も香んばしき秋津洲」

る(同氏HP)が、【私見】のようにシンプルに解釈したほうがよいと考  
える。

【解説】「満清既に力盡き 末は魯縞も穿ち得で」——「満清」は清王朝が満  
洲の女真族の出であったことから清国をさす。第2句は「史記」韓長孺  
伝に「彊弩極矢、不能穿魯縞」(強い弩も、その矢の勢いの極まるころ  
では、魯縞(魯国産のきわめて薄絹布)を射抜くこともできない)とあるのを踏ま  
えて、日清戦役の敗戦以来、清の国力が全く衰えてしまったことを意味し  
ている。

【私見】「満清既に力盡き 末は魯縞も穿ち得で」——おもての意味は解説の  
所論のとおりだが、「魯縞」の「魯」はロシア(魯西亜)を暗喩しており、  
かつて強大であった清国の国力が衰えて、今やロシアに太刀打ちできず、  
日本の力を頼るしかなくなっていることを詠っている。

当時の日本ではロシアの漢字表記は露西亜および魯西亜のどちらも使用  
されていた。当時の寮歌でロシアを「露」で暗喩した例を挙げてみよう。

▼「登る朝日に露消えて」(明37『都の空に』第10節)



(「朝日」は日本を、「露」はロシアを暗喩しているとされる。)

#### 四「櫻の匂ひ衰へて」

皮相の風の吹きすさび  
清き流れを汚しつゝ

沈滞こゝに幾春秋

【解説】「櫻の匂ひ衰へて……沈滞こゝに幾春秋」——日本国内の状況を踏まえた表現と思われるが、具体的には不詳。あるいは櫻に象徴される日本精神を忘れ去り、外面的にヨーロッパ風を模倣した皮相な風潮をさすか。

【私見】「櫻の匂ひ衰へて……沈滞こゝに幾春秋」——「櫻の匂ひ衰へて」とは、明治になって武士道精神が衰え風俗がみだれたことをさす (cf. 『花は桜木人は武士』)。同じ作者による明治36年の中寮寮歌32『かつら花咲く』の第四節に「十二年の其の昔……皮相の風に逆ひつ」とあることからわかるように、「皮相の風」云々は自治寮発足以前における下宿学生たちの悪風汚俗の状況をさすと見るのが順当であろう。したがって「沈滞こゝに幾春秋」は一高の自治寮が発足するまでの時期をさすと解する。これを受けて次の第五節では、「自治寮たてこゝ十一年」と歌っている。

【参考】吉田健彦氏によると、「沈滞こゝに幾春秋」については①臥薪嘗胆説 (三國干渉以後、対露戦に備える時期) ②全寮制実施説 (自治寮発足後、明治34年に全寮制が実施されるまでの時期) の二説があるといふ。

五「向が岡の健男兒

虚聲偽涙を外にして  
照る日の影を仰ぎつゝ  
自治寮たてゝ十一年

六「世紀新たに來れども

北京の空は山嵐  
さらば兜の緒をしめて  
自治の本領あらはさむ

れる(同氏HP)が、いずれも無理があり賛同しがたい。

【解説】「虚聲偽涙」——「虚聲」は根もないうわさ。「偽涙」はうそいつわり

涙。要するに、虚偽に満ち満ちた世俗の風潮を言ったもの。

【私見】「虚聲偽涙」——「虚聲」はこげおどしの声。実質の伴わない名声。「偽

涙」は同じ作詞者による明治36年の寮歌の第一節にも登場する。

▼「晚鐘風に傳はりて ゆふべ偽涙の聲高し」《32》かつら花咲く『明36』

【解説】「來れども」——《言及なし》。

【私見】「來れども」——初版の寮歌集(明37)では「來つれども」となって

いたのが、いつからか「つ」が脱落して「來れども」となったらしい。

現在では「キツレドモ」と歌われるのが通例だが、意味上からも文法上

からも、「キツレドモ」が正しいと考える。

【補説】寮歌「アムール川の流血や」(以下「アムール川」という。)の曲調は軽快で歌いやすいことから、広く

世間に受け入れられ、軍歌「歩兵の本領」や「メーデー歌」(聞け万国の労働者)などもこの旋律で歌われた。旧制中学の校歌や応援歌などに使われた例も多い。また一高内では『征露歌』(ウラルの彼方風荒れて)《青木得三作詞、明治37年》に採用され、『アムール川』の譜』と記載されている。

作曲者が栗林宇一か永井建子であるかについては、長い論争の経緯があるが、平成21年10月2日の日

本経済新聞朝刊の『文化往来』というコラムで、声楽家藍川由美氏の見解が紹介されたことから事態は新たな展開を見せた。藍川氏は、明治32年刊行の永井建子著『鼓笛喇叭軍歌実用新譜』（共益商社）に載っている「小楠公」が「アムール川」、「歩兵の本領」、「メーデー歌」のすべての原曲であると指摘する。もしそうであれば、それより後の明治34年に発表された「アムール川」の作曲者を栗林宇一とする説には無理がある。またこの「小楠公」の楽譜を見ると、たしかに「アムール川」の譜によく似ており、藍川氏の説の信憑性が高いことをうかがわせる。

ただし、藍川氏の説がすべて正しいと断定するには、次のようにまだいくつかの疑問点が残されており、その説明が望まれる。

①作詞者塩田環の文『寮歌アムール川』の思ひ出』（高同窓会『会報』第23号、昭8・10）によると、曲の前半部分は栗林が軍歌「福島中佐遠征の歌」から採ったものだという。しかし、この軍歌の歌詞は現存するものの、楽譜はまだ確認できていない。また、曲の後半部分は栗林が別の曲から採ったものとされるが、これもどの曲のことかはわかっていない。

②明治32年の「鼓笛喇叭軍歌実用新譜」は永井建子著となっているが、この本に掲載された曲には作詞者、作曲者のいずれも記載がなく、「小楠公」が永井建子の作曲だという確証はない。同書には、永井建子以外の人の作詞または作曲とわかっている曲もいくつか含まれている。また、永井自身が別人の曲を組合せて作った可能性も否定できない。

③「鼓笛喇叭軍歌実用新譜」に掲載された「小楠公」の詩には全く別の曲が存在する。

④永井建子は、同じ「小楠公」という名の別の詩の作曲をしている(曲も別の曲)。

⑤明治32年の「鼓笛喇叭軍歌実用新譜」の著者は陸軍軍楽長永井建子とあるが、堀内敬三氏によれば、その2年後の明治34年に永井建子は楽長補だったとあり、事実の確認が必要である。

⑥仮に「アムール川」の原型が「小楠公」だったとしても、軍歌「歩兵の本領」と「メーデー歌」(聞け万国の労働者)とは、直接的には「アムール川」の曲を使用した可能性も高いことから、その経緯のさらなる解明が必要である。

## 20 第十一回記念祭寮歌『春爛漫の』(明34 西寮／矢野勘治 作詞、豊原雄太郎 作曲)

【概説】作詞者の矢野勘治は、西寮八番同室の寮委員黒澤久次から寮歌作詞を委嘱され、二重橋から三菱が原あたりを逍遥しながら苦吟して作詞したという。黒澤は作曲を西寮二番室の豊原雄太郎に依頼し、できあがったのが『春爛漫』である。作詞作曲ともに寮生の手になったこの名寮歌は、同年の『アムール川』とともに寮歌隆盛期の始まりを告げるもので、一高寄宿寮の終焉時に至るまで愛唱され続けた。翌年、同じく矢野勘治の作詞した『嗚呼玉杯』が登場したが、大正初期にかけてはむしろ『春爛漫』の方が人気が高かったとされる。矢野氏自身の回顧文によると、「この西寮寮歌『春爛漫』はことに大いに愛唱され、寮内各所にその歌声を絶たず、ついに校外に出て都鄙青年男女の間に伝播し、燎原の火の如く全国を風靡し大流行を来たせり。」(朝日新聞昭和35年11月3日朝刊、矢野勘治『嗚呼玉杯』の思い出六十年・夢心地の感懐Ⅱ)とある。

一 「春爛漫の花の色

る紫匂ふ雲間より

紅淡き朝日影

長閑けき光さし添へば

鳥は囀り蝶は舞ひ

散り來る花も光あり」

(一 高大 8 独法卒) 『なつかしい歌の物語』(昭和 42 年、音楽の友社)

【解説】「紅深き」——(「解説」が底本とした『昭和 50 年版寮歌集』では「紅深き」とあ

らざる踏まへ) この部分は後年「紅淡き」と歌われていた、とする。

【私見】個々の詩句については、これまでもいろいろの典拠が挙げられている

が、第一節全体とイメージが重なるのは次の漢詩ではなからうか。

▼『暮春有感』(北宋・歐陽脩)

「春事已爛漫、落英漸飄揚、峽蝶無所<sub>レ</sub>為、飛飛助其忙」

啼鳥亦屢變、新音巧調<sub>レ</sub>篁、天工施造化、万物感春陽」

「紅淡き」——初版の寮歌集では「紅深き」であったが、「紅淡き」と

歌われることが多くなったため、寮歌集の表記も幾度か変更があり、最終版では、実際の歌われ方を重視して「紅淡き」と表記された。

「紅淡き」を主張する人は、①朝の太陽の色は「濃い」より「淡い」の方が近い、②『56 『太平洋の』(明 39)』では、あけゆく空の描写として

「くれなる薄き」と表現している、などを論拠とする。

【解説】「鳥は囀り蝶は舞ひ」——晚翠に次の詩がある。(「私見」も賛同)。

▼「春の呼吸のわくところ、空に蝶舞ひ鳥歌ふ」《晚翠『造化妙工』》

二「秋玲瓏の夕紅葉」

山の端近くかぎろへる  
血汐の色の夕日影

岡の紅葉にうつろへば  
錦榮えある心地して  
入相の鐘暮れて行く

三「それ濁流に魚住まず」

秀麗の地に健兒あり

【解説】「秋玲瓏の夕紅葉……岡の紅葉にうつろへば」——晚翠の「入日の名

残しばとめて にほふをのへの夕紅葉」《晚翠・「天地有情」『紅葉青山水急流』にヒントを得ている。

【私見】「秋玲瓏の夕紅葉……岡の紅葉にうつろへば」——第二節では、「秋

玲瓏の夕紅葉」をまず主題として提示したあと、夕日影（影）は光のこと  
が岡の紅葉にうつろう（映らぶ）＝「映る」の未然形に反復・継続の助動詞「ぶ」の  
付いた「映らぶ」の變化した形。反映する、照り映えている、の意。）さまを描写する。

ここで「かぎろへる」の主語は「夕紅葉」ではなく、被修飾語の「夕日影」  
が意味上の主語であると解した方が理解しやすい。

【解説】「濁流に魚住まず」——《言及なし》

【私見】「濁流に魚住まず」——すでに明治の頃から、「水清ければ魚住まず」  
というのが正しく「濁流に魚住まず」はおかしい、との批判がなされてい  
た（矢野勘治『春爛漫と嗚呼玉杯』—高同窓会報第37号、昭13・6）が、  
ここでは、「水濁れば則ち尾を掉ぶの魚無し」（『鄧析子』無厚）を典拠と  
したのであろう。「水の濁っている所には尾を掉って樂しみ泳ぐ魚がない」  
という意味で、苛政の下では逸民のない喩えである。

四 「銀鞍白馬華を銜ひ」

翠袖玉簪美をつくし

榮華の夢をむさぼりて

文明の華に人酔へり」

【解説】「銀鞍白馬華を銜ひ」——次句の「翠袖玉釵」と合わせて、世俗

の軽薄兒らが贅沢に飲樂の夢を貪るさまを表そうとしている。

▼「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風」《李白『少年行』》

「翠袖玉釵美をつくし」——「翠袖玉釵」という四字熟語はないが、「翠袖」「玉釵」の両語とも中国の古典詩文によく見られ、美人の装いを象徴するが、作者の真意は華美に流れる当時の世相を批判することにある。いつからか「玉釵」が「玉簪」と歌われるようになったが、「玉釵」の方を原形と認めるべきであろう。

【森下注】釵（サ又はサイ）も「簪（サン又はシン）も「かんざし」のこと。「解説」は昭和50年版寮歌集を底本としているため、「玉釵」という表記に基いて説明がなされている。

▼「天寒翠袖薄、日暮倚脩竹」《杜甫『佳人詩』》

▼「玉釵掛臣頭、羅袖拂臣衣」《司馬相如『美人賦』》

「文明の化」——「化」は変遷、進展の意。明治27年の『清国ニ対スル宣戦ノ詔勅』に「文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ……」とあって、本寮歌発表時には人口に膾炙していたと考えられるが、すでに大正初年発行の寮歌集では「文明の華」が用いられ、昭和42年版の寮歌集まで続いた。

【森下注】「解説」が底本とした昭和50年版の寮歌集では「文明の化」が採用されている。

【私見】「銀鞍白馬華を銜ひ 翠袖玉簪美をつくし」——明治37年発行の初版寮歌集では「翠袖玉劍」となっており、後に矢野勘治自身が誤植を指摘した際に、正しいのは「玉のカンザシだよ」と言ったために「玉劍」であるべきものが「玉簪」と直されてしまったという《猪間驥一・前掲書》。

その後、昭和50年版の寮歌集に至って、一旦「玉劍」と改訂されたものの、最終の平成16年版の寮歌集では、実際の歌われ方を重視して、また「玉簪」に戻された。「玉簪」の用例としては、白居易の詩がある。

▼「石上磨玉簪」《白居易「井底引銀瓶」》

「文明の華」——猪間驥一（前掲書）によると、矢野勘治自身は後日になって、①「文明開化」からとったものである、②すぐ前に「銀鞍白馬華を銜ひ」とあるので、「華」の字が重なるのを避けて「ここは「文明の化」でなければならぬ」と語ったとされる。前述のように、「解説」もこれを受けて、当初「文明の化」であったものが、後に「文明の華」に変更されたかのように説明している。しかしこれは誤りで、明治37年発行の初版寮歌集から昭和42年版の寮歌集に至るまで、「文明の華」と表記されていた。昭和50年版の寮歌集で、一旦「文明の化」と改訂されたものの、最終の平成16年版の寮歌集では、また「文明の華」に戻された。



六「自治の光は常暗とこしやみの

國をも照す北斗星」

【解説】「國を照らせる」——大正期以降、「國をも照らす」と歌われ、寮歌集にもこのように記載されるようになった。猪間驥一（前掲書）によれば矢野勘治自身は「國を照らせる」と作ったと語ったとされる。

【筆者注】「解説」が底本とした昭和50年版の寮歌集では「國を照らせる」を採る。

【私見】「國をも照す」——明治37年発行の初版寮歌集では「國を照する」となっていたが、その後「國をも照す」と「國を照せる」との間を幾度か行き来した末に、最終版の寮歌集では、「國をも照す」に落ち着いた。

## 21 第十一回記念祭寮歌『輝き渡る』(明34 中寮)

三「花ふりかゝる岡の上

五つの城ぞ聳えたる

四色に染めし大旗の

靡くや自治の二字薫る」

【解説】「四色に染めし大旗の／靡くや自治の二字薫る」——校旗として「護国旗」があつたが、「自治の二字」を染め出した四色の大旗が実在したという確証はない。したがってこの二句は、「自治の精神」を誇示するための象徴的表現かもしれない。

【私見】「四色に染めし大旗の／靡くや自治の二字薫る」——「四色に染めし

とは、「四綱領」を指したもので、「自治の二字」とあわせて、「自治寮の精神」を象徴しているものと考ええる。

## 22 第十一回記念祭寮歌『世紀の流れ』(明34 南寮)

三 「正義むなしき名のみにて

人てふ道も仇なれや

まがつみの手にくづされて

平和の光消えんとす」

【解説】「正義むなしき名のみにて…平和の光消えんとす」——《言及なし。》

【私見】「正義むなしき名のみにて…平和の光消えんとす」——「義」と「和」の語を詠みこむことよって、前年の明治33年（一九〇〇年）の「義和団の乱」が鎮圧されたことをさしていると解する。義和団の思想では、自らを神々の正義の代理人と位置づけ、義和拳による悪の絶滅よって平和への回帰をめざすとしていたが、現実には、キリスト教信者を含む「敵」に対しては容赦ない制裁を加え、背教の指令に従わない者は子供であろうと殺した（「正義むなしき名のみにて／人てふ道も仇なれや」）。そして、八カ国（英、米、仏、独、露、奥、伊、日）の連合軍二万人よって鎮圧された（「まがつみの手にくづされて／平和の光消えんとす」）。

※「義和」とは、本来、「義氣の和合」を意味する。

【参考】『中国の歴史10 「ラストエンペラー」と近代中国』菊池秀明／講談社

【解説】「まがつみ」——「まがつび」の誤りか。『古事記』(上)に「八十禍津日神」「大禍津日神」などとあり、災害や凶事をもたらす神の意。「まがつみ」は単に「禍い」の意となり、文脈上不都合が生じる。

【私見】「まがつみ」——一高寮歌中の「まがつみ」の使用例を見てみよう。

▼「されば禍多くして世の人皆は迷ふとも」《1 『全寮寮歌』明34》

23 第十一回紀念祭歌 『姑蘇の臺は』(明34北寮／村上春一 作詞)

二 「岡の岩根は低くとも

高き理想の夢に酔ふ

一千餘人の丈夫が

腰にはきたる斬馬劍

君の御爲め國の爲め

- ▼ 「あゝ蕭條か凄愴か 禍神何の嫉妬ぞや」 《93 『青鸞精を』明43》  
▼ 「禍神の赤き呪詛は 數知れぬ犠牲を貪り」 《273 『蒼溟の深き静謐に』昭13》  
▼ 「禍神の影消え行きて 建設の鐘は鳴り初めぬ」 《287 『瑞雲草むる』昭15》  
▼ 「海渡り醜の魔神 取鎮む喊声とも聞け」 《288 『不知火の』昭15 九大》  
▼ 「凶靈呪詛汝れ知らば 此の太刀尖を受けて見よ」 《324 『野球部新部歌』  
このうち最初の句以外は何れも「まがつび」と同じく「凶事をもたらす  
神」の意に使われている。この意味の「まがつみ」は辞書には見えないが、  
「まが(禍) 十つ(格助詞) 十み(靈・神)」からの造語であろう。あるいは  
は類似の意味の「まがつび」と「魔神」とが結びついて「まがつみ」とな  
ったとも考えられる。

【解説】「岡の岩根は低くとも……」——《言及なし。》

【私見】「岡の岩根は低くとも……」——この節全体が明治23年5月17日に  
起った「インブリー事件」を含蓄していると考えられる。この日、一高の校庭  
で二高と明治学院との野球戦が行われ、試合は六回、〇―六で一高が不利  
であった。この時、一人の外人(明治学院教授のインブリー氏)が垣根を

仇なすものは打拂ひ  
たゞ一筋にすゝむなる  
矢竹心の雄々しさよ」

24 第十二回記念祭寮歌『嗚呼玉杯に』（明35 東寮／矢野勘治 作詞、楠 正一 作曲）

【概説】作詞者矢野勘治は、明治三十五年の記念祭に当たり、松野松太郎寮委員から寮歌の作詞を依頼され、前年の『春爛漫』に引き続き作詞した寮歌が『嗚呼玉杯』であり、一高の代表寮歌として知られる。

『嗚呼玉杯』は、矢野勘治による高邁雄渾な歌詞と楠正一による流麗な曲調と両々相俟つて、名寮歌として一高内のみならず世間一般に時代を越えて広く愛唱され、北大予科の『都ぞ彌生』、三高の『紅萌ゆ

越えて校内に入ってきた（岡の岩根は低くとも）。これを見つけた一高生が難詰し、さらには投石して外人の顔を傷つけるに至った（仇なすものは打払ひ）ため、国際問題にもなりかねないと懸念されたが、関係者の奔走によりようやく解決した。一高生の一部には、この事件を正門主義の発露ととらえ、英雄的エピソード（矢竹心の雄々しさよ）として語りつづ者もあった。（『自治寮六十年史』参照）

なお、次の寮歌も同様に「インブリー事件」を留意したものであろうか。

▼148 『二十五年祭の歌』（あゝ新緑のこ）（大4）

★四 「浮世をへだつひと筋の 枳殼の垣はうすけれど」

道義の盟ちかひかたければ 俗塵せうじん遠き六寮に

汚れを知らず生ひ立ちし 一千の子が意氣を見よ」

る』とともに日本三大寮歌と称されている。ただし当初は、校内・世上ともに『春爛漫』ほどの好評を博するに至らなかったが、明治四十四年頃から、寮生の間では、一高精神の神髄を見事に表現した寮歌としての評価が次第に高まってゆき、大正十年頃から、全寮茶話会や全寮晚餐会等の最後に歌われる締めくくりの歌としてその地位が定着したとされる。〔奥田教久（昭13理甲）『「嗚呼玉杯」考』《向陵》36巻2号（1994・10）《》などによる。〕

曲調は発表当初は二長調であった（ハ長調説も有力である）が、寮生の間では次第に短音階で歌われるようになったことから、昭和十年発行の寮歌集において、従来の数字譜を、いわゆる本譜（五線譜）に改めたのを機に、『嗚呼玉杯』の譜をハ短調に変更した結果、原曲の明るく軽快・勇壮な調べが、より荘重味を帯びた調べとなつて現在に至る。

東京六大学野球（神宮球場）の東大チームへの応援では、三回の攻撃時に『嗚呼玉杯』の一、二、五節が歌われるが、寮歌として歌う場合に比べると、かなりアップテンポで歌われているようだ。

『嗚呼玉杯』の曲で歌われる替え歌は数多いが、南部直樹氏の資料からいくつか例を挙げると、軍歌『仰げば巍々たる』、革命歌『嗚呼革命は近づけり』、冗談音楽『ああ米ビツに穴あけて』、鳥取一中応援歌『松の翠と』など、これまでに約三十五曲（うち二十五曲が労働歌）が知られている。

佐藤紅緑の『ああ玉杯に花うけて』という少年小説が昭和二年から三年にかけて雑誌『少年倶楽部』に連載されて人気を呼んだことも本寮歌を有名にした要因のひとつとされる。

『嗚呼玉杯』の歌詞の解釈上の最大の論点は、第一節冒頭の「嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影宿し」

において、玉杯で緑酒を飲んでいるのは「榮華の」巷の人か、それとも「一高生」かということである。このうち、「巷の人」説を採る論者は、手元にあるものだけでも、次に掲げるようになら多い。

- ▼黄田多喜夫(昭2文甲)『ああ玉杯について』《向陵駒場》12巻2号(1970・4)《》
  - ▼井上司朗(大13文乙)『一高寮歌私観「拾遺」』《向陵》18巻2号(1976・10)《》
  - ▼石川郁郎(昭17・3文甲)『「玉杯」管見』《向陵》23巻2号(1981・10)《》、『玉杯』管見・追記』《同誌次号》
  - ▼金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌「下」学生歌・軍歌・宗教歌篇』《1982年、講談社文庫》
  - ▼長谷川泉(昭15文甲)『嗚呼玉杯―わが一高の青春』(1989年至文堂刊)
  - ▼馬場宏明(昭19理甲)『大志の系譜』(1998年北京社刊)
  - ▼安川定男(昭15文甲)『「嗚呼玉杯に花うけて」考』《向陵》44巻2号(2002・10)《》
  - ▼永井清彦(会友、昭33東大文)『玉杯と榮華の巷―「矢野勘治先生」断想』《向陵》46巻1・2号(2004・10)《》
  - ▼高島俊男(昭34東大、中国文学者)『嗚呼玉杯に花うけて』《週刊文春「お言葉ですが」》2002・11・28《》
- これに対し、「一高生」説を採る論者は意外に少なく、手元にあるのは次の三篇である。
- ▼荒木進(昭10文乙)『寮歌「嗚呼玉杯」の詩意冗説』《1994・11、クラス会用の資料》
  - ▼直木孝次郎(昭16文乙)『寮歌と時代』《向陵》41巻2号(1999・10)《》
  - ▼辻幸一(昭24文甲)『寮歌「玉杯」歌詞雑考』《向陵》45巻1号(2003・4)《》
- このほか、「玉杯」・「緑酒」を「自治」・「四綱領」・「文武」等の比喩的表現と解してはじめて第一節が、第二節以下の高邁な理想の序曲たりうるとする見解もある《井下登喜男(昭26文丙)『一高寮歌メモ』。

一 「嗚呼玉杯に花うけて

綠酒に月の影宿し

治安の夢に耽りたる

榮華の巷低く見て

向ヶ岡にそゝりたつ

五寮の健兒意氣高し」

【解説】「嗚呼玉杯に花うけて 綠酒に月の影宿し」——「うけて」は「浮か

べて」の意で「受けて」ではない。「玉杯」「綠酒」は「立派な杯」「うまい酒」の意で中国古典にかなり頻繁に見える語である。(前記の石川郁郎氏の指摘を踏まえて、「玉杯」が立派な杯を意味したことについては「韓非子」および「十八史略」の記述を引き、「綠酒」が高価な美酒を意味したことについては「碧玉奉金杯」、「綠酒助花色」(梁武帝「碧玉歌」)及び「金樽綠酒生微波」(李白)という使用例を引く。)

「以下は引用者による要約」冒頭の二句の解釈については、明治35年当時「玉杯」で「綠酒」を酌むのは一般人にとつても贅沢であつたらうし、まして一高生は「勤儉尚武」をモットーとし、寮内規約で寮内での禁酒を課されていたという観点からすれば、この二句は「治安の夢に耽りたる」とつなげて、「榮華を誇る俗世間の形容」と解するのが妥当であろう。また「五寮の健兒意氣高し」という強いモチーフが最終節まで続くことをみても、この二句のような優雅な語句を「意氣高い健兒」の氣風の形容に当てるのは外的外れと判断する。

ただし、「一高生」説の立場から「玉杯」や「綠酒」を詠った寮歌が十例近くもあり、現にこの二句を「五寮の健兒」の形容と受けとつて唱う同窓

生が多数存在することを考えれば、誤読として切り捨ててしまふわけには  
いかない。詩の解釈は享受者の感性に左右される面が多分にあることを認  
めるべきだと思ふからである。

【私見】「嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影宿し」——「嗚呼」は感動、慨  
嘆の両義に用いられるが、ここでは前年の『春爛漫』第四節の「嗚呼衰え  
ぬ……榮華の夢をむさぼりて」と同様に、「慨嘆」ととるべきであろう（前  
記石川郁郎氏も同意見）。この「嗚呼」を感動の意に解する人が多かった  
ことが、「一高生」説のような解釈を生む一因となったと考えられる。ま  
た「玉杯・緑酒」については、王翰と李白の次の漢詩との関連が指摘さ  
れることが多い。「夜光杯」及び「玉碗」が「玉杯」のイメージと重なる  
点については異論はあまり聞かないが、「葡萄の美酒」や「蘭陵の美酒」  
を「緑酒」に擬することについては意見が分かれるようである。

▼「葡萄美酒夜光杯 欲<sup>スレ</sup>飲<sup>マント</sup> 琵琶馬上<sup>ニ</sup>催<sup>ス</sup>」《王翰『涼州詞』》

《葡萄酒は西域渡来のもので、緑色芳醇であったという。夜光の杯  
は、夜に光る白玉で作った杯。ガラス器との説もある。》

▼「蘭陵美酒鬱金香 玉碗盛<sup>リきたル</sup>来 琥珀光<sup>ノ</sup>」《李白『客中行』》

《蘭陵は、山東省の酒の産地。鬱金香は、鬱金草からとった香で、酒の



香りづけに用いる。琥珀は、化石樹脂で黄色い美しい光沢がある。《

以上、『漢詩名句辞典』大修館》

「花うけて」について「解説」は、「うけて」は「浮かべて」の意で「受けて」ではない、とする。森下も同意見だが、作詞者の矢野勘治氏自身は、一方で「原案は〈玉の杯花浮べ〉であった」（楠未亡人宛の書簡）としながら、他方では矢野氏自身が「玉杯受花」と揮毫した書も存在するため、真の作意がどちらかは不明である。

「概説」の項で挙げた先学の論考では触れられていないが、私見では、日本人である荻生徂徠の次の漢詩が本寮歌に影響を与えた可能性を指摘しておきたい。

▼**甲陽美酒** リョウゴウビウ **緑葡萄** キナウ **霜露三更** シヨウロ **湿二客袍** ウツハスニカクホウ

すべからクシルベシ 須 識 ニまれナルヲ 良宵天下少 芙蓉峯上一輪高 シ 《荻生徂徠『甲斐道中』》

《柳沢吉保に仕え、吉保の封地の甲斐に出張した折の道中の作。》

第一句は、李白の『蘭陵の美酒』の詩を模している。「緑葡萄」には

「緑色の葡萄酒」説と「緑色の葡萄から作った葡萄酒」説がある。

《「芙蓉峰」は富士山。「一輪高し」は月。》

「玉杯」「緑酒」を詠みこんだ寮歌の多くは、「一高生」説の立場をとっ

ていると解されるが、一高寮歌及び他校寮歌の中から、いくつかの例を挙げてみよう。

- ▼「玉杯花を泛べては 緑酒に燃ゆる春の色」《150『靡に震む月の裏』大5》
  - ▼「玉杯花を浮かべては 美酒を互に汲み交し」《213『烟り争ふ』大15》
  - ▼「なみなみと玉杯あふるれど 今宵こそ別れのうたげ」《291『時計臺に』昭16》
  - ▼「緑酒を盛れる 杯を君と捧げて祝はんに」《山形高『虚空にそゝる』(大13)》
  - ▼「うら若き日の玉杯に 祝ふやうれし記念祭」《松本高『筑摩の野邊に』(昭8)》
  - ▼「玉杯とりていざや友 榮光を祝ひて舞はんかな」《城大予『北嶽雪の』(昭12)》
- これに対し、「巷の人」説によるとみられる寮歌は少ないが、以下に例示する。

- ▼「玉杯の悪しき濁り世 哀れはた何に恨みむ」《312『青旗の』昭22》
  - ▼「快樂の毒酒玉杯に うけてはふける……若人よ」(三高『水上部歌』)
- 「巷の人」説の主たる論拠としては、①文法・文脈からみて「嗚呼玉杯に」から「耽りたる」までが「榮華の巷」にかかる修飾表現である、②また、この部分は、同じ作詩者の前年の作『春爛漫』第四節の「銀鞍白華を銜ひ……榮華の夢をむさぼりて」と同工異曲の表現である、③自治寮に籠城して勤儉尚武をモットーとし、かつ寮内での禁酒が課されていた一高生

には、「玉杯」や「緑酒」のような贅沢品はふさわしくない、の諸点が挙げられる。

これに対し、「一高生」説の主たる論拠は、①文法的には「巷の人」説が成り立つとしても、修飾語句が長すぎて不自然だし、「一高生」説による解釈も十分可能である、②寮生の心情からは「一高生」説の解釈の方が素直であり、「玉杯」「緑酒」を詠んだ寮歌の大半がその解釈によっていることもその証左である、③一高では「寮外」の飲酒は自由であったし、「玉杯」「緑酒」を単なる修飾表現と解すれば、一高生が普通の杯で普通の酒を飲んでゐるに過ぎない、等の諸点にある。

本件については、「概説」に掲げたように先学の多彩な論考が発表されているが、紙幅の制約もあり、逐一のご紹介ができないことをお赦しいただきたい。

森下は「巷の人」説を妥当とする立場をとるが、本寮歌が「嗚呼」からはじまり「玉杯」や「緑酒」のような雅語が続くなど、原詩の表現がややまぎらわしいことを勘案すると、一高生が誇らしげに「玉杯」で「緑酒」を酌み交わしている場面であると錯覚した人が多いことも、情情的にはいちおう理解できる。詩の解釈に「絶対」はないわけだから、「一高生」説

二 「芙蓉の雪の精をとり

芳野の花の華を奪ひ

清き心の益良雄が

劍と筆とをとり持ちて

一たび起たば何事か

人生の偉業成らざらん」

を一概に俗説ときめつけてしまうことは難しく、このテーマの決着は簡単につきそうもない。

【解説】「芙蓉の雪」——「芙蓉」はここでは富士山をいう。

【私見】「芙蓉の雪の精をとり 芳野の花の華を奪ひ」——「芙蓉の雪の精をとり」と「芳野の花の華を奪ひ」は対句で、「芙蓉の雪」と「芳野の花」、「精をとり」と「華を奪ひ」という、それぞれ対照的な語を配して対比を際立一高生の清き心を「富士の雪」と「吉野の花」とに喩える手法は、第八回記念祭歌『忠と勇とのふたすぢに』（明31）に次のように先行して登場する。

▼「やまと男の子の真心は み空に高きふじの根の 清きみ雪に似たるかな」

「誠つくしくますらをの あかき心はみよしのの 吉野の花に似たるかな」

「芙蓉の雪」——「芙蓉峰」は富士山の雅称。単に「芙蓉」ともいう。

「芙蓉」は蓮の花の異称で、美しいものをさす。富士山頂部は御鉢と呼ばれ、最高峰の剣ヶ峰のほか白山岳、久須志岳、大日岳、伊豆岳、成就岳、駒ヶ岳、三島岳の富士八峰が火口のまわりを取り囲んでいることから仏教の八葉蓮華（八弁の蓮の花）に見立てて「芙蓉峰」と称するようになったとの説が有力である（国土交通省富士砂防事務所HPなどによる）。旧安

田財閥の解体後、旧富士銀行との「つながり」がベースとなって形成された企業グループを「芙蓉グループ」と呼んだのも「芙蓉＝富士」を含意したものである。

日本人の漢詩で富士山を「芙蓉」と詠んだものの例をあげて見よう。

▼「誰將東海水 誰か東海の水を將つて

濯出玉芙蓉」 濯あらひ出す玉芙蓉いた

《柴野栗山「富士山」》

▼「突兀五千仞 突兀として五千仞

芙蓉挿碧空」 芙蓉じん挿じん碧空じんに挿む

《秋山玉山「望芙蓉峰」》

▼「凌霄一万三千尺 凌霄一万三千尺

八朶芙蓉当面開」 八朶だ芙蓉だ面に當つて開く」《伊藤春畝「日出」》

「芳野の花」——「芳野」は奈良県の櫻の名所「吉野」の雅称。日本人

の漢詩で吉野の櫻を詠んだものは「芳野」を用いる。これも例を挙げる。

▼「一目千本花盡開 一目千本花 盡く開く

満前唯見白皚皚」 満前た唯た見る白皚皚はくがいがい 《菅 茶山「遊芳野」》

▼「春入櫻花満山白 春は櫻花に入つて満山白し

南朝天子御魂香」 南朝の天子御魂香かんばし 《梁川星巖「芳野懷古」》

《以上に引用した日本人の漢詩については、石川忠久『日本人の漢

詩——風雅の過去へ——』大修館書店』を参照した。》

「精をとり」「華を奪ひ」——「精」(まじりけのないよいもの)と「華」(すぐれたよいもの)は類義で、合わせて「精華」(そのものの本質をなす、最もすぐれているもの、真髓)となり、これが「清き心」へとつながる。

「人生の偉業」——初版の寮歌集(明37)で「人生の偉業」と表記されて以来、最終版の寮歌集(平16)までこれに従っている。しかし、作詞者の矢野勘治氏が「一高同窓会『会報』第37号(昭13・6)に寄稿した『春爛漫と嗚呼玉杯』と題する一文によれば、作曲家楠正一氏から指摘されるままに、原歌詞中の「玉の杯」、「みどりの酒」、「人の世の事」などの箇所を、「嗚呼玉杯」、「綠酒」、「人世の偉業」などに改めたとあり、同時に掲載された矢野氏筆の玉杯歌詞(『一高ホール』の写真でも「人世の偉業」と書かれていることを勘案すれば、原詞は「人世の偉業」であったと推定される。どちらでも意味は通ずるものの、「国民を救う」という使命感に燃える「高生」という観点からするならば、「人生」(個人)よりも「人世」(世の中)の「偉業」とした方が歌意に沿っていると考えられる。なお、一高同窓会発行の小寮歌集(昭49)及び『嗚呼玉杯百年記念大会の記念品として一高同窓会から配布された岩波文庫の『日本唱歌

三「濁れる海に漂へる

我國民を救はんと

逆巻く波をかきわけて

自治の大船勇ましく

尚武の風を帆にはらみ

船出せしより十二年」

集』（堀内敬三・井上武士編）のように、「人世の偉業」としてあるテキストも存在する。

【私見】「濁れる海」——ふつうは「濁世」（政治や道徳などの乱れた世）というが、ここでは自治寮を大船に譬えたのに合わせて、世の中を海に譬えて「濁れる海」としている。この節では、海、波、大船、帆、船出と縁語を連ねており、第四節の「楫とる舟師、我のる船」、第五節の「舳、金波銀波の海」も同じく縁語である。

「船出せしより十二年」——高自治寮がスタートしたのは明治二十三年であり、それから、はや十二年を経過した。この「十二年」をいつころからか「十餘年」と歌うようになり、今日でも一高OBの多くは「十餘年」と歌う。第11回から第19回の記念祭歌において、記念祭の回数表現するのにその数をそのまま使ったものが大半だが、次の各祭歌においては「十餘年」とする。

- ▼ 「白雲なびく向陵に 籠るも久し十餘年」《20 『春爛漫』明 34》
- ▼ 「操を立てて十餘年 自治の礎今堅し」《25 『混濁の波』明 35》
- ▼ 「樂しからずや十餘年 めぐりて同じ日の数を」《37 『春の日背を』明 36》
- ▼ 「歴史の光榮の十餘年 健兒榮華に誇る時」《46 『王師の金鼓』明 38》

四「花咲き花はうつろひて

露おき露のひるがごと

星霜移り人は去り

梶とる舟師は變るとも

我のる船は常へに

理想の自治に進むなり」

五「行途を拒むものあらば

また、『野球部部歌』（明36）第一節の「籠りてこゝに十二年」も、いつころからか「籠りてこゝに十余年」と歌われている。「嗚呼玉杯」の場合も、これらの寮歌を愛唱するうちに影響を受けたものであろうか。

【私見】作詞者の矢野勘治は、『数カ月後一高を去る哀愁を托して、「花咲き花はうつろひて 露置き露の干るがごと」に始まる第四節を作れり。』と述べている。《矢野勘治『嗚呼玉杯』の思い出》（昭35・11・3朝日新聞）「星霜移り人は去り」——「星霜」は歳月をいう（恒星は毎年、天を一周し、霜は毎年降ることから）。

▼「山水は依然たれども見る人は同じからず。星霜移り換れども古の名歌は猶存す。」《正岡子規「はて知らずの記」(新聞『日本』に連載・明治26年)》

▼「朝來暮去星霜換 陰惨陽舒氣序牽」《自居易・白氏文集卷15『歲晚旅望』(朝が来ては夕が去り、歳月は移り変わる。陰氣と陽氣が行き交い、季節は巡る。)

「我のる船は常へに理想の自治に進むなり」——「我のる船」は一高寮寮をさす。時が移り、自治を支える一高の寮生が次々と入れ替わっても、わが一高の寄宿寮は、理想の自治を目指して進み続けるのである。

【解説】第一節の「五寮の健兒意氣高し」の一句の強い語調が、第二節に発



斬りて捨つるに何かある  
破邪の劍を抜き持ちて  
舳に立ちて我よべば  
魍魎ちまじりやうも影ひそめ  
金波銀波の海靜か」

展的に受け継がれ、さらに第五節の「行途を拒むものあらば……破邪の劍を抜き持ちて……魍魎も影ひそめ」という力感と気迫に溢れた表現において一層増幅され、いわば交響曲の壮麗なフィナーレにも喩えられるような、言葉の音楽を奏でている。

「破邪の劍」——「破邪」は邪悪なものを破る意の仏教語。破邪顕正。

「魍魎ちまじりやう」——「魍魎」は山林の異気から生ずる怪物。「魍魎」は、山・水・草木など自然物から生ずる怪物。ともに人に害を及ぼすと考えられた。

【私見】「拒む」——「コバム」か「ハバム」か。我々の駒場寮時代には「ハバム」と教わったが、一高の年次の古い先輩は「コバム」と歌う人が多い。通常、「コバム」は「間を隔てて寄せつけない」の意に、「ハバム」は「さまたげる、邪魔をして押しとどめる」の意に用いることから、「行途をハバム」と訓む方が歌意に沿うように見える。しかし、古来「拒」は「コバム」または「フセグ」と訓まれ、現行の漢和辞典でも「ハバム」という訓は与えられていない。

次に『嗚呼玉杯に』以前の辞書をいくつか参照してみよう。

▼「類聚名義抄」(11世紀末〜12世紀頃に成立した、漢字を引くための字書)

「拒」の訓として、コバム、フセグなどを挙げるが、ハバムはない。

「阻」の訓として、ハバム、トドムなどを挙げるが、コバムはない。

▼『言海』(大槻文彦著、明治22年、私版)

「こばむ(拒) 〓支へ防ぐ、抑へ止む、阻む。

「はばむ(阻、難) 〓妨げ支ふ。

▼『和漢雅俗いろは辞典』(高橋五郎著、明治25年、いろは辞典発行部)

「こばむ(拒) 〓はばむ、ふせぐ。

「はばむ(沮) 〓こばむ、おしとどめる。

▼『ことばの泉』(落合直文著、明治31年、大倉書店)

「こばむ(拒) 〓支へ防ぐ、はばむ、抑へ止む。

「はばむ(沮) 〓防ぎとどめ、こばむ、おしとどむ。

以上のほか「日本大辞書」(明26)、「日本大辞林」(明27)、「日本新辞林」(明30)等も参照したが、「拒む」を「ハバム」と訓ずる例は見当たらない。「拒む」の語義に「ハバム」を、「阻む」の語義に「コバム」を併記する辞書は多いことから、「拒む」と「阻む」とは類義であり、本齋歌の場合、訓は「コバム」、語義は「ハバム」と考えればよいと解する。

「何かある」——(反語) どうして…か、いや…ではない。ここでは、どうして不都合なことがあるのか、一向に差し支えない」の意。

「金波銀波」——月光や落日に照り映えて金色や銀色に見える波。

25 第十二回紀念祭寮歌『混濁の浪』（明35 西寮／大河平隆光 作詞、廣田守信 作曲）

一 「混濁の浪逆巻きて

正義の聲の涸れし時

袖にけがれを宿さじと

向が岡の岡の上に

操を立てゝ十餘年

自治の礎今固し」

【解説】本寮歌は、詩想（特に第四、第五節における自由と人道、文武両道の理念に基

基つく宏遠な信念と使命感の表明）と雄渾かつ莊重な曲の調べとが相俟つて、寮生の心を強くとらえ、昭和年代に至るまで繰り返し愛唱された。

【私見】「混濁の浪逆巻きて 正義の聲の涸れし時」——一見すると作詞時点の事象をさしているようであるが、この句を「袖にけがれを宿さじと 向が岡の岡の上に 操を立てゝ」にかかると見れば、寄宿寮の開設当時の事象をさすと解することも可能である。「操」は節操、心を変えないこと。「操をたてゝ」は、寄宿寮の自治を永久に守ると固く誓ったこと。

《参考》『全寮寮歌』にも同様の表現が登場する。

▼「志ある青年が 濁り行く世を嘆きつゝ

操と樹てし 柏木の 旗風かをる寄宿寮」《1 『全寮寮歌』第一節》

二 「世を汝が足に踏み据えて

勝に荒ぶる魔軍勢

寄せなば寄せよ我城に

【解説】「魔軍勢」——もとは仏の修行の妨げをする魔王とその眷属。ここで

政治的経済的な権勢で社会を「混濁」させている世俗的勢力をさすとともに、暗に欧米列強の帝国主義的植民政策をも含まれていることは、第五節

千張の弓の張れるあり  
魔神の楯も防ぎ得じ

射るは正義の征矢なれば」

三「孤城に夢の安き間に

我等残して世は待たじ

文化の星は空運り

遅るゝものは常闇の

闇に埋れて影なけん

見よ隣邦の帝國を」

の「我等起たずば東洋の傾く悲運を如何にせむ」という表現で明らかである。

【私見】「我城に千張の弓の張れるあり」——「我城」は一高寄宿寮を、「千張の弓」は寄宿寮に立てこもる一千人の寮生を指す。

【解説】本節における、現状に満足して世界情勢の正しい認識を怠れば低落の運命を免れないとの趣旨の警告も時宜を得たものであった。

「孤城」——孤立した城。ここでは、「籠城主義」のもとに世俗を低く見ながら、寮に立てこもっている状況をいう。

「見よ隣邦の帝國を」——当時の中国、即ち清国が、日清戦争の敗北に続く北清事変により、かつての大帝國としての面影を喪失した現状を踏まえている。

【私見】「孤城に夢の安き間に 我等残して世は待たじ」——寄宿寮に籠城して安眠を貪っている間も世界の文化の進展は我々を待ってはくれない。

「見よ隣邦の帝國を」——この表現は、共に起居する特設高等科（特高）生の人たちに失礼だという考えから、第三節は意識的に飛ばして歌うことがほとんどであったという《朽津耕三氏（昭23理甲）の籠球部での経験から》。ちなみに、一高の「小寮歌集」でも、一、二、四、五節のみが収

録され、第三節は入っていない。

四「護國の旗をひるがへし

我等立つべき時は來ぬ

マルスの神は矛執りて

ミネルバの神楯握り

我等を常に守るなり

進め軍鼓の音高く」

五「胸に義憤の浪濤へ

腰に自由の太刀佩きて

我等起たずば東洋の

傾く悲運を如何にせむ

出でずば亡ぶ人道の

此世に絶ゆるを

【解説】「マルスの神は矛執りて ミネルバの神楯握り」——「マルスの神」

は文武両道のうち「武」の象徴、「ミネルバの神」は「文（知恵・学識）」の象徴として用いられており、本寮歌以降もこの表現がしばしば用いられるようになった。

【私見】「マルスの神は矛執りて ミネルバの神楯握り」——一般的にはマルスは武の象徴、ミネルバは文の象徴といつて差し支えないが、ミネルバは武神としての一面を併せ持っており、本寮歌に登場するミネルバは楯を握っていることから見れば、ここでは武神としての登場であり、文の象徴としての説明をここでするのは妥当でないと考える。

【解説】第四節・第五節においては、自由と人道、文武両道の理念に基づく宏遠な信念と使命感を表明している。

【私見】我等起たずば東洋の 傾く悲運を如何にせむ——十九世紀後半から二十世紀初にかけて欧米列強により東洋の多くの国が植民地化または半植民地化されたことを踏まえて、一高生が起つて正義と人道のために貢献しようという強い使命感を歌う。第五節について井上司朗氏（一高・大

如何にせん」

13文乙)は、「領土的野心とは全く別次元の、アジア・ナシヨナリズムの清冽な源流を見る」(『一高寮歌私観』(一)『)と評している。

26 第十二回記念祭寮歌『木の芽も春の』(明35 中寮)

一 「西の國より打ちよする

浪に四海は任せつゝ

石炭のけむり空とちて

暗にかくるゝ大八洲」

【解説】「西の国より……任せつゝ」——《言及なし。》

【私見】「西の国より……任せつゝ」——

▼「西の海みちびく潮にまかせつゝ われとはさらぬ法のはや舟」

《新続古今集／後九条前内大臣》

【解説】「石炭のけむり」——《言及なし。》

【私見】「石炭のけむり」——「石炭」は、ここでは「せきたん」ではなく

「いはき(いわき)」と訓ませるつもりではなからうか。

【いはき(いわき)】 〓 低品質の石炭、亜炭

▼「石炭の煙は大洋の／龍かとはかり摩くなり」(『軍艦行進曲2番、明30』)

27 第十二回記念祭寮歌『大空ひたす』(明35 南寮／辻村鑑・中村翁・野村伝四 作詞)

一 「大空ひたす和田の原

飛ぶ影低き水鳥の

【解説】「大空ひたす和田の原」——「和田の原」は大海原の意。

【私見】「大空ひたす和田の原」——次の詩を踏まえる。

翼休むる島もなし  
煙に似たる一葉舟  
たゞ白波を名残にて  
汝が行く末やそも何處

二「南溟のはて靈地あり  
山は秀でて水清く  
野には橄欖實を結び  
森にはレモン花開き  
青松白沙紫を湛へ  
長汀曲浦風かをる」

▼「大空<sup>ひた</sup>涵すわだの原 波間の星は影消えて」《晚翠「馬前の夢」明32》

【解説】「煙に似たる一葉舟 たゞ白波を名残にて」——《言及なし。》

【私見】「煙に似たる一葉舟 たゞ白波を名残にて」——次を踏まえるか。

▼「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ 漕ぎゆく舟のあとの白波」

《拾遺集・沙弥滴誓》

【解説】第二節は、第一節末尾の「汝が行く末やそも何處」を受けて、「自治共同」の組織体を目指す最終目的の一種の理想郷（靈地）の実現であることを暗示している。

【私見】作詞者は、一高自治寮の目指す理想郷として、以下に示すゲーテの歌或いはそれを下敷きにした与謝野鉄幹の詩をイメージしたのであろう。因みに、一高寮歌の中でレモンの花が登場するのはこの曲だけである。

▼「レモンの木は花さき／くらき林の中に／こがね色したる柑子は  
枝もたわわにみのり／青く晴れし空より／しづやかに風吹き

ミルテの木はしづかに／ラウレルの木は高く／くもにそびえて立て  
る国を／しるやかなたへ君と共にゆかまし」

《ゲーテ「ミニヨンの歌」《森鷗外ほか訳『於母影』明22》

⑨この歌は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に登

28 第十二回記念祭歌『暴風轟然』(明35北寮／和田一郎 作詞)

29 第十二回記念祭寄贈歌『我一高は』(明35東大／中西四郎 作詞、「箱根八里」の譜)

30 第十三回記念祭歌『縁もぞ濃き』(明36東寮／柴 碩文 作詞、楠 正一 作曲)

一 「縁もぞ濃き柏葉の

蔭を今宵の宿りにて

夕べ敷寝の花の床

旅人若く月細し

黙示聞けとて星屑は

梢こぼれて瞬きぬ」

場する少女ミニヨンが故郷イタリアを偲んでうたう歌で、寒地に住むドイツ人の南国への憧れを象徴しているとされる。また、加藤武雄の少女小説『君よ知るや南の国』によって広く知られている。

▼ 「萬里の波に船うけて／南の島に復も行く／……／

野には橄欖みのるなり／山にはレモン花ぞさく」

《與謝野鐵幹「友人黒崎美知雄の…再び台湾に赴くを送る」『東西南北』明29》

【解説】本寮歌は、『春爛漫』、『嗚呼玉杯』、『太平洋の』、『仇浪騒ぐ』などと、

並んで、寮生のもつとも好んで歌った代表歌の一つである。井上司朗氏(大13文乙)の「二高寮歌私観」によると、柴碩文は子規門下の有力な俳人で、『縁もぞ濃き』にも同氏の句作の発想や破片がちりばめられているという。井上氏は更に、「この詩は藤村、晩翠などの影響の全くない非常に独創的なもので、薄田泣菫や蒲原有明に先立って、この秀れた象徴詩を成し遂げ



ていることは、文学史的に見ても非常に重視しなくてはならない」と評している。ともあれ本寮歌の象徴主義風の表現には、論理的に明快な解釈を下すことは極めて困難である。

「緑もぞ濃き」——「も」も「ぞ」も強意の助詞。

「黙示」——隠された真理、あるいは宇宙の神秘などを、言葉以外の何らかの暗示により沈黙のうちに示すこと。作詞者の念頭に聖書のヨハネの黙示録があったとすれば、「星の黙示」とはベトレヘムのキリスト誕生の故事を指すことになるが、確かではない。

【私見】柴碩文氏の子息柴晴雄氏（昭4理乙）は、本寮歌に反映された父の句作として次の例を挙げる（『向陵駒場』No.25（昭45・1）「緑もぞ濃き」）。

「行水や夕顔白く月細き」 「夕露の我に消ぬべき思ひあり」

「蜂がいるおどろの中や木瓜の花」 「夕月や妹が垣根の花茨」

（「旅人若く月細し」と「露のおどろの花うばら」）

徳富蘆花の新聞小説『不如帰』（明31〜32）を題材とした歌「不如帰」（明42、作詞・作曲者不詳）は『緑もぞ濃き』の曲・詞の一部を借用して作られており、よく流行したという。

一 「緑もふかき白楊の 蔭を今宵の宿りにて

戀しき妻とただ二人 或ひは泣きつ慰めつ」

「旅人若く月細し」——「旅人」は一高生。第13回記念祭当日（3月1日）の月齢は1.24で、ほとんど見えないほど細い月であった。

▼「旅人若く月淡し 熱き情に身もこがす」△五高『椿花咲く』昭55

「黙示」——英語では revelation。「黙示」の原語であるギリシヤ語の「アポカリプシス」は uncover（おおいを取る）、reveal（隠されていたものを）表わす、示すの意であり、原義に「沈黙」の意はない。

日本国語大辞典（小学館、昭47〜昭51）の「黙示」の項の説明では、①「暗黙のうちに意志を表示すること、はつきり言わないで間接的に意志を示すこと」とし、先行例として和漢大辞典（大8）に「新語」黙示」明らかに言はずに、それとなく示すこと」とあるを引く。

②「隠された真理を開示すること。特にユダヤ教やキリスト教で、人がその才能や知識では測り知ることのできないことを、神が特別の方法により人に示すこと」とし、用例として、藤村の「黙示をかたる言の葉は／高きらっぱの天の声」（落梅集・『寂寥』）を引く。

③「②を比喩的に用いて」直観的にある原理や考え方、方法を知ること」とし、漱石の『野分』（明40）の「理想の黙示を受けて行くべき道を行く

のもその通りである」を引く。

以上からみると、大きく①と②③の二つに分かれることが分かる。このうち②の説明は、聖書辞典(明25)の次の説明とほぼ同一といつてよい。

【モクシ】人が其自然の才能知識を以て測り知ることあたはざることを特別の方法を以て神の之を人に示したまふことを黙示と云なり。

「黙示」という訳語は、清代漢訳聖書から明治期の日本語訳聖書に入ったが、以後最新の新共同訳まで同じ訳語が使われている。本家の中国では、最初のモリソン漢訳では「啓示」、その後いったん新造漢語の「黙示」が使われたが、また「啓示」にもどった。「黙示」は中国ではもはや死語である(この段落は、高島俊男『お言葉ですが』⑪(連合出版)によった)。

「黙示」という語が revelation の訳語として作られたとするならば、上述①の語義は明治民法下の法律用語である。「黙示の契約」などに主として使われたものであるが、この語義の中に「暗黙のうちに」とあるのはむしろ「黙」の字義に引かれた派生的なものだと考えられる。

寮歌に登場する「黙示」は、右の日本国語大辞典の語義のうち、②ないしは③の意味で使われていると見てよからう。

一高寮歌における「黙示」という語の初出はこの『縁もぞ濃き』である

が、作詞者がこの語をとりいれた経緯は未詳である。ただし、前出の島崎藤村の『寂寥』の詩を収録した『落梅集』が、この寮歌の少し前の明治34年8月に出版されたことと関連があるかもしれない。『縁もぞ濃き』以後、一高の寮歌はもとより、多くの旧制高校の寮歌にも「黙示」が登場し、その中で最も目立つのが「星の黙示」である。一高寮歌及び他校寮歌にとりあげられた「星の黙示」の例をいくつか挙げてみよう。

〔二高寮歌の例〕

▼「輝く星の曙や／淡き黙示のほゝ笑みを」 《149 『あゝ朝潮の』大5》

▼「北方の星は冴えたり／夜を通し黙示さゝやく」 《225 『彼は誰の』昭4 東大》

▼「光ほのかに丘の上／黙示の星の瞬けば」 《277 『光ほのかに』昭14》

▼「巡禮なる星の思想は／運命なれ黙示の丘に」 《306 『曙の』昭19・6》

〔他校寮歌の例〕

▼「理想の園は遠くとも／輝く星の黙示あり」 《六高『新潮走る』大2》

▼「健児が希望深ければ／北斗に強き黙示あり」 《北大予『瓔珞磨く』大9》

▼「山川何を物語り／北辰何を黙示する」 《山形高『嗚呼乾坤の』大12》

▼「幻想の夢にさむれば黙示する星のまたゝき」 《四高『新しき生命』昭2》

▼「星の黙示に友垣と／語らふ宵の多くして」 《学習院『濁りに染める』昭3》

三「星の默示に驚きて

敷寝の花を蹴て立てば  
露のおどろの花うばら  
あゝ紅よ紫よ  
刺を包みて何すらん  
偽善は花の刺にして」

四「地に私語ひそかきぬ小流は

橄欖の香に慕こひ寄る  
くちなは淵を渡りつと  
さ霧の闇に草摺くれの  
音聞えつゝ木の下もとの

▼「故郷の方に明星も／默示の色に冴ゆるかな」≪五高『椿花咲く』昭55≫

【解説】「露のおどろの花うばら……偽善は花の刺にして」——この見た目は

美しい花いばらのように、表面は華美な文明文化の世の中の裏面には、刺に喩えられた恐るべき「偽善」が包み隠されているという意であろう。

【私見】「露のおどろの花うばら……偽善は花の刺にして」——「花うばら」は野イバラの花で、白い五弁の花をつける。俳句では夏の季語。これに対して本寮歌の「花うばら」の色は「紅」や「紫」だから、むしろ西洋バラの系統のイメージであろう。

上田敏の訳詩集『牧羊神』所載の「薔薇連禱」という詩（レミ・ドゥ・グルモン）では、いろいろな色の薔薇の花に対し、「偽善の花よ。無言の花よ」と繰り返えし呼びかける詩句が印象的である。

【解説】この一節は全体として主語・述語の関係が曖昧で明解は一層困難である。この節の大意は、……人間性の中には、エデンの園の蛇に喩えられるような邪悪な「猜疑」の心が潜んでおり、それが知性の香りの高いはずの向陵生活の中にもうごめいていることを自分は発見した、というようなことではないか。

猜疑の蛇を我見たり」

五「彼のくちなはを屠りつゝ

彼の荊棘を茹らんとて

抜き放ちけり秋の水

夕月落ちて霧白し

夜を深緑柏葉に

橄欖の花散りかゝれ」

【私見】この節の前半の文の主語は「小流」、述語は「私語ささやきぬ」であり、小流が地に私語ささやいた中身が「橄欖の香に慕ひ寄るくちなは淵を渡りつ」ということになる。後半の「主・述」は「我・見たり」で疑義は生じない。

【解説】この一節の大意は、向陵生活にも隠れ潜んでいる「偽善」と「猜疑」を主とする邪悪なものを、鋭利な刀に喩えられる秀でた切れ味の知力、批判力、行動力をもって断ち切ってしまえば、緑の濃い柏葉に橄欖の花が散りかかる有様に喩えてしかるべき、讚美に値する向陵生活が実現するとうことを詠じたものであろう。

【私見】真偽のほどは定かではないが、「抜き放ちけり秋の水／夕月落ちて霧白し」はいわゆる「寮雨」のことだというのが動かし難い伝説であり、また、この中の「夕月」は当時の体操の先生で寮生監督をしておられた大沼先生の禿頭のことをいうのだとも伝えられる。

《小林俊二『わが向陵三年の記』85ページの記述による。》

### 31 第13 回記念寮歌『曉奇する』(明36 西寮／辻村鑑 作詞、小峰昇二 作曲)

一 「曉奇する新潮の

その浪高く鳴る所

【解説】本寮歌の詩想の豊かさ、繊細さ、表現技法の達者さは「緑もぞ濃き」と並んで一般の水準を抜いている。駒場移転後も唱い続けられ、特に「醒

四海の闇は影ひそめ  
愉快ならずや億劫の  
塵に眩ゆき光あり」

二「空に無限の座を占めて  
きらめき出づる明星に  
劫風夕べ鳴を止め

めよ迷の夢醒めよ」の句で結ばれる第二節までが愛唱された。

「曉寄する新潮の」——《言及なし》

「億劫」——仏教語で、長大な時間を意味する。

「塵に眩ゆき光あり」——《言及なし》

【私見】「曉寄する新潮の」——「新潮」は時代の新しい動きのこと。二十世紀という新時代を迎えての日本の、あるいは一高の思潮をさすか。

ちなみに、昭和15年発表の『慶應義塾塾歌』（富田正文作詞）の冒頭に類似の表現が見られ、この塾歌の「新潮寄するあかつき」は明治維新を指すという説がある。

▼「見よ風に鳴るわが旗を 新潮寄するあかつきの 嵐の中にはためきて」  
「塵に眩ゆき光あり」——「塵」は寮歌では「汚れた俗世間」の意に用いることが多いが、ここでは「先人の遺業」の意で、「億劫の塵に眩き光あり」とは、長年にわたる先人の遺業が眩しく輝いていることは愉快ではないか、と歌っているかと解する。

【解説】第二節は晩翠の詩集『天地有情』に見える詩句に学んでいる。

▼「昇りも行くか無限の座」、「劫風ともに鳴りやまず」、「暮鐘」より、  
「四大のあらび渾沌の」（「馬前の夢」より）

四大の荒び收りて  
千歳春の歌を聞く」

三 嗚呼彼の聲に亡びるる  
望はとはにこもらずや  
嗚呼彼の歌に萎びるる  
榮の花は開かずや

「劫風」——仏教語で、壊劫（三千大世界の破壊するときをいう）の末の三災。水火風の一。業因の力を風に喩えたもので、業風に同じ。

「四大」——地水火風をいう。物質を構成する四つの元素。

【私見】「四大の荒び」——「四大」を「地水火風」の意と解したのでは、「荒び」とは結びつかない。日本国語大辞典では、「四大」の語釈の一つに「四大天王（帝釈天に仕え、佛法を守護する四神（持国天、広目天、増長天、多聞天）の略）」を挙げ、その用例として上田敏の訳詩集『海潮音』から次の一句を引く。

▼「四大のあらび、忌々しかる羅刹の怒号」（ブラウニング・「瞻望」）  
本寮歌（明36）は『海潮音』（明38）の刊行より先行しているが、「四大の荒び」の解釈については『海潮音』『瞻望』の用例と同様に解するのが順当であろう。

「千歳春の歌」——記念祭を祝い寄宿寮の弥栄を願う寮歌。

【解説】第三節について直接の言及なし。

【私見】「彼の聲」「彼の歌」——わかりにくい表現だが、「彼の聲」は第一節の「新潮の浪の音」を、「彼の歌」は第二節の「千歳春の歌」をさすものと解する。



醒めよ迷の夢醒めよ

「醒めよ迷の夢醒めよ」—— 端艇部などのストームで、この部分を繰り返し高唱しながら深夜の寄宿寮を揺るがせたことが、語り伝えられている。ストームの歌としては、このほか、「立て自治寮の健男兒」（第9回記念祭寮歌『思へば遠し』の一節）などが有名である。

32 第十三回記念祭寮歌『かつら花咲く』(明36 中寮／塩田 環 作詞)

一 「かつら花咲く西の空

文明の雲いざよひて

絳霞の光あざやかに

平和の色はたなびけど

晚鐘風に傳はりて

ゆふべ偽涙の聲高し

【解説】「かつら花咲く西の空」—— 《言及なし》。

【私見】「かつら花咲く西の空」—— この語句は難解で、いまだ定説がない。

「かつらの花」という表現で月または月光を指すこともあるが、「月の出ている西の空」というだけでは何のことか分からない。

私見では、「かつら花咲く西の空」とは、明治35年1月に桂太郎首相らの尽力で日英同盟の締結が実現したことを指すと解したい。「かつら」は「桂太郎」、「花咲く」は「日英同盟の実現」、「西の空」は「同盟相手の英国」または「調印の行われたロンドン」を指すと解する。

列強文明国である英国との同盟の成立は、日本の国際的地位の向上を示す快挙だとされた。「文明の雲」、「絳霞（＝紅霞）の光」もこのことを踏まえていると見れば、素直に理解できよう。

【解説】「平和の色はたなびけど」——《言及なし。》

【私見】「平和の色はたなびけど」——日露関係が緊迫しつつあったこの時期なのに、なぜ「平和の色」なのかという疑問がもたれるが、実は日清戦争（一八九四年）から日露戦争（一九〇四年）にかけての約十年間、ヨーロッパ列強の間では戦争のない状態が続いていた（植民地戦争は別）。そして一八九九年には露西亞皇帝の提案によりオランダのハーグで国際平和会議が開かれ、ヨーロッパ諸国と非ヨーロッパ諸国の代表が集まって、国際紛争の平和的解決等をめぐって議論が交わされた。

《中公新書『日露戦争史』（横手慎二著）参照》

本寮歌は、こうした表面的でしかない国際平和への動きと日本国民の無關心に対して「ゆふべ偽涙の声高し」と揶揄し、現実には戦争が近づきつつあることへの警告を發したものと解する。

【解説】「南島をかすめ行く」——《言及なし。》

【私見】「南島をかすめ行く」——南島島を」を「ミナミトリシマを」と読むのか、「ナンチヨウ島を」と読むのか、説が分かれる。今日までほとんど歌われておらず、どう歌っていたかがはっきりしない寮歌なので、どう読むべきかを考えてみる。

二「嗚呼東海を洗ひ去る

潮に乗りて二千里

南島島をかすめ行く

千重の雄波はさわぎ立ち

霧尚ほ深き曙の

巖に荒く激すなり」

三 「されば黄金の波湧かし」

榮華の色を雲に染め

治安をよそふ夕陽の」

七五調で字余りを避けることを重視すれば後者となろうが、私見では、以下の理由から前者（＝「ミナミトリシマ」）を採りたい。

① 後者とした場合、「南島」なんぢようしま、「島」しまがそれぞれ何を指すのか不明。

② 「南島島」と命名されたのが一八九八年（明治31年）、日本領と確定したのが一九〇二年（明治35年）で、この寮歌の作られた一九〇三年（明治36年）当時では、ホットニュースのレベルであった。

③ 南島島は東京から南東に約一九五〇km（五百里弱）の洋上にあり、本寮歌の「二千里」には満たないが、許容範囲内の誇張だと考えられる。なお、前者（「ミナミトリシマ」）を採った場合、「かすめ行く」の主語は、「潮」ではなく「千重の雄波」だと解するのが妥当と考える。

【解説】 ≪言及なし。≫

【私見】 「黄金の波湧かし／榮華の色を雲に染め／治安をよそふ夕陽の」

—— 土井晚翠の次の詩を踏まえている。

▼ 「海に黄金の波湧かし」

空に焰の雲を染めて

しづかに落ち行く夕日の姿 ≪土井晚翠・「平和」／明34 『晝鐘』≫

六「漂ぶ水も止まらば

淀みに濁る怨あり」

【解説】《言及なし》《》

【私見】『宋名臣言行録』に「智ハ猶ホ水ノ如シ。流レザルトキハ即チ腐ル」とある。

33 第十三回 紀念祭寮歌 『彌生が岡に地を占めて』(明 36 南寮 / 満井信太郎 作詞、鈴木充形 作曲)

一「彌生が岡に地を占めて

立つや五つの自治の城

臺に田鶴は巢くはねど

汀に龜は遊ばねど

千秋萬歳長しへに

榮えん神のさだめあり」

【解説】「臺に田鶴は巢くはねど 汀に龜は遊ばねど」——中国古典にはこの

の両句の典拠になるものは見当たらないとした上で、「臺に田鶴は……」

については「又有『白燕數十、巢<sup>オナツ</sup>ニ其層臺<sup>ニ</sup>』(唐傳奇『李娃伝』)という

故事を引き、「汀に龜は……」については「尾ヲ塗中(泥の中)ニ曳ク」

『莊子』秋水篇)という故事を引いて説明を試みている。さらに、俗に

「鶴は千年、龜は万年」というのから考えついた表現と見ることもできよう、としている。

【私見】「臺に田鶴は巢くはねど 汀に龜は遊ばねど」——ツルは濕原や草地

に住み、樹上に止まることはない。これに対しコウノトリは松その他の高

木の樹頂に営巢する。古来「松の上の鶴」と表現されるように、ツルとし

ばしば混同される。

「臺に巢く」とは、屋根に巢をつくること。

34 第十三回紀念祭寮歌 『春まだあさき』(明36北寮／田邊尚雄 作曲)

二「尚武の風にはたきたきて

圖南の翼ふるふべき

時はや近し我が友よ」

五「北風負ふて起つ者は

終に凱歌を奏すべし

▼「水鶴巢二層臺」二《江淹》雜體詩二十首・「苦雨」《文選》

鶴と龜は古來長寿の象徴とされており、謡曲『鶴龜』では、唐土の宮殿の新年の節会において、池の汀の鶴と龜が舞つて皇帝の長寿を祝うと、皇帝も喜んで、みずから立つて舞う。

▼「池の汀の鶴龜は。蓬萊山も外ならず。

君の恵ぞありがたき。君の恵ぞありがたき」《謡曲『鶴龜』》

「千秋萬歳長しへに 榮えん神のさだめあり」——自治寮の建つ彌生が岡の地は、「いや生おひ」、すなわち草木がすくすくと生い茂るようにいよいよ榮えると、いうめでたい地名であり、鶴龜がいなくとも永久に榮える運命を負っている。

【解説】「北風負ふて起つ者は」——この表現に、特に典拠は考えられない。

一般に「北風」は、厳しい寒風、行く手を阻む逆風の意を含み、また、権力や威力の烈しい勢いを喻える語であり、いずれにしても、下句の「終に凱歌を奏すべし」とはそぐわない感じがする。

【私見】「北風負ふて起つ者は」——一般的には「北風」は解説のような理解

時はや近し吾友よ」

がなされるとしても、本寮歌の場合は第二節と第五節とが対応しており、第二節に「尚武の風にはたきて圖南の翼ふるふべき」とあることから第五節で「北風」(＝「尚武の風」)に背中を押されて南をめざし(＝「圖南の翼をふるふ」)、ついには凱歌をあげることが期していると考えれば、理解できるのではないか。

35 第十三回記念祭寄贈歌『筑波根あたり』(明36 東大)

四「聲をひそめて啼かざるは

世の人醒てあらずぞ

翼をさめて蜚はねども

やがて翔らん大空を」

【解説】「世の人醒てあらずぞ」——《言及なし》

【私見】「世の人醒てあらずぞ」——「醒て」は、初版の寮歌集(明37)で

は「醒す」とあったものが、その後の版で「醒て」と誤植されたものらしいが、平成16年版寮歌集の正誤表で訂正されている。「醒す」は「サマス」と読む。「あらず」は、将来についての心積もり、予期、計画、期待、即ち「世の人を目覚めさせよう」という心積もりがあるからだ」という趣旨であろう。《この項、井下登喜男氏(一高昭26文丙)のご示唆を参考にした。》

36 第十三回記念祭寄贈歌『比叡の山に我立ちて』(明36 京大／鳥瀧隆三 作詞、廣田守信 作曲)

37 第十三回記念祭寮歌『春の日背をあたゝめて』(明36／音楽隊 作詞、「雪中行軍」の譜)

一 「春の日背をあたくめて  
梅の香澄みぬ向陵の」

【解説】「春の日背をあたくめて」——《言及なし》  
【私見】「春の日背をあたくめて」——泣菫の次の詩を踏まえる。

▼「冬の日背せなをあたくめて 南の窓のたたずまひ」

《薄田泣菫「兄と妹」「暮笛集」明32》

### 38 第十四回記念祭寮歌『向が陵の自治の城』(明37東寮)

二 「やしほにもゆるもみち葉に

若きちしほのたぎらずや

【解説】「やしほにもゆる」——《言及なし》

【私見】「やしほにもゆる」——「やしほ」(「八入」)は、幾度も染め汁に浸して色濃く染めること。また、その染めた布や糸。

三 「柏葉しげる南歌に

むかし偉星の閃きや」

【解説】「むかし偉星の」——ギリシヤ全盛時代の偉大な人物のこと。

五 「歴山王の勇涙に  
いでや我等が時をまつ

【私見】「むかし偉星の」——第五節に「歴山王の勇涙に」とあることからみて、第三節の「偉星」は、「歴山王」すなわち「アレキサンダー大王」を指すと解すべきであろう。

### 39 第十四回記念祭寮歌『明けぬと告ぐる鳥の音に』(明37西寮／大島正満作曲)

一 「明けぬと告ぐる鳥の音に

夜の色淡く消え行けば

【解説】「明けぬと告ぐる鳥の音に」——《言及なし》

【私見】「明けぬと告ぐる鳥の音に」——次の歌を踏まえる。

希望のぞみの光輝きて  
尊たかからずや朝の榮

《新古今集・高倉院》

▼「音羽山さやかに見ゆる白雪を 明けぬと告ぐる鳥の声かな」

40 第十四回紀念祭寮歌『春三月の武香陵』（明37中寮／青木嗣夫 作詞）

一 「綠色濃き樹下陰」

花深く咲き花散りて

たわゝみに登る自治の實よ

【解説】《言及なし。》

【私見】島崎藤村の次の詩（『寂寥』／落梅集）を踏まえている。

▼「人の命の樹下陰／花深く咲き花散りて／枝もたわゝの智慧の実を」

三 「春靜かなる東海の」

浪をみだして滔天の

罪を東亞の地に犯し

文明の名を汚したり」

【解説】「滔天」——天にまではびこるほどの、という意。

【私見】第三節は土井晚翠の次の詩を踏まえている。

▼「春靜かなる東海の」《『萬里長城の歌』》

▼「虎狼みだりに滔天の／罪を文明の名に犯す」《『登高賦』》

四 「されど朱陽の曙の」

榮えある色は永劫に

扶桑に高く麗はしき

姿不變の富士が嶺を」

【解説】「朱陽」——万物發生の氣のこと。

【私見】第四節は、土井晚翠の次の詩を踏まえている。

▼「紅雲錦の粧を／疑らず朱陽の曙の色」《『富嶽の歌』》

▼「姿不變の富士の嶺」《『富嶽の歌』》

五 「あゝ青冥の天長く

【解説】《作詞者の中国古典に関する教養の高さを偲はせる表現力の豊かさ》



下渌水の波瀾あり  
壯士撫劍の雄風に  
眉を揚ぐれば腰間の  
白羽奔りて邊月は  
常はに随ふ弓の影

を指摘し、「親しみにくい漢語が多く、簡潔さ明快さに欠ける」としているのに、第五節の解説では、典拠や語句の解釈には触れていない。

【私見】「あゝ青冥の天長く 下渌水の波瀾あり」——次の詩を踏まえる。

▼「上有青冥之長天、下有渌水之波瀾」《李白『長相思』二首之一》

（「渌水」＝清く澄んだ水。寮歌集に「緑水」とあるは誤植。）

「壯士撫劍の雄風に」——次の詩を踏まえる。

▼「客從城中來、相視慘不悅、引盃撫長劍、慨嘆胡未滅」

《南宋・陸游『客從城中來』》

「腰間の白羽奔りて」——「腰間の」とあるため、「白羽」は「白刃」の誤植だとする説があるが、次の例に見るように、「腰間の箭」（箭＝矢）という表現も珍しくない。続く句に「弓の影」とあることからみても「白羽」は「矢」と解するほうが素直である。

▼「良相頭上進賢冠、猛將腰間大羽箭」《杜甫『丹青引贈曹霸將軍』》

▼「流星白羽腰間插、劍花秋蓮光出匣」《李白『胡無人』》

「奔る（走る）」——いきおいよくとびだすさま。「矢が奔る（走る）」という表現は、弓道でも使われる。

「邊月は 常はに随ふ弓の影」——次の詩を踏まえている。

41 第十四回紀念祭寮歌 『亞細亞の東蒼溟の』(明37南寮／青木得三作詞、小峰昇二作曲)

三「春墨水のはな吹雪

紅葩こぼるゝ白旗や」

▼「邊月随弓影、胡霜拂劍花」《李白『塞下曲六首 其五』》

(「邊月、弓影に随ひ、胡霜、劍花を拂ふ」)

この場合の「邊月」は、「胡霜」と対句をなしていることから、「辺地を照らす月」の意であり、その邊月は、弓が投影したように見える「弦月(弓張月)」だというのであろう。

なお、謡曲「融(とほる)」にも次の表現がある。

▼「青陽の春の初には／霞む夕べの遠山／眉墨の色に三日月の影を舟に／譬へたり／又水中の遊魚は／釣針と疑ふ／雲上の飛鳥は／弓の影とも驚く」(空飛ぶ鳥は、三日月を弓の影かと驚く)

【解説】「紅葩」——「こうは」と読む。紅の花。「白旗」は一高の応援旗。

【私見】「紅葩」——高等商業の応援旗(赤色)。「紅葩こぼるゝ白旗や」は一高ポーター部が隅田川のレースで連戦連勝した歴史を指す。

▼「春大塚の戦塵や／見ずや紅葩のちりまがふ」

《55『群り猛る』明39》

明治38年春、大塚の高師での柔道試合で一高が高商に勝ったこと。

四「朱門に映る紅旒や  
緑旗亂るゝ秋駒場」

【解説】「朱門」—— 頭官の大邸宅の門。ここでは一高の正門を指す。

「紅旒」—— 「旒」は旗の垂れ。多く赤帛を用いた。

「緑旗」—— 《言及なし》。

【私見】「朱門」—— 帝大の赤門。秋の帝大運動会を指す。

「紅旒」—— 高等商業の応援旗。明治36年の帝大陸上運動会で高等商業の川崎肇選手が優勝したことを指す。

「緑旗」—— 学習院の応援旗。明治36年の農科大学（駒場）陸上運動会で学習院の三島弥彦選手が優勝したことを指す。

▼『学習院競技部史』では応援旗を青旗と称しているが、濃い藍色であったため、一高側ではこれを緑旗と呼んでいた。

▼『向陵誌』の陸上運動部史の明治41年の項には、「五歳の昔、覇者の桂冠は徒に朱門の塵に汚されてより、駒場原頭にも緑旗いたづらに翻つて」とある。

42 第十四回記念祭寮歌『都の空に』（明37北寮／穂積重遠 作詞、鈴木充形 作曲）

【参考】解説書は言及していないが、「熱海の海岸散歩する……」の歌詞で有名な『金色夜叉』の歌（大正7年）のメロディーは『都の空に』の曲を借

一 「東臺花の雲深み

墨堤花の雨灑ぐ」

三 「東臺の花それならで

戦雲迷ふ黄海に……」

四 「隅田の花とまがふへく

矢弾雨降る満洲の

残の雪を踏みしだき

進むみいくさ忍ばずや」

用したものと堀内敬三氏が指摘して以来、これが通説となっている（異論もある）。

《尾崎紅葉作『春夜』と「高臺歌のこゝろ」鈴木孝一昭 11「高文内」『向陵』 96号巻題

【解説】「東臺の花それならで」——第一節の「東台花の雲深み」を受けて、それを否定する。「深い花雲に包まれ、のんびりと咲いているわけにはいかず」というような気持。【東臺＝関東の臺嶺。上野の東叡山寛永寺一帯をいう。】

【私見】「東臺の花それならで」——「東臺の花の雲」ではなく「戦雲」（戦争の気配）がただよふさまを歌っている。

【解説】「隅田の花とまがふへく」——第一節の「墨堤花の雨灑ぐ」を受ける。

【私見】「隅田の花とまがふへく」——「墨堤の花の雨」とみまがいそうに

「矢弾の雨」が降るさまを歌っている。

【解説】「残の雪」——語釈・典故については言及なし。

【私見】「残の雪」——「残りの雪」の音便。消え残った雪。平家物語巻10

『海道下』に「遠山の花は残んの雪と見えて、浦々島々霞み渡り」とある。

▼「新春光輝きて／残んの雪に色映ゆる」《159 『圖南の翼』大6》

▼「眠れる獅子の塔かげに／残雪の融けゆけば」《174 『眠れる獅子』大7》

▼「春未だ若き向陵に／残んの雪は白けれど」《194 『春未だ若き』大10》

五「熱血男児いかにして

都の春にあくがれん」

【解説】「都の春にあくがれん」——《言及なし》

【私見】「都の春にあくがれん」——都に春が訪れたからといって、どうして浮かれ歩いてなどいられようか。（あくがる⇨浮かれ歩く）

43 第十四回記念祭寄贈歌『思ひ出づれば』（明37東大）

五「我れ文明の矛とりて

正義の旗をさゝげ持ち」

【解説】《言及なし》

【私見】明らかに「文明」と「開化」とを対比させた表現であり、「開花の風」

六「開花の風を香らしめ

國の光を輝かせ」

は、おそらく「開化」の誤植であろう。なお、明治37年発行の初版寮歌集においても、すでに「開花の風」と印刷されている。

▼「文明の花風に散り 開化の眠夢さめば」《13 『思へば遠し』明32》

44 第十四回記念祭寄贈歌『時は流れて』（明37京大）

45 第十四回記念祭寄贈歌『暁がたの』（明37福岡大／鳥潟 碩 作詞）

四「東風ふくのべに薫りきて

筑紫のはても春めきぬ」

【解説】「のべ」——《言及なし》

【私見】「のべ」——「なべ」の誤植であろう。16 『あを大空を』の項参照。

五「荒野とびゆく大鷲の

【解説】「射よげ」——《言及なし》

46 第十五回紀念祭寮歌 『王師の金鼓』(明38 東寮／松坂廣政 作詞、杉浦忠雄 作曲)

射よげに見ゆる姿かな

【私見】「射よげ」——射るのに好都合なさま。射やすいさま。

▼「風もすこし吹きよわり、扇も射よげにぞなったりける」

《平家物語卷11『那須与一』》

一 「王師の金鼓地を搖れば

敵軍の旗野に亂る

濛朧海を覆ひては

敵片隻の影もなし」

【解説】「濛朧」——進んで敵船を突き破る船。ここでは海軍の艦隊のこと。

【私見】「濛朧」——「濛朧」は「いくさぶね」のことだが、通常は味方の艦

隊の表現として使われ、敵の艦隊には「鯨鯢」(雌雄のクジラ。鯨は雄、

鯢は雌。悪人のかしらにたとえる。)という表現が使われる。以下に一高

寮歌に登場する「濛朧」と「鯨鯢」の例を挙げてみる。(大半は日露戦争

当時の寮歌)。

▼「濛朧海を覆ひつゝ／鯢鯢こゝに雄たけびす」《43『思ひ出づれば』明37》

▼「朝日敷島濛朧の／精を盡して浪を蹴り」《342『征露歌』明37》

▼「南印度の蒼浪に／濛朧敵をむかふとき」《48『平沙の北に』明38》

▼「怒濤逆巻く南海に／濛朧怒に嘯けば」《300『寒風颯颯』昭17》

▼「戦雲迷ふ黄海に／群がる鯨鯢叱咤して」《42『都の空に』明37》

▼「戦艦蹴立つ勢に／鯨鯢斬らん浪荒く」《343『旅順陥落歌』》

二「自治の子つるぎ鞆拂ひ

かの外敵を屠らずや」

四「籠城十五の今日の春

春や昔の月影に

過ぎにし事を尋ぬれば

月は雲間にかくれけり

自覺の鐘は破れしを

耳聾たりや森の人」

【解説】「屠らずや」——《言及なし》

【私見】「屠らずや」——一高寮歌に「屠る」という表現はいくつか登場するが、なぜか「ホオル」と歌う人が圧倒的に多い。しかし、「屠る」の訓みは「ホフル」であり、この寮歌の場合も「ホフラズヤ」と歌いたい。

▼「文弱平和いかでかの／暴戾の敵屠るべき」《51》向が岡に冬籠る『明 38』

【解説】「自覺の鐘は破れしを……」——《自覺の鐘》については言及なし。《「森の人」——一高を「森」にたとえている。

【私見】「自覺の鐘は破れしを……」「自己存在の自覺」こそ校風の基本だと主張する個人主義論者の（破れ鐘のような）太い濁った声が、一高の寮生の耳には聞こえないのか、と怒っている。本寮歌の作詞者は伝統派擁護の立場から、第三節でも「個人の声の揚る時……かの内寇を誅せずや」と警告を発している。

- 「自覺」という語は、明治三十年代から四十年代の一高自治寮における「校風論争」のキーワードの一つで、この時期の寮歌には頻繁に登場する。
- ▼「花一時の香に酔ひて／…／内に自覺の叫あり」《59》『あゝ渾沌の』明 39
  - ▼「自覺の光ひんがしの／空に栄えけむ曙を」《67》『春蟾霞む』明 40
  - ▼「波も嵐も声高く／自覺の曲を歌ふ也」《70》『嵐を孕み』明 40

五 「緋緘しるき若武者の

ゑびらの梅に風ぞ吹く」

五 「長夜の眠今さめて

起つべき時は來りたり」

▼ 「内に自覺の慨なく／外の叫に花染の」《72 『思ふ昔の』明40》

▼ 「自覺の聲にさめ出でよ／高つ瀬なしてとよみ行く」《75 『蒼茫遠く』明41》

▼ 「あゝ打ちよする新潮に／自覺の曲の音も高く」《76 『弥生が岡の』明41》

▼ 「自覺を啓くことこそは／我等が二なき誇りなれ」《103 『オリムパスなる』明44》

【解説】「ゑびらの梅」——「ゑびら」は矢を入れて背負う道具。

【私見】「ゑびらの梅」——一高寮歌集では一貫して「そびら」と表記してきたが、解説書では今回、理由を示さずに「ゑびら」と改訂している。その根拠を推測してみると、源平の生田の森の合戦で源氏軍の若武者梶原景季が梅の枝を箆（ゑびら）にさして奮戦したという故事（謡曲『箆』<sup>ゑびら</sup>など）を踏まえた詩句だと見たからであろう。その場合、たしかに「ゑびら」とした方がびったりするかもしれないが、「そびら」とは「背平」で「せなか」のことであり、「そびらの梅」（背中にさした梅）が誤りだとは断定できない。（なお、「ゑびら」は、正しくは「えびら」と表記する。）

【解説】「長夜の眠」——《言及なし。》

【私見】「長夜の眠」——「長夜」（<sup>ちやうや</sup>）は仏教語であり、人間が煩惱によって無明の闇から抜け出せないことを長い夜にたとえていう語。



47 第十五回紀念祭寮歌『春繚爛の花霞』（明38 西寮／佐瀬武雄 作詞、大島 廣 作曲）

一 「春繚爛の花霞

彌生が岡の岡の上に

自治の女神が飲みづかひし

伏すや猛虎の夢更けて

塵寰低く眺めたる

六つの薨のたたずまひ

二 「花に生れて花にほひ

碎けて水の白銀や」

ここでは、「今こそ我々は、長い迷いの夢から覚めて奮起すべき時だ」と言っている。

▼ 「長夜の闇くろきをば、法華経のみこそ照らい給へ」《梁塵秘抄》

▼ 「女人の悪によしき身を受け、長夜の闇くろに惑まよふは」《源氏・夕霧》

▼ 「惟見おもれば、大恩教主の秋の月は、涅槃ねはんの雲うに隠れ、生死長夜の長き

夢ゆめの、驚かすべき人もなし」《謡曲『安宅』、歌舞伎『勸進帳』

【解説】「伏すや猛虎の夢更けて」——《言及なし》

【私見】「伏すや猛虎の夢更けて」——四字熟語の「猛虎伏草」（もうこくさ

にふす）は、英雄は一時雌伏することがあっても、やがて立ちあがること

の喩え。李白の詩『魯郡堯詞送張十四游河北』に、「猛虎の尺草せひのせに伏す、

藏かくると雖も身を蔽かひ難し」とあるのが典拠である。

【解説】「花にほひ」——花が美しく咲くこと。

【私見】「花に生れて花にほひ」——明治の詩人吉野臥城の「花の歌」（明治

32年）の次の詩句からヒントを得たのであろう。「花にほひ」は解説通り。

三「西碧落の空遠く

王師一度旗振れば

嵐を起す鷺の羽も

吹雪にみだる血の香や

鐵嶺落ちて梓弓

ハルピン遠く今ぞ引く」

四「うたげ半の草薙

劍を取りて我舞へば

健兒の風に花ぞ散る

武香が岡の夕まぐれ

▼1 「花にかゝりて花に多み／雨にひらきて雨にちる……」

2 「花になびきて花に消え／雲にかをりて雲にちる……」

【解説】「鐵嶺落ちて梓弓／ハルピン遠く今ぞ引く」——「鐵嶺」は中国遼寧省北東部の都市。「梓弓」は「張る」の連想でハルピンの枕詞になると同時に、次句の「引く」は「梓弓」の縁語。「ハルピン遠く今ぞ引く」は、ハルピンからロシア軍が遠く撤退したこと。

【私見】「鐵嶺落ちて梓弓／ハルピン遠く今ぞ引く」——日本軍が鐵嶺を占領したのは明治38年3月16日で、3月1日の記念祭の時点ではまだ「落ちて」はいないから、予測ないしは期待の表現であろう。

「梓弓」は「ハルピン」と「今ぞ引く」にかかる。「今ぞ引く」は「梓弓を引く」のだから、ロシア軍の撤退をさすのではなく、鐵嶺よりさらに遠いハルピンをさあ攻撃しよう、との意をあらわしていると解する。

【解説】「偲ぐにも偲ぐに餘る花の雪」——《言及なし》。

【私見】「偲ぐにも偲ぐに餘る花の雪」——次の詩を踏まえたものか。

▼「あゆみは重し愁ひつゝ／岸辺を行きて吾宿の／  
今のありさま忍ぐにも／忍ぐにあまる宿世かな」

王師百萬偲ぶにも  
偲ぶに餘る花の雪ゆき

五「紫句むらさきふ朝靄あさに」

こもる秋津の島がくれ

青黛あざわかつ練絹ねんきぬの

萬朶まんたの薔薇ばいばい富士が嶺ねや

銀箭ぎんせん走る諸嬖しよへいに

自治の歩みの裾すそさばきさばき」

【解説】「秋津の島がくれ」——「秋津の島」は日本国。それに「島がくれ」

を掛け、舞を舞う人の姿が朝靄にかくれていくことを表すが、修辭的な技巧に留まっている。

「青黛わかつ」——「青黛」は青いまゆずみ、またそれでかいた美しい眉。それぞれに美しい眉をした若者たちのさまを表している。

「練絹」——練って柔らかにした絹。 「萬朶」——たくさんの枝。

「銀箭走る諸嬖に」——前句「富士が嶺」が呼び起こす白雪におおわれた銀嶺のイメージに合わせて、舞を舞う若者がはいている練絹の袴の裾が、銀の矢のように輝いて見える、という意であろう。

【私見】第五節について「解説」では、前節の「劔を取りて我舞へば」を受けたものと解し、すべて「舞を舞う若者」の描写として捉えている。

しかし、①前節が記念祭の夕べの情景をうたっているのに対し、第五節は「紫句むらさきふ朝靄あさに」とあるように、朝の情景であること、②さらには第一

節の「自治の女神」との関連で、「自治の歩みの裾すそさばきさばき」は女性のイメージを示すものと解する方が素直なこと、などからみて、第五節は「記念

48 第十五回紀念祭寮歌 『平沙の北に』(明38 南寮／青木得三 作詞、大島正滿 作曲)

一 「平沙の北に吹雪して

猛士十萬春寒く

胡笳の音亂る沙河の陣」

祭の夕べの若者の舞」とは異なるものであろう。

この節の「青黛わかつ」、「練絹」、「萬朶の薔薇」、「銀箭走る」、「裾さばき」等の表現は、いずれも曙を迎えた富士山の情景をイメージしたもので、はじめのうち朝靄に包まれてよく見えなかった富士山が、陽が昇り薔薇色の光がさすとともに次第にその姿をあらわし、山肌の色や山景が変化してゆくさまを、自治の女神の歩み(＝高の自治の軌跡)になぞらえてうたったものと解したい。

【解説】「平沙の北に」——「平沙」は平らかな砂原。

【私見】「平沙の北に」——小杉未醒(放庵)《報知新聞記者として渡鮮し、

明治37年9月まで日露戦争に従軍》の詩集『陣中詩編』(明37/11出版)

に掲載された『朝鮮を去るの歌』と題する詩は次の詩句ではじまる。

▼「平沙の北に吹雪して／蛤良山 雲の色凄し」

「猛士十萬春寒く／胡笳の音亂る沙河の陣」——土井晚翠の「萬里長

城の歌」に、「守るは猛士二十萬／漠のこなたは胡笳絶えて」とある。

作詞者はこの寮歌の第一節、第二節及び第三節に土井晚翠の「萬里長城

の歌」の詩句を踏まえた表現をちりばめている。このことについては、筆者が『寮歌研究報告 No.1 (平成14年8月)』及び『銀杏(東京銀杏会会報) 第四号』(平成15年12月)にくわしく報告したところである。なお、作詞者が晩翠の「萬里長城の歌」を下敷きにしたことについては、解説書も【註】で同様の指摘をしている。

【解説】「沙河」——遼寧省を流れる河。日露戦争において明治37年(一九〇四年)10月に、いわゆる沙河の会戦が行われた。

【私見】「沙河の陣」——沙河の会戦は十月初めから十月下旬に行なわれたが、決着がつかなかった。日本軍は国力不足のため追撃ができず露軍は沙河付近に踏みとどまったことから、日露両軍は沙河で対陣したまま越冬せざるを得なくなった。したがって「沙河の陣」とは「沙河の会戦」のみをさすのではなく、数ヶ月にわたる「沙河の対陣」をさしていると見るべきである。そう解してこそ「吹雪して」とか「春寒く」の意味が理解できよう。

【注】沙河の会戦における両軍の兵力

日本軍 十二万 八〇〇人(猛士十万人これをさすか)  
露軍 二十二万 一六〇〇人

【解説】「南印度の蒼浪に／襟糧敵をむかふとき」——《言及なし。》

鑾幢敵をむかふとき  
今歳十五の春來る」

二「嗚呼歳ふりぬ人去りぬ

維新の氣魄跡もなく  
華奢の風のみ荒ぶるとき  
尚武の色に染められて

層樓苔に今青む

六寮のかげ尊しや」

三「勝ちて驕りて敗れては

聲を潜むる世の慣ひ  
姦邪の風を外にして  
獨り邊土に十五歳

【私見】「南印度の蒼浪に／鑾幢敵をむかふとき」——日本の艦隊が南印度の洋上でロシアのバルチック艦隊を迎え撃つという局面はなく、実際には日本海海戦で初めて遭遇している。従つてここでは、印度洋における両者の対戦を仮定し、いわば仮想現実（バーチャル・リアリティ）として表現したものであろう。なお、記念祭の時点では、先発したバルチック艦隊の主力はまだマダガスカル島に停泊中であつた。

【私見】前節で述べたように晚翠の「萬里長城の歌」を踏まえた表現が続く。

「嗚呼歳ふりぬ人去りぬ」——▼「嗚呼跡ふりぬ人去りぬ、歳は流れぬ」

「尚武の色に染められて」——▼「歴史の色に染められし」

「層樓苔に今青む」——▼「残壘苔に今青む」

「六寮のかげ尊しや」——▼「長城の影尊しや」

【解説】「勝ちて驕りて敗れては聲を潜むる世の慣ひ」——言及なし。

【私見】「勝ちて驕りて敗れては聲を潜むる世の慣ひ」——明治29年5月23日、第一回の一高野球部対横浜外人チームの国際試合で29 A—4で大勝利を収め、前二高校長の木下廣次京大総長に打電して勝を報じたと

稜々高く天を衝く  
男兒の意氣よ嗚呼絶えず」

ころ、早速左の如き返信があつたことを踏まえる《井下登喜男氏（一高26  
文丙）の「教示による》。

「ベースボール国際試合に大捷を得たる由の電報、唯今読了。遂に積年の御志望を遂げられ、大慶至極と存じ候。予は猶諸君に望む。

一、臨戦尚不失礼、勝而不慢、敗而不挫は日本武士道の本意にして、  
第一高等学校の夙に特色とする所なることを

二、吾人少壮青年者は独り技術の点のみならず、知識の点に於ても同  
じく光輝ある全勝を博するの責務あるを記憶されんことを」

《向陵誌》・「一高応援団史」84頁（一高同窓会発行）

【私見】第一節と同様に、第三節でも晩翠の「万里長城の歌」を踏まえた表  
現が続く。

「獨り邊土に十五歳」——「獨り邊土に影絶えず、齡重ねて二千歳」

「男兒の意氣よ嗚呼絶えず」——  
「邊土に立てる長城の連雲の影あ絶えず」

四「墨水の花散りてより

胸に漲る男兒の血

氷刀腰に夜啼いて

【解説】「ことし十五の春の空／多年の希望遂に成る」——《言及なし》

【私見】「ことし十五の春の空／多年の希望遂に成る」——「墨水の花散りて

より……蒼龍あはれ雲待ちき」といっているのだから、この節は、一高端

蒼龍あはれ雲待ちちき  
ことし十五の春の空  
多年の希望のぞみ遂に成る

49 第十五回記念祭寮歌『香雲深く』(明38 北寮／近藤有曾 作詞、鈴木充形 作曲)

一一「祝ふ装盡したる  
花爛漫の曙を  
狂風一陣吹き荒すばぶ  
落花悲傷の調や何處  
守りも堅し自治の城  
いざや歌はむ諸共に」

艇部が明治32年に行われた第六回対高商ボートレースを最後に 対外試合を禁止され、脾肉の嘆をかこつてきたことを指し、第十五回の記念祭を迎えるこの年の春に、対外試合解禁という「多年の望み」が実現することを期待し、ここでも仮想現実(バーチャル・リアリティ)として歌つたものと解する。【実際に実現したのは、大正9年】

因みに『対三高戦全勝歌』の第一節の場合は、待望の「四部全勝」が実現した喜びの表現としてこの詩句を用いている。

▼「見よ大旗の指すところ／多年の望遂に成る」

《330 『対三高戦四部全勝歌』昭9 佐藤竹雄》

【解説】「狂風一陣……」—— 個人主義的風潮により伝統的校風に乱脈が生じたことを指すか。花を吹き散らす風が吹きすさぶように、そうした風潮が現れて悲傷の感をも与えるが、それもやがて自治の堅い守りによつていずこかへ吹き消されてしまふだろう、の意に解される。

【私見】「狂風一陣」—— 右の解説と同様、個人主義的風潮を指すと考える。「落花悲傷の調」—— 「落花」は前々年の明治36年5月に起きた藤村操



50 第十五回記念祭寮歌『春長江の』（明38 中寮／山本倍三 作詞）

三「胡地にのり入る一千騎  
太刀に冴あり十五年」

の自死事件を含蓄し、「悲傷の調」は、彼の死を悲しみ悼む一高生の心情を指している」と解する。こうした状況を自治の城の堅い守り（＝籠城主義の堅持）によって克服しようと呼びかけているのではないか。

一高生にとって大事件であったはずの藤村操の自死を反映した一高寮歌がないのは謎だと従来いわれてきたが、筆者としては、本寮歌がその実例だと考えたい。

なお、事件の翌年の寮歌に反映されなかった事情を筆者なりに推測すれば、日露間の情勢が緊迫し開戦に至ったこと、藤村が個人主義グループに近かったのに対し、寮歌の作詞者たちはアンチ個人主義の立場に立っていたこと、藤村の死の持つ深い意味が把握されるには、なお幾許かの時間的経過が必要であったこと（酒井修氏「高昭22文の指摘」等）があげられよう。

【解説】「胡地」——未開の土地。ここでは日露戦争の戦場となった土地をさすのであろうが、「一高健兒一千騎の乗り入れ」は詩的誇張に過ぎない。

【私見】「胡地にのり入る一千騎」——次の新体詩を踏まえた表現であろう。

▼「一里半なり一里半／並びて進む一里半／死地に乗り入る六百騎」

51 第十五回紀念祭寮歌『向ヶ岡に冬籠る』（明 38 朶寮）

三「幾歳しげく霜おきし

偷安の夢暖かに

守舊の水とぎしたる

池中の魚を羨みし」

【解説】「池中の魚を羨みし」——「池中の魚」は、「池魚の殃」といつて、池の魚が不慮の禍に遭うことをいうのが普通だが、ここは池中の魚が目前の安樂のみを追い求める意に用いている。

【私見】「池中の魚を羨みし」——「漢書」董仲舒伝に、「淵に臨んで魚を羨むは、退いて網を結ぶに如かず（淵に臨んで空しく魚を羨んでいるよりは、退いて網を結んで魚をとる方法を講じた方がよかるう）」とある。希望だけに明け暮れているよりは、自ら実行に移すがよい、という戒め。

なお、孟浩然の「臨洞庭上張丞相」という詩に「坐に釣りを垂るる者を觀ては、魚を羨むの情有り」とあり、ここにいう「魚を羨むの情」という表現も、「魚をほしがる気持」すなわち「官職を求める気持」をいうとされる。こうしたことから、解説書の指摘する「池魚の殃」という熟語は、この寮歌の詩句とは無関係だと考えられる。

52 第十五回紀念祭寄贈歌『比叡の山の石だたみ』（明 38 京大／平野正朝 作詞）

三 「それ香はしき江南の

花橋もうつらふや

胡沙吹く嵐江北に

枳となる慣あり

遠く離れて柏木の

堅き心よとこしへに

【解説】「江南の花橋もうつらふや 江北に枳となる慣あり」――

「晏子」(雑下)、「爾雅翼」に「江南種<sup>ニラウレバ</sup>橘<sup>ヲ</sup> 江北<sup>ニハル</sup>為<sup>レ</sup>枳<sup>ト</sup>」(暖かい淮

南地方産の橘を寒い淮北地方に移植すると、その樹は枳(からたち)に変わるの意)とあり、環境・境遇によって性質の変わることを喩え。「うつらふ」は「うつろふ」の誤。

【私見】「解説書」による右の説明について、若干の補足をしておきたい。

「解説書」の引く『晏子』(雑下)は『晏子春秋』(雑下)のこと。内容も『晏子春秋』では「江南」「江北」ではなく「淮南」「淮北」とある。

また「解説書」は、「爾雅翼」(中国の古い字書の注釈書)に「江南種橘、江北為枳」とあるとしてこれを引くが、康熙字典の現行の版では、「爾雅翼」の記述については、「江南為橘、江北為枳」と記載されている。この故事は、「江南橘化為枳」、「南橘北枳」等の成語で知られるが、代表的な典故とされるのは『晏子春秋』(雑下)の次の記述である。

▼「嬰聞<sup>ク</sup>レ之<sup>ヲ</sup>、橘<sup>ズレバ</sup> 生<sup>ニ</sup>淮南<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>為<sup>レ</sup>橘<sup>ト</sup>、生<sup>ニ</sup>淮北<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>為<sup>レ</sup>枳<sup>ト</sup>。葉徒相<sup>ハタダ</sup> 似<sup>テ</sup>、其<sup>ノ</sup>実<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup> 同<sup>シ</sup>。所<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>然<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>何<sup>ゾ</sup>。水<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>異<sup>ナ</sup>也<sup>ナリ</sup>。」

(斉の名宰相の晏子が楚に使いしたとき、斉人が楚で盗みを働いたと嘲笑した楚王に対し、淮南の橘も淮北に移すと枳になるとの喩えを

引き、楚の水と土がそうさせたのだと巧みにかわしたという故事。）

この外の書物の記述も参照すると、「江南・江北」と「淮南・淮北」との二通りがあり、各々がどの地域を指すのかについては説が分かれる。

▼「橘踰<sup>こ</sup>淮<sup>スエテ</sup>而<sup>ヲ</sup>北<sup>ス</sup>為<sup>ル</sup>枳<sup>ト</sup>。此地氣<sup>レ</sup>然<sup>シカスル</sup>也。」《周礼》考工記、総目》

▼「橘樹<sup>ウレバ</sup>ニ<sup>ヲ</sup>之<sup>ニ</sup>江北<sup>ニ</sup>則<sup>チシテ</sup>化<sup>ス</sup>而<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>枳<sup>ト</sup>」《淮南子》原道訓》

▼「(江南之樹) 名<sup>ニ</sup>レ橘<sup>ト</sup>。樹<sup>ウレバ</sup>ニ<sup>ヲ</sup>之<sup>ニ</sup>江北<sup>ニ</sup>則<sup>チシテ</sup>化<sup>ス</sup>而<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>枳<sup>ト</sup>。」《韓詩外伝》

なお、橘(ミカン属)と枳(カラタチ属)はどちらもミカン科だが、「橘」が美味であるのに対し、「枳」は食用に適さず、鋭い刺に特徴がある。

「うつらふ」——ここでは、場所を変える、移転するの意。解説は

「うつらふ」の誤りとするが、古語辞典によれば「うつらふ」は「うつらふ」の転であって、その「うつらふ」という語が現存の文献の中には存在しないのだ、と説明している《ベネッセ古語辞典》。

「胡沙吹く風」——諸橋大漢和には「胡沙」とは「中国塞外の胡国の砂漠、またその砂塵」とある。一高寮歌には「胡沙吹く風」という表現がよく出てくるが、半井桃水の小説『胡沙吹く風』(明26)の影響か。

〔余説〕作詞者の平野正朝は二高野球部の名一塁手として活躍したが、京大在学中には三高野球部の練習に参加し指導していた。この寄贈歌の翌年

の第一回一高・三高戦の際には、三高の稲垣選手が右中間に大飛球を打つ傾向があるので用心するようにと、平野が一高の中野主将にあらかじめ伝えておいたところ、最終回三高の逆転の好機にその稲垣が右中間に放った快打を、平野の忠告どおりセンター寄りに守っていた加福右翼手が好捕し、一高が5対4で辛くも逃げ切った。その話を伝え聞いた三高の木下選手は、やっぱり平野は一高の先輩なんだなと思ったという。【三高同窓会誌『神陵』昭和46年第4号所載の対談〈君島一郎(明41一高) vs 木下道雄(明41三高)〉——君島一郎著『日本野球創世記』に転載されたもの——による。】

この寄贈歌の歌詞になぞらえるならば、「江南の橋たぢはな(一高の平野)は、江北かうぺい(京都)に移っても枳かいつ(三高側)にはならなかった(≡遠く離れて柏木の堅き心よとこしへに)ということになるうか。

53 第十五回記念祭寄贈歌 『紫淡き春霞』(明38 福岡大)

54 第十五回記念祭寄贈歌 『武香が岡に春たけて』(明38 / 小笠原壬午郎 作詞作曲)

55 第十六回記念祭祭歌 『群り猛る』(明39 東寮 / 深見秋太郎 作詞、加福均三 作曲)

四 「籬を払へば橄欖の

薫を送る我旗風に

見ずや紅葩の散りまがふ」

【解説】「見ずや紅葩の散りまがふ」——「紅葩」（こうは）は赤い花びら。

【私見】「見ずや紅葩の散りまがふ」——「紅葩」は高等商業の赤い旗。

《41『亜細亜の東蒼溟の』（明37）の私見参照。》

56 第十六回紀念祭寮歌『太平洋の』（明39 西寮／黒田朋信 作詞、沢村寅二郎 作曲）

一 「太平洋のなみの穂に

たなびく雲やこ紫

さへり金に輝けば

くれなる薄き空の色

星かげ淡く風なきて

春の日今し明けてゆく」

【解説】本寮歌は、一高寮歌全三百数十曲の中でも指折りの名曲として、今日

まで唱い続けられて来た。ただし第二節は表現が概念的に過ぎて、歌唱に

適したすぐれた言葉の音楽性という点では第一節に及ばなかったため、現

在でも同窓会等の集まりで好んで歌われるのは第一節だけである（当然な

がら、第二節は中国留学生には評判が悪かった）。

【私見】従来第二節があまり歌われなかったのは事実であるが、近年では、春

秋の一高寮歌祭（玉杯会）などのように、第一節だけでなく全曲を通して

歌うことは珍しくない。

あけゆく方や我舟の

憧憬れ進む島ぞこれ

みどりしたゝる柏葉は

岸にしげりて橄欖の

【解説】「あけゆく方や……鳥の声高し」——自治寮十六年の歴史の進行を、

憧憬れの島へ向けての大洋の航海になぞらえた、比喩的表現の巧妙さと適切

さには卓抜なものがある。

【私見】「あけゆく方や……鳥の声高し」——一高のあるべき理想の姿を憧れ

實は美しう星のごと  
うたふや鳥の声高し」

十六年のこしかたを

顧みすれば光榮のあと

黒雲しばし湧きいでて

やみの汐路にたゞよひぬ

今あかつきの光得て

梶とる舟夫の眉あがる」

の島になぞらえたものと解する。同様の発想は、すでに27『大空ひたす』

(明35南寮寮歌)第二節《次行以下を参照》に見られる。

▼「南溟のはて靈地あり 山は秀でて水清く

野には橄欖實を結び 森にはレモン花開き

清松白沙紫を湛へ 長汀曲浦風かをる」

【解説】「顧みすれば光榮のあと」——《言及なし。》

【私見】「顧みすれば光榮のあと」——「高寄宿寮の過去十六年の栄光の歴史、

特に野球部など運動部が天下に覇を唱えてきたことを指す。

【解説】「黒雲しばし湧きいでて」——「どのような史実を踏まえた表現なのか

不明。魚住影雄の提唱した「寄宿制度反対論」をめぐる、内紛ともいえ

る論争事件を指すかとも思われるが、確かではない。

【私見】「黒雲しばし湧きいでて」——「黒雲」が何を指すかについては、甲

論乙駁があるものの、定説とされるものは見当たらない。私見では、運動

界における覇権こそが一高の校風なりとする風潮の中で、明治37年6月

に対早稲田・慶応の野球試合に相次いで敗れたため、一高の校風地に落ち

たりと悲観する傾向を生じたことをさすと解する。このことは、次項に述

べる「今あかつきの光得て」の解釈と密接不可分の関係にある。

二「花ちりかゝる陵の上  
今宵護國の旗かげに  
紀念の祭いはんと  
歌へば健兒胸のうち  
わきくる望大洋の

【解説】「今あかつきの光得て」——《言及なし》。

【私見】「今あかつきの光得て」——校風論者と個人主義者との校風論争が  
続く中、折衷論者の鶴見祐輔は、『二高校友会雑誌』第151号11—17ペー  
ジ（明治38年11月）において、運動部が二、三の対外試合に負けたから  
と、いつて運動部に悲観する必要はなく、今や陸上運動部及び野球部などの  
運動部を通して人格中心主義による校風刷新の「麗しき曙光」が揚がるう  
として、に期待しようと言っているのである、と主張した。

《宮坂広作『近代日本の青年における批判的知性の形成』（明治三十年代  
の一高校風論争を中心に） p.187、山梨学院大学法学論集1999》  
本寮歌の作詞者黒田朋信（明40仏法）は、鶴見祐輔（明39英法）の一年  
後輩であり、鶴見の論の支持者として「麗しき曙光」||「あかつきの光」  
に期待しようと言っているのである。

【解説】「わきくる望大洋の／かの曙に似たるかな」——《言及なし》。

【私見】「わきくる望大洋の／かの曙に似たるかな」——第一節末の「今あか  
つきの光得て 梶とる舟夫の眉あがる」を踏まえて、校風刷新の「麗しき  
曙光」に対する一高健兒の期待を、第一節冒頭に歌われている太平洋の朝  
に喩えて表現したものと解する。なおここで、「大洋」とあるのは「太平



かの曙に似たるかな」

北樺太の雪の原

西大連の灣頭に

朝日の御旗かげ清く

領土は南北三千里

あゝ我が大和民族の理想の一步茲に成る」

「洋」を指している。

【解説】「朝日の御旗」「領土は南北三千里」「大和民族の理想」——言及なし。

【私見】「朝日の御旗」——日章旗（日の丸）のこと。

旧陸軍の軍旗（日章が旗の中心にある）や旧海軍の軍艦旗（日章が旗の左辺寄り）のような「十六条旭日旗」も朝日をデザインしたものはあるが、これらは「朝日の御旗」とはいわれない。明治期の唱歌や軍歌にしばしば登場する「朝日の御旗」はいずれも日章旗を指す。

▼『進めや子供』（明治唱歌第二集、大和田建樹作詞、西洋曲、明治21年）  
三「世界をてらす朝日の御旗」

「ころにたてゝ進めや子供」

「領土は南北三千里」——日清・日露戦争の成果として、北は千島・樺太南部から南は台湾に至る地域が日本領土となったが、「三千里」一万余には遠く及ばない。この場合の三千里は、漢詩の作法において、声調（平仄）と発音の滑らかさから来ているもので、数値そのものにあまり意味はなく、龐大なことを意味し（例、白髮三千丈）、三千里は広大で遙かな領土を指す。

▼「四十年來家國、三千里地山河」『破陣子』南唐・李煜

〔南唐建国から滅亡までの〕四十年來の国家よ、(注：南唐は937～975年)  
〔わが祖国である南唐の〕廣大で遙かな山河よ。

▼「三千里」という表現は、二年前の寮歌にも登場している。

「東亜の天地三千里／健兒飛躍の舞台ぞや」(42『都の空に』明37)。  
「大和民族の理想の一步茲に成る」——「大和民族の理想」とは何のことか。難解だが、本寮歌全体の文脈から判断して、日本書紀の神武建国の条に記された「掩八紘而為宇」(＝「八紘為宇」という理想を意味しているものと解する。「八紘為宇」とは、本来、「世界を一つの家のように睦まじいものにする」という趣旨であり、後の第二次大戦中に大東亜共栄圏建設のスローガンとして侵略の正当化に使われた「八紘一宇」という言葉とはニュアンスが異なる。

東亜の覇業誰が事ぞ

五億の民を救はんと

大和民族たゝむとき

歴史を永久に飾るべく

向が陵の高き名を

擧げよや自治の健男兒

【解説】「東亜の覇業」「五億の民を救はんと」——(言及なし)。

【私見】「東亜の覇業」「五億の民を救はんと」——日本近代史上におけるアジア主義、すなわち西洋列強の抑圧に抗して、日本を盟主にアジアの結集を訴えるという思想的傾向を反映したものであり、ただちに侵略主義、膨張主義の立場を意味するものではない。「五億の民」(中国、朝鮮半島など東亜に住む人々)を「救はんとするものもそのことを裏付けている。宮崎

57 第十六回紀念祭寮歌『霞かぎれる』（明39南寮／佐藤莊一郎作詞、杉浦忠雄作曲）

一 「都の春の櫻花

ちりのまがひに

永き日を

武香が陵の若き兒が

つとひ興がる歌の聲

滔天らによる孫文に対する支援活動も同様である。

なお、井上司朗氏（一高大13文乙）の『「高寮歌私観」では第二節について、「東亜の覇業とは東亜五億の民を白人の暴庄から解放するに在りとするアジアナショナルリズムの虹の如き気魄の歌となり、そこに当時の国民の旺んな意気そのものが海鳴の響きを伝える」と評している。

▼「アジア主義」については諸説あるが、ここでは平石直昭『近代日本の「アジア主義」』《溝口雄三ほか編『アジアから考える（5）近代化像』東京大学出版会、1994年、265〜267ページ》を参考にした。

【解説】「ちりのまがひに」——用例として次の歌を引く。

▼「もみぢ葉の散りのまがひは今日にもあるかも」《万葉集15三七〇〇》

【私見】「ちりのまがひに」——「櫻花ちりのまがひに」とあるので、万葉

集の歌よりは、次の古今集の歌の方がこの寮歌の典拠にふさわしい。

▼「この里にたびねしぬべし櫻花 ちりのまがひに家路忘れて」  
（ちりのまがひ＝しきりに散り亂れること。）

二「いづこをさして

分け入らむ

たづきも知らぬ武蔵野の  
おどろとまがふ濁り世に

六「早瀬とたぎつ胸の血に

そことしもなき

身のうづき

あふるゝ意氣を「ふしの  
歌のしらべ」にことよせて

手を取り合す武士の

中たのみある記念祭

【解説】「たづきも知らぬ武蔵野の」——「たづき」は手だての意。

▼「草枕旅にしあれば 思ひ遣るたづきを知らに」(『万葉集1・5』)

【私見】「たづきも知らぬ武蔵野の」——例として引くのなら、情景からみて、古今集の次の歌の方が適切ではなからうか。

▼「をちこちのたづきも知らぬ山中に おぼつかなくも呼子鳥かな」

【解説】(『第六節』については、全く触れていない。)

【私見】「ふしの歌のしらべ」——寮歌の一節を指すとしても、特定することは難しい。次に掲げる謡曲『羅生門』の中の小謡を指すと解する。

「手を取り合す」——「手を取り合う」と同じで、「共通の喜び、悲しみなどに駆られて互いの手を握る」という意味である。

「武士の中たのみある」——謡曲『羅生門』において源頼光が渡辺等の武士を集め、酒を勧めて話を聞く場面の小謡に、次のようにある。

▼「伴ひ語らふ諸人に、御酒を勧めて盃を、とりどりなれや梓弓、やたけ心の一つなる、つはものの交はり頼みある中の酒宴かな。」

(勇猛な武士同士の交わりは誠に頼もしいことだ。そうした信頼し合う仲の酒宴の楽しさよ。)(『日本古典文学大系・謡曲集下(岩波書店)』による)

\*「中」は「仲」に同じ。「頼みある」は「頼もしら」と「信頼し合う」

58 第十六回紀念祭寮歌『波は逆巻き』(明39 北寮／水野武太郎 作詞、石川鐵雄 作曲)

一 「波は逆巻き風あれて

迅雷金蛇を激したる

水門入江に夜は明けて

平和の光東ひんがしの

空にあがれば文明の

花こそ香へ秋津洲」

とをかけた表現とされる。

\*軍歌『霧淡晴の』第十二節の歌詞は、明らかにこの寮歌の第六節からのバクリであらう。

▼ 「早瀬とたぎつ胸の血に 底としもなき身のうづき

溢るる意氣を一節の 歌の調べに言よせて

手を取りかはす武夫の 頬は熱して涙湧く」《軍歌『霧淡晴の』

【解説】 第一節は日露戦争勝利のうちに平和が訪れたことを嘉している。

「波は逆巻き風あれて」——《言及なし。》

【私見】 「波は逆巻き風あれて」——用例として次の讚美歌がある。

▼ 「なみはさかまきかぜふきあれて あやふきときもこの身をまもり」

《新撰讚美歌 152 (明23)》

【解説】 「文明の花こそ香へ秋津洲」——《言及なし。》

【私見】 「文明の花こそ香へ秋津洲」——日清戦争を「文明と野蛮の戦争」と

意味つけたのが福沢諭吉であったとすれば、日露戦争に関していえば、「口

シアは文明の敵」と指摘した吉野作造がそれと同じ役割を果たしたとされ

二「萬骨あだに遼東の

幽鬼となりにし戦も

いまはた誰を咎むべき

臥薪嘗膽また更に

十年待つ間の平和かな

平和よさらば春の夢

る『加藤陽子』戦争の日本近現代史』講談社現代新書。第一節では、文明の敵であるロシアが敗れ、日本が勝利したことによって日本では「文明の花」がさらに香ると歌っている。

【解説】「萬骨あだに遼東の／幽鬼となりにし戦も」——日露戦争で、遼東半島の旅順、特に二百三高地の戦いで、乃木大将の率いる日本軍が苦戦し、二万数千人の戦死者を出したことを踏まえている。「あだに」は「いたずらに」「空しく」の意。

【私見】「萬骨あだに遼東の／幽鬼となりにし戦も」——旅順の戦いで多くの戦死者を出したことを踏まえているのはその通りだが、なぜ「あだに」とされているのか考えてみたい。日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）で日本は、南満洲の鉄道及び領地の租借権、朝鮮に対する排他的指導権などを獲得したものの、莫大な軍事を埋め合わせるはずの戦争賠償金は獲得できなかったため、戦時中に増税による耐乏生活を強いられてきた国民の期待を大きく裏切る結果となった。このため、あんなに多くの犠牲者を出しながら、これでは無駄死に（Ⅱ）「あだに幽鬼となりにし」ではないかとの声が高まり、日比谷焼き討ち事件などの暴動につながった。

【解説】「いまはた誰を咎むべき」——二百三高地攻略のため多数の犠牲者を

出したことへの批判攻撃が乃木大将に浴びせられたことが含みとして踏まえられた表現であろう。

【私見】「いまはた誰を咎むべき」——乃木大将に対する批判も当然含まれるであろうが、ここでは日露戦争の開戦から戦争遂行、講和条約に至る関係者全体について言っていると解する。この寮歌が発表されたのは講和条約締結から半年を経て、世論も沈静化してきた時期にあたるのであろう。

【解説】「臥薪嘗膽また更に／十年待つ間の平和かな」——（日清戦争後の三国干渉による遼東半島還付が「臥薪嘗膽」の故事に喩えられたことを踏まえて）三国干渉により我々が嘗めさせられた十年間の苦しみは、日露戦争の勝利で解消し、平和が訪れたが、同じような状況は、今後十年間にまた繰り返されるかもしれない、という意であろう。

【私見】「臥薪嘗膽また更に／十年待つ間の平和かな」——解説は、「臥薪嘗胆」の十年間の苦しみは、日露戦争の勝利で解消したとしている。が、そうではなく、講和の成果が不十分だったため苦しみはまだ続いており、だからこそ「また更に」十年くらい待って新たな戦争を経なければ解消できず、それまでは、仮の平和にすぎないという意を述べたものであろう。

59 第十六回紀念祭寮歌『あゝ渾沌の』(明39中寮／栗原武一郎作詞、大島 廣作曲)

一「聞くや忽ち孤々の聲

こゝ渤海の東に

見よや層樓雲をつく

武香陵頭自治の城」

六「桂冠さゝげ颯爽の

英姿二千こゝにあり」

【解説】「孤々の聲」——《言及なし。》

【私見】「孤々の聲」——「呱呱の聲」の誤植であろう。「呱」は乳児の泣き声  
向陵の地に自治寮が誕生した当時のことを歌つたものと解する。

▼「花は集り水凝りて／雄々しき呱呱の声挙る」《79『霞薫する』明41》  
【解説】「颯爽の英姿」——《言及なし。》

【私見】「颯爽の英姿」——「颯爽」という熟語を作つたのは杜甫であり、曹  
覇という画家の描いた絵をほめた詩の中で「英姿颯爽」と使つた(高島  
俊男氏『中国文学者』)。

▼『丹青引贈曹將軍霸』【丹青』彩色した絵。引』歌】

「褒公鄂公毛髮動、英姿颯爽來酣戰」『杜甫』

【曹覇の描いた絵の中の）褒国公・鄂国公のごとき勇將の姿は、  
毛髪も動くかと思われ、その颯爽たる英姿は、今しも激戦の場  
から出てきたかのようにであった。】

高島氏によると、以後「颯爽」の語は今日まで詩人たちに愛用され、だ  
いたい「英姿颯爽」あるいは「颯爽英姿」の形で出てくるという。



▼「颯爽英姿五尺槍、曙光初照演兵場」

《毛沢東が共産党の女民兵を歌った詩。槍＝現代中国語で銃のこと》  
この項、高島俊男氏『お言葉ですが……⑧』によった。

60 第十六回記念祭寮歌『都は春の綾錦』（明39 朶寮／内藤 濯 作詞、山下彬麿 作曲）

一 「都は春の綾錦

濃染の梅は香に薫じ」

【解説】「濃染の梅」——《言及なし》。

【私見】「濃染の梅」——藤村の次の詩を踏まえる。

▼「たえなるはるのいきを吹き／＼ぞめの梅の香にには／＼」《藤村『春』》

【解説】「裳裾を綴る若緑 柳の糸も烟るらむ」——《言及なし》

「裳裾を綴る若緑  
柳の糸も烟るらむ」

【私見】「裳裾を綴る若緑 柳の糸も烟るらむ」——

▼「花と花とをぬふ糸は／＼けさもえいでしあをやなき」《藤村『春』》

61 第十六回記念祭寮贈歌『花の香むせぶ』（明39 京大）

一 「花の香むせぶ城の春

うばら枳かきわけて

萌出し草の一もとに

疆めて不息心根の

【解説】「疆めて不息」——境をはつきりと正し、「萌出し草」をやすます育  
てていくの意。

【私見】「疆めて不息」——「疆」は「さかい、境界」の意であり、【解説】で

はこれによった解釈をとっている。しかし、「疆」は「疆」の誤植である。

根ざしも殊に深ければ  
武夫の蹈みてたどらん  
道は閉ざじ」

「疆」は「強い、つとめる」の意で、「さかい」の意はない。「疆めて息ま  
ず」の出典は易経(乾・象)で、「天行健、君子以自 疆 不レ息」(天の  
運行は健やかで、一刻も休むことがない。君子もそれに則つて、つとめて  
やむことのない努力をしなければならない。)による。「自疆」はみずから  
努力すること。ちなみに岐阜中学(現県立岐阜高校)の校歌(明治45年)  
には「百折不撓疆めて息ます」とあり、これが校訓になっている。

62 第十六回記念祭祭歌『みよしのの』(明39 / 音楽隊作)

63 第十六回記念祭寄贈歌『柏の下葉』(明39 福岡大 / 鳥瀧 碩 作詞、鈴木充形 作曲)

一 「柏の下葉ゆるがせて  
あしたの鐘はひびきたり  
塵まだ浮かぬこのひまに  
はかなき夢をさませとや」

【解説】「塵まだ浮かぬこのひまに」——《言及なし。》

【私見】「塵まだ浮かぬこのひまに」——昔、魯の名音楽家真公が歌うと、梁  
の上の塵まで動いたという故事を踏まえて、「朝の鐘」の靈妙なひびきに  
梁の上の塵がまだ浮いて動かぬうちにめざまめよよと説いている。この作詞  
者は前作『暁がたの』でも「梁塵」を詠っており、解説書でもとりあげて  
いる。

▼「奏つる琵琶の弦の音に…塵をまはせる歌の節」《45 『暁がたの』明37》

64 第十六回記念祭祭歌贈歌『春は櫻花咲く』（明39 東大／青木得三 作詞、北川 泰 作曲）

65 第十七回記念祭祭歌『仇浪騒ぐ』（明40 東寮／岸 巖 作詞、内海磐夫 作曲）

一 「仇浪騒ぐ濁り世の

汚れを永久に宿さじと

春や昔の花の香に

結びおきけん友垣や

十七年の東風吹けば

ゆかしく萌ゆる若緑

【解説】《本寮歌は、一高のみならず旧制高等学校すべてにおける学生生活を

最も特徴づけた、青年期特有の美しさ、尊さを、極めて優れたレトリックを駆使しつつ見事に詠出した寮歌として、極言すれば不朽の価値を有する名歌と言つてよいであろう》とし、和語による情緒的表現の潤いと含蓄に富んだ修辭を絶讃している。

「仇浪騒ぐ濁り世の」——いたずらに音をたてて騒ぐ浪のように濁っている世の中。その汚れを拒否している。

「春や昔の花の香に結び置きけん友垣や」——自治共同の精神と友情で結ばれた寮生集団の成り立ちを表現している。

「十七年の東風吹けばゆかしく萌ゆる若緑」——発足以来十七年を経た自治寮のたたくまいを表現している。

【私見】次の和歌や寮歌を踏まえあるいは参考としたものであろう。

「仇浪騒ぐ」——

▼「そこひなき淵やは騒ぐ山川の 浅き瀬にこそ仇浪は立て」

「濁り世の汚れを永久に宿さじと」——「籠城主義」をさす。

▼「花さくまでは世の塵に たち交らじと冬ふゆもる

梅のこころを心にて いざやしなはむ色も香も」

《2 『雪ゆきふらばふれ』明25 (落合直文)》

「春や昔の花の香に」——

▼「月やあらぬ春や昔の春ならぬ

我が身一つはもとの身にして」《古今集、在原業平》

伊勢物語によれば、右の歌は、梅の花盛りのときの作とされるので、

「花の香」は「梅の花の香」をさすことになろう。これが「十七年の東風吹けば」の詩句につながる。(

▼「梅の花誰が袖ふれしにほひぞと

春や昔の月に問はばや」《新古今集、右衛門督通具》

「結び置きけん友垣や」——垣を結ぶと友情を結ぶをかける。本寮歌と同年の『思ふ昔の濁り行く』中の詩句を参考に挙げる。

▼「高きたかし啓あかしぞ梅の花 花さく迄さきはちりだもいとよ

向陵むかう三とせ千餘人 蕾つぼみに清き友垣の 結びて閉ちて清かりし」

二「野路の村雨晴るゝ間を

しばし木蔭の宿りにも

奇しき縁えだじのありと聞く

同じ柏の下露を

くみて三年の起き臥しに

深きおもひのなからめや」

「十七年の東風吹けばゆかしく萌ゆる若緑」——

▼「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花

あるじなしとて春を忘るな」《拾遺集、菅原真真》

▼『梅の香澄みぬ向陵の丘に若草きざしけり』

《37『春の日背をあたゝめて』明36（音楽隊作）》

【解説】《第二節は、互いに肝胆相照らす深い仲を「同じ柏の下露をくみて三年の……深き思ひのなからめや」と歌っている。》

「野路の村雨晴るゝ間を」——《言及なし》

「奇しき縁えだじのありと聞く」——不思議なつながりがあると聞く。

【私見】「野路の村雨晴るゝ間を」——次の和歌を踏まえる。

▼「急がずは濡れざらましを旅人の

あとより晴るゝ野路の村雨」《暮景集、(伝)太田道灌》

(注)「短慮不成功」の教訓を詠んだ歌と伝えられる。

「晴るゝ間を」——「間」は、「時間的なあいだ」を表わすが、転じて、

「連続して生起する現象中に存在する休止の時間」をいう(例・雨間、風間など)。従って「晴るゝ間」とは「晴れと晴れとの間」または「晴れるまで

の間」をさす。「晴れている間」と解して「雨宿り」との矛盾を指摘する説

は採らない。

▼「なげきつつ独り寝る夜の明くる間は いかにか久しきものとかは知る」

《拾遺集 右大将道綱の母》（小倉百人一首所収）

【明くる間＝明けるまでの間】

「しばし木蔭の宿りにも奇しき縁のありと聞く」——この詩句の典拠と見られる代表的なものを次に挙げる。

▼「行き暮れて木の下陰を宿とせば

花やこよひのあるじならまし」《平家物語 平忠度》

▼「一樹の陰にやどるも、先世の契あさからず、

同じ流れをむすぶも、他生の縁、猶ふかし」《平家物語》

「深きおもひのなからめや」——次の詩を踏まえたか。

▼「短き笛の節の間も 長き思のなからずや」《島崎藤村・『おさよ』》

【解説】第二節では、互いに肝胆相照らす仲が「同じ柏の下露をくみて三年の起き臥しに 深き思ひのなからめや」と歌われ、ついで第三節では「崇き希望の胸と胸 同じ調べに躍るかな」と重ねて歌われ、それらを受けた第四節「友の憂ひに吾は泣き……」において、この友情の極まりと護国の熱情とが、「人生意気に感じては」の一句を介して合体させられている。こ

四「友の憂ひに吾は泣き

吾が喜びに友は舞ふ

人生意気に感じては

たぎる血潮の火と燃えて

染むる護國の旗の色

の構想の妙といいレトリックの的確さといい、卓抜な表現力と言えよう。  
(中略) 作詞者岸巖はこの歌により全寮の注目の的になったといわれ、当時の新渡戸校長は「友情の神髄」と評価し激賞したという。

【私見①】「友の憂ひに吾は泣き 吾が喜びに友は舞ふ」——この寮歌の中核をなす最も有名な詩句であるが、その典拠についてはいまだ定説がないので、できるかぎり調べてみた結果について検討する。

▼「自分と同じだけそれを喜んでくれる人がいないのなら、繁栄の中にあつたとて、どうして大きな喜びがあろうか。まことに、逆境を自分以上に重く身に引き受けてくれる人がなければ、それを耐えるのも難しい。

(キケロ『友情について』、中務哲郎訳、岩波文庫) 26頁 六―22)

▼「友(または友情)は喜びを二倍にし、悲しみを半分にする。」

《キケロの言とされることが多いが、シラーの言とする説、ドイツの古いことわざだとする説等の諸説があり、いずれも典拠がはっきりしない。》

▼「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」

(新約聖書・ローマ人への手紙 12―15)

《使徒パウロがローマ教会の人びとに書き送った愛の実践訓である。》

▼「われわれは自分自身の利害を考慮に入れることなく、他の人々が快

活でいるのを目にすれば歎喜し、涙を流していればその人々とともに泣くという性向をもっている。」《ハチスン『道徳哲学序説』一七四七年刊、田中秀夫・津田耕一訳、京都大学学術出版会 p. 33》

フランシス・ハチスンは十八世紀前半にスコットランドで活躍した啓蒙哲学者であり、引用文に見るように、共喜と共苦の両面から共感 sympathy を与える。これに対し、十九世紀後半のニーチェ（ドイツ）は、同情することとは同情される側を見下してその尊厳を奪うことだととして「共苦 Mitleid」としての同情の美徳を排撃し、「共喜 Mitfreude」による交歓こそ望ましいと唱えた。《東京女子大学・森一郎教授（哲学）による前掲書の書評も参考にさせていただいた。》

▼「苦しみをともしるのでなく、喜びをともしることが友人をつくる。」(Mitfreude, nicht Mitleiden, macht den Freund.)

《フリードリッヒ・ニーチェ『人間的な、あまりにも人間的な』》  
▼「見他人之愁 即自共可患」  
「他人の愁ひを見ては、即ち自ら共に患ふべし。」

聞他人之喜 則自共可悦

「他人の喜びを聞いては、則ち自ら共に悦ぶべし。」



「山高きが故に貴たつとからず。樹有るを以て貴たつとしとす」で始まる『実語教』の中の一文である。『実語教』（作者不詳）は、一行十字、四十八行の漢文に返り点と読み仮名をつけたもので、平安時代末期から明治初期までの数百年間、我が国の初等教育書として広く普及し、日本人の教養の基層をなした。江戸時代には寺子屋の習字本兼修身書として用いられた。

『実語教 絵入訓点』（相亭金山注、明治23年東崖堂刊、国会図書館蔵）等による。右に引いた『実語教』の文章は、①明治期の日本人にとつてもごく身近なものであったと目されること、②「友の憂ひに……」の歌詞とニュアンスがかなりよく似ていること、の二点から、私見としては、最後に挙げた『実語教』を典拠候補の第一順位とし、第二順位には、（作詞者がキリスト教と有縁であったか否かは不明であるが）同じくニュアンスの近い『新約聖書・ローマ人への手紙』を推したいと考える。

【参考1】『柔道部部歌』の作詞で知られる小林俊三氏（明43一高独法、弁護士、最高裁判事）はその著書で、二年先輩の岸巖氏および寮歌『仇浪騒ぐ』について二頁を割いているが、「友の憂ひに……」の典拠については触れるところがない。

▼「寮歌中の傑作『仇浪騒ぐ』は、私らの入学する前、明治四十年の三

#### 四

「友の憂ひに吾は泣き  
吾が喜びに友は舞ふ  
人生意氣に感じては  
たぎる血汐の火と燃えて  
染むる護國の旗の色  
から紅を見ずや君」

【説明の必要上、再掲】

月一日の記念祭に発表されたもので、特に第四節の「友の憂い(ママ)に吾は泣き……」の絶唱は、当時向陵に入ったばかりの二十歳前後の青年たちの心の琴線を揺り動かして止まなかった。」

(小林俊三『わが向陵三年の記』、実業之日本社)

【参考Ⅱ】『友の憂いに吾は泣く―旧制高校物語』(昭58 講談社)は、米国の歴史学者ドナルド・T・ローデン(Donald T. Roden)による著書「*Schooldays in Imperial Japan: A Study in the Culture of a Student Elite*」の邦訳版(森敦・監訳)であるが、邦訳版のタイトルは、旧制高校の精神を代表する言葉として訳者が選んだだけで、本文中でこの歌の解説がされているわけではない。

【私見②】数ある一高寮歌の中でも名寮歌として名高い『仇浪騒ぐ』第四節の「友の憂ひに吾は泣き……」という歌詞が與謝野鐵幹の『人を戀ふる歌』からとったものかという疑問が出され、文字通り「仇浪が騒いだ」という挿話を紹介する。

『向陵』誌第25巻第1号(昭58・4)に吉岡千代三氏(一高昭6文甲)が寄せた、『寮歌「仇浪騒ぐ」』についての疑問」と題する一文が事の始まりである。

「人を戀ふる歌」（與謝野鐵幹）

『寮歌は生きてゐる』

（昭和47年版）所載

17 「友の憂ひに吾は泣き

吾が喜びに友は舞ふ

人生意氣に感じては

共に沈まん薩摩瀉」

18 「アネモネ咲けば胸躍り

バラ落つれば憂ひあり

あゝ我ヴェルセルに

あらずとも

紅の戀なからめや」

19 「乙女戀さば一筋に

吉岡氏の疑問は、『寮歌は生きてゐる』に掲載された與謝野鐵幹の「人を戀ふる歌」の第十七節（上欄に掲載）を見ると、第一行から第三行まで「仇浪」の第四節と同一の詩句を用いているが、如何なる経緯によるのかというものであった。

吉岡氏の提出した疑問に対し、当時一高同窓会の寮歌集編集委員長であった井上司朗氏（一高大13文乙）が、『向陵』誌第25巻第2号（昭58・10）に回答を寄せられた。

同氏は、なるほど『仇浪』が『人を戀ふる歌』より後発しているのはかだが、これは『仇浪』の作詞者岸巖氏による無意識の引用、または、より高次の文学的意図による本歌取りであろうと推測した上で、『あの「友の憂ひに」の三行は、鐵幹の詩の中にあるよりも、岸氏の寮歌によって、よりつよい生命を克ちとり得ています云々』と、『仇浪騒ぐ』の優越性を全面的に擁護する主張を5ページにわたって展開された。

しかし、そもそも鐵幹の『人を戀ふる歌』は第16節までしかなく『寮歌は生きてゐる』所載の第17節は、何者かが一高寮歌『仇浪』を模倣した偽作だと考えられる。『人を戀ふる歌』は明治32年12月5日刊『伽羅文庫』1巻2号に『友を戀ふる歌』として初出（第1節から第11節および第15

炎と燃えようるはしく  
友と結ばば鐵のごと  
固き誓ひの上に立て」

節から16節)、その後第12節から第14節までが増補され全16節となったとされる《松村緑『鉄幹子「人を恋ふる歌」の成立と発表誌について』。また、「明治文学全集」(筑摩書房)などの各テキストでも全16節となっている。すなわち、『寮歌は生きている』の編者、吉岡千代三氏、井上司朗氏の三者とも、もつともらしい偽作のもたらす「仇浪」に、心ならずも巻き込まれてしまったのであろう。その後事情が明白になったからかどうかは判然としないが、この問題が『向陵』誌上で論じられることは二度となかった。

ちなみに、『寮歌は生きている』(昭和47年版)所載の「人を恋ふる歌」は、「三十年八月(京城に於て作る)」と原詩にあるのを「三十八年八月」としているほか、誤植や用字の恣意変更が極めて多く、底本のテキスト自体が信頼できない。上欄の第17〜19節は、偽作ないし戯作であろう。第17節の「共に沈まん薩摩瀧」は、僧月照&西郷吉之助の入水をさすと見られるが、三高寮歌『友を憶ふ』(大3)の第7節で一高の『仇浪騒ぐ』を踏まえつつ、同第11節で「友の情に感じては 波に沈みぬ薩摩瀧」としていること、及び「人を恋ふる歌」を三高寮歌とする俗説が巷に流布されていたこと、と関連がある可能性も指摘しておきたい(次項参照)。

【私見③】「友の憂ひに吾は泣き 吾が喜びに友は舞ふ」(他校への影響)――

この詩句は、旧制高校における友情の神髄を歌った代表的な表現として、広く世に知られている。ここでは、「友の憂ひに……」の詩句を踏まえた、もしくは「本歌取り」したと推定される他校の寮歌、応援歌等の例を挙げて見よう。

▼三高寮歌(大3)『友を憶ふ』(神楽ヶ岡の) (南湖生作詞、孤吟生作曲)  
七「友の憂に悲しめば 熱き涙の我に滴る」た

我が喜に歌ひなば 劔を抜いて友は舞ふ」  
十「経世の志を懐きつゝ 国に尽くしゝ丈夫が」ますらを

友の情に感じては 波に沈みぬ薩摩瀧」(前頁の【私見②】文末と関連)  
▼三高寮歌(昭9)『寮灯青き』(篠岡博作詞、宮本正義作曲)

三「君の憂は秘む勿れ 共に孤燈に我泣かん  
君が喜び語れかし 共に抱きて我舞はん 君と我との仲なれば」

▼大高全寮歌(大12)『嗚呼黎明は近づけり』(沼間昌教作詞、吉田丈二作曲)  
五「それ青春の三春秋 交かたみに友と呼びかはし

君が愁ひに我は泣き わが喜びに君は舞ふ  
若き我等が頬に湧く その紅の血の響」

▼都立・立川高校伝統歌『清涼とゆく』(高校6期 増田隆昭 作詞)

(高校6期 高橋一朗／羽室正彦作曲)

七 「それ青春の幾年を かたみ 交に友と呼びかわし

君が憂いに我は泣き 共に歓喜を分かちあい

丘に結ばる夢と夢 三とせの契りいや深し

三とせの契りいや深し」

《立川高校〈旧府立二中〉は東京の高校であるのに、この「伝統歌」の歌詞をよく見ると、一高寮歌の『仇浪騒ぐ』を踏まえたというよりは、直接的にはむしろ、なぜか大阪高校の『嗚呼黎明は近づけり』〈前出〉を踏まえているように見える。》

▼久留米市立南筑高校(旧制・私立南筑中学)『応援歌』

四 「ああ若き日の感激や 古松の陰に相抱き

友の憂いに我は泣き 我が喜びに友は舞う

人生意気を感じては 成否誰か論ずらん」

▼金商(金沢商業 葦台同窓会)『友情讃歌』(越村信三郎作詞、中村外治作曲)

一 「紫堇の友のともしびは 心の星の人生行路

友の憂いに我は泣き わが喜びに友は舞う

母校の集いパラサング パラサング パラサング」

四「人生意氣に感じては

たぎる血汐の火と燃えて  
染むる護國の旗の色  
から紅を見ずや君

《部分再掲》

五「流るゝ水に記しけん

消えて果敢なき名は追はじ  
めぐる幾世の末かけて  
ただ我が魂の清かれと

《作詞者の越村信三郎は、石川県出身で東京商大卒。元横浜国大学長。》

【解説】「人生意氣に感じては」——唐詩選卷頭の魏徴の詩『述懐』の最終の

二行「人生感意氣」、功名誰復論」から一句を借用することにより、含みとして、世俗が喜び尊ぶ「功名」などというものは大した価値はないものであることを暗示している。

「から紅を見ずや君」——《言及なし。》

【私見】「人生意氣に感じては」——魏徴の『述懐』の詩を踏まえるが、直接的には晚翠の次の詩の影響を受けたものである。

▼「人生意氣に感じては」 成否をたれかあげつらふ

《土井晚翠『星落秋風五丈原』》

「から紅を見ずや君」——次の詩を踏まえたか。

▼「なさけをふくむ口唇に

からくれなゐの色を見き」《島崎藤村・『白磁花瓶賦』》

【解説】《「流るゝ水に記しけん」消えて果敢なき名」は何を踏まえた表現か明確でない。錦江湾に入水した僧月照と西郷隆盛の仲、もしくは楚の屈原のことを踏まえているのかもしれない」としつつ、より適合するのは、英国の詩人ジョン・キーツの遺言として自分の墓には「Here lies one

昔ながらの月影に  
歌ふ今宵の記念祭

whose name was writ in water.」(その名を水に記した者ここに眠る)と彫りつけてくれと頼んで息をひきとったという史実だと結論つけている。また、徳富蘆花が明治39年12月に一高で行った『勝の哀』と題する講演で、「樺花一朝の栄を求めず」と説いたことも影響しているとする。《「たゞ我が魂の清かれと」——『玉杯』の「清き心の益良雄」と通底していることは明らかである。

【私見】「流るゝ水に記しけん／消えて果敢なき名は追はじ」——『解説』の指摘するように、キーツの故事が典拠となっていて、と思われるが、より直接的には、当時キーツに心酔した詩人の代表格であるとされる藤村の次の詩の影響を受けたものであろう。

▼「かなしいかなや流れ行く

水にその名をしるすとして」《島崎藤村『哀歌』》

また、次の和歌も参考となる。

▼「ゆく水に数書くよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり」《古今集・詠み人知らず》

「昔ながらの月影に」——第一節の「春や昔の」と同じく、この句も

「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」《古今集・在原業平》を踏まえる。



66 第十七回記念祭寮歌『紫紺の綾羽』(明40西寮／川部佑吉作詞、颯田琴次作曲)

三「ああ跡ふりぬ水逝きぬ

春は流れぬ武香陵」

【解説】《言及なし》

【私見】48『平沙の北に』第二節と同様に土井晚翠の詩を踏まえる。

▼「嗚呼跡ふりぬ、人去りぬ、歳は流れぬ」《晚翠「万里長城の歌」》

67 第十七回記念祭寮歌『春蟾かすむ朧夜は』(明40南寮／長瀬貞一作詞、井口春久作曲)

一「春蟾かすむ朧夜は

一白彌る十里隄

沈淪の影の痕もなく

悲愁の姿今いづこ

彩雲薫る裡なれば

朱霞落杯の心かな」

【解説】本寮歌は、同年東寮寮歌65『仇浪騒ぐ』とは対蹠的に、当時一般に最も愛好された漢詩文的名調子の特色を発揮した作品であり、作曲の調べの高さと相俟って、愛唱歌の一つになりえた。

「春蟾」——「春蟾」の「蟾」は、月の中に棲むといわれる「ひきがえる」また「月」をいう。「姮娥」が、西王母の仙薬を盗み、月の中に逃げ、ひきがえるになったという伝説がある。

「一白彌る十里隄」——一面に白くおぼろに十里の堤にわたっているの意。

【私見】「一白彌る十里隄」——「十里隄」といえば、晩唐の詩人韋莊の詩『金陵凶』中に登場するものが著名だが、ここでは、隅田川の堤をさすと解する。「一白彌る」は、白い桜の花が墨堤十里にわたって一面に咲いている

さまを指すのであろう。なお、「隄」は「堤」に同じ。

- ▼「江雨霏霏<sup>トシテ</sup>……、舊<sup>ニ</sup>依<sup>リテ</sup>煙<sup>ハ</sup>籠<sup>ム</sup>十里<sup>ノ</sup>隄<sup>」</sup>」《草莊『金陵図』》
- ▼「墨江十里慘として／乾坤どよむ関の声」《319『端艇部応援歌』》
- ▼「東臺花の雲深み 墨堤花の雨灑ぐ」《42『都の空に』明37》
- ▼「錦織りなす長堤に 暮るればのぼるおぼる月

げに一刻も千金の 眺めを何に喩ふべき」《武島羽衣『花』明33》  
「沈淪<sup>ほろび</sup>の影の痕もなく 悲愁<sup>すがた</sup>の姿今いづこ」——難解で解説書にも言及がない。私見では、本寮歌の第一節及び第二節は、前年の明治39年当時の一高野球部の状況を表現したものと解する。「沈淪<sup>ほろび</sup>」とは「滅亡」ではなく「零落」（＝おちろふること）を意味することばで、ここでは、「明治37年に一高が早稲田と慶応に相次いで敗れて、一高野球部の覇権がゆらぎはじめ、野球部の栄光の十五年が終わりを告げたこと」をさすと見る（『第一高等学校自治寮六十年史』61ページ参照）。そして前年の明治39年4月の第一回三高戦において歴史的な勝利をおさめて意気上がる一高生が「沈淪<sup>ほろび</sup>」と「悲愁」を一時忘れてしまったのではないかと揶揄し、警告している。

【解説】「朱霞落杯の心」——朝焼け、夕焼けの美しい風景にうっとり見と

れて思わず杯を落とす気持、という意味であろう。

【私見】「朱霞落杯の心」——「朱霞」は「紅霞」と同じく、夕焼けの赤い空のことをいう。「彩雲」（美しい色の雲）も同類の表現である。「落杯」は従来、「解説」のように「杯を落とす」意に解されてきたが、私見では「杯」を目的語ではなく補語と位置づけて「杯に落つ」と訓じ、「夕焼けに赤く染まった桜の花の影が、杯の中に映るさま」に浮かれていると解する。

▼「聲、来ルニ枕上ニ千年鶴、影、落ツニ盃中ニ五老峰」  
《白氏文集「題元八溪居」》

（酒を酌めば、五老の峰の影が盃の中に映る。）

▼「不知ラ山月ノ上ルヲ、松影落ツテ衣ニ斑ナリ」《王陽明「山中示諸生」》  
（月に照らされた松の影が我が衣に落ちて、まだら模様を作っている。）

【解説】「さめぬ綾羅の夢ならじ」——「綾羅」はあやぎぬと、うすぎぬ。美しい衣を人々が身にまどって陶醉しているのも、きつとさめてしまふ夢だ、の意。

【私見】「さめぬ綾羅の夢ならじ」——「朱霞落杯」に浮かれることも、美しい「綾羅」を身にまどうのと同様に、はかない一時の夢でしかない。

【解説】「揺落の影閃めけば」——「揺落」は揺れ動いてひらめき落ちる。こ

二「朱霞落杯の人の世も

さめぬ綾羅の夢ならじ

夕べ魔神の荒ぶるとき

闇の息吹は野分して

揺落の影閃めけば

残香あせて春逝かむ

三 「**覺めよ怡樂の春の夢**」

沈香ちんかううるゝ濁り世を

祝鮫たの佞は問はずとも

義魂の太刀のいや冴えに

胸の血潮の若ければ

蹴りなば蹴らむ鬪も

の一句の句意は、一たび春の風光が揺れ落ちるきざしがあらわれると、の意であらう。

【私見】「夕べ魔神の荒ぶるとき……搖落の影閃めけば」——46 『王師の金鼓』(明38)第二節の「魔軍一度荒びては覇者の礎動きあり」と同様の趣旨であらう。「魔神」は「魔軍」と同じく早稻田、慶応の野球部をさし、第一節に続いて、一高野球部の覇権が揺らぎ始めているという危機的状況への注意を喚起している。

「残香あせて春逝かむ」——明治39年4月に二高戦に勝ったものの、5月には早稻田・慶応に続けて大敗し、対三高戦勝利の「残香」があせたまま春が終わってしまうさまを暗喩している。

【解説】「**怡樂の春の夢**」——楽しみ喜んでいる、はかない春の夢。

「沈香ちんかううるゝ濁り世を」——高級香木の「沈香」の匂いのように魅

惑的な美しい風物や文化も、うすれて次第に用いられなくなっている今の世の中の意。

【私見】「**覺めよ怡樂の春の夢**」 沈香ちんかううるゝ濁り世を「——」沈香ちんかううるゝ濁り世」が何をさすのか明らかではないが、ここでは、一高野球部の栄の歴史をはじめ、一高の輝かしい伝統を「沈香」に喩えて、その香りがうす

れてきたことを認識し、儉安の夢から覚めて栄光を再現すべしと説いてい  
ると解する。

▼「醒めよ迷の夢醒めよ」≪31『晝寄する新潮の』明36≫

▼「覺めよ世の人心せよ 春時じくに春ならず」≪13『思へば遠し』明37≫

【解説】「祝鮨の佞は問はずとも」——「祝鮨」は、中国春秋時代の衛の人。弁舌

【私見】「祝鮨の佞は問はずとも」——「佞」には「弁がたつ」以外に「こと  
ば巧みにへつらう」という意味もあるが、『論語』（雍也）の「祝鮨之佞」  
の場合は、通常、「すぐれた弁才がある」というプラス評価の表現と解さ  
れている。この節では、祝鮨のようなすぐれた弁才はなくとも、義魂の太  
刀の冴えや若き血潮があれば十分だという文脈だと解される。

【解説】「義魂の太刀のいや冴えに……」蹴りなば蹴らむ崑崙も」——崑崙山  
脈のような雄大なものでも、蹴ろうとするなら蹴とばすことができよう。  
ただし文法上では、下一段活用「蹴る」の文語未然形は、「蹴なば」とな  
るべきところ。

【私見】「義魂の太刀のいや冴えに……蹴りなば蹴らむ崑崙も」——46『王師  
の金鼓』（明38）第二節の「自治の子つるぎ鞆払ひ かの外敵を屠らずや」  
と同じく、一高野球部の覇権を奪った外敵（＝魔軍・魔神、すなわち早稲

田・慶応等)に正義の太刀をふるって雪辱すべしという歌意であろう。

ちなみに、「蹴りなげ蹴らむ崑崙も」という句に「蹴る」という語があるため、いつからかア式蹴球部(サッカー部)の部歌のようにして歌われてきたという。しかし、「崑崙」とは何をさすのか、そして、なぜ崑崙を蹴るのかは明らかでなく、「解説」のように、単純に「崑崙山脈を蹴とばす」と解するのも、説得力があるとは思えない。筆者としては、いろいろと考察を試みた末に、私見として、我が国最古の仮面劇とされる仏教芸能の「伎楽」に着目した新しい見解を披露してご批判を仰ぎたい。

伎楽は、6世紀から7世紀にかけて中国から朝鮮半島を経由して日本にもたらされた仏教芸能で、国家鎮護の儀礼として普及し、752年の東大寺大仏開眼法要でも盛大に演じられたと伝えられる。伎楽では14種類の伎楽面、すなわちキャラクターが登場するが、その中に怪獣のような容貌の「崑崙」という面がある。中国西部の崑崙山脈とは関係なく、中国から見た南方(東南アジア)の巻髪黒身の異民族と考える説が有力である。鎌倉時代の雅楽書『教訓抄』には、「異女」という美女に懸想して言い寄った「崑崙」が、「力士」によって皆さんに打ちのめされるといふストーリーが記されている。仏法の守護者としての「力士」による異教者の調伏

四「あゝ滄溟の霧の間に

呼ばゝ應へむ五大洲

黿波がうはは高し東海の

男の兒の意氣を示すべく

扶搖待つ間を向陵に

籠りて成りぬ鵬の翼

という意味合いも込められているとされる。

本寮歌においては、自治の精神と尚武の氣風にあふれた一高生及び一高野球部に対し、右の伎業に登場する「力士」と同様に、一高野球部の覇權を脅かす外敵である「崑崙」（＝早慶）を懲らしめようと呼びかけていると解する。

【解説】「滄溟」——海水が瀰漫して青く暗いこと。

「黿波がうは」——「黿」は、大海亀。想像上の大亀で、海中にあり、背に蓬

萊、瀛洲、方壺の三仙山を負っているとされる。その大海亀のおこす波。

「扶搖待つ間を向陵に」——「扶搖」はつむじ風。その風が勢よく活動するようになるまで向陵に籠り、大鵬の翼のような力をたくわえてと、次に続く。

【私見】「呼ばゝ應へむ五大洲」——解説では言及されていないが、前年の明治39年に東京・グアム間の海底ケーブルが開通し、対米の電信サービスが開始されたことをさすと考えられる。すでに明治4年にはデンマークの大北電信会社が、長崎・上海間及び長崎・ウラジオストク間に海底ケーブルを敷設し、日本とヨーロッパがインド洋經由とシベリア經由の二つのルートで結ばれ、初めて国際通信が可能になっていたが、対米ルートの開

68 第十七回紀念祭寮歌『劍の前に』(明40北寮／福井利吉郎 作詞、黒崎幸吉 作曲)

一 「天降りましけむ太古の  
稜威は高し永遠に」

通によつて、世界との通信が新しい段階を迎えた。《この項、吉田健彦氏の「教示を得た(同氏HP)」》

「扶搖待つ間を向陵に 籠りて成りぬ鵬の翼」——典拠は『莊子』。

▼「北冥有<sup>ニ</sup>魚、其名為<sup>レ</sup>鯢。……化<sup>シテ</sup>而為<sup>レ</sup>鳥、其名為<sup>レ</sup>鵬。……鵬之徙<sup>ウツルヤ</sup>

於南冥也、水擊<sup>ソコト</sup>三千里、搏<sup>ウチテ</sup>扶搖<sup>ニ</sup>而上者九萬里」《莊子》(逍遙遊)《

一高寮歌には、これと関連した表現が数多く登場する。

▼「二度搏てば三千里 みを空を翔くる大鵬も」《12》『一度搏てば』明32《

▼「圖南の翼ふるふべき 時はや近し我が友よ」《34》『春またあさき』明36《

▼「胡沙飛ぶ空を荒鷲は 翼を搏ちて三千里」《40》『春三月の』明37《

▼「扶搖に搏つは九萬里 鷲の羽風ぞ……」《58》『波は逆巻き』明39《

▼「圖南の翼千萬里 高梁實る滿洲の」《159》『圖南の翼』大6《

▼「一搏翱翔三萬里 猛鷲されど地に落ちて」《181》『一搏翱翔』大8《

【解説】「天降りましけむ」——《言及なし。》

【私見】「天降りましけむ」——万葉集に次の歌がある。

▼「葦原の瑞穂の国に手向する 天降りましけむ五百万千万神の」



69 第十七回紀念祭寮歌『朝金鶏たかなきて』(明40 中寮)

あした

一 「朝金鶏たかなきて……」

彩雲の幕天に引く」

四 「華奢の流の行く處

泛びて波に夢を見る

軟弱の風吹く處

酔ひては花の蔭にぬる

此世の機運返すべき

健兒が務偉なるかな」

【解説】《言及なし》

【私見】 土井晚翠の次の詩を踏まえていると考ええる。

▼『金鶏あしたの消息寄せて ひんがし 霽く紫雲の粧』《あけぼの》

たなびく よそひ

【解説】 「華奢の流の行く處……健兒が務偉なるかな」——高健兒は、現今

の世俗の「華奢の流」「軟弱の風」をはね返して、理想の天地を生み出す

べき使命を荷っていることを歌っている。

【私見】 「華奢の流の行く處 泛びて波に夢を見る」——「華奢の流の行く處」

を「驕る平家は久しからず」と結び付けて捉え、「泛びて波に夢を見る」と

は、寿永4年3月の壇ノ浦での平家滅亡の折、二位の尼が安徳天皇を抱

を抱きかかえて、「波の底にも都の候ふぞ」と慰めて入水したことをさす

と解する。

【参考】 吉田健彦氏は、壇ノ浦で討死した平行盛が都落ちの際に師の藤

原定家に託したという歌①(新勅撰1194)と、全性法師の歌に返した歌

②(玉葉2318)を踏まえると思われる(同氏HP)。

六「月天心にかゝりては

踏むべき道を照らす也」

友愛の情溢れては

▼①「流れての名だにもともれ ゆく水のあはれはかなき身はきえぬとも」

▼②「もろともにもし世の人は波の上に 面影うかぶ月ぞかなしき」

「軟弱の風吹く處 酔ひては花の蔭にぬる」——「酔ひては花の蔭にぬる」とは、藤原実方中将が殿上人たちと東山へ櫻狩りに出かけたところにわかに降りだした雨に皆あわてたが、ひとり実方は櫻の樹下に身を寄せ、「櫻狩り雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の蔭にかくれむ」という歌を詠んだので、人々がその風流を賞賛したという説話（撰集抄卷8など）を踏まえたものであろう。櫻狩り（花見）には酒がつきものゆえ「酔ひては」となる。「ぬる」は「濡る」でここでは雨に濡れることと解する。

【参考】吉田健彦氏は、有名な平忠度の次の歌を踏まえることされる。

▼「行き暮れて木の下蔭を宿とせば 花や今宵のあるじならまし」

【解説】「此世の機運返すべき」——《言及なし》。

【私見】「此世の機運返すべき」——「機運」は、ここでは「世の中の動向、趨勢」の意に解すべきであらう。

勢の意に解すべきであらう。

【解説】「月天心に」——《言及なし》。

【私見】「月天心に」——「天心」——大空の中心。

▼「月到天心」処、風来「水面」時《邵雍「清夜吟」》

幽蘭袖に香ぞ高き

▼「月天心貧しき町を通りけり」《与謝蕪村》

【解説】「幽蘭」——奥深い谷に生えている蘭。ゆかしく気高い蘭。

【私見】「友愛」「幽蘭」——「友愛」と「幽蘭」とが出てくるのは、易経繫辞伝上に「二人心ヲ同ジウスレバ其ノ利キコト金ヲ断ツ。心ヲ同ジクスル者之言ハ、其ノ臭、蘭ノ如シ」とあることから、友人との固くて清い交わりを「金蘭の交わり」と呼ぶことを踏まえたものであろう。

70 第十七回記念祭寮歌『嵐を孕み』(明40 朶寮／芦原照道 作詞)

一 「嵐を孕み風を呼ぶ」

【解説】「嵐を孕み風を呼ぶ」——《言及なし。》

陰雲低くむらだちて

【私見】「嵐を孕み風を呼ぶ」——土井晚翠の次の詩を踏まえる。

▼「あらしを孕み風を帯び」光を掩ふてかけりゆく」《晚翠「雲の歌」》

71 第十七回記念祭寄贈歌『あゝ大空に』(明40 東大／鶴見祐輔(?) 作詞、大島 廣 作曲)

一 「あゝ大空に照る月の

【解説】「大空に照る月の」——《言及なし。》

かげに憧れて昔より

【私見】「大空に照る月の」——古今集に次の歌がある。

いくその人や逝りにけむ

▼「大空を照りゆく月し清ければ 雲隠せども光けなくに」《尼敬信》

あゝ海洋の底ふかく

【解説】「海洋のそこふかく 沈める真珠を捜るべく」——《言及なし。》

沈める真珠を捜るべく  
いくその舟や沈みけむ

三「天日亘る五大洲

碧水めぐる四の海

覇を東西に争ふも

時劫の車遷るとき

誰か隻手に止むべき

棄てよ此の世の空し名は

【私見】「海洋のそこふかく 沈める真珠を捜るべく」——次の歌がある。

▼「海の底沈く白玉風吹きて 海は荒るとも取らずば止まじ」《万葉卷7二三七》

【解説】「四の海」——太平洋・大西洋・インド洋、いま一つは不明。北極海か。

「此の世の空し名」——中身のない覇者の名。

【私見】「四の海」——この場合は、「四海」と同じく「世界」ないし「世界

の海全体」を意味しており、特定の四つの海を指すわけではないと解する。

▼「四海の闇は影ひそめ」《31『晝奇する新潮の』《明36》

古代中国人の世界観によれば、天地は巨大な正方形で、文明社会はその中心部にあった。九つの州からなる中国の外側にある極遠の地を「四極」といい、その彼方にあるのが「四荒」、さらにその向こうに広がるのが「四海」である。つまり、大地の尽きるところに、海があった。

《中国古典学者・興膳宏氏／日経文化欄06・7・16による。》

「棄てよ此の世の空し名は」——徳富蘆花は、前年の明治39年12月10日に一高の弁論大会で「勝の哀」と題する講演を行ない、「權花一朝の栄を求めず、永遠の生命を求めることこそ一日も猶予できない厳肅な問

四「榮華の極か花の香か

聲なほ耳にひびくげども

かの洛陽の輕薄兒

罪萬頃ばんびんの波の上

榮さか 一時の色に酔ひ

夢に浮かれてをどるかな

題であると説いた。この演説に打たれ、荷物をまとめて向陵を去った者が何人かいるという『一高自治寮六十年史』。この講演は寮歌にも影響を及ぼし、明治40年から大正5年にかけて、本寮歌のほかにも、次のような表現が登場する。

▼「流るゝ水に記しけん／消えて果敢なき名は追はじ」≪65『仇浪騒ぐ』明40

▼「吾友何の歎きぞや／あだし此の世の名は墜ちよ」≪74『響へば海』明41

▼「はかなき傲り我すてん／士節の操かたければ」≪102『月は朧に』明44

▼「やがて消え行く夕虹の／はかなき夢は追はずして」≪138『またうらわかき』大3

▼「浮雲に鑄りし徒し名を／犠牲の血潮に洗へかし」≪149『あゝ朝潮の』大5

【解説】「洛陽の輕薄兒」——ここでは必ずしも京都を意味するわけではなく

「都会の輕薄な若者」を「洛陽の輕薄兒」と表現したものであろう。

【私見】「洛陽の輕薄兒」——唐の詩人賈至の七言絶句「春思」を踏まえる。

▼「紅粉当壇弱柳垂 金花臘酒解餘醺 笙歌日暮能留客 醉殺長安輕薄兒」

(紅おしろいをつけてお店に出れば、店の前にはしだれ柳の枝が垂れている。「その柳にも似た

この姿。黄金の花の浮き新酒、さあ春のお酒の口をあけましょう。笙を吹き、歌を歌い、日が

落ちてまでもまだお客を引き留めて、長安の浮かれ男たちを酔いつぶしてみせますよ)前野直彬訳。

ただしこの寮歌では、「長安」を「洛陽」と読み替えて使っている。ここで「洛陽の輕薄兒」とは、前年の明治39年4月6日に一高球場で行われた野球の一高・三高戦のために上京した三高の選手及び応援団を指すと解する。この試合は一高一点リードで迎えた九回裏、三高は二死で走者は三塁と二塁にあり、打者稲垣の右中間の大難飛球に三塁から山西、二塁から木下が勇躍本塁に殺到、一時は三高側が大歓声に沸いたが、一高の加福右翼手の好捕によりゲームセット、一高が五対四で勝利を収めた。「榮、一時の色に酔ひ 夢に浮かれてをどるかな」は、九回裏の三高側のつかの間の欣喜雀躍を揶揄したものであろう。

【参考】吉田健彦氏は、「武家の棟梁でありながら詩歌管弦にうつつを抜かし、公家化してしまった平氏の公達たちのこと」とされる(同氏HP)。

【解説】「萬頃」——地面や水面などの極めて広いこと。「頃」は面積の単位。

【私見】「萬頃」——「一波纒かに動きて萬頃(萬波とも) 随ふ」とは「事件が小さくとも、その影響力が大きいこと」の譬えであり、「罪萬頃の波の上」とは、このぬか喜び事件が爾後の三高に及ぼす影響の大きさを指摘したものと解する。三高は対慶応戦にも四対0で敗れ、傷心の帰洛となった。

73 第十七回記念祭寄贈歌『袖が濱邊の』(明40 福岡大)

四「野邊に亂るゝ醜草は」

君が利鎌にかりとりて

駒飼ふしろに足らじかし」

【解説】「野邊に亂るゝ醜草は…」——《言及なし。ただし、「醜草」につ

いては、同年の京大寄贈歌『思ふ昔の』の第三節の語釈で、「草を罵って、

憎らしい草」といったもの」と説明している。

【私見】「野邊に亂るゝ醜草は…」——前年9月のいわゆる「栗野転校事件」

を踏まえて、政治的配慮で五高から一高に転入してきた栗野某の如き「醜

草」は、一高生が利鎌で刈り取って馬に食わせるほどの値打もない、と突

き放しているという解釈をとってみたい。

▼「心の色のうつろはゞ／亂れて生へんしこ草小章」

《72 『思ふ昔の』明40 京大》

74 第十八回記念祭寮歌『譬へば海の』(明41 東寮／立澤 剛(?) 作詞、日足 誠 作曲)

75 第十八回記念祭寮歌『蒼茫遠く』(明41 西寮／今井登志喜 作詞、原 馨 作曲)

76 第十八回記念祭寮歌『彌生ヶ岡の花がすみ』(明41 南寮／葦原照道 作詞、颯田琴次 作曲)

三「光榮はなに満ちたるこしかたも」——《言及なし。》

【解説】「光榮はなに満ちたるこしかも」——《言及なし。》

さめて空しき夏草や  
春一時のさだめぞと  
雲に消えたる荒鷺の  
羽音なき間を小雀の  
もゝさへづりの

かしましき

四「水したゝらん太刀の冴

鐵ときたへし双腕も

敵なきに鳴る夜々のゆめ

ならびしびしの櫻狩

山も眠れる平安を

健兒の意氣にさまさんか

【私見】「光榮に満ちたるこし方も」——高野球部の栄えある戦績をいう。

【解説】「さめて空しき夏草や」——「夏草やつはものどもが夢のあと」(芭蕉)を踏まえ、戦いを夢のように顧みるとともに、浮かれた世情への批判をこめる。

【私見】「さめて空しき夏草や……かしましき」——明治40年4月の三高戦の敗戦に続き、慶応・早稲田にも敗れ、雌伏の時期を迎えたことを指す。

【解説】(第四節については言及なし。)

【私見】「鐵ときたへし双腕も／敵なきに鳴る」——前年敗れた三高に対する雪辱を期して鍛えた腕が鳴るさまを表現している。

「ならびしびしの櫻狩」——「それではしばらく京都・嵐山の桜の花見でもしながら……」(三高戦のための京都遠征に出かけることを指す。)

「山も眠れる平安を／健兒の意氣にさまさんか」——冬の山も静かに眠っているような京都の町を、一高健兒の意氣で春の三高戦に勝利することによって目覚めさせてやろうではないか。「山眠る」は冬の季語で「静かで淋しい山」のこと。「平安」は平安京すなわち京都のことを指す。



77 第十八回紀念祭寮歌『そよぐ橄欖』（明41北寮／田中木又作詞、廣田義夫作曲）

二「白雲迷ふ山のかひ」

八百瀬の岩にくだけては  
しづぎに虹を匂はせて

十幾年を谷の水

夕日に映ゆる山紅葉

みな底深く燃ゆる哉」

【解説】「白雲迷ふ山のかひ」——《言及なし。》

【私見】「白雲迷ふ山のかひ」——明治28年、正岡子規の秋の句に次の連作がある。

▼「秋風や白雲迷ふ親不知」（明28／正岡子規『寒山落木』巻四）

▼「秋風や雲吹き起る山のかひ」（同 右）

78 第十八回紀念祭寮歌『巨大の天靈』（明41中寮／吉植庄亮作詞、颯田琴次作曲）

【解説】「天靈」——東亞の運命を一身に担うような英雄。

「無反の劍」——刀身に反りがなくまっすぐな劍。

【私見】この寮歌は、明治期の詩人平木白星が明治34年に『文庫』に発表した「日本國家」という詩（富國強兵を鼓吹謳歌）の影響を大きく受け、この詩から次の三箇所を引いている。

一「巨大の天靈

とくく出でよ

▼一「巨大の天靈日に日に新に／不滅の光明の赫々たる間は／

我が爲すつとめの無窮無限」

猛鷲ウラルに翼を休め」

四 「三尺無反の劍よし無くも」

雄心むざく／＼何黙すべき」

六 「日本は東亞の又假の名と

威信を示して

天下に立たん」

79 第十八回記念祭寮歌「霞薫する」(明41 朶寮／大森洪太 作詞、颯田琴次 作曲)

一 「霞薫する深山邊の

岑上の櫻ちり来れば」

一 「花は集り水凝りて

雄々しき呱呱の聲擧る」

▼七 「三尺無反の劍は無くとも／平和の詩をもて萬馬を走らせ／

凱歌をあげべき機一転」

▼十一 「世界は日本の一の名にして／日本は世界のまた假の名ぞ

我が父その子にこの遺訓」

また、平木白星の「たとへぐさ(三)」(明治36年、『万朝報』に発表)

には、次の詩句があり、「巨大の天靈」のイメージを伺わせる。

▼ 「あれども眼には見えざりし／唯一の靈ぞあらはるる／

ああ佛より尊くも／神より更に大なる」

【解説】「霞薫する深山邊の岑上の櫻」——『言及なし』

【私見】「霞薫する深山邊の岑上の櫻」——小倉百人一首所収の次の歌が参考になろう。

▼ 「高砂の尾上の櫻咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ」(後拾遺集 大江匡房)

【解説】「裸形の兒」——「裸形外道」は、古代インド宗教の一派ニガンダ

の訳語。一切の束縛から離れ、という意で、この趣旨を表すために裸形(す

二「活々不羈の眉高く

健兒は成りぬ丘の上」

三「自治共同」の手綱執り

勤儉尚武策うてば

振ふか天馬鬣は

鬼火寒林に舞ふが如

扶搖を斬つて嘶けば

光を帯びぬ裸形の兒」

80 第十八回紀念祭寄贈歌『としはや已に』

一「としはや已に十八と

積り積りてなりたるか

今日歸り來る陵の上に

紅翠紫や

みやび色のみ多くして

むかしの姿なかりけり」

はだか」でいることが正しい行為であるとす。ここの「裸形の兒」は、右の原義を踏まえて、「自主独立、自由不羈の男兒」という意味に用いたのであろう。

【私見】「裸形の兒」——「赤ん坊」のこと。第一節の「呱呱の聲擧る」、第

2節の「健兒は成りぬ」もこのことを裏づけている。一高生を、一切の束縛から自由な「赤ん坊」に喩えたもので、解説の趣旨とも符合する。

▼「薔薇色の裸形の兒」——ばらいろ 哀いかな——あゝ 或は悩の床に

又或は死の床に生れ落つる幼兒の名によりて告ぐ」

《アダ・ネグリ「母」上田敏『海潮音』》

【私見】「紅緑紫や／みやび色のみ多くして／むかしの姿なかりけり」——

明治38年卒業の作詞者の理想と立場からすると、在学中の校風の特色だっ

た「勤儉尚武」の剛健な氣風が衰えて、優美に流れ始めていると判断され、それを歎いたのである。

【私見】「紅翠紫や／みやび色のみ多くして／むかしの姿なかりけり」——

作詞者の青木得三氏は、女人禁制の寮に紀念祭には沢山の女の人が来るので、明治38年の紀念祭に氏の部屋では「女人禁制」という飾付を出した

二「思へばこそこの秋のくれ

北仙臺のますらををと

戦ぶうはさ聞きしとき

われ等が血潮躍りにき

もの皆變るたどなかに

むかし偲ぶはこれのみぞ

81 第十八回記念祭寄贈歌『いざ行かむ』（明41京大／福井利吉郎 作詞、廣田守信 作曲）

三「風薫る春の朝

千折百折山下りて

梅の香のあと訪へば

昔の心さながらに

ゆるがじなその晝

ことを踏まえた」と述べる（『青木得三氏訪問記』生徒委員（一高同）  
憲会『金報』第三十九号（昭十四・一））。従つて「紅翠紫」

は、具体的には記念祭に來場する女性の服装の色を表現したものと解する。

【解説】「戦ぶうはさ聞きしとき」——二高の何部との試合であるのか、そし

てそれが噂だけに終つて試合は中止になったのかどうか不詳。

【私見】「戦ぶうはさ聞きしとき」——二高の柔道部からの挑戦のうわさ。

『向陵誌』の柔道部史に、「明治41年11月7日北国の猛者二高柔道部より挑戦状を送りぬ、是より先き我部にてもかかる噂屢なりければ」とある。

その後さらに曲折を経て、明治43年1月20日に正式に挑戦状が届き、同年4月7日に第3回対二高柔道試合が高師講堂で開催され、一高が敗れた。

【解説】「梅の香のあと訪へば」——菅原道真の故事の「東風吹かば匂ひおこ

せよ梅の花 主なしとて春を忘るな」に因んで、京都の北野天満宮を指

すか。

【私見】「梅の香のあと訪へば」——「梅の香のあと」を解説のように北野天

満宮と解する説のほか、一高寄宿寮を指すとする説（吉田健彦氏）もある

が、私見では、菅大臣神社（京都市下京区仏光寺通西洞院入ル菅大臣町及び北側の道路を挟んで隣接する北菅大臣神社）と解する。両神社は菅原道真の旧宅跡に建てられたもので、もともとは一つの神社であった。菅大臣神社（祭神＝菅原道真）は白梅殿社とも呼ばれ、境内には、道真の産湯につかったといわれる井戸や大宰府に飛んだと伝わる「飛梅」も残っている。また北菅大臣神社（祭神＝道真の父菅原是善）は紅梅殿社とも呼ばれ、道真が「東風吹かば……」の歌を詠んだ場所だと伝えられる。

北野天満宮（祭神＝菅原道真）は、菅原道真の怨霊を鎮めるために朝廷によって北野の地に造営され、のちに藤原氏が社殿を寄進した神社である。全国天満宮の宗祀とされ、社格も高く、境内の梅の木も多いが、この寮歌のいう「梅の香のあと」に比定するような事跡はない。

【解説】「ゆるがじなその躑」——「躑」は道真が太宰府で詠んだ「都府樓わづか纒ニ看ル瓦色ノ」（「大鏡」）を踏まえたか。

【私見】「ゆるがじなその躑」——「躑」は「梅の香のあと」の躑であり、前項で述べた菅大臣神社及び北菅大臣神社を指すと解するのが順当であろう。「躑」を「都府樓」の詩と関連づけるのは深読みに過ぎるのではないか。なおほかに、「躑」は一高寄宿寮を指すとの説もある。

四「世は移り人去るも

藝術はここに地と和して  
長久の命あり」

【解説】「千載の靈こそ宿れ」——「千載」は「千年」、即ち長い意だが、

「靈」は道真の靈とすれば、偶々約千年前のこととなる。

【私見】「千載の靈こそ宿れ」——道真の逝去は九〇三年で、この寮歌は一九〇八年の作であることからみても、千年というのは偶々ではなく、作者がはじめから道真没後千年を意識して表現したものと解する。この寮歌より十年ほどあとの作だが、次の寮歌の詩句も参考にならう。

▼「菅公逝きて千餘年 わびしくかをる飛び梅の」

《177 『暗雲西にはびこりて』 第三節（大7 九大）》

なお、「薨」が一高寮を指すとの説では、「千載」は一高寄宿寮が永遠に  
弥栄であることを祈る表現と解している。

【解説】「藝術はここに地と和して長久の命あり」——ここでは平安京において栄えた日本の古典的文学藝術を念頭に置いている。

【私見】「藝術はここに地と和して長久の命あり」——一高自治寮が向ヶ丘の地にしつかりと根を張り、永遠に自治を伝える意と解する説（吉田健彦氏）もあるが、やや飛躍した論理のように思われる。私見では、やはり藝術と京都の地との結びつきの強さを述べたものと解したい。

五「いざ行かむ我旅路

彌生ヶ岡にどよめける

歌の聲武藏野の

廣き心を偲ぶかな

比叡の山琵琶の湖うみ

新なる教をきかむ」

【解説】「新なる教をきかむ」——《言及なし。》

【私見】「新なる教をきかむ」——一高での真理追求や教養の学問を踏まえな

がら、これからは京都の大学で新たな専門の学問に取り組むのだという意

気込みを語る。

82 ●第十八回記念祭寄贈歌『紫淡く』（明41福岡大／作詞者・作曲者とも不明）

《参考》本寄贈歌の曲譜は、三高寮歌『月見草』（大正7年）の原曲として知られる。

四「かゝるいぶせきうつし世に

入るべき山はあらじてふ

人に示さんほこりてん

夢安らけき武香陵」

【解説】「入るべき山はあらじてふ」——古今集の「世を捨てて山に入る人

山にてもなほ憂きときは いづち行くらむ」（凡河内躬恒）を踏まえて、

古人は行く先に迷ったが、我々は武香陵で確乎として安住すると誇って

いるの意か。

【私見】古今集の歌を下敷きにして水戸烈公（徳川斉昭）が詠んだ「世を捨て

て山に入る人 山にてもなほ憂きときは ここに来てまし」（借楽園・好文

亭内の「対古軒」の掲額）の歌意にならって、「行く先に迷ったらきつとここに

来るであろうに」と、武香陵が安住の地であることを誇っていることと解する。

〔てまし〕は確述の助動詞「つ」の未然形＋推量の助詞「まし」。

七「のろひに長けし世の人は

まなこを張りて今なれが

若き血しほをつゝむなる

武者振をのみまもるなり」

八「心の玉をみがかんに

他山の石をなにかせむ

行けなが道の一すぢを

ゆめふみ迷ふ事勿れ」

【私見】「のろひに長けし世の人」——呪い（恨み憎む人に災いがふりかかる

ように祈る）の術を得意とする世間の人を指す。

「まもる」——「目守る」の一語化で、ここでは、様子や隙をうかがう

の意。

【解説】「心の玉をみがかんに 他山の石をなにかせむ」——『詩経』（小雅・

鶴鳴）「他山之石、可<sup>ン</sup>以<sup>テ</sup>攻<sup>レ</sup>玉」。直接自分に関係のない物事でも、自

分の反省・進歩を促すことができると言えることの喩え。この寮歌の

場合は「心中の玉を磨くには、なにも他山の石など必要なく、自らの決断・

精進によって可能だ」との意。

【私見】「心の玉をみがかんに 他山の石をなにかせむ」——右と同意見。

【解説】「行けなが道の一すぢを」——「なが」は「汝が」の意。

【私見】「行けなが道の一すぢを」——ダンテの次の名言『神曲』煉獄、第

五曲）を踏まえたものか。

▼「汝は汝の道を行け しかして後は人の語るにまかせよ。」

なお、マルクスの『資本論』第一巻の序文の末尾にダンテのこの言葉が



引用されているため、誤ってこれがマルクス自身の言葉だとして紹介されている例も見受けられる。

83 第十九回記念祭寮歌『わが行く方は』(明42 東寮／石原雅二郎 作詞、新居一郎 作曲)

一 「わが行く方は潮ぞ高き

紫瀾みだるゝ遠つ海」

【解説】「わが行く方は」——《言及なし。》

【私見】「わが行く方は」——薄田泣菫に次の詩がある。

▼「わがゆくかたは、八百合の潮さゝるとよむ遠つ海や」

《薄田泣菫「わがゆく海」〈白羊宮〉》

三 「清き心を斯文しぶんに寄せば  
水な面に画く名にあらず」

【解説】「水な面に画く名にあらず」——典故があるかどうか不明。

【私見】「水な面に画く名にあらず」——

▼「かなしいかなや流れ行く／水にその名をしるすとて」

《島崎藤村「哀歌」》。65 第17回『仇浪騒ぐ』参照。》

84 第十九回記念祭寮歌『闇の醜雲』(明42 西寮／關口 泰 作詞、寺尾 新 作曲)

85 第十九回記念祭寮歌『潮高鳴り』(明42 南寮／金井爲一郎 作詞、寺尾 新 作曲)

一 「潮高鳴り月落ちぬ

【解説】《言及なし》

人よ眠りの夢さませ

見よ東の空の色

紅燃ゆる雲の彩

四「夕日の影に佇みて

過ぎ來し彼方顧みる

昔の友よ今何處

行きて跡なき岡の邊に

若き血汐を絞りたる」

86 第十九回紀念祭寮歌『玉の臺の』（明42 北寮／吉植庄亮 作詞）

二「同じ浮世の追分に

袖すり合ひし朝ぼらけ

橄欖かをる六寮の

【私見】明治38年に萬朝報が懸賞募集した「国音の歌」（「いろは歌」。「ん」

を含めて四十八音一回使用）の第一席入選の作品を踏まえている。

▼「鳥啼く声す夢覚ませ／見よ明け渡る 東を／空色榮えて沖つ辺に／

帆船群れるぬ霧の中」《埼玉・坂本百次郎》

【解説】「昔の友よ今何處」——《言及なし。》

【私見】「昔の友よ今何處」——「昔の友」が何を指すのかはわかりにくいが、

明治39年12月の徳富蘆花の「勝の哀」と題する講演に衝撃を受けた一高生の中途退学が翌年以降増加したことを考えると、中退した上級生のことを指している可能性が高い。ちなみに作詞者自身もその後中退している。後年の次の寮歌にも類似的の表現が出てくる。

▼「現れてはひそむ同胞の／行方の空はわかねども」《172 大7 紫霧ふ》

《この寮歌を作詞した橘高寶實氏自身も、後に一高を中退している》

【解説】「追分」——街道が二つに分岐する所をいう。ここは離合集散の頻繁

な状態の喩えとして使ったのであろう。

【私見】「追分」——当時の一高の正門前は「本郷追分」で、中山道と日光街

みどりの影のしたはれて」

道の分岐点になっていた。解説の指摘するように「離合集散の頻繁な状態の喩え」であるとしても、本郷追分に位置する一高自治寮で、それまで互いに未知であった者同士が出会って（「袖すり合ひし」）、また別れて行くことを踏まえているとみる方が素直な解釈ではなからうか。

87 第十九回記念祭寮歌『紅雲映ゆる』(明42 中寮／古尾谷鐵太郎(?) 作詞、廣田義夫 作曲)

一 「紅雲映ゆる曙の色

波に明珠の影みれば

橄欖香る玉殿に

侍衛の夢の深き時

柏の森に鐘なりて

今年十九の春来る」

【解説】「侍衛の夢の深き時」——「侍衛」は天子の近くにおいて護衛する官。

前句で一高寮を玉殿（立派な宮殿）に喩えたが、その続きで本句で一高生を侍衛に喩えたのであろう。

【私見】「侍衛の夢の深き時」——晩翠に次の用例がある。

▼「見よや侍衛の面かけに 無限の愁溢るゝを」

《土井晩翠『天地有情』「星落秋風五丈原」》

二 「大津の浦の初風

青葉城下の凱歌

神樂ヶ丘に武夫の

鎧に散りし花のひら

流水遠く春更けて

【解説】「青葉城下の凱歌」——明治32年、一高柔道部が仙台青葉城下に遠

征、二高柔道部に勝って前年の敗北の雪辱を遂げたこと。

【私見】「青葉城下の凱歌」——「解説」は対二高柔道戦のこととするが、明

治32年では時期が古すぎる。これは明治39年4月に撃剣部が仙台に遠征

し対二高戦で勝利したことをさすと見るべきであろう。ちなみに翌明治43

榮の誓ぞしたはるゝはえ

三「宴のどよみ雲うらけに入る

舞殿の春の夢深く

花の榮華に世はなれて

彫龍朱欄香を高み

玉簾もるゝ銀燭の

光消えなで夜や明けむ

年の94『新草萌ゆる』及び95『煙に似たる』の解説においても青葉城下の勝利を柔道部のものであるとしているが、いずれも撃剣部の勝利と解すべきだと考える。なお、解説書にある如く、「天津の浦」は南北寮分割阻止運動、「神楽ヶ丘」は野球部の対三高戦勝利（明41）をさす。

【解説】「流水遠く春更けて」——《言及なし》

【私見】「流水遠く春更けて」——江戸時代の放浪の漢詩人柏木如亭の詩に次の用例がある。

▼「細響林間流水遠 残香辭上落花餘」

（林間にかすかに響くのは遠くの水の流れ、

苔の上の残り香は落花の名残）《柏木如亭『首夏山中病起 二首』》

【解説】「舞殿の春の夢深く」——「舞殿」（ぶでん）の用例不明。「まひどの」の例はあり、舞樂を行う建物の意だが、中国の例未詳。

「彫龍朱欄香を高み」——「彫龍」は彫刻して作った龍の模様。

「朱欄」は朱塗りの手すり。共に豪華な建築の意。

「玉簾もるゝ銀燭の」——「玉簾」は玉で飾った簾。又、簾の美称。

「銀燭」は明るく光る灯火。

「光消えなで夜や明けむ」——「消えなで」の「な」は完了の助動詞

四「海のかなたの國いかに

隣邦玉座寒くして

正義の盟思ふとき

誰か舞曲を耳にせむ」

「ぬ」の未然形、「で」は打消の接続助詞。(消えてしまわないで)。

【私見】第三節全体が晚翠の詩の一節を下敷きになっている。

▼「管絃の音雲に入る 舞殿の春の夕まぐれ

袂を舉げて軽く起つ 三千の宮女花のごと

花を散して玉觥に 浮かす歌扇の風もよし

彫龍の欄奥深く薫る 蘭麝の香を高み

珠簾を洩るる銀燭の 光りて夜や明けむ」

《土井晚翠『晝鐘』「萬里長城の歌」》

【解説】「正義の盟」——明治40年7月の日韓協約を指すと思われるが、

明治41年度における、満洲の鉄道に関する協定をも指すのかもしれない。

【私見】「正義の盟」——国際的な協約・協定にはピタリとあてはまるも

のは見当たらない。むしろここでは、自治寮創設当時の反俗の盟約(籠城

主義)を指しているのではないか。隣邦の帝位が危うくなっているような

非常時にあつて、あの自治寮創設時の盟約を思い起こせば、誰が舞曲に浮

かれていることなどできようか、くらしい意味になろう。

▼「道義の盟かたければ／俗塵遠き六寮に」《148『二十五年祭の歌』大4》

▼「聳ゆる砦守らんと／堅く盟ひし若人が」《197『自治の流れは』大11》

《追記》

『紅雲映ゆる』第二節の「青葉城下の凱歌」は明治39年の撃剣部の勝利を指すとの私見について、東大柔道部OBのは松恭治氏から異論が出された。私見では、明治32年の対二高柔道戦のことと解したのでは時期が離れすぎていることから明治39年の対二高撃剣戦のことであろうとしたのに対し、是松氏は、当時の柔道部の存在感は撃剣部をはるかに凌駕していたのだから、時期が離れていたとしても「青葉城下の凱歌」とは柔道部の事跡を歌ったものと解すべきだと主張する。「大津の浦の初嵐」が明治30年の南北寮分割阻止運動をさしているとするならば、「青葉城下の凱歌」が明治32年の対二高柔道戦をさすとする説を頭から否定し去ることは難しいかもしれない。(是松氏は平成26年8月に急逝された。合掌。)

一 「緋緘着けし若武者は  
鎧に花の香をのせて」

【解説】「緋緘着けし若武者は」——一高健児を緋緘を着けた若武者に喩えて登場させる。この発想は46『王師の金鼓』第五節に先例がある。

【私見】「緋緘着けし若武者は」——落合直文の次の歌を踏まえるか。

▼「緋緘の鎧をつけて太刀はきて 見ばやとぞおもふ山ざくら花」

《一高校友会雑誌明25/5に発表したもの「萩乃家家集」所収》

89 第十九回記念祭寄贈歌『若草もえて』（明42東大／佐野保太郎 作詞、加福均三 作曲）

90 第十九回記念祭寄贈歌『天路のかぎり』（明42京大／落合太郎 作詞、内海磐夫 作曲）

一 「天路のかぎり飛ぶわしの  
かげこそしたへ比叡の根の

【解説】「天路のかぎり飛ぶわしの」——《言及なし。》

岩根のひまゆ見放くれば

【私見】「天路のかぎり飛ぶわしの」——飛行機を「わし」に喩えたもので

八重棚雲はとざせども  
曙の色生むところ

吾がはらからの自治の國

あろう。明治36年には有名なライト兄弟が人類初の有人動力飛行に成功し、この寮歌の前年の明治41年10月には兄のウィルバー・ライトが高度115mまで上昇、同12月には2時間20分の飛行に成功するなどして、この当時、飛行機は世界中の人気と関心の的であった。

三 「あゝ友あだし名は捨てよ

【解説】「双腕張りて進まずや」——《言及なし。》

去りにしほまれ追ふ勿れ

【私見】「双腕張りて進まずや」——第一節を受け、「双腕張りて進まずや」

うるめる瞳かゞやかし  
双腕張りて進まずや」

という表現も、飛行機が双翼を張って飛ぶさまをイメージしたものと見ればよく理解できるのではないか。

91 第十九回記念祭祭歌『をぐるき雲は』(明42 福岡大／佐藤清一郎 作詞)

92 第二十回記念祭祭歌『笛の音迷ふ』(明43 東寮／石原雅二郎 作詞)

一 「笛の音迷ふ波の上

緑の海に浮かびたる

草軟らけきグライスよ

藝術の神の住む国」

【解説】「言及なし。」

【私見】第一節の第一句から第四句までは、すべて島崎藤村の『晩春の別離』という詩を踏まえている。

「笛の音迷ふ」——

▼「みやびつくせいにしへの／笛のしらべはいづくぞや」『晩春の別離』

「緑の海に浮かびたる／草軟らけきグライスよ」——

▼「草の緑はグライスの／牧場を今も覆ふとも」『晩春の別離』

「藝術の神の住む国」——「藝術の神」は「ミューズ」を指す。

▼「藝術の神のかんづまり／かんさびませしとつくにの」『晩春の別離』

四 「白山白野声なくて

陰雲こもる島がくれ

【解説】「陰雲こもる」——暗い雲。くろい雨雲。すぐ上の「白山白野」に

対して「黒」といっている。『六韜』に「天清淨無、陰雲風雨」とある。



太平洋の荒波に

驚き醒めし我が祖先

五「籠れば永き二十年

苔むす松は深緑

我等よ岡を出づる時

歡び迎へん舊山河

死せる歴史を新たむる

男子の使命大いなり」

【私見】解説では言及されていないが、第四節は幕末の米国の黒船来航について詠んだものと解する。

白山白野はくさんびやく——白、潔也。「白山白野」という熟語は辞書に見えないが、「白い山野」、すなわち「美しくけがれなき山野」の意であろう。

「陰雲こもる」——黒船（蒸気船）の黒い煙を表現している。

「太平洋の荒波」——米国の強硬な黒船外交をさす。

「驚き醒めし我が祖先」——美しい国土において鎖国による太平の夢の中にあつた日本人が、黒船来航に声を呑み、目を醒まされたことをさす。

▼「太平の眠りをさますじやうきせん（上喜撰・蒸気船）／  
たつた四はいで夜もねむれず」【江戸落首】

【解説】「死せる歴史を新たむる」——祖国日本の長く古い歴史を飛躍的に更新して護国の実を挙げることこそ、われわれに期待されている使命であり、立憲二十年目を迎えた今こそ、その準備をなすべき時である、との意である。世界の列強と肩を並べ得たという自信の現れといえよう。

【私見】「死せる歴史を新たむる」——黒船来航後の日米和親条約・日米修好通商条約などの不平等条約を改正するための努力を指すと解する。治外法権や関税自主権についての不平等条約を押し付けられたままの日本で

は、とても独立国家とはいえないという意味で、「死せる歴史」と表現したものと考えられる。

日清戦争を機に治外法権の撤廃については進展を見たが、関税自主権の回復はかなり遅れ、この寮歌の明治43年の時点ではまだ交渉の途上であり、翌明治44年に新たに日米通商航海条約が結ばれて、ようやく関税自主権の回復が実現した。

【解説】《解説では、『この寮歌は、漢語・漢籍に依拠した耳馴れない詩語の頻用からなる奇篇とも称すべき一篇だが、第六節を除き全面的に土井晩翠の数篇の詩を下敷きに用いている』としながら、「一々の指摘は煩瑣に渡るので割愛する」として、土井晩翠の詩を下敷きにした箇所の指摘はわずかに四箇所に留まっている。》

【私見】この寮歌については、筆者が『寮歌研究報告No. 1』(平成14年8月)及び『銀杏(東京銀杏会会報 第四号)』(平成15年12月)で二度にわたり詳細に報告しているの、その内容を以下に述べる。

↓「青鸞花を啄みて」(ミロのヴィーナス)

色清艶の春の花

黄鶴魂たまを懐きてし  
珠瓔珞たまの曙の露

花と露とを織りな化せる

瑞雲立ちぬ武香陵

二「細塵築き山なせば

風雲外ほかに立ち迷ひ

滴水た湛へ淵なせば

蛟龍内に潜むなり

龍雲凝りて今ここに

青史飾りぬ廿年

三「傲慢ほこりの酒に人酔へど

花とこしへに春ならず

熟睡うまいに榮華夢みれど

月とこしへに圓まからず

圖南あまかけの翼高張りて

天翔り行く自治の兒ら

↓「青鸞花を啣み来て／春瑤台の仙を乗せ」(「富嶽の歌」)

↓「黄鶴露を吸去りて／秋白帝の楼に飛び」(「富嶽の歌」)

↓「暗と光と織りなして」(「富嶽の歌」)

↓「積塵山を築きては」

かみ風雲を捲くがごと」(「富嶽の歌」)

↓「積水淵を湛へては」

うち蛟龍の湧くがごと」(「富嶽の歌」)

↓「花とこしへの春ならじ」(「星落秋風五丈原」)

↓「名月の光は常に圓からず」(「秋興八首」)

↓「圖南の翼風弱く」(「青葉城」)

四「北満城下何の夢」

鶏の暗冥醒めやらすかげ

覆載の恩顧仇に見てふさい

狼友よぶ聲高しまがみ

あゝ蕭條か悽愴か

禍神何の嫉妬ぞやまがつみ

五「普天何れの所にも」

率土何れの民等にも

恨みんすべはあら浪のしきな

頻鳴る渡に平和なしわた やすき

嗚呼英雄よ未來永劫にとことば

四海の濱の光たれ」

四「北満城下何の夢」

鶏の暗冥醒めやらす」

(再掲)

↓「無知の暗 頑冥の夢さめやらす」(「黒龍江上の悲劇」)

↓「覆載の恩、故ありて造物彼に拒みしや」(「黒龍江上の悲劇」)

↓「運命の神ねたみあり」(「弔吉国樟堂」)

↓「率土いづれの處にか彼はた冤を訴へん」(「黒龍江上の悲劇」)

↓「四海の濱にとこしへに……冤を呼べ」(「黒龍江上の悲劇」)

【解説】「鶏の暗冥醒めやらす」——にわとりが鳴いてもまっくらで、なか

なか夢からさめない。第一句のこと(伊藤博文暗殺)を受けている。

【私見】「鶏の暗冥」——伊藤博文を暗殺した安重根が朝鮮人であることから

「鶏」によって鶏林(＝朝鮮)を表わしている。

三「自治の光のあかねさす

日出づる國の護りとて

武香が陵の高樓に

二十年かづらの長き夜を

思ひ出多き記念祭」

【解説】「二十年かづらの長き夜を」——《言及なし》

【私見】「二十年かづらの長き夜を」——「二十年かづら」とは、真菰の根に生ずる竹の子状の「菰角」のこと。黒穂菌の胞子の成熟した黒い灰状のもので、真菰の根茎を焼いたものとともに油をまぜて、白髪染め、鉄漿、眉墨等に用いた。

▼「真菰の根の黒焼き、髪の毛の油で解き合せ……此名をば甘鬘と云はいな

《浄瑠璃「加賀国篠原合戦」／竹田出雲》

※この浄瑠璃では斉藤別当実盛が甘鬘を白髪染めに使う。

本寮歌では、「二十年かづら」という言葉で第二十回記念祭を表現するとともに、「二十年かづら（鬘）」と「かづら（葛）の長き夜」とをかけている。かづら（葛）のつるが長く伸びることから、「玉かづら」は「長し」などにかかる枕詞とされている。すなわち「かづら」↓「長き夜」となり、さらに「長き夜」は「記念祭」の「長き夜」と開寮以来二十年の「長き世」との掛詞になっていると解される。

▼「いかでかく絶えたる中ぞ玉かづら／ながき世をこそかけし契りに」

《新千載和歌集・中宮太夫公宗母》

四 「青葉城下の夕月夜」

胸の恨も今晴れて……」

【解説】「青葉城下の夕月夜／胸の恨も今晴れて」——青葉城下、即ち仙台での戦いに勝って恨みを晴らしたことを意味しているが、それに相当する事実としては、この年の11年前の明治32年4月、仙台で行われた対二高柔道戦で勝利し前年敗北の雪辱を遂げたこと以外には見当らず、確実なことは未詳。

【私見】「青葉城下の夕月夜／胸の恨も今晴れて」——「解説」では対二高柔道戦のみに言及しているが、明治39年4月には撃剣部が、仙台で行われた対二高戦で勝利している。この時の一高軍遠征勇士9名中の一人中島によつて書かれ、校友会雑誌第146号に掲載された『花草鞋の記』は、部史にも引用され、名調子で有名である。前回の明治37年に一高の無声堂で行われた対二高試合は、前々回（明治36年）の試合と同様に、保元・平治の昔に準じて個人一騎打ちの三本勝負で戦われたもので、勝ち抜き戦の方式ではなかったが、二高の五勝三敗二引分けて二高が優勢であったことから見れば、明治39年の仙台での試合（勝ち抜き戦）で一高が大将・副将の二人を残して勝利したことにより、その雪辱を果たしたと見ることでできよう。

なお、次に掲げる同年の寮歌95『煙に似たる』（吉植庄亮作詞）の項を

95 第二十回紀念祭寮歌『煙に似たる』（明43北寮／吉植庄亮 作詞）

参照されたい。

三 「青葉城下の凱歌を」  
（かろうた）

あこがれ惜むことなかれ

若草青む七丘に

もゆる血潮のうすれては

かなしからずや古ローマの

玉座に風の寒かりき」

【解説】「青葉城下の凱歌を」—— 同年の「新草萌ゆる浅みどり」第四節

の語釈参照。』とし、やはり「対二高柔道戦」と推定している。』

【私見】「青葉城下の凱歌をあこがれ惜むことなかれ」—— この寮歌の解釈

に当たっては、作詞者の吉植庄亮が撃剣部の闘将であったことを念頭にお

く必要がある。前出の『新草萌ゆる』《新聞智啓作詞》の項で私見として

述べたと同様に、ここでの「青葉城下の凱歌」とは、明治二十九年四月四

日に撃剣部が仙台で行われた対二高戦に勝利したことを指し、その勝利の

思い出を懐かしむだけにとどまっていてはならないと警鐘を鳴らしてい

ると解する。

四 「古りし夢追ふ懈怠は」  
（おこたり）

捨てよ砂漠の如くにも

生命いのちの泉涸れやせん

醒めよと響く鐘の音に

今日の戦勝ちてこそ

【解説】「古りし夢追ふ懈怠は」—— 《言及なし。》

【私見】「古りし夢追ふ懈怠は」—— この句も右の第三節と同じく、明治39

年の勝利の夢を追って精進を怠ることを戒めている。

【解説】「今日の戦勝ちてこそ」—— 《言及なし。》

【私見】「今日の戦勝ちてこそ」—— この寮歌が発表された明治43年3月の

若き男子せうしの譽なれ」

時点では、四年ぶりの対二高戦を四月七日に控えていた。吉植は選手としてこの試合への出場が予定されていたわけだから、この句の「今日の戦勝ちてこそ」という表現がぴたりとあてはまる。この日の試合では、一高が大將・副將の二人を余して快勝したが、吉植は四將として出場、二高の四將・三將の二人を降し、副將と引き分けるといって大活躍を見せた。

96 第二十回記念祭寮歌『颯風を孕み』(明43 中寮)

一 「颯風を孕み雨を呼ぶ

妖雲暗く胡沙罩め」

【解説】「颯風を孕み」——「颯風」ははげしい暴風。

【私見】「颯風を孕み」——土井晩翠の次の詩を踏まえる。

▼「あらしを孕み風を帯び／光を掩ふてかけり行く」《晩翠「雲の歌」》

二 「桃源郷裡夢深く

華陽の眠りいつ醒めむ」

【解説】「華陽の眠りいつ醒めむ」——中国六朝梁の陶弘景は、華陽隱者・華陽真人と号し、よく神仙の術を行った。このことにヒントを得たと思われるが確かでない。

【私見】書経『武成』篇に、周の武王が殷の紂王を伐ち、その武功が成就したこと、そして武器はしまつて文徳を布き、馬を華山の陽(南)に帰し、牛を桃林の野に放つて、天下にもう用いないことを示したと記されている。このことから、「天下泰平」を貪ることを「華陽の眠り」と表現したと考



97 第二十回記念祭寮歌『春の臺の』(明43 朶寮)

えられる。なお、101『華陽の夢の花泛ぶ』(明43)を参照されたい。  
▼11『武成の昔』(明32／植竹一陸)の第一節に「武成の昔ありきてふ／野邊に狂へる春駒の……」とあるのも、右に述べたのと同様に、華陽に放たれた「馬」になぞらえて、平和に浮かれている様を示す。

98 第二十回記念祭寄贈歌『藝文の花』(明43 東大／大貫雪之介 作詞)

一「<sup>げいぶん</sup>藝文の花咲きみだれ

<sup>おせひ</sup>思想の潮湧きめぐる

<sup>みやこ</sup>京に出でて向陵に

學ぶもうれし、武藏野の

秋の入日はうたふべく

萬卷の書は庫にあり」

【解説】「秋の入日」「萬卷の書」——《言及なし。》

【私見】「秋の入日」——この寮歌の当時は9月入学であったことから、一高入学の感激と読書の秋への期待とを重ね合わせて、「秋の入日はうたふべく」と表現したのである。一高寮歌の第一節では、記念祭の挙行される春の季節を歌ったものが圧倒的に多く、秋から始まる一高寮歌は、わずかな数篇にとどまる。

▼「月は老ゆるを知らねども／萩には秋の定めあり」《179「東寮告別歌」大7》

▼「榮華は古りし」二千年／廢墟にむせぶ秋の風」《200「榮華は古りし」大12》

▼「清らかに秋の夕ぐれ／銀杏葉は道に積もりて」《284「清らかに」昭15》

「萬卷の書」——唐の詩人杜甫に次の詩句がある。

二「降りつむ雪にうづもれて

春を營む若草の

わかき心を誰か知る

なべての眠さめぬとき

眞闇まやみの中に人知れず

鳴くなぐ鶏たけひを誰か知る

▼『奉<sup>ル</sup>贈<sup>リ</sup>韋左丞<sup>ニ</sup>』(二十二)韻 「読書破<sup>リ</sup>萬卷<sup>ヲ</sup>」下筆如<sup>レ</sup>有神

一高寮歌には、「萬卷の書」に類する表現がいくつか登場するが、このうち「新墾の」では、読書を「空しい」としているのが特徴的である。

▼「萬卷胸に鉄骨鍛へ／四海の中を轟かせ」≧29 『我一高は』明35 ≧

▼「眞理を競ひ燈を掲げ／萬卷の書を究めばや」≧253 『大海原の』昭10 ≧

▼「緑なす眞理欣求めつゝ／萬卷書索るも空し」≧267 『新墾の』昭12 ≧

▼「千萬の卷繕きて／先行きし人の跡を尋ねぬ」≧293 『ほのぼのと』昭16 ≧

【解説】「春を營む」——《言及なし》。

【私見】「春を營む」——「營む」は「用意する、準備する」の意。「春を迎え

る用意をする」という表現で「高生が将来に備えて努力するさまを示す。

▼「歳暮に下人等山より松などきりていづる所

千代経へき松さへ山を出でにけり／春を營むしづに引かれて」

《月清集・下》、一二〇四年頃》

【解説】「鳴く鶏を誰か知る」——「鶏」はニワトリの異名。無自覚な世俗に

先んじて警告を発する英知の喩えとして使っている。

【私見】「鳴く鶏を誰か知る」——「人知れず鳴く鶏」も「春を營む若草」と

同様に、人に知られぬ間に準備することの喩えであろう。

二「奇をあさり行くされ人に

加茂のながれはふりにたり

ゆかしき跡をたづぬれば

とはの命ぞひそみたる

古き泉に新しき

心を汲まむよしもがな」

三「藝術の門を過ぎてこそ

知識の國に入るべけれ

詩の心はふかけれど

おぼろに知りぬ此郷の

【解説】「本寄贈歌の特色は日本の古い歴史と文化に最も縁の深い古都の自然

と風物と文化財が醸し出す奥ゆかしさ、「とはの命」を温雅な調べで歌っている点であり、残るところは、ありきたりの表現による後輩への挨拶にとどまっている。」とするのみで、個々の詩句の解釈には触れていない。

【私見】

「奇をあさり行くされ人」——自らを戯画化した表現か。

「ゆかしき跡をたづぬれば とはの命ぞひそみたる」——81 『いざ行

かむ』（明41京大）第四節の次の詩句を踏まえ、京都の地に根づいた藝術の永遠性を強調しているものと解する。

▼「藝術はここに地と和して 長久の命あり」

【解説】「藝術の門を過ぎてこそ知識の國に入るべけれ」——《言及なし。》

【私見】「藝術の門を過ぎてこそ知識の國に入るべけれ」——「藝術の門」と

は、藝術・文学・哲学などの基礎的な教養を身につける場としての高等

学校、「知識の國」とは、専門的実学的な学問に精進する場としての大学

100 第二十回記念祭寄贈歌

山河けちかく睦みては  
學びの窓をたづねつゝ」

「春の朧のよひにして  
轉寢すらむ雅び男の  
薰する袖は長くとも  
星はかくれつ風なぎつ  
博多の海の浪枕  
千鳥の夢は深くとも  
「きたひし腕」忘れんや  
……………  
「みがきし劍」うせなんや」

と位置づけて、高等学校の課程をきちんとこなした上で初めて大学での学問が成就するものと主張していると解する。  
なお、このほかに、せつかく京都の大学に進学したのだから、ただちに専門的実用的な勉学に没頭するのではなく、その前に京都の文化・藝術を大いに吸収すべきだ、という解釈もありえよう。

『春の朧のよひにして』（明43福岡大／佐藤清一郎 作詞）

【解説】風光明媚な博多湾周辺の春の宵に、「雅び男」は惰眠をむさぼり、「千鳥」の夢は深かろうとも、自分たちは「きたひし腕」「みがきし劍」、すなわち尚武の精神を決して忘れない旨を優雅に歌っている。

【私見】一高OBの自分たちを「雅び男」（＝風流人）あるいは「千鳥」になぞらえ、春の宵に博多の海辺で轉寢しながら向陵の夢を見ているさまを歌う。むかし、袖を折り返して寝ると戀しい人が夢の中に現れると信じられていたというが、「雅び男」（＝自分たち）が香を薰きこめた袖を折り返さないまま轉寢してしまったとしても（薰する袖は長くとも）、あるいは、友と呼び交わすとされる「千鳥」（＝自分たち）が深く眠ってしまったとしても、懐かしい向陵が夢に現れるし、「きたひし腕」「みがきし劍」、すなわ

ち尚武の精神を決して忘れることはない、それほど自分たちの向陵への思いが深いのだ、といっているのであらう。

▼「うたた寝に戀しき人を見てしより 夢てふものは頼みそめてき」

《古今・恋2・小野小町》

▼「敷栲の袖返しつつ寝る夜落ちず夢には見れど」《万葉集・卷17 三九七八》

▼「立つ白波に友千鳥／心へだてず声かはす」

《35 『筑波根あたり』明36 東大》

▼「歡呼の浪の岸を打ち／千鳥友よふ自治の海」

《94 『新草薙ゆる』明43》

なお、「博多の海の浪枕」は歌舞伎の『博多小女郎浪枕』からの連想ではなからうか。近松門左衛門作のこの歌舞伎狂言では、京の商人惣七は博多柳町の遊女小女郎を身請けすべく博多へと向かう途中、抜け荷の商いを目撃したため、海賊の毛剃九右衛門によって船から海中に投げ込まれてしまふ。このときその船は、「千鳥の合方」（下座音楽）にあわせて半回転する見せ場がある。

一 「華陽の夢の花<sup>はな</sup>泛<sup>はら</sup>ぶ

世は濁江の波枕」

【解説】「華陽の夢」——中国六朝梁の陶弘景は、華者・華陽真人と号し、よく神仙の術を行った。それを指すものと思われるが、確かではない。

【私見】「華陽の夢」——書経『武成』篇に、周の武王が殷の紂王を伐ち、その武功が成就したこと、そして武器はしまつて文徳を布き、馬を華山の陽(南)に帰し、牛を桃林の野に放つて、天下にもう用いないことを示すと記されている。このことから、「天下泰平」を食ふことを「華陽の夢」と表現したと考えられる。なお、96『颶風を孕む』(明43)を参照されたい。

五 「長白山の雪解けて……

鶏啼く野邊に響けかし」

【解説】「長白山」(≡白頭山、中国朝鮮の国境の山)の解説のみ。

【私見】「鶏啼く野邊」——「鶏」<sup>かひ</sup>は鶏林(朝鮮)のことを指す。明治43年の韓国併合を受けて、一高生の歌声が、朝鮮の地に響くようにと詠っている。

102 第二十二回記念祭寮歌 『月は朧に』(明44 西寮／中村恒三郎 作詞、堀内伊太郎 作曲)

一 「月は朧に香をこめて

かざしの櫻かげみだる

うつゝ心の興<sup>かたはら</sup>樂に」

【解説】「かざしの櫻」——《言及なし。》

【私見】「かざしの櫻」——髪に挿した櫻の花や枝のこと。

▼「手まぐらの夢はかざしの櫻哉」(蕪村)

春とどむるも駐まらじ  
思はながし珠ゆらに  
人老いやすき歎きあり」

▼「少女子がかざしの櫻咲きにけり

袖振る山にかかる白雲」《続後撰集・藤原為氏》

▼「飛鳥風のどかに渡れたをやめの

かざしの櫻いま盛りなり」《続後撰集・津守国助》

【解説】「うつゝ心の興樂に 春とどむるも駐まらじ」——《言及なし》

【私見】「うつゝ心の興樂に 春とどむるも駐まらじ」「うつゝ心」——①正気

②「夢うつゝ」と続けて使われることから誤解されて、夢か現実かわからないよ  
うな状態。→②ここでは②の意か。

「春とどむるも駐まらじ」——次の詩句を踏まえるか。

▼「つねに春の野に出でて花にたはるれ、霞にうそぶくはおもしろけれど  
も、春をとどむるにとどまらず。……「旦の興に待るべし。」

『宝物集』巻第二（新日本古典文学大系40・岩波書店）による

〔宝物集〕平安末期（十二世紀）の仏教説話集

▼「留レ春春不レ住、春帰人寂寞。」

《和漢朗詠集上「三月尽」『落花古調詩』（白樂天）》

【解説】「思はながし珠ゆらに」—— 思いはいつまでもつづくのに、時間は  
たちまちたつてしまふ、という意。（たまゆら）は、ほんのわずかの間。）

二「珊瑚の鞭もくだきされ

朱纓もなにかつなぐべき

はかなき傲り我すてん

士節の操かたければ

三千年の建國の

理想の偉圖を紹ぎなさん

【私見】「思はながし珠ゆらに」——「思はながし」の用例として、石川啄木

が渋民小学校代用教員当時に作った卒業式用の歌の一節がある。

▼「心は高し岩手山 思ひは長し北上や

こゝ渋民の学舎に むつびし年の重なりて」《啄木『別れ』(明40)》

【解説】——「珊瑚の鞭もくだきされ」——珊瑚でこしらえた馬の鞭もくだ

いてなくしてしまえ。(「珊瑚の鞭」は高価で贅沢なものの象徴である)

【私見】唐代の都の貴公子の豪奢な遊び振りを詠った詩を下敷きにする。

▼「遺却珊瑚鞭、白馬驕不行。」(盛唐・崔国輔『長安少年行』)

(珊瑚の鞭を忘れてきたので白馬がわがままを起して進もうとしない。)

【解説】「朱纓もなにかつなぐべき」——「朱纓」は赤い色の冠の紐。同じく

派手で贅沢なものを象徴させているのであろう。そうした「朱纓」もどう

してつなぎとめておけようか。

【私見】「纓」には「馬車につなぐときに馬の首にかける革紐」の意もある。

ここでは朱纓を「つなぐ」とあるので、派手な赤い革紐によって、どうし

て馬を馬車につなぎとめておけようか、の意であらう。

【解説】「三千年の建國の理想の偉圖を紹ぎなさん」——「偉圖」は「偉業」と

同じか。



103 第二十一回記念祭寮歌『オリムパスなる』（明44南寮／山宮 允作詞、井上 赳作曲）

104 第二十二回記念祭寮歌『妖雲瘴霧』（明44北寮／北寮六番室 作詞作曲）

三「思へウラルの山風を

西に驅けるは百萬騎

馬頭に高し北斗星

天二日なく地に一王

世界を統べんその心

今我胸に傳はれり」

【私見】「三千年の建国の理想の偉圖を紹ぎなさん」——「偉圖」は立派な計画をいう。「三千年の建国の理想」とは、日本書紀の「橿原建都の詔」にある「掩<sup>ヒテ</sup>二八紘<sup>ヲ</sup>一為<sup>セム</sup>レ宇<sup>イヘト</sup>」（世界民族が一つになって平和に暮らす）を指すと解する。

【解説】「思へウラルの山風を……馬頭に高し北斗星」——具体的に何を指すのか不詳。後考を俟つ。

【私見】「思へウラルの山風を……馬頭に高し北斗星」——この節は、チンギス・ハーンとその子孫たちによるモンゴル帝国の事蹟を想起しながら、日本もこれに倣って世界に覇を唱えるべきだとの心情を歌っている。

モンゴル帝国は十三世紀はじめにチンギス・ハーンによって建設され、当時の世界の大部分を席卷した大帝国内である。この帝国は、東の中国世界と西の地中海世界を結ぶ「草原の道」を支配することにより、ユーラシア大陸に住むすべての人々を一つに結びつけ、世界史の舞台を準備した。

#### 四

「陸を浮べし大瀛のたいえい水を通ずる一運河  
開かば波瀾湧き出でて  
あゝ乾坤の一雄圖  
機先を執るの時は今

《参考書》ちくま新書『モンゴル帝国の興亡』岡田英弘

チンギス・ハーンの即位式の際に、「天上には唯一の永遠なる天の神があり、地上には唯一の君主なるチンギス・ハーンがある」という神託がくだったと伝えられ（「天一日なく地に一王」）、この天命を受けて、チンギス・ハーンとその子孫たちに率いられたモンゴル人たちは、世界征服の戦争に乗り出したとされる（「世界を統べんその心」）。第2代のオゴデイ・ハーンの一二三六年、モンゴルは東西への大遠征を計画した。この西征では、チンギス・ハーンの長子ジュチの次子バトウが総指揮官となり、大騎馬軍団を連れて、ロシアから東欧に進攻した（「思へウラルの山風を」「西に驅けるは百萬騎」「馬頭に高し北斗星」）。このバトウの西征（バトウと馬頭とをかけたか）は、史上「ロシア・東欧遠征」と呼ばれて、大変有名である。

【解説】「陸を浮べし大瀛の……あゝ乾坤の一雄圖」——瀛は海、大海。

いくつもの陸につながる大海に、一つの運河を開くと、怒濤がすさまじい勢で湧き出し、流れ、乾坤一擲壮大な意図が成し遂げられる。日本はあたかもそのような役割を背負っているというのであろう。

【私見】解説では「運河」を単なる比喩と見ているようだが、ここに登場す

眠れる獅子よいざなめよ」

105 第二十二回記念祭歌『八島を洗ふ』(明44 中寮／竹田武男 作詞、橋口正樹 作曲)

二「曇れ正字に雲しどろ

霽るれば霜に互え返る

空しき天の戸に映えて

彩なす色を懐しみ

あくがれ来ればさきくはらに

向が陵の春の花」

る運河は、「パナマ運河」のことであろう。同運河は一九〇四年に着工され、完成したのは、本寮歌(一九一一年)の三年後の一九一四年のことである。アメリカ合衆国がコロンビアからのパナマの独立支援の見返りに運河建設権を獲得して建設を進め、カリブ海と太平洋を短絡することによって、南米の資源支配とアジア・太平洋地域への進出を企図したとされる。本寮歌は、運河建設を「乾坤の一雄図」ととらえつつも、こうしたアメリカの意図を警戒し、日本は運河完成前である今こそ長い眠りから醒めて、「機先を制」して万全の備えをすべきだと唱えているのではないか。

【解説】「正字に雲しどろ」——「正字に」は「まんじともえに」の意。入

り乱れるさま。「しどろ」も秩序なく乱れたさま。日本語として熟さない。

「天の戸」——雲のさまさまな彩りが、天に通ずる戸のように見えるというのであろう。

「あくがれくはらに」——先を争って咲く、の意(神道語)。

【私見】「正字に雲しどろ」——昭和50年版までの寮歌集では「しどろ」であったが、意味不明であるとして、平成16年版で「しどろ」と改訂され

三「春の魁せまがけなす者は

何に譬へむ南より

北より注ぐ美酒の

甕かめに契を汲み交し

燃ゆる息吹いぶきに空呼そらこゑへば

虹散亂さんらんの眺ながかな

た。しかし、「しとど」とはひどく濡れるさまをさすから、雲を雨雲と解すれば「しとど」でも意味は十分通するのではなからうか。「返まえ返る」はしんしんと冷えるさま。

「天の戸」——空。「空しき天の戸」は「大空、虚空」のことをさす。

▼「空しき天の戸を出でて……人の世近く来るとは」《藤村「明星」》

▼「秋風に声をほにあげて来る舟は／天の戸渡る雁にぞありける」

《古今、秋上・藤原菅根》

「彩なす色」——第三節で「虹散亂の眺かな」と歌っていることを考えると、雲の彩りと見るよりも、大空に映える七色の虹をさすと解したい。

【解説】「南より／北より注ぐ美酒の／甕に契を汲み交し」

——真意不明確な表現で問題がある。

【私見】「南より／北より注ぐ美酒の／甕に契を汲み交し」

——「南より／北より注ぐ」とは、日本全国から集まってきた一高生が互いに酒を汲み交しているさまを表現している。

▼「されど今宵は祭りの夜／蝦夷よ熊襲よ田居せん／美酒汲みていざやい

ざ／歌ひ明かさん秋の夜を」《野分の丘に》昭27 東大駒場寮》

▼「あゝ東よりはた西ゆ／柏の森に集ひ来て」《164「櫻眞白く」大6》

106 第二十一回記念祭寮歌『光まばゆき』（明44 朶寮／柳澤 健 作詞、飯田銀四郎 作曲）

六「あゝ穹窿に風きほひ

海潮音の轟とんぼりや」

【解説】「海潮音の轟や」——《言及なし》

【私見】「海潮音の轟や」——藤村に次の詩がある。

▼「岸つつ波は波羅蜜の／海潮音をとどろかし」《島崎藤村「寂寥」》

三「夜六寮に灯は消えて

星影青くまたゝけど

思ひはおなじあひよりて

こころづくにくみかはし

胸にあふるゝ感激の

涙は頬を伝ふかな」

【解説】「こころづくにくみかはし」——《言及なし》

【私見】「こころづくにくみかはし」——作詩者が敬愛した島崎藤村の次の詩

を踏まえたものであろう。

▼「盃あげて美き酒を　こころづくにくみかはし

歌をつくりてよろこびの　この暁をうたひうたはん」

《藤村『夏草』「暁の誕生」》

四「三年の春は過ぎ易し

花くれなるの顔かんほせも

いま別れてはいつか見む

この世の旅は長けれど

橄欖の花散る下に

再び語ることもやある」

【解説】「花くれなるの顔も」「今別れてはいつか見む／この世の旅は長けれど

……／再び語ることもやある」——《言及なし》

【私見】「花くれなるの顔も」——藤村は「くれなるのかほばせ」という表現

を好んだ。代表的なものをひとつだけあげておく。

▼「梅のほひにめぐりあふ　春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに　流れてあつきなみだかな」

昭和三年から二十一年まで一高で体操・教練を担当した退役陸軍大尉の小林弥三郎氏は、酒焼けで鼻が赤かったことから「花くれ」と綽名されて、当時の一高生に親しまれたという。

「いま別れてはいつか見む／この世の旅は長けれど……／再び語るこ  
とやある」——出口競著『校歌ロオマンス』（大6／実業之日本社）によ  
ると、この部分の歌詞は、作詞者柳沢氏の敬愛する左団次の芝居『貞任宗  
任』（岡本綺堂作）の台詞から採ったものだという（南部直樹氏のご教示に  
よる）。調べてみると、岡本綺堂の『貞任宗任』は、明治43年11月作、明  
治44年1月明治座初演とあり、ちょうどこの寮歌の発表の直前にあたる。  
ただし出口著の内容にはいくつかの事実誤認があることがわかった。  
同書には「其の日の演技だしものは岡本綺堂氏の貞任宗任で、松蔦の松山が例の如  
く艶麗なる姿を見せた。……耳に快よい松蔦の舞詞せりふの一二が柳沢君の耳に  
にとまった。それが『今別れてはいつか見む、この世の旅は長けれど』ま  
た『再び語る事やある』と云ふのであった。……丁度寮歌をつくるべき時  
であった。それで寮寮を代表して柳沢君の歌が出た。歌の中にはありく  
と其の松蔦の台詞が含まれてあったのである。」とある。

『貞任宗任』という芝居では、安倍貞任・宗任兄弟の妹の松山と敵軍の間者丹後小次郎時兼との間の悲恋物語があり、小次郎の「今別れては又再びこの世で逢わりようやら……逢われぬやら……。」というセリフに続いて松山の「この世で逢われれば未来で逢おう」というセリフがある。しかしこのとき小次郎を演じたのは六代目寿美蔵、松山を演じたのは初代沢村宋之助であつて、いずれも松薦しやうてう（二代目市川松薦）ではない。松薦はこのときはまだ市川莚君という芸名で、この芝居では小磯という女の役を務めていたが、翌明治45年に二代目市川左団次の妹幸子と結婚し松薦を襲名した。立女方として美貌と風姿で人気を集めた役者であつた。

さらに、安倍貞任が弟宗任にいうセリフにも「多年むつみし兄弟も今別れては又逢われまい」というのがあるが、貞任役は市川高麗蔵、宗任役は市川左団次である。いずれにせよ、「この世の旅は長けれど」と「再び語ることやある」に相当するセリフはこの芝居には出てこない。

『岡本綺堂戯曲選集第一卷／青蛙房』による

「いま別れてはいつか見む」——次の詩句がある。

▼「けふ別れてはいつかまた 相逢ふまでの名残ぞや」

『藤村』「夏草」『農夫』

▼「きみくれなるのくちびるも きみがみどりのくろかみも

またいつかみんなのわかれ」  
《藤村『若菜集』「四高樓」》

▼「神無月まれのみゆきに誘はれて」

今日別れなばいつか逢ひ見む」《新古今》・一条右大臣

「この世の旅は長けれど」——松本深志高校（旧制松本中学）の校歌

（大正11年）の第二節にもこの表現が使われている。

▼「時の流れは強うして この世の旅は長けれど」

自治を生命の若人は 強き力に生きる哉」

《参考》『僕の「光まばゆき」』 柳澤 健《一高同窓会『会報』第24号、昭9・1》

「その頃恰度明治座に岡本綺堂の『貞任宗任』がかかってゐた。寿美蔵の扮した若武士が莚若《今の松薦》の扮した綺麗な腰元を相手に別離の悲しみを述べる場面がある。その時の寿美蔵の科白が『今別れては何日かまた逢ひ見る事のあらうぞ……』とある。

寿美蔵のあの淋しい艶のある声が耳許に残つてゐる頃、僕だったので、容赦なく紙に書いたものだ。『三年の春は過ぎ易し、花くれなるのかむばせも、今別れてはいつか見む……』

僕はこの時牢屋のやうな寮の建物のことや弊衣破帽の髻男のことやを憶ひださずに、あのはなやかな明治座の舞台の上のきれいな男女の姿を想ひ浮かべてゐたのだ……」



一 「雲<sup>の</sup>巻き雲<sup>の</sup>舒<sup>ふ</sup>天外<sup>に</sup>に  
てうきせきん

朝暉夕陰變れども

榮辱胸に留らねば

石上樂しむ碁一局

清泉綠卉美しき

丘の昔を思ふかな

【解説】「雲巻き雲舒ふ天外に」——《言及なし》。

【私見】「雲巻き雲舒ふ天外に」「榮辱胸に留らねば」——この寮歌の一と二節

は、中国明末の『菜根譚』(洪自誠著)からの引用が中心となっている。

▼「寵辱不<sup>レ</sup>驚<sup>カ</sup> 閑<sup>シ</sup> 看<sup>ル</sup>庭前花開花落<sup>一</sup>」。

去留無<sup>ク</sup>レ意<sup>ヲ</sup> 漫<sup>ソ</sup> 随<sup>フ</sup>天外雲卷雲舒<sup>一</sup>。「菜根譚」後集70項

(榮譽をうけても屈辱をうけても、常に泰然と構えている。それはちやうど、咲いては散る庭先の花を静かに眺めているような心境だ。位を去ろう

ど、咲いては散る庭先の花を静かに眺めているような心境だ。位を去ろう

が留まろうが少しも気にしない。それはちやうど空の雲が巻いたり伸び

たり思いのままに形を変えるところとそっくりだ。)以下、守屋洋氏訳による。

【解説】「石上樂しむ碁一局」——前漢の衛叔卿の子・度世が父を山中に尋ね

たら、父は知人と石上で博奕をしていたという故事《神仙伝》によるか。

【解説】「清泉綠卉」——「綠卉」は緑の草。

【私見】「清泉綠卉」——『菜根譚』後集71項を踏まえる。

▼「晴空朗月、何天不可<sup>レ</sup>二翻翔<sup>一</sup>。而飛蛾獨投<sup>レ</sup>夜燭<sup>一</sup>」。

清泉綠卉、何物不可<sup>レ</sup>二飲啄<sup>一</sup>。而鷓鴣偏嗜<sup>レ</sup>腐鼠<sup>一</sup>。(鷓鴣||フクロウ)

二「疎竹を渡る風の音」

やがて過ぐれば聲留めず

遠く隔てゝ此の日頃

思ひ許りぞ驅りたり

帰る故郷の窓の燭に

躍る心を知るや君」

三「薫りゆかしき橄欖の

若葉さゆらく花のかげ

さまよひ歌ふ一曲は

噫、世之不<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>飛蛾鷓鴣<sub>一</sub>者、幾何人哉。」

（晴れた空に明るい月がかかつて、どこへでも飛んでゆけるのに、蛾だけはわざわざ灯火に飛びこんで命を落とす。清水が湧き青草が茂つて、飲み物にも食べ物にも事欠かないのに、フクロウだけはわざわざ腐った鼠をむさぼっている。ああ、蛾やフクロウの真似をしない者が、この世に何人いるだろうか。）《人は月や草花のような自然に順応して生きるべきだ。》

【解説】「疎竹」——まばらに生えた竹。

【私見】「疎竹を渡る風……声留めず」——『菜根譚』前集82項を踏まえる。

▼「風来<sub>二</sub>疎竹<sub>一</sub>、風過而不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>声。

雁渡<sub>二</sub>寒潭<sub>一</sub>、雁去而不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>影。

故君子事来而心始<sub>レ</sub>現、事去而心随<sub>二</sub>空<sub>一</sub>。」

（風が起れば竹の葉は騒ぐが、吹きやめばまたもとの静寂に戻る。雁がも、事が起ればそれに対応し、事が過ぎればまたもとの静けさに戻る。）

【解説】「素琴弦無く調あり」——出典として、宋書『陶潜伝』を挙げている。

▼「潜不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub>音声<sub>一</sub>、而畜<sub>二</sub>素琴<sub>一</sub>一張<sub>二</sub>無<sub>レ</sub>弦。

每<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>酒適<sub>一</sub>輒<sub>レ</sub>撫<sub>二</sub>弄<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>寄<sub>二</sub>其意<sub>一</sub>。」《宋書『陶潜伝』》

素琴弦無く調あり  
あゝ 惨じき世を外に  
月傾きぬ花の宴

#### 四 「花散りかゝる春の夜の

心の春の燭火に  
紅き面を照しつゝ  
語り明かさんこの一夜  
胸の歌草秘むなかれ  
君と我とのなかなれば

〔陶潜は音楽には通じていなかったが、弦の張っていない琴を持っていた。

彼は酒を飲んで気分が乗ると、必ずその琴を弾くまねをして、それに自分の気持ちを託していた。〕《陶潜の物事にこだわらない心境を伝える話である。》

【私見】「素琴弦無く調あり」——『菜根譚』後集134項を踏まえる。

▼「素琴 無レ弦而常 調、短笛 無腔而 自適。」

〔琴には弦がなく、笛には穴をうがっていないが、いつでも声なき調べが楽しめる。〕《世捨て人の風流は、自然流の心まかせがもつともよい。》

【解説】「心の春の燭火に 紅き面を照しつゝ」——《言及なし。》

【私見】「心の春の燭火に 紅き面を照しつゝ」——藤村を踏まえる。

▼「心の春の燭火に 若き命を照らし見よ」《島崎藤村『醉歌』・若菜集》

※「心の春の燈火に 若き命を照すかな」《寮歌『朧月夜に仄白く』大7》

【解説】「秘むなかれ」——「秘むるなかれ」が本来だが字数の関係で破格に。

【私見】「胸の歌草秘むなかれ 君と我とのなかなれば」——藤村を踏まえる。

▼「旅と旅との君や我 君と我とのなかなれば」

酔うて袂の歌草を 醒めての君に見せばやな」《藤村『醉歌』・若菜集》

（※「歌草」は、歌の草稿、詩稿。歌を書きとめたノート。）

108 第二十一回記念祭寄贈歌『雪こそよけれ』（明44京大／福井利吉郎 作詞）

109 第二十一回記念祭寄贈歌『雲や紫』（明44京大／佐藤清一郎 作詞）

二「霞がくれの瀧津瀬も

香蘭の水の清らかに

分かれて白し二條の

流れは野邊を下り行く」

三「白蛇ならびていや遠く

八重の潮路にをどり入る」

猛き姿よ玄海の

千尋の底は闇にして」

【解説】「分かれて白し二條の流れ」——《言及なし》。

【私見】「分かれて白し二條の流れ」——一高の制帽又は護国旗の「二條の白

線」を指すと見る。

▼「二條の線、柏葉の章」《29『我一高は』明35東大》

▼「清き二條の白線に／浮かぶ北斗の啓示得て」《四高『夢章葉の』大3》

▼「白きラインは二條に／希望と力に輝きて」《六高『金字塔下に』大13》

【解説】「白蛇ならびて……」——玄界灘にまつわる何か典拠になる説話があったのであろう。詳細は不明。

【私見】「白蛇ならびて……」——第三節の「白蛇ならびて」も前節の「分かれて白し二條の流れ」を受けて、同じく「二條の白線」を指し、一高の卒業生が勇んで大学（九大）に進学するさまを「いや遠く八重の潮路にをどり入る猛き姿」に喩えているのではないか。

110 第二十二回記念祭祭歌『しづかに沈む』（明45東寮／秦 豊吉 作詞、井原虎藏 作曲）

四「失せなむ迄は紅の

ついに<sup>は</sup>萎む花草を

咲けるがまゝに摘み行かむ

空しき光消えぬ間に

三とせの春を享樂の

あゝ若き日をすべからばや

【解説】「享樂」——秦豊吉は、明治45年度文芸部委員就任の辞として「ひた

すらに学生時代享樂主義を思ふ」との語を用いたのが物議をかもし、弁論部の演説会で矢内原忠雄等に強い批判を受けたが、正面切つて答えることはなかった。

【私見】「享樂」——第四節のような「今をつかめ、樂しめ」(carpe diem)

という享樂主義の主題はローマ詩人ホラティウスの『頌歌』に発し、以後ヨーロッパの多くの詩人たちによって色々な変奏が歌われてきたとされる。

【英文学でいえば、E・ス・ペンサーの『はらを摘め』R・ヘリックの『処女たちへ』等々】

▼伊／ロレンツォ・ディ・メデイチ『バッカスの歌』(17世紀)

「青春とは何と美しいもの／とはいえ、みるまに過ぎ去つてしまふ／  
愉しみたい者は、さあ、すぐに／たしかな明日はないのだから」

(塩野七生訳)

▼上田敏が『明星』に書いた『亂れ髪』(與謝野晶子)への評(明治34年)

「あすはけふかや摘め摘め薔薇を」(※上田は「享樂主義」を提唱した。)

▼デンマーク／H・C・アンデルセン『即興詩人』(19世紀)

「朱の唇に触れよ、誰か汝の明日猶在るを知らん。恋せよ、汝の心

の猶少く、汝の血の猶熱き間に。……来れ、彼輕舸の中に。」

(明治34年／森鷗外訳)

▼吉井勇『ゴンドラの唄』

(大正4年に帝劇で上演されたツルゲーネフ『その前夜』の主題歌)

1 「いのち短し 戀せよ乙女 紅き唇 あせぬまに

熱き血潮の 冷えぬ間に 明日の月日はないものを」

(以上は、高島俊男『お言葉ですが……No.③ 明治タレント教授』(文春文庫)所載の「命短し戀せよ乙女」の項に多くを負っている。)

秦豊吉が「享樂主義」を唱えたこの寮歌は、『ゴンドラの唄』より前に作られたものだが、右の文芸思潮の影響を受けたことは確実であろう

これに続いて 大正年間には、「享樂」という語を使った一高寮歌が6篇作られており、このうち①、④、⑤、⑥の4篇は、「アンチ享樂主義」の立場に立っている。

▼①「かの享樂の酒甕に／惑ひし心覚め果てば」≧135 「大空舞ひて」大3 ≧

▼②「三年の丘の享樂の／靄に花さく追憶に」≧138 「まだうらわかき」大3 ≧

▼③「橄欖の蔭よもすがら／語りし友も享樂の」≧139 「廣野をわたる」大4 ≧

▼④「群れさまよへと享樂の／野に永劫の眠りせじ」≧170 「うらにもゆる」大7 ≧

111 第二十二回紀念祭寮歌『霧淡晴の』(明45 西寮／久保勘三郎 作詞、上沼健衛 作曲)

一 「霧淡晴の野にみだれ

くわえい

花影に春をさしまねく

夢に溶けゆく淺翠

みどり

あしたの空に立ち迷ひ

夕べの影にしがらめば

春にうつろふ光あり」

- ▼⑤ 「見よ、人の子は世を擧げて／只享樂の影を追ひ」《181 「一搏翱翔」大8》  
▼⑥ 「たゞ享樂の杯に／平和に酔はん日に非ず」《200 「榮華は古りし」大12》

【解説】《本寮歌は象徴詩風の暗示的表現を多分に導入しているため、各節の表現内容を概念的に明快に解き明かすことは困難だが、全篇に支配的なモチーフは、「武香が丘」に霧が流れる中、朧に霞む桜花の散りぎわに、近くの寺院の夕べの鐘が静かに鳴り響くような春のたたずまいのうちに、人生不可解の謎に発する、言い知れぬ嘆きと愁いとが感知される趣を詠するのが主眼になっているように思われる。》

「霧淡晴の野にみだれ 花影に春をさしまねく」——「淡晴」は、さっぱりと晴れる意。宋・楊万里の「春晴懷故園海棠」詩に、「乍暖柳条無氣力、淡晴花影不分明」とある。

「夕べの影にしがらめば」——「しがらめば」は、「からみつける」の意。

【私見】《解説書も指摘する如く、この寮歌の各節を明快に解釈することは困難だが、語釈・典拠等を通じて理解を深めてみたい。》

「霧淡晴の野にみだれ 花影に春をさしまねく」—— 一般的には春は

霞 秋は霧」と言うが、学問的には同じ現象である。万葉時代には春や夏の霧も詠まれ、古今集・後撰集・拾遺集でも「秋霧」が詠まれていることは、その当時までは、まだ霧が秋季と決っていなかったことを物語る。

右の楊万里の詩は「不意に訪れた陽気に、柳の枝は力なく、花曇りの空に花の色も淡くかすんで見える」（宋代詩文研究会訳、東洋文庫）という意味だから、本寮歌の「淡晴」は解説のいう「さっぱりと晴れる意」（諸橋大漢和）ではなく、「うつすらと晴れる意」（大字源など）と解した方が、詩意に沿うと思われる。

尚、春の日中の現象は「霞」、夜の現象は「朧」という。

「淺翠」——主として柳の新芽の色に使い、また春霞の色や「あさぎ色」の春空の色にもいう。春の空は、うす白く靄がかかっていることが多く、古人はその色を『淺緑』と形容した。

「立ち迷ひ」——「立ち迷ひ」と「しがらめば」の主語は、どちらも「霧」である。

▼「花の色にあまぎる霞たちまよひ

空さへ匂ふ山櫻かな（新古今、春下、藤原長家）

「春にうつろふ光あり」——「春光」は春の日光の明るい柔らかさであ



二「野に散りかかる花あらば

夢の名残を花に問へ

緑に迷ふ橄欖の

みづ枝に春は流れ来て

武香が丘にうす霞む

朧は花の怨なり」

三「力を刻む鐘あらば

古き壁面に響けかし

春をのがるる塔影たかえいの

る。春の景色・様子をもいう。ここでは、落日のあとも薄明りがしばらくつづく春の夕べの風情をさすのであろう。

【解説】「みづ枝」——みづみづしい若枝。

「夢の名残を花に問へ」——《言及なし》。

【私見】「夢の名残を花に問へ」——「夢の名残」は、夢から覚めても、なお夢の中にいる気分。夢の余韻。見果てぬ夢の残り。

▼『世に知らぬ心ひとつにありしよの

夢の名残を誰に問はまし』《新千載、今出川前右大臣》

「武香が丘にうす霞む」——鉄道唱歌に次の用例がある。

▼「海のあなたにうす霞む 山は上総か房州か」《大和田建樹》

「花の怨み」——「夢の名残」を問われた花の「怨」となれば、男のつれなさをかこつ女の閨怨を表現する「春怨」と相通じるとような感傷的な嘆きを象徴するのであろう。

【解説】「力を刻む鐘あらば古き壁面に響けかし」——法隆寺のことをいう。

▼「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」(正岡子規)

「雲の翅にかげろへば」——「かげろへば」はここでは「雲が影を映す」

雲の翅しほにかげろへば  
愁の秘義ひぎは解けがたし  
夕べは花に涙あり」

の意味に用いている。

「愁の秘義は解けがたし」——「秘義」は「深い意義」の意か。

【私見】「力を刻む鐘あらば 古き壁画に響けかし」——解説では「古き壁画」からの連想で「法隆寺のこと」とし、さらに「鐘」の縁で正岡子規の句を引いているが、無理な結びつけであろう。第五節の解説で寛永寺と推定していることとも矛盾する。

「力を刻む鐘」——「力をこめて時を刻む鐘」のこと。上野の寛永寺の鐘もしくは一高の時計台の時鐘のことであろう。

▼「力を刻む木匠こたくみの／うちふる斧のあとを絶え／  
春の草花彫刻の／鑿の韻もとらめじな」

「力をこめて木を伐つて彫る」(藤村／落梅集『深林の逍遙』)  
「古き壁画」——「高奇宿寮の寮室内の落書と解する」。

「春をのがるる塔影の 雲の翅にかげろへば」——古歌にも歌われた武蔵野の「逃げ水」(昼気楼現象の一種、春の季語)のことであろう。春の日ざしが強くなると、寛永寺の塔(もしくは一高の時計台)の影が路面上の雲に映っているように見えながら、こちらが近づくと逃げてしまうさま(「逃げ水」)を形容している。

四「春高樓にくづれては

春に傾く歎あり

若きは夢の流にて

三年をくみしいさゝ川

柏の森に散る花の

白きは春のたそがるゝ」

「愁の秘義は解けがたし」——「愁」は春愁、すなわち春の物思い、哀愁である。「春愁」は、これという原因はないのだが、何となく心が鬱屈して楽しくないさま。明治末期から大正期前半にかけての一高寮歌には、個我覚醒による感傷的な「愁い」を歌った寮歌が多く見られる。いくつか例を挙げてみよう。

▼「人の得知らぬ愁こそ かなしき胸をおほひけれ」

≪110 「しづかに沈む」明45≫

▼「淡き愁のいざなひに 解き得ぬ秘密ありとしも」

≪123 「ありとも分かぬ」大2≫

▼「若き誇はありながら 淡き愁をいかにせん」≪132 『春の光の』大3≫

【解説】「春高樓にくづれては」——「高樓」はたかどの。又、立派な家。

晩翠の「荒城の月」の冒頭を踏まえているか。

「いさゝ川」——「いささ」は小さな、僅かなの意。「いさゝ川」は

古い例無く、近世の語。

【私見】「春高樓にくづれては」——「高樓」は一高の寄宿寮。この節の「春は、くづれては」「傾く」「たそがるゝ」と、春の日ないしは季節の盛りを過ぎた情景の形容が続く。

五「見よ落日の雲ぞいろ

鐘になさけの響あり

覺めゆく春の心をば

今宵は花の下陰に

若き名残よもすがらに終夜

語りあかさん友よいざ」

「若きは夢の流れにて 三年をくみしいさゝ川」——短い春の夜は、はかない。ここでは「高三年間の寮生活を喩えている」。

▼「友と理想を語りてし 三年の夢は安かりき」《98 『藝文の花』明43 東大》

▼「三年の春は過ぎ易し 花くれなるの顔も」《106 『光まばゆき春なれど』明44》

▼「三とせは岡に佇みて……深き想に培はん」《150 『朧に霞む月の宴』大5》

▼「三とせは丘に佇みて 汝が青春の花いくさ」《282 『あまき舟うち』昭14 東大》

【解説】「鐘になさけの響あり」——上野の寛永寺などをいうのかとも思われるが、必ずしも写真に徹した表現ではないであろう。

【私見】「鐘になさけの響あり」——第三節とも関連するが、寛永寺の鐘もしくは一高の時計台の時鐘のことと考えられる。「なさけ」の解釈は困難だが、「情愛の潤い」と解したい。

「覺めゆく春の心をば」——「春の心」は春ののどかな、微妙な心の動き、春めいてきた心をいい、色気にもやや通じる。「覺めゆく春の心」は単に字義通りの意味だけではなく、ドイツのヴェデキントの戯曲「春のめざめ」（一八九一年）のテーマのように、青春期の性衝動の悩みを暗喩したものと解したい。

「若き名残に」——「名残」は惜別の情をいう。

【注1】解説書の注でも指摘されていることだが、この寮歌は「春」と「花」とにこだわって作詞されており、「春」が八回、「花」が七回出てくる。また、「夢」も二回使われている。

【注2】『霧淡晴の』は一高寮歌の中でもよく歌われたもののひとつだが、世間では、むしろ陸軍軍歌の『霧淡晴の』のほうがよく知られているかもしれない。この軍歌は、随所に一高寮歌の歌詞を借用していることと有名である。

▼軍歌『霧淡晴の』 \*作詞＝福山寛邦

\*曲＝一高寮歌『春二月の武香陵』の曲

「霧淡晴の野にみだれ 花影に春をさし招く  
春の女神は今日ここに 祭りの庭に訪れぬ

あはれ楽しきこの宴 いざ諸共に歌はなん」

(二行目は一高寮歌『霧淡晴の』、二行目は同じく『筑波根あたり』からの借用。第二節以下は省略。)

112 第二十二回記念祭寮歌『春より暮れて』(明45南寮／高瀬俊郎 作詞、朝永研一郎 作曲)

一「春より暮れて春に入る

【解説】「時の恨みはながけれど」——《言及なし》

時の恨みはながけれど」

【私見】「時の恨みはながけれど」——酔茗に次の詩がある。

▼「霞となびき水と行く／春のころは深けれど」《河井酔茗「春」》

113 第二十二回記念祭寮歌『天龍眠る』（明45北寮／松宮 順 作詞）

五「世は妖雲に鎖されぬ

曲學阿世の輩が  
臺尾の毒を攪き流し」

【解説】「曲學阿世」——真理に背いたと学問を修めて世俗に媚び諂うこと。

『史記』儒林伝に「公孫子務メテ正学ヲ以言テヒ無カレ曲学テ以阿レ世ニとある。

【私見】「曲學阿世」—— 出典及び語義は解説の指摘する通り。

昭和25年の最高裁大法廷で、尊属殺人罪（平成7年廃止）を合憲とする多数意見に賛同した齋藤悠輔裁判官は、違憲論（少数意見）を唱えた穂積重遠、眞野毅の両裁判官の所説を辛辣に批判する補足意見を出した。特に世界人権宣言を引用した眞野裁判官に対し、「曲学阿世の論を展開するもので読むに堪えない」と攻撃した（吉田健彦氏の「教示による」）。

この齋藤裁判官は 大正2年一高卒で、本寮歌発表の当時在学中であったことから「曲學阿世」という表現が頭に浮んだと見るのは無理であろうか。因みに穂積裁判官は『都の空に』の作詞者で明治37年一高卒、眞野裁判官は明治43年一高卒と、一高出身者が揃っているのも何かの因縁であろう。

114 第二十二回紀念祭寮歌『あゝ平安の』(明45 中寮／加藤 毅 作曲)

一 「あゝ平安の夢深く

榮の花の香を高み

人誠意まことなき世となれば

軟弱の卑歌耳を聾こひ

雄志は碎け覇圖やみて

男子の氣魄今いづこ」

四 「今や東亞の空あれて

嵐あらしすすむ三千里

豺狼あまたせめぎては

群羊守る力なく

荒るゝがまゝに渾沌と

また昭和25年、全面講和論を唱えていた南原繁東大総長に対し、吉田茂首相が「曲學阿世の徒」と罵ったことも有名である(吉田氏は学習院出身)。

▼「友よ街氣の語を言ひて／曲學阿世を追従おふ勿れ」《269 「春尚淺き」 昭12》

【解説】「軟弱の卑歌耳を聾こひ」——《言及なし》

【私見】「軟弱の卑歌耳を聾こひ」——柳澤健が「校友会雑誌203号(明治44年

3月に発表した「大川端情調」と題する詩をめぐり、運動部や中堅会の寮生たちが軟弱許しがたしとして柳澤を糾弾し、鉄拳制裁を決議しようとしたとき、擊劍部の吉植庄亮が敢然と立って柳澤を弁護し、決議を阻止したとの逸話が伝えられている。この例のような文芸部及び校友会雑誌の軟文学化の風潮を慨嘆したものであろう。

【解説】「今や東亞の空あれて……群羊守る力無き」——《言及なし》

【私見】「今や東亞の空あれて……群羊守る力無き」——土井晚翠の『萬里長城の歌』明34『曉鐘』所載)の中の次の詩句を踏まえている。

▼「西曆一千九百年東亞のあらし明日いかに……

看すや虎狼の牙鳴らす「基督教徒」血に渴き

禹域の末はあゝいかに

群羊守る力無き「異教の民」の声呑むを

【解説】「禹域」は古代の王禹が洪水を治めて九州の界を正した足跡の及んだ地域の意で、中国の異称。 【私見】 〓賛同。

五「恩威になびく金色の

民を救ひて常久に

覇業の基定むべき

使命果すはあゝ誰ぞ

【解説】「金色の民」は朝鮮のことかと思られるが不明。

【私見】「金色の民」は「黄色人種（フリガナなしアジア人）」を指す。但しここでは、第

四節に「禹域（〓中国）の末はあゝいかに」とあることから、直接的には、朝鮮ではなく中国のことを指すと見るのが妥当であろう。

※「金色の民」については、342「征露歌」（明37）の項を参照されたい。

115 第二十二回記念祭寮歌『希望の光』（明45 朶寮／石田三治 作詞、加茂正一 作曲）

116 第二十二回記念祭寄贈歌『春は來ぬ』（明45 東大／小野清一郎 作詞、堀内伊太郎 作曲）

117 第二十二回記念祭寄贈歌『花は櫻と』（明45 京大）

118 第二十二回記念祭寄贈歌『筑紫の富士に』（明45 九大／九大 高会有志（佐藤清一郎） 作詞、石川勝治 作曲）

《参考》明治42年から45年までの福岡大／九大寄贈歌の作詞者として、従来、佐藤莊一郎（明40 一高文科↓東大独文卒）の名が挙げられていたが、これは誤りで、佐藤清一郎（明38 一高医科↓明42 福岡医大卒↓福岡



医大外科に入局し大正5年まで在籍が正しいと推定されるため、本書では佐藤清一郎にあらためた。

一「筑紫の富士にくれかゝる

夕の色の袖が浦」

【解説】「筑紫の富士」は、脊振山せぶりやま（福岡県と佐賀県の県境にある）。

【私見】地名事典によれば、「筑紫富士」と呼ばれるのは、可也山かやさん（志摩町南部）と浮嶽うきだけ（二丈町と佐賀県七山村との境）の二つだが、位置関係から見て、可也山と考えられる。可也山は、福岡方面から見た山容が円錐形であることから、糸島富士、小富士、筑紫富士とよばれる。

三「東風吹かば」など詠じけむ

幸府さいふの官は今ここに

おとづる人のしげくして

飛梅の名のかをりゆく」

【解説】「飛梅」の色——飛梅伝説の説明はあるが、色については言及なし。

【私見】「飛梅」の色——菅原道真は梅の花を好み、紅梅殿と呼ばれていた邸内にたくさん梅を植えていた。道真は、都落ちの時に、紅梅との別れを惜しんで「東風吹かば……」と詠み、主人の心に感じた梅が太宰府まで飛んできて根を下ろしたという。飛んだのは紅梅だった（異説もある）が、代替りを経て、現在太宰府天満宮境内にある飛び梅は白梅になっている。

四「其のかんばせにいやまして

にほひこぼるゝ向陵の

梅の根ざしよ心して

「春な忘れそ」永劫に」

【解説】「其のかんばせに……」——《言及なし。》

【私見】「其のかんばせに……」——「其のかんばせ」とは、「向陵の梅」に喩えた一高生の「花くれなるのかんばせ」を指し、「紅梅」を暗喩している。また「にほひこぼるゝ」とは、「よい香りがあふれ出るさま」を表現した

五「西に離れて三百里

筑紫の果に迷ふ時

自治の梅花に東風吹かば

遙かに「匂ひおこせ」かし

119 第二十二回記念祭歌『荒潮の』（明45 樂友会／井上 赳 作詞、朝永研一郎 作曲）

一 「底もどららの千重男波

われてくだけてちる中に

ゆるがず立てる巖とも

ものだが、「にほひ」の原義は「赤色が美しく目だつ意」であり、やがて

視覚・嗅覚の両義をもつようになったとされることから、「紅い色が美し

く映えるさま」（紅顔の「高生」をもイメージしているものと解したい。

▼「花くれなるの顔も／いま別れてはいつか見む」

《106 「光まばゆき」 明44の項参照》

【解説】「匂ひおこせ」——梅花の如く香りの高い母校の自治の気風が、遠く

距ったこの地にまで匂え、という言い回しで母校への思いをいっそう詩情

豊かに表出している

【私見】「匂ひおこせ」——「おこす」（＝「遣す」）は、「送って来る、よこす

の意だから、「匂ひおこせ」は単に「匂え」というだけでなく、「自治の

梅花の）匂いを（吹き）送ってくれ」という意味になろう。

▼「やよ東風よ心して／若木の種を吹き送れ」《176 「今京近き」大7京大》

【私見】「底もどらら……われてくだけてちる」——次の歌を踏まえている。

▼「大海の磯もどららに寄する波 われてくだけてきけて散るかも」

《金槐集・源実朝》

一 「さくら流れの水ぬるむ

雲心なく行く春や

何を思ふか吾れもまた

長き愁ひを如何にせむ

ひとに許さず此のむねに

あだなる歌は知らざらむ」

【解説】「あだなる歌は知らざらむ」——「あだ」は無益の意。軽佻浮薄な  
思いは懐かないの意か。

【私見】「あだなる歌は知らざらむ」——「明治天皇崩御による諒闇中である  
ことと、自己の長い憂愁のため、浮わつた歌を歌うことほしない」の意  
であろう。

『古今集仮名序』に「今の世の中、色につき、人の心、花になりける  
により、あだなる歌、はかなき言のみいでくれば」とあり、この場合の「あ  
だなる歌」も「浮わつた歌」の意だと解釈されている。

なお、「人に許さず」は、141『見よ鞆に』(大4/阿部龍夫 第六節の  
「いざ高誦せん今宵こそ/人にゆるさぬわが歌を」と同じく、「俗人の理解  
を許さない」という意味であろう。

【解説】「九五の位」——(易卦の意味から)「九五」は天子の位のこと。  
【私見】「九五の位」——土井晩翠の用例を挙げる。

二 「九五の位高くして  
み夢冷え行く龍榻に」

▼「踏ませまつらむ九五の位」(晩翠・「星落秋風五丈原」)

【解説】「み夢冷え行く龍榻に」——「龍榻」は天皇のベッドのこと。

三「邊塞花を尋ねては

雪分けしかな金華山

風荒うして十萬の

鐵蹄の跡消えうせば

青雲の伏す限りてふ

うたひし人の夢いづく」

【私見】「み夢冷え行く龍楊に」——土井晚翠の用例を挙げる。

▼「泣いて聞きけむ龍楊に」《晚翠・「星落秋風五丈原」》

【解説】「邊塞花を尋ねては／雪分けしかな金華山」——「邊塞」は夷狄の侵入を防ぐ砦。「金華山」は日清・日露戦争の中国の古戦場の名か、本邦宮城県の金華山を指すか不明。

【私見】「邊塞花を尋ねては 雪分けしかな金華山」——この二行は難解として知られ、未だ定説はない。拙旧著「落穂拾い」では、「明治天皇の愛馬華山号との関係」を示唆したが、今回は、その立場からの試論を披露してみたい。

明治天皇は明治十年代、兎狩のために連光寺御獵場（現多摩市）にいくどか行幸されたが、その折には、日野の旧佐藤邸でご休息後、愛馬金華山号に騎乗、薄雪白き二里余の畦道を御獵場に向かわれたという。多摩市の旧多摩聖蹟記念館には、明治天皇が当地で金華山号に騎乗された姿を再現した「明治天皇騎馬等身像」が展示されている。この寮歌の「邊塞」とは連光寺御獵場を、「雪分けて尋ねた花」とは梅を、「金華山」は金華山号を指すと解する。以下に、明治天皇御製から関連歌三首を掲げる。

▼「いさみたつ駒に鞍おきてふりつもる雪のなかみちわけてみしがな」

▼「うちのりて雪の中道はしらせし手馴のこまも老いにけるかな」

▼「風さえて雪のみふりし山里も梅さきにけり時の来ぬれば」

【解説】「風荒うして十萬の 鐵蹄の跡消えうせば」——「鉄蹄」は蹄鉄の意。

また、駿馬の足の美称。戦争が終わって、その跡も無くなったの意か。

【私見】「風荒うして十萬の 鐵蹄の跡消えうせば」——この二行も難解で、

やはり定説がない。私見によれば「十萬の鐵蹄の跡」とは、日露戦争における約十萬人の戦死者の犠牲により得た「満洲の特殊権益」を指し、それが列強の植民地支配競争の激化によって消え失せるようなことになれば

（「風荒うして消えうせば」……の意であると解する。日露戦争後、満洲の権益は約十萬人の犠牲者と約二十億円の金の支出によって獲得したものだ」というフレーズが繰り返され、後々の日本の対外政策にまで大きな影響を与えた。

▼「国のため命をすてしますらをの姿をつねにかゝげてぞみる」

（明治天皇御製 明 39）

なお、「鐵蹄」とは軍馬をさすとみるのが普通であろうが、類語の「騎」という言葉は、「平家の義仲追討軍十萬騎」とか「頼朝の軍勢十萬騎」などのように、必ずしも馬の数ではなく軍勢の人数を示すことも多い。よ

四 「あゝ南の物語」

浮かべて咽ぶ黒潮に  
豪石の響ありながら  
紀伊をめぐれば亡き君を

つてここでは、「鐵蹄」を日露戦争中の日本軍の戦死者の概数と解した。

【参考】《十萬の鐵蹄の跡消えうせば》とは、沙河の陣で日露両軍が対峙している間に、猛吹雪で軍馬の跡も消えたことと解する。また日露戦争終結とも解することができる。《吉田健彦氏、同氏HP》。

【解説】「青雲の伏す限りてふ」——万葉集(十三)に「白雲のたなびく雲の青雲の向伏す国の天皇の下なる人は……」とあり、おそらくこれによると思われる。「筆者注・解説書による引用の「天皇」は「天雲」の誤り。」

【私見】「青雲の伏す限りてふ」——この表現の遠景には解説書の指示する万葉集の歌があるとしても、直接的には、幕末の勤王詩人平野国臣の次の歌を踏まえていると解する。したがって、「うたひし人の夢」とは、「我が天皇のご威光のかがやき渡る御代にしようと歌った平野国臣の志」を指すことになろう。

▼「青雲の向伏す極み すめらぎの みいつかがやく御代となしてむ」

【解説】「あゝ南の物語／浮かべて咽ぶ黒潮に」——明治天皇臨御のもとに紀伊において海軍大演習があったことを踏まえているのかもしれない。

【私見】「あゝ南の物語／浮かべて咽ぶ黒潮に」——第四節も難解で定説はない。私見では、明治23年9月16日に和歌山県串本・大島の樫野崎沖でト

慕ふ吾等と共々に

花すゝり泣く此の春や」

ルコ軍艦エルトウールル号が台風のため難破・沈没し、オスマン提督以下587名が死亡した痛ましい事故を指すと解する。事故発生時、串本大島村民が総出で69名の乗組員を救助した。明治天皇は侍医を、皇后は看護婦13人を遣わされた。その後、明治天皇の命によって、生存者は2隻の軍艦でトルコに送り届けられた。樫野崎にはトルコ軍艦遭難碑が建てられ、大戦中を除き、五年毎に慰霊祭を催し、現在に至っている。

なお、明治34年の海軍大演習が行なわれた場所は、内海の紀伊水道であり、この大演習が「南の物語」や「黒潮」と結びつくとは考えにくい。

121 第二十三回記念祭寮歌『あゝ炳日の』（大2 西寮／久米正雄 作詞、上沼健衛 作曲）

一 「残暉あやに春はよみがへり

遺芳萬朶の花と咲く」

【解説】「遺芳萬朶の花と咲く」——《言及なし》

【私見】「遺芳萬朶の花と咲く」——「遺芳」は後世に残る名譽、故人の業績をいう。ここでは前年に崩御された明治天皇の業績が大正時代になって

花開くさまを表現している。なお333『擊劍部部歌』を参照されたい。

122 第二十三回記念祭寮歌『春の思ひの』（大2 南寮／畑 耕一 作詞、柴田知常 作曲）

一一 「彩あやといろごる春の日も

【解説】「鐘にいくそのうらみあり」——「いくそ」は多くの數量をさしてい

123 第二十三回記念祭寮歌『ありとも分かぬ薄雲に』ありとも分かぬ (大2 北寮／根本 剛 作詞、世良田 進 作曲)

沈むと見ればかつ消えて  
鐘にいくそのうらみあり

う。「鐘の音を聞いても、そこには多くの恨みがこもっている」の意。  
【私見】「鐘にいくそのうらみあり」——

▼「鐘に恨みはかずかずござる」《長唄『娘道成寺』》

一 「ありとも分かぬ薄雲に」——《言及なし》

彌生の空もほのめけば

【解説】「ありとも分かぬ薄雲に」——《言及なし》  
「光さみしき白銀と緑を裏に表にし」——《言及なし》

光さみしき白銀と

【私見】「ありとも分かぬ薄雲に」——藤村の次の詩句を踏まえるか。

緑を裏に表にし

▼「うき雲はありともわかぬ大空の  
月のかげよりふるしぐれかな」

ひろごる夢の彩衣

《藤村『若菜集』「母を葬るのうた」》

年はふりたり二十三

なお、「ありとも分かぬ薄雲」は根本氏の原案では「そそのかさるる薄

雲」であったが、久米正雄氏らから笑われたため、作曲の世良田進氏と相  
談し、現在の句に改めた(『高同窓会』『会報』第25号昭9・5・1、39ページ)。

「光さみしき白銀と緑を裏に表にし」——わかりにくい表現だが、西  
行の次の和歌を踏まえたものと解する。

▼「緑なる松にかさなる白雪は 柳の衣を山におほへる」《西行・山家集》



三「この世のいのち一時に

こめて三年をたゆみなく

淋しく強く生きよとて

今はた丘の僧園に

晨の鐘も鳴り出でて

黙思に笑むや友と友

(緑色の松の上に積もった白雪は、あたかも柳襲やなぎかさねの衣を山に覆いか

ぶせたように見える)

柳襲やなぎかさねは春の衣服の襲かさねの一つで、表が白(白みがき)光沢を出した白

で、裏が青(萌黄色)黄味の強い緑かさねの色目である。右の西行の和

歌の場合は、雪の白が表、松の緑が裏に相当する。

【解説】「淋しく強く生きよ」——「淋しく強く生きよ」うとする覚悟で固く

結ばれた友情を歌っている。

【私見】「淋しく強く生きよ」——作詞者の根本剛氏自身に次の歌がある。

▼「哀傷の涙をしめと教へられし／強くさびしき生命なりしな」

《一高校友会雑誌》明治45年11月号

【解説】「今はた丘の僧園に」——「僧園」は元来は修学のために僧徒の集ま

る学園。一般には寺院をさすが、明治以後はキリスト教のものをもさす。

しかしここでは、一高を、理想を抱き、強く正しく生きる学園としていっ

ている。

【私見】「今はた丘の僧園に 晨の鐘も鳴り出でて」——北原白秋の次の短

歌《歌集『桐の花』(大正2年1月)所収》を踏まえている。

▼「嘆けとて いまはた目白僧園の 夕の鐘も鳴りいでにけむ」

#### 四

「若き日の影仰ぐべき  
光も消えて追憶の  
青き霧降る中にして  
赤き灯燃ゆる驕楽の  
丘の三年はひたすらに  
吾等が夢の住むところ」

〔井下登喜男氏（一高昭26文内）のご教示を得た〕

目白には雲照律師が明治20年に創設した戒律学校（目白僧園）があったが、白秋の歌の「僧園」はその目白僧園ではなく、文京区関口（目白台に隣接）の東京カテドラル聖マリア大聖堂をさすとされる。この作歌の当時、白秋は隣家の松下夫人と恋愛、夫から姦通罪で告訴され、一時収監されるなど多事であった。

【解説】「若き日の影」——言及なし。

【私見】「若き日の影」——前年の大正元年に、第6回文展（日展の前身）で三等に入選した「若き日の影」と題する若い男の裸身立像彫刻（朝倉文夫作）が話題を呼んだ。夏目漱石は、朝日新聞に連載した『文展と芸術』（第6回 文展評）の中で、『多少自分に電気をかけた彫刻はただ一つしかなかった。それは朝倉文夫君の「若き日の影」である。そうしてその「若き日の影」という題を説明するものは一人の若い男であった。…要するに彼は強い男ではなかった。そうして強い男を羨んでもいなかった。ただ生まれたとおりの自己を諦めの眼で観じていた。』と述べている。「若き日の影」は難解だが、当時の一高生の精神状況を、漱石の描写した朝倉文夫の彫刻の若者の姿になぞらえたものと解してみたい。

【解説】「仰ぐべき光も消えて」——闇に覆われた向陵をいう。

【私見】「仰ぐべき光も消えて」——明治天皇の崩御による諒闇を指す。

【解説】「青き霧降る」「赤き灯燃ゆる」——《青き霧》には言及せず、「赤い灯」は、寮生たちの情熱をさすとしている。》

【私見】「青き霧降る」「赤き灯燃ゆる」——「青き霧」と「赤い灯」とは対句的に使われている。これに「驕楽」が加わると、戦後の演歌に見られるようにネオンの巷（歓楽街）の情景を連想させられる。

▼「青い夜霧に灯影が赤い どうせ俺らは独り者

夢の四馬路すまろか虹口ほんきぐちの街か ああ波の音にも血が騒ぐ」

（「夜霧のブルース」昭22／島田磐也作詞、ディック・ミネ歌）  
ただしこの寮歌の場合には、もとよりこの演歌とは異なり、「青き霧」は世情の闇を、「赤き灯」は寮の灯を、そして「驕楽」はエリート意識に支えられた寮生活を指すと解する。

【参考】次に掲げる松本高校の寮歌にも影響を与えた。

▼「静寂しじまぞ迫る高原の 青き霧降る中にして 思索の灯燃ゆるかな」  
（大12 松本高校寮歌『若き望み』第三節）

【解説】「音なくすべる夕づつに」——「すべる」は、音もなく動いている意。

ものみな  
萬象声をひそめては

今宵紀念の歌筵

音なくすべる夕づつに

光を望む若き子の

生命の歌もなやみあり」

「夕づつ」は宵の明星をいい、ここではその静かな動きを望み見て、前途に思いをかけている。

【私見】「音なくすべる夕づつに」——解説の解釈では、「音なく音もなく動く」となり、同義反復になってしまう。この「すべる」は、「そっと退出する」意で、宵の明星（明治天皇を暗喩するか）が静かに闇に消えてゆくさまを表現したものと解する。

▼「女も夜更くるほどにすべりつつ」（そっと座をはずして）（徒然草 191）次に「音なくすべる」と「闇」とを詠んだ句（平成の作）の例を挙げる。

▼「むささびの音なくすべる宵の闇」（小田木弥栄子・句集「遠江だより」）

【解説】「光を望む若き子の 生命の歌もなやみあり」——今宵の紀念祭の歌筵も、諒闇の下ではその歌声が憂愁の色合いを帯びざるをえないことを歌う。

【私見】「光を望む若き子の 生命の歌もなやみあり」——「光を望む」は前節の「仰ぐべき光も消えて」に対応し、明治天皇の諒闇が明けて大正の御代の光が輝き渡る日を持ち望むの意であろう。「生命の歌」は寮歌。

二「蒼く鑄びたる花甕に

鑄りしことばは灼きて

かたき盟のうま酒の

水漚にうたふもろ声は

寂寞やぶりて酌くらむ

【解説】「蒼く鑄びたる花甕」——「鑄」は音シユク、意は「さびる」。

【私見】「蒼く鑄びたる花甕」——ここでは花を生ける甕ではなく、青銅製の

花模様酒甕をさすのであろう。「蒼く鑄びたる」は緑青のこと。

【解説】「鑄りしことばは灼きて」——（花甕に）刻んだことばは輝いていて。

【私見】「鑄りしことばは灼きて」——中国古代の青銅器文化においては、酒

器等の青銅器に鑄込まれた（彫り込まれた）銘文を金文と呼び、神に捧げる

祝詞や後世に伝えるべき文書の記録に利用された。本寮歌では、自治寮創

設時の規範たる四綱領を青銅器の金文になぞらえたものと解する。

【解説】「水漚にうたふもろ声は」——酒のあわにうたっている人々の歌声は、

の意。「漚」は音オウ・オ。「漚、水泡也」（「集韻」）。

【私見】「かたき盟のうま酒の 水漚にうたふもろ声は」——「かたき盟」と

は立寮の精神、すなわち四綱領を規範とした籠城主義の誓いを指す。

▼「天下書生の模範ぞと 社会の濁流せきとめて

籠城主義を誓言し 巍然立てたる自治の寮」《7『ニユライの』明30

「うま酒の水漚（泡）」とは、通常、日本酒の醸造の過程で醪の表面に白く

て軽い泡がひろがる状態をいうが、「漚」では発泡濁り酒をさすと解する。

四「逝きし月日をかへりみて

さかえの跡を讃頌へつも

ふるき緊縛とききはなち

魁よばんあらた代の

のぞみの光あふるかな」

▼「薄紅させる櫻花 酒の水泡のほのぼのと

どよめく春の夜は白う 柏に開く我運命」(明 38 『春繚爛の』)

籠城主義を誓った大勢の仲間と美酒(＝濁り酒)を酌み交しながら、声を張り上げて寮歌をうたう。「もろ声」は大勢の人が一緒に声を発すること。

【解説】「さかえの跡を讃頌へつも」——明治大帝治世下の国家ならびに一

高(向陵)の栄光を顧み、かつ讃えながらも。

「ふるき緊縛とききはなち 魁よばんあらた代の」——吾等は旧套を打破して新時代の魁となるべき使命を帯びているとの自覚を強調的に歌う。

【私見】「ふるき緊縛とききはなち」——2年前の寮歌『オリンパスなる(明

44)の第四節から第五節に先行の表現がある。

▼四「渡津海にうく大船の 船底かたく閉すてふ 貝の如くも大方の

古き絆は取繞きぬ 醒めよ若人新世の 眞の光消えうせん」

▼五「この絆をば勇しく破りてかたくいと深き 自覚を啓くことこそは我等が二なき誇なれ かくて沈淪は常久に 我世首なふことなけむ」

【解説】「のぞみの光あふるかな」——希望の光があふれていることだ。

【私見】「のぞみの光あふるかな」——新しい大正の御代は希望に満ちている

125 第二十三回記念祭歌『春、繚亂の』(大2 朶寮／藤田八郎 作詞、石井銀彌 作曲)

二「さはれ都南の秋の夜半  
あらしは叫び露は泣き」

五「バルカンの野に雲亂れ

と歌っている。一高寮歌において「希望の光<sup>のぞみ</sup>」という表現は、20世紀初頭の明治34年と昭和の御代を迎えた昭和2年にも登場する。

▼「世紀の流れ絶えずして ふりし百年送りては

希望の光<sup>のぞみ</sup>新しき 我が世の春の朝ぼらけ」(明34『世紀の流れ』)

▼「嗚呼、されど、友な嘆きそ 我にあり、みなぎる血潮

彼にあり希望の光<sup>のぞみ</sup> 眞理もて、強く生きなむ」(昭2『たまゆらの』)

この他にも、明治36年に1例、37年に3例、40、41、45年、大正5年に各1例、計8例があるが、昭和3年以後の寮歌では姿を消す。

ちなみに、東日本大震災後、マスコミなどで「希望の光」という表現が多用されているのに対し、関東大震災後の寮歌には一つも見当たらない。

【解説】「あらしは叫び露は泣き」——《言及なし》

【私見】「あらしは叫び露は泣き」——土井晚翠の詩を踏まえる。

▼「あらしは叫び露は泣き」《晚翠・「星落秋風五丈原》

【解説】「長槍快馬」「單騎鐵衣」——《言及なし》。

洞庭あはれ波立ちぬ  
長槍快馬に鞭を擧げ  
單騎鐵衣の袖かへし  
乾坤胸に抱きつゝ  
四海にふるへ柏葉兒

「乾坤」——天と地、つまり世界、宇宙の全体をいつているが、「乾坤」のニュアンスを含めて使っている。

【私見】「長槍快馬に鞭を擧げ／單騎鐵衣の袖かへし」——「快馬」は足の

早い駿馬のこと。「單騎」は、「ただひとり馬に乗って行くこと」をいう。

「鐵衣」は「よろい」のこと。「長槍快馬／單騎鐵衣」の颯爽としたイメージからの連想でこの寮歌は『馬賊の歌』という愛称で呼ばれることがある。しかし、馬賊は数十人から百人程度の規模で限定された地域を集団で行動するのが通例とされ、単独行動の「單騎」にはそぐわないし、第五節に登場するバルカン／中国／乾坤（世界）といった、地域の拡がりにもなじまない。私見では、明治25年から26年に「單騎シベリア横断」で勇名を馳せた福島安正中佐の行動をイメージしていると考ええる。福島はシベリア横断に加え、ドイツ、バルカン半島、中近東、中国、インドなど広い地域で情報將校として活躍し、大正3年に大將で退役した。彼がアジア入りの記念に作った詩に「ウラル山頭、道標存す。西欧東亜、乾坤を画す」とあり、本寮歌の「乾坤胸に抱きつゝ」という表現とも相通するものがある。また、一高寮歌45『曉がたの』（明37）に「霜をふみてシベリヤの／山路をかける荒駒の／蹄になやむ風情あり」とあるのも、福島の



事績を指すと解する。

126 第二十三回記念祭寄贈歌 『暮靄罩れる』(大2 東大／松宮 順 作詞、朝永研一郎 作曲)

四「人心漸く治になれて

虚榮浮華の俗をなす

世の木鐸は誰が任ぞ

第一の國民勉めよや」

【解説】「第一の國民」——《言及なし》

【私見】「第一の國民」——日清の国交断絶が確實となった明治27年1月に

学習院の田中光頭院長は、特に教官に対し時局に善処するよう求め、

「コノ際一層勉勵奮起シテ自ラ忠魂義胆ニ富メル第一ノ國民ヲ作り出ス

ノ大任ヲ負ヒ以テ義勇奉公ノ實ヲ挙クルヲ期スヘキコト」

と論告した。【開校50年記念 学習院史】による】

この理念は、「上ハ王室ヲ翼戴シ下ハ万民ノ自由ヲ保護」することが華族の責任だとする思想とあわせて、明治期の学習院の教育目標となった。

※旧憲法下の徴兵令における兵役義務には、常備兵役、補充兵役、第一國民兵役(常備兵役又は補充兵役を終えた者が服するもの)以外に、17才から45才までの者が服する「第二國民兵役」があったが、あるいはこれと関係があるか。

127 第二十三回記念祭寄贈歌 『天日はるかに』(大2 京大)

一 「御代諒闇の春今宵……

    臈の闇は深きかな」

二 「闇の沈黙を聞けや君……

    なげきに咽ぶひびきあり」

三 「御代のみならで若人よ

    運命の神のもてあそぶ

    性の異形のあやなせる

    この現世は闇ぞかし」

【解説】「性の異形のあやなせる」——天魔、魔神が、異なる姿で色々に入りこんだしわざをする。「性」は「さが」と訓むべきか。

【私見】「性の異形」——ギリシヤ神話に登場する、牛頭人身の怪物ミノタウロスのことだと考えられる。ミノタウロスは、「人性」と「獣性」という異なる二つの性を持つ。クレタ島のミノス王の妻パシバエが牛と交わった結果生まれたミノタウロスは、迷宮に閉じ込められ、人間の子供を餌食としていたが、アテナイの王子テセウスによって殺された。

本寮歌では、国民大衆は、諒闇の悲しみだけでなく、現実の生活そのものが社会矛盾の深い闇の中にあるため、なげきに咽んでいるとして、その状況をミノタウロスによつてもたらされる苦しみに喩えていると解する。

▼「怪奇なる 二つの貌 併さりて 一体となり、

その性も 異なる二つ 寄りて生まるゝ 半人半牛」

《ギリシヤの悲劇詩人エウリピデス作のミノタウルスについての詩 『プルートーク英雄伝』(鶴見祐輔訳)による。》

一 「かをりのみたま

おふよしもなき

あめのぬ琴の

糸たちきれぬ

たけきを誇る

ますらをも

若草しきて

泣く夜かな

あゝいつの日に

やすけき歌ぞ

人の子さびし

わかれて舞ぶが

ならひなれば」

【解説】第一節は明治天皇崩御による深い悲しみを、第二節では心の遍歴を詠んでいるが、古典的雅語の駆使がわざわいして、句意の不明確な箇所がいくつもあり、明快な解釈は容易でない。

「かをりのみたま おふよしもなき」——言及なし。

「あめのぬ琴の 糸たちきれぬ」——「ぬ琴」は瓊琴めいこ。美しい玉で飾った琴の意。玉の琴の糸がたちきれたということで、明治天皇の崩御を象徴している。

【私見】「かをりのみたま おふよしもなき」——「かをりのみたま」は明治天皇の御霊を意味する。「おふ」は「追ふ」で「したふ」と同じ。恋い慕つてあとを追うこと。「おふよしもなき」とは、明治天皇のみたまを慕つて追いかけても仕方がない（又は理由・方法がない）ことをいう。「よしもなき」は連体止めで、詠嘆ないし余韻を含蓄しており、「あめのぬ琴」にかかるわけではない。

「あめのぬ琴の 糸たちきれぬ」——古事記によると、大国主命が根の国を訪れたとき、須勢理毘売の父須佐之男命から難題を吹きかけられるが、彼の眠っている隙に須勢理毘売を背負い、須佐之男命の太刀と弓矢と

「天のぬ琴」を持って逃げ出す。「あめのぬ琴」「瓊琴」または「沼琴」は、「天の詔琴」（天つ神に詔（のりごと）オ告ゲ）を請う時に鳴らした琴）と同じともいう。古事記の「仲哀天皇」の章一段には、神功皇后が神がかりして下された神託を仲哀天皇が信じなかったため、琴を弾いている最中に崩御されたという叙述がある。このことを勘案すれば、本寮歌の「あめのぬ琴の糸たちきれぬ」も明治天皇の崩御を暗喩していると思われる。

【参考】明治45年7月30日に明治天皇が崩御され、即日大正と改元。

9月13日に大葬。その日の夜8時、葬列が宮城を出る時刻に、乃木大将は赤坂の自邸で妻静子とともに自刃して天皇の後を追った。当時の日本では、乃木の殉死は評判が悪く、決して乃木讚美一色ではなかったという。この寮歌の「かをりのみたま おふよしもなき」を、「明治天皇のあとを追って殉死しても意味のないことだ」と解するならば、乃木大将の殉死に對し否定的な立場を表明したものと見ることも可能となろう。

「たけきを誇るますらをも若草しきて泣く夜かな」—— 尚武の精神を誇る一高の寮生も、若草の褥の上で明治天皇の崩御を嘆き悲しんでいる。

▼「岸のほとりの草を藉き 微笑みて泣く吾身かな」

《島崎藤村「おえふ」》  
《若菜集》

二「行くべき道を

もとめては

またもみすらふ

……………

いづくなるらむ

ひとりひとりの

旅のわかよ」

130 第二十四回記念祭寮歌『彌生が岡の夕まぐれ』(大3 東寮／宮本武之輔 作詞、石井銀彌 作曲)

131 第二十四回記念祭寮歌『黎明の靄』(大3 西寮／川上璉器 作詞) あかつき

五「短かりしよ其の三年

麗しかりし其の夢よ」

▼「緑なす繁縷はこみは萌えず 若草も藉はこみくによしなし」

《島崎藤村「千曲川旅情の歌」『落梅集』》

【解説】「ひとりひとりの旅のわかよ」——「旅のわかよ」は「旅のわがよ」

の誤植であろうか。だとすれば、「わが人生は、ひとりひとりになって旅をするようなものだ」くらいの意味になるうが、不確かでよくわからない。

【私見】「ひとりひとりの旅のわかよ」——旧著では、「旅のわかよ」は「旅の行方よ」の誤植ではないか(「行方」の草書体は「わか」に酷似する)との立場をとっていたが、岩辻賢一郎氏等のご指摘で、少なくとも大正8年版の寮歌集までは「旅のわがよ」とあったことが判明したので、旧説は留保する。

【解説】「短かりしよ其の三年」——《言及なし》

【私見】「短かりしよ其の三年」——馬場孤蝶の詩に次の例がある。

▼「短かりしよ友の世は 三十路に盡くる旅ならば」《孤蝶「友を悼む歌」》

132 第二十四回記念祭寮歌『春の光の』(大3 南寮／宮津榮太郎 作詞、櫻井俊記 作曲)

一 「春の光のゆらめきて

緑にけぶる野に充てば

結ばれ解くるわが胸に

小さき花はひらきけり」

【解説】「結ばれ解くる」——《言及なし》

【私見】「結ばれ解くる」——「結ぼる」（＝結ぼほる）は、結ばれて解け

にくくなる、心がふさいで晴れないこと。次の用例がある。

▼「懇ねむいに思ひむすむすばれ嘆なげきつつ」《万葉18四一六》

133 第二十四回紀念祭寮歌『柏の濃緑』（大3 北寮／阿部龍夫作詞、鹽谷 壽作曲）

134 第二十四回紀念祭寮歌『ゆれて漂ふ』（大3 中寮／淵上房太郎作詞、朝永研一郎曲）

一 「ゆれて漂ふ陽炎かげりに

細流さいりにうつる行潦ぎょうらう

春は昔の高殿たかねに

うつろふ花の夕霧ゆふきりや

鐘かねより結むすぶ朝露あさつゆに

聖者せいしやの夢ゆめも醒さめやすし」

【解説】《この寮歌についての井上司朗氏の評釈『高寮歌私観』をいちおう

肯定的に引用しながらも、必ずしも全面的に妥当な味読とは言いがたいと

して、以下の語釈に引く古今集や新古今集の和歌、去来や蕪村の俳句に表

現されている情趣・情景の理解と味読が必要だと指摘する。》

「ゆれて漂ふ陽炎かげりに 細流さいりにうつる行潦ぎょうらう」——「こゝは去来の「陽炎かげりや

さされにうつる柴の門のゑ、蕪村の「あぢきなや椿落つつむにはたづみ」、春

雨や数珠落したるにはたづみ」を下敷きにしている。「行潦ぎょうらう」は雨が降つ

たりして地上にたまった水。水たまり。「細流さいりにうつる行潦ぎょうらう」は、その水

たまりが細かい流れに変わってしまうこと。うつりゆく定まらぬものとして

「陽炎かげり・「行潦ぎょうらう」が挙げられる。

「春は昔の高殿に うつろふ花の夕霧や」——「月やあらぬ 春や昔の春ならぬ わが身ひとつはもとの身にして」(古今集「伊勢物語」、業平)による。和歌の舞台の「あばらなる板敷」もかつての高殿であり、「梅の花ざかり」はやがて「夕霧」の中に「うつろ」うていく、といった意味であらう。

「鐘より結ぶ朝露に 聖者の夢も醒めやすし」——前行の「うつろふ花の夕霧や」をも承けて、うつろふ花の夕霧や、夕暮を告げる鐘の音よりも、草に結ぶ朝露の消え易さに、仏道の悟りを得た聖人も眠りから醒め、はかないこの世をしみじみと感じずにはいられない。

【私見】「ゆれて漂ふ陽炎に 細流さいりにうつる行潦こぼれ」——「うつる」を「移る」でなく「映る」と読んで、「たまり水が、ゆれる陽炎に映って細流のように見える」と解する。解説の引く去來の句も同様に、「柴の門が陽炎に映って細流のように見える」という意味であらう。なお解説の引く蕪村の句は単なる「にはたづみ」の用例で、下敷き云々は当たらないと考える。

「春は昔の高殿に うつろふ花の夕霧や」——在原業平の和歌は、多くの謡曲に登場する。「春や昔の……」の歌が出てくる謡曲としては「雲林院」「杜若」「井筒」などがあるが、このうち「井筒」では、在原寺の廢墟

に立ち寄った旅の僧の夢にあらわれた女が「春や昔の……」と「筒井筒……」の歌にまつわる業平の思い出を語り、夜明けとともにその姿は消え、僧の夢は覚めてしまう。本寮歌第一節の「春は昔の」以下の心象風景は、謡曲「井筒」を踏まえたものと解すれば理解しやすい。

「高殿」——ここでは謡曲「井筒」の舞台の在原寺をさすか。

「うつろふ花の」——謡曲「井筒」では業平と一体となった女の亡霊の姿を「しぼめる花の色なうて匂ひ、残りて」（しぼんでいる花が、色はあせても匂いだけは、残っている様子で）と表現する。第一節の「うつろふ花」は、「梅の花」ではなく、この「しぼめる花」のことと解する。「しぼめる花」は、業平の歌の評「その心余りて詞足らず。しぼめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし」（古今集仮名序）に基く。歌の評を女の亡霊の姿の形容に転用している。「夕霧や」はすぐ後の行の「朝露」の対句として使われたもので、「しぼめる花（女の亡霊）が夕霧の中に溶け込んでゆく」といった情景の描写であろう。

▼「玉垂の越智の大野の 朝露に玉藻はひづち 夕霧に衣は濡れて

草枕旅寝かもする 逢はぬ君故」(≒万葉集2・一九四／柿本人麻呂

〔川島皇子の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂が泊瀬部皇女に献れる歌一首〕



二「草野は野火につくるとも

日は旗手まく雲にもえ

尾越おしの路みちに行きなやむ

若わかき旅人たびとに照りやせむ

旅寝をしばしこの丘の

森の館やうしに安眠やすみせよ

「鐘より結ぶ朝露に 聖者の夢も醒めやすし」——解説によれば『鐘』を夕暮れの鐘と解し、さらに「より」を比較の意に解した上で、「うつろふ花の夕霧」や「夕暮れの鐘」よりも「朝露」の消えやすさに云々、としているが、かなり苦しい。

私見では、「鐘より結ぶ」の「鐘」は明けの鐘を、「より」は原因・理由をさす。謡曲「井筒」のファイナルになぞらえて「在原寺の明けの鐘も鳴つて夜が明けるとともに朝露が結び、その朝露に衣が濡れて、旅の僧の夢は覚めてしまふ」と結び、うつりゆく世のはかなさを強調したものと解釈したい。

【解説】「日は旗手まく雲にもえ」——「雲の旗手」は雲の果て、空の果て。太陽が、からみつく雲を通して燃えんばかりに照りつける。ここは「古今集」「夕ぐれは雲のはたてに物を思ふあまつそらなる人を恋ふとて」、「新古今集」「春深くたづねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる」、蕪村の「わたり鳥雲の機手の錦哉」を下敷きにしてゐる。

「尾越」——山の稜線を越すこと。「森の館」——一高の寮。

【私見】「日は旗手まく雲にもえ」——「雲のはたて」は①雲の果て。②①からの派生か。雲が旗のようにたなびいてゐること。ここでは「旗手まく

雲」だから、②の意に解すべきであらう。

解説は古今・新古今の和歌と蕪村の句を引き、それらを下敷きにしていくとする。このうち古今集の和歌は「雲のはたて」の本歌として常に引かれるので首肯できるが、新古今集の和歌は「雲のはたて」の用例でもなく、情景も異なる。また蕪村の句は「雲の機手」で、「雲でつくられた機」と「果て」の意をかけたと解されており、下敷きといえるほどの関連性はみられない。

「尾越の路に行きなやむ 若き旅人に照りやせむ」——じりじりと照りつける太陽を「若き旅人」（＝高生）の前途を阻もうとする苦難に喩え、一高の寮生活で将来のために英気を養おう（「森の館に安眠せよ」と呼びかけている。

【解説】「没るさの月に水霧ふ」——月の没する方向に、海面には霧がかかっている。

【私見】「没るさの月に水霧ふ」——沈まんとする月に向かって、霧がかかっていたように（牡鹿灘の荒潮の）水しぶきが立ち続ける。

「水霧ふ」は通常、「みなぎらふ」と訓ずる。

### 三「高つ瀬なして荒潮の

牡鹿の灘に流るれば

没るさの月に水霧ふ

雲の氣象の悲しさよ

この腕に力こめ

流轉の波をわけ行かむ」

四「春は榮ある若人の

鶏冠とじかに誇る幸なくも

希望のぞみと犠牲にへに燃えゆけば

花を吹雪にまかせつゝ

火盞ほたくに紅き血をもちて

櫻月夜さくらづくよに高誦たかずせん」

【解説】「火盞に紅き血をもちて」——吹雪のように散る紅の花びらを血に

喩え、またそれを盃に受けたさまを火が燃えたと見る。

【私見】「火盞に紅き血をもちて」——「火盞」は「油皿」（灯油を盛って火をともすのに用いる小さい皿）のことで、盃ではない。この語はそのままの形では大きい辞書にも見当たらず、聞き慣れない表現だが、石川啄木が好んで使用した語である。

啄木の小説処女作『雲は天才である』（明治39年）の中で、主人公である代用教員の新田耕助（作者自身を反映）が高等科の生徒を対象に行っている英語・外国歴史の二科目の課外授業について述べた次のくだりを踏まえた表現であろう。

▼「（……一切の精神が……）吾が舌端より火箭くわせんとなつて迸る。的なきまどに箭やを放つのではない。男といはず女といはず、既に 十三、十四、十五十六、といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つばかりに紅血にうけつの油を盛つた青春の火盞ほたくではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハツハツと燃え初むる人生の烽火のろしの煙の香ひ！」このほかに啄木が「火盞ほたく（ほたくともひやくとも）を用いた例を挙げてみよう。

▼「熄ひえぬ火盞ほたくの火の息に 君が花をば染めにけれ」

五「木の實はみのる橄欖の

丘には春の淺緑

力におごる若人は

重き鉛の扉とによりて

祭の宵を待ちかねつ

花の宴に酔ひやせむ」

《啄木「君の花」(明38『あこがれ』)》

▼「なさけの火ほ蓋おたけもえもえて 瘦せにし胸むねを捲まきしむる」

《啄木「天火蓋」(明38『あこがれ』)》

▼「恋のほむらの天火蓋あまほたけ 君が魂たまをぞ焼やきにける」

《啄木「落櫛」(明38『あこがれ』)》

なお、桜の花びらの色は、通常の種では白に近く、解説の説くように紅い血に喩えるのはやや無理があるのではなからうか。

【解説】「重き鉛の扉とによりて」——ここは蕪村の「大門のおもき扉や春の夢」が踏まえられている。

【私見】「重き鉛の扉とによりて」——蕪村の句の「おもき扉」は、寺院や大きな邸の扉のイメージであろう。なお蕪村のこの句の結句は「春の夢」でなく「春の暮」が正しい。

この寮歌の「重き鉛の扉」は、語句としては蕪村の句を踏まえているとしても、ここでは現実の扉をさすのではなく、一高生の真理探究の努力と懷疑の前に立ちはだかる頑強なバリアを喩えたものと解する。

この寮歌以後、この意味の「扉」が一高寮歌にしばしば登場してくる。いくつか例を挙げよう。

▼「重き運命の扉を破り 雄々しく猛く進まずや」

《149 『あゝ朝潮の』大5／大石五郎》

▼「若き愁に鎖されて 扉は重きこの胸に」

《153 『朧月夜の花の蔭』大5／福田悌夫》

▼「……黒金の 堅き扉も開かれん 秘鑰は己が心にて」

《162 『あゝ青春の驕楽は』大6／谷川徹三》

▼「智慧の扉は堅うして 魂の夕星はろかなり」

《185 『春甦るときめきに』大9／橋爪健》

▼「見よ荆棘に埋れて 石の扉は重けれど」

《200 『榮華は古りし二千年』大12／青木延春》

ちなみに、他校の寮歌の中にもこれを踏まえた例がある。

▼「深き懷疑の淋しさに 重き鉛の扉によるも」

《静岡高『地のさざめごと』大12／坂田一郎》

135 第二十四回記念寮歌『大空舞ひて』（大3 朶寮／関口次郎 作詞、田中久重 作曲）

136 第二十四回記念寮歌『あゝ香蘭の』（大3 東大／北川宣彦 作詞作曲）

一 「あゝ香蘭の香を罩めて」

【解説】（第一〜第三節では、記念祭を迎えた母校向陵の輝かしいたたずまい

……………

青牛玉車轍ほがらかに  
軋りひびかせ

行くは誰ぞ」

二「清き調べの夜もすがら

聴けやまたなき

世の春讚たたゆと

四「香輪かうりん暫し止めずや

響くは誰が笛ならむ」

玉笛たまふエ汝音を秘めよ

なれが奏での底遠く

もるゝ響の奇しくも

隠れ行く影

永久に空しきに

残る姿のさびしきや」

五「さはれ悲愁の影寒く

誰かはあはれ嘆くべき

と、後輩寮生たちの清らかでうるわしい姿とを、「玉車」の「轍」のほがらかな響きや玉笛の美しい調べなどに喩えつつ讚美し、そのうえで第四・五節では一転して、現世と人間のはかなさ、悲愁に注意を喚起しつつ、若人は「この世の猛者」たる誇りを忘れず、美しい車輪のきしみと玉笛の調べを奏でるところにこそ君たちの使命があると、強い調子で訴えている。

「青牛玉車」——青牛（＝黒い牛）の牽く、玉で飾った王者の乗物。

「香輪」——立派な馬車。貴人の馬車。

「玉笛」——玉で作った笛。美しい笛。

「なれが奏での底遠く……残る姿のさびしきや」——その笛の音は地の底に遠くしみとおることく、もれてくる響きもあやしげになる。乗物の影も永久に隠れ、その残像の淋しさに堪えがたい。

「誰かはあはれ嘆くべき……この世の猛者を誇るべく」——その空しさ、ああだれが嘆いてくれようか。こうした運命の音が洩れてくる時、だれ一人として永久に生きられるものはいないのだから、ただ淋しがつて悲しんでばかりはいられない。さあ、また玉車を軋らせ、笛を奏でようではないか。今度こそ幻想を夢見るのではない。真の一高生らしい心をもつて。

運命さだめの聲こゑのもるゝ時  
生命いのちや永久とこほに

つなぐべき

いざや軋こゝろらせよ

いざや奏なげよ

この世の猛者もさを

誇るべく

【私見】《本項は、井下登喜男氏（一高昭26文内）から、この寮歌は新渡戸校

長（前年の大正2年に辞任）のことを歌ったものではないか、また「玉車」は朴齒の高下駄、「玉笛」は寮歌のことを指すと考えることはどうか、との興味深いヒントをいただいたことを踏まえ、筆者なりに整理してみたものである。》

「玉車」・「香輪」—— いずれも一高生愛用の朴齒の高下駄を暗喩する。

「玉笛」—— 一高生の愛唱する寮歌、あるいは「一高生の吹く笛を指す。

「なれが奏での底遠く……残る姿のさびしきや」—— 君たちが昨年歌った『新渡戸校長惜別歌』（「なれが奏で」この響きに靈妙な力があつたととしても、去って行かれた新渡戸校長は、もう一高にお戻りになることはなく、残された君たち一高生は、悄然としているのではなからうか。

「運命の声のもるゝ時／生命や永久につなぐべき」—— 新渡戸先生ご自身の辞意が固く、いつまでも校長として留まっていたたくわけにはいかないということがわかったのだから。

「いざや軋らせよいざや奏でよ／この世の猛者を誇るべく」—— さあ、気持ちを切り替えて、朴齒の高下駄を鳴らして闊歩し、寮歌を高唱して、一高生の誇りと心意気をぜひ見せてほしいものだ。

137 第二十四回記念祭寄贈歌『彌生が岡にまかれにし』(大3京大)

138 第二十四回記念祭寄贈歌『まだうらわかき』(大3九大)

139 ●第二十五回記念祭祭歌『廣野をわたる』(大4 / 關口二郎 作詞、黒田 清 作曲)

一 「廣野をわたる微風に

豊も匂ふ高樓の

清き姿は變らねど

春や昔の春ならで

おもひで多き二十五の

齡を刻む今日の鐘

二 「鐘の響もゆるやかに

春は闌けたり丘の上

柏の森の深緑

ほのかに照らす夕月や

空もおぼろの花霞

【解説】「高樓の 清き姿は變らねど」—— 134 「ゆれて漂ふ」第一節(大

3)に「春は昔の高殿に」とあつたのを受ける。ただしそのうつろいの  
意識は、本歌ではあまり見られない。

【私見】「高樓の 清き姿は變らねど」—— 「六つの城 仰ぐ姿はかはらねど」  
(130 「彌生が岡の夕まぐれ」第二節、大3)を踏まえている。

【解説】「鐘の響もゆるやかに」—— 《言及なし。》

【私見】「鐘の響もゆるやかに」—— 「鐘永劫の音を刻む響の歩み遅くして」  
(121 「あゝ炳日の」第二節、大2)を踏まえている。

【解説】「水にも盡きぬ光あり」—— 「没るさの月に水霧ふ」(134 「ゆれて漂  
ふ」第二節、大3)を受ける。

【私見】「水にも盡きぬ光あり」—— 「水に絶えざる嘆あり」(121 「あゝ炳日の」  
を受けるか。



三「今はたこゝに草枕

ゆくての嵐よそにして

歌へどやがて紅の

きつゝなれにし夢衣

破れて寒く立ち出でむ

明日あすの旅路を知るや君

四「星は老ゆるを知らねども

わが世の花は散り易し

橄欖の蔭よもすがら

語りし友も享樂はえの

まだうら若き光榮はえの日も

今別れてはいつか見む

【解説】「きつゝなれにし夢衣」——「唐衣きつゝなれにし妻しあれば 是る

ばるきぬる旅をしぞ思ふ」（古今集、業平。伊勢物語九段）にもとづく。

一高の夢のような自由な生活から、やがては人生の旅立ちと苦勞を味わう

将来が歌い出される。

【私見】「きつゝなれにし夢衣」——「夢の綾衣うち蔽ひ」（121）「あゝ炳日の」

第三節、大2）をも踏まえている。

【解説】「星は老ゆるを知らねども」——《言及なし。》

【私見】「星は老ゆるを知らねども わが世の花は散り易し」——晚翠の次の

詩《「天地有情」・「星と花」》（明32）を踏まえたものか。

▼「同じ」「自然」のおん母の 御手に育ちし姉と妹

み空の花を星といひ わが世の星を花といふ

【解説】「享樂の まだうら若き光榮の日も 今別れてはいつか見む」——

106 「光まばゆき春なれど」の第四節に同じく「いま別れてはいつか見む」

とあった。

【私見】「享樂の まだうら若き光榮の日も 今別れてはいつか見む」——

前半部分は、「享樂の あゝ若き日を過ぎばや」（110）「しづかに沈む」

第四節、明45）を踏まえる。後半部分については解説のとおり。

140 第二十五回記念祭歌『愁雲稠しげき桃山ももやま』

一 「愁雲稠しげき桃山ももやまに」

燭影ぼくかげの淡はかく夜は更しけて

遺詔いじょうに心傷こころむとき

五 「あふるゝ思おもひ感激かんげきの

命いのちをさらばこゝに籠かごめ

熱あつき涙なみだに酌しやくみ交ます

酒さけ杯はいをあけて友ともよいざ

三年さんねんの春はるを高誦たかずせむ

丘かみの三年さんねんに醉よめひやせむ

【解説】「三年さんねんの春はるを高誦たかずせん 丘かみの三年さんねんに醉よめひやせむ」――

(前半部分) 134 「ゆれて漂たかふ」(大3) 第三節に「櫻月夜さくらづきよに高誦たかずせん」

とあつて、両歌の關係の深さを暗示する。

【私見】「三年さんねんの春はるを高誦たかずせん 丘かみの三年さんねんに醉よめひやせむ」――

(後半部分) 134 「ゆれて漂たかふ」(大3) 第三節に「花はなの宴うたげに醉よめひやせむ」

とあるのを受ける。

【解説】「桃山ももやま」―― 明治天皇の御陵の所在地。「愁雲稠しげき」という形容は、

前年4月昭憲皇太后崩御による諒闇中りやうあんちゆうに關係あるかもしれない。

「遺詔いじょう」―― 「戊申詔書いしんじょうしよ(明治41年發布)」を指す。国民精神作興の聖

旨を表したるもの。

【私見】「遺詔いじょう」―― 「遺詔いじょう」とは「天皇の遺言」のことであるが、具体的に

は、「天皇または上皇が生前に死後の皇位繼承、みずからの葬祭方法や追号

その他について指示した事柄」をいう(『日本史大辞典』／平凡社)。した

がつて、解説書の説く「戊申詔書いしんじょうしよ」のような通常の詔書とは性格が異なる。

『明治天皇紀』第12卷附載の大正元年8月6日条によれば、明治天皇

三「落月情をそよりては  
男児の劍暗に飛び」

六「友よ雅びの衣捨てよ  
塵垢皮膚にみつるとも  
我等が思想高ければ」

の陵所（伏見桃山陵）は「遺詔」により明治36年に決められたことが知られる。さらに明治天皇の美子皇后（追号は昭憲皇太后）は大正3年4月に崩御され、明治天皇の伏見桃山陵と並んだ伏見桃山東陵に葬られた。したがって「愁雲稠き桃山に」とは、明治天皇に続いて昭憲皇太后も桃山の地に葬られたことを踏まえた表現だと解する。

【解説】「落月」——西に没しようとする月。

【私見】「落月情をそよりては」——井上司朗氏等も指摘しておられるが、初唐の張若虚の『春江花月夜』に次の詩句がある。

▼「不知乘月幾人歸、落月搖レ情滿江樹」

〔「月に乗じて帰る」|| 月影を踏んで故郷に帰る。〕

【解説】「塵垢皮膚にみつるとも」——《言及なし》

【私見】「塵垢皮膚にみつるとも」——幕末の水戸藩士藤田東湖の漢詩『述懐』の中にある「自驚塵垢盈ニ皮膚猶餘ニ忠義填ニ骨髓」という詩句を踏まえたものであろう。

141 第二十五回記念祭寮歌 『見よ鞦韆しうせんに』 (大4 南寮／阿部龍夫 作詞、鹽谷 壽 作曲)

一 「見よ鞦韆しうせんに暮れなやむ  
春校庭の朧おぼろより」

【解説】「鞦韆しうせん」はぶらんこ。「荆楚歳時記」に「鞦韆ハ、本、山戎之戲ニシテ 云々」とある。

【私見】北宋の蘇軾の有名な詩『春夜』の一節の情景を踏まえていると考える。

▼「春宵一刻值千金、花有清光月有陰、歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沈々」  
(中庭にひっそりとぶらんこが下がり、夜は静かにふけてゆく)

【院落】＝中庭。「沈沈」＝夜のふけるさま。】

142 第二十五回記念祭寮歌 『無言しごまに憩まふ』 (大4 北寮／矢崎美盛 作詞)

二 「銀漢遠く十萬里  
際涯はて白雲の御空より  
聲ありあはれ若人よ  
我は奏でんそのかみの  
義憤の風に櫻花  
舞ひし彌生の花語り」

【解説】「我は奏でんそのかみの……彌生の花語り」——「そのかみ」は、「昔」の意。嘗て、伝統主義と近代的個人主義との大論争のあった事態を歌った寮歌の意か。尚、調査の必要あり。

【私見】「我は奏でんそのかみの……彌生の花語り」——明治43年4月6日の第3回対二高柔道試合に敗れたことを指す。

三「あゝ濁り世の空高く

聖き尊き天狼星の

救世の色にまたゝけば

義戦の刃鋭くも

取りし其日の若武者が

鎧にちりし血の涙

五「されば嘉げわが城の

櫓に通ふ明の鐘

あだし浮世の夢さめて

ときし操の色深み

今ぞ時なり弓張の

放つは海の西東

【解説】「聖き尊き天狼星の」——「天狼星」は大犬座の主星シリウスの中国

名。「聖き尊き」は「聖く尊き」とあるべき表現。

「義戦の刃鋭くも……鎧に散りし血の涙」——寮歌『緋織着けし若武者は』(明42)を踏まえての句か。

【私見】「聖き尊き天狼星の」——シリウスは夜空に瞬く星の中でもっとも明るい星で、古代エジプトでは女神イシスと同一視され、季節の始まりを示す星として崇拜された。

「義戦の刃鋭くも……鎧に散りし血の涙」——大正3年1月7日の第4回対二高柔道試合に敗れたことを指す。

【解説】「ときし操の色深み」——ときすまされた深い色合いの倫理観。

「今ぞ時なり弓張の放つは海の西東」——《具体的な説明なし》

【私見】「ときし操の色深み」——「操」とは、自治を守り抜くという自治寮開設時の一高生の誓いを指す。

▼「操と樹てし柏木の旗風かをる寄宿寮」(1『全寮寮歌』明34)

▼「操を立てゝ十余年自治の礎今固し」(25『混濁の浪』明35)

「今ぞ時なり弓張の放つは海の西東」——「弓張の放つ」は熟さない表現だが、一高生がその弓に弦を張り正義の征矢を放つというイメージを表

143 第二十五回記念祭寮歌『紫の暁』（大4 中寮／高島文雄 作詞、諸井貫一 作曲）

144 第二十五回記念祭寮歌『橄欖の森』（大4 中寮／大橋忠一 作詞）

四 「バルカン山の夏の夜半  
烽火は高く天を指す」

五 「ビスチュラ河の波荒れて  
カルパシヤンの山の端に」

わす。「……海の西東」は、前年に欧州大戦が勃発したことを背景に、今こそ一高生の意気を世界に示そうと歌う。

▼ 「正義の征矢に射とむべく／白木の弓に弦張れば／護國の旗ぞ翻る」

（39 『明けぬと告ぐる』明37／大島正満）

▼ 「雄圖の貢くりかへし／計るは洋の西東」

（94 『新草薙ゆる』明43／新聞智啓）

【解説】「バルカン山」——ブルガリア北部の山脈。戦闘日時不明。

【私見】「バルカン山」は、バルカン山脈ではなく、バルカン半島地域、具体的には第一次大戦勃発のきっかけとなったサラエボ事件（1914/6/28）の発生した旧ボスニアのサラエボを指す。

【解説】「ビスチュラ河」は「ビストリツア河」。ドナウの支流。ルーマニア北部を東流。戦闘日時不明。「カルパシヤン」は「カルパチア山脈」。

【私見】「ビスチュラ河」は「ビスマ川」（英語ではビストウラ川）。カルパチア山脈に源を發し、東流したのちポーランドを貫流してバルト海に注ぐ。

145 第二十五回紀念祭寄贈歌

『晴るゝおもひに』(大4 東大)

ラバ・ルスカヤ(現ウクライナ西部)の戦い(1914/9/3~9/11)で塙軍が露軍に大敗、リヴォフを経てカルパチア山脈まで 160 km も退却したことを指すと考えられる。

一 「晴るるおもひにいく春の

こくう悠々にみちゆけば

花萬年の杯に

薫る運命さだめを祝ふかな

【解説】「晴るゝおもひにいく春の／こくう悠々にみちゆけば」——意味不明。

【私見】「晴れるる思ひ」——晴れ晴れとした気持ち。

「こくう」——虚空(＝そら)。「こくう」では字余りになる。「そら」

を「こくう」と誤植したものか。意味はたまたま同じになる。

▼「虚空そらに満つ怪しき沈黙しんま／夜風の怒りをはらむ」《231 『群雲を』昭5》

▼「叢雲そうぐもの正義をおほひ／虚空そらに満つ修羅の焰に」《238 『旧き星』昭7》

「悠々」——はるかなこと、限らないこと。

「みちゆけば」——満ちゆけば。

以上のことから、晴れ晴れとした気持ちあはれが春の果てしない大空に満ちてゆくさまを表現していると解する。

【解説】「花萬年の杯に」——《言及なし》

【私見】「花萬年」——貴族の遊宴における和歌の披講で、「花に萬年(萬)春」

二「何ぞや博愛をかたらひの  
邦やみどりの血に肥えて  
無慚の花のまとふべく  
いま吟酸の春の日に」

を契る」という題が出されることがあった。

▼「君がため久しかるべき花にあひ／花もかはらず萬代や経む」

《今出川入道前右大臣（新拾遺集第七）》

【解説】「何ぞや博愛をかたらひの／邦やみどりの血に肥えて」——意味不明。

「無慚の花のまとふべく」——意味不明。

「吟酸」——詩興が起らず苦しむこと。

【私見】「何ぞや博愛をかたらひの／邦やみどりの血に肥えて」——博愛・人道主義を旗印にしているはずの欧州諸国が戦争（第一次大戦）を引き起こし、義人の血を流すことによって国家の繁栄を凶ろうとしているのは、いったいどうしたことなのか、との意に解する。

「みどりの血」——「碧血」。中国の故事（周の忠臣萇弘が王を諫めて自殺すると、その血が碧玉となったという）から、信念に基づいて死んだ人が流した血を「碧血」と呼ぶようになった。ちなみに函館山麓には、函館戦争で敗れた旧幕軍の兵士を弔う「碧血碑」が建てられている。

▼「見よ國と云ふ國擧げて／戦の庭にひしめけは

力の前に法も無く／必要の下道義絶えぬ」《166 「比叡の山に」大6 東大》

▼「國の鬩ふ戦は／人道の名に勝ちたれど」《189 「あかつきつゝる」大9 東大》



三「人のつくりし冠の

もろきを誰かあらそひし  
文明さかえそれはた偽いつはりの

富のおごりの跡おもひ

五「蕭牆まがきの園そのの春にして

▼「治安の夢は破られて／人道あはれ名のみなり」《194 「春未だ若き」 大10 東大》  
▼「自由の影に悪鬼あり／博愛の名に刃あり」《214 「生命の泉」 大15 東大》  
「無慚の花のまとふべく」——「無慚」は恥知らずなこと。

以上のことから、この春の日に、自分は寮歌の作詞に苦吟しているとこ  
ろだが、「博愛」をうたいながら戦争を起こした欧州諸国には、「恥知らず」  
という悪の花がまつわりついているに違いない、くらしい意になろうか。

【解説】「人のつくりし冠云々」——《言及なし》

【私見】「人のつくりし冠云々」——次の詩句を踏まえたものと考えられる。

▼「朝暎東に輝きて 人のつくりし冠かむむしの

脆かたきにもにぬ紅の 鶏冠を照らすあさぼらけ

《兎玉花外『鶏の歌』(『社会主義詩集』明36)》

※この詩で作者の花外は、革命を鶏の声になぞらえている。

この寮歌では、天の意志ではなく人間が勝手につくりあげた地上社会の  
権威の頂点(＝「人のつくりし冠」)を、一時的なもろいものにとらえ、そ  
の社会の文明の栄華は偽りの富のおごりの結果にすぎないとする。

【解説】「蕭牆の園の春にして」——「蕭牆」は屋敷の囲い。「蕭牆の園」とは

守るつれなく暗くれば  
うたがひは唯人にあり  
桃の流れや汲まざらむ」

向陵のことか。不明瞭。《その他の歌詞については言及なし》。

【私見】「蕭牆の園の春にして」——「蕭牆」は友垣を、「園」は自治の園生を指すと解されるから、「蕭牆の園」は一高の自治寮を象徴した表現であろう。「春にして」は、ここでは逆接で、「春でありながら」の意と解する。「友達の集う我が一高自治寮に春が来ているのに……」。

「守るつれなく暗くれば」——「守るつれなく」は単に「無情にも」という意味か、それとも「大事に思ってくれる友人がいない」ことを指すか。

「暗」はここでは友への不信という「心の闇」をいうのであろう。

「うたがひは唯人にあり」——謡曲『羽衣』に、「いや疑ひは人間にあり 天に偽りなきものを」（いいえ疑うということは人間界にあること、天上にはそもそも偽りということはありません）とある。三保の松原で羽衣を奪われた天女が舞楽を見せれば返すと漁夫に言われて、漁夫に言い返す言葉。天女は返された羽衣を着け、舞を舞いながら富士の高嶺に霞にまぎれて消えて行く。

「桃の流れや汲まざらむ」——晋のとき、武陵の一漁夫が、桃林中の流れを遡って洞穴に入り仙境に遊んだという（陶潜「桃花源記」）。この桃源の村人たちは、外界から迷い込んできた闖入者を何の警戒感も抱かずに

六「夢に若きは流すとも

まつりの旗の時じく

赤きを時の靈たちて

謳へ嗚呼名は力よと」

暖かく迎え入れて歓待した。一高生である自分たちも、これに倣って素直に人を信じようといっているのであろう。なお、「桃の流れ」を「桃花水」（桃花の咲くころ、雪解けや春雨でみちあふれて流れる川の水）と解したのでは、全体の意味が通じない。

【解説】「まつりの旗の時じく」に／赤きを時の靈たちて——意味不明。

【私見】「まつりの旗の時じく」に／赤きを時の靈たちて——「まつりの旗」は護国旗、「時じくに赤き」は、いつまでも赤いこと、「時の靈」は「時代精神」をさすと解する。「時の靈たちて」謳へ嗚呼名は力よと」とは、「権力への意志」を全世界の原動力であるとしたニーチェ思想の中にも見られるように、十九世紀から二十世紀にかけての「時代精神」が「力への信仰」であるとの作詞者の認識を示したものであろう。

▼「生ける歴史の宣るべくは／未來の生命は力なり」《本寮歌第四節》

▼「力の宿をとことばに／歌ひ示さん友よいざ」《151「闇に陰れる」大5》

▼「見よ國と云ふ國擧げて／戰の庭にひしめけば／

力の前に法も無く／必要の下道義絶えぬ」《166「比叡の山に」大6京大》

▼「三千年の文明の／理想は夢ぞ國民に／糧の争絶えざらむ／

あらま欲しきは力なり」

《166「比叡の山に」大6京大》

146 第二十五回紀念祭寄贈歌『散りし櫻を』(大4京大)

147 第二十五回紀念祭寄贈歌『野路の小百合の』(大4 九大/谷 茂 作詞、上沼健衛 作曲)

一 おく露さへもなにごとなく

春の生命のよろこびは

つくしがたなき心かな

【解説】「なにとなく春の生命のよろこびは」——《言及なし》

【私見】「なにとなく春の生命のよろこびは」——次の歌を踏まえるか。

▼「なにとなく春たつ今日のうれしきは

思へば花のゆかりなりけり」《月詣集・覚延法師》

148 二十五年祭の歌『あゝ新緑の』(大4 / 阿部龍夫 作詞、樂友会 作曲)

一 「自治の灯赤う照り榮えて

葉末の露にきらめけば

梢の星の嘆すらく

「過ぎたるものは美しや」

【解説】「過ぎたるものは美しや」——シエークスピアの語か。

【私見】「過ぎたるものは美しや」——シエークスピアの戯曲『ヘンリー四世

第二部』の第一幕第二場に、「過去と未来は美しく見え、現在はずっと醜

いと思うのだ」(小田島雄志訳)とある。解説はこれを指すか。

▼「何事も、古き世のみぞ慕はしき。

今様は、無下にいやしくこそなりゆくめれ」《兼好法師『徒然草』第22段

四 「浮世をへだつひと筋の

枳殻の垣はうすけれど

【解説】「枳殻の垣はうすけれど……」——《言及なし》

【私見】「枳殻の垣はうすけれど……」——明治23年5月17日に起った

149 第二十六回紀念祭寮歌『あゝ朝潮の高鳴に』(大5東寮／大石五郎 作詞)

道義の盟ちかひかたければ  
俗塵遠き六寮に  
汚れを知らず生ひ立ちし  
一千の子が意氣を見よ」

「インブリー事件」を含蓄していると考える。23 「姑蘇の台」(明34)の第二節に出てくる「岡の岩根は低くとも」という表現も同様である。  
「インブリー事件」について、詳しくは、23 「姑蘇の台」(明34)の第二節の項の【私見】を参照されたい。」

一 「あゝ朝潮の高鳴に

【解説】「天かけり行く鳳や」——《言及なし》

天かけり行く鳳や  
輝く丘の花うけて

【私見】「天かけり行く鳳や」——「さやかに躍る鳳の姿は彼の心なり」(135 「大空舞ひて」第四節、大3)を受けている・

紅匂ふ朝日影

【解説】「輝く丘の花うけて」——《言及なし》

若き心を誰か知る」

【私見】「輝く丘の花うけて」——「嗚呼玉杯に花うけて」(24 「嗚呼玉杯」第一節、明35)を受ける。

三 「げに人の世は咲く花の

【解説】「かゞよふ春の下夜かな」——「かがよふ」は「輝く」の意。「下夜」は不明。「霜夜」の誤りとしても、前後の文脈になじまない。

かゞよふ春の下夜かな  
覚めよと響く鐵鐘くろかねの  
強き響を力にて

【私見】「かゞよふ春の下夜かな」「下夜」は「霜夜」ではなく、「乙夜」の誤植であろう。「乙」の字と「下」の草書体とは酷似している。「乙夜」と

重き運命くだめの扉とを破り  
雄々しく猛く進まずや」

四「浮雲に鑄りし徒し名を

犠牲にへの血潮に洗へかし  
男の子の意氣に紅の  
花は吹雪に任すとも  
堅き巖に徹底の  
蹄を深く刻まずや」

五「野を辿り行く旅人の

心の駒や夜半風  
なやむ向ヶ陵の上に  
希望の光求めくれば  
春緑なる一つ草

は、昔中国で夜を甲、乙、丙、丁、戊の五つに分けた、そのひとつ。現在の午後9時頃から11時頃。「おつや」。

【解説】「重き運命の扉を破り」——《言及なし。》

【私見】「重き運命の扉を破り」——「重き鉛の扉によりて」（134）「ゆれて漂ふ」第五節、大3）を受ける。

【解説】「犠牲の血潮に洗へかし」——《言及なし。》

【私見】「犠牲の血潮に洗へかし」——「希望と犠牲に燃えゆけば」（134）「ゆれて漂ふ」第四節、大3）を受ける。

【解説】「花は吹雪に任すとも」——《言及なし。》

【私見】「花は吹雪に任すとも」——「花を吹雪にまかせつと」（134）「ゆれて漂ふ」第四節、大3）を受ける。

【解説】「野を辿り行く旅人の心の駒や夜半風」——《言及なし。》

【私見】「野を辿り行く旅人の心の駒や夜半風」——困難な道を歩む一高生  
ないし一高を、野を行く旅人に喩える。「心の駒」は、激情を奔馬に喩え  
たもの。「夜半風」とは西寮怪火事件（大正4年6月17日払暁から18日  
早朝にかけ前後3回、西寮に怪火があつた）を指す、とされる吉田健彦

秋繚亂の花なれや

氏に賛同したい。

▼『野に放たれし旅人の 笠傾けてひとり行く』(大3 『大空舞ひて』)

【解説】「希望の光求めくれば」——《言及なし。》

【私見】「希望の光求めくれば」——「希望」と犠牲に燃えゆけば」(134 「ゆれて漂ふ」第四節、大3)を受ける。

【解説】「春緑なる一つ草 秋繚亂の花なれや」——言及なし。

【私見】「春緑なる一つ草 秋繚亂の花なれや」——古今集の歌を踏まえる。

▼緑なるひとつ草とぞ春は見し 秋はいろいろの花にぞありける」

《題しらず よみ人しらず、古今集・秋歌上》

《春には、野べの草はどれも緑の同じ草だと見たのだったが、という気持。》

150 第二十六回記念祭寮歌『朧に霞む』(大5 西寮／田宮知耻夫 作詞、大久保利隆 作曲)

「花六寮に崩れては

玉に塵なきふた昔

六とせの光榮はえを偲えふかな」

【解説】「玉に塵なき」——典拠があるかどうか、未詳。

【私見】「玉に塵なき」——『正法眼蔵』とともに曹洞宗の二大宗典とされ

ている『伝光録』第四章に「いはゆる心出家すとは、髪を剃らず衣を染めず、たとひ在家に住み、塵勞に在りと雖も、蓮の泥に染まず、玉の塵を受けざるが如し」とある。蓮の葉が泥水に生えてもその濁りに染まること

二「ふりさけ見れば追憶のおもひで

綾綯爛けんらんの唐衣

今向陵の初嵐

亂れて飛ぶや花吹雪

濡れて佇む若人の

眉かすに幽かすけき愁あはれあり」

三「時運ときの流れ強つようして

流轉なみの濤なみの高鳴りや

月寒草つきさむに傾かたむげば

露六寮つゆに滋もからむ

眉まゆを掠かすめて散ちる花はなに

悲かなしき歌うたのなからめや」

なく、玉が濁世にあつても塵を受けないように、清い心を持ちつつけることをたとえている。

▼「靈たまに塵ちりなし玲瓏れいろうの／蒼穹そうきゆう仰あがぎつゝ若わかき日の」《160 「眞闇まゝの影かげは」大6》

▼「はちす葉はのにこりににしまぬ心こころもて／なにかは露つゆを玉たまとあざむく」

《古今集・僧遍昭》

【解説】「ふりさけ見れば追憶の……今向陵の初嵐」——《言及なし》

【私見】「ふりさけ見れば追憶の／綾綯爛の唐衣」——前々年（大正3年）

4月、作詞者が一年生の時に、対三高野球戦（三高球場）で、延長13回、対1で勝った、京都遠征の思い出を指す。ここでは「唐衣」で旅を含意したのであらう。

▼「からころも着つつ馴なれにし妻つましあれば／はるばる来ぬる旅をしぞ思おもふ」

《古今集／伊勢物語・在原業平》

「今向陵の初嵐／亂れて飛ぶや花吹雪」——前年（大正4年）4月、

作詞者が二年生の時に、対三高野球戦（二高校庭）で6対0で勝った思い出を指す。

※この寮歌は、第二節と第三節との間に詩句の錯綜が見られる

①第一節で「花吹雪」↓「濡れて佇む」は不自然である。



四 「花散る蔭に歡樂の……」

② 第三節で「露滋からむ」↓「眉を掠めて散る花」も同じく不自然である。  
③ さらに、「寒草」は冬枯れの季節、「散る花」は春で、季節が合わない。  
④ 又、第二節の「散る花」は第四節の「花散る蔭」につながると思われる。  
以上から、元の歌は、左の下欄の私見のようなものであったと推定される。

【寮歌集の歌詞】

二 「ふりさけ見れば追憶の

綾綯爛の唐衣

今向陵の初嵐

亂れて飛ぶや花吹雪

濡れて佇む若人の

眉に幽けき愁あり」

三 「時運の流れ強うして

流轉の濤の高鳴りや

月寒草に傾けば

露六寮に滋からむ

眉を掠めて散る花に

悲しき歌のなからめや」

四 「花散る蔭に歡樂の

痴人狂ふ春の夜を……」

【森下の私見】

二 「時運の流れ強うして

流轉の濤の高鳴りや

月寒草に傾けば

露六寮に滋からむ

濡れて佇む若人の

眉に幽けき愁あり」

三 「ふりさけ見れば追憶の

綾綯爛の唐衣

今向陵の初嵐

亂れて飛ぶや花吹雪

眉を掠めて散る花に

悲しき歌のなからめや」

四 花散る蔭に歡樂の

痴人狂ふ春の夜を……」

151 第二十六回紀念祭寮歌『闇に陰れる』(大5南寮／福定與四郎 作詞)

一 「闇に陰れる空寂の

【解説】「白銀の獵箭」——《言及なし》

限りも知らに遠<sup>をちこた</sup>研<sup>ま</sup>

響はあはれ白銀の

獵<sup>さつや</sup>箭<sup>や</sup>か胡<sup>ま</sup>地<sup>い</sup>の客<sup>ちやく</sup>人は

二十六歳の光住む

光の郷に夢やれぬ」

【私見】「白銀の獵箭」——「獵箭」は狩獵に用いる矢。ここでは前年の大

正4年に日本の大隈内閣がが中国の袁世凱政府に突きつけた「対華二十一ヶ条要求」をさしていると解する。

【解説】「胡地の客人」——明治43年以来受け入れていた中国留学生をさす。

「光の郷に夢やれぬ」——高のある日本での夢が破れたといっている。

【私見】「光の郷に夢やれぬ」——この二十一ヶ条の苛酷な要求は、以後の日中関係における民族的対立の火種となった。またこの要求をめぐって在日留学生たちの排日運動が高揚し、授業をボイコットして帰国する者も出た。「夢やれぬ」は、こうした「胡地の客人」（中国人留学生）たちの心情を表現している。

152 第二十六回紀念祭寮歌『實る橄欖』（大5北寮／渡辺秀雄 作詞、赤木勝雄 作曲）

三 「魔軍禦さし金城の

昔の姿かはらねど

時世空しく流れては

健兒の誇今いづこ」

【解説】「昔の姿かはらねど……健兒の誇今いづこ」——《言及なし》。

【私見】「昔の姿かはらねど……健兒の誇今いづこ」——晩翠を踏まえる。

▼ 「天上影は麥らねど 栄枯は移る世の姿」《晩翠 「荒城の月」》

▼ 「千代の松が枝わけ出でし むかしの光いまいづこ」《晩翠 「荒城の月」》

153 第二十六回紀念祭寮歌『朧月夜の花の蔭』（大5中寮／福田悌夫 作詞、矢ヶ崎正経 作曲）

一 「朧月夜の花の蔭」

燃ゆる銀燭更けわたる」

【解説】「朧月夜の花の蔭」——《言及なし》

【私見】「朧月夜の花の蔭」——田山花袋の詩に次の表現がある。

▼「おぼろ月夜の花かげを たどりてゆけるおりしもあれ」《花袋》「朧月夜」

154 第二十六回紀念祭寮歌『黄昏時の夢の國』（大5 朶寮／高原 弘 作詞、根村當勇 作曲）

五 「桃の林の露華滋く

靈香高き武香陵

長安の外西一路

遙けき行く方眺むれば

燦然と笑む北斗星

吾等が使命照す哉」

【解説】「長安の外西一路」——「長安」は唐の時代の首都で人口百万を擁していた。ここでは「長安」は「首都東京」を言うのであろうか。

【私見】「長安の外西一路」——「長安」とは「シルクロードの起点としての長安」であり、長安からシルクロードを一路西に進むと（「長安の外西一路」）、遙か欧州に達することを指していると解する。時あたかも欧州は大戦のただ中にあり、我々一高生は遙か欧州の情勢を見据えつつ（「遙けき行く方眺むれば」）国の守りを固めるといふ使命を負っている（「吾等が使命照す哉」）と言っているのであろう。なお、後に西本願寺の宗主になった大谷光瑞の組織した大谷探検隊が明治35年から大正3年まで、三次にわたってシルクロードの探検を敢行したあとでもあり、当時の日本人のシルクロードに対する関心は高かったと思われる。

因みに、現代の西安市（旧長安）に「西一路」という道路が存在するが、

この道路は西安市の城内（都心部）にあり、長安の「外」とはいえない。

155 第二十六回記念祭寄贈歌『檝櫓のかけ』（大5東大／平井好一 作詞、鹽谷 壽 作曲）

156 ●第二十六回記念祭寄贈歌『わがたましひの故郷は』（大5／作詞者不詳、箕作秋吉 作曲）

一 「わがたましひの故郷は」——京大の寄贈歌であるから、当然、一

いまでも縁のわか草に

春の日光のうつゝなく

柏の森の葉がくれに

高きを戀ひて日もすがら

小鳥はうたひ暮すらむ」

【解説】「わがたましひの故郷は」——

【私見】「わがたましひの故郷は」——前々年の京大寄贈歌137『彌生が岡にま

かれにし』の第一節の「春としなれば忍ばるゝ／わが魂の故郷に／歡樂

満ちし祭りの日」を受ける。

【解説】「高きを戀ひて……暮すらむ」——「魂の故郷」たる向陵への想い

が、鳴く小鳥のイメージに託して、愛情をこめて形象化されている。

【私見】「高きを戀ひて……暮すらむ」——向上心に燃える「高生の自治寮生

活を「高きを戀ひて」鳴く小鳥に譬えている。

二 「その故郷にありし日は……」——「その故郷にありし日」に味わっ

ながら、雲も吹くかぜも

みな我がために笑ひして

た青春の命の喜びが、その喪失感のうちにわびしく想起されている。

【私見】「その故郷にありし日は……」——全てが自分を中心に回っている

若きいのちを頌へにき  
おもへば西の空さして  
来つる旅路のわびしさよ

三 「あゝ思ひ出をいとほしみ  
光を追ひて野を行けば  
山はひたひを凹ませて  
こゝろさみしく打ち黙し  
おのれを泣きて落ち滾つ  
水のひゞきも哀しけれ」

ように思えた「高での充実した生活から離れて西下せざるを得なかつた  
無念さを歌う。

【解説】「あゝ思ひ出をいとほしみ……」——第三節では、「魂の故郷」から  
遠く隔ったさみしき、悲しさが、擬人法的レトリックを用いつつ豊かな  
抒情性を持って表現されている。

【私見】「あゝ思ひ出をいとほしみ……」——「いとほしむ」には、「ふびん  
に思う」、「かわいがる」等の意味があるが、ここでは、「愛惜する」(「惜  
しんで大切にする」)意であろう。

【解説】「光を追ひて野を行けば」——《言及なし。》

【私見】「光を追ひて野を行けば」——「光」(＝キリスト、若しくは「神の榮  
光」)を追って「野」(＝荒野)を行く洗礼者ヨハネに自らを喩えるという  
イメージに近いと解したい。

【解説】「山はひたひを凹ませて……水のひゞきも哀しけれ」——第二節の「西  
の空さして来つる旅路のわびしさよ」と照応して、「高を故郷」とい  
そこから遠く離れたわびしさ、悲しさを示している。

【私見】「山はひたひを凹ませて……水のひゞきも哀しけれ」——京都で単に

157 第二十六回記念祭寄贈歌『われらの命の』（大5九大）

158 第二十六回記念祭寄贈歌『雲ふみわけて』（大5東北大／吉田 秀作曲）

159 第二十七回記念祭寮歌『圖南の翼』（大6東寮／高原 弘作詞、土田 豊作曲）

一 「圖南の翼千萬里

高梁實る滿洲の

遼河のほとり月落ちて

蕭々班馬啼くあたり

此處絶東の柏の蔭

乾坤遠く夢は飛ぶ」

二 「白玉山に夕日落ち

「山」といえば「比叡山」、「川」といえば「賀茂川」を指すことが多く、京大からの寄贈歌にもしばしば登場する。推測でしかないが、本寄贈歌においても「山」は比叡山を、「川」（ここでは「水」とある）は賀茂川を擬人化することによって、京都の自然も作者の「故郷喪失感」に共感を寄せていると表現したものと解しては如何であろうか。

【解説】この寮歌の第一、二節の背景としては、前年（大正5年）6月、袁世凱没後の滿洲・北支方面における政治状況（蒙古軍勢の南下を、馬賊出身の軍閥・張作霖が食い止め、奉天を拠点に滿洲／遼東方面を制圧）が投影されている。

【私見】この寮歌の作者は、前年の大正5年に滿洲旅行に出かけており、その折に日露戦争の旧跡である白玉山・老鐵山などを訪れたことを踏まえて、この寮歌の第一、二節を作ったと思われる。

異疆の鐘は響きけり  
老鐵山に草深く  
蒼々暮るゝ山河の地  
胡沙ふく風に恨あり  
夢に咽ぶか朧月

三「黒雲躍る南溟の

漣さざなみ 白き椰子のかけ  
落日海に流るとき

鴻雁斜はすに掠めゆく  
見よ海原は暮れんとす  
闇にきらめく北斗星

【解説】「黒雲躍る南溟の」——第一次大戦の折、日本も日英同盟を理由に連合国側に参加し、青島攻略に続いて南洋諸島のドイツ領にも関心を示したことがこの第三節に反映されている。

【私見】「黒雲躍る南溟の」——「南溟」は第一節冒頭の「圖南の翼」に対応した詞句であり、『莊子』(逍遙遊)中の「圖はかり南、且まさ適ゆかた南冥へ也」によると思われる。「南溟」が南洋諸島をさしている可能性は高いものの、後述の「鴻雁」や「北斗星」との関係で、なお疑問は残る。《因みに管見では、高知高校の寮歌には「南溟」が十三曲に、台大予科の寮歌には「南溟」が三曲、「椰子」が二曲にそれぞれ登場するが、何れも南洋ではなく、(当地)の描写と見られる。》

【解説】「落日海に流るとき」——《言及なし》

【私見】「落日海に流るとき」——徳富蘆花の『自然と人生』(明33)中の「相

灘の落日」に、「日更に傾くや富士を初め相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ。  
此時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾足下に到り、海上の舟は皆金  
光を放ち、逗子の濱一帯、山と云はず砂と云はず、家と云はず、松と云は  
ず、人と云はず、転がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉とし  
て……。」とある。

【解説】「鴻雁斜に掠めゆく」——大きな雁が斜めにかすめ飛んでいく。

【私見】「鴻雁斜に掠めゆく」「闇にきらめく北斗星」——南洋諸島まで雁は飛  
んでゆくのか、南洋諸島から北斗星が見えるのか等の疑問がしばしば出さ  
れている。管見では専門書で雁の渡来地として南洋諸島を挙げるものは見  
当たらず、あつても稀なケースと見られる。また、南洋でも赤道より北で  
あれば、北斗星も低い方向に何とか見えるらしいが、やはり、「鴻雁」「北  
斗星」と「南洋」とは相性が悪いようだ。

何れにせよここでは、「南溟」の実景を示すものとして鴻雁や北斗星を  
うたったわけではなく、次に掲げるように古来の漢詩に「雁と北斗」、「落  
日と北斗」、「落日と雁」を組み合わせて詠じた例があることを踏まえ、そ  
のイメージを総合して第三節を作詞したものでなからうか。

▼「北斗の星の前に旅雁を横たふ／南楼の月の下に寒衣を擣つ」



160 第二十七回記念祭寮歌『眞闇の影は』(大6西寮／高木佑一郎、小池安三作詞、小池安三作曲)

161 第二十七回記念祭寮歌『若紫に』(大6南寮／橘高寶實 作詞、箕作秋吉 作曲)

一 「若紫に夜は溶けて

夢に漂ふ暁の

丘の小草の青はみに

春の光のかげろへば

乾あめにくし響こきあり

《唐・劉元叔(和漢朗詠集・秋) 典拠は『全唐詩』「妾薄命」》

《※北斗七星がさやかに光る空を、雁の一行が横切つてゆく》

▼ 「夔き府の孤城に落日斜めなり／毎つねに北斗に依りて京華を望む」

【唐・杜甫『秋興八首』】

《夕日が落ちて夜になると私はいつも北斗星を頼りに都の空を眺めやる》

▼ 「百年人事登臨の地／落日飛鴻一線遅し」【金・元好問】

《※わが人生や世の出来事に思いを馳せながらこの地の丘に登って

遠く眺めわたすと、沈み行く夕日の前を一線を描いて横切つてゆ

くおとりも、心なしか進み方が遅いようだ》

【解説】《第一節では記念祭を迎えるべき春の夜明けの天地間の風情を象徴する  
義的な手法で表現している。》

「若紫に夜は溶けて／夢に漂ふ暁の」—— 暁、まだ夢見心地にいる時、  
薄紫色の空の中に夜が溶けていくような清々しい色合が見えてくる。

第一節の「紫」と第二節の「武藏野」とを合わせて、直ちに連想されるのは、

「紫のひとつもとゆるぎに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今集）である。この和歌は本来紫草を詠んだにすぎないが、女性への愛が意味され、また「若紫」には、「源氏物語」の中で光源氏が少女紫君を発見した巻名が連想され、この第一節以下の象徴的な表現の陰に、一高寮歌としては珍しい女性的な情緒（明確なイメージをもつわけではないが）をなんとなく感じさせる。

「和樂」……みごとに調和したなごやかな音楽。

▼「琴を鼓し瑟を鼓して、和樂して湛たのしましめん」≪詩経・小雅・鹿鳴≫  
「琴瑟和樂」は本来音楽のことだが、男女の仲の和合に喩えている。

【私見】「若紫に夜は溶けて」——六高の寮歌に「若紫に夜は明けて」（明治43年）があり、この方が先に作られた。

▼「若紫に夜は明けて／あゝ暁天の雲の色」（六高・北寮々歌）  
新制東大の駒場寮寮歌（昭和27年）にも次の表現がある。

▼「紫に夜は溶けゆきて／ささやきぬ暁あけの星々」（小佐田哲男）

また、明治14年の小学唱歌集初編に「若紫」と題する曲が採録されている。

▼「わかむらさきの めもはるかなる 武蔵野の

かすみのおく わけつゝ摘む 初若菜」

「花散る床のまどろみや  
枕に通ふ明の鐘  
醒めよと強く私語さしやげば  
夢より出でて又夢の  
歡樂の野に辿り入る  
祝へや一日記念祭」

《作詞者未詳。作曲者 ネーグリ》

「和樂のとよみ」——第二節の「枕に通う明の鐘」と関連させて考えれば、『解説』の指摘するように「男女の和合」のさまを表現したものと解したほうがわかりやすい。

【解説】《第二節では記念祭を迎えた歓喜の情の高まりを歌っている。》

「花散る床のまどろみや枕に通ふ明の鐘」——《言及なし》

【私見】「花散る床のまどろみや／枕に通ふ明の鐘」——「明けの鐘」は、明け六つ（午前六時ごろ）に寺で鳴らす鐘の音をいうが、長唄の「明けの鐘」のように、男を待つ女心や別れを惜しむ気持ちの表現として使われることが多い。

▼「宵は待ち　そして恨みて暁の　別れの鶏と　皆人の憎まれぐちな

あれ啼くわいな　聞かせともなき耳に手を　鐘は上野か浅草か」

《長唄「明けの鐘」(宵は待ち)》

▼「待ちわびて　寝るともなしにまどろみし　枕に通う鐘の音も

夢か現か現か夢か　覚めて涙の袖袂　アレ村雨が降るわいな」

《端唄「待ちわびて」》

上杉景勝に仕えた直江兼統に『織女惜別』という漢詩がある。

三「草より草に沈み行く

片われ月の武蔵野に

み星の涙滴りて

亂るゝ花の潤へば

筑波の峰に星互えて

玉笛ゆるうすとり泣く」

▼「二星何をか恨む年を隔てて逢ふを／今夜連牀鬱胸を散す／

情話未だ終へず先づ涙を灑ぐ／合歡枕下五更の鐘」

【注】二星＝牽牛織女。合歡＝飲棗をともにすること。五更の鐘＝

午前四時頃の鐘。《今宵久しぶりに同床して積もる思いを晴らす

うとしているのに》飲喜の二人の枕元に聞こえるのは、夜明けの

無情の鐘の音である。》

【解説】《第三節では一転して、武蔵野の夜空の「片われ月」や星くずのたたずまい、筑波の峰にすすり泣くように響く玉笛の音に触発される哀愁感を歌っている。》

「草より草に沈み行く 片われ月の武蔵野に」—— 26 「木の芽も春の」(明35)の第五節中の「草より出でて草に入る 月をも見けん武蔵野の」からヒントを得ていると思われる。

「片われ月」—— 弦月の意であるが、相手とすべきものがなくなった孤独が同時に感じられる。

「星の涙」、「花の潤い」、「玉笛ゆるうすとり泣く」と叙情がかもし出されてくる。とはいふものの、そこに女性的な詩情がただよい、表現を和らげているだけで、詩意にまでかかわって行くわけではない。

【私見】「草より草に沈み行く 片われ月の武蔵野に」—— ススキが原の武蔵野を詠んだ歌は数多い。「草」はススキ（尾花）をさす。なお、武蔵野が雑木林に変わってゆくのは江戸中期以降である。

▼「武蔵野は月の入るべき峰もなし」

尾花が末にかかる白雲（《続古今和歌集・源通方》）

▼「武蔵野は月の入るべき山もなし」

草より出でて草にこそ入れ（《詠み人知らず》）

「星の涙」——「露」を表現している。

▼「されば曙雲白く／御空の花のしほむとき／見よ白露のひとしづく／

わが世の星に涙あり」（《土井晚翠『星と花』）

「筑波の峰に星沍えて」——筑波山は男体山と女体山とからなり、

筑波山神社は伊弉諾尊（男体山）と伊弉冉尊（女体山）を御神体とし、

縁結び・夫婦和合の神として広く信仰を集めている。

また、筑波山の雅称は「紫峰（しほう）」であり、「若紫」の縁語ともいえよう。

「玉笛ゆるうすゝり泣く」——この寮歌より後の大正九年の作であるが、晩翠に次の詩がある。

▼「鏡湖しづめる月冷えて／玉笛あすは秋に咽ばむ」

また、唐の温庭筠に『更漏子』と題する次の詩がある。

▼「江楼に背き海月に臨む／城上の角声嗚咽す」

(街の方からすゝり泣くような角笛の音が響いてくる)

四「あゝ当年の若武者が

駒の蹄を忍ばせて

行方も知らず迷ひけむ

丘の夕もありにししか

廣野を響く白銀の

薄の影の淋しさを

【解説】《第四節では騎馬の若武者の姿に托して、若人の人生行路につきまとう迷いと淋しさが詠み出されている。》

「当年の若武者」——一人前になったばかりの若武者（若者）。

「駒の蹄を忍ばせて」「行方も知らず」——《言及なし》

【私見】「駒の蹄を忍ばせて」——恋しい人にひそかに逢いに行くことを喩えてゐる。

▼「足の音せず行かむ駒もが／葛飾の真間の継橋やまず通はむ

《万葉集卷 14 三三八七・作者未詳、東歌》

(足音のしないでゆく馬がほしいなあ。そんな馬がいたら

葛飾の真間の継橋をいつも通つてあの人に逢いたい。)

「行方も知らず迷ひけむ」——「行方も知らず」は、これから先どうなつていくのかと心細く思う気持ちを表すが、戀の行末に悩む状況に使われることが多い。

五「丘は變らぬ丘の上に

自然の姿うつろひて

聳えてゆかし六つの城

散り行く花の下陰に

夕さりくれば若人が

紅き血潮の滾るかな

六「思出多き武香陵

六寮建てゝ二十七

▼「由良のとをわたる舟人かちを絶え

行方も知らぬ戀の道かな」《新古今集・曾禰好忠》(不倉人一首歌)

▼「わが戀は行方も知らずはてもなし

逢ふを限りと思ふばかりぞ」《古今集・凡河内躬恒》

「廣野を響く白銀の／薄の影の淋しさに」——第二節でも述べたよう

に、江戸中期くらいまでの武藏野はススキが原で、それを詠んだ歌も多い。

本節の「廣野を響く白銀の薄」も武藏野のススキが原をイメージしたもので「若紫——武藏野——ススキ」という連想から作詞されたものであろう。

で「若紫——武藏野——ススキ」という連想から作詞されたものであろう。

【解説】《第一節から第四節までの表現には、景情や心情の直叙を避けた一種象徴主義的とも言うべき表現技法が用いられ、平明さを欠く代わりに、暗示とニュアンスに富んだ詩的情感に満ちているが、以下の第五、第六節は記念祭当日の武香陵(向が丘)のたたずまい、散り行く花のもとでの祝宴の様、若人たちの情念の高まりが直情的に詠み出されていて明快である。ただ、この後半二節の平明率直な表現と、前半の曲折の多い情調表現との間に多少のアンバランスが感じられるのは、いたし方がない。》

【私見】この寮歌について、詩句表現の表層をたどって解釈を進めてゆくなら

春年毎にめぐれども  
三年の春に限りあり  
杯あげてさらば君  
ともに壽げ花筵」

ば、上述の『解説』の内容も首肯しうるものであろう。しかし、筆者の私見では、第一節から第四節までの表現には、各節でも指摘したように、「高寮歌には珍しく男女の情愛にかかわる表現が随所に見られる。

いくつか例を挙げてみよう。

◆第一節Ⅱ「若紫」、「和樂のとよみ」

◆第二節Ⅱ「花散る床」、「枕に通ふ明けの鐘」、「夢より出でて又夢の」、「歡樂の野に辿り入る」

◆第三節Ⅱ「み星の涙滴りて」、「亂るゝ花の潤へば」、「筑波の峰」、「玉笛」、「すゞり泣く」

◆第四節Ⅱ「駒の蹄を忍ばせて」、「行方も知らず迷ひけむ」

「享樂主義」を歌った110『しづかに沈む』（明45）に続き大正前半期の一高寮歌には「享樂」「歡樂」「驕樂」「和樂」「燕樂」の五語だけで十四回も登場するなど「寮歌の爛熟期」を迎えたが、『若紫』もそのピークの一つであり、当時の寮生たちの空気が世情を表していると考えられる。

《この点、朽津耕三氏（一高昭23理甲）の示唆による》

こうしたことから、第一節から第四節までは、『解説』の説くような象徴主義的な表現技法による詩的情感として、叙情的・女性的な情緒を何と



162 第二十七回記念祭寮歌『あゝ青春の驕楽は』(大6北寮／谷川徹三 作詞、星井捷平 作曲)

三「むかしは遠き物語

錦繡君の身なりしが

智慧の灯火の暗くして

惑はし者の誘ひに

たゞ瞬間の夢を追ひ

亡びし人もありけるを

四「眞理の神殿はいや遙か

我世の外の地にあらざ

生命の思慕深ければ

二十重に閉す黒金の

堅き扉も開かれん

秘鑰は己が心にて

なく感じるといふだけでなく、むしろ意図的に男女の情愛を裏のテーマとした、ダブル・ミーニングの寮歌と解することも可能ではないかと考へる。

【解説】「むかしは遠き物語……亡びし人もありけるを」—— 錦と刺繡をした

た衣をまとうような身分であつた者が、わが身の愚鈍のために誘惑に負けただ一時の歓楽を求めて、身を滅ぼしてしまふ。そんな例が昔からある。特定のお話に基くか否か不明。あるいは一般化した人間の運命を表すか。

【私見】奇技なようだが、「むかしは遠き物語」とは、浦島太郎伝説をイメー

ジしたものではないか。浦島伝説は、日本書紀、丹後国風土記、万葉集御伽草子などに登場し、京都府の宇良神社(浦嶋神社)には、「浦嶋子口伝記」や「浦嶋明神絵巻」などが残されている。浦島伝説には色々なバージョンがあるが、丹後国風土記及び浦嶋子口伝記によると、浦嶋子は田舎漁師などではなく、開化天皇の末裔にあたり、土地の豪族(下部首)の祖で容姿端正な風流人とされているから「錦繡の身」だつたと考へても差支えなからう。また万葉集の高橋連虫麻呂の長歌で、浦島子のことを「世の中の愚人」と形容していることは「智慧の灯火の暗くして」に通じる。亀

(実は乙姫)に誘われて蓬萊山(または竜宮城)に行つて、惑はし者の誘ひに乗ったことになるし、そこで大歎待をうけて時の過ぎるのも忘れて「たゞ瞬間の夢を追ひ」、望郷の念にかられて故郷に帰つた後は、一挙に齡を取つてみじめな死を迎え、「亡びし人」となつてしまふ。

この寮歌は、誘惑に負けて身を滅ぼすことを戒め、「真理の神殿」は蓬萊山や竜宮城のような「この世の外」にあるわけではないと説いている。【参考書】『浦島太郎の文学史』三浦佑之著(五柳書院)

因みに、この寮歌の歌い出しと終り(第三節でいえば「むかしは遠き物語」と「ありけるを」)の部分のメロディーが、文部省唱歌『浦島太郎』(明治44年)のメロディーと酷似している。これは、果たして偶然であろうか。

163 第二十七回記念祭寮歌『日は眠る』(大6中寮／清野暢一郎 作詞、根村富男 作曲)

164 第二十七回記念祭寮歌『櫻眞白く』(大6 朶寮／高田休廣 作詞、濱尾四郎 作曲)

一 「櫻眞白く咲き出でて

悲しき春の立ち來れば  
黄金を溶かす夕映えに

【解説】本寮歌は、一読、一誦、直ちにその簡明直截を極めた歌意が胸中に伝播して来る作品で、寮生に文字通り愛唱され続けた。但し第三節及び第四節の表現は、決して武力の誇示ではなく、よき意味での武士道的モラルの

六寮の窓燃ゆる時  
彌生ヶ丘の若人は  
高歌ふなり自治の歌

三「あゝ東よりはた西ゆ  
柏の森に集ひ来て  
あはれ人生の強者と  
雄々しく叫ぶ同胞よ  
指導の旗は翻り

顕現であつたとみるべきであらう（要約）。

「悲しき春の立ち来れば」——何故「春」が「悲し」いのか、分らない。おそらく「愛しき春」の意であつて、切実な思いをする、いとしい、という意味なのであらう。

【私見】「悲しき春の立ち来れば」——「かなし」とは、はげしく心を動かされる様を表現する語で、悲喜どちらにも使う。ここでは、春の到来に対し「喜び」と「いとおしさ」とがないまぜになつた感情を抱くさまを表現したものと解する。

▼「山ねむる 山のふもとに海ねむる かなしき春の国を旅ゆく」

《若山牧水『別離』（明43）》

「黄金を溶かす夕映えに」——土井晚翠の詩を踏まえている。

▼「落つる日雲染めて 海黄金を溶かす時」《晚翠・東海遊子吟『松島』》

【解説】「軍鼓は高く鳴り出でぬ」——この表現に軍国主義的イデオロギーを感じ取る向きもあるかもしれないが、それは拡大解釈である。

【私見】「人生の強者」——「人生の勝ち組」という意味ではなく、高い見識と使命感を持つて社会の中で指導的な役割を果たす真のエリートをさすと解する。

軍鼓は高く鳴り出でぬ」

「雄々しく叫ぶ同胞よ」——「同胞」は寮友を兄弟に喩えたもの。

「指導の旗は翻り 軍鼓は高く鳴り出でぬ」——常識的には、「四綱領」を指導理念として、自治を守るための戦いに参加せよ」と解釈することになるのであるが、本寮歌の時点で、自治に関して「指導の旗は翻り」「軍鼓は高く」「太刀を佩け」「緋緘を鎧へ」と大呼する必然性があるとは考えにくい。そこでいささか独善的ではあるが、一つの仮説を披露して批判を仰ぎたい。

大正デモクラシーの大きな流れのさ中であって、東大教授吉野作造が「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」という論文を発表して「民本主義」を説き、大きな反響を呼んだ。当時一高一年生だった本寮歌の作者がこうした大正デモクラシーの思潮の影響を受けた可能性も十分ありうる。その場合は、「指導の旗」「軍鼓」が吉野論文を暗喩し、真のエリートをもって任ずる一高生は、特権に安住せず、民本主義によって一般人民の利福・意向を重んずべきだと主張していると解される。

四「されば吾が友太刀を佩け  
汝が緋緘を鎧へかし  
過去の夢よりさめ出でて

【解説】「吾が友太刀を佩け 汝が緋緘を鎧へかし」——類句に「緋緘しるき若武者」(明38『王師の金鼓』)、「緋緘着けし若武者」(明42『緋緘着けし』)などがある。一高生のきびきびした精神、強固な意志力を示す表現。

165 第二十七回記念祭寄贈歌

疾く起ち黎明<sup>あけ</sup>の門開き  
日出づるところ大いなる  
理想の國を指呼せずや」

一 「とこよのさかえに  
かがやくひかり  
いらかにはえそふ  
わがふるさとの  
けふしもはたちと  
ななとせのはる  
いしくも<sup>いそあび</sup>  
うたはざらめや」

【私見】「吾が友太刀を佩け 汝が緋緘を鎧へかし」——明治25年の寮歌『雪  
ふらばふれ』を作詞した歌人の落合直文（当時は一高講師）が一高校友会  
雑誌に発表した次の歌を踏まえている。落合直文はこの歌によって、文学  
の世界で「緋緘の直文」と綽名されたと伝えられる。

▼「緋緘の鎧をつけて太刀はきて 見ばやとぞおもふ山ざくら花」

《明25／5の一高校友会雑誌に発表したもの》「萩之家歌集」所収》  
『とこよのさかえに』（大6東大／矢崎美盛 作詞、ベートーベン「第九」）

【私見】この寄贈歌がベートーベンの「第九交響曲」の第四楽章の「歓喜の歌」  
の曲に合わせて作詞したものであることはよく知られている。

『解説』では言及されていないが、この寄贈歌の発表が大正7年のドイツ  
兵俘虜による『第九』演奏よりも早かったため、『第九』の本邦初演がい  
つだったかについては一高関係の会合でもしばしば話題に上る。本邦初演  
の時期・演奏主体については諸説が錯綜するが、次のように整理すると  
理解しやすい。

●大正7年6月1日【本邦初演（全曲）】 Ⅱドイツ兵俘虜オーケストラ

板東俘虜收容所（徳島県鳴門市）／ヘルマン・ハンゼン指揮

●大正13年1月26日【日本人による本邦初演(第四楽章)】||九大フィル

摂政宮殿下御成婚奉祝音楽会(福岡市記念館) / 榊保三郎指揮

●大正13年11月29日【日本人による本邦初演(全曲)】||東京音楽学校

東京音楽学校第48回定期演奏会 / グスタフ・クローン指揮

《第九》と日本の讚美歌

【解説】この寄贈歌の歌詞の大意はむしろ讚美歌に近いものがある。ちなみに同じ「第九」の節による讚美歌(14番)があるが、歌詞に「歓喜の歌」の影響はあまり見られない。

【私見】「第九」の旋律がわが国の讚美歌に初めて登場したのは昭和6年版『讚美歌』中の讚美歌14番で、それまで別の曲に使われていた「あめには御使みつかひ」の歌詞と、「第九」の「歓喜の歌」の旋律とが組み合わされたものである。昭和29年版『讚美歌』で15番に変更されたが、現行の『讚美歌21』(平成9年)では削除された。

《この項、日本基督教讚美歌委員会・小宮氏の「」教示を得た》

一「比叡の山に雪消えて  
花嵐峽に咲きにけり  
ノツクの響木靈せし  
向陵の春忍ばるゝ」

二「我れ陵の上に人となり  
雄獅子の意氣を養ひつ  
世を思ふわざ學びにき  
向陵の人今如何に」

三「見よ國といふ國擧げて  
戦の庭にひしめけば

【解説】第一節及び第二節では、従来の京大寄贈歌の例に倣って、京都の名所旧蹟や自然を詠みこみつつ、かつて学んだ向陵の三年間を懐かしみ、後輩の健闘を祈っている。「嵐峽」は京都の西、嵐山大堰川の山峽のこと。「ノツクの響」とは、グラウンドに響き渡る野球のノツクの音をさす。

【私見】「嵐峽」——嵐山の手前を流れる大堰川（桂川）の渡月橋上流一帯は一般に嵐峽と呼ばれている。春の櫻、秋のもみじは嵐山の見所の一つである。

「ノツクの響木靈せし 向陵の春忍ばるゝ」——野球部部歌を踏まえる。

▼「彌生が岡の春の夕 ノツクの響雲に入り」《明 36 『野球部部歌』》

【私見】「陵の上に人となり」——「一高に入って、一人前に成長する」の意。「雄獅子の意氣」——百獸を恐れさせる雄獅子のように元気盛んなこと。「世を思ふわざ學びにき」——「経世済民」（世の中を治め、人民の苦しみを救うこと）のための政策・技術を学び、身につけた。

「向陵の人今如何に」——「高の後輩たちは今何を学んでいるのか。」

【解説】「力の前に法もなく 必要の下道義絶えぬ」——第一次大戦における世界状勢、特に「力こそ正義なり」と言わんばかりの価値観、道義観の転

力の前に法もなく

必要の下道義絶えぬ」

倒、崩壊の現象に対し、第三節・第四節で痛烈な批判を下している。

【私見】「見よ國といふ國擧げて 戦の庭にひしめけば」——第一次大戦の勃発から三年を超え、欧州各国をはじめ多くの国が参戦した。

「力の前に法もなく 必要の下道義絶えぬ」——「力への信仰」という時代精神を反映して、永世中立国であるベルギー及びルクセンブルクへの侵攻（ロンドン条約違反）、第二次イーペル会戦における初の大規模な毒ガス使用（ハーグ陸戦条約違反）など、ドイツ軍による国際法違反や非人道的行為が相次いだ。

四 「永世の協約は今いづこ」

ルウヴェンの花踏み荒らし

雪崩れ入るなる醜の勢

弱きは何の咎ぞや」

【解説】「永世の協約は今いづこ」——ベルギーは「永世中立国」を宣言し、列国もこれを一八三九年のロンドン条約で承認していたが、一九一四年七月、

大戦が勃発すると、ドイツ陸軍は直ちにルクセンブルクを攻略、続いてベルギーに侵入し、西進してブリュッセルに入城したことをさす。

「ルウヴェン」——ブリュッセルの東北二十数キロにある大学都市。

【私見】「醜の勢」——ドイツ軍を醜悪な軍勢と憎みののしつていう。

「弱きは何の咎ぞや」——ベルギーが弱小国であることには何の罪もない、と言っている。国土に侵攻した圧倒的に優勢なドイツ軍に対し、兵力が著しく劣るベルギー軍は、国内の鉄道トンネルや橋梁を破壊するなど



五 「三千年の文明の

理想は夢ぞ國民に

糧の争絶えざらむ

あらま欲しきは力なり」

して抗戦し、ドイツ軍の進撃を遅らせることによってフランス軍に防衛上の余裕を与えた。

【解説】第五節については、言及なし。

【私見】第五節と第六節は、大正五年九月から十二月まで大阪朝日新聞に断続して連載され翌年一月に単行本として刊行された河上肇京大教授の『貧乏物語』を踏まえたものであろう。「驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である。」という書き出しではじまる同書は、社会問題の鳥瞰図を示したものとして、大きな反響を呼んだ。この寄贈歌の作詞者が『貧乏物語』連載時に京大生であったことを勘案すれば、その影響を受けた可能性が高いと考えられる。

「三千年の文明の理想は夢ぞ」——「三千年」を「皇紀三千年」（大正六年は皇紀二五七七年）と解する見解（吉田健彦氏、同氏HP。）も有力ではあるが、『貧乏物語』の冒頭に続いて「英米独仏その他の諸邦、国は著しく富めるも、民は甚だしく貧し。げに驚くべきは、是等文明国における多数人の貧乏である。」と河上教授が述べていることを踏まえ、私見では、この寄贈歌における「三千年の文明」とは、ギリシヤ文明以後の西洋文明の三千年をさし、西洋の文明諸国においても、「国民全体の幸福の実現」

という理想はいまだ「夢」（現実から離れた甘い考え）でしかない、と主張していると解したい。

「國民に糧の争絶えさらむ」——『貧乏物語』の中で河上教授は、英国のロイド・ジョージ蔵相（一九〇七年当時）の演説中で、新課税の理由として、国防予算と並んで「貧乏を救済し予防するための大戦争」のための予算を挙げていることに注目し称揚している。「糧の争」とは食糧の価格や配分をめぐる争いであり、ひいては、貧乏根絶のための戦いをも意味するものである。ちなみに日本においては翌一九一八年に米騒動が起き、大きな社会問題となった。

「あらま欲しきは力なり」——「糧の争」すなわち「貧乏を救済し予防するための大戦争」に正面から取り組むためには、英国のロイド・ジョージ氏のような、政治力・実行力のある大政治家が（日本にも）いてほしいものだ。

【解説】第六節では、批判の矛先が貧富の差による社会的矛盾に向けられる。【私見】「さはれ」——（接続詞的に）それはそうだが、それにしても。

「人の世の悲しき姿君見ずや」——寮歌において「人の世」とは、「濁世」、「俗世」と同じように、悪い意味に用いられることが多い。

六「さはれ我が友人の世の

悲しき姿君見ずや

貧しきものは力無く

富みたる者ぞ驕りたる」

▼「人の世低く瞰下して 天地掩ふ雲の峯」《明 39 『都は春の綾錦』》

▼「朱霞落杯の人の世も さめぬ綾羅の夢ならじ」《明 40 『春蟾かすむ』》

「さはれ我友……君見ずや」——前節で西洋の文明諸国の状況について述べたあと、本節で日本の状況を取り上げ、「それはそれとして、友よ、君だつて我が国の貧富の格差の実情を知っているだろう」と問いかけている。

「貧しきものは力無く、富みたる者を驕りたる」——戦による未曾有の戦争景気の到来によって、日本では鉱山、船、貿易を横綱格として広い範囲で成金が続出したが、成金の傍若無人な贅沢ぶりは貧乏物語と背中合わせに存在した。貧富の格差が増大する中で、貧乏人は事態を打開するだけの力を持ち合わせず、政治も無力無策であった。河上教授の『貧乏物語』では、貧乏を根絶する方策として、①世の富者がみずから進んで奢侈贅沢を廃止すること、②なんらかの方法で貧富の懸隔を匡正すること、③各種の生産事業を国家自ら担当すること、の三つを挙げ、このうち重きを置くのはあくまで富者の奢侈廃止だとしている。

▼「まづしきものゝ血をすゝり 肉をはむてふ鬼ぞすむ」《明 41 福岡大『紫淡く』》

▼「富者は貧者の血を齧り 強者は弱者の肉を食む」《明 45 『天龍眠る』》

七「**人人として差別なし**」わかち

をみなをのこ  
女男になど劣る

せめて愛しき同胞にはじかひ

自由と平和あらしめよ」

【解説】第七節では、男女の不当な差別にまで批判が及び、人類の平等、同胞愛、自由と平和の理想を強く掲げる。大正デモクラシーの思潮を典型的に示した。

【私見】「**人人として差別なし**」わかち 女男になど劣る」——いわゆる大正デモク

ラシーの思潮が盛んな中であって、民本主義、人種差別反対、水平社運動、普選運動、女性解放運動などの動きが顕在化していたが、こうした思潮をここまで大胆かつ率直に謳い込んだ寮歌は、他に例を見ない。

「女男になど劣る」——平塚雷鳥らいてうらは一九二一年に青鞥社を結成し、

女性雑誌『青鞥』を創刊した。『青鞥』に集った「新しい女」たちは、女性を束縛する古い習俗に抵抗し、打破しようとして、「女子の覚醒」「貞操

」「墮胎」「廃娼」などを巡っての論争を展開した。こうした動きは、その後の新婦人協会や婦人参政権獲得期成同盟会等の活動へとつながった。

▼「元始、女性は実には太陽であった。真正の人であった。今女性は月である。他人に依って生き、他の光に依って輝く、病人のような蒼白い顔の月である。」《雑誌『青鞥』創刊号（一九二一年九月）掲載の平塚雷鳥らいてうの評論の書き出し》

「せめて愛しき同胞にはじかひ 自由と平和あらしめよ」——「愛しき同胞」と

八「君夜半にして燈に

心映して觀取せよ

「のどには死なじ他人の爲め」  
さやかに魂はつぶやかむ

は、ここでは「氣の毒な外国在住の邦人移民」をさすと解する。明治後期以降、アメリカやカナダなどで高まっている日本人移民排斥問題を踏まえて、「日本人移民に自由と平和を与えよ」と訴えているのであろう。第一次大戦後のパリ講和会議に臨んで、人種差別禁止の規定を国際連盟規約の中に明文化することを日本が求めたのも、直接的には、日本人移民排斥問題への対応策であったとされる。なお、「愛しき同胞」を女性のことと解し、借金や人身売買で苦界に身を沈めた女性をイメージする見解（吉田健彦氏、同氏HP。）もある。

【解説】「のどには死なじ他人の爲め」——陸奥国の黄金産出における宣命（続日本紀）の一節に、大伴・佐伯三氏の語り伝えとして、「海行かばみづく屍山行かば草むす屍王のへにこそ死なぬ、のどには死なじ」とあり、「万葉集」の大伴家持作の「顧みはせじ」と異なる。宣命に引く意は、安穩無事には死ぬまいというのであるが、本奇贈歌では、その意を転じ、やすらかに死ぬまい、他人のために命をささげよう、の意味にしている。

【私見】「觀取」——見てとる。見てその真相を知る。

「のどには死なじ他人の爲め」——「のど」は「のどか」（長閑）の意。明治13年に東儀秀芳が作曲した『海行かば』の歌詞の最後は「のどには

九「あゝ慷慨のしげきなかなげかひ

鐵拳振ひて濁世に  
男さびせよ蠮螋も

龍車に向ふ意氣地あり

死なじ」であつたが、昭和12年に信時潔が新たに作曲したものは「顧みはせじ」となつており、大伴家持作の「賀陸奥国出金詔書歌」の長歌『万葉集』卷18(四〇九四)によつたものである。戦時中盛んに歌われたのは信時潔の新曲の方であつた。

【解説】「男さびせよ」——男らしくせよ。

「蠮螋も龍車に向ふ意氣地あり」——『莊子』(人間世)に「汝不知<sub>レ</sub>夫<sub>ハ</sub>たうろうろ<sub>ヤ</sub>、<sub>ニ</sub>其<sub>ハ</sub>臂<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>當<sub>ル</sub>車<sub>ニ</sub>、<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>其<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>勝<sub>ヘ</sub>任<sub>ニ</sub>也」とある。「蠮螋一平、怒<sub>ニ</sub>其臂<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>當<sub>ル</sub>車<sub>ニ</sub>、<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>其<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>勝<sub>ヘ</sub>任<sub>ニ</sub>也」とある。「蠮螋」

車轍に当たる」は、弱小者が身の程をわきまえずに強敵に立ち向かう喩。

「龍車」は、天子の車、あるいは、りっぱな車。「蠮螋」(蠮螋に同じ)はカマキリ。

【私見】「蠮螋も龍車に向ふ意氣地あり」——「蠮螋の斧」ともいう。出典はいくつかあり、「解説」の引く『莊子』では「身のほどもわきまえず」という否定的なニュアンスで使われているのに対し、『韓詩外伝』には、「齊の莊公が獵に出た際、道端のカマキリが通すまいと前足をあげて車輪に打ちかかるうとしたのを、莊公は勇者なりとしてこれを避けて通つた」とあり、「非力な者でも身を捨てて強敵に立ち向かうべきときがある」という

十「頽<sup>くづ</sup>廢れ行く世に押し立てし

向陵の城とこととはに

強く正しき益<sup>えき</sup>荒雄の

修道院と残れかし」

167 第二十七回記念祭寄贈歌

二「遙かに遠き山の端に

かかれる雲もその往時<sup>かみ</sup>に

春のかたみと歌ひてし

我等が若き心ぞや

肯定的な使い方がされている。本節のニュアンスからすれば、『莊子』より『韓詩外伝』を引くほうが適切であろう。

【解説】最後の第九節、第十節においては、向陵の「益荒雄」たちが、正義のために雄々しく闘いを挑むことへの期待をもって結びとしている。

【私見】「修道院と残れかし」——「修道院」は、厳格な規律の下に共同生活を営んで修行を積むキリスト教の施設で、一高の寄宿寮をたとえる。ただし「修道」の語自体は『中庸』の「修道之謂教」（道ヲ修ムルヲコレ教ヘトイフ）に由来し、教育や仏道修行に用いられる表現であって、キリスト教の専用語ではない。

▼「今日回り来る歡喜<sup>よろこび</sup>に 修道の丘夢亂る」『今日回り来る』大13 東大

▼「この丘ぞわれらが住家 年古りし修道の城」『八重汐路』昭4

『つめたき冬の』（大6 九大／谷 茂 作詞、上沼健衛 作曲）

【解説】第二節の、遙かに遠い山の端にかかっている雲や、目前の一ひら散った花びらにも、向陵時代のことが深く偲ばれるというあたりには、情味が漂っている。

【私見】「春のかたみと歌ひてし」——「かたみ」は、過ぎ去ったことを思出

一ひら散りし花びらも  
丘の名残の惜しまるれ

三「筑紫のはまに思ふとき

歌ふ祭りの花筵

宰府の宮に照る月も

朧に霞む春なれば

昔語りに梅の歌

東の人に捧げなん

させるもの。平家物語灌頂の巻・大原御幸の章に、「遠山にかかる白雲は、散りにし花のかたみなり」とあり、本寮歌の「遠き山の端にかゝれる雲」、  
「一ひら散りし花びら」、「春のかたみ」もこれを踏まえているとみられる。

【解説】「思ふとき」——言及なし。

【私見】「思ふとき」——発表当初は「思ふとち」と表記されていたが、昭和42年版の寮歌集以降は「思ふとき」に変更された。「思ふとち」では意味が通じないとして、変更したものであろう。しかし私見では、当初の「思ふとち」は「思ふとち」の誤植と見るのが正しいと考える。「思ふとち」|| 気の合う者同士、仲間。( )

▼「梅の花今盛りなり 思ふとち 挿頭かざしにして今盛りなり」(万葉集五820)

【参考】「とち」は「綴ち」で、一つに縫い合わせる。「思ひとち」の意か。心を一にして。(吉田健彦氏、同氏HP。)

【解説】「昔語りに梅の歌 東の人に捧げなん」——太宰府で「梅の花」といえば、当然有名な菅原道真の「東風吹かばにはひおこせよ梅の花」の歌が思い浮かぶが、ここでは都を偲ぶ道真に託し、まことに道真の歌のように遠い昔の思い出となってしまうが、都へ、向陵へと懐かしさの溢れてくるこの気持ちを、後輩たる「東の人」に伝えたいというのであろう。



【私見】「昔語りに梅の歌 東の人に捧げなん」——「昔語りに梅の歌」とは、

歴史物語『大鏡』の中で、大宅世継（190歳）と夏山繁樹（180歳）という長命な二人の老人の昔語りという形で菅原道真左遷の悲劇と「東風吹かば」の歌が披露されていることにならって、東京の一高の後輩に飛び梅の故事を改めて披露し、遠く九州の地に遊学している卒業生の心情を思いや

ってほしいと訴えている。

▼「西に離れて三百里 筑紫の果に迷ふとき 自治の梅花に東風吹かば 遙かに匂ひおこせかし」≪一高寮歌 118 『筑紫の富士に』（明44 九大）≪

「照る月も朧に霞む春なれば」——同じ作者による次の寮歌に同様の表現がある。

▼「朧月夜に梅は飛び」≪一高寮歌 147 『野路の小百合の』（天4 九大）≪

168 第二十七回記念祭寄贈歌『青葉山』（大6 東北大）

169 第二十八回記念祭寮歌『悲風惨悴』（大7 東寮／長澤信之助 作詞、根村富男 作曲）

170 第二十八回記念祭寮歌『うららにもゆる』（大7 西寮／橋爪 健 作詞、長谷孫重郎 作曲）

三 「何處」と問はるるさみぢりの

【解説】「何處」と問はるる——≪言及なし≫

橄欖の鞭ふりかざし  
朗らに鳴らせ柏笛  
「途遠くして光あり」

五「生命の窓の白壁に

鑄りて古りにし  
名は誰ぞや」

171 第二十八回記念祭寮歌『朧月夜に仄白く』(大7 / 宮田保郎 作詞、星井捷平 作曲)

一「朧月夜に仄白く  
光を宿す花片に  
似たる人生の命こそ  
ちりて果無き運命なれ  
嘆くを止めて友よ舞へ  
若き我等に誇あり」

【私見】「何處と問はゞ」——この寮歌全体に宗教的(キリスト教的)な表現が多用されていることから見て、この詩句は、シエンキエヴィチの歴史小説で知られる『クオ・ヴァディス、ドミネ?』【主よ、どこに行かれるのですか】という使徒ペテロの言葉を下敷きにしたものではないか。

【解説】「鑄りて古りにし名は誰ぞや」——「鑄りて」は「彫って」。

【私見】「鑄りて古りにし名は誰ぞや」——解説ではまったく言及されていないが、この「白壁」は寮室の壁、「鑄りて古りにし名」はその壁に落書きされた寮生の名前のことであろう。

【解説】本寮歌は、人生無常のはかなさ、世に生きる苦しき、「智慧」の世界の冷たさなどを一方で強調しながら、他方これらすべてを排して、「若き命の張り」を讚美し、「若き榮」と「誇り」を歌い上げている。

【私見】本寮歌は、島崎藤村の詩や先行寮歌などの影響を強く受けている。「ちりて果無き運命なれ」——人生の命は、桜の花が散るように、あつげなくむなしい運命を背負っているものだ。

「嘆くを止めて友よ舞へ 若き我等に誇あり」——次の李白の詩や一高

二「草笛迷ふ暮の野路

行衛果なき旅の身の  
世に苦ほしき命かな  
あゝ好しさらば我友よ  
來りて春の甘酒に  
酔うて歌へよ若き榮

の寮歌を踏まえたものであろう。

▼「流光欺人忽蹉跎

君起舞 日西夕

当年意气不肯傾

白髮如絲

歎何益

流れる時間は人を嘲るように忽ち過ぎ去つてしまふ。

君よ、起つて舞いたまえ。太陽は西に沈むではないか。

若き日の盛んな意気は今も衰えてはいない。

白髮が糸のようになってから

歎いても何の役に立とうか。

《李白『前有樽酒行 其の一』》

▼「若き誇はありながら 淡き愁をいかにせん」《大3『春の光の』》

【解説】「行衛果なき旅の身の」——「行衛」は「行方」の宛字。

【私見】「草笛迷ふ」——草笛の音がどこからか聞こえてくる。次を参照。

▼「笛の音迷ふ波の上」《明43『笛の音迷ふ』》

▼「笛のしらべはいづくぞや」《藤村・夏草『晩春の別離』》

▼「行衛果なき旅の身の」——藤村の詩を踏まえるか。

▼「わきめもふらで急ぎ行く 君の行衛はいづくぞや」《藤村・若菜集『醉歌』》

「世に苦ほしき命かな」——「世に」は世間一般に類のないほど程度の甚だしいこと。非常に、実に。「苦ほしき」は「苦しき」の語調をととのえたもの。「狂ほしき」なら「正気を失っている」意になるので採らない。

三「かの大空の明星もあかほし

若き我等に何かせん  
智慧の泉は溢るれど  
その冷さを如何にせん  
春永劫の春ならず  
琥珀の酒に我れ酔はん」

四「丘の古城の白壁に

夕陽も淡く映え出でて

「あゝ好しさらば我友よ 來りて春の甘酒うまさけに 酔うて歌へよ若き榮——  
藤村の次の二つの詩を受ける。

▼「あゝよしさらば美酒うまさけに うたひあかさん春の夜を」《藤村・若菜集》「春」  
▼「甲斐かひなきことをなげくより 來りて美き酒うまさに泣け」《藤村・若菜集》「醉歌」

【解説】本節については言及なし。

【私見】「かの大空の明星も 若き我等に何かせん」——若い自分たちの行手を定めるために頼りとする明星、たつて何をしてくれるわけでもない。

▼「遙かに見ゆる明星の 光に行手を定むなり」《明 34》「春爛漫の」  
「智慧の泉は溢るれど その冷さを如何にせん」——次の寮歌を受ける。

▼「つめたき智慧に欺かれ 樂しき丘の思ひでを 葬る時もいつの日か」《明 45》「しづかに沈む」

「春永劫の春ならず 琥珀の酒に我れ酔はん」——次の寮歌を受ける。

▼「傲慢はこりの酒に人酔へど 花とこしへに春ならず」《明 43》「青鸞精を」  
▼(参考)「花とこしへに春ならず」《晚翠・天地有情》「星落秋風五丈原」

【解説】本節については言及なし。

【私見】「丘の古城の白壁に」——高寄宿寮の外壁をさす。

闇も音なく迫るとき  
かの欄干おほしに身をよせて  
心の春の燈火に  
若き命を照すかな

五 「夕べの鐘に嘆きつゝ  
高樓たかどの我は上り來て  
光を暗き窓に倚り  
春の調を高誦せば  
若き命の漲りに  
胸の血潮も滾るかな

六 「月圓かななる丘の上  
今宵高樓灯は赤し  
時のを車廻り來て

「かの欄干おほしに身をよせて」——藤村の詩を踏まえるか。

▼「玉の台の欄干おほしに かくるゆふべの春の雨」《藤村・若菜集》「おえふ」

「心の春の燈火に 若き命を照すかな」——藤村の詩を受ける。

▼「心の春の燭火たくもとに 若き命を照らし見よ」《藤村・若菜集》「醉歌」

【解説】「高樓たかどの我は上り來て……春の調を高誦せば」——『荒城の月』

の「春高樓の花の宴（晚翠作詞）を踏まえたか。

「光を暗き窓に倚り」——「を暗き」の「を」は接頭語。「暗く」。

【私見】「光を暗き窓に倚り」——藤村の詩を受ける。

▼「秋のひかりの窓に倚り」《藤村・若菜集》「おえふ」

「春の調を高誦せば 若き命の漲りに 胸の血潮も滾るかな」——次の寮歌などを踏まえたのであろう。

▼「若き命のみなきりに うたひし歌を忘れめや」《明45》「春より暮れて」

▼「胸の血潮の若ければ 蹴りなば蹴らむ眞命も」《明40》「春蟾かすむ」

【解説】「時のを車廻り來て」——「を車」の「を」は接頭語。「車」の意。時が巡り來る意。

【私見】「月圓かななる丘の上」——満月の向陵をいう。紀念祭当日（大7・3・

二十有八宴の日

花散る下に草を敷き

語り明かさん記念祭

1の月齢は17・7、前日のイブの月齢は16・7で、満月にかなり近い。

「今宵高樓灯は赤し」——「高樓」は前節同様に「高寄宿寮をさす。「灯は赤し」は記念祭の時に掲げられる赤色の「自治灯」をさす。

「時のを車廻り来て」——「を車」の「を」は接頭語（小）で、名詞について、小さい、細かいの意を表すほか、語調を整えるために用いられる。ここでは後者。「時のを車が廻る」とは、昼夜や四季などが繰り返されるように「時が廻り来る」ことを車輪の回転に喩えたもの。

172 第二十八回記念祭寮歌 紫霧ふ暁の 紫霧ふ 大7北寮／橋高寶實 作詞、矢野一郎 作曲

一 「紫霧ふ暁の

帳の隙ゆ窺えは

廣野の胡床青はみて

靈の花は香ひけり

豊旗雲の遠路より

光の影は躍り出ぬ

【解説】 161 『若紫に』との関連についてはほとんど言及なし。

【私見】 本寮歌は前年の161 『若紫に』を作詞した橋高寶實氏が作詞したもの

だが、『若紫に』で使われた語句が頻出している。この第一節だけでも「紫

「廣野」「胡床」「青はみ」「靈」「光」の六語、第二節では「自然」「六の

城」、第三節では「花ちる」「丘」「どよむ」、第四節では「春」「醒むる」

「夢」「行方」「血潮」「和楽」と、あわせて十七語にのぼっている。

二 「椽色のみ衣棄て

秘めし自然のみ胸より

【解説】 「み衣棄て」「み胸より」「群小鳥」——「み衣」は衣服の尊敬語。

主語が「群小鳥」だとすれば、「み衣」という尊敬語を用いるのは不適当。

粧ひ凝す群小鳥  
物皆蘇生し喜びに  
天吹く風のむた歌ふ  
響きや高し六の城

粧いをこらす「群小鳥」が何を指すか不分明。「み胸」という尊敬語も右と同じく適切でない。

【私見】「み衣棄て」「み胸より」「群小鳥」——「群小鳥」は前後の文脈からみて、一高の寮生のことを指すと見るべきであろう。この場合、「み衣」は尊敬語というよりは、美称として使われたものか。なお、「自然」は「天」や「空」などと同じように、擬人化して尊敬語を用いることがある。

▼「同じ」「自然」のおん母の御手に育ちし姉と妹

み空の星を花といひ わが世の星を花といふ（≪土井晩翠「星と花」≫）  
【解説】「物皆蘇生し喜びに」——「蘇生し」は「うまれし」の誤用か。「生む」の下二段活用 of 古例を見ず。

【私見】「物皆蘇生し喜びに」——「蘇」には「サム」（≪めざめる≫）、「ヨミガヘル」（≪蘇生する≫）などの訓があることから、「うめし」は、解説のいう「うまれし」ではなく、「さめし」の誤植であると見るのが順当であろう。春になって万物が目覚め、よみがえった喜びを表現したものと解する。

四 現れてはひそむ同胞の  
行方の空はわかねども

【解説】「現れてはひそむ同胞の 行方の空はわかねども」——意味不明。  
この世に現れては消えて行く軽薄な人々の意か。

【私見】「現れてはひそむ同胞の 行方の空はわかねども」——「高に入学し

173 第二十八回紀念祭寮歌『霞一夜の』（大7中寮／副島 勝作詞、中野 勇作曲）

五「老いし聖者が嘆きけむ

若き誇りのたまゆらと

君よ涙を拭ひ来ね

花の小蔭に笛取りて

心を籠めて我が幸を

強き生命の音に泣かむ」

ながら中退して行つた寮友を思いやっているのである。作詞者の橋高氏

自身もその後中退している。なお、85『潮高鳴り』にも類似的表現があるが、その作詞者である金井為一郎氏もその後中退した。

▼「昔の友よ今何処 行きて跡なき岡の辺に」≪85『潮高鳴り』明42≫

【解説】「老いし聖者が嘆きけむ 若き誇りのたまゆらと」——「たまゆら」

は、微か又は少しの間。「老いし聖者」は、特定の人物を想定する必要はないであろう。

【私見】「老いし聖者が嘆きけむ 若き誇りのたまゆらと」——「若き誇りのた

まゆらと」は「若さを誇れるのは、ほんの短い間だけだ」の意。「老いし聖者」とは、次の漢詩文の作者である朱子（朱熹）のことだと解する。

▼「謂ふ勿れ、今日学はずとも来日有りと。」

謂ふ勿れ、今年学はずとも来年有りと。

日月逝けり、歳は我と延びず。

嗚呼老いたり、是れ誰の愆ぞや。」≪勸学文』朱子（朱熹）



▼「少年老い易く学成り難し。」

一寸の光陰軽んずべからず。

覺えず池塘春草の夢。

階前の梧葉已に秋声。」《偶成》（伝）朱子（朱熹）

174 第二十八回記念祭寮歌『眠れる獅子の』（大7朵寮／松原久人作詞、箕作秋吉作曲）

175 第二十八回記念祭寄贈歌『蘇る春の』（大7東大）

176 第二十八回記念祭寄贈歌『いま京近き』（大7京大／牧 亮吉 作詞）

一 「いま京近きみ山には

はるの雪だに

消えなくに

都は野邊のわか草も

萌ゆると見れや

はるかなる

彌生が岡のはつ櫻

【解説】「いま京近きみ山には……わか草も」——「古今集」（春上）「み山に

は春の雪だに消えなくに都は野邊の若菜つみけり」（歌文）。「京近きみ山」

は比叡山をさす。

「萌ゆると見れや」——「見れや」は「見ればや」と同義で、「見るから

の意だが、「こ」では「見ると」程度の軽い意味の使い方。「や」は間投助詞。

【私見】「いま京近きみ山には……わか草も」——「古今集」の歌では「春の雪」

ではなく「松の雪」とある。作詞者自身も、「春の雪」は提出を急いだた

ましてや笑みは

「そめつらん」

めの書き誤りで「松の雪」が正しいと語っている（「高同窓会会報第27号／昭10・1」）。

「み山」は「山的美称」と「深山」の二通りの解釈がありうるが、古今集の元歌については、「消えやすい松の雪さえまた消えない」「ことから、「深山」と解するのが通説である。この寮歌の場合、「京近きみ山」とあるので、京都と近江にまたがる比叡山をさすと解する。「都」は京の都をさす。

「萌ゆると見れや」——「や」は活用語の已然形に付く疑問の係助詞。「見れや」は「見ればや」と同義で、「見れや……つらん」は「見るから……している（いた）のであるうか」の意。小野小町の次の歌（古今集・恋二）が参考になろう。

▼「思ひつつぬればや人の見えつらむ 夢と知りせば覚めざらましを」  
「ましてや笑みはそめつらん」——「まして」は、なおさら、いうまでもなくの意。「笑み」は、動詞「笑む」（花のつばみがほころぶ、咲く意）の連用形。「そめ」は初め。「つらん」は完了の助動詞「つ」の終止形十推量の助動詞「らん（らむ）」。

都近くの比叡山では消えやすい松の雪でさえまた消えないのに、京の都

二「今日の祭を偲ぶため

所ぞかはれ月雪の

京洛なれば花鳥や

糸竹呂律の音にそへて

かざし忘れぬ柏葉の

萌黄も匂ふ春の曲」

では野辺の若草も萌えて出ているのだから、京都盆地より暖かい彌生が岡の  
一高ではなおさら、初櫻の蕾がほころびはじめているのではなからうか。

【解説】「所ぞかはれ」——言及なし。

「糸竹呂律の音にそへて」——「呂律」は音楽の調子。「糸竹」は、「糸」  
は弦楽器、「竹」は管楽器、管弦の両者を合せた音楽の意。

「萌黄も匂ふ春の曲」——（柏葉の）みずみずしい薄緑色の形容。

【私見】「所ぞかはれ……かざし忘れぬ」——母校は彌生が岡（こ）は京都と、場  
所こそ異なっているが、母校を象徴する柏葉を髪に挿すことは忘れないで  
今日の記念祭を偲ぶのである。「かざし」は花や枝を折って髪や冠に挿す  
こと。帽子に柏葉の徽章をつけることをさす可能性もあるが、この節で京  
都の風雅を強調していることからみて、柏の葉の実物を挿すと解する。

「月雪の京洛なれば花鳥や 糸竹呂律の音にそへて」——「月雪」、「花  
鳥」とは、「雪月花」や「花鳥風月」など美しい景色や詩歌・絵画などを  
楽しむ風流を、「糸竹呂律」は音楽を指し、風雅の伝統のある京都であれ  
ばこそ「春の曲」(こ)こでは寮歌を歌うときも、「糸竹呂律」(曲の演奏)  
だけでなく、柏葉を髪に挿すという風流を忘れることはしない、と言って

いぬ。

「柏葉の萌黄も匂ふ」——

▼「織物は紫。萌黄に柏葉織りたる。」〔枕草子〕「能因本」三〇一段

三「嵐の山の名にしおふ  
千本ひと目に餘れども」

【解説】「千本ひと目に餘れども」——「一目千本」は、普通は吉野山についていう。嵐山の桜は吉野以上であることを誇っている。

【私見】「千本ひと目に餘れども」——謡曲『嵐山』に、「名に負ふ吉野の山桜、千本の花の種取りて、この嵐山に植ゑ置かれ云々」とあり、嵯峨天皇の御代に吉野山の桜が嵐山に移し植ゑられたと伝えている。「名にしおふ」は、ここでは「非常に高名な」の意であろう。また、「千本ひと目に餘れども」は、当時の京大生の数、あるいはそれまでに一高から京大に進学した学生の数が千人を超えていることを指しているのではないか。

四「汲むや心もいさぎよき

【解説】「汲むや心もいさぎよき」——「いさぎよき」は清廉潔白の意。

加茂の川瀬の清ければ

【私見】「汲むや心もいさぎよき」——謡曲「賀茂」の一節を踏まえている。

住めば光も明らけき

▼「汲むや心もいさぎよき、賀茂の川瀬の水上はいかなる所なるらん」（謡

月も流れを尋ね来て  
こころ一つに古郷の

曲「賀茂」）（賀茂川の清い水を汲むと気分も清々しいが、その賀茂川の川瀬の水上は……。）

今日の宴を懐ひやる」

「加茂の川瀬の清ければ 住めば光も明らけき 月も流れを尋ね来て」  
——吉田健彦氏も指摘されるように鴨長明の和歌である。

▼「賀茂の川瀬も変る名の、(…)、石川や、瀬見の小川の清ければ、瀬見の小川の清ければ、月も流れを尋ねてぞ、澄むも濁るも同じ江の……」

(謡曲「賀茂」)

▼「石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋ねてぞすむ」

(新古今集、鴨長明)

(石川の瀬見の小川が清いので、賀茂の神はこの地に鎮座されたのだが、月もまた、同じくその流れを尋ねて、澄んで宿っている。)《賀茂神社の縁起をふまえる》

※「石川の瀬見の小川」は賀茂川の異名。山城国風土記逸文に見える。

※「月も」は、賀茂の神と同じく月も、の意。「すむ」は澄むと住むとの掛詞。

「こころ一つに……思ひやる」——賀茂の神と月とが心を通わせたのと同じように、我々京大在学中の一高OBも心一つにして母校の記念祭を偲んでいる。

177 第二十八回記念祭寄贈歌寮歌『暗雲西に』(大7九大)

178 第二十八回記念祭寄贈歌寮歌『淡青春に』(大7東北大)

179 東寮告別歌『月は老ゆるを』(大7・5 / 岡崎勝男 作詞、石岡 武 作曲)

三「窓てふ窓に友の歌

響くを聞けば故しらず

唯感激の湧き来り

思はず仰ぐ高樓よ」

四「霸者光恢のときの声

天下に溢る今宵なり」

【解説】「窓てふ窓に……」——《言及なし》

【私見】「窓てふ窓に……」——明治天皇の明治45年の御作に次の歌がある。

▼「高殿の窓てふ窓をあけさせて／よもの桜のさかりをぞ見る」

《明治天皇御集 見花》

【解説】「光恢」——「光恢」の例を見ず。「光」も「恢」も大きい、広いの意。

【私見】「光恢」——「光」は「さかえ(栄)」、「恢」は「とりかえす」の意

味であり、「栄光を取り戻す」ことを表現している。

180 第二十九回記念祭寮歌『まどろみ深き』(大8 / 氷室吉平 作詞、岸 偉 一曲)

181 第二十九回記念祭寮歌『一搏翱翔』(大8 / 山口等澗 作詞、矢野一郎 作曲)

一「一搏翱翔三万里

【解説】「一搏翱翔三万里」——「たびははたくと、高く遠く三万里も飛んで

猛鷲されど地に落ちて  
平和の光輝けば  
見よ、人の子は世を擧げて  
只享樂の影を追ひ  
儚き夢に酔はんとす」

二「平和の光輝けど  
平和は暫時夢枕  
聞けや太平洋の音  
絶えず狂ひて轟きて  
我等の夢を醒ますなり  
我等の酔を醒ますなり」

三「玉殿の春我知らず  
朝日に匂ふ山櫻

行く。「翺」は翼を上下させる意。「翔」は翼を張つて動かさない意。典拠となる『莊子』(逍遙遊)には「搏ウチテ扶搖ニ而上者九萬里ルコト」とあるが、寮歌の中では、「翼を搏ちて三千里」(春三月の)、「扶搖に搏つは九萬里」『波は逆卷き』、『圖南の翼千萬里』、『圖南の翼』など、飛ぶ距離は色々である。  
「猛鷲されど地に落ちて 平和の光輝けば」——ドイツが降伏し第一次大戦が終結したことをさす。

【私見】「見よ、人の子は……酔はんとす」——戦争が終わつたことで世の人々はたちまち「治安の夢」に耽り、享樂に身をゆだねようとしている。

【解説】「平和は暫時夢枕 聞けや太平洋の音」——フィリピン独立の動きと、それに対するアメリカの動きなどを含め、対米問題が今後の日本の運命を左右することを予想してこう歌つたのであろう。

【私見】「我等の夢を醒ますなり 我等の酔を醒ますなり」——第一節の末尾の部分の「儚き夢に酔はんとす」に対応し、一時的な平和の夢におぼれることのないようにと警告を發している。

【解説】「綾羅の誇我知らず」——「綾羅」は67『春蟾せんかすむ』に既出。あやぎぬや薄きぎぬなどで作つたせいたくな衣服を身につけることは誇りとは思

綾羅の誇我知らず  
玲瓏映ゆる芙蓉峰

ただ蒼生を救はむと  
七城の下腕鍛ふ

「七城の下腕鍛ふ」——大正8年1月に旧東寮に代わって新寮（東寮、和寮）が落成し七寮になった。その寮にあつて腕を鍛えているの意。

【私見】「玉殿の春我知らず」——「玉殿の春」は、美しい宮殿における贅沢な生活。これに続く「綾羅の誇我知らず」と対句をなし、一高生のストイックな生活態度を示す。「端艇部応援歌」（天9）にも類似の表現が登場する。

▼「越殿の花我知らず 唯宮々の意氣の跡」（319 『端艇部応援歌』第二節）  
（「越殿の花」は越王勾踐の豪華な宮殿にいた美しい宮女たち。）

▼「越王勾踐破レ呉歸 義士還レ家盡錦衣、宮女如レ花滿 二春殿一、  
只今惟有 二鷓鴣飛」 《李白「越中覽古」》

「七城の下腕鍛ふ」——当初「腕鍛ふ」とあつたが、作詞者の指摘（高同窓会報第24号）を受けて昭和10年版の寮歌集で「腕を磨す」に変更し、昭和42年版までは「腕を磨す」だった。しかし昭和50年版寮歌集で「腕鍛ふ」に戻された。「腕を磨す」であれば、「腕を磨く」の意にならう。

四 「十年の臥薪空ならず」  
戸塚原頭勝軍

【解説】「十年の臥薪空ならず」——「臥薪」は中国の呉越の抗争の際の故事「臥薪嘗胆」にもとづく。ここは野球部の黄金時代が去って十余年を雌伏



品海の空閑の聲

東亞霸權の杖つきて

朔北の地に血敵りし

意氣を祖國に灑がなん

していた意。後半は品川に近い三田グラウンドで慶応を破ったことをさす。

「朔北の地に血敵りし」——「朔北」は中国の北方をいい、ここでは満洲をさす。ここは、大正6年の野球部対校戦全勝の勢いを駆って、現役・OBチームを編成し、満洲遠征を行った壮拳を歌っている。

【私見】「十年の臥薪空ならず」——雌伏十余年を経て、内村祐之投手を擁した一高野球部が、大正7年によく早稲田・慶応・学習院・三高の全てに勝ち、球界の覇権を取りもどすことができた。（翌年には再び早慶に敗れた）。「空ならず」は、この間の苦勞が無駄ではなかったの意。

「東亞霸權の杖つきて 朔北の地に血敵りし」——大正7年の一高野球部対校戦全勝の勢いを駆り、現役・OB合同チームを編成、大連クラブとの3戦を予定する満洲遠征を敢行した（経費は先輩の老鐵山・中野武二が拠出）。第1戦は3対2で敗戦、第2戦も1対0で連敗し、余りの腑甲斐なさに憤激した老鐵山は爾後の試合を中止してチームを解散した。この遠征は合同チームで一高野球部としての行事ではないため、『向陵誌』には掲載されていない。なお、『解説』に「大正6年の……対校戦全勝」とあるのは誤りで「大正7年」が正しい。

《この項については、井下登喜男氏（二高26文内）のご教示を得た。》

【第五節は割愛した。】

「血<sup>す</sup>敵りし」の「ススル」には、当初は「敵」（「飲」の誤植？）という字が用いられていたが、昭和10年版で「飲」に変更され、昭和50年版寮歌集以降は「敵」が充てられている。「血ススリシ」を「盟約（血盟）」の意にとるとすれば、「東亜の覇権の獲得を期して（あるいは雪辱を期して）誓い合った」ということになるが、現実には大連クラブに連敗して遠征チームが解散に追い込まれたことを考えると、「当然勝てると思った相手に連敗して、くやし涙（血涙）を流した」の意に解するほうが素直ではないか。その場合、「ススル」には、「盟約（血盟）」のニュアンスの強い「敵」の字よりも、それ以外の字（「啜」、「飲」等）または平仮名を充てた方が第四節のシチュエーションに合っていると思われる。

▼「流るゝ水に涙して 幾度血をぞすゝりけん」≧320 『祝勝歌』（端艇部）≧

▼「血を啜りけむ凄惨の 誓いの跡を今日こゝに」≧327 『陸上運動部部歌』

182 第二十九回記念祭寄贈歌 『時の流れもゆるやかに』（大8東大／箕作秋吉作曲）

183 第二十九回記念祭寄贈歌 『坤うららかに』（大8東北大）

184 東和寮落成記念歌 『東皇回る』（大8／井上萬壽藏 作詞、矢野一郎作曲）

【概説】大正7年6月から翌8年1月にかけて、旧東寮の取り壊しと東・和二寮の新築工事が行われたことから、大正8年3月の記念祭は、この二寮の落成記念式を兼ねて举行され、本歌は、他の記念祭寮歌と合わせて唱われた。井上氏は在学中から「博言学者」と仇名されたくらい和漢の学殖の深い人物であったとされる。本歌の一糸乱れぬ整然たる表現形式は、語彙・表現の自在さ多彩さと相俟って、見事な詩的効果を上げている（「二高寮歌解説書」による）。

矢野氏の作曲も好評を博し、特に第三節までが愛唱された。なお、各節の終わりには「タランタランタラン……」の囃し言葉を入れるほか、野球部応援の際には、この歌の最後に一節分のメロディーを使い、「乗ずる時は今なるぞ（四回リフレイン） かつ飛ばせかつ飛ばせ（二回リフレイン）」と唱うのがならわしであった。また、矢野氏が撃剣部員であったことから、同じ大正8年に作られた『撃剣部部歌』にも同氏作曲の『東皇回る』の曲譜が使われている。

ちなみに翌年の大正9年2月には、三階建ての旧西寮の跡地に二階建ての西・明二寮が完成し、併せて八寮（東、西、南、北、中、朶、和、明の各寮）となり、一高が駒場に移転する昭和10年まで八寮の体制が続いた。大正9年3月の記念祭は、西・明二寮の落成記念式を兼ねて举行され、『西明寮落成記念歌』（「嗚呼東海の朝ぼらけ」が披露された）

一 「東皇回る曉色」に  
見よやここにも春多少

【解説】「東皇回る曉色」に——「東皇」は春の神、また春のこと。春の神  
がまたかえってきた。曉の暖かい光の色に。

芳艸籬下に萌え初めて  
梅梢一朶綻べば  
渾身の血は滾り出で  
豊頬光る自治の春

二「天颺一過梧葉暮れ  
空しく高し滿架の書  
黄昏薄る幽棲に  
梵鐘の聲絶ゆる時  
悲酸の涙うるほひて  
客愁深し自治の秋」

【私見】「東皇回る曉色に」——「東」は、「五時」（五つの時節。春・夏・秋・冬）の四季と夏の土用のこと。では春に当てる。「東皇」は春をつかさどる神。当初は「回る」を「メグル」と歌っていたが、大正14年版寮歌集以降は、「カエル」に変更された。「東皇回る」は「春甦る」と同じ意。

「見よやここにも春多少」——ほら、この向陵にも春到来の兆しがあちこちに見られるよ、の意。「多少」は、ここでは「多い」こと。

「芳艸籬下に萌え初めて」——「芳艸」（＝芳草）は、よい香りの草のこと。「籬」は、まがき、いけがき。「籬落」と同じ。

▼「籬落」に雪は残れども 見よ芳草は萌えいでて」≪269『春尚浅き』昭12≪  
▼「籬落の外の春の色 未来の光榮に憧憬る」≪46『王師の金鼓』明38≪

「豊頬」——肉づきの豊かなふっくらとした頬。一高生の形容。

【解説】「天颺一過梧葉暮れ」——「颺」は「つむじ風、暴風」。暴風がたび通ったあと、梧桐の葉が暮れていく中に残っている。

「幽棲」——俗世を離れてしずかに隠棲するすみか。

「梵鐘の聲」——寺の鐘の音。「客愁」——旅愁に同じ。

【私見】「天颺一過梧葉暮れ」——「梧葉」は梧桐（あおぎり）の葉のこと。その落葉のはじまりは秋のきざしとされる。「一葉知秋」。

▼「葉落知天下秋」(宋・唐庚『文録』)

▼「梧桐一葉落、天下盡知秋」(明・王象晋『羣芳譜』一六二)

▼「未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」(宋・朱熹『偶成』)

「梧葉暮れ」は難解であるが、第二節は秋の歌であるから、【解説】のように「梧葉が(暮れていく中に)残っている」とするのではなく、「暴風によつて梧葉が落ち、秋が到来した」の意に解すべきであろう。

「空しく高し満架の書」——本をたくさん読んでも、また真理にたどり着けない。後年の寮歌にも同様の心象風景が詠われている。

▼「緑なす眞理欣求めつゝ、萬巻書索るも空し」(《267『新墾の』昭12》)

「幽棲」——一高寄宿寮を指す。

「梵鐘の聲……悲酸の涙うるほひて」——次の寮歌が参考になる。

▼「夕べの鐘の音も細く流るゝ頃の淋しくて」(《120『さら流れ』大2》)

「悲酸」——悲しくいたしました。「悲慘」に同じ。

「客愁」——人生の旅の途上における寄宿寮生活での旅愁。

三「夢魂驚き窓推せば

三層樓は今何處

人生何ぞこの地のみ

【解説】「夢魂驚き」——《言及なし》。

「三層樓は今何處」——当時は寮の工事中で、従来三階建てであつ

た東寮は、二階建ての東寮及び和寮への建替えがなされた。

有爲轉變を免れむ

塵寰捨てし此の城も

榮枯の定め知りぬ今

四「高臥の眠覺めぬれど

色うつろはぬ橄欖樹

記すや否や當年の

春嬉秋思の友と友

歳華は待たず向陵に

匆々二十九星霜

「塵寰捨てし此の城も」——俗世間のちりを捨てているこの寮も。

【私見】「夢魂驚き」——魂が驚いて夢から覺めること。中唐の詩人白居易

の『長恨歌』に、「問道きくまじク 漢家天子使ナリト、九華帳裏夢魂驚ク」とある。

▼「夢魂一朝覺めぬれば／あはれ焦土の夕けむり」《229『春東海の』昭5》

「塵寰捨てし此の城も」——俗世間と縁を絶つた寄宿寮でも。「寰」は、

ある範囲内の地。「塵寰」は現実の世の中、けがれた世。

「榮枯の定め知りぬ今」——「榮枯」は、鋭えることと衰えることを繰

り返すはかない世の中。「榮枯盛衰」。

【解説】《第四節については言及なし。》

【私見】「高臥の眠覺めぬれど 色うつろはぬ橄欖樹」——「高臥の眠」は

高尚な心をもって世俗から離れて暮らすことで、前節の「塵寰捨てし」

をさし、「覺めぬれど」は同じく前節の「榮枯の定め知りぬ今」をさす。

世俗を離れた寄宿寮でも榮枯の運命は免れないと知つたのだが、向陵

の象徴ともいうべき「橄欖樹」は常緑で、色褪せることがない。

「春嬉秋思の友と友」——「春嬉」は、春の気分になつて浮かれ遊ぶ

こと（第一節）。「秋思」は、秋の頃の物淋しい心もち（第二節）。

「歳華は待たず向陵に 匆々二十九星霜」——「歳華」は年月。「華」

五「殘礎の跡は影消えて

様改めぬ舊山河

されど朽ちせぬ傳統の

依稀たる光消ゆべしや

されど易らぬ汗青の

改むべしや其の姿」

は日月の光。「歳華は待たず」は、「年月は刻々と過ぎ去って、人を待つ

ことはない」の意。寄宿寮が開寮して早くも二十九年が経過した。

▼「盛年不<sup>ニ</sup>重來<sup>一</sup>」ネテラ 一日再難<sup>レ</sup>晨<sup>レ</sup>あしたナリ

及<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>勦<sup>一</sup>励<sup>ス</sup> 歲月不<sup>レ</sup>待<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup> 《陶潜・雜詩其一》

▼「少年易<sup>ク</sup>老<sup>イ</sup>学<sup>シ</sup>難<sup>シ</sup>成<sup>リ</sup> 一寸光陰不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>輕<sup>ク</sup>」ベカラカラス

未<sup>ダ</sup>覺<sup>メ</sup>池塘春草夢 階前梧葉已<sup>サ</sup>秋声<sup>ニ</sup> 《宋・朱熹『偶成』》

【解説】「依稀たる光消ゆべしや」——もやがかかったようなかすかな光であつても、消えることはありえないのだ。「依稀」は「ぼんやり見える」。

「汗青の改むべしや其の姿」——「汗青」は「汗簡」に同じ。竹を火

にあぶつて汗（竹の油）を出し、青みを去って字を書くのに用いた。転

じて記録、史籍から歴史の意。

【私見】「殘礎の跡は影消えて 様改めぬ舊山河」——旧東寮が取り壊され

てその礎石も姿を消し、向陵のたたずまいも様変わりとなった。

「されど朽ちせぬ傳統の依稀たる光消ゆべしや」——「朽ちす」は衰

える、すたれるの意。向陵のたたずまいが様変わりになったからといって、

傳統の燈火（<sup>ヒ</sup>）の光が消えてよいものか、よいはずがない。

「されど易らぬ汗青の改むべしや其の姿」——同様に、向陵の歴史のあ

りかたを変えてしまつてよいものか、よいはずがない。

【解説】この寮歌について解説書では、「井上司朗氏が『一高寮歌私観』の中  
で一節ごとに適切な解説を試みているのでそのまま借用させていただく」  
として独自の解説は行なわず、一部の語句の語釈のみにとどめている。》

一 「春甦るときめきに  
燃ゆる若樹の光より  
いのちの群はわなときて  
大地の齡つちひをさくやきぬ」

【私見】寮歌『春甦る』は、作者の処女詩集『合掌の春』(柳沢健序文、大11)  
にも収録されているが、この詩集には寮歌『春甦る』の直前に『春筵礼賛  
賦——壁に多よがきて』——』(三十年記念祭所感)と題する次の詩が掲載  
されている(傍線は筆者)。

▼「よみがへるはるのけはひの／おほどかにときめきぬれば

ひやくけきだいにそだつ／もろものいきのいのちは

もえいぶくひかりのひまゆ／むらがりてわなときかはし(以下略)」

この詩と『春甦る』とのどちらが先に作られたのかは不明だが、この詩  
句が『春甦る』の第一節の内容とよく似ていることから、『春甦る』第一  
節を解釈するための大きなヒントになると思われる。

「燃ゆる若樹の光より」——炎のような若樹の光のすきまを通して。



二 「寢音秘めて歩みよる」  
新生れし時代の歡びを

盛りてほゝゑむ花籠に  
曙のいろ君みずや」

四 「眞理のみちの嬰兒が  
宇宙の律に瞪りけむ

「いのちの群はわなゝきて／大地の齡ひをさゝやきぬ」——大地に育  
つもろもろの生命体は喜びに震えて「大地の恵みよいつまでも」とささや  
き交わしている、の意であろう。ここで「大地」は一高を、そして「いの  
ちの群」は一高生を暗喩しているか。

【私見】「寢音秘めて歩みよる」——寮歌に次の用例がある。

▼「寢音低く忍ばせて」《153 『朧月夜の』大5／福田悌夫》

▼「当年の若武者が／駒の蹄を忍ばせて」《161 『若紫に』大6／橋高實實》

「新生れし時代の歡びを」——前年に調印されたヴェルサイユ条約と  
ウイルソンの14か条とに基づき、第一次大戦後の新しい平和秩序が形成さ  
れたことをさすと解する。「春甦る」もこれと同じく「平和の回復」をも  
含意するか。

「曙のいろ」——前述の詩集では、「味爽のいろ」と表記されている。

作者は「味爽」という表現を好み、『春甦る』の発表と同じ年に作者が作  
詞した母校旧制沼津中学の校歌も、「嗚呼味爽の星の影」で始まる。

【解説】《第四節は、眞理探求の途と、宇宙の広大な法則に対する驚異を、自  
己の生命の躍動のうちに表出している。【井上司朗氏の見解の引用】》

双陣ひとみにやどす輝あかりきを  
生命いのちの詩うたと誰たれか知る

五 「土つちの郷愁おもひに挿さり入りて

しづなる懷疑まどひ身にみしめど  
愛かなしく強つよく肯うけなひし

これの生よにある力ちからかな

六 「智慧ちゑの扉ひらは堅かたうして

魂たまの夕星ゆふつひはろかななり  
秘鑰ひやくをすてゝ合掌あがらの

【私見】 前述の詩集では、なぜか第四節と第五節の順序が入れ替わっている。

「双陣」—— 前述の詩集では、「瞳」と表記されている。

「生命の詩」—— 「寮歌」を暗喩しているか。

▼ 「光を望む若き子の／生命の歌もなやみあり」 ≪123 「ありとも分かぬ」大々

▼ 「銀燭の蔭手を握り／生命の詩うたはずや」 ≪237 「吹く木枯に」昭々

【私見】 「土の郷愁」—— 前述の詩集では、「土の郷愁」と表記されている。

「これの生」—— 「これの」 ≪「これ」+「の」 ≪「この」。「生」は「世」

に通じ、「これの生にある」 ≪「この世の中にある」 ≪「この世の中にある」との意味であ  
らう。

「愛しく強く肯ひし」は「力」にかかり、この節の大意としては、「人

生に対するさまざまの疑問を抱きながらも、その人生に心を惹かれ、強く

肯定することができるのは、自分が現世に生きているという、まさにその

ことが持つ力によるものだ」として、人生を肯定する立場を表明している

と考える。

【解説】 ≪第六節は、固く冷たい真理の扉を 理性、悟性の積み重ねで開こうと  
つとめるよりも、人はまず合掌し、自己の靈性に目ざめ、その直観によつ  
て人生の真に到達すべしとする考え方であるとし、大正6年の谷川徹三氏

186 第三十回紀念祭寮歌『一夜の雨を』(大9/安並正英 作詞、矢野一郎 作曲)

おのれに醒めよ自治の友」

の寮歌中の「二十重に閉す黒金の堅き扉も開かれん／秘鑰は己が心にて」を意識に置いた反措定である、と指摘する。【井上司朗氏の見解の引用】

【私見】第六節の解説の引く井上司朗氏の指摘は的確で、説得力があると思う。なお、第一節で紹介したように、作者の処女詩集(大正11年)のタイトルが『合掌の春』となっているが、これも、『春甦る』第六節の「合掌のおのれにさめよ」という思想の反映だと考えられる。

一「一夜の雨をさきだて」

この世の春はめぐりきぬ

青緑路を夾みては

花陰に鳥の聲すなり

萬顆の星のきらめけば

臆紗に夜の灯は赤し

友よ酒くみことほがん

三十年の起伏を」

【解説】本寮歌は、春とともに万象ものみなが強い生命に甦る向ヶ丘に、三十年の歴史

を背景に、永遠の理想を目指して生きる寮生の気概を、多彩豊富な語彙を駆使して自在かつ雄弁に表現し、迫力と高雅さを備えた一篇たり得ている。しかし、おそらく語彙の難解さ(「臆紗」など)や語感の堅苦しさ(萬顆の星「麥針遠く」など)が禍して、折角の矢野一郎の作曲にもかかわらず、同年の『春甦る』に比べ寮生に余り親しまれずに終わったようである。うである。

「一夜の雨をさきだて」この世の春はめぐりきぬ」——言及なし。

「青緑路を夾みては」——言及なし。

「牕紗に夜の灯は赤し」——「牕」は「窓」に同じ。窓の薄きぬの幕を通して、夜の灯が赤く見える。

【私見】「二夜の雨をさきだて」この世の春はめぐりきぬ——ここに「夜の雨」とは、「春を呼ぶ雨」、「春を招く雨」などと表現されるように、冬の終わりを告げる「春待雨」はるまちあめのことであろう。ちなみにこの詞句全体については、「第一次世界大戦が終わって、大正8年1月18日からパリで講和会議が始まったことを踏まえる」とする吉田健彦氏の見解(同氏H P)がある。

なお、土井晚翠の次の詩に類似の表現が見られる。

▼「桐の一葉をさきだて」秋は深くもなりにけり」桐の一葉をさきだて ≪紅葉青山水急流≫

「青緑路を夾みては」——唐の詩人王昌齡の詩を踏まえたものであろう。

▼「西陵侠少年、送客短長亭、青槐夾二両路一、白馬如二流星一」西陵侠少年、送客短長亭、青槐夾二両路一、白馬如二流星一 ≪少年行≫

(西陵の任侠の若者が、旅立つ友を駅亭に送る。青い槐えんじゆの並木道を、

白馬は流星のように駆けてゆく。)

なお、先行する類似表現として、「青槐夾二馳道一」(南朝陳の最後の皇帝となった陳後主の詩『洛陽道』)がある。

「牕紗に夜の灯は赤し」——「牕」は窓の異体字。「紗」はうすぎぬ。「牕

二「南枝<sup>なんし</sup>薔を破りては

春信來る梅花より

かくてこの世の萬象<sup>ものみな</sup>は  
強き生命に甦る」

四「吳越<sup>くわ</sup>の陸<sup>くわ</sup>の遠<sup>くわ</sup>ければ

路に迷ふか海鳥<sup>うみどり</sup>の

はばたき急ぐ両翼<sup>もろつば</sup>

みよ九天は雲を巻き

暗濤狂ふ北海を

舳燈かゝげ我が船は

三十年の船路をば

進み行くなり永久<sup>とこほ</sup>に」

紗」は窓のカーテンのこと。現代漢語でも「臆紗」は窓カーテンの日常語である。

【解説】「南枝<sup>なんし</sup>薔を破りては 春信來る梅花より」——言及なし。

【私見】「南枝<sup>なんし</sup>薔を破りては 春信來る梅花より」——「南枝」は南に伸びた枝。多く梅の枝についていう。「春信」は春のおとずれ、春のたより。南に伸びた枝の梅花の薔が綻びることによって春が来たことがわかる。

▼「東岸西岸之柳。遲速不同。南枝北枝之梅。開落已異。」

《和漢朗詠集『逐地形序』慶滋保胤》

【解説】第四節は、中国大陸においてもヨーロッパ大陸においても暗雲が漂っている状況を踏まえているのであろう。

「吳越<sup>くわ</sup>の陸<sup>くわ</sup>の遠<sup>くわ</sup>ければ」——「吳越」は中国の吳地方と越地方。ここでは中国大陸全体を指す語として用いているのであろう。

「みよ九天は雲を巻き」——天空全体に雲が出ている。「九天」は天を方角によって九つに区分しているもの。

「路に迷ふか海鳥<sup>うみどり</sup>の……」「暗濤狂ふ北海を」——何れも言及なし。

【私見】第四節の「吳越<sup>くわ</sup>の陸<sup>くわ</sup>の……」から「暗濤狂ふ北海を」までが何を意味するかは極めて難解で、解釈の分かれるところであらう。私見では、「海

五「いつか天晴れ濤は凧ぎ

高し南山なざんの春の月

麥針ばくしん遠くつらなりて

長江水ちやうきやうの温ぬるむとき

彼岸ひがんの國の丘の上に

建てし理想りやうの旗の色

來こし路ぢ遙ちやうけく眺ながむれば

濶ひろし健兒けんじの胸むねの波なみ」

鳥のはばたき」「九天は雲を巻き」「暗濤狂ふ北海」等の表現から、『莊子』・

逍遙遊篇の、北溟から九天にはばたいて南を目指すおわたす鵬おわたす（『圖南の翼を

想起する。そして、日本等への亡命をくりかえしながら中国本土（吳越の

陸）での革命成就の大志を抱いて東奔西走する孫文の姿を「路に迷う海鳥」

（鵬おわたす）になぞらえたものと解する。

なお、「暗濤狂ふ北海」は「みよ」の目的語であつて、我が船の進みゆく  
ルートルートを云々しているわけではない。

【解説】「高し南山なざんの春の月」—— 中国で「南山」と称される山は多いが、最

も有名で詩文にも歌われるのは、西安市の南にある終南山。

「麥針ばくしん遠くつらなりて」—— 「麥針ばくしん」は麦の穂先ほのきのことであろう。

「長江水ちやうきやうの温ぬるむとき」—— 「長江」は揚子江のこと。前年6月の第一次

大戦終結に伴い、山東半島のドイツ權益の繼承をめぐり日中間に局地的紛  
争が起こり、この問題も一因となつて、五・四運動が起こつた。この寮歌  
は、こうした情勢下で中国への関心を示したものと思われる。

「彼岸ひがんの國の丘の上に……」—— 井上司朗氏によれば、前年九月の孫  
文による広東政府の樹立や、この年初めの國際連盟の成立を指すのだらう  
といふ。

【私見】「高し南山なざんの春の月」——南宋の詩人陸游の詩『秋波媚』を踏まえるか。

▼「多情誰似南山月。特地暮雲開」(終南山の月の情けの深さは誰に似たんだろうか。「月が」わざわざ夕方の雲を押し開いてくれる。)

「彼岸の國の丘の上に……」——孫文の掲げた「中國革命の理想の旗印」(三民主義等)をさすのであろう。井上朗氏の説で、広東政府の樹立を前年(1919年)9月とするのは1917年の誤りで時期が合わない。また、國際連盟の成立(1920年1月)は、タイミングは合うとしても南山、長江など中国を連想させる表現と調和しない。なお吉田健彦氏は、「彼岸の國」を中国からみた対岸の日本と解し、「丘」を向が丘、「理想の旗の色」を自治の旗の色とみる説をとる(同氏HP)。

「來し路遙けく眺むれば 濶し健兒の胸の波」——「濶し」は心が広くこたわらないこと。前年中国で起こった五・四運動を機に孫文の活動方針も反日の色を帯びてきたが、これまで長年にわたって宮崎滔天ほか多くの日本人の有志が孫文の活動に共鳴・支援してきたのだから(來し路遙けく眺むれば)、一高健兒も広い気持ちで対処してゆこうではないか(濶し健兒の胸の波)、の意に解したい。

一「のどかに春の訪れて

丘べの櫻匂はしき

けふの祭のよそほひに

綺羅をつくせし八寮の

豊もとよむ柏笛

三十年の自治のうた」

【解説】≡本寮歌は同年の『春甦るときめきに』と共に大いに人気を博し、今なお唱い続けられている」とするが、本項のテーマについては言及なし。≫

【私見】本寮歌については、『解説書』『寮歌集』とも『第三十回記念祭寮歌』と表記しているが、作詞者の氷室吉平氏は次のように述べておられる。

▼「例年の記念祭寮歌の外に、特別に三十年記念歌を募集することとなり、幸にも我作「のどかに春の訪れて」が当選した。……第三十回記念祭寮歌の方は橋爪健君が作った。……同じく三十回記念祭の寮歌「一夜の雨をさきだてて」の作は私より一年下のクラスにあた安並正夫君であった。」

《氷室吉平『寮歌のおもひ出』／一高同窓会『会報』第24号（昭9・1）》  
▼「大正九年三月一日の記念祭は、ちょうど二十回目になるので、二日連続して祝い、その記念歌を寮歌のほかに作ることにした。「のどかに春」は、そのときの記念歌として選ばれた拙作である。」

《氷室吉平『のどかに春』の頃』／向陵駒場第18号（昭43・1）》  
従ってこの寮歌は、明治38年の『第十五回記念祭歌』（小笠原壬午郎）や大正4年の『二十五年祭の歌』（阿部龍夫）の系列に属するものであって、少なくとも当初は『第三十回記念祭寮歌』ではなく『三十年祭の歌』



188 西明寮落成記念歌『嗚呼東海の』(大9/今井常一 作詞、長谷孫重郎 作曲)

一 「嗚呼東海の朝ぼらけ」

三 「秋長明の夕月夜」

などの表題が付されていたものと考えられる。ちなみに、工藤康氏(一高昭26理甲)のご教示によれば、大正11年発行の『一高寮歌撰集』(第一高等学校寮歌研究会編、渡辺諒氏序文)では、『三十年祭』という曲名で掲載されている。

二 「しらべもたかき青春のおもひたくみに鏤めしふるき壁画の金泥に」

わが傳統をたづぬれば

【解説】一高の自治寮三十年の歴史を、古い壁画が金粉の液を使って美しく描かれているのに喩え、前の句と共に、伝統の中に示された輝きを象徴的に表現している。

【私見】あまり難しく考えないで、寮室内の落書きを「壁画」に喩えたものと解すればわかりやすい。

次の各表現についても同様に、「落書き」と考えるべきであろう。

▼ 「力を刻む鐘あらば／古き壁画に響けかし」 ≪11『霧淡晴の』明45 ≪

▼ 「白壁に／鑄りて古りにし名は誰ぞや」 ≪170『うらゝにもゆる』大7 ≪

▼ 「汝の黒く年経たる／壁に無限の黙示あり」 ≪253『大海原の』昭10東大 ≪

【解説】「言及なし」

【私見】勢揃いした八寮の名を読み込んでいる。

●第三十回記念祭寄贈歌

『あかつきつづぐる』(大9 東大／二宮武治 作詞)

四「城南北北に敵も無し」

五「中に眠れる丈夫の」

六「西歐戦雲今はれて

平和の光東方方の

陽春かへる秋津島

御代泰平の風そよぎ」

御代泰平の風そよぎ」

一「あかつきつづぐるくたかのけ鶏の

三度鳴けども夢さめず

平安大路たいろ模糊たとして

街樹がいじゆの梢春淺さき」

——東、西、南、北、中、朶、和、明の八寮。

※「東」は2回登場する

※「朶」は、ちよつと苦しいが、「のぎ」の形で出てくる。

【解説】『あかつきつづぐるくたかのけ鶏の三度鳴けども夢さめず』——98 『藝文の

花』の第二節の表現趣旨(「鳴くくたか鶏の」を無自覚な世俗に先んじて警告を

発する英知の喩えとして使っている)と相通じている。

【私見】『あかつきつづぐるくたかのけ鶏の三度鳴けども夢さめず』——

(1) 鶏が何度か鳴くという説話でまず頭に浮かぶのは、新約聖書に出て

くる「ペトロの呑み」の場面なので、これについて検討してみる。

▼「はつきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、

二度わたしのことを知らないと言っだらう。」

① 聖書の場面は夜であるが、この寮歌で鶏が鳴くのは「あかつき」であること、② 聖書の場面でペトロがイエスのことを知らないといったのは三度であるが鶏が鳴くのは二度だけ『マタイによる福音書』および『ルカによる福音書』では一度だけであり、この寮歌の「三度鳴けども」とは合致しないことなど、細部では矛盾点が見られる。しかし、①イエスが、自分が祈っている間、目を覚ましていたよう弟子たちに言っておいたのに、ペトロをはじめとする弟子たちは眠ってしまったこと、②さらには、続く本寮歌の第二節で「荒野に立てるヨハネ」が出てくることなどを勘案すると、作詞者の意図としては、第一節で「ペトロの呑み」を、同じく第二節では「荒野に立てるヨハネ」をいずれも新約聖書から引いて対照させたものと考えるのが素直な理解であろう。

(2) 『藝文の花』の第二節の表現趣旨と相通するとする解説の指摘も魅力的であり、これはこれで捨てがたい。左に歌詞を掲げておく。

▼二「降りつむ雪にうづもれて 春を營む若草の

わかき心を誰か知る

なべての眠さめぬとき

眞闇の中を人知れず

鳴く鶏くたかけを誰か知る」

二「荒野に立てるヨハネとや

落暉らくきに叫しんじんぶ新人が

願ぢよくせいかいふ心は濁世に

維新再いしんびあるべきぞ」

《98 『藝文の花』第二節（明43東大／大貫雪之介）》

【私見】「平安大路たいろ模糊たいろとして 街樹がいじゆの梢春淺さかき」——「あかつきつぐる……」の歌詞及び「藝文の花」第二節の情景からすると、早春の夜明け前の薄霧を描写したものか。「平安大路」は「都大路」のことかと思われるが、京都に限定する必要はなからう。

【解説】「荒野に立てるヨハネとや」——バプテスマのヨハネともいう。イエスの時代に、預言者的活動をし、ヨルダン川付近で説教をしていた。イエスは彼から洗礼を受けた。

【私見】「荒野に立てるヨハネとや」——

▼新約聖書・新共同訳『マタイによる福音書』（3・1—3）

「そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣のたまべ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

『荒れ野で叫ぶ者の声がする。』

『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』

▼「野に呼ぶ人の聲、いづこ 生命の泉、はたいづこ」

《一高齋歌71『あゝ大空に照る月の』第七節（明40東大）》

【解説】「落暉に叫ぶ新人」——「ヨハネになぞらえている。

【私見】「落暉に叫ぶ新人」——「落暉」は夕日。「新人」は、第一次大戦以後急激に成長・発展をみた学生思想運動を背景に大正7年12月に結成された「東大新人会」またはその影響下にある人を指す。大正10年11月までの前期新人会は、人道主義的・理想主義的・社会主義の立場から啓蒙活動を中心としていた。

【解説】「維新再びあるべきぞ」——《言及なし》。

【私見】明治期には、西南戦争、自由民権運動、日清戦争などの節目において、体制側・反体制側のさまざまな立場からの「第二の維新」が唱えられたが、大正期における大正デモクラシーの潮流の中、第一次・第二次護憲運動を背景に、再び「第二の維新」としての「大正維新」が唱道された。そこには個人主義の論調や立憲主義思想による憲政史的維新観がみられたとされる。「維新再びあるべきぞ」というのは、こころした「第二の維新」にかかわってゆこうとする立場を述べたものであろう。

190 第三十回記念祭寄贈歌『漁火消えゆき』（大9九大）

191 第三十一回記念祭寮歌『彌生ヶ丘に洩れ出づる』（大10／渡辺 諒 作詞、弘田龍太郎 作曲）

歎「歎けど時の老いゆくを

止め止めんすべもがな

慕へど友の去りゆくを

何日相見んよしもがないつか

【解説】《井上司朗氏『一高寮歌私観』に「昭和後期の同窓諸賢などは、同期生

の告別式にこの歌のこの節だけを斉唱するということをきき、寮歌もさまざまな使い方があるものと思った」とあるのを引いている。》

【私見】推理作家の佐野洋氏（本名丸山一郎、一高昭25文内）が、連作推理小説『葬送曲』（二〇〇五年、光文社）の中で、この寮歌にヒントを得たと思われる短編推理を書いておられる。

192 第三十一回記念祭寮歌『東海染むる』（大10／高野一夫 作詞、大町文男 作曲）

193 第三十一回記念祭寮歌『あゝ紫の朝霧に』（大10／中村克己 作詞、弘田龍太郎 作曲）

【解説書による本寮歌の解説】

本寮歌の作詞態度そのものは極めて真摯で批判性に富み、寮生活の現状に幻滅と頹廃を見て取る（第一、二節）ばかりでなく、貧富の差の甚だしい階級分裂の社会的矛盾にも批判の目をとがらせており（第三節）、第一次世界大戦終結後、一高にも社会思想研究会が生まれるという時代の反映を物語っている。

【右についての私見】

解説書のような解釈をしてもえれば、作詞者の目論見が図に当たったことになろう。私見では、本寮歌の歌詞は、「黄金の臺」、「黄金の樓」、「黄金の倉」、「玉の臺」などの表現を用いることにより社会への批判をいいつつ、実はそれに事寄せて寄宿寮における一部の運動部員等によるストームの猖獗に対し、痛

烈な批判を加えることを主眼としたものであり、ダブル・ミーニングの歌詞と理解すべきものと考ええる。この寮歌の前年の大正9年には多年の懸案であった端艇の対外試合が復活し、端艇部の意気が大いに上がった時期に当たるとする。

▼この寮歌の三年後の大正十二年六月十六日の夜発生した空前の大ストームの描写を見てみよう。

【八寮が眠りにつき、静寂が向陵を包んだとき、突如、すさまじい大ストームが襲来した。端艇部選手一同は、浅草のすき焼店「今半」で結束コンパを開き、鯨飲馬食、泥酔した余勢を駆って十二時ごろ帰寮、「眠れる向陵の夢を覚ませ」とばかり、大ストームを敢行した。暴行は全寮にわたり、午前三時に及んだ。ガラス、扉の破壊はいうに及ばず、たたき起こして起きない者は布団のまま床に引きずり落として踏んづける。素手ばかりか木の枝箒で殴りつける。ついに八人以上の負傷者を出した。】《向陵誌『応援団史』p 206》

一「あゝ紫の朝霧に

眠りに醒むる八城は

黄金の臺碎かれて

杯盤の影龍跳る

顔れ果てたる文明の

花今まさに散らんとす

【解説】「眠りに醒むる八城は」——《言及なし》

【私見】「眠りに醒むる八城は」——八寮全体がストームで叩き起こされて。

▼「醒めよ迷ひの夢醒めよ」《一高寮歌 31 「晝寄する」第二節（明 36）》

（寮生のストームの際にこの歌を歌いながら叩き起こして回ったという。）

【解説】「黄金の臺碎かれて 杯盤の影龍跳る」——「杯盤」は杯と盤。「杯盤

狼藉」とは、酒席の混乱した状態。「龍跳る」は、現世の欲望虚栄の渦巻く

さまをいうか。

【私見】「黄金の臺碎かれて 杯盤の影龍跳る」——「黄金の台」は中国燕の昭

二「華爛熟の幻滅に

悲しき夢は破られて

秋風破扉をたゞくとき

黄金の樓は消え失せぬ

玉の臺は散りぢりに

緑酒に榮えし人や誰ぞ

王が高台に黄金を置いて天下の豪傑を招いたという故事で知られるが、ここでは一高寄宿寮をさすと解する。立派な一高の寮が泥酔した運動部員等のストームによつて破壊されたことに対する怒りを示す。「龍」は端艇部応援歌にいう「臥龍の思ひ幾春秋」の「龍」か。「跳る」は跳梁する（のさばる。おおつぴらにふるまう。）の意。

【解説】「秋風破扉をたゞくとき」——栄華の破滅をいうか。

【私見】「秋風破扉をたゞくとき」——ストームによる扉の破壊は珍しくなかつた。向陵誌『応援団史』p 207によると、この寮歌の三年後のデータだが、大正13年の端艇部によるストームでは、扉の破壊5枚、窓ガラスの破壊15枚（百数十枚又は八百枚以上との数字もあり。）と記録されている。「黄金の樓……」「玉の臺……」は、いずれもストームが立派な一高の寄宿寮を台無しにしたことを喩える。

【解説】「緑酒に榮えし人や誰ぞ」——《言及なし。》

【私見】「緑酒に榮えし人や誰ぞ」——覇業の榮えを祝い、美酒に酔い痴れていい気になっていたのは誰か。ストームで暴れた連中ではないか。

▼「嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影やどし」《24「嗚呼玉杯に」(明35)》

▼「玉杯舉げて祝ひたる 覇業の榮を忘れんや」《188「嗚呼東海の」(大9)》



三「強きに傲る世の人の

黄金の倉は何かせん

浮華の褥に痴人が

玉殿の春何かある

阿鼻叫喚の同胞の

虐げられし聲を聞け

▼「墨江の空連勝の 覇業の榮に輝やきぬ」《332 『端艇部応援歌』(大9)》

【解説】「強きに傲る世の人の」——《言及なし。》

【私見】「強きに傲る世の人の」——ストームで猛威を振った運動部員等のこと。

▼「体力、腕力のとくに優れた者が温良な寮友や新入生を威圧し、はては暴力を振るって寮友を傷つけ、……」

《向陵誌『応援団史』p 116 「ストームの猖獗」》

【私見】「黄金の倉は何かせん」——当時懸案であった新艇庫の建造をさすか。そうだとすれば、「ストームで猛威をふるう輩のために金をかけて新艇庫など作って何になるうか」の意となる。

【解説】「浮華の褥に痴人が」——「痴人」は愚かな者。世人を嘲っている。「浮華」は、うわべばかり派手で実質のないこと、軽薄で派手なこと。

「玉殿の春何かある」——《言及なし。》

【私見】「浮華の褥に痴人が 玉殿の春何かある」——運動部員の愚か者が、自分たちは軽薄で派手な生活をしているくせに、「豪華な建物での派手な暮らしは自分たちには縁がない」と嘯いているのは笑止千万だ。

▼「玉殿の春我知らず」《一高寮歌 181 「一搏翱翔三萬里」第三節(大8)》

四「短かき春を脅かし」

淡き理想の砂文字

春來る毎に若人の

心にいたむ花の宴

行途になやむ旅人の

悩みは深し春深し」

▼「越殿の花我知らず」《一高寮歌 319 「端艇部応援歌」第二節（大9）》

（「越殿」は中国古代の越王が建てた豪華な宮殿。「花」は宮女たち。）

【解説】「阿鼻叫喚の同胞の 虐げられし聲を聞け」——「阿鼻叫喚」は阿鼻地獄で叫びわめくこと。困窮を極める貧民階級への同情を求めた表現。

【私見】「阿鼻叫喚の同胞の 虐げられし聲を聞け」——ストームで痛めつけられた非力な寮生の悲痛な叫び声を聞くべきだ。

▼「体力、腕力のとくに優れた者が温良な寮友や新入生を威圧し、はては暴力を振るって寮友を傷つけ、……」

《向陵誌『応援団史』 p 116 「ストームの猖獗」》

【解説】「短かき春を脅かし 淡き理想の砂文字」——青年を惑わす確固たる根底を欠いた浅薄な理想主義を、消えやすい砂文字に喩えている。

【私見】「短かき春を脅かし 淡き理想の砂文字」——短かい一高在学中の生活をいつもストームが脅かしている現状を見ると、寄宿寮の規範たる立派な四綱領の内容も消えやすい砂文字のようなものだ。

【解説】「春來る毎に若人の 心にいたむ花の宴」——春が来るたびにおとずれる記念祭の花やかな祝宴のような歓楽に耽ることは、貧民のことを思うと心が痛むの意。

194 第三十一回記念祭寄贈歌 『春未だ若き』(大10 東大／今井常一 作詞、土田 豊 作曲)

一 「醒めよと告ぐる明の鐘  
花床を起きよ自治の友」

【私見】「春来る毎に若人の 心にいたむ花の宴」——春来る毎に記念祭の宴  
が開かれるが、ストームのことを思い出すと胸が痛んで、記念祭を楽しむ  
気も失せる。

【解説】「醒めよと……花床を起きよ」——花床は「花托」で、花弁などを支  
える部分の意だが、「こ」では心地よく眠っている床から目覚めよの意であ  
らう。

【私見】「醒めよと……花床を起きよ」——「醒めよと告ぐる明の鐘」は『若  
紫に』の「枕に通ふ明の鐘／醒めよと強く私語けば」を、「花床を起きよ」  
は同じく『若紫に』の「花散る床のまどろみや」を下敷きにしたものであ  
らう。

195 第三十一回記念祭寄贈歌 『御空に映ゆる』(大10 東北大)

196 第三十一回記念祭寄贈歌 『偷安の春も』(大10 東大)

二 「もえし若葉に口付けて  
三年の春を橄欖の

【解説】「もえし若葉に口付けて」——「若葉に口付け」という表現は、寮歌  
として適切とは思えない。

森に歌ひし友人が  
眞理の道に悩む時」

197 第三十二回記念祭寮歌『自治の流れは』(大11/田中不破三作詞、大鹽直作曲)

三「波路の彼方星冴えて

空しく叫ぶ人の道

ロッキ

岩疊山に雪消えて

流るゝ水の色濁り

豺狼東に牙を磨ぐ

あらしは來る東より」

【私見】「もえし若葉に口付けて」——「口付けて」は、「クチツケ」ではなく、

「クチツケテ」で、若葉を草笛として吹くさまを表現したものであろう。

【解説】「空しく叫ぶ人の道」——《言及なし》

【私見】「空しく叫ぶ人の道」——第一次大戦後のパリ講和会議で日本が提出した要求は①旧ドイツ領南洋諸島処分問題、②山東省利権繼承問題、③人種差別撤廃問題の三点であった。このうち第二点は、日本人移民排斥などの移民問題の解決及び国際連盟における国家差別の撤廃を目的としたものであったが、英国・豪州が反発し、議長を務めた米国外務長官ウィルソンも、移民政策に対する内政干渉だとする米国の国内世論を無視できず、日本の提案を否決に追い込んだ。本寮歌第三節の「空しく叫ぶ人の道」とは、「日本が人種差別撤廃を叫んだが、実現できなかった」ことを含意しているものと解する。あるいは、「進歩的自由主義」を唱道し、人種差別撤廃に一定の理解を示していた米国外務長官ウィルソン大統領の言行不一致を指摘したものだとも考えられる。

《加藤陽子「戦争の日本近現代史」講談社現代新書を参考にした。》

四「黄塵空に漲りて

河清の望み今あは淡し

長城斜陽に輝けば

あはれ教の糸亂れ

隣邦西に我を避く

あらしは吹きぬ西空に」

【解説】「あはれ教の糸亂れ 隣邦西に我を避く」——「教の糸」は儒教の伝

統を指すのであろうが、「隣邦西に我を避く」は具体的に何を指したのか不明。しかし、当時すでに反日の動きが表面化しつつあったことを物語っているのであろう。

【私見】「あはれ教の糸亂れ 隣邦西に我を避く」——第一次大戦に参戦した

日本は、青島攻略が成功した後の1915年1月18日に中国側に対し、山東省の処分その他についての包括的な要求として「対華二十一カ条の要求」を伝えたが交渉は難航し、同5月、遂に最後通牒を以て中国側に要求を吞ませた（5月25日に「山東省に関する条約」及び「南満洲及東部内蒙古に関する条約」を調印）。中国側は受諾した5月9日を国恥記念日としている。パリ講和会議で中国の主張が無視されると、1919年5月4日には北京大学の学生を中心に抗議デモが起こった（五・四運動）。

1921年10月から1922年2月にかけてのワシントン会議では、中国問題に関する九カ国条約で中国の主権尊重、門戸開放、機会均等などが規定され、日中間では山東懸案解決条約が結ばれて、日本は二十一カ条の要求で獲得した山東省における旧ドイツ権益を返還することになった。

日本の中国に対する正当な要求を正規の手続きをふんで1915年に条

198 第三十二回紀念祭寮歌『紫烟る』(大11/青木延春 作詞、中村幸四郎 作曲)

一 「紫烟る丘の上

ほのかに浮ぶ明けの星  
狭霧音なく溶けゆけば  
假寝に淡き夢さめて  
高原に立つ若人の  
旅愁そごろに見返りぬ」

約を締結したものであるのに中国が巻き返して、1922年のワシントン会議で返還の運びとなったとみる、日本の立場からの憤懣を、信義を重んずる儒教の伝統に反する(「教の糸亂れ」)と述べるとともに、中国側による一連の反日の動きを「隣邦西に我を避く」と表現したものと解する。

《加藤陽子「戦争の日本近現代史」講談社現代新書を参考にした。》

【解説】第五節を除き、すべてが旅人の味わう旅情・旅愁の表現で終始しており、季節は秋が選ばれ、「人間存在の悲しい運命」といったような觀念と、将来への明るい展望の暗示(第四節)、換言すれば、一高生への期待の情とを詩的にデリケートに形象化していると見るべきであろう。

【私見】第一節は、「紫色に烟る狭霧」と「明けの明星」とに託して向陵の朝の情景を描写する。「高原」は向陵、「若人」は一高生。「假寝」は人生の旅路のうち三年間、向陵を飯の宿とする意。「見返りぬ」は、その假寝のまじろみの夢から覚めた後、その夢の内容を振り返って、人生及び真理探究の困難さに対する感慨を、第二節と第三節で述べるという構成をとっている。

二「曠望千里迤り来て

路まだ遠く雲に入る

地の涯きはみから涯きはみまで

久遠の旅を行けよてふ

運命さだめは悲し相よりて

荒野にむせぶ人の群」

なお、次の寄贈歌は、本寮歌第一節の表現を下敷きにしたものか。

▼「紫烟る丘の上 夕に映ゆる影の色」≪112『薄霧こむる』昭10東大≫

【解説】「曠望千里」、「久遠の旅」、「運命さだめは悲し」、「荒野にむせぶ人の群」などの語句から見て、単に一高生を「旅人」に、向陵の三年間を「旅路」に喩えるだけでなく、人間の生涯・運命そのものを「流離に迷ふ子羊」に喩えていると見るべきであろう。かといって「流離に迷ふ子羊」の一句にキリスト教的な意味合いをこめたわけではなさそうである。

【私見】第二節全体が、旧約聖書においてモーセに率いられたイスラエルの民がエジプトを出てから「約束の地」カナンに着くまで四十年もシナイの荒野をさまよったという物語を踏まえ、人生の苦難の旅を荒野の旅に喩えたもので、作詞者の宗教的な立場とは係わりないと解する。

≪旧約聖書』創世記、出エジプト記、レビ記、申命記等≫

「地の涯きはみから涯きはみまで 久遠の旅を行けよ」——神（エホバ）を畏れず神の言に従おうとしないイスラエルの民に対し、モーセが神の言として伝えた次の言葉がある。これは後のユダヤ人の世界各地への離散（ディアスポラ）の運命を暗示したものと見方がある。

三「草笛あはれ流れ来て

流離に迷ふ子羊よ

秋深けれどさみどりの

柏の森の道知るべ

歩め遂には着きなんと

愛しく永遠とほに指しぬるを」

▼28・64 「エホバ地のこの極はてよりかの極はてまでの國國くにくにのうちに汝なんじを散ちらし給たまはん。」 ≪旧約聖書 申命記 文語訳による≫

【解説】「草笛あはれ流れ来て……指しぬるを」—— ≪言及なし。≫

【私見】「草笛あはれ流れ来て……指しぬるを」—— 羊飼いが羊を導くために角笛を用いるが、「向陵」という場に合わせ、「草笛」としたものである。『草笛』が「寮歌」を暗喩しているとも考えられる。「草笛あはれ流れ来て」は、文脈上は、文末の「指しぬるを」に続き、一行目の感動詞「あはれ」と文末の間投助詞「を」とが対応して、「迷へる子羊」（一高生）を導いてくれる「草笛」とその背後にある「大いなるもの」の存在に対する感動を表現していると解する。

【解説】「流離に迷ふ子羊よ」—— 人間の生涯・運命そのものを喩えている。ただしキリスト教的な意味合いを込めたわけではなさそうである。

【私見】「流離に迷ふ子羊よ」—— 羊は弱くて迷いやすい動物で、独力では幕営地に帰れないこともあるという。ユダヤ教・キリスト教では「迷うもの」羊⇨人間、「羊飼い⇨救世主・神」の構図の記述が多い。新約聖書では、ルカ伝福音書（15章）マタイ伝福音書（18章）の「迷子の羊と羊飼い」のたとえ話が有名である。本寮歌では、柏の森でさまよう子羊



四「朝霧今やあとなくて

陽は麗らかに輝きぬ

眉まだ若き旅人の

落ち葉を踏みて

出発ち行けば

橄欖の野にこだまして

鐘はるけくも響く哉」

(「一高生」が、天の黙示(羊飼いの角笛／草笛／寮歌)に導かれるこ

とによって真理への到達をめざすさまを歌う。本寮歌が、少なくともキリスト教的教養を背景としていることは確実であろう。

▼「思へ柏の蔭に來て まこと生命の詩人と

運命を担う子羊よ 牧場をわたる角笛の

「さめよ」と鳴れば我胸の 緒琴は奇しう響けるを」

《一高142 『無言に憩ふ』大4》

▼「運命を荷ふ小羊も さめては如何に迷ふらん」

《七高『楠の葉末の』大5》

▼「迷羊遂に術もなく 丘邊に立ちて嘯けば」《浦和『武蔵が原の』大11》

【解説】第四節は、将来への明るい展望と一高生への期待を暗示する。

【私見】第一節でみた夢の内容を第二く第三節で振り返ったあと、朝霧が消え太陽が輝くにつれて、心の迷いも晴れ、一高生たちは落ち葉を踏み鳴らし、て真理探究の旅へと新たな旅立ちをする。

本寮歌の舞台として秋の季節が選ばれた理由は明確ではない。ただ、作詞者・作曲者は同級生で、いずれも大正9年9月の入学(卒業は半年繰り上げて大正12年3月)であり、旧制度によって秋に入学した最後の年

五「さはれ丘邊に星古りて

三十二年自治燈に

灯は赤かりき今宵また

祭りを祝ふ夜は長く

歌ひて舞ふや銀觴に

三年の榮は麗はしと」

199 第三十三回紀念祭寮歌『流れ行く』(大12 / 古家鴻三 作詞、鈴木重威 作曲)

一「流れ行く二つの水の會ふ處

淡き涙の戦きに

會ふよしもなき舟人は

清き流れに諸手ひたしぬ」

次であった。私見では、このことと何らかの係わりがあるのではないかと推定する。なお、新高等学校令の施行により、大正10年以降は4月入学に変更された。

【解説】「歌ひて舞ふや銀觴に」——「銀觴」は銀で作った杯。

【私見】「祭を祝ふ夜は長く 歌ひて舞ふや銀觴に」——第五節は、第一節から第四節までと異なり、やや月並みな表現で紀念祭の情景を描写するにとどまっている。

▼「せめて語らむ二十三 祭重ぬる夜は長く」《120『さくら流れの』大2》

▼「銀觴春はうつろへど 唇に尽きせぬ炎かな」《185『春甦る』大9》

【解説】「流れ行く二つの水の會ふ處」——「二つ」が何を指すのかわ不明。

第三句の「會ふよしもなき」の序詞か。表現不足の感あり。第一節は、人と人との遭遇のはかなさを意味している。

【私見】「流れ行く二つの水の會ふ處」——「二つの水」は対立する二つの思想的潮流(例・東洋と西洋、ナショナリズムとデモクラシー、又は資本主義と社会主義)がせめぎあう時代状況を喩えていると見られる。

六 「衣なきかの嶺 静安あり」

夢におそれぬ心とは  
流離の僧の嘆きしよ  
せめて醒めて  
荒野行かずや」

▼「経緯ことなる東西の／文化のながれすひあつめ」≪38「向が陵の」明37  
▼「調ゆかしき両洋の／文化の流れ一にして」≪94「新草薙ゆる」明43  
▼「藝文の花咲き乱れ／思想の潮湧きめぐる」≪98「藝文の花」明43  
▼「東西の潮をここにさしまねく」≪102「月は臚に香をこめて」明44  
▼「めぐる思想の潮を分け／めざすは遠き理想の地」≪114「あゝ平安の」明45  
「会ふよしもなき舟人は／清き流れに諸手ひたしぬ」——思想の対立・  
混乱に困惑した舟人（＝一高生）は、何れをとるべきかを自ら主体的に判断  
することができず、手を引いてしまふ。「流れに諸手をひたす」とは、新  
約聖書マタイ伝第27章に出てくる「手を洗う」という言葉を踏まえてい  
ると解する。この「手を洗う」という表現は、通常、「問題から手を引く」、  
又は「これ以上関わらない」ことの喩えとして使われる。

【解説】この第6節は難解で、何か典故がありそうだが、意味不明。

「衣なきかの嶺 静安あり」——「衣なきかの嶺」は釈迦が法華経を説  
いたという「靈鷲山」を指すか。

【私見】「衣なきかの嶺 静安あり」——「衣なき嶺」とは、旧約聖書出エジプ  
ト記でモーセが神から十戒を授かった、草木の生えない岩山の「シナイ山」  
のことであろう。「静安」は「神の栄光」を指す。

200 第三十三回紀念祭寮歌『榮華は古りし』(大12 / 青木延春 作詞、一高樂友会 作曲)

一 「榮華は古りし二千年

殿堂それは衰へて

廢墟にむせぶ秋の風

悵悵の歌さながらに

音蕭々と響く哉」

【解説】「夢におそれぬ心とは / 流離の僧の嘆きしよ」—— 仏教では、一般に「夢」は宗教的な教示などを得るものとして重視されているのに対して、ここでは、退くべきものとしている。「流離の僧」も誰を指すか、不明。この句全体意味不明。

【私見】「夢におそれぬ心とは」—— 「夢に」は「決して」の意。モーセとともにエジプトを脱出したイスラエルの民が、神を裏切る行為を性懲りもなく繰り返したことを指すと解する。

「流離の僧の嘆きしよ」—— 「流離の僧」とは、預言者のモーセを指すと解する。モーセは頑迷なイスラエルの民を引率して約束の地カナンめざすが、荒野を四十年もさまよった後、失意のうちに死を迎える。

【解説】「榮華は古りし二千年……廢墟にむせぶ秋の風」—— 言及なし。

「悵悵の歌さながらに」—— 「悵悵」は嘆き恨む意。

【私見】「榮華は古りし二千年……廢墟にむせぶ秋の風」—— 「榮華」は古代ローマの榮華、「廢墟」は古代ローマ滅亡後に残された多くのローマ遺跡(コロッセオ、フォロ・ロマーノ等々)をさすと解する。

ローマの榮華と廢墟を歌った寮歌は多い。いくつか例を挙げてみよう。

▼「斷雲飛べば岡の上 廢墟の雨は涙あり」《92 『笛の意迷』明43 一高》

▼「ローマの榮光今何處 落魄の風叫ぶのみ」《嶙峋迫る》(成蹊高)《

▼「七つの丘の古跡に 人生流轉の歌に泣く」《尾山悲秋の》(昭5 四高)《

▼「ローマにかゝる月影は 廢墟の怨語るとも」《潮の香高し》(天2 六高)《

「悵悵の歌さながらに 音蕭々と響く哉」——「音蕭々と」は廢墟に吹き荒ぶ風雨を表現する常套句だが、「悵悌の歌さながらに」という表現から見ると、燕の荊軻の「易水歌」の情景が想い起こされる。

▼「非業の天に恨みては 破斬の劍に涙あり

長恨風にうそぶけば 四郷の柱に應へあり」《銀扇空に》(昭15 府立)《

▼「風蕭々として易水寒く 壯士一たび去りて復た還らず。」《史記》《

【参考Ⅰ】この寮歌はこの年の九月一日に発生した関東大震災を予言したものだという俗説をなす向きもあるが、論評に値しない。

【参考Ⅱ】O・シュペングラーの『西洋の没落』(以下、『没落』という)の第一巻が第一次大戦終了直前の大正七年、第二巻が大正十一年に刊行されて当時のヨーロッパで話題を呼んだことに着目し、この寮歌の歌詞は『没落』を踏まえたものであり、「榮華は古りし二千年」は、二千年榮

えてきた西洋文明(キリスト教文化)がようやく終末を迎えようとしている、の意だとする興味深い見解(吉田健彦氏、同氏HP)があるが、次の理由から疑問を残す。

①シュ・ペングラの『没落』は、西暦九〇〇年以降千年間にわたる西洋文化が十九〜二十世紀には成熟した文明の段階に達し、近く没落する運命にあるとしているのであって、キリスト教文化の二千年を論じているのではない。

②日本で『没落』の翻訳が初めて出版されたのは大正十五年であるのに対し、この齋歌が作詞されたのはその三年前なので、『没落』の影響を受けたものとは考えにくい。『没落』は刊行直後から独・奥両国でよく売れたとされるので、その内容が日本でもいち早く知られた可能性もなくはないが……。( )

- ★『西洋の没落』(O・シュペングラ著、村松正俊訳、大正十五年初版)
- ★『二十世紀の運命——シュ・ペングラの思想』(S・ヒューズ著、川上源太郎訳)

二 「行く手は遠く雲の旅

見よ荆棘に埋れて

【解説】「行く手は遠く……石の扉は重けれど——言及なし。

「炎の文字のいと紅く「勇士を待つ」と書きけるを」——典拠未詳。

石の扉は重けれど

炎の文字のいと紅く

「勇士を待つ」と

書きけるを」

【私見】この節は難解として知られ、いまだ定説はない。私見では、第二節全体が聖杯探求物語を踏まえたものと解する。

「行く手は遠く……石の扉は重けれど」——聖杯探求物語にはさまざまのバージョンがあるが、もとも一般的なのは、アーサー王の騎士たちが諸々の困難に立ち向かって旅を重ね、キリスト教の聖なる物体である聖杯を探し求めるという物語である。「雲の旅」、「荊棘」、「石の扉」は、いずれも聖杯探求のための試練・苦難の連続を暗喩しているのであろう。

「炎の文字のいと紅く」「勇士を待つ」と書きけるを」——聖杯城に保管されている聖杯の縁に神のメッセージが炎の文字となつて浮かび上がり、そこを訪れるべき騎士の名を告知したり、騎士たちに命令を下したりするのが通例であつたとされる『パルチヴァール』（ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッツハ著、加倉井肅之ほか訳）、『聖杯、そして救いを待つ<sup>とがびと</sup>答人』（WEB）など』。

この寮歌の「炎の文字」と「勇士を待つ」は、いずれも聖杯をめぐる上述べのような言い伝えを踏まえた表現で、一高生を「勇士」になぞらえて、その活躍に対する期待を述べたものと解する。

【参考Ⅰ】《1799年ナポレオンのエジプト遠征で発見されたロゼッタ・ストーン

201 第三十三回記念祭寮歌『夕月丘に』(大12 / 井上司朗 作詞、小野富壽郎 作曲)

一 「夕月丘にのぼりきて

敷寝の面おもわてらすとき

そよぐともなき橄欖の

葉はずれ觸の音に夢さめぬ

狭霧流るゝ宵なれば

を踏まえたものか。ロゼッタ・ストーンに赤い文字はなく、そのような内容の文字もない。作者のフィクションである。』(吉田健彦氏、同氏HP) 【参考Ⅱ】二十年後の一高寮歌にも、次のようにこの寮歌とよく似た歌詞が登場するが、これも同じく聖林探求物語を踏まえたものだと考えられる。ただしそこでは、当時の情勢を反映して、出征と結びつけた表現となっている。

▼ 「行手の旅路いや遠く

寶庫の扉重くとも

血潮の文字のけざやかに

汝なを待ち待つと示せるを

いざ出で征かん吾が寮友よ 駒も勇みていなゝけり」

《一高寮歌 303 『若緑濃き橄欖の』(昭17・6) 第二節》

【解説】「敷寝」——『ここは敷くものを特定していないので、床に寝る意であらう』とし、さらに「註」において、『緑もぞ濃き』に、「夕べ敷寝の花の床」、「敷寝の花を蹴て立てば」もあり、その「橄欖の花雪すよ」が、本歌の「橄欖の葉觸の音に夢さめぬ」や「かざしの楯にしづくする」と通ずるとすれば、「花を敷く」と考えられるが、あるいはそれは行き過ぎか



かざしの楯にしづくする

金玉の露しきりなれ

もしれない』としている。

【私見】「敷寝」——【解説】のような考え方でなくとも、この寝歌の第六節に「花牀に夢のさめゆけば」とあることから、この「敷寝」が「緑もぞ濃き」にならって「花の床」であることは自明である。

【解説】「かざしの楯」——楯の位置が寝ている上にかざすようになってい  
をいうか。実態が捉えにくい曖昧な言い方ではあるが、尚武の精神（第五節）とも関連づけられる。

【私見】「かざしの楯」——ここで「楯」が出てくるのは、「櫓櫓とミネルバの神」ミネルバが持つ楯」という連想と解すべきであろう。

▼「マルスの神は矛執りて／ミネルバの神楯握り」《25『混濁の浪』明35》  
一高で文の象徴とされるミネルバは、智慧と技芸の神であると同時  
に戦の神としての属性も持ち、しばしば楯を携えた姿で描かれる。

【解説】「金玉の露しきりなれ」——《言及なし》

【私見】「金玉の露しきりなれ」——「金玉」とは、黄金と珠玉のように得  
がたい貴重なものの喩え。美しい詩文の意にも用いられ、藤原公任撰の歌  
集に『金玉集』がある。ミネルバの神（楯）に守られて、美しい詩文の数々  
が生まれるさまを表現したものと解釈したい。

四「別れといへばさびしきに

明日は尾越になやむらん

花顔しほまずいつか又

丘べに逢はん友と友

吹雪に花はまかせつつ

緑酒を酌みてたまゆらの

奇しき邂逅であひを酔ひ泣かむ

五「またよきの間も留まらぬ

時の流れに春は逝き

三年を秘めし若人の

斬蛇のつるぎ鞘飛びぬ

ちなみに、「金玉の露」というまぎらわしい表現のため、全く別の意味

(「寮雨」に解釈する向きも存在する。

【解説】「尾越」——山の峰を越すこと。「尾越の路に行きなやむ」(134)「ゆれて漂う陽炎に」大3)

【解説】「花顔しほまずいつか又……」——「花くれないの顔も／いま別れてはいつか見む」《106『光まばゆき』明44》の影響を指摘。【私見】|| 賛同。

【解説】「吹雪に花はまかせつつ」——《言及なし》

【私見】「吹雪に花はまかせつつ」——次の二つの寮歌を踏まえる。

▼「花を吹雪にまかせつつ」《134『ゆれて漂ふ陽炎に』大3》

▼「花は吹雪に任すとも」《149『あゝ朝潮の高鳴に』大5》

【解説】「緑酒を酌みて」——『玉杯』の「緑酒に月の影やどし」(第四節)を念頭に置いている。【私見】|| 賛同。

【解説】「斬蛇のつるぎ」——「史記」(高祖本紀)によれば、「斬蛇剣」とは、漢の高祖劉邦が若い頃に白蛇を斬った名剣。彼が火徳(赤色)を負って天下を取るべく運命付けられていたことを示す故事である。ここでは大志を実現すべき青年の未来と尚武の精神とを表している。

月ほそくしてうすけぶる  
縁の丘にかきならす  
弓弦ゆじょうのしらべ今たかし

六「花林に夢のさめゆけば  
あかつき淡あはき丘の星  
さらばと立てる若人の  
瞳に冴ゆる花の陰

なお、この「斬蛇のつるぎ……」が、『玉杯』の「破邪の剣を抜き持ちて」(第五節)にもつづいていっていることに注目される。

【私見】「斬蛇のつるぎ」——「斬蛇劍」の由来は解説の説くとおりである。

この寮歌の「斬蛇のつるぎ……」が『玉杯』の「破邪の剣を抜き持ちて」にも通ずることは事実であるが、『縁もぞ濃き』(明36)第五節に「彼のくちなはを屠りつゝ……抜き放ちけり秋の水」とあることから見ると、直接的にはむしろ、『縁もぞ濃き』に登場する「猜疑の蛇」を切り捨てる剣を指していると解すべきであろう(「くちなは」は蛇、「秋の水」は研ぎすました刀)。

【解説】「月ほそくしてうすけぶる」——《言及なし》

【私見】「月ほそくしてうすけぶる」——『縁もぞ濃き』の「旅人若く月細し」及び「夕月落ちて霧白し」の残香を感じさせる描写として印象深い。

【この項、朽津耕三氏(一高昭23理甲)の示唆による。】

《この寮歌の本歌は何かについての見解》

【解説】『光まばゆき春なれど』と『玉杯』という二つの歌を組み合わせた上で、独自の発想をもって形造られている趣を呈するが、基調は『光まばゆき春なれど』と共通し、『玉杯』からは、その意気を受けつぐと同時に、

亂舞に樂のみだれつゝ  
歌おのづから空に入る  
三十三の記念祭」

主要なことばを借りている。

【私見】『光まばゆき春なれど』と『玉杯』の影響が見られることは否定できないが、全体の詩想の流れ及び個々の詩句表現の対応関係を仔細に検討してみると、この二つの寮歌よりは、『緑もぞ濃き』及び『ゆれて漂ふ』の影響のほうがかなり大きいと考えられる。

《なお、井下登喜男氏（一高昭26文丙）は、かねて『緑もぞ濃き』と『ゆれて漂ふ』との本歌取りであると指摘しておられる。》

202 第三十四回記念祭寮歌『暁星の光消えゆき』（大13／深田久彌 作詞、三石 鼎 作曲）

希望のぞみ

【窓に満つ陽光はあれど  
身を展のべむ小草は敷けど  
丘の日を聖きよく守り来し  
時計臺仰あぐすべなし  
月光かげの青く煙る夜  
わがおもひしこにみだれて  
更いけゆくを寝いもやらぬに  
誰が歌ぞ哀し草笛」

【解説】「窓に満つ陽光はあれど」——《言及なし》

【私見】「窓に満つ陽光はあれど」——この寮歌はおそらく島崎藤村の『千曲川旅情の歌』の影響を受けていると考えられる。

▼「あたたかき光はあれど／野に満つる香も知らず」《千曲川旅情の歌》

【解説】「更けゆくを寝もやらぬに／誰が歌ぞ哀し草笛」——《言及なし》

【私見】「更けゆくを寝もやらぬに／誰が歌ぞ哀し草笛」——前句に同じ。

▼「暮れ行けば淺間も見えず／歌ぞ哀し佐久の草笛」《千曲川旅情の歌》

203 第三十四回記念祭寮歌『白陽に映ゆる』(大13 / 石田久市 作詞、鷺尾平吉 作曲)

204 第三十四回記念祭寮歌『草より明けて』(大13 / 吉富 滋 作詞、竹中 雪 作曲)

205 第三十四回記念祭寄贈歌『宴して』(大13 東大 / 渡辺 諒 作詞)

「宴して今日誕生の

喜びをなし給ふとよ

誕生の喜びを

揺曳ゆりびきに生きむ事もとて

誕生の祭まで

寄せまつるかな

【解説】「揺曳ゆりびき」——「ユリビキ」と読んでいるが、そういう語の存在は

確認できない。「揺曳」を強いて和語風にしたものか。おそらく、一高創

立を記念する喜びをゆらめかせながら生きてゆくこととする後輩へ寄せる、

というのであろう。

【私見】「揺曳ゆりびきに生きむ」——「揺曳ゆりびき」は、この年度の他の寮歌3篇及び

寄贈歌2篇と同様に、大震災による時計台の倒壊を表現し、それにもめげ

ない一高生のたくましい生き方への期待を歌ったものと考ええる。

206 第三十四回記念祭寄贈歌『今日回り来る』(大13 東大 / 中平 章 作詞、岸 偉 一 作曲)

207 第三十四回記念祭寄贈歌『春や加茂の』(大13 京大 / 福田敬之 作詞)

208 第三十五回記念祭寮歌『杳はるかなる日の』(大14 / 郡 祐 一 作詞、弘田龍太郎 作曲)

209 第三十五回紀念祭祭歌『橄欖の梢の尖に』(大14 / 大嶋長三郎 作詞、弘田龍太郎 作曲)

五「いざや友歌口<sup>しめ</sup>湿潤し」

高らかに門出の管<sup>ふ</sup>笛<sup>ぶ</sup>を

青玉<sup>せいぎよく</sup>の今宵<sup>けふ</sup>の限り」

【解説】「歌口湿潤し」——正確には解しがたいが、しっとりとした歌いぶり。

「音もなく降る淡雪」の中、「高らかに」卒業していく一高生を送る笛の音としてしっとり歌おうという「秀抜な詩的表現」をなしている。

【私見】「歌口湿潤し」——「歌口」は、笛を吹くときに唇を当てる穴のこと。

「歌口湿潤し」とは、「笛を吹く際の予備動作」の定型的表現であって、解説の指摘する「歌いぶり」とは関係ないと思われる。

▼「歌口しめし吾吹けば / 自治の音高く天に入る」《37『春の日背を』明36》

210 第三十五回紀念祭祭歌『しろがね遠くまごろみの』(大14 / 浅沼澄次 作詞、竹中 雪 作曲)

一「しろがね遠くまごろみの

希望の峯にまたくけば

幻あはく曙の野に

ゆるめきとめて若き日の

【解説】「しろがね遠くまごろみの」「黙示の胸」など熟さない表現が目ざわり

に感じられるが、一般的には平易で率直な表現で詠み出されている。

「黙示の胸にさしやきぬ」——正確には「胸に黙示のさしやきぬ」とあるべきところである。

黙示の胸にさゝやきぬ」

【私見】「しろがね遠く……またくげば」——「金（こがね）」が太陽を表すのに対し、「銀（しろがね）」は月を表すことが多い。ここでは明け方にまたたいているのだから、「残んの月」ないし「有明の月」（夜が明けかけても、空に残っている月）のことであろう。

▼「白銀の春の宵思しごねにはせて たゞよふ月の微笑ほそみに」≪143 『紫の暁』大4 京大

▼「晝の戦の跡もなく 月影冴えて銀と散る」≪227 『光ほのかに』昭14

▼「まじろみの希望の峯のせみに」——「希望の峯」は憧れの向陵。

▼「希望の峯のせみに辿りえし 尽きぬ祝宴うたげの歡喜よろこびに」≪213 烟り争ふ』大15

▼「まじろみ」は眠りから醒めきれない寮生。一高寮生はよくまじろんだ。

▼「花散る床のまじろみや枕に通う明けの鐘」≪161 『若紫に』大6

▼「散り行く花の下蔭まじろみに 微睡醒めておどろけば」≪217 『散り行く花の』昭2

▼「名もなき夢の途すがら まじろみ寒くめさむれば」≪218 『若き愁ひに』昭2

「幻あはく……黙示の胸にさゝやきぬ」——「残月」の光が幻のように淡くゆらめいて、若い寮生の胸に黙示（隠された真理の啓示）をささやいた。

【解説】第二節については、全く言及がない。

【私見】「語りて盡きぬ吉き日なれ」—— 記念祭の日を祝福する表現。

「さやめく梢うるほひて 今しもまじろみ岡の邊に」—— この節の歌詞に

一一「語りて盡きぬ吉き日なれ

さやめく梢うるほひて

今しもまじろみ岡の邊に

追憶の楯かざしつゝ  
在りしその日をしのぶかな

は、寮歌『夕月丘に』(大12)の影響が大きい。「さやめく梢」は橄欖の葉触はずれの音、「うるほひて今しもきらら岡の邊」は向陵に狭霧の流れるさま。

▼「そよぐともなき橄欖の葉触はずれの音に夢さめぬ

狭霧はなれながるゝ宵なれば かざしの楯にしづくする ≪201『夕月丘に』大12  
「追憶の楯かざしつゝ」——この「追憶の楯」も、右に引いた『夕月丘に』の「かざしの楯」と同様、「橄欖↓ミネルバの神↓ミネルバが持つ楯」という連想と解すべきであらう。一高で文の象徴とされるミネルバは、智慧と技芸の神だけでなく戦の神としての属性も持ち、しばしば楯を携えた姿で描かれる。

▼「マルスの神は矛執りて ミネルバの神楯握り

我らを常を守るなり 進め軍鼓の音高く ≪25『混濁の浪』明36 ≪  
「在りしその日をしのぶかな」——「マルスの矛」とともに常に向陵を守ってきた「ミネルバの楯」をかざすことよって向陵の過去の栄光の歴史を偲ぶことができるというイメージを表現する。

▼「楯をひたせばたちのぼる 古りし覇業の幻よ ≪201『夕月丘に』大12 ≪

▼「憧憬こぼれめてありし日の 丘を偲ぶも涙かな ≪204『草より明けて』大13 ≪

【解説】第三節は、自治寮生活の骨子ともいうべき友情のありかたを詠う。



愁にしづむ胸あらば  
地のさゝやきに聴けよ友  
生命の泉湧き出でて  
光は来る永劫に

(第四節から第八節は省略)

【私見】「若きは君が誇りなり」——次の寮歌を踏まえる。

▼「思へば若き命こそ 我等がつきぬ誇なれ」《106「光まはゆき」明44》  
「愁にしづむ胸あらば 地のさゝやきに聴けよ友」——人生や真理探  
究に愁いや悩みを抱くことがあれば、大地のささやきに耳を傾けるとよい。  
そうすれば、生命の永遠を悟ることができよう。

▼「若き誇はありながら 淡き愁をいかにせん」《春の光の》大3《

▼「いのちの群はわな々きて 大地の齢ひをさゝやきぬ」《春甦る》大9《

▼「土の郷愁に掘り入りて しづなる懷疑身にしめど」《春甦る》大9《

▼「微香る大地囁けど 玉の緒は繫ぎもあへず」《新壘の》昭12《

「生命の泉湧き出でて 光は来る永劫に」——「生命の泉」は一高生が

「丘」における様々な「愁い」や「迷い」を克服する際の代表的なキーワード

の一つである。「光」は「自治の光」であり「希望の光」であろう。

▼「行方はるけき若人が 生命の井泉汲み交し」

橄欖の蔭に結びたる 三年の夢の貴しや《春未だ若き》大10 東大

▼「生命の泉緑の野 露けき丘の故郷に」《生命の泉》大15 東大

212 第三十六回記念祭寮歌『あしたの星の』（大15 / 齋木秀雄 作詞、鶴田三郎 作曲）

213 第三十六回記念祭寮歌『烟り争ふ』(大15 / 榎本謹吾 作詞、安藤 熙 作曲)

一、憧憬 あぐがれ

「烟り争ふ春霞」

春は都の花に暮れ

よし浮かれ男はうかるとも

我は浮かれし永劫に

知恵と正義と友情の

泉を秘むと人のいふ

彌生が岡を慕ひつゝ」

【解説】「烟り争ふ春霞」——西行「山家集」の「もしほやく浦のあたりは立ちのかで烟り争ふ春霞かな」にもとつき、「烟り争ふ」を「春霞」の枕詞の如く用いている。

【私見】「烟り争ふ春霞」——西行の歌は「烟りたちそふ春霞」とする本が多いが、この寮歌では、「板本」（二元禄板六家集本）にしたがって「烟り争ふ」を採っている。この場合、「烟りと霞が立ちあらそっている」の意になるとされる。（岩波・日本古典文学大系29 「山家集・金槐和歌集」による）

【解説】「春は都の花に暮れ」——《言及なし》。

【私見】「春は都の花に暮れ」——西行の次の歌を踏まえていると推測される。

▼「ちりてまてと都の花をおもはまし」

春かへるべきわが身なりせば」《西行法師歌集》春》

▼「あかつきとおもはまほしき音なれや

花に暮れぬる入あひの鐘」《西行法師歌集》春》

【解説】「よし浮かれ男はうかるとも、我は浮かれじ永劫に、知恵と正義と友情の、泉を秘むと人のいふ、彌生が岡を慕ひつゝ」——《知恵と正義と友情の……彌生が岡を慕ひつゝ》という歌詞について、「寮生活を送る若者の肺腑をえぐる名文句」と指摘するのみである。》

【私見】「よし浮かれ男はうかるとも、我は浮かれじ永劫に」とは、たとえ環境に恵まれた東京の中学生が遊びほうけていても、自分たち田舎の中学生が一高に入学するためには遊んでゐるわけにはいかない」の意である。

このように一高に憧れ入学をめざす地方人の感情を、「知恵と正義と友情の……彌生が岡を慕ひつゝ」と表現した。

作詞者が『向陵』第41号（昭50・4）に寄せた「烟り争ふ」と題する一文を引いてみよう。

▼「数ある寮歌のうちで、われわれ田舎の中学の出身者に、一番アツピールする歌は《藝文の花》で、その庄卷は〈京に出て向陵に学ぶもうれし武蔵野の、秋の入日はうたふべく、萬巻の書は庫にあり〉のくだりであろう。そして、この叫びから受ける感動は、一高を近くに控え、しかもこれをさまで難関と思わずに入学する、環境に恵まれた東京人の理解を超えるもので、地方人のみが堪能できる醍醐味であろうと、この歌を

二、祝宴うたげ

【あゝ懐れの旅にして  
森羅萬象しどま黄昏の  
鐘丘の上に響く時  
希望の峯に辿りえし  
盡きぬ祝宴の歡喜に  
柏の陰に夜もすがら  
自治寮の歌高誦せん】

三、旅愁たびしみ

【秋玲瓏の月の影  
その月かげに誘はれて  
岡べに集へる旅人の  
同じき感懷はありながら

知った時から確信していた。こうした田舎者だけが抱く異質な感情を、意識的に「知恵と正義まことと友情の、泉を秘むと人のいふ、彌生が岡を慕ひつゝ」以下に盛り込んだつもりであつた……

【解説】「あゝ懐れの旅にして」「希望の峯に辿りえし」——《言及なし。》  
【私見】「あゝ懐れの旅にして」「希望の峯に辿りえし」——第一節の私見で引いた作詞者の文にあるように、環境に恵まれた東京の中学生とは違い、田舎の中学出身者が幾多の苦難を克服して憧れの一高に合格した喜びをあらためて表現している。

【解説】「かたみに語らふ友をなみ」——互いに話し合う友がないので。

「……なみ」は「……がないので」

【私見】美しい友情をうたつた寮歌が多い中で、本寮歌のように「友なき」を嘆くものは珍しいが、他にも例がある。

四、  
覺醒

同じき口舌はありながら  
かたみに語らふ友をなみ  
故里の彼蒼仰ぐ哉」

「夢より夢のさすらひに  
橄欖オリブの森に行き暮れし  
空虚なる名の雅男みやびをよ  
捨てよ藝術の銀笛を  
救世くげの黙示を悟れかし  
飢餓うゑと呪詛のろひと悲歎かなしみの  
高鳴る民衆の潮騒しほざめに」

- ▼ 「歎かじな友なき運命 荊棘をわけ行くうれひ」《224 『八重汐路』昭4》
- ▼ 「友をなみ暫時しばし憩へば 湧き出づる智慧の聖泉いづみや」《238 『舊き星』昭5》
- ▼ 「ひたぶるの若さに酔ひて 憧憬あぐれし友垣なれど  
淋しもよ時のほゝるみ 冷たくも吾を見やりつ」《286 『朝日影』昭15》

【解説】「捨てよ藝術の銀笛を……高鳴る民衆の潮騒に」——芸術への美的関心や陶醉は捨てて、貴雅に苦しむ民衆の呪詛と悲歎の叫び声に耳を傾け、階級対立の社会的矛盾解消への道、即ち「救世の黙示」を悟るべきであるとの要請は、当時のロシアにおけるソヴィエト革命の進展に伴う労働運動、社会主義・共産主義運動の高場の世相の反映として注目に値しよう。榎本氏は在学中、社会科学研究会の闘士だったというからこういう歌詞の創造もうなすける。

【私見】「捨てよ藝術の銀笛を……高鳴る民衆の潮騒に」——作詞者が『向陵』第41号（昭50・4）に寄せた「烟り争ふ」と題する一文（前出）  
にすぎのようにある。

▼「小作農争議の本場と言われた新潟県生まれの私は、入学するや否やまっ先きに（一）高社会科学研究会に入会した。会合は輪講と称して毎週

五. 出征かどで

「治ちにいて亂らんを忘れじと  
淋しみしく強つよく矛こを執とり  
玉杯たまひ花はなを浮うべては  
雄ゆう々々しく起たちてゐる新人しんじんよ  
美酒うまきを互かたみに汲ひみ交まし  
光榮こうえいある門出かどで祝いわはなん  
三十六の紀念きねん祭まつり」

一回柔道場の片隅で、蠟燭をともしながら開くのが常で、入会早々読まされたのが、秘密出版の（共產党宣言）であった。……こんな雰囲気の中から生まれたのが、第四節の（捨てよ芸術の銀笛を、救世の黙示を悟れかし、飢餓と呪詛と悲歎の、高鳴る民衆の潮騒に）であった。」  
なお、吉田健彦氏によれば、「救世の黙示」とはマルクスの「資本論」のことだという。

【解説】「淋しく強く矛を執り」——《言及なし。》

【私見】「淋しく強く矛を執り」——123 「ありとも分かぬ」（大2）第三節に「この世のいのち一時に／こめて三年をたゆみなく／淋しく強く生きよとて」とある。

【解説】「雄々しく起てる新人よ」——この「新人」は、前節「四、覚醒」の中で、「救世の黙示を悟れかし」と歌われている要望に応えうる自覚を身につけた革新的な人物を意味していると解される。

【私見】「雄々しく起てる新人よ」——この「新人」は、大正7年12月に発足した「東大新人会」及びその影響を受けて結成された学生思想団体（「高等学校連盟」、「全日本学生社会科学連合会」など）の活動と関係ありと見

六、

別離わかれ

「流轉るてんの相すがたさながらに

あゝ三春の行樂も

今は歸らぬ夢なれや

追憶おもひでの袖しほるれば

春愁心結ばれて

昔語りはこゝろせん

あゝ向陵むかへよ向陵むかへよ」

るべきであるう。

【解説&私見】「玉杯花を浮べては、美酒を互に汲み交し」——ここでは、一

高生が玉杯たまがひで美酒を汲み交わしている。24 「嗚呼玉杯」冒頭の二句を、

寮生の振舞いを表しているとする立場に立つての表現である。

【解説】「流轉るてんの相すがた」——「流轉」は仏教語で、世界、宇宙の現象、事物がう

つり廻つてやまないことをいう。

【私見】「流轉るてんの相すがた」——「流轉」は仏教語で、六道四生の間で迷いの生死をくりかえすことをいうが、転じて、状態・境遇などが絶えず移り変わることをいう。

\*六道ろくどう＝地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の六つの迷い

の世界をいう。(ろくどう又はりくどうと読む)

\*四生しじょう＝胎生、卵生、湿生、化生けしやうの四種の生まれ方をいう。

【解説】「三春の行樂」——「三春」とは、本来は陰曆一月、二月、三月の春三か月だが、ここでは「向陵三年」の意に用いている。

【私見】「三春の行樂」は、中国初唐の詩人劉廷芝の『代下悲シム白頭ハツ翁ニ』という詩を下敷きしている。「代悲白頭翁」とは、白髪を嘆く老人に代つ

て詠うという意味であり、白頭の翁に託して青春を追懐し人生の衰えやすさを嘆じた詩である。この詩の「三春」が春三か月をさしているのに対し、本寮歌では解説の指摘するように「向陵三年」の意に用いているが、どちらも青春の追懐という詩想では共通点がある。

▼「……年年歳歳花相似、歳歳年年人不同、……伊昔紅顔美少年

……一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊」(『代悲白頭翁』)

《劉廷芝『代下悲白頭翁』(唐詩選／七言古詩)》

【解説】「今は歸らぬ夢なれや」——西行作の「津の国の難波の春は夢なれや」  
葦の枯葉に風わたるなり」を踏まえている。

【私見】「今は歸らぬ夢なれや」——右の歌は、「山家集」ではなく「西行法師家集」及び「新古今和歌集」に収録されている。「夢なれや」は「夢だつたのか」の意。

【解説】「春愁心結ぼれて」——春の愁いに心や気持ちがあふさいできて。

【私見】「春愁心結ぼれて」——「結ぼる」＝「結ぼほる」(結ばれて解けにくくなる。心がふさいで晴れない)。

【解説】「追憶の袖しほるれば昔語りはこころせん」——西行作の「今よりは昔語りは心せむあやしきまでに袖しほれけり」を踏まえている。「袖



しほるれば」は、袖が涙で濡れてしまうので。

【私見】「追憶の袖しほるれば 昔語りはこころせん」——右の歌は、「山家集」と「西行法師家集」の両方に収録されている。（これからは昔語りに十分注意しよう。我ながら怪しく思われるほど、懐旧の涙に袖が濡れてしまったことだ。）

214 第三十六回記念祭寄贈歌『生命の泉』（大15 東大／郡 祐一 作詞、國鹽耕一郎 作曲）

二「うす紫のいざなひは

男の子を白き墓とせん

むなしき形骸やきすてゝ

白がね天に燃ゆるとき

赤裸となりて眺むれば

我が世のさまはあゝ如何に」

【解説】第二節では何を言わんとしているのか曖昧なのが惜しまれる。

【私見】「白き墓」——新約聖書マタイ伝に「汝らは白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は死人の骨とさまざまの穢とにて満つ。かくのごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法にて満つるなり」とある。ここでは、外面は美しいが内面は醜悪な人間の比喩的表現に用いて、世俗の誘惑にまどわされないよう、一高生の自覚を求めている。

215 第三十六回記念祭寄贈歌『人の世の』（大15 東大／橋爪 健 作詞、弘田龍太郎 作曲）

216 第三十七回記念祭寄贈歌『たまゆらの』（昭2／平川 守 作詞、玉置 悦弥 作曲）

一 「散り行く花の下蔭に

微睡醒めておどろけば

ゆふべの霧の紫に

暮れては遠き旅路かな

【解説】本寮歌は、一高在学の三年間を旅路に喩え、寮生を旅人になぞらえつつ、第三節と第四節冒頭では、仏教的無常觀を思わせる想念を示しながらも向陵を「聖き心のふるさと」と見、「永劫の若き生命にあふれたり」と讚美している。樂友会の手になる二部合唱用の曲は寮歌としては異例で、さすがに美しい調べを奏でており、愛唱された。

「微睡」——「まどろみ」と読む。

【私見】本寮歌は一高樂友会作曲の二部合唱曲である。平成24年、平成25年、及び平成26年11月の東大駒場祭の「寮歌の集い」（詠帰会）のプログラムでゲスト出演した東大コールアカデミーのメンバーがこの曲の合唱を披露したことは、記憶に新しい。合唱曲として作曲された一高寮歌には『みよしの』（明39、音楽隊作曲）、『荒潮の』（明45、樂友会作曲）、『紫烟る丘の上』（大11、中村幸四郎作曲）、『宴して』（大13、作曲者未詳）と本寮歌『散り行く花の』の五曲があるものの、一高寮歌集に低音部の譜が掲載されているのは、本寮歌と『みよしの』の二曲であり、最近でも合唱曲として歌われているのは、本寮歌だけのようである。余談であるが、ベートーベン作曲の「交響曲第九番」第四楽章の「合唱」の旋律に合わせ

て作詞したとされる東大寄贈歌『とよのさかえに』(大6)は、合唱曲として歌われたことはなかったのであろうか。

一高以外の例を見ると、『二高寮歌集』では、第一部として「合唱曲篇」を設け、『校歌』、『尚志会会歌』など五曲の男声四部合唱曲をまとめて掲載しているのが目立つ。

「散り行く花の下蔭に」——大7『若紫に』の次の表現を踏まえる。

▼「散り行く花の下蔭に」夕さり来れば若人が 紅き血潮の滾るかな

「微睡醒めておどろけば」——うとうと眠りから醒めて、はっと気がつく。

▼「夢魂驚き窓推せば」三層樓は今何処」≪184『東皇回る』大8≫

▼「夢魂一朝覺めぬれば」あはれ焦土の夕けむり」≪229『春東海の』昭5≫

二「千里の駒に鞭あげて  
丘を訪ひにし旅人は

はるかに白き帆を上げて  
やがては遠く去りゆかむ」

【解説】「千里の駒に鞭あげて」——「千里の駒」は、一日に千里も走る名馬。轉じて、若くして才能のすぐれた者の喩え。

【私見】「千里の駒に鞭あげて」——現代中国語でも「快馬加鞭」(駿馬に鞭をくれる。「快」＝「速い」という四字熟語が使われている。

「丘を訪ひにし旅人」——入学した二高生を人生の旅人に喩えている。  
「はるかに白き帆を上げて…去りゆかむ」——一高を卒業して各地の帝

国大学等に進学するさまを「白き帆」という表現によって船出に喩える。

三「とどめもあへず流れ行く

時のさだめを嘆くとも

空しき智慧のよそほひに

友よ老いゆくこと勿れ」

【解説】「とどめもあへず流れ行く時のさだめ」——仏教的無常観を思わせる。

【私見】「とどめもあへず流れ行く時のさだめ」——仏教の根本思想にある「諸行無常」、「有為転変」をさすのであろう。

▼「十年は夢かまぼろしか 時の流れは絶えねども」《晚翠「天地有情」『登高』

▼「時運の歩み世のすがた 止めむ術はなけれども」《58『波は逆巻き』明39》

▼「歎けど時の老いゆくを 止め止めんすべもがな」《191『彌生ヶ丘に』大10》

「空しき智慧のよそほひに」——断片的な知識をひけらかして知識人であるがごとくよそおい、行動・実践を伴わないことに対する批判。

▼「かい捨ててむよしなき智慧は 烏漣なれや聖めけるも」《202『曉星の』大13》

▼「智慧の綾衣いざさらば」《208『杳かなる日の』大14》

「友よ老いゆくこと勿れ」——友に呼びかける形をとっているが、自省を含めたものであろう。「老いゆく」は肉体ではなく精神の「老い」を指すと解する。

▼「智慧に老いゆく涙のみ」《208『杳かなる日の』大14》

【解説】「あゝ有漏の世のあはれにも」——「有漏」は仏教用語で、頑迷に

四「あゝ有漏の世のあはれにも

聖きよき心のふるさとは  
うつろひ行けど永劫の  
若き生命にあふれたり」

五「神去りましし哀痛を  
たゝへて灯影暗けれど  
心をこめて夜もすがら  
まどぬも床し紀念祭」

迷つて悟りを得ない凡夫の人生のこと。

「うつろひ行けど」—— 時とともに、物事の状態は変わっていくけれども。

【私見】「聖きよき心のふるさとは」—— 「聖きよき心」という表現は、キリスト教以外の宗教でも使われる。ただしこの節の「聖きよき心のふるさと」とは宗教的な意味ではなく、向陵を、『嗚呼玉杯』第二節の「清きよき心の益良雄(＝「高生」)のふるさとと位置づけたものと解する。

「永劫の 若き生命にあふれたり」—— 先輩が卒業すると、それと入れ替わりに新入生が入学してきて、向陵はいつまでも若さにあふれている。

【解説】「神去りましし哀痛を」—— 大正天皇崩御の悲しみ、痛みを。

【私見】「神去りましし哀痛を」—— 「神去りましし」はもとより大正天皇の崩御を指すが、「哀痛」は「かなしび」と訓するのがすなおであろう。

【解説】《作者橋爪克巳は185『春甦る』(大9)の橋爪健の弟であり、兄の作

品『春甦る』の第四～六節に示されている宗教的、哲学的思索性と本寮歌

一 「若き愁ひに踏み迷ふ

名も無き夢の途すがら

まじろみ寒くめさむれば」

「永劫の命の韻律して

輪廻の春に萌え出でし」

三 「さはれ夕星兆して

杳かなる夜を流れけり

あこがれの笛吹き鳴らし

友よ荊を分け行かん」

四 「いのちあらそふ迷羊の

うら若き日の旅衣

この世の幸にはなむけし

の内的的思想性との間には基本的共通性が見てとれる。」

【私見】解説では本寮歌と兄の『春甦る』との基本的共通性を指摘しているが、具体的な歌詞表現を見ると、むしろ、同じく兄の作品である170『うららにもゆる』(大7)との類似・共通性の方が目立っているというべきであらう。

↓ 「若き悶えに泣きぬると」『うらら』(四)

↓ 「青春の夢……」(『うらら』(一)、『うら若き日の旅すがら』)『春甦る』(三)

↓ 「敷寝にあかきまじろみや」『うらら』(一)

↓ 「宇宙の律に睦りけむ……生命の詩と誰か知る」『春甦る』(四)

↓ 「春甦るときめきた」『春甦る』(一)

↓ 「星兆して流れけり」『うらら』(四)

↓ 「朗らかに鳴らせ柏笛」『うらら』(三)

↓ 「いくそこどしき荆棘路を／さまよひにけむ」『うらら』(二)

↓ 「迷羊の胸なみだあり」『うらら』(二)

↓ 「もゆる思情の唐衣」『うらら』(四)、『うら若き日の旅すがら』)『春甦る』(三)

↓ 「あゝ三年こそ人の世の／こよなき祝福ぞ」『うらら』(五)

三年の春を忘れめや」

第三節を再掲

三「さはれ夕星<sup>ゆふつ</sup>兆して

杳かなる夜を流れけり

あこがれの笛吹き鳴らし

友よ荊を分け行かん

わが行く道のさみしかれ

祈の魂に光あり」

219 第三十八回記念祭寮歌『さ霧這ふ』(昭3／五味智英 作詞、坂本吉勝 作曲)

一「さ霧這ふ丘の草原

慕ひ来てたゝずみ居れば

夕闇のたゆたふほとり

【解説】「友よ荊を分け行かん」——「分荊」は、兄弟の離れることのむつかしいことの喩。中国の故事『續齊諧記』による。この歌では、「本来別

れがたい固い友情で結ばれた友が、卒業と共に、悲しみを忍んで別れ行く」という意味に用いられているのであろう。

【私見】「友よ荊を分け行かん」——「荊を分けて行く」は「分荊」という故事成語とは関係なく、自分の今後の進路のさまざまな障害・苦難を切り開いて行くことを指していると解する。

▼「いばら踏み分け道ひらき／進む健兒もかゝるべく」《35『筑波校あたり』明36東大

▼「明日よりは荊ふ旅路／涯しなき行方正しく」《223『しづまなる』昭4

▼「歎かじな友なき運命／荊棘をわけ行くうれひ」《224『八重汐路』昭4

【解説】「慕ひ来てたゝずみ居れば」——《言及なし》。

【私見】「慕ひ来てたゝずみ居れば」——「慕ふ」は「心ひかれてあとを追う」。

「霧が低くたちこめる丘の草原(＝向陵の校庭)に心ひかれてやって来て

露しげく、揺るゝ虫の音

二「月<sup>かみ</sup>冴ゆる丘の庭の面

書<sup>かみ</sup>いだき遠く望めば

故郷のおもひまどかに

光浴び澄めり魂

たたずんでいると、夕闇の漂うあたりに虫の音が……」の意であろう。

【解説】「月冴ゆる……故郷のおもひまどかに」——第二節は望郷の念の抒情的表現を特色としてしている。

【私見】「月冴ゆる……故郷のおもひまどかに」——有名な李白の『静夜思』という詩を下敷きにしたものか。《井下登喜男氏（二高昭26文丙）から示唆を得た。》

▼「牀前看月光」 牀前月光を看る。

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと。

挙頭望山月 頭<sup>かうべ</sup>を挙げて山月を望み、

低頭思故郷 頭<sup>かうべ</sup>を低れて故郷を思ふ。

「月を見て故郷を思ふ」のは漢詩の伝統的手法であるが、現代中国の生活においても、三大節の一つである中秋節には、中秋明月のもとで月餅を食べながら家族団欒する風習があり、故郷に帰れない人にとつては、月餅を食べながら家族を偲び故郷を思ふ節句とされる。中秋節に李白の『静夜思』を吟ずる人も多いという。

【解説】「書<sup>かみ</sup>いだき」——《言及なし。》

【私見】「書<sup>かみ</sup>いだき」——「書<sup>かみ</sup>」は本とも手紙ともとれるが、次の行に「故郷



五「あゝ友よ胸躍らずや

とこしへの旅路偲びて

折伏しやくふくのたふとき業わざに

汝たまが魂たまのわななきさせずや

六「榮よかゆかん陵なかの生命いのちを

護り來し若人の群

去りがてにかへり見するを

夜をこめて歌ひ送らむ

のおもひまごかに」とあることを勘案して、「故郷からの手紙」を読んで遠く故郷の父母をなつかしんでいるさまを詠っていると見たい。

【解説】「折伏しやくふくのたふとき業わざに」——「折伏」は仏教用語。煩惱や迷妄をおさえ、剛強なものを「折破摧伏」すること、真実の教えに帰服させる尊い教化法。

【私見】「折伏のたふとき業に」——「折伏」は、ここでは「破邪」と同義と考えられ（中村元『仏教大辞典』ほか）、『嗚呼玉杯』にあるように「破邪の剣を抜き持ちて」「我が国民を救はん」とする一高生の崇高な使命感をさしているとする。

【解説】「去りがてにかへり見するを」——去ることができないで、ふりかえり見ているのを、の意。

【私見】「去りがてにかへり見するを」——「かへり見す」は「かへり見」（名詞、後ろを振り返ること）＋「す」（動詞）。「ふりかえり見ている」のは卒業してゆく先輩、「歌ひ送る」のは作者を含む後輩ということになろう。  
▼「辿り來し同じ縁ゆかりを／今更にかへり見みすなり」

一 「あこがれの唄胸に秘め

沙漠をよぎる隊商の

哀しき遠慕いだきつゝ

幾山河を越えて行く

まことの友を我は見き」

【解説】「あこがれの唄胸に秘め……まことの友を我は見き」——真理への深く遠いあこがれをいだきつつ心の旅を続ける友との遭遇を歌う。

【私見】「あこがれの唄胸に秘め……まことの友を我は見き」——作詞者の矢崎秀雄氏の親友として、一高同期生で、戦後日本共産党の大幹部になった米原昶氏がいる。社会主義運動に関わって留年し、昭和四年に一高を退学させられた後、十六年間にわたって地下に潜った米原昶氏は、親友の矢崎秀雄氏とだけはずっと連絡を保っていたという『回想の米原昶』所収、池田平吾氏の手記。こうしたことから、この寮歌に登場する「まことの友」が米原昶氏である可能性はかなり高いと考える。

【解説】「沙漠をよぎる隊商の」——キャラバン caravan。隊を組んで砂漠を行く商人の集団。また、ある目的のため、隊を組んで遠征したり、各地をめぐるたりすること。第1節のモチーフは、真理への深いあこがれを抱きつつ心の旅を続ける友との遭遇であるとしている。

【私見】「沙漠をよぎる隊商の」——解説を読んでみても、この寮歌の第1節になぜ「隊商」が登場するのか、よくわからない。

アラブのことわざにいう。「犬が吠えたてても隊商は進み続ける」と。

Dogs may bark, but the caravan moves on.

これは通常、「反対意見があつても、やむを得ず」とはやる」という意味に使われる。作詞者は、右のことわざが念頭にあつて、「確固たる信念を持つて行動し、安易な妥協をしない友」を「沙漠をよぎる隊商」にたとえ、「まことの友」と表現したのであろうか。ただし、ここに大はでてこない。このことわざは、一九二〇年から一九四四年までイングリッド銀行の総裁を務めたM・ノーマン卿が好んで引用したことで知られている。

二 「橄欖花は咲かねども

若草萌ゆる丘の上に

日ごと眞まことを求めつゝ

友の憂ひを我と泣く

心の花を我は見き」

四 「鷗の羽のさむぐと

明けゆく海の磯に立ち

新潮の香を身にあびて

落漠無限向上の

【解説】「橄欖花は咲かねども」——言及なし。

【私見】「橄欖花は咲かねども」——「橄欖の花」に象徴される自治寮の伝統が年を経て形骸化してきたことを表現したものであろう。「橄欖の花は咲かないが、心の花（＝友情）は咲いた」と歌う。第六節の「柏の幹は老ゆるとも」と対応する。

【解説】「鷗の羽のさむぐと」——《言及なし。》

【私見】「鷗の羽のさむぐと」——鷗のうち海猫ウミネコは留鳥だが、それ以外はだいたい秋に渡ってくる冬鳥である。冬の港や河口に群れ飛ぶ姿には季節感があり、季語として「冬鷗」が使われる。吉田健彦氏は、「鷗の羽」は海辺に

光れる航路を我は見き<sup>みち</sup>」

立つ一高生のマント姿を喩えたものか、とされる(同氏HP)。

【解説】「新潮の香」——《言及なし》。

【私見】「新潮の香」——昭和の新しい時代精神を象徴するか。

【解説】「落漠無限向上の」——「落漠」は「落莫(寞)」の誤りか。「落漠」は「不確実、条理が不十分なこと」。「落莫(寞)」の方は、「ものさびしいこと。ものさびしく、限らない上に向かつて。【これに対し井下登喜男氏(一高昭26文丙)は、「落漠」も「落莫(寞)」も「無限向上」には結びつかないとして、「落落」(志の広大なさま、気宇が広く坦々としているなど)の意味がある)の誤植ではないか、とされる(『一高寮歌覚書』)】。

【私見】「落漠無限向上の」——「落漠」は解説の説く如く「落莫(寞)」の誤りであろう。なお、「落莫」と「無限向上」とを切り離すのではなく、「落莫無限」(「さびしさは限りない」の意)＋「向上」と考えれば、結びつきを云々する必要は特にないと思われる。あるいは「無限」を両方に掛けて、「落莫無限」＋「無限向上」と考えてもよい。次に、「落莫」とほぼ同じ意味の「寂寞」を使った表現の例を引く。

六「柏の幹は老ゆるとも」

誕生るゝ子等の血は赤く

今宵三十八年の

記念祭の祝酒の觴に

若き生命を我は見ん」

221 第三十八回記念祭寮歌『仄々と朝明けにけり』（昭3／宇佐美重長 作詞、小坂多果郎 作曲）

三「憧憬れて慕ひ寄りにし

友垣は啻賢しらに

淋しもよ之の現し身

白玉の憂を持ちつ

行きにけん人の足跡

我が前に斯くも續ける」

▼「こゝに無限の寂寞を蔵して、識ますます明らかなる時、信濃高原を

わたる風の音は梵音声の響をたてる」

《蒲原有明『新しき声』（島崎藤村の詩についての評論）》

【解説】「柏の幹は老ゆるとも」——言及なし。

【私見】「柏の幹は老ゆるとも」——第二節の「檜欒花は咲かねども」と対応

し、「柏の幹」（＝自治寮の伝統）が古くなったとしても、記念祭に集う

若者たちの生命力に溢れた姿を見ることができたらう（「若き生命を我

は見ん」と期待を寄せている。

【解説】「淋しもよ……白玉の憂を持ちつ」——友たちは憂愁をも白玉のよ

うに美化しつつ先へ行ってしまい、自分は取り残されたような淋しい現実

をかみしめているのだ。「之の」は「この」と同じ。

【私見】「淋しもよ……白玉の憂を持ちつ」——「現し身」は「現実」にこの

世に生きている人、現世。「白玉の憂」とは、自分の優れた才能が世の人

に知られないという嘆きを意味する。友たちは自信ありげに先へ行ってし

222 第三十九回記念祭寮歌『白雲の』

一 「白雲の向伏す高嶺

五 「遮莫諒闇明くる御代

彌生の光昭らけく

和みつゝ此の天地に

押照れりあゝ吾一人

白雲の奥處も知らず

何時迄も泥み居るべき

まい、自分は才能が皆に認められずに取り残される現実を淋しく嘆くばかりだ。

▼ 「白玉は人に知らえず知らずともよし 知らずとも

吾し知れば知らずともよし」(「知らえず」) Ⅱ 「知られず」

《万葉集 6 一〇二八。「十年戊寅、元興寺の僧のみづから嘆く歌」》

【解説】「昭らけく和みつゝ」——《言及なし》

【私見】「昭らけく和みつゝ」——直前の「諒闇明くる御代」が、大正天皇の諒闇が明けて、昭和の新しい御代を迎えたことを指していることからみても、「昭らけく和みつゝ」という表現が「昭和」を示していることは確かであろう。

【解説】「白雲の奥處も知らず」——《言及なし》

【私見】「白雲の奥處も知らず」——次の歌を踏まえたものであろう。

▼ 「大海の奥處も知らず行く吾を何時来まさむと問ひし児らはも」

《万葉集卷 17 三八九七／作者不明》

【解説】本寮歌の第一節は、高山のイメージのもとに、高校生活の中心的課題

七谷を水は落つれど  
懂れゆく頂いづこ  
眞理の花折らむ術なし  
夕霧に瀬の音も冴えて  
旅衣に氷雨冷ゆるを  
いざ友よ今宵は伏さむ  
一つ夢胸に結びて

であった眞理・眞實探求の厳しい道程に生まれる友情を歌う。

「七谷」——たくさんの谷の意であろうが、例が見当たらない。

【私見】「七谷」——古歌に歌われた例は見当たらないとしても、伊那、頸城、加茂など各地に「七谷」という呼び方があり、昭和の演歌では「勘太郎月夜歌」の中で「伊那は七谷糸引く煙」と歌われている。本寮歌では、眞理探求の頂を目指す際にたどるべきルートを選択肢がいくつもあることを表現している。

【解説】「眞理の花折らむ術なし」／「一つ夢胸に結びて」——《言及なし》

【私見】「眞理の花折らむ術なし」——能においては、「若さによって発揮される、藝以前の一次的な面白さを「時分の花」、「鍛錬と工夫の末に得た、藝の眞實の面白さ」を「まことの花」と呼ぶ《世阿弥『風姿花傳』》。

「まことの花」は、目に見える「花」ではなく、心の内にある「花」を指す（梅若六郎『まことの花』）。

本寮歌では、能における「まことの花」を下敷きにして、たゆまぬ努力精進によって到達すべき眞理を「眞理の花」と表現したものと解する。

「一つ夢胸に結びて」——「夢を結ぶ」は夢を見ること。

▼「み空に星の冴ゆる夜は／圓かに更くる夢と夢／一つに結ぶ露の玉

一 「ししまなる丘べに立てば

西のかた映くのぞまる

雲紫の朝には／崇き希望の胸と胸／同じ調べに躍るかな

(65 『仇浪騒ぐ』明40、第三節)

二 「かへり見る陸ははろかに

ほの白みつゞくわだつみ

白銀の珍珠秘めて

五百重波深き底ひに

鐘ぞ鳴るいみじその音

【解説】「白銀の珍珠秘めて」——「珍珠」ははつきりしないが、海幸彦・

山幸彦の神話における「塩盈珠」と「塩乾珠」のように、絶妙な力をもつて神秘の世界(「藝術の神髄」)を表現する不思議な力を意味しているか。

【私見】「白銀の珍珠秘めて」——「珍珠」は「真珠」のことで、海幸彦・

山幸彦とは関係がない。万葉集以来、海底の真珠を詠んだ歌は多くあり、一高寮歌の中にも類例は多い。

▼「遠近の磯の中なる白玉を／人に知らえず見むよしもがな」《万葉7 一三〇〇》

▼「海の底しづく白玉風吹きて／海は荒るとも取らずば止まじ」《万葉7 一三二七》

▼「海士も入りえぬ水底に／百千の玉をかくすなり」《9 『我寄宿舎を』明31》

▼「あゝ海洋の底ふかく／沈める真珠を捜るべく」《71 『あゝ大空に』明40 東大》

▼「真珠を秘むる海原の／囁く秘密解き放ち」《154 『黄昏時の』大5》

【解説】「大い宇宙に人生を恵む」——言及なし。

【私見】「大い宇宙に人生を恵む」——「人間の生命は、大宇宙の生命力の賜



大い宇宙に人生を恵む  
若き兒の頬に寂あり」

物である」という意味で、「禅」の思想、具体的には道元禅師著『正法眼蔵』の中心的なテーマの一つである宇宙観・死生観を表現したものであろう。なお、「恵む」は本来は他動詞だが、ここでは受身のニュアンスで使われている。

▼松原泰道師は、『正法眼蔵』第92巻「生死」の一節、「この生死は、即ち仏の御いのち也。これをいとひすてんとすれば、すなはち仏の御いのちをうしなはんとするなり。」を次のように訳す。

「人間の生き死には、自分一人の生死ではなく宇宙の大生命とかわりあう。故に自分の迷いの苦悩から勝手に命を捨てるなら、それは仏の御いのちを無くすことである(すべてを生かそうとする大宇宙の意志にそむくことになる)。」

《松原泰道『道元』(憐アートデイズ p. 290)》

▼境野勝悟氏は、道元の思想について次のように述べる。

「道元は、自分の生命は尊い大宇宙の生命であることをまず悟り、だれもが宇宙の根源の生命で生きていることを、しっかりと自覚しなさい……と、その基本的な心得を教えてくれる。」

《境野勝悟『道元「禅」の言葉』知的生き方文庫、三笠書房 p. 5》

二「春はいま丘にたゞよみ

はろかなる懐疑のうちこ

涙さへしらず流るゝ

花のもと夕闇薄し」

【解説】「若き兒の頬に寂あり」——本寮歌は、第四節までは「若き兒の頬に

寂あり」とか、「涙さへしらず流るゝ」とかいうように、哀愁の情緒が主

調をなしているが、第五節、第六節において積極的姿勢に転じ、第七節で

感情の高揚をもって歌い収められている。しかし第二節から第三節にかけ

ての陰影に富んだ叙情の背景としては、当時の左翼思想・運動の弾圧に基

づく政治的・社会的な厳しい状況が考えられなくてはならない。

【私見】「若き兒の頬に寂あり」——2年後の次の寮歌に影響を与えた。

▼「生命する春のときめき 若き兒に寂あり」(昭和6年『朝あくる』)

【解説】「はろかなる懐疑のうちこ 涙さへしらず流るゝ」——言及なし。

【私見】「はろかなる懐疑のうちこ 涙さへしらず流るゝ」——【次の寮歌に影響を与えた。】

▼「はろかなる追憶につれて 涙さへ知らず溢れぬ」

《247 『空洞なる木霊追ひつゝ』昭9》

【一高寮歌における「はろかなる」と同類の表現の例】

▼「魂の夕星はろかなり」《185 『春甦る』大9》

▼「杳かなる日のうれしさに」《208 『杳かなる日の』大14》

▼「杳かなる夜を流れけり」(218 『若き愁に』昭2)

▼「はろかなる懐疑のうちこ」(223 『しづまなる』昭4)

三「時は逝く淡く陰影して

かすれゆく草笛の音に

美しき想ひを載せし

空虚なる日ぞなつかしや

▼「はづかなる追憶につれて」(247)『空洞なる』昭9)

【解説】「時は逝く淡く陰影して」——言及なし。

【私見】「時は逝く淡く陰影して」——北原白秋の詩『時は逝く』を踏まえる。

▼「時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく、  
穀倉の夕日のほめき、黒猫の美しき耳鳴のごとく、

時は逝く。何時しらず、柔かに陰影してぞゆへ。

時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。」「思ひ出』より)

『時は逝く』は、不可視の対象を可視的な物象によって表現した典型的な作品である。時間の経過を「波間をゆく蒸気船の船腹の赤さ」あるいは「黒猫の耳鳴り」にたとえている。視覚と聴覚による印象的で繊細な比喩的表現は、さすがに白秋独自のものである。(

【解説】「かすれゆく草笛の音に……空虚なる日ぞなつかしや」——《言及なし》。

【私見】「かすれゆく草笛の音に……空虚なる日ぞなつかしや」——「時間のゆるやかな経過」を「かすれゆく草笛の音」にたとえている。かなり難解ではあるが、その「草笛の音」とは、かつて自分たちが美しき青春の思いをこめて歌った(「美しき想ひを載せし」)寮歌のメロディーのことであり、悩みが何もなかったその頃(「空虚なる日」)がなつかしいと歌っていると解

する。

【一高寮歌における「時は逝く」の同類の表現の例】

▼「時の流れもゆるやかに」(182 『時の流れも』大8)

▼「嘆けど時の老いゆくを」(191 『彌生ヶ丘』大10)

▼「とどめもあへず流れ行く時のさだめを」

(217 『散り行く花の』昭2)

▼「あゝ時こそは移り行け」(218 『若き愁ひに』昭2)

▼「時代移る覺めよ皆人」(224 『八重夕路』昭4)

▼「時は流れつ惜しきかな」(250 『天海原の』大10)

【一高寮歌における「空虚なる」と同類の表現の例】

▼「空虚なる誇りは追はじ」(202 『曉星の』大13)

▼「空虚なる名の雅男よ」(213 『烟り争ふ』大15)

▼「空虚なる目ぞなつかしや」(223 『しまなま』昭4)

▼「空虚に酔はん時もがな」(230 『浪洋の胸の』昭5)

▼「嗚呼空虚なる充實よ」(240 『百波騒ぎ』昭7 東大)

▼「うつろなる心抱きて」(246 『梓弓』昭9)

▼「空洞なる木靈追ひつゝ」(247 『空洞なる』昭9)

四「酒杯に唇はふるとも」

ふたつなき夢のかへらず

高樓の淡き燈かげに

いざなはる哀歡の歌

【解説】「ふたつなき夢」——漢語の「無二」を和風にした表現。「二度と見

ることのない夢」の意。

【私見】「ふたつなき夢」——「たぐいがない夢」、「かけがえのない夢」の意。

ここでは、「二度と戻らない青春時代(一高時代)の夢」をさしていると考えられる。

▼「げに白き椅子の感触はふたつなき夢のさかひに、

官能の甘き頸を捲きしむる悲愁の腕に似たり。」(北原白秋『露臺』)

五 「若ければ野心のぞみのまゝに誇らかに光榮はえに聳ゆる

この丘のぼりにのぼりて三年  
現實まじなる世ををば知りたり」

【解説】「若ければ野心のぞみのまゝに……この丘のぼりにのぼりて」——言及なし。

【私見】「若ければ野心のぞみのまゝに……この丘のぼりにのぼりて」——大正10年の寮歌『のどかに春の訪れて』の第三節を踏まえた表現であろう。

▼「若きがゆるにあこがれの 丘のぼりにのぼりしこのほこり」《のどかに春の》  
【解説】「現實まじなる世」——言及なし。

【私見】「現實まじなる世」——「現實」は「まこと」とフリガナがついているが、あくまで「現實まじ」であって「眞實まこと」とは異なる。「眞實」の対義語は「虚偽」であるのに対し、「現實」の対義語は「理想」「夢」である。ここでは、「野心のぞみ」  
　　|| 夢 || 理想 || に対して、「現實」の世の厳しさを体験したことを指す。

《この項について、朽津耕三先輩（二高昭23理甲）のご示唆を得た。》

六 「明日よりは荊あかつきふ旅路

涯あかつきしなき行方正しく

見きはむる力たくはへ  
黎明あかつきを静かに待たん」

【解説】「正しく見きはむる力たくはへ黎明あかつきを静かに待たん」——《言及なし。》

【私見】「正しく見きはむる力たくはへ黎明あかつきを静かに待たん」——朽津耕三氏（二高23理甲）はこれを「飛躍する前の屈身」と位置づけ、世事に疎い未成年が仇浪騒ぐ濁り世に無謀に飛び出すのを避け、「静かな丘の僧院での欣求・精進」や「運動部に代表される青春の躍動」を謙虚にひたむきに求めたのは、必然かつ最適の判断であったろう、とされる。

《鈴木皇氏（二高昭19理甲）に対する朽津氏のコメントより》

朽津氏の見解は説得力に富んでおり、私見としても賛同したい。

ちなみに、第一節でみたように、作詞者は「禅」に強い関心を寄せていたと思われるので、その視点からも考えてみよう。道元は死ぬ前の最後の説法として「八大人覺」を説いたが、その六番目に「修禪定」がある。前出の境野勝悟氏によれば、「禪定」とは「宇宙の生命の目で、世間の混乱の状況を静観（静かに観る）・静慮（静かに思う）すること」であり、それを行えというのが「修禪定」であるという（《同氏前掲書 p. 215》）。また禅宗には「諦観」という言葉があつて、「宇宙の摂理を理解しものごとを正しく見極める力」を意味し、「静観」とともに重要な境地とされる（深谷晋氏）。以上から「正しく見きはむる力たくはへ黎明を静かに待たん」とは、こうした禅の境地にも裏づけられた表現であると解する。

七「今宵みな花にまどおし

若き幸かたみに享けつ

あゝ友よ心ゆくまで

歌へかしふるさとの曲」

【解説】「若き幸かたみに享けつ」——言及なし。

【私見】「若き幸かたみに享けつ」——自分たち一高生は、お互いに、若きがゆえの幸福を享受することができた、の意。折口信夫作詞の次の校歌（折口信夫全集第31巻所収）の一節は、この寮歌を下敷きにしたものか。

▼「晝なり。鐘ぞ鳴りひびく。

知識は胸をかざやかし 技藝あかるく身に照れり。

224 第三十九回記念寮歌『八重汐路』(昭4／鎌田道一 作詞、櫻井良雄 作曲)

あゝ學問と歡樂と ひとつに享くる若き幸  
ひかりあり。かぐはしき吾が生活の充足る日や。」

《石川県立大聖寺高校校歌第二節、昭26・2 折口信夫作詞》

225 第三十九回記念寮歌贈歌『彼は誰の』(昭4 東大／安永不二男 作詞、今井博人 作曲)

五 「ひたぶるに自由なる王国を  
驅けんとて友よ集へり」

【解説】「ひたぶるに自由なる王国」——当時のまじめなで純真な学生の一部は、当時のソヴィエット・ロシアを真から「ひたぶるに自由なる王国」と信じて疑わなかったたのであろう。

【私見】「ひたぶるに自由なる王国」——「自由」を「まゝ」と訓ずる例は、古く上田敏の訳詩集『海潮音』に見られる。

▼「こころ自由なる人間は、とはに賞づらむ大海を」  
おほうみ

《『海潮音』「人と海」シャルル・ボドレエル》

一 高寮歌では、伝統の「自治」を歌ったものが圧倒的に多いが、「自由」を歌った寮歌も、明治五曲、大正五曲、昭和八曲、計十八曲を数える。  
ここで、昭和期に「自由」を歌った寮歌八曲を列挙してみよう。

▼「ひたぶるに自由なる王国を」《225 『彼は誰の』昭4 東大》

226 第三十九回記念祭寄贈歌『丘邊の春に』（昭4東大／郡 祐一 作詞、櫻井良雄 作曲）

227 第三十九回記念祭寄贈歌『嗚呼繚亂の』（昭4京大／田村善之助 作詞、古賀寛定 作曲）

三「青春終に回へらねば  
吾亦人の道行かん」

【解説】《人生の旅路に伴う艱難と苦悩と旅愁などを詠んでいるところさえ、当時の時代と社会の反映だとしている。》

- ▼「若き血に自由あり」《234 『朝あくる』昭6》
  - ▼「社會の自由を炤さむ」《238 『舊き星傳統の丘に』昭7》
  - ▼「天翔け渡る自由に生き」《242 『古りし榮ある』昭8》
  - ▼「光の子等自由の子等」(3回)《244 『見よやく』昭8東大》
  - ▼「自由の扉開きてあり」(2回)《245 『手折りてし』昭8東大》
  - ▼「自由にして胸うちひらき」《246 『梓弓』昭9》
  - ▼「自由こそ若き誇りに」《258 『彌生の丘四十五年』昭10 金沢医大》
- 「自由」を「まゝ」と訓ませたのは、一高寮歌では『彼は誰の』が最初だが、その影響を受けたのか、「まゝ」と訓ませるのが他に四曲、「じゆう」と訓ませるのが二曲で、いずれも昭和4年から10年の間に集中しており、駒場移転後の昭和11年以降では、自由を歌った一高寮歌は、戦後も含めて皆無である。



四「旅路はるかに見渡せば

曠野は遠く路荒れて

茨は深く生ひにけり

遊子木陰に駒留めて

單騎旅愁を包みかね

行方の路に迷ふ哉」

【私見】解説のような見方が普通であろうが、作詞者が大学生であることを考

えると、もう少し具体的な解釈が可能ではないか。「青春終に回らねば／吾亦人の道行かん」は、「いつまでも青春してゐるわけにはいかないから、そろそろ自分も現実に戻つて人並みに就職をめざそう」の意にもとれるし、

「曠野は遠く路荒れて／茨は深く生ひにけり」や「行方の路に迷ふ哉」は、当時経済不況のただ中であつて、大学生といえども求人が非常に少く、就職難という厳しい現実に向面していることを表現しているのと見るのは、深読みに過ぎるであろうか。ちなみに、『大学は出たけれど』という映画が製作され流行語にもなつたのは、まさにこの年の四月のことであつた。

【解説】「遊子木陰に駒留めて／行方の路に迷ふ哉」——「遊子」は旅人。旅人が旅愁に沈み、行く先にも迷つて、ふと木陰に一休みするのであるが、一高生のつきつめた思いをそうした旅路をもつてます表現している。

【私見】「遊子木陰に駒留めて／行方の路に迷ふ哉」——落合直文の『櫻井の訣別』(明32)に、「木の下蔭に駒とめて／世の行く末をつくづく」とある。

228 第三十九回記念祭祭寄贈歌

『小萩露けき』(昭4東北大／市川保雄 作詞、長内 端 作曲)

一「小萩露けき宮城野に

【解説】「小萩露けき宮城野に」——《言及なし》

一際高く聳えつゝ  
紅く輝く檜櫓に  
茂る柏も青葉山

一「春東海の櫻花  
咲くや都の丘の上  
ほのかに霞む月影に  
辿る回顧の夢の數  
嗚呼武香陵四十年  
唯先人の榮光の跡はえ」

【私見】「小萩露けき宮城野に」——宮城野は秋の名所として歌枕になる。

▼「宮城野のもとあらの小萩露を重み 風を待つごと君をこそ待て」

《古今六帖・藤原伊織》

【解説】本寮歌には、一高自治寮の明るい肯定的要素、特質の数々が、……

何の躊躇も懷疑もなしに歌い上げられており、……不安と暗さに濃く色どられていた世相や、そのような状況下における若い良心的知識人たちの内面的苦悩の影などは全く見ることができない。本寮歌はその表現内容の肯定的明るさと、その内容にふさわしいリズムとメロディーを編み出した作曲者、長内端の手腕とが相俟って 寮生の人気を獲得し、代々唱い継がれる愛唱歌たりえた。

【私見】「春東海の櫻花」——「東海」は日本国の異称。

▼「春静かなる東海の」《晚翠・晝鐘》『万里長城の歌』

「武香陵」——「向ヶ岡（ムコーガオカ）」に好字を当てて「武（ム）香（コ）ケ陵（オカ）」、これを音読して「武香陵（ムコーリョウ又はブコーリョウ）」という美称が生まれたと解する。【明33 『あを大空を』の項で既出】

二「知れり歡樂いたづらに

春や舞殿の瓔珞も

夢魂一朝覺めぬれば

あはれ焦土の夕けむり

四海に誇る長城も

いつか廢墟とならざらん

【解説】「瓔珞」——珠玉を繋いで作った頸飾。仏像に懸ける装身具としても

用いられる。「珠瓔珞の曙の露」(明43『青鸞精を啄みし』)の例がある。

「長城」——萬里の長城。

【私見】「知れり歡樂いたづらに」——関東大震災や世界大恐慌などを経験して、榮華や歡樂が人生にとつていかにむなししかを思い知らされた。

「春や舞殿の」——晚翠と一高寮歌に類似表現あり。

▼「管弦の音雲に入る 舞殿の春の夕まぐれ」《晚翠・晝鐘》『萬里長城の歌』

▼「舞殿の春の夢深く 花の榮華に世はなれて」《87『紅雲映ゆる』明42》

「瓔珞」——一高寮歌及び北大予科寮歌に先行例あり。

▼「黄鸝魂を懷きてし 珠瓔珞の曙の露」《93『青鸞精を』明43》

▼「花瓔珞の森深く 鐘永劫の音を刻む」《121『あゝ炳日の』大2》

▼「瓔珞みがく石狩の 源遠く訪ひくれば」《北大予・大9『櫻星会歌』

「夢魂一朝覺めぬれば あはれ焦土の夕けむり」——榮華のはかなさ、むなしさを夢にたとえて表現した詩句である。「夢魂」は夢の中の魂。

▼「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ」《晚翠・晝鐘》『萬里長城の歌』

▼「南柯のねむり深くして あゝ世は花に驕れるを」《75『蒼茫遠く』明41》

【南柯之夢】人間の榮華のはかなさのたとえ。「南柯一夢」、「槐安夢」

三「世は混濁の淵に落ち  
人は虚榮にさまよひて  
無情の風のすさぶ時  
見よ東天の光さす

ともいう。唐の淳干禁じゅんかんが酔って槐えんじゆの木の所で眠り、夢の中で槐安国に行き、南柯郡の長官となつて榮華をきわめたが、夢から覚めてみると、それは蟻の国に過ぎなかつたという故事『異聞集』等から。

▼「南柯紫紺の假枕 林梢そよとゆらく時」≧97 『春の臺の』明43≧

▼「南柯の睡ねむり深くして 歌舞燕樂の只中に」≧144 『橄欖の森』大4≧

▼「たゞに黄梁一炊の 夢の榮華を求めんや」≧169 『悲風慘悴日は曠くわくく』大7≧

【黄梁一炊夢】人生の榮華のはかなさのたとえ。「邯鄲之夢」「盧生之夢」などともいう。唐の玄宗皇帝の世のこと、盧生という若者が邯鄲の茶店で枕を借りてひと眠りすると、榮華を極めた一生のことを夢に見たが、目がさめて見ると、茶店の主人が炊いていた黄梁の飯はまだ炊きあがつていなかつたという故事『枕中記』から。

▼「野よ、杜よ、柏葉の兒よ 槐安の夢より醒めよ」≧262 『若駒の』昭11≧

▼「夢魂驚き窓推せば 三層樓は今何處」≧184 『東皇回る』大8≧

【解説】「世は混濁の淵に落ち……無情の風のすさぶ時」——『言及なし』≧

「亞細亞の海の八洲」——日本国を指す。「八洲」は「やしま」にもとづく語で、原意は多くの島。「稜威」——尊嚴な威光。天子・天皇の威光。

【私見】「世は混濁の淵に落ち 人は虚榮にさまよひて」——晚翠の次の詩を

亞細亞の海の八洲に  
稜威あまねき君子國

四「護國の譽輝きて……………」

男の子の意氣は天を衝く

五「あした草野の武藏野に

白雲遠く棚引けば

ゆふへ富嶽の靈峰に

久遠の星斗きらめけば

高き理想の憧憬に

無限の空を仰ぐ哉

六「今宵紀念の歌筵

月はおぼろに花ぞ散る

岡の三とせの春蘭けて

参照。

▼「世は黄金の力満ち、人は虚榮の夢深く」《晚翠・曙光》『弔芳魂』

▼「無情の風のすさぶ時」——晚翠の詩に類似の表現がある。

▼「無常の風はあらかりき」《晚翠・曉鐘》『萬里長城の歌』

▼「無限のあらし吹過ぎて」《晚翠・天地有情》『星落秋風五丈原』

（第四節の【解説】【私見】は割愛した。）

【解説】《第五節について言及なし。》

【私見】「あした草野の武藏野に…………ゆふへ富嶽の靈峰に…………」——武藏野と

富士山を歌枕として対句に用いた例は、5年後の東大寄贈歌にも見られる。

▼「武藏野は西に開け 不二ヶ根に光さやけし」《57『櫻萌ゆる』昭10 東大

「無限の空を仰ぐ哉」——晚翠の次の詩を踏まえたものか。

▼「仰げば理想の空高く」無限は照りぬほるるみぬ」《晚翠・曉鐘》『無限』

【解説】「蘭燈」——美しい燈火。典故としては、『唐詩選』中の駱賓王「帝

京篇」の一節「秋夜蘭燈燈九微」の可能性が強い。

【私見】「今宵紀念の歌筵」——紀念祭の宴をさす。「宵の陣」も同じ。

蘭燈あはし宵の陣  
いざ青春の感激を  
紅の血に描きてん

「蘭燈」—— 記念祭の夕にともされる自治燈のことと伝えられる。解説では典拠を中国の古典に求めているが、外来語のランタン (lantern) (＝小型の角灯) をイメージした可能性も指摘しておきたい。  
「いざ青春の感激を 紅の血に描きてん」—— 青春の意気を「紅の血」に喩えた。戦時歌謡に「あゝ紅の血は燃ゆる」(昭19、野村俊夫作詞)がある。

230 第四十回記念祭寮歌『溟洋る胸の』(昭5／金子養之助作詞、長内 端作曲)

231 第四十回記念祭寮歌『群雲を紅染めて』(昭5／鎌田道一作詞、水野重幸作曲)

「群雲を紅染めて」  
天つ日は輝き落ちぬ  
水や空界も知らず  
ひと色に暮るゝ蒼海  
沈み行けさらば日の影  
今ははたかへり見すまじ  
新しき燈火掲げん  
わが船の舳に高く

【解説】「天つ日は輝き落ちぬ」—— 解説では「天つ日」についての直接の言及はないが、当時の時代背景(作者の前年の作である『八重汐路きり晴れゆきて』の解説にあるように、昭和3年3月の社会主義者一斉検挙を始めとする反体制運動への弾圧などの時勢)を踏まえつつ、「既に下降線を辿って輝きを失いつつあるものへの未練は捨てて、新時代の目指すべき新しい理念に向けて邁進すべき使命をわれわれは背負っている」との趣旨だと解している。

【私見】「天つ日は輝き落ちぬ」—— 【解説】の内容について特に異論はない。

いが、「天つ日」という表現は、「当時の一高生が抱いていた『真理の自由な探求』という高い理想」を意味し、それが打ち砕かれたことによる思想の混乱への嘆き・怒りのニュアンスが色濃く反映していると考えられる。そうした心象風景は、その後に登場する二つの寮歌にも共通しており、さらに明確に表現されている。

▼249 『緑なす』（昭9東大／杉浦明平）

一 「緑なす草野の上に かぐやきし日はしづみゆき

光なき夜は來たりぬと なげく時代我は生まれて」

▼268 『遐けくも』（昭12／淺原英夫・遠藤湘吉）

一 「燃え熾る忿怒抱きて 壮大なる日の没つ見れば

我が胸は叫びと化しぬ 行くべきの處よいつこ」

【解説】「水や空界も知らず」——《言及なし》

【私見】「水や空界も知らず」——『新後拾遺集』に次の歌が見える。

▼「水や空そらや水とも見えわかず かよひて澄める秋の夜の月」

232 第四十回記念祭寄贈歌『鯨波切りて』（昭5東大／橋爪克巳 作詞、弘田龍太郎 作曲）

233 第四十一回記念祭寮歌『彩雲は』（昭6／平木恵治 作詞、長内 端 作曲）

【概説】作詞者平木恵治は、師範学校を出て教員生活を経験してから一高に入学、一般より十歳前後年長であつた上に、短歌をよくし、野球部のマネージャーを務め、寮委員長も一期務めて、一高の名物男となつた人で、ユーモアを解する人柄が皆に愛されて通称オンケルと呼ばれた。この寮歌には作者の詩才が十二分に發揮されている。長内端の曲も歌詞によくマッチし、特に一番、二番、四番、六番あたりが愛唱された。『一高寮歌解説書』による。

(注)「オンケル」はドイツ語の Onkel (英語の uncle) で、「おじちゃん」の意。

オンケル自身の談話によると、二十六歳で一高に入学し、初めて教室に出たら、黒板に「オンケル」と書いてあつた。二年生の三学期(寮委員長退任直後)に寮歌に応募したが、この時は残念ながら落選し、大森羊太の『春東海の』が一等になつた。翌年再び『彩雲は』で応募し、一等当選になつたもので、一番から六番まで五七調で、いわゆる万葉集の反歌(短歌)の影響を受けている。駒場移転後も数年間は寮生に歌い継がれ、特に野球部や寮委員間では、「オンケル節」と称せられていたほどである。《平木恵治『嘯くも青春の賦』『向陵』1968・7)、および、平木恵治『歌われざる寮歌及び奇贈歌考』『向陵』1979・4)による》

一「彩雲は岡邊に凝りて

花吹雪く新草の上

春此所に猶豫ふ夕

憧れ來し誇の群は

降り立ちて巷に高く

【解説】第一節の「誇の群」の「青春の賦」と第二節の「荒涼」「幻滅」「哀愁」とのコントラストに特色がある。また古典語を豊富に取り入れ、五七調で上代歌謡の体を襲っている。全体としては、三年間の回顧を踏まえ、悟道を志向する気概がよく表現されている。

「春此所に猶豫ふ夕」——「いざよふ」は進もうとして進まない、ため



らう、の意。古くは「いさよふ」。

「憧れ來し誇の群は」——「こがれ」は「あこがれ」の意で用いているが、「こがれ」の古例は「思い焦がれる」「強く恋い慕う」の意で、「理想とする」意の「あこがれ」とは少し意味がずれている。

【私見】「彩雲は岡邊に凝りて」——「彩雲」は美しく彩られた雲。天使や弥陀の來迎などの瑞祥とされることも多い。ここでは、一高が新入生を迎えたことを祝う様を表現したものであろう。

「春此所に猶豫をふた」——いつもなら、行く春を惜しんで留めてもとどまってくれないはずの春であるが、この向陵の夕では、あまりの楽しさに、春も立ち去りかねている。

▼「うつゝ心の興樂に 春とどむるも駐まらじ」《102『月は臙に』明44》  
 「憧れ來し誇の群は」——憧れの一高に入学して鼻高々の新入生たちの群は、の意。次の歌に見るように、作詞者自身の率直な気持ちを表現したものである。

▼「ひた思ひに思ひかたまけてあこがれし 一高生とわれはなりたり」  
 (注) かたまけて＝傾けて。

《平木恵治・歌集『残燦』(自昭和3年至昭和6年)》

二「幸のみに暮れし一年

今此所に秋さり來れば

素枯れ葉は音立てゆきて

萬象は荒涼に化しぬ

幻滅は現に見えて

哀愁に醒めし吾魂

「降り立ちて巷に高く、嘯くも青春の賦」——寮生が向ヶ丘から巷に降り立って、覺えたばかりの「青春の賦」すなわち寮歌を高吟して歩くさまを指すと解する。「降り立ちて」を「一高を卒業して」の意に解する説もあるが、賛同しがたい。

【解説】「秋さり來れば」——「秋がやってくると」の意。

「素枯れ葉は音立てゆきて」——「素枯れ葉」は「すがれば」と読むか。

「未枯れ葉」の意かと思われるが、古例は見えない。

「幻滅は現に見えて 哀愁に醒めし吾魂」——春から夏を経て秋に至り、草木の枯れてゆくわびしさをいう。「わびしら」は、古くは心が痛み悲しむさまで、「哀愁」のような柔らかい感じではなかったらしいが、ここでは自然の季節感を中心に、自己の感情をも重ねている。

【私見】「幸のみに暮れし一年 今此所に秋さり來れば」——一高入学後の一年間は、幸せな日々ばかりであったが、二年生半ばの秋を迎えた頃には、一高生活における理想と現実との乖離に気づき、わびしさを覚えるようになった。

「素枯れ葉は音立てゆきて」——「素枯れ葉」は、動詞「すがる」（尽る、未枯る＝草木・花が盛りを過ぎて、しおれ枯れる）（自ラ四、又は自

三「こし方を顧みすれば

夢なりし森の三年や  
振仰けて見放くる彼方  
登けくも嶮阻旅路や  
人もがな吾眼拭めて  
眞理なる秘義指さん

ラ下二) から来た言葉であろう。「素」は「みすぼらしい、とるにたりない」の意の接頭語として用いられる語(例：素浪人、素寒貧)であるから「素」＋「枯れ葉」とみることも可能である。

▼「秋ふけて素枯れし枝の影うつる 土ふみ行くはさびしかりけれ」(天12)

《井上司朗(天13文乙)、向陵誌第一巻(昭12刊『短歌会』の項所載)》

「万象は荒涼に化しぬ」——自分が見たり感じたりするものはすべて、  
荒れ果ててものさびしい情景(心象風景)ばかりである。

「幻滅は現に見えて 哀愁に醒めし吾魂」——自分が美化・理想視  
していたことが幻想であるという現実に気づき、がっかりしたこと。「わ  
びしら」は、つらく悲しいさま、心細くさびしそうなさまをいうが、ここ  
では、「一高生活における幻滅の悲哀」を含意していると解する。

【解説】第三節では、三年間にわたる人生の眞理、眞実探求の道の嶮しさを  
指摘しながら、次の第四節では、それをやや和らげた形で敷衍している。

「振仰けて見放くる彼方」——振り返って遠くまで見通す彼方。

「登けくも嶮阻旅路や」——「こし」は嶮しいの意。

「人もがな吾眼拭めて 眞理なる秘義指さん」——「人もがな」は「眞  
理なる秘義を指すような」人が居てほしいものだ」の意。「ひごと」は古例

四

【ひたむきに偏らんは淋し  
幽玄なる自然に融けて  
月雪や花も詠はん  
人生のなべてを孕み  
智識もめで宗教も容きて  
圓滿なる悟道に行かん】

未見。「ひめごと」の意に用いたか。「人」は聞き手を指すとも解釈できる。

【私見】第一節ではフレッシュな新人生のよろこび、第二節では現実を直視する二年生の視点、第三節では向陵の三年間の回顧を表現している。

「振仰けて見放くる彼方」——振り仰いで遠くを眺めること。「振り返って」と解説にあるのは、「こし方をかへりみすれば」の内容である。

「寔けくも嶮阻旅路や」——辞典で「寔」には、「あしおと」という訓しか見当たらないが、熟語の「寔然」は「足音が遠くからさえてひびくさま」

『漢字源』とあり、ここから「はろけくも」と訓ませたものか。

「人もがな吾眼拭めて 眞理なる祕義指さん」——「祕義」とは極秘の奥義（奥深く秘めて容易に示すことのない教え）のこと。一高の三年間に求めても得られなかった眞理の奥義を示してくれる人がほしいものだ。

【解説】第四節では、幽玄、風流、風雅の世界に生きつつ、全人生を包括する、老荘などを含めた東洋的な悟達の道に入ることを賞揚（徳憑？）している。「ひたむきに偏らんは淋し」——「こる」は凝縮の意。心理的に偏執するの意は後世の用法らしい。

「幽玄なる自然に融けて」——「かそか」なる語の古例は見ない。「かそけし」から類推した語か。

五「されば友歌ひ壽げ

四十一の自治の祭を

黙示なる時計臺なけれど  
現實には光榮は古れども

【私見】「ひたむきに偏らんは淋し」——通常、「偏」に「こる」という訓は

与えられていないが、ここでは「偏」の字を宛てることによつて、偏つて  
いることを推測させている。せつかく入学できた一高での生活で、限られ  
た分野にしか興味を持たないことを戒めている。なお井下登喜男氏（一高  
昭26文丙）によれば「ひたむき」は「ひとむき」が正しいという。

「幽玄なる自然に融けて」——「幽玄」は中世の文学・芸能の美的理念  
の一つで、世俗を離れた神秘的な奥深さを感じさせるような静寂な美しさ  
をいうとされる。「幽か」「幽けし」「霞む」は同じ語根であり、いずれも  
漠然とした様態を表わすのに用いられる。

「月雪や花も詠はん」——「雪月花」は日本の美しい風物を代表する。  
「人生のなべてを孕み」——人生のすべてを含めて。

「智識もめで宗教も容きて 圓滿なる悟道に行かん」——「悟道」は仏  
教語で、仏道の真理を悟ること、悟りを開いて道理を会得することをいう。

【解説】「黙示なる時計臺なけれど」——「時計臺」は関東大震災（大正12年）  
以後、駒場移転まで、存在しなかった。

「新しき力に激て」——「たぎる」は四段活用であるから、命令形なら  
ば「たぎて」でよいが、連用形なら「たぎち」とあるべきところ。

新しき力に激たぎて  
翼つば音おと高く  
巢たね立つなり

【私見】「黙示なる時計臺なけれど」——本郷一高のシンボルであった本館時

計臺は、大正12年9月の関東大震災で傾いたため、同年10月9日に爆  
破された。

「現實には光榮は古れども 新しき力に激たぎて」——一高の光榮の歴史  
は長く続いているけれども、旧習にとらわれることなく、現実を踏まえた  
新しい力を湧うきたたせることが必要だと主張している。

▼「若ければ野心のぞみのまゝに 誇ほらかに光榮はえに聳たゆる

この丘かみにのぼりて三年 現實まじしなる世をば知りたり」《23》『こまなる』昭4

▼「逝いきし月日しづかをかへりみて さかえの跡あとを讃た頌たへつもの

ふるき繫い縛まるときはなち 魁けい呼よばんあらた代の」《124》『夢ゆたかなる』大2

なお、「激たぎて」は「激たぎちて」または「激たぎりて」の縮約形であらう。

「巢たね立つなり翼つば音おと高く」——一高で成長した鵬たかが大きくはばたいて巢  
立たつてゆく。オンケルはこの年（昭和6年）の卒業である。なお、「翼つば音おと」  
の如く「翼つば」を「つば」と訓ずるのはオンケルの癖である（次の二例も同  
氏の作詞）。

▼「わが愛深あき白銀しろぎんの 翼つば根ねに盡つきす湧うき出いづる」《240》『白波驪』昭7 東2

▼「大鵬たいほう大地たいちを搏つかちて起たて 双翼つば強つよく伸のびけるを」《324》『野球部新部歌』

六 「君と見し輪廻の月の

おきて  
旋とは覚悟すれども

しかすがに別れもあへず

友情に瞳曇るを

何時か會ん若さに居りて

おゝ友よ永遠を誓はん」

【解説】「君と見し輪廻の月の」——「輪廻」は仏教用語で、衆生が六道の生

死に車輪が回るように限りなく旋転するの意であるが、ここでは單純に月

日が巡るの意に用いている。「輪廻の月」は、月がめぐるの意と重ねて、

三年間の月の移りをいう。

「しかすがに別れもあへず」——「しかすがに」は上代語で、そうある

ところで」が原意で、「そうではあるものの」の意。

【私見】「輪廻の月」——一高寮歌での用例を挙げてみる。

▼「丘にたゝずみこの夕べ 輪廻の月を仰ぎては」(大9 『一夜の雨を』)

▼「永劫の生命の韻律して 輪廻の春に萌え出でし」(昭2 『若き愁ひに』)

「しかすがに別れもあへず」——「しかすがに」は「そうはいうものの」、

「あへず」は、「耐えられない」の意。別れる時が来るのがきまりだと覚悟

はしていたが、そうはいつても、いざ別れるとなると耐えられない。

「何時か會ん若さに居りて おゝ友よ永遠を誓はん」——お互いに(精

神的にも肉体的にも)若さを保ち続けて、いつかまた必ず会おう。ああ友

よ、永遠の友情を誓おうではないか。

この寮歌は、故園部達郎先輩(昭7 文甲)が最も愛好された寮歌の一

つであった。第四節と最終節を特に愛唱されたが、とりわけ最終句の「何

234 第四十一回 紀念祭寮歌『朝あくる』(昭6/宮本 泰 作詞、長内 端 作曲)

時か會あひん若さに居りて おく友よ永遠を誓はん」がお氣に入りで、同先輩の『寮歌こぼればなし』には、「寮友の墓詣の際には、名刺に『永遠を誓はん』と記して名刺受に入れることにしている」とある。

【解説】《言及なし。》

【私見】本寮歌における詩句の表現には、主として五味智英氏の寮歌219『さ霧這ふ』(昭3)の影響が顕著に見られるほか、矢崎秀雄氏の寮歌220『あこがれの唄』(昭3)を踏まえた箇所もある。

【朽津耕三氏(昭23理甲)の示唆による。】

以下の各節の数字は、三部構成の第二部の中の番号である【

二「月ゆゆる八寮の覺

眞理する夜星よじゆの散らひ

書かみ抱き夜を仰あやげば

若き血ちに想おもあり

三「心こゝろ琴かみ深くゆるく虫の音

↓「月ゆゆるる丘の庭の面」『さ霧這ふ』(一)

↓「書かみいだき遠く望めば」『さ霧這ふ』(一)

↓「露つゆしげく、揺るく虫の音」『さ霧這ふ』(一)



- 霧ふ灯の明きたゆたひ  
望郷の思もほのかに  
若き兒に寂あり」
- 五 「ひびくなる鐘の端厳しき  
塵深き伏屋にあれど……」

- ↓ 「夕暗のたゆたふほとり」(『霧這ふ』一)  
↓ 「故郷のおもひまどかに」(『霧這ふ』二)  
↓ 「あかつきの鐘つきならし／次なる時代の豫言する」  
端厳しき姿我は見き」(『あこがれの唄』三)

以下の各節の数字は、三部構成の第二部の中の番号であり、第二節は再掲】

- 一 「丘——櫻亂れ咲き  
胸高き若草の風  
生命する春のときめき  
若き兒に詩あり」
- 二 「月冴八寮の聲  
眞理する夜星に散らひ  
書抱き夜を仰げば  
若き血に想あり」

【解説】「生命する」「眞理する」——《言及なし。》

【私見】「生命する」「眞理する」—— 国語辞典に載っている動詞の67・9%が「××する」型の複合動詞であり、そのうち八〇%が「漢語+する」型(漢語サ変動詞)だとされる。

《松井利彦『漢語「サ変動詞」の表現』(明治書院『国文法講座』第六卷) 通常は、動作名詞(恋愛、結婚、食事、教育、就職など)に「する」をつけてサ変動詞を作るのであり、動作名詞でない場合(商品、書類、財産、社会、世界など)には「する」はつかない。ところが一九八〇年代前半くらいから、「青春する」「主婦する」「お茶する」「松田聖子する」などの変則的な言い方が大流行した。

六 「浄まほる潮の匂」

とろろなる力を秘めて  
寂寞の滄溟禮拜む  
若き血に自由あり」

本寮歌に登場する「生命する」「眞理する」も、「生命」や「眞理」が動  
作名詞でないのに「する」をつけた変則的な表現であり、「青春する」な  
どと同じ発想による先行例といえよう。作家の井上ひさし氏は、「××す  
る型」動詞の流行は近年だけでなく過去に何度もあったとして、詩人の佐  
藤春夫氏が一九四一年に「文学する」という言葉は大嫌いだから使はぬ」  
と述べた例をあげ、『日本人の生活史が大きく動くとき言葉もまた動き、  
同時にその中核をなす「××する」型動詞に新種が現われる』としている。

『井上ひさしの日本語相談』(井上ひさし／朝日新聞社)による

【解説】「浄まほる潮の匂」——「浄まほる」は古例を見ない語。誤植か。

「浄まほる」ならば潔斎する、又は清くなるの意。

「寂寞の滄溟禮拜む」——「寂寞」は淋しくひっそりとしているさま。

ま。何故に海を礼拝するのか、意味不明。

【私見】第六節は、上田敏の『海潮音』中の次の訳詩を踏まえている。

▼「兒等よ、今晝は眞盛、日ごとともに照らしぬ。

寂寞大海の禮拜して、天津日に捧ぐる香は、

浄まほる潮のにはひ、轟く波疑……」(『ガブリエレ・ダンヌンチオ』海光)

七「音もなく櫻散りしかひ

夜をこめて丘のどよめき

盡くるなし篝のあかり

若き兒に勝利あり」

【解説】「音もなく櫻散りしかひ」——「しかひ」は「敷かひ」か。表現は古語的だが、古例は見えない。

【私見】「音もなく櫻散りしかひ」——『「散り敷く」＋「ふ」（反復・継続を表わす助動詞）の連用形』で「散り敷かひ」であろう。古例は見えない

ものの、ここでは、「桜の花が散り敷く状態が反復継続しているさま」を表現したものであろう。この寮歌では、他にも「夜星の散らひ」「霧ふ灯」のように反復・継続を示す表現が使われている。

235 第四十一回記念祭寮歌『濁りよ深き』（昭6／千葉 孜 作詞、本多 功 作曲）

236 第四十一回記念祭寄贈歌『ふるさとの』（昭6東大／加藤勝三 作詞、長内 端 作曲）

237 第四十二回記念祭寮歌『吹く木枯に』（昭7／吉野 衡 作詞、阿部一男・水野重幸 作曲）

二「あゝ北滿に雲低く

血潮流れて氷なし

あやめもわかぬ闇の野を

劈く聲も厳かに

おゝこの叫び新た世を

【解説】「あゝ北滿に雲低く」——「北滿」は滿洲北部、すなわち現在の中国

東北部の北部。前年の昭和6年9月にいわゆる滿州事変が起こった。昭和7年には滿州国の建国宣言が発表された。

【私見】「あゝ北滿に雲低く」——前年の昭和6年6月、北滿奥地を調査中の中村震太郎大尉ほか三名が中国軍に殺害された、いわゆる中村大尉事件

告ぐる朝の鐘なれや」

四「眞理まことの園は遠くとも

人生いのちの道はこゝろしくも

血もて穢れを清むこそ

柏の森の掟なれ

熱き欣求に掌を合せ

己が力に祈らなむ」

をさすか。滿州事變の直接の発端となった昭和6年9月の柳条湖事件が起きたのは奉天の近くで、北滿ではない。ただ、関東軍はその後わずか5箇月で北滿のハルピンを含む滿洲全土を占領した。

【解説】「血潮流れて氷なし」——《言及なし》

【私見】「血潮流れて氷なし」——「氷なし」は「氷生なし」で、氷になることを意味すると解する。ここでは、「血潮が氷になった」という表現により、死者の流した血であることを印象づけている。

▼「恋せよ 汝の心の猶なほ少く 汝の血の猶熱き間に

白髪は死の花にして その咲くや心の火は消え

血は氷とならんとす」《アンデルセン『即興詩人』(森鷗外訳)》

【解説】「血もて穢れを清むこそ 柏の森の掟なれ」——熱血の意気と情熱をもつて蹴起することこそ、一高生の守るべき倫理である。

【私見】「血もて穢れを清むこそ 柏の森の掟なれ」——「血で罪や穢れを清める」という場合の「血」とは、「熱血の意気」ではなく、「犠牲」(いけにえ)を意味すると解するのが順当であろう(キリスト教の場合の例として、キリストの血、羊の血などがあげられる)。

寮生の寄宿寮規約違反(＝穢れ)に対しては、寮委員会が退寮、譴責、

1—曙

「舊き星傳統の丘に」

燦きの薄ろぎゆきて

百重雲亂るゝ中ゆ

曉闇の嵐を孕み

射し出づる黎明の光は

社會の自由を焔さむ」

禁足などの制裁(＝血)を課し、退寮の処分を受けたものは学校にとどまることを許されないというのが、一高自治寮の伝統であった。「柏の森の掟」とは、このことを指すと解する。鉄拳制裁説は適切でない。

【解説】「舊き星傳統の丘に燦きの薄ろぎゆきて」——「薄ろぎ」は古例なし。「薄らぎ」が正しい。

【私見】「舊き星傳統の丘に燦きの薄ろぎゆきて」——「傳統の丘」は向陵をさす。「舊き星」はその向陵の自治の指導理念であり、その輝きが薄れ

つつあると指摘する。これと対比される「新しき星」に当たるのが、この節の「黎明の光」であり第六節の「曉の明星」であろう。

【解説】「百重雲亂るゝ中ゆ 曉闇の嵐を孕み」——言及なし。

【私見】「百重雲亂るゝ中ゆ 曉闇の嵐を孕み」——前々年の寮歌を踏まえた表現で、一高における社会主義思想取締りの強化をさしたものと見られる。

▼「風おこり雲疾く飛び／落ちかゝる鳥羽玉の闇黒」

「叢雲の正義をおほひ  
虚空に滿つ修羅の焰に  
荒狂ふ東亜の朔風は

虚空に滿つ怪しき沈黙／夜嵐の怒りをはらむ」(281)『群雲を紅染めて』昭5)

【解説】「射し出づる黎明の光は 社會の自由を焰さむ」——『言及なし。』

【私見】「射し出づる黎明の光は 社會の自由を焰さむ」——「黎明の光」と

は、思想の昏迷の中から生まれるであろう向陵の新しい指導理念であり、その光が明るく照らすのは、思想の自由の認められた理想的な社会であるとの期待を示している(「社會の自由を焰さむ」)。「自由」を「まゝ」と讀ませた例は、昭和一ケタ期の一高寮歌の中では、他に4例ある。

▼「ひたふるに自由なる王國を 驅けんとて友よ集へり」(225)『彼は誰の』昭4

▼「寂莫の滄溟禮拜む 若き血に自由あり」(234)『朝あくる』昭6

▼「誇の丘の三つ歳や 天翔け渡る自由に生き」(242)『古りし榮ある』昭8

▼「自由にして胸うちひらき」(246)『梓弓春さり来れば』昭9

(「自由」を「まゝ」と訓ずる例は、古く上田敏の訳詩集『海潮音』に見られる。)

▼「こころ自由なる人間は、とはに賞つらむ大海を」(『人と海』ポドレエル)

【解説】「叢雲の……荒狂ふ東亜の朔風は 鬪争の廢墟を吹けども」——この

節は滿洲事変での戦鬪の様相を示している。

【私見】「叢雲の……荒狂ふ東亜の朔風は 鬪争の廢墟を吹けども」——「叢

鬪争たたかひの廢墟あとを吹けども  
 狼烟のろし映ゆ地平を直指し  
 騎士ますらをぞ曠野ひろのを馳する」

雲の……東亜の朔風かぜ」は前年の満洲事変をさす。「修羅」とは醜い争いや果てしない鬪いをいう。「鬪争」とは、「満洲事変の戦闘」のようにもとれるが、通常は戦闘のことを鬪争とは呼ばないので、むしろここでは、「国内の社会主義鬪争」を意味し、満洲事変で高揚した軍国主義・右翼思想の跋扈の影響が一高における社会思想取り締まりに及んでいることを示唆していると解する。

▼「虚空そらに満つ怪しき沈黙しんま／夜風よかぜの怒りをはらむ」《231『群雲を紅染めて』昭5》

【解説】「狼烟映ゆ地平を直指し 騎士ますらをぞ曠野ひろのを馳する」——《言及なし》《

【私見】「狼烟映ゆ地平を直指し 騎士ますらをぞ曠野ひろのを馳する」——「狼烟」とは、

大きな行動を起こすときのきっかけ・合図を、「地平」とは、ある観点をとったときに視野に入れることのできる範囲をいう。「狼烟」、「地平」、「騎士ますらを」、  
 「馳する」は、何れも次の寮歌を下敷きになっている。

▼「ひたぶるに真理の空を 馳せんとて友よ集へり……」

ひたぶるに自由なる国を 驅けんとて友よ集へり」《225『彼は誰の』昭4》

▼「曉空にかがり映えたり のろし映えたり友よ腕組め」《同 右》

▼「みはるかす地平の果てに生まれ出づあかき星あり」《234『朝あくる』昭6》

「旅立ちて茲に三年」  
 情意をば山に涵養ひ  
 心魂を野にぞ解放ちて  
 巡禮り来し旅路の際涯に  
 見はるかす故郷の空や  
 見よ霽れて虹のあかきを

「月魄の揺蕩ふ夕」  
 橄欖花の崩るゝ樹蔭に  
 友をなみ暫時憩へば

【解説】「心魂を野にぞ解放ちて」——《言及なし。》

【私見】「心魂を野にぞ解放ちて」——「情意をば山に涵養ひ」と対句をなす。

一高生が山野を逍遙することにより、自我の執着心から解き放たれて、「自由な心」を取り戻すこと。「心を解き放つ」とは、禅宗でいう「放下」（一切の執着を捨てて無我の心になること）と同様の境地をさすのであろう。

▼「別に工夫なし。放下すればすなわち是なり。」《夢窓国師『夢中問答』一高寮歌における同類の表現の例を次に示す。

▼「はろかなる地平の風に かぐはしき心を放ち」《281 丘の雲》昭14 東大

▼「生靈放け揚ぐる呼ばはひ」《306 『曙の』昭19・6》

【解説】「見はるかす故郷の空や」——言及なし。

【私見】「見はるかす故郷の空や」——「旅立ちて茲に三年」とあり、作詞者は現に向陵に生活しているので、そこから見はるかす「故郷」とは、向陵ではなく、出身地であるふるさとを指すと解すべきであろう。

【解説】「月魄の揺蕩ふ夕 橄欖花の崩るゝ樹蔭に」——「月魄」は月の精

で、転じて「月」の意。

【私見】「月魄の揺蕩ふ夕 橄欖花の崩るゝ樹蔭に」——「月魄の揺蕩ふ」と



湧き出づる智慧の聖泉や  
掬ひとる不壞の眞理に  
たまゆらの生命かなしむ

は、月が出ることをためらう、ぐずぐずするさまをいう。「橄欖」は柏葉と  
一高を象徴するものであるから、「橄欖花の崩る」とは、第一節の「舊  
き星……燦きの薄らぎゆきて」の含意するところと同様に、一高の誇る  
自治の伝統が失われつつあることをさす。

▼「手折りてし橄欖の枝 青き葉は落ち香は失せられたれど」（245）『手折りて  
し』昭8 東大（245）

【解説】「友をなみ」——「友がいないので」の意。

【私見】「友をなみ」——「友情」を謳歌する一高寮歌の中で、「友がいない」  
ことを歌ったものがこの寮歌を含め三篇あるが、いずれも左翼運動の盛ん  
だった時期の作であることから、思想を異にしたため友をなくしたか、逮  
捕・放校等のために友が一高から姿を消したかの何れかであろう。

▼「かたみに語らふ友をなみ」（213）『烟り争ふ』大15（213）

▼「歎かじな友なき運命」（224）『八重汐路』昭4（224）

【解説】「湧き出づる智慧の聖泉や」——言及なし。

【私見】「湧き出づる智慧の聖泉や」——「泉」は一高生が「丘」における  
様々な「迷い」を克服する際のキーワードの一つであり、一高寮歌には、  
「智慧の泉」のほか、「生命の泉」、「幸福と光輝の泉」、「伝統の泉」などが

「荊棘蔽ふ險阻しき道を  
踏分けて登りし丘や  
啓蒙の豫言の鐘を  
使命知る同志と共に  
四十二の祭りに撞けば  
飢すよ飢餓の巷に」

登場する。

▼「柏蔭の泉に寄せて知恵語る望みはありき」《310『悲しみに』昭21》  
【解説】「たまゆらの生命かなしむ」——言及なし。

【私見】「たまゆらの生命かなしむ」——「たまゆらの生命」とは、「あと少  
しで自治寮を去らなくてはならない運命」のことであり、「かなしむ」は  
「愛しむ」で、「残された時間を」大切に「する」の意味であると解する。  
▼「日のしづくしづくのことに たまゆらのいのちかなしむ」

《317『日のしづく』昭24》

【解説】「荊棘蔽ふ險阻しき道を踏分けて登りし丘や」——《言及なし》。

【私見】「荊棘蔽ふ險阻しき道を踏分けて登りし丘や」——紛らわしい表現  
だが、受験競争をさすのではなく、入学後に遭遇した困難をさすものと  
解する。

▼「いばら踏み分け道ひらき／進む健兒もかゝるべく」

《35『筑波根あたり』明36東大》

▼「いくそこへしき荊棘路をさまよひにけむ今日こころに」

《170『うつろひにもゆる』大7》

「紅の炎ぞ燎ゆる  
若き兒が祭の篝  
思想こそ千々に分かれてど  
一つなる旅の哀愁に  
溢れ来る泪拂ひて

- ▼「明日よりは荊ふ旅路／漚しなき行方正しく」《223》『しづまなる』昭4《
- ▼「歎かじな友なき運命／荊棘をわけ行くうれひ」《224》『八重汐路』昭4《
- 【解説】「啓蒙の豫言の鐘を」——《言及なし。》
- 【私見】「啓蒙の豫言の鐘を」——先行する寮歌を踏まえる。
- ▼「あかつきの鐘つきならし次なる時代の豫言する」《220》「あこがれの」昭3《
- 【解説】「使命知る同志と共に」——「使命」とは衆生救済の使命である。
- 【私見】「使命知る同志と共に」——先行する寮歌を踏まえる。
- ▼「使命知るわれら若き兒 激つ血の杯擧げて」《231》『群雲を』昭5《
- 【解説】「飢すよ飢餓の巷に」——「飢餓の巷」は救済すべき貧民街を意味する。
- 【私見】「飢すよ飢餓の巷に」——先行する寮歌を踏まえる。
- ▼「飢餓と呪詛と悲歎の 高鳴る民の潮騒に」《213》『烟り争ふ』大15《
- 【解説】「思想こそ千々に分かれてど」——言及なし。
- 【私見】「思想こそ千々に分かれてど」——一高寮生の抱いている思想は各人各様であるが、世を憂える気持ちは一つである。
- 【解説】「仰ぎ見む暁の明星」——言及なし。
- 【私見】「仰ぎ見む暁の明星」——先行する寮歌を踏まえる。

仰ぎ見む暁の明星あけあかほし

239 第四十二回記念祭歌

『春は萬朶の』(昭7/橋本秀一 作詞、小島誠一 作曲)

四 「雪山に雲關ヒマラヤさん くもひりけ

恒河の黎明ガンジスがは あさほらけ

没する陽なき舊世界のひふるきよ  
覇者永久とこしへに覇者ならず」

- ▼ 「目指すかた見よ雲裂けて 燦まひめくや今宵新星こひぼし」《231 『群雲を』昭5》
- ▼ 「みはるかす地平の果てに 生れ出づあかき星あり」《234 『朝あぐる』昭6》
- ▼ 「みよ黎明に立つわれら 世界の光雲破る」《232 『鯨波切りて』昭5 東大》

【解説】「雪山ヒマラヤさんに雲關くもひりけ 恒河ガンジスがはの黎明あさほらけ」——昭和7年1月、インドのガ  
ンジーが逮捕された。又、このころ、ボースの来日などインドのイギリス

からの独立運動が目立った。これらのことを踏まえた表現と見られる。

【私見】「雪山」と「恒河」でインドを表現した、日本漢詩における用例。

▼ 「彼 皚皚タルハ者 雪山ヒマヤ雪中寒ニシ

此滔滔ソトウ者 恒河水タルもの流不レ殫シテ」(釋默雷「印度感懷」明6)

【解説】「没する陽なき舊世界の」——世界中に領土を持ち、太陽が沈む時が  
ないといわれた英国をさす。

【私見】「没する陽なき舊世界の」——この後の祭歌にも同様の表現がいくつ  
も登場する。

▼ 「幾世紀さかり誇りし／文明の夢の浮城

沈み行く夕陽の如く／嚴かに西に傾き」《263 『紫の叢雲』昭11》

五「金環城を照らす秋  
銀礫園に散らふ冬」

▼「七つの海を支配して／領土に日落つる時なしと

榮華に驕る老國に／落暉の光今淋し」≪294『北海波は高くして』昭16

▼「見よやアングロ・サクソンの／文化の園はたそがれつ」≪299『曙に捧ぐ』昭17

▼「舊文明の弔鐘は／殷殷として響かずや」≪301『嗚呼東の』昭17東大

【解説】「金環」「銀礫」——白居易の詩に「稀星点銀礫」、残月墮金環」とある。「金環」は月のまるい光。「銀礫」は星。又「銀礫」は「ぎんなんの実」の意。しかし「園に散らふ冬」とちよつと季節がずれるように思われる。

【私見】「金環」「銀礫」——「金環」は月の光でよいが、「銀礫」はここでは星ではなく、「ぎんなんの実」でもない。梁の皇太子簡文の詩に例があるように、冬の情景として「霰(あられ)」と解するのが妥当であろう。

▼「同」劉諮議「詠春雪」【玉台新詠・皇太子簡文】

「晚霰飛銀礫、浮雲暗未開、入池消不積、因風墮復來。」

(夕暮の霰は銀のつぶてを飛ばし／たれこめた雲は暗くまだ開けない。

雪となり池に入つて消えて積もらず／風に乗つて落ちてまた飛ぶ。)

序「わが愛深き白銀の

翼根に盡きず湧き出づる

春のぬるみに萬象ものみなよ

命さびすと蘇へれ」

「彼等の前に多く建設たて

彼等の後に曝しけり……

嗚呼空虚なる充實よ

かくて人間ひと過ぎ行きぬ」

一「此森深く沈黙しんま棲み……

清水の岩の苔の香に

【解説】《解説書は、「表現形式は整然と統一されているが、表現内容は、神話話や古代史の故事等を踏まえたと思われる箇所が頻出し、明快な解釈は困難である」としつつも、わかりやすい解釈を展開している。》

【私見】ただ、解説書では序詞の中の「彼等」を「一高生」と解したため、作者の趣旨とくいちがいが生じている。さらに「語釈」では、「黄河が澄めば渤海が澄む」という説については未考」としているが、後述の作詞者の自作解説によれば、作詞者自身の願望を示したものであることがわかる。

【作詞者の自作解説】作詞者の平木恵治氏は、『向陵』誌（昭和54年4月）に「歌われざる寮歌及び寄贈歌考」を寄稿し、自歌について解説を加えている。その中で、本寮歌について、序詞から本詞第四節までは、ギリシャ神話やホーマー等によっており、第五節以降で一高礼讃を述べたとしている。

◆序詞……「白銀の翼根」はビーナス、「彼等」は人類を意味している。「空虚なる充実」は、人類は充実させつつあるつもりでも、戦争をやったり、自然の破壊を行ったりしているという思想を表現した。

◆一……一高が沈滞より醒めよと叫んでいるわけで、「此森」は向陵のこと、「巨人」も一高を意味している。

巨人は眠り深ければ

二「彼の雷電と悍鷲を

男さびして討ち斃し

真理の父の就縛を

解き人間に奉仕かん

三「幽玄無比の森の兒よ

彼の濁り江の渤海も

黄河の水の源泉を

潔め畏れば澄むといふ

四「覺めずや巨人人間に

尊嚴の名は許されぬ

五「凡べて疲れし同胞よ

懃へ橄欖の谷深く

若き敬虔に枝ゆりて

實の紅を手折れかし

◆二……「雷電」はゼウス、「悍鷲」はゼウスの従者、「真理の父」はプロ

メテウスのことである。このことは、後のルネッサンスにつながる。

◆三……「潔め畏れば澄むといふ」は願望で、澄むようにしてくれという

趣旨である。「森の兒」はもちろん「高健兒のことである。

◆四……多分にシラー的理想主義的になっている。「尊嚴の名は許されぬ」はルネッサンスを意味し、封建的思想に対し人間の生存と表現の自由、知性を回復することになる。

◆五……「枝ゆりて」の「枝」は、橄欖の枝である。5以降は、専ら「高礼賛で、自我の目覚めにつながる当時の自分の感慨を述べている。

序 「白波騒ぎ熱砂舞ふ」

幾界いくよこゝだく天駆けし」

【解説】「白波騒ぎ」——《言及なし》

【私見】「白波騒ぎ」——万葉集に次の歌がある。

▼ 「沖つ島清き渚に風吹けば白波騒ぎ……」《万葉集 6 九一七・赤人》

跋 「聞けよ紀念祭まつりの自治の鐘

見よや衛士かきり焚く篝火の焰

【解説】「衛士焚く篝火の焰」——《言及なし》

【私見】「衛士焚く篝火の焰」——小倉百人一首でも知られる次の歌がある。

▼ 「みかきもり衛士のたく火の夜は燃え 昼は消えつつものをこそ思へ」

《詞花集・大中臣良宣》（小倉百人一首所収）

241 第四十三回紀念祭寮歌「愁ひに悲し」(昭8／青木 茂 作詞、岩崎勝太郎 作曲)

242 第四十三回紀念祭寮歌「古りし榮ある」(昭8／東 澄夫 作詞、佐伯貞雄 作曲)

一 「花永劫の春ならず

濁世の潮騒近くして」

【解説】「花永劫の春ならず」——《言及なし》

【私見】「花永劫の春ならず」——土井晩翠の次の詩を踏まえる。

▼ 「花とこしへの春ならじ／夏の火峰の雲落ちて」《星落秋風五丈原》

二 「明日の戦思ふかな

金鼓震ひて月白し」

【解説】「金鼓震ひて月白し」——「金鼓」は軍中で用いる鉦と金属製の鼓。

【私見】「金鼓震ひて月白し」——土井晩翠の次の詩を踏まえる。

▼ 「金鼓震ひて十萬の／雄師は圍む成都城」《星落秋風五丈原》



三 「雲より雲にどよみ行く」

曙の鐘友よ聞け」

【解説】「雲より雲にどよみ行く」——あたりをゆるがすように鳴り響く。

【私見】「雲より雲にどよみ行く」——土井晚翠の次の詩を踏まえる。

▼「雲より雲にどよみ行く／名残りの鐘にきくとらん」《暮鐘》

243 第四十三回記念祭寮歌『風荒ぶ』(昭8／大川榮作 作詞、佐伯貞雄 作曲)

244 第四十三回記念祭寄贈歌『見よやく』(昭8東大／平木恵治 作詞、樂友会 作曲)

一 「見よやく」

光の子等自由の子等

岡春にしてみろ草青み」

【解説】「岡春にしてみろ草青み」——《言及なし》

【私見】「岡春にしてみろ草青み」——芭蕉の文を踏まえる。元は杜甫の詩。

▼「城春にして草青みたり」《松尾芭蕉「奥の細道》

▼「国破山河在。城春草木深。」《杜甫「春望》

三 「どこにはに我等が誇

七つの使命七つの功績」

【解説】「七つの使命」——具体的に何を意味しているのかが不明。後考を待ちたい。

【私見】「七つの使命」——フランスの詩人ポール・リシャールが滞日中の

大正6年に書いた詩に『告日本國』があり、日本の世界的使命と日本

への期待を歌っている。《山海堂出版部『告日本國』大6・12・20》

▼「曙の兒等よ、海原の兒等よ

花と焰との國、力と美との國の兒等よ

聴け涯しなき海の諸々の波が

日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を

諸氏の國に七つの榮譽あり

故にまた七つの大業あり

さらば聴け、其の七つの榮譽と七つの使命とを

一 獨り自由を失はざりし亞細亞の唯一の民よ

貴國こそ亞細亞に自由を与ふべきものなれ

二 曾て他國に隸屬せざりし世界の唯一の民よ

一切の世の隸屬の民のために起つは貴國の任なり

三 曾て滅びざりし唯一の民よ

一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴國の使命なり

四 新しき科學と舊き智慧と、歐羅巴の思想と

亞細亞の思想とを自己の衷に統一せる唯一の民よ

此等二つの世界、來るべき世の此等両部を統一するは貴國の任なり

五 流血の跡なき宗教を有てる唯一の民よ

一切の神々を統一して更に神聖なる眞理を發揮するは貴國なる可し

六 建國以來、一系の天皇、永遠に亘る一人の天皇を奉戴せる唯一の民

245 第四十三回紀念祭寄贈歌

「この血汲みて  
在りし日の香を呼べ  
その香に酔ひつゝ  
彼の歌歌はん

よ

貴國は地上の萬國に向つて、人は皆一天の子にして、天を永遠の君主とする一個の帝國を建設すべきことを教へんが爲に生れたり  
七 萬國に優りて統一ある民よ

貴國は來るべき一切の統一に貢獻せん爲に生れ

また貴國は戰士なれば、人類の平和を促さんが爲に生れたり

曙の兒等よ、海原の兒等よ

斯くのごときは、花と焰の國なる貴國の

七つの榮譽と七つの大業となり」(大川周明訳)

▼右のポール・リシャールの詩が發表された大正6年は、『見よやく』の作詞者である平木惠治氏(オンケル)が十五歳の頃のことである。

『手折りてし』(昭8東大／吉野 衡 作詞、長内 端 作曲)

【解説】「在りし日の香」は、向が丘の寮に生活していた時期に味わつた貴重な経験の匂いやかな憶い出であろう。その貴重な経験を永遠的な価値をもつて支えていたものこそ、「幽久の鳥」にも喩うべき精神の「自由」への道であり、それは今や忘れ去られようとしながら、眼を凝らしさえすれば

——あゝ

幽久の鳥

地をさらんとす

両眼火と燃ゆる彼方

自由の扉開きてあり

自由の扉開きてあり

われわれの前途に開かれてある、というような想念を歌い上げていると解される。一高寮歌の伝統的理念は「自治」が普通であるのに、「自由」の理念を高らかに歌い上げているところに本寮歌の特色がある。

【私見】「幽久の鳥」が何を指すのか、私見では次の二つが考えられる。

①「幽久の鳥」は、永遠の時を生きたるという伝説上の鳥である「フェニックス」（不死鳥または火の鳥ともいう）のイメージを想起させる。それも永く閉じ込められていた（＝「幽久の」）不死鳥が今や新たな生命を得て自由のかなたへ飛翔せんとしているさまであり、同年の寮歌『古りし榮ある』第四節の「天翔け渡る自由まよに生き」を髣髴とさせる。また、「両眼火と燃ゆる」は「火の鳥」のイメージと考えられるし、「この血汲みて」という表現は、不死鳥の血を口にすると不老不死の命を授かるという伝説とも符合する。「※「幽久」の語は辞書には見当たらない。」

②大鵬の雛（＝一高生）が翔び立つまでに相当な準備期間がかかることから、「幽久（＝長く潜むの意か）の鳥」と表現したとも考えられる。

▼「一度搏てば三千里　み空を翔ぐる大鵬も

羽根未だしき時のまを　潜むか暫し此森に」《12 『一度搏てば』明32》

246 第四十四回紀念祭寮歌『梓弓』(昭9/佐藤竹雄 作詞、田中芳男 作曲)

三「自由にして胸うちひらき

物怖ぢず眦見さけ

われ想ひわれ疑へり

われ叫びわれ戦へり」

【解説】「われ想ひわれ疑へり」——《言及なし》

【私見】「われ想ひわれ疑へり」——デカルトの「我思う。ゆえに我あり」を  
含意しているのであろう。デカルトは『方法序説』の中で、「一切を疑うべ  
し」という方法的懷疑により、「自分を含めた世界のすべてが虚偽だとし  
ても、それを疑い続けている自分が存在するということだけは決して疑い  
得ない真実だ」として、これを彼の哲学の第一原理にすえた。

247 ●第四十四回紀念祭寮歌『空洞なる』(昭9/長屋博三 作詞、小林健夫 作曲)

一「空洞なる木靈追ひつゝ」

行き暮れて丘に迷へば

紫に狹霧はこめて

誰が歌ぞ草笛流る

はろかなる追憶につれて

涙さへ知らず溢れぬ

うつつろ

【解説】「空洞なる木靈追ひつゝ」——《言及なし》

【私見】「空洞なる木靈追ひつゝ」——238『舊き星』(昭7)の第六節を受

けて、自分たちが同志とともに撞いた鐘(「起こした行動」の「こだま」  
が飢餓の巷に空虚に響くのみだと嘆いていると解する。

▼「啓蒙の豫言の鐘を 使命知る同志と共に

四十二の祭に撞けば 研すよ飢餓の巷に」《238『舊き星』第六節》

「空洞なる」ではないが、類似表現の「空虚なる」と歌った寮歌の例を

挙げてみよう。

▼「空虚なる誇りは追はじ」《202 『曉星の』(大13)「饗宴」の節》

▼「空虚なる名の雅男よ」《213 『烟り争ふ』(大15)「四、覚醒」の節》

▼「空虚なる日ぞなつかしき」《223 『しづまなる』(昭4)第二節》

【解説】「誰が歌ぞ草笛流る」——《本項・次項とも言及なし》《》

【私見】「誰が歌ぞ草笛流る」——次の漢詩および寮歌の表現を踏まえたのであろう。

▼「誰家玉笛暗飛声、散入春風滿洛城」《李白「春夜洛城聞笛」》

▼「更けゆくを寝もやらぬに 誰が歌ぞ哀し草笛」

《202 『曉星の』(大13)「希望」の節》

「朽津耕三氏(昭23理甲)から、一高寮歌の「草笛」は寮歌の METAPHOR ではないかとの示唆をいただいた。」

▼「かすれゆく草笛の音に」《223 『しづまなる』(昭4)第二節》

【解説】「はろかなる追憶につれて 涙さへ知らず溢れぬ」——《言及なし》《》

【私見】「はろかなる追憶につれて 涙さへ知らず溢れぬ」——次に掲げる

寮歌(223 『しづまなる』(昭4)第二節)を下敷きにしている。

▼「はろかなる懐疑のうちには 涙さへ知らず流る」

二「夢なりし三年辿りて

漂泊の兒は嶮し路に

すがた

移ろひし形相みはりぬ

かたち

形容こそ昔にをれど

こころみ

日の本も試練を経ぬ

雲低く行方知らぬに

三「赤き陽を歌ひし異郷に

埋りてし劔も骨も

夏草に靈は甦りて

【私見】「夢なりし三年辿りて 漂泊の兒は嶮し路に 移ろひし形相みはりぬ」

次の寮歌の歌詞を踏まえたものであろう。

▼「夢なりし森の三年や 振仰けて見放くる彼方 甦りくも陰阻旅路や」

《233 『彩雲は』(昭6) 第三節》

▼「この丘にのぼりて三年 現實なる世をば知りたり」

《223 『しづまなる』(昭4) 第四節》

【解説】&【私見】「日の本も試練を経ぬ」——満洲事変、満洲国設立前後の

日本国の行動・国策が国際連盟の認めるところとならず、連盟脱退(昭和8年3月)により国際的な孤立状態にまで進展した状況を指す。

【解説】「雲低く行方知らぬに」——《言及なし。》

【私見】「雲低く行方知らぬに」——次の寮歌の歌詞を踏まえたものであろう。

▼「ああ北滿に雲低く……あやめもわかぬ闇の野を」

《237 『吹く木枯に』(昭7) 第二節》

【解説】「赤き陽を歌ひし異郷に……いざ我等共榮に行かん」——「赤い夕日

に照らされて 友は野末の石の下」『戦友』を暗に踏まえつつ、日露の役や満洲事変で満洲の土となった犠牲者の靈も、大東亜共榮圏(というより

新しき星は生まれぬ

いざ我等共榮に行かん

若き日に眞理修めて」

#### 四 「アルプスの峰は霞みて

波立ちぬレマンの湖畔

別れなん又逢ふ日まで

正義は永遠の生命ぞ

失はじ我のみこゝに

傳へこし北指す針を」

は世界の平和)が実現すれば浮かばれようとの意を表しているかのようである。しかしそれは表向きで、その真意はそれとは矛盾する現状への憂いと悲しみの方にあつたといえそうである。

【私見】「赤き陽を歌ひし異郷に……いざ我等共榮に行かん」——「夏草に……」は芭蕉の有名な句「夏草や兵どもが夢の跡」を意識したものか。「新しき星は生まれぬ」は昭和7年3月の満洲建国をさすと思われる。なお、当時は「大東亜共榮圏」という表現はまだ使われていなかった。昭和初期には鉄道、商租権などで日中間に紛争が頻発し、幣原喜重郎外相が日中には「共存共榮」を説くことによつて懸案の解決を図つたが、野党・右翼は幣原外相の弱腰外交だとして攻撃した。また満鉄社歌(大正14年作詞)の第二節には「榮は共に 共に希望を」という歌詞がある。

【解説】「アルプスの峰は霞みて 波立ちぬレマンの湖畔」——「レマンの湖畔」は国際連盟本部の所在地ジュネーブを意味する。

【私見】「アルプスの峰は霞みて 波立ちぬレマンの湖畔」——戦時歌謡『連盟よさらば』(昭和8年5月)を踏まえたのであろう。

▼『連盟よさらば』(作詞・東京朝日新聞『今日の問題』子、作曲・江口夜詩)

三 「ああアルプスの峰高く レマンの水は清けれど



理想のかけは地に落ちて 深き理解はくみ難く

ジュネーヴの空を暗し

《参考》昭和8年2月24日、国際連盟特別総会は42対1で満洲国を否認した。日本の松岡洋右代表は、政府の方針を受け、総会の勧告を断じて受け入れることは出来ないとして退席し、日本は同3月27日に連盟脱退を正式に表明した。

【解説】「別れなん又逢ふ日まで」——国際平和を心から願う世界の同胞たちとの一時的な別離を意味する。

【私見】「別れなん又逢ふ日まで」——国際連盟との一時的な別離を意味する。前項と同じく、当時の戦時歌謡『連盟よさらば』（昭和8年5月）の歌詞を踏まえたものであろう。

▼『連盟よさらば』（作詞・東京朝日新聞『今日の問題』子、作曲・江口夜詩）

四「さらば別れん連盟よ またあふ日こそ極東の

平和のひかり輝かに 盟主日本の雄々しさを

微笑のうちに迎えんか」

【解説】「正義は永遠の生命ぞ」——国際連盟を脱退し、欧米列強を敵に回してまで満洲を支配下においた日本の国策を「永遠の生命」たる「正義」で

あると考えていたようにも見えるが、全体の文脈から読むとそれが作者の真意だとは断定できない。

【私見】「正義は永遠の生命ぞ」——昭和7年12月8日の連盟総会で「欧米諸国は日本を十字架にかけようとしているが、イエスが後世によりやく理解された如く、日本の正しさは必ず後に明らかになるであろう」と述べた松岡洋右の「十字架上の日本」演説の論旨を踏まえたものと解する。

【解説】「失はじ我のみこゝに 伝へこし北指す針を」——「高の伝統である「清き心」による正義実現の理念を、「北さす針」すなわち羅針盤に喩えたのであろう。

【私見】「失はじ我のみこゝに 伝へこし北指す針を」——具体的には、「春爛漫」など「高寮歌にしばしば登場する「北斗」ないし「北斗星」を「北指す針」と表現して羅針盤に喩え、一高の伝統を継承してゆく強い使命感を表現したものと解する。

【解説】「秋開けて街の銀杏は……今は又君と別れん」——《言及なし。》

【私見】「秋開けて街の銀杏は……今は又君と別れん」——当時は三月卒業だったのに、秋開けたのちの時期の友との別れが歌われているのは、左翼思想問題で除名・放校処分を憂き目に会い、学年途中で一高を去った友との

## 五 「秋開けて街の銀杏は

あらはなる肌<sup>は</sup>に震へど  
黄金なす下葉くぐりて  
涙みし<sup>は</sup>こともありしか

契りてし友の瞳に

涙みしこともありしか

今は又君と別れん」

別れを歌ったものと考えられる。

《井下登喜男氏（昭26文丙）の示唆による》

248 第四十四回記念祭寮歌『あゝ如月の』（昭9／中島勇徳 作詞、渡辺 孚 作曲）

249 第四十四回記念祭寮贈歌『緑なす』（昭9東大／杉浦明平 作詞、長内 端 作曲）

二「吹きあるる夜半の嵐に

音立ててさわぐ椎の葉

その蔭に夢をむさぼり

過ぎし日はただ安かりき」

【解説】「吹きあるる夜半の嵐に」——満洲事変、上海事変、五・一五事件等を暗示している。

【私見】「吹きあるる夜半の嵐に／音立ててさわぐ椎の葉」——古歌に「嵐」と「椎の葉」とがセットで出てくる例は多いが、第二節の詩句は、以下の歌を下敷きにしたものであろう

▼「嵐吹く岡辺にしげき椎の葉の／そよやうき世の夢もさめにき」

《藤原師兼『師兼千首』》

▼「月残る向ひの岡の椎の葉に／山風しらむ明けがたの空

《藤原為尹『為尹千首』》

▼「椎の葉のさわぐ嵐を岑の松／心もみえてすめる声かな

《肖柏『春夢草』》

250 第四十五回紀念祭寮歌『大風荒れて』(昭10／東寮二番室 作詞、伊丹俊郎作曲)

三「彌生ヶ丘に咲き誇る

櫻黙して語らねど」

我等が幸を壽がむ

駒場の森の下蔭に

理想の種を蒔かんとて

老櫻おいさきに寄りて想ふ時

我等が行手光あり」

【解説】「老櫻」——《言及なし》

【私見】「老櫻」——櫻の古木をいう。謡曲『西行櫻』に、「誠は花の精なるが、此身もともに老木の櫻の、花物言はぬ草木なれども、とがなき謂を木綿花の、影唇を動かすなり」とある。謡曲『西行櫻』では、一人閑かに住んでいた西行が、花見に来た都の男たちに閑居を妨げられた心を「花見むと群れつつ人の来るのみぞ／あたら櫻の咎にぞありける」とつぶやいたのに対し、その夜の夢に現れた老木の櫻の精は、「櫻の咎は何やらん……非情無心の草木の、花に憂き世の咎はあらじ」と反論する。この寮歌では、櫻を本郷の一高自治寮に見立てて、「櫻黙して語らねど」、「老櫻おいさきに寄りて想ふ時」という表現で、本郷の一高自治寮も駒場への移転を祝福しているのだと歌っている。

251 第四十五回紀念祭寮歌『芙蓉の雪の』(昭10／西垣秀正 大島欣二 作曲)

252 第四十五回紀念祭寮歌『橄欖香る』(昭10／大木晃一 作詞、服部正夫 作曲)

籬「幻夢ゆめの名残を花に問ひ

【解説】「幻夢ゆめの名残を花に問ひ」——《言及なし》。

253 第四十五回紀念祭寄贈歌

遙けき希望月に寄せ」

一「大海原の潮より

廣き希望に燃え立ちて

尚武と思慮の日を送る

母校の友よいざ來たれ

今日は佳き日ぞ諸共に

高鳴る胸を躍らせて

吾が住み慣れし城郭に

發展の文字示さずや」

【私見】「幻夢ゆめの名残を花に問ひ」——次の寮歌と和歌を踏まえている。

▼「野にちりかかると花あらば 夢の名残を花に問へ」《11『霧淡青の』明45》  
▼「世に知らぬ心ひとつにありしよの

夢の名残を誰に問はまし」《新千載、今出川右大臣》

『大海原の』（昭10東大／大森羊太 作詞、長内 端 作曲）

【解説】昭和5年の寮歌『春東海の櫻花』（大森羊太作詞、長内端作曲）は明

快率直で屈折のない歌詞とそれによく適合した曲によって愛唱されたが、今回の寄贈歌も長内端作曲との取り合わせといい、歌詞の内容、表現のわかりやすさといい、前回と同様で、よく唱われた。

【私見】「大海原の潮より 廣き希望に燃え立ちて」——次の寮歌を踏まえる。

▼「大海原に湧きのぼる 潮の如き若人の 胸に希望ぞあふれたる」

《34『春またあさき武香陵』明36》

「尚武と思慮の日を送る」——広くは文武の道に勤しむさまをさすのであるが、「尚武」は「高伝統の『運動部の活動』を、「思慮」は「哲學的思索」をさすと解する。

「母校の友よいざ來たれ」——「母校」という表現は、明治36年京大

二「時は流れつ惜しきかな

想ひ溢るゝ青春の

熱き血潮に奏でたる

あしたゆふへの物語

積り積りし故里の

誇りの歴史あとにして

心の國と別れゆく

断腸の運如何にせん」

寄贈歌の『比叡の山に我立ちて』に始まり、明治37年、38年、39年、40年と京大寄贈歌が続き、同42年の東大寄贈歌をはさんで43年に再び京大寄贈歌に登場したあとは、「故郷」に座を譲った。今回の東大寄贈歌で久々のお目見えである。

「今日は佳き日ぞ」——今日は開寮を祝う記念祭の佳き日である。

【解説】「故里」——「わがたましひの故郷は……」（156）『わがたましひの』大5京大）及び「搖籃ゆりかごの丘の夢乱れ」（251）『大風荒れて』昭10）を例に引き、「原郷意識」（向陵を自分たちの育ってきた原点と位置づける意識）を重要な寮歌の一面だとする。

「心の國」——思ひ出が積もり積もって別れがたい向が丘への愛着。それが一高生たちの「断腸の運」となる。「心の國」に深い思いをこめる。

【私見】「故里」——「故郷」（ふるさと）「故里」などの表記を含む」という表現は、明治39年『春は櫻花咲く』（東大）に始まり、明治45年東大、大正3年京大の各寄贈歌を経て大正5年には、『わがたましひの』（京大）、『われらの命の』（九大）、『雲ふみ分けて』（東北大）の三寄贈歌が揃い踏みして以降、「母校」に代わって「故郷」が主流となった。管見では、「故郷」は明治期2篇、大正期7篇、昭和期25篇、計36篇（うち21篇は寄

三「秋津島根に建國の

理想を繼ぎて文化國

築く力を育てしが

やがて荒らされゆく丘よ

嗚呼思ひ出の八つの寮

汝の黒く年經たる

壁に無限の黙示あり

そこに我等が夢宿る」

贈歌に登場する。

「惜しきかな……心の國と別れゆく」——西行に次の歌がある。

▼「この春は君に別れの惜しきかな 花のゆくへを思ひ忘れて」(山家集)

「斷腸の運」——はらわたがちぎれるような悲痛な運命(めぐりあわせ)。

【解説】「思ひ出の八つの寮」——本郷の向陵時代は、東、西、南、北、杓、和、明の八寮があつたからである。

「汝の黒く年經たる 壁に無限の黙示あり そこに我等が夢宿る」——八寮に呼びかけて「黒く」という。長い年月の間に黒ずんできた寮舎がさらに懐かしく思われる。駒場移転に関連する複雑な思いがこめられている点が注目される。

【私見】「やがて荒らされゆく丘よ」——有為の人材を多く輩出してきた向陵も、まもなく東大農学部敷地となり、一高の雄姿は姿を消すことになる。

「汝の黒く年經たる 壁に無限の黙示あり」——解説では白かった寮舎の壁が年を経て黒くなったととらえているが、私見では、寮生の先輩たちが寮室内の壁に書いた署名や警句等の落書きに対する愛着を歌ったものと解する。

▼「力を刻む鐘あらば 古き壁畫に響けかし」(111 『霧淡青の』明45)

四「柏の露に浴せし」（ゆあみ）

我は此の世の幸の子ぞ  
まみうるは  
眉美しき丘の子等

覺めよ世界は人を俟つ  
若き生命いのちの力もて

手に手を取りて相誓ひ  
眞理を競ひ燈ひを掲げ

萬卷の書を究めばや」

▼「生命の窓の白壁に 鑄りて古りにし名は誰ぞや」《170》『うららにもゆる』大7  
▼「青春のおもひたくみに鑲めし ふるき壁畫いんげんの金泥に」《187》『どかに春の』大9  
【解説】第四節について言及なし。

【私見】「柏の露に浴せし」——「浴せし」（ゆあみ）は産湯を使ったこと。一高に入  
学したことを「眞理の嬰兒」として向陵に生を享けたととらえる。

▼「雄々しき呱呱の聲擧る」「健兒は成りぬ岡の上」《79》『霞薫する』明41

▼「眞理のみちの嬰兒が 宇宙の律あめに暉りけむ」《185》『春甦る』大9

「覺めよ世界は人を俟つ」——向陵人士が世界に雄飛することへの期待  
を表明している。「榮華は古りし」(大12)、『若緑濃き』(昭17・6)に  
もこれと類似した表現が見られる。

▼「炎の文字のいと紅く」「勇士を待つ」と書きけるを」《200》『榮華は古りし』大12

▼「血潮の文字のけさやかに 汝を待ち待つ」と示せるを」《303》『若緑濃き』昭17・6

「眞理を競ひ燈を掲げ 萬卷の書を究めばや」——「燈を掲げる」とは、  
もともと「灯心をかきたてて明るくする」という意味であるから、こゝで  
は本腰を入れて萬卷の書を究めるために灯火を明るくする意であろう。

▼「ともし火を掲げ盡くして起きおはします」(源氏・桐壺)

▼「短き灯臺に火をともしして、いと明かう掲げて」(枕草子・きよげなる



五「さらば向ヶ丘の地よ

其の名は薫れ永遠に

今こそ立ちて雄々しくも

新しき土耕して

吾が前進の路建てん

郁々として甦る

光を浴びて壽げば

意義ある四十五の祭

## 254 第四十五回記念祭寄贈歌

四「化りし姿も想ひ出に

酌みて醸みなん胸の酒

男の) (||低い灯明の臺に火をつけて、とても明るくかきたてて)

▼「灯かゞげうちつどひ 今宵は語り明かさんか」《98 『藝文の花明』43 東大

【解説】「郁々」—— 文物の盛んなさまにも、香気あるさまにも使う。前者なら『論語』(八佾)の「周監於二代」郁々乎文哉。吾從<sub>レ</sub>周<sub>ニ</sub>に拠り、後者なら司馬相如『上林賦』の「郁々菲菲<sub>トシテ</sub>衆華<sub>トシテ</sub>発越<sub>ス</sub>」に拠る。

【私見】この節は、向ヶ丘への惜別の情を表明するとともに、新天地駒場への移転を祝し、その前進・発展を願う気持を歌っている。

「吾が前進の路建てん」—— 光太郎の詩を思い起こさせる。

▼「僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る。」《高村光太郎『道程』(大3)》  
「郁々として甦る光を浴びて」—— 本郷における最後の記念祭の日に甦りつつくる香り高い春の光を浴びながら。

▼「春甦るときめきに燃ゆる若樹の光より」《185 『春甦る』大9》

『時永劫の』(昭10 東大／金子養之助 作詞、長内 端 作曲)

【解説】「化りし姿……」「我」を見き」—— 「化りし姿」は、卒業してから次第に変成してゆく自分の姿。そこでは「高時代」のことが「幻影」のように

幻影まぼろしなれば消え行けど

八寮の夢さながらに

三年の春の若き兒に

昔ながらの「我」を見き

消えていってしまう。しかしその一高時代への「夢」は、そっくりそのまま、新しい駒場の寮で立ち上がる後輩たちに一高伝統の精神として受け継がれていくにちがいない。そこに「昔ながらの『我』」が甦ってくるのである。

【私見】「化なりし姿」——当時の一高の記念祭では、イベントとして仮装行列が行なわれるのが通例であった。ここでは、自分の在寮中に仮装行列に参加した楽しい思い出を胸に、ゆっくりと酒を味わおうとしているのである。そうした過去の思い出は「幻影まぼろし」のようなもので、はかなく消えていってしまうけれども、我々本郷時代の一高生の「夢」は、今後駒場の寮で三年を過す後輩たちがそのまま引き継いでくれるだろう、との期待を述べている。

255 第四十五回記念祭寄贈歌『ふりつめる』（昭10京大／三木 實 作詞、伊丹俊郎 作曲）

256 ●第四十五回記念祭寄贈歌『嗚呼先人の』（昭10東北大／長山頼正作詞、木村弦三作曲）

「音」

一 「嗚呼先人の血と汗の

歴史の榮の傳なる

青葉の城にこだませし

彌生ヶ丘の雄叫びに

瑞雲の空明けゆけば

今日四十五の紀念祭

【解説】「嗚呼先人の血と汗の 歴史の榮の傳なる」——「先人」とは、以

下の文脈から見て、青葉城を本拠とした伊達政宗その他を意味していると思われる。《井上司朗氏（大13文乙）も『一高寮歌私観』の中で、第一節の二、二行は「青葉の城」にかかるとし、「先人」を伊達政宗と解してよからうとしている。》

【私見】「嗚呼先人の血と汗の 歴史の榮の傳なる」——作者がここでことさらに青葉城及び伊達政宗の歴史を強調するのは不自然であり、第一節の一、二行は「青葉の城」ではなく「彌生ヶ丘」にかかると解すべきであろう。その場合、「血と汗を流して榮えある歴史を築いた先人」とは、一高の諸先輩のことを指すことになる。先行する一高寮歌の表現を見ても、それが妥当であることが理解できよう。

▼「今宵灯ともる自治燈の 影に集ひて先人の  
熱き努力に織りなせる 光榮の歴史を偲びつゝ」

▼「ましてわれらが先人の 愛寮の血の物語

《140 『愁雲稠き』大4》

義憤の涙いまもなほ 讀まば懦夫さへ立たすべき

覇者の歴史の五々の巻 光榮しるき四綱領

《148 『二十五年祭の歌(あゝ新緑の)』大4》

▼「嗚呼武香陵四十年 唯先人の光榮はえの跡」《229 『春東海の』昭5》

【解説】「青葉あおばの城しろにこだませし 彌生やよひケ丘をたけの雄をたけ叫をたけびに」——明治年間、一高

と二高の柔道部が激戦、死闘を繰り返していた時代を踏まえた表現であろう。《井上司朗先輩(大13文乙)も『一高寮歌私観』の中で、「一高と二高の間に交された数々の悲壮なる戦史をふんだものだろう。東北大にて向陵を思う表現の一つの角度である」としている。》

【私見】「青葉あおばの城しろにこだませし 彌生やよひケ丘をたけの雄をたけ叫をたけびに」——本郷・弥生が丘での最後の記念祭を迎え、第五節にある如く彌生ケ丘への哀惜の念と新天地駒場への期待・希望の念とを併せて抱く、母校(一高)の後輩たちの雄叫び(＝歌声)が、作者の住む仙台の地にまでこだますると歌っているであろう。

作者は青森の人で、一高から心ならずも東北大に進み、母校である一高に対し格別の思いを抱いていたことで知られる。同氏は東北大生ではあるが、仙台出身ではなく二高と直接の縁はないこと、一高時代も柔道部でな

「別」

三「友の契は堅けれど

岡邊の櫻變らねど

憂は深し八寮の

四十有五の年を經し

我が搖籃の故郷と

今宵別れの花莖」

「祭」

五「篝火天に照く燃え

今宵限りの丘の上

橄欖の花手に採りて

盃あげて歌ひつゝ

榮ある首途祝はなん

くボートでの活躍が記録されていること等から、この年の記念祭にあたり明治期の一高・二高の柔道戦史を云々する必然性に乏しいと考える。

【解説】堅い友情にもかかわらず別離が避けがたいことを詠んだのが「別」の第三節であるが、「我が搖籃の故郷」の一句に、向陵二年間の生活が、そこで学んだ者の精神的成長にとつて、いかに深い意味をもっていたかが、一語で示されていると言えよう。

【私見】この節では、「八寮の」「四十有五の年を經し」と表現しているのだから、単に「向陵との別離が避けがたい」というのではなく、本郷・彌生が丘との別離を歎いていると解すべきであろう。

【解説】第五節で駒場での「榮ある首途」が祝祭されている。

【私見】「今宵限りの丘の上」「あゝ向陵よいざさらば」——本郷での最後の記念祭だから、「これで本郷ともお別れ」の意（第三節参照）。

「榮ある首途祝はなん」——駒場の地での一高の輝かしいスタートを祝おうと歌う。『烟争々』（大15）に類似の表現がある。

257 第四十五回記念祭寄贈歌 『劫風寄する』(昭10 阪大／若原英夫 作詞、佐藤竹雄 作曲)

258 第四十五回記念祭寄贈歌 『彌生の丘四十五年』(昭10 金澤醫大／大川榮作 作詞、佐伯貞雄 作曲)

259 第四十五回記念祭寄贈歌 『嫩葉萌ゆ』(昭10 京大／丸田浩三 作詞、中村 整 作曲)

260 第四十五回記念祭寄贈歌 『薄靄こむる』(昭10 東大／三瓶憲章 作詞、芳賀隆三 作曲)

261 第四十五回記念祭寄贈歌 『櫻萌ゆる』(昭10 東大／橋本秀一 作詞、岩本政藏 作曲)

「櫻萌ゆる」(一)

彌生ヶ岡に

春たゞ一度

甦へる  
想ひ唯

胸に満ちて

今日限り

故郷さらば

思ひ出の

絲は亂るゝ

霧冴ゆる

夕べの集ひ

【解説】本歌の(一)では本郷彌生ヶ岡の一高消滅の悲しみが、「故郷は こゝに

滅びぬ」という表現で示され、(二)では武蔵野の一郭、駒場への一高移転が、

「新しき生命」の誕生として歓迎されている。焦点の明確な、簡潔にして

優雅な表現により、両面の感情が明示されている。

「櫻萌ゆる 彌生ヶ岡に」——「萌ゆ」は若い芽が出るの意であり、桜

の花が「萌ゆる」というのは、いささかなじまない感を与える。

皆人の  
故郷は

祈り静かに  
ここに滅びぬ

「思ひ出の 糸は亂るゝ」——「糸の亂れ」は、感情の亂れを託する意味で、古文によく用いられた。

▼「春雨の降りしくころは青柳のいとみだれつつ人ぞ悲しき」《新古今集》  
【私見】「甦へる春たゞ一度」——彌生ヶ岡で迎える春の記念祭も今年ただ一度で終わり、もう二度とないのだ。「たゞ一度」は、一八二四年〜一五年のウィーン会議（『会議は踊る、されど進まず』と評された）を時代背景にしたドイツ映画の『会議は踊る』（一九三二年に公開され、この寄贈歌が作られた前年の一九三四年に日本に輸入・配給されて人気を集めた）の主題歌 *Das gibt's nur einmal*. (たゞ一度) を踏まえた表現であろう。この歌は、旧制高校生に広く愛唱された。

「今日限り故郷さらば」—— 現実に駒場に移転するのはこの年（昭和10年）の9月であるから、ここでは、「記念祭を開催する場としての彌生ヶ岡」はこの日で終わりだというニュアンスを強調して言ったものであろう。

「糸は亂るゝ」——「亂る」は「糸」の縁語。心の平静が失われること。

▼「年を經し糸の亂れの苦しさに（安倍貞任）

衣のたて（館）はほころびにけり（源義家）」《古今著聞集》

【注】「衣のたて」は衣のたて糸と衣川の館をかけた。

「糸」、「亂れ」、「衣」、「たて糸」、「ほころび」は縁語。

(前九年の役のとき、衣川柵から敗走する安倍貞任を、源義家が馬で追いながら、「衣のたて(館)はほころびにけり」と詠みかけると、安倍貞任は振り返り、「年を経し糸の亂れの苦しさに」と上の句を返したという逸話が残されており、当時の辺境の武人の文化レベルの高さを物語るとされる。)

▼「孤鞍雨ヲ衝イテ茅茨ヲ叩ク。少女、爲ニ送ル花一枝。

少女ハ言ハズ、花語ラズ。英雄ノ心緒亂レテ糸ノ如シ。」

(茅茨<sup>ばうし</sup>はばら家) 〔太田道灌<sup>ばうし</sup>ヲ借ルノ因ニ題ス〕伝大槻磐溪作

因みに詩吟では、右の漢詩の承句・転句間に次の和歌を挿入して吟ずる。

「七重八重花は咲けども山吹の　みのひとつだになきぞ悲しき」

(「實の」と「蓑」をかけた) 〔後拾遺和歌集、兼明親王<sup>かねあきら</sup>〕

▼「あはれ教の糸亂れ　隣邦西に我を避く」〔大11『自治の流れは』〕

(「教の糸」とは、中国における儒教の伝統をさすと考えられる。)

「故郷はこゝに滅びぬ」——故郷の彌生ヶ岡は、こうして確かに消え失せてしまうのだと惜別の思いが痛切である。「ぬ」は一般に完了・強意



「故郷の 夢の破れて

目醒れば 暁の色

武蔵野は 西に關け

不二ヶ根に 光さやけし

白銀の 久遠の姿

仰ぎ見る 今日けふの歡たのしみび

射し上る 光ひかりを浴あびびて

新しき 生命いのちの歌うたを

の助動詞とされているが、本質的には、動作・作用・状態の実現を確かなことだと認める、確認・確述の意を表す。そして、過去・現在・未来のいずれにも使われるので、「故郷はこゝに滅びぬ」という表現は、必ずしも記念祭当日に向陵自体が消え失せてしまったと言っているわけではない。

【私見】「故郷の夢の破れて目醒れば暁の色」—— なつかしの故郷「彌生ヶ岡」との別れを惜しむ夢から目覚めて、はっと気がつく、駒場の朝の景色がありありと目に浮かんでくる。(以下、一転して、都の西に開けた広大な武蔵野と永遠に美しく輝く富士山の姿とを讀えながら、新天地駒場への移転に対する期待を歌っている。)

「武蔵野は西に關け 不二ヶ根に光さやけし」—— 駒場移転前の寮歌で、武蔵野と富士山をセットで詠んだ先行例を挙げてみよう。

▼「あした草野の武蔵野に 白雲遠く棚引けば

ゆふべ富嶽の靈峰に 久遠の星斗きらめけば」(昭五『春東海の』)

「新しき生命の歌を」—— 彌生ヶ岡の輝かしい実績を受け継ぐとともに、新天地にふさわしい新たな伝統を築き上げ、新しい生命の息吹をこめた寮歌を生み出して歌い継いでくれることであろう。

262 第四十六回記念祭寮歌『若駒の』（昭11／高見正道 作詞、中寮十六番室 作曲）

263 第四十六回記念祭寮歌『紫の叢雲つきて』（昭11／坂野正高 作詞、宮城幸正 作曲）

264 第四十六回記念祭寮歌『春や朧の夕まぐれ』（昭11／鈴木弘二 作詞、太野垣雅久 作曲）

一 「ほつえの梅のさそひ香に

丘は變れど變りなき」

【解説】「ほつえの梅のさそひ香に」——「ほつえ」は「秀つ枝」で、上の枝。

【私見】「ほつえの梅のさそひ香に」——万葉集卷10三三〇に次の歌がある。

▼「妹がため上枝の梅を手折るとは 下枝の露に濡れにけるかも」

265 第四十六回記念祭寄贈歌『東天淡し』昭11 東北大／長山頼正 作詞、加藤武雄 作曲）

一 「東天淡し星の影

叢雲蠢く杜の上

滔々として廣瀬川

注ぐ大海水清し

旅寝は遠く青葉山

千代の慶告げんとて

鷄聲四方を劈けば

【解説】「旅寝は遠く青葉山」——《言及なし。》

【私見】「旅寝は遠く青葉山」——遠隔地の東北大に進学した一高卒業生の

心情を表現している。

【解説】「千代の慶告げんとて」「生誕歌」「産聲高し」——《言及なし。》

【私見】「千代の慶告げんとて」「生誕歌」「産聲高し」——駒場に一高が移転

し、新しい自治寮が誕生した慶びを東北大在学の一高卒業生に伝えよう

として。「千代」は第四節の「千載の自治」と「千代」仙台との掛詞と

沈黙を破る生誕歌」

二「毅然たる哉柏葉兒

産聲高し檜櫓下

山河變りて影なくも

傳統の光麗かに

理想に聳ゆ泉嶽

白雲深く迷ふとも

友の足跡導とし

彼の頂を極めずや」

三「それ安逸は許されず

人銀鞍に綾衣

考えられる。仙臺の旧名は千代（又は千體）であったが、伊達政宗が当

地に城及び城下町を築くにあたり、「千代」を「仙臺」と改めたという。

「仙臺」の名は唐の韓翃の詩『同題仙遊觀』の冒頭句「仙臺初見五城樓」か

らとつたとされる。「生誕歌」は（自治寮の）誕生日を祝う歌、即ち記念祭

寮歌。第二節の「産聲高し」も新寮の誕生をさす。

【解説】「山河變りて影なくも 傳統の光麗かに」——言及なし。

【私見】「山河變りて影なくも 傳統の光麗かに」——一高が本郷から駒場

に移転しても一高の自治寮の伝統は立派に受け継がれてゆくことを表現

している。

【解説】「理想に聳ゆ泉嶽」——泉嶽は仙台の北方の山。今は仙台市内。

【私見】「理想に聳ゆ泉嶽」——仙台の泉嶽の頂に仮託して自治の理想を追求

してゆこうと呼びかけている。

【解説】「磐石の城築きたり」——《言及なし。》

【私見】「磐石の城築きたり」——ブラームス作曲の『大学祝典序曲』は、ド

腥風慘然襲ふ時

至誠の使命重くして

秋霜踏みて曉天に

磐石の城築きたり

今太陽を仰ぐとき

昨夜の月を忘れめや

四「駒場原頭今日紀念祭

雁傳ふ和樂の音

新しく草薺え初めし

イツの学生歌四曲の独立した旋律を接続した管弦楽曲であるが、その一曲目「Wir hatten gebaut ein statliches Haus」(僕らは立派な学び舎を建てた)という曲がある。作詞者が「磐石の城」と謳ったとき、この学生歌を通してドイツの学生生活に思いを馳せたのではないかとの、朽津耕三氏(一高23理甲)の興味深い見解を伺った。この曲の歌詞は、学び舎の中でのたゆまぬ努力を促すものであり、「大学祝典序曲」という曲の性格からみても、新しい一高の誕生を祝う本寮歌に引用するのにふさわしいと考えられるので、この説に賛同したい。

【解説】「今太陽を仰ぐとき／昨夜の月を忘れめや」——言及なし。

【私見】「今太陽を仰ぐとき／昨夜の月を忘れめや」——今や一高は駒場の太陽を仰いでいるが、これまでの歴史を築いてきた彌生が岡の月のことを、決して忘れることほしない。

【解説】「雁傳ふ和樂の音」——言及なし。

【私見】「雁傳ふ和樂の音」——前漢の蘇武が匈奴に捕えられたとき、雁の足に手紙を結びつけて故郷に送ったという故事(『漢書』蘇武伝)に基いて、

266 第四十六回紀念祭寄贈歌

春や故郷は四十六

南の空は篝火に燃えて

旅の心ぞたぎりゆく

あゝ紅の旗の下

千載の自治誓はんか

手紙や消息のことを雁書、雁信、雁帛、雁の使いなどという。

雁が消息を伝えるという内容の一高寮歌には、この他に第30回寄贈歌

『漁火消えゆき』があるが、『漁火消えゆき』の「北の空」と『東天淡し』

の「南の空」との対照が興味深い。「紅の旗」は護国旗のこと。

▼「故郷に楽しき祝ありと伝ふる雁音北に過ぎぬ」(190 「漁火消えゆき」)

『陽は黄梢に』(昭11千葉醫大／千葉醫大一高會 作詞、岡村治雄 作曲)

一 「陽は黄梢に燃えそめて

淡青の空明くるをり…

白鷺は高く翔るなれ

二 「紅塵ふかき巷より…

星座は皓く刻むなれ

三 「情熱深紅にさす胸の

四 「動き汚濁に染まぬ日の

五 「紺碧かげよふ新潮路

滄溟雲ぞ香かにて

【解説】 本項のテーマについては言及なし。

【私見】 この寮歌は、41 『亞細亜の東』(明37)と並んで、色に関する表現が

きわめて多いことで知られる。

上欄で丸で囲った色は全部で9色になるが、「紺」と「碧」を別に数える

ならば、10色になる。

序

【新墾の此の丘の上  
に移り來し二歳の春

緑なす眞理欣求めつゝ  
萬巻書齋るも空し

永久の昏迷抱きて  
向陵を去る日の近きかな

【私見】「新墾のこの丘の上」——「新墾」は新たに開墾すること。

▼「新治の今作る路さやかに聞きにけるかも妹が上のことを」  
(新治＝新墾) ≪万葉・二・二八五五≫ 柿本人麻呂歌集

駒場を「丘」と表現したことについて、杜甫の「登高」やギリシヤのア

追懐  
おもひで

一 旗薄 野邊に靡きて

片割れの夕月落ちぬ

燦きの星は語らひ

微香る大地囁けど

玉の緒は繫きもあへず

ひたぶらの男の子の苦惱

三つの城燈も消えゆけば

逝きし友そらるる偲はる

クロポリス、ローマの七つの丘等との関連を説く向き（作詞者の弟の隆尚氏『昭19文』の『新墾』あれこれ『向陵』昭63・10）、南松雄氏『昭和12理甲』の『新墾』はかくして生まれた『平8』など）もあるが、欲張りすぎであらう。

「緑なす眞理欣求めつ」と——「緑なす」は、眞理を「常緑」(evergreen)の樹に喩えたもので、「緑なす眞理」とは「不滅の眞理」の意に解したい。▼「眞理の樹緑なす國 いくくにか求めん舟路」(331『群雲を』昭5)

【解説】「旗薄 野邊に靡きて」——「旗薄」は風に靡く穂の意。古く、表記の上からは「はだすき」と濁音だったとする説が近時は有力だが、「はだ」の意味がはっきりしないので問題が残っている。

「片割れの夕月落ちぬ」——「片割れ」は古く平安時代の用例がある。▼「逢ふことは片割れ月の雲隠れ おぼろげにやは人の恋しき」(『拾遺集』「燦きの星は語らひ 微香る大地囁けど」——「天地の神秘黙示は感じさせるけれども(深い懊悩は断ち切ることができな)」の意。

「玉の緒は繫きもあへず」——「逝きし友そらるる偲はる」にかかると、下の句への続き方が聊か舌足らずの感はあるが、『追懐』の一は、精神の

煩悶に殉じた友への挽歌である（作者の弟隆尚氏）という背景を知れば、おのずから歌詞の意味が理解されよう。その友とは、前年昭和11年秋に駒場の中寮で自死した石渡敏行（作者と同じく昭和9年入学）のことを指す。

「ひたぶるの男の子の苦惱」——一見、「序」の「永久の昏迷」を受け  
るかのようだが、実は「逝きし友」（前出）のことを詠んだもの。

「三つの城」——当時は南寮・中寮・北寮のみで、明寮は昭和14年に開設された。

【私見】「旗薄 野邊に靡きて」——「旗薄」は、風に吹かれて、長い穂が旗のように靡いているススキ。「万葉集」などの用字から、「はたすすき」「はたすすき」の両形があつたことは確実とされるが、その両者の関係ははっきりしない。

▼「み雪降る阿騎の大野に旗薄小竹を押し靡べ」《万葉・一・四五 柿本人麻呂》  
はたすすきもとほ

▼「旗薄 本葉もそよに秋風の吹き来る夕に」《万葉・二〇・二六九》

「片割れの夕月落ちぬ」——「片割れ月」は、弦月、弓張り月とも呼ばれ、半月のこと。「片割れの夕月」は「上弦の月」（陰曆7日ごろ）であつて、昼ごろ東より昇り、夕刻に南中し、夜半に西に沈む。これに対し「下



二二「ひた寄する沈淪ほろびの中を

たちかへ

甦よみがへ生る制覇せいぱの戦

祝歌しうかふ若人わかしよの頬ほに

ひとすぢ

一條の涙滴なみだす

望月もちづきの満みつれば虧かくる

嘆なげにも橄欖あけびの梢

弦しづなの月つき（陰曆22日ごろ）は、夜半に東より昇り、暁方に南中し、昼ひるごろに西に沈む。

▼「草より草に沈み行く 片われ月の武藏野に」《161『若紫に』大6》

「燦きらめきの星は語らひ 微香ほのかる大地つち囁ささげど」——星や大地の黙示をいう。

▼「黙示聞けとて星屑は 梢はなこぼれてまたゝきぬ」《30『緑もぞ濃き』明36》

▼「かの大空の明星あかほしも 若き我等に何かせん」《171『朧月夜に仄白く』大7》

▼「愁に沈む胸あらば 地のさゝやきに聴けよ友」《210『しづがね遠く』大14》

「玉の緒は繫つきもあへず」——「玉の緒」は「魂を体に繫つきとめる紐」の意で、命のことをいう。「繫つきもあへず」は、その命を最後まで繫つききれない、ということだ。「逝いきし友」にかかり、「友人の自死」を含蓄している。

【解説】この節のテーマは、端艇部、野球部、陸上運動部、庭球部の四部の対三高戦の勝敗に伴う感情の起伏を歌っている。昭和9年には四部全勝、昭和10年も陸運、端艇、野球と勝ち続け最後の庭球戦も優勢に終わろうとしたとき、三高応援団がテニスコートに乱入して続行不可能となり、応援団同士の乱闘から警官が出動してようやく沈静化するという、前代未聞の不祥事が生じた。このため一旦対三高戦廃止の結論が出たが、翌11年6月

仰ぎつゝ光榮ある城を  
動搖なく守り行かんかな

に至つて復活論者の努力が実つて四部の対三高戦が復活、この年は庭球、端艇、陸運の三部は勝つたが野球部のみ負けた。作者は以上の経過を踏まえて勝敗を望月の満ち虧けに喩えて表現している。

「ひた寄する沈淪の中を 甦生る制覇の戦」——「沈淪」とは「滅亡」の意味ではなく、乱闘を倫理的な意味での「おちぶれ」と見ての表現であり、「甦生る」とは健全な考え方に基く対三高戦の復活を意味している。

「一條の涙滴す」——三部勝利の陰に野球部のみ敗北の涙があつたこと。「檄櫓の梢」——弟隆尚氏によれば、「望月の満つれば虧くる」結果としての敗北の「嘆」を一転して昂然と檄櫓を謳歌することによって、はじめて詩的均衡が保たれたのである、としている。

【私見】「ひた寄する沈淪の中を 甦生る制覇の戦」——「沈淪」とは①深く沈みこむ。②おちぶれる、零落。の意で、寮歌では「ほろび」と訓ませるが、何れも「滅亡」ではなく、「おちぶれ」の意で使われている。

▼「濁世の沈淪を離れ 絶域の岡邊に籠り」(昭11『若駒の嘶く里に』)

▼「杳かなる沈淪の國に 遠つ神人とのらして」(昭22『青旗の』)

この寮歌においては、「解説」の指摘する如く、昭和10年の対三高戦における応援団乱闘事件を倫理的な「おちぶれ」と捉えての表現である。

三「理智咲けるラインのほとり

藝術生すローマの丘に

東帝國の精神の文化

見よ今し流れ出づるを

柏蔭に憩ひし男の子

立て歩め光の中を

國民の重き責任負ひ

五大洲に雄叫びせんか

「望月の滿つれば虧くる」——昭和11年の対三高戦における野球部の敗戦によつて昭和9年・10年の四部全勝が途絶えてしまったことを指す。「嘆にも橄欖の梢」——作者の弟隆尚氏の「詩的均衡」説は、隆尚氏の独自の詩的感性に基く説であつて、作詞者の作意とは別物であらう。「橄欖」については、一高を象徴する「柏」と「橄欖」のうち、「橄欖」を「追懷」第二節に、「柏」を同第三節に配したものと素直に受け止めてはいかがであらうか。

【解説】「理智咲けるラインのほとり」——ドイツの哲学の深奥さを指す。

「藝術生すローマの丘に」——ローマはチベル川左岸の七つの丘を中心

に發展した。この句は特にルネッサンス期のイタリアの芸術の隆盛をいう。

「東帝國の精神の文化」——日本の精神文化を指し、この節の上三句は

「日独防共協定」（昭和11年11月。イタリアは昭和12年11月に参加）の

三国を示す。一見、日独伊三国同盟の国策を擁護しているかに見えるが、

これは当時の世情の一般的雰囲気の表現に過ぎず、国策主義と決めつける

ことはできない。前出の「久遠の思索」、「眞理欣求めつゝ」などの表現を

勘案すると、この数句の作者の眞意は、やはり永遠の眞理追究にあると

みるのが穩当であらう。

弟隆尚氏の解によれば、かかる国際情勢を察知し、それを運命的と観じて、それならこれまでその国から摂取してきた長所、すなわちドイツの学問、イタリアの芸術を今後もまた受容すべきものとして端的に表現したものである、とする。

「立て歩め光の中を」——トルストイの『光あるうちに光の中を歩め』  
(岩波文庫、米川正夫訳) によるものであろう。

【私見】「理智咲けるラインのほとり 藝術生すローマの丘に 東帝國の精神の文化」——この三句が日独伊三国同盟の動向を踏まえていること、及び「東帝國の精神の文化」が「日本の精神文化」を指すことは、その通りであらう。ただし、作者の眞意が「永遠の眞理追求にある」とする「解説」の説明はかなり苦しい。

また、「ドイツの学問、イタリアの芸術を今後もまた受容すべきものとして端的に表現したものである」とする隆尚氏の解では、「東帝國の精神の文化」との関係はどう考えているのかが理解できない。

私見では、「……ローマの丘に」の「に」に着眼し、「東帝國の精神の文化」が「ラインのほとり」と「ローマの丘」に流れ出る、すなわち、日本の精神文化が学問のドイツと芸術のイタリアにも広く行き渡ることを揚言し

たものと解する。

なお、「日本の精神文化」が何を指すのかについては、いろいろな理解がありうるが、私見では、古来の日本人の根底にある精神、すなわち天地自然への畏敬の念、共生と和の心、武士道精神などを指すと考えたい。

ちなみに、井上司朗氏の「高寮歌私観」では、「ドイツを中心とする西欧の近代哲学と科学、伊太利のルネサンス芸術——西洋文化に対し、東洋の、特に日本の精神文化が、逆に深い一つの照明となつてゆくと予言している」とするが、日独伊三国同盟にはあえて言及していない。

「立て歩め光の中を」——米川正夫訳のトルストイ『光あるうちに光の中を歩め』（岩波文庫）の初版は昭和3年に発行された。

「國民の重き責任負ひ 五大洲に雄叫びせんか」——「國民の重き責任負ひ」は、一高生の誇りと真摯な使命感を示していると解するが、思ひ上がったエリート意識の表われだと批判する見方もある。「五大洲」の数え方には複数の説があるが、いずれにせよ、ここでは「世界」の意に使われている。

#### 四 「霞立つ紫の丘 公孫樹道黄葉づる下を

【解説】「公孫樹道黄葉づる下を」——「もみづ」は上代には「もみつ」であったとするのが最近の通説である。因みに「いちよう」は鎌倉期に伝来し

彷徨<sup>さまよ</sup>ひし嘆<sup>なげ</sup>きの胸<sup>むね</sup>に  
久遠<sup>とこよほ</sup>の思<sup>おも</sup>ひはひそむ  
失<sup>は</sup>はし我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が矜<sup>ほこ</sup>恃<sup>り</sup>  
護<sup>まも</sup>り來<sup>き</sup>し傳<sup>つた</sup>統<sup>へ</sup>の法<sup>と</sup>火<sup>も</sup>  
淨<sup>じよ</sup>らかに燃<sup>も</sup>え盛<sup>も</sup>る時<sup>とき</sup>  
繼<sup>つ</sup>ぎゆかな來<sup>き</sup>ん若<sup>わ</sup>人<sup>に</sup>に

た植物で、仮名遣いは從來不明とされ、「いてふ」が多く用いられてきたが、  
近來は「鴨脚」の宋音「イチヤオ」の転とする説（「いちやう」と表記す  
る）も有力である。

「護り來し傳統の法火」——これまでの寮歌で強調されてきたもの、つ  
まり、「護国」の精神、橄欖と柏葉とが象徴する文武両道、自治共同と勤  
儉尚武などの一切を含んでいる。

「繼ぎゆかな來ん若人に」——「な」は、話者の願望を示す上代の終助詞。

▼「梅の花咲きたる園の青柳を鬘<sup>かづら</sup>にしつつ遊び暮らさな」（万葉・五・八三五）  
【私見】「霞立つ紫の丘」——「霞立つ」は霞がかかること。上代には霞と霧  
の区別は明らかでない。中古以降、春のものを霞、秋のものを霧と呼ぶよ  
うになった。作詞者は主に上代語法を用いているため、「霞立つ」の後に  
「黄葉づる」が続くのは不思議ではない。ちなみに、霞色とは、ほんのり  
紫がかった薄い灰色、または、やや青味がかった薄紫色に用いられる表現  
である。

▼「紫烟る丘の上ほのかに浮ぶ明けの星」（198 『紫烟る丘の上』大11）

▼「若紫にうすがすむ三年の丘の春の日よ」（佐賀高・校歌『若紫に』大12）

▼「紫の霞煙れる此の丘に柿は実れり」（府立高『紫の霞煙れる』昭19）

結

「思出は盡す湧きくれ  
逼り來ぬ別離わかれの刻は  
玉蜻かぎろひの夕さり來れば  
暮れ残る時計臺うてなめぐりて  
集あひ寄よる和魂にぎたまの群  
壽ことほぎの酒掬しほまんなかな」

「公孫樹いであみち道黄葉みつる下を」——「公孫樹いであみち道」は一高駒場の敷地を東西に走る銀杏の並木道で、「彌生道」と名づけられ、寮生の思索・逍遙の道であつた。

「護り來し傳統つたへの法火ともし 淨らかに燃え盛る時」——「燃え盛る」とあることから、記念祭の篝火をイメージする向きもあるが、ここでは【解説】の説く如く「自治」をはじめとする一高の諸々の伝統を指すと解する。

▼「傳統つたへの法火ともし守り移し礎いしすえ置きし自治の城」(昭11『春や朧の夕まぐれ』)  
「繼ぎゆかな來ん若人に」——新たに一高に入学してくる後輩たちに、先人の築いてきた輝かしい伝統を引き継いでゆきたいものだ。

【解説】「思出は盡す湧きくれ」——「盡す湧きくれ」の已然形をどう解するかだが、「湧き來れど」と逆説に解するのが文脈からみて穩当と考えられる。上代語法。

「玉蜻かぎろひの夕さり來れば」——「かぎろひ」は春に立つものであるところから「春」「燃ゆ」などにかかることされ、以前は「夕さりくれば」にもかかることされたが、「玉蜻」については、最近は「たまかぎる」と読む説が有力。

▼「玉限(旧訓)「かぎろひの」、近時訓「たまかぎる」)夕さりくれば、み雪降る阿騎の大野に、旗薄小竹を押し靡べ、草枕旅宿りせず、古思ひて」

《万葉・一・四五 柿本人麻呂》

作詞者は、旧訓によってこの歌の句を引用したものとと思われる。

「集ひ寄る和魂の群 壽ことほぎの酒掬まんかな」——感動的な表現であり、終曲としての十二分の効果を挙げている。「和魂」は古くは「にきたまにきたま」、温和な親しむべき魂の意で、「にきみたま」ともいう。ここでは、古典の意味を変容して、穏やかな気持を持った寮友を指していることは明らかであらう。

【私見】「思出は盡す湧きくれ」——「盡す湧きくれ」について、後世の用法にしたがって「盡きすこそ湧きくれ」の「こそ」が省略されたものとする解釈も可能だが、「解説」のように上代の用法にしたがって「湧きくれ」と逆説に解するほうが素直に理解できる。

▼「天つたふ入日いりひさしぬれ大夫と思へるわれも敷袴しきたへの衣の袖は通りて濡れぬ」

「さしぬれ」は、「さしぬれば」「さしぬれど」の両方の解釈が可能

《万葉・二・三五 柿本人麻呂「石見国より妻に別れて上り来し時の歌」》  
「逼り来ぬ別離わかれの刻は」——「序」の向陵をかを去る日の近きかな」と対応



する表現で、駒場キャンパスとの別れをいう。

「玉蜻かぎろひの夕さり來れば」——「玉蜻」及び「玉限」の近時訓が「たまかぎる」であるのは「解説」の説くとおりだが、「解説」の引く歌の原文表記が「玉限夕去來者」であるのに対し、同じく人麻呂作の次の歌では「玉蜻夕去來者」となっている《原文表記は、中西進『万葉集』（講談社文庫）による》ことからすれば、作詞者が引用したのは次の歌の可能性のほうが高いと考える。

▼「玉蜻（旧訓「かぎろひ」の、近時訓「たまかぎる」）夕さり來れば獵人の弓月ゆつきが嶽たけに霞はたすきたなびく」《万葉・一〇・一八二六 柿本人麻呂》

これに対し、「解説」の引く長歌に「旗薄」と「靡く」が登場することから、「追懐」第一節の「旗薄 野邊はたすきに靡きて」との関連で、「解説」の引く長歌を踏まえた可能性を指摘する説（高島俊男氏）もある。

なお、「玉蜻」及び「玉限」の訓みかたの変遷や、作詞者がなぜ「玉蜻の夕さり來れば」としたか等については、高島俊男氏の著書『お言葉ですが…別巻③「漢字検定のアホらしさ」』（連合出版）の「新墾の此の丘の上」の章の中で、多角的にとりあげているので、参照を乞う。

「暮れ残る時計臺うてなめぐりて 集にぎひ寄よる和魂にぎたまの群」——井上司朗氏は「一

【補論】

—— 高寮歌私観』の中で、「多年短歌で鍛えた描写力を示す」と評している。

① 「駒場の『玉杯』——『新壘』は発表当初から寮生に愛唱され、いつしか駒場時代に生まれた寮歌の代表という意味で、「駒場の『玉杯』」と称されるようになった。作詞者の田中隆行氏（昭12理乙）は、動物学志望ながら文才にも恵まれ、陸上運動部の槍投げの選手でもあった。病を得て昭和18年に惜しくも早世された。ちなみに同氏は、『新壘』の作曲について自らも応募したが落選し、服部正夫氏の曲が当選となった。

② 作曲者服部正夫氏（昭12理甲）——二年前にも『橄欖香る』を作曲し、楽才を示したが、この『新壘』の大作に意欲的に取り組んだ。同氏によると、「歌詞の調子は前後部分と中心部とが完全に分かれていて、苦心のあげく長調↓短調↓長調の同位変調によって表現したが、低音部G、高音部Eという、一般声域では限界的な歌となつて、後のニックネーム〈消耗歌〉の由来となった。」（『向陵駒場』10巻2号、昭43・4）

③ 島内龍起氏による『新壘』批判——島内龍起氏（昭5文甲）が『向陵』〈26巻1号、昭59・4〉に寄せた一文の中で、駒場の代表寮歌とされる『新壘』は、自信に充ち率直で何のかげりもなかった本郷時代の寮歌とは全く趣を異にし、やがて亡んだ一高の運命を予感させる挽歌のように感ぜられる、ただ作曲の見事さにより荘重と寂寥と哀切の感を以て人の心を打つのみ、と主張した。これに対し井上司朗氏（大13文乙）は二年後の同誌上で、およそ詩歌、文学作品が時代性を反映するのは当然であり、近代日本の興隆期の恵まれた環境にあった寮生と異なり、召集出征の運命が待ちうけ、青春の断絶の危惧が胸によどむ当時の学徒の境遇と心情をこれほどよく表現した詩は少ないと『新壘』を高く評価し、島内説に反論した。その一方で井

上氏は、「言語感覚の不備不熟と詩情の発酵不足」という視点から『新墾』を批判している。『向陵』28巻1号、昭61・4（↓次項参照）

④井上司朗氏の批判に対する作詞者の弟隆尚氏の反論——井上氏が、万葉語の過剰な使用、無理なルビの使用を例に引いて「対象をあくまで言葉で的確に把握することよりの逃避」と評したのに対して作詞者の弟の隆尚氏（昭19文乙）は、この寮歌は「現実の事実をふまえながら象徴的に表現」する手法を用いたのが特色であり、井上氏はその手法を認識しなかったのであるとするともに、「万葉語の過剰な使用」は見解の相違にすぎず、「無理なルビの使用」は明治以来一般に行われたもので、作者ひとりの負うべきあやまちではないと反論する。また、「理智咲けるラインのほとり 藝術生すローマの丘に 東帝国の精神の文化」について井上氏が、「西欧の近代史、中世、古代史の正確な知識があやふまれる」、「東帝国とは東ローマ帝国、ビザンチン帝国とその文化を指すのか、或は、東洋の帝国の日本文化を指すのか」と評した点について隆尚氏は、井上氏が当時の情勢の反映を認識していないとして、強く反発している。

『新墾』あれこれ 『向陵』30巻2号、昭63・10（『

⑤他校の寮歌への影響——浦和高校の寮歌『武蔵野の瑤沙ヶ丘に』（昭19）は、「序、一、二、三、結」という構成で、「序」の「ひたぶるに眞理欣求めつと」、「一」の「風薫る紫の丘」、「守り來し故郷の丘」、「三」の「征きし友そとる偲ばれ」、「結」の「集ひ來る心の友と」など、『新墾』を踏まえた詩句がちりばめられている。また、北大予科の『湖に星の散るなり』（昭16）の第四節は、「立て歩め光の中を 國民の重き責任負ひ燦きの星辰は語らひ 微香る大地囁きぬ 甦生る制覇のいくさ 祝歌ふ吾等が双頬に 失はじ我等が矜持

護り來し傳統の法火 淨らかに燃え熾る刻 繼ぎゆかな來ん若人に」と、『新藝』の詩句のオンパレードである。小菅高之氏(北大予科20 医類修了)編の『旅の歌集』に収録されたこの寮歌には、小菅氏によつて、「四番は、一高寮歌『新藝の』(昭和十二年)を感銘の余り本歌取りしたものと考える。」との注が付されている。

一 「退けくも移ろひゆけば」

生活の心も萎ぬに

慰撫の優しきまゝを

懦き子は漂ひ去れり

燃え熾る忿怒抱きて

壯大なる日の

没つ見れば

わが胸は叫びと化しぬ

行くべきの所よいづこ

【解説】第一節の最初の四行で指摘しているのは、堅固な意志と自覚に欠けた人たちが、左翼思想の弾圧、軍国主義の擡頭、享楽主義の世相・風潮などでありに流される姿である。後半の四行は、そうした時勢に対する心からの忿怒・叫びにはかならない。なお、第一句の主語が何か明確でない。第三・四句の「慰撫の優しきまゝを 懦き子は漂ひ去れり」は難解で、甘い誘惑のままに安きに流されたの意か、確かでない。

【私見】「退けくも」は久しいこと、「移ろひゆけば」は時世の変化をさすと解する。「心も萎ぬに」は心もしおれての意。「慰撫」と「いざなひ」とでは意味が重ならず難解。「懦き子」は、臆病、いくじなしの意。

後半の四行の歌意は【解説】の通りだが、「壯大なる日の没つ」という表現は、当時の一高生が抱いていた「真理の自由な探求という高い理想」を意味し、それが打ち砕かれたことによる思想の混乱への嘆き・怒りの二

ユアンスが色濃く反映していると考えられる。そうした心象風景は、この寮歌の少し前に登場した次の二つの寮歌とも共通している。

▼231 『群雲を』(昭5／鎌田道一)

一 「群雲を紅染めて 天つ日は輝き落ちぬ

水や空界も知らず ひと色に暮るゝ蒼海」

▼249 『縁なす』(昭9 東大／杉浦明平)

一 「縁なす草野の上に かざやきし日はしづみゆき

光なき夜は来りぬと なげく時代我は生まれて」

《参考①》朽津耕三氏(23理甲)は、「いい歌なのに、一番の歌詞がちよつと馴染みにくいため、余り歌われなかったのは残念」とされる。

《参考②》井下登喜男氏(26文丙)によると、第一節は入学時、第二節は一年生、第三節は二年生、第四節は三年生、第五節は記念祭を暗喩しているとの説があるとされる。

二 「快樂の音呼べど空ろに  
壹 求め丘に登れば

泉あり生命の唄は

しばし聞け流れの辭

【解説】第二節は、主としてアメリカから流れ込んできた快樂主義の空白に反発して、真実を求めて向陵(二高)に学ぶ者の心情の表白である。

【私見】「壹求め」以下の歌詞は、「泉あり生命の唄は」と続くのではなく、「壹求め丘に登れば泉あり」で切り、「生命の唄は(しばし聞け)流れの辭」と

「ものすべて

あるがまゝ見よ」

タチラヒ

漂泊の疲れはあれど

滾り落つ涙もて見し

力ある永遠の光よ」

と続くところさえ、「ものすべてあるがまゝ見よ」が「流れの辞」の中身であると解したい。その方が一連の歌詞の意味が理解しやすいと考える。

「泉あり」の「泉」とは、向陵を「永遠の生命が湧き出る泉」に喩えたものである。そしてその後が続く「生命の唄」、「流れの辞」、「涙もて見し永遠の光」などの言葉は宗教的な色彩も感じとれることから、旧約聖書詩篇にいう「いのちの泉（生命の泉）」との関連性も十分考えられよう。

▼ 「いのちの泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によつて光を見る」(旧約聖書・詩篇 36・9) (注：あなた⇨神、光⇨神の栄光) なお、「生命の泉」という表現は、一高寮歌にも何度か登場する。

▼ 「生命の泉涸れやせん」(95 『煙に似たる』明43)

▼ 「生命の井泉汲み交し」(194 『春未だ若き』大10 東大)

▼ 「淋しさはあゝ生命の泉」(199 『流れ行く』大12)

▼ 「生命の泉湧き出でて 光は来る永劫に」(210 『しろがね遠く』大14)

▼ 「生命の泉緑の野 露けき丘の故郷に」(214 『生命の泉』大15 東大)

「ものすべてあるがまゝ見よ」——「現実を直視し、しかもそれを愛することがこの世のヒロイズム」と説いたロマン・ローランの「現実直視の勇氣」を踏まえていると解する。

三「橄欖の葉陰洩る陽光に  
蒼穹高き時計臺仰げば

先人の理想は満ちて  
永劫の啓示囁く

偽世の荊棘斬りつゝ  
聖なる字撒きゆけと

若き日の胸高鳴る

はや來ずや創造の黎明

四「追憶の波も何時しか  
忍びよる別れの曲

この聲の丘を去るとも

彌優る聲の續きて

▼「真実だ！真実だ！目を大きくひらき、すべての毛孔から生の全能なる息吹きを吸いこみ、事物をあるがままに見、不幸を真つ向から見すえ、そして笑うことだ！」《ロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』(山口三夫訳)》

【解説】第三節は、向陵に張りあふれている伝統的な理想主義的精神の永遠の啓示であり、絶対に虚偽を嫌い清らかな精神に生きようとする者の胸の高鳴りである。

【私見】「偽世の荊棘斬りつゝ」—— 30『縁もぞ濃き』の第二節に「偽善は花の刺にして」と、第五節に「彼の荊棘を刈らんとて」とあるのを受ける。

「聖なる字撒きゆけと」—— 新約聖書『マタイによる福音書』第13章に「良い種を播く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。」とある。

▼「六つの城邊に零れけむ 希望の種子や萌えいでし」

《170『うらゝにもゆる』大7／橋爪健》

【解説】第四節では、卒業間近な自分たちがこの丘を去った後も、彌優る高邁な精神によってこの丘の伝統を護ってくれるであろう後輩たちに応えて、無自覚で軽佻浮薄な俗世間(「濁世」)に対する戦いに進んで立ち向かうであろうことを誓っている。

守るなり故郷の丘

いざさらば若き友等に

濁世の勝鬨誓ひ

新しき鬨に進かむ

## 五 「爽かに流れ行け風

喜びの祭ぞ今宵

緑葉はさゆらぎ萌えて

幾数の自治燈ゆらぐ

過りゆく青春も我等と

あひとともに希望に舞ひて

伝へこし焔は星夜に

讃歌丘にあふれよ

【私見】「この聲の丘を去るとも 彌優る聲の續きて」——「別れの曲」に続

いて「この聲」「彌優る聲」とあることから、一般的な伝統だけでなく、寮生活と切り離せない「寮歌」の伝統を受け継ぎ、さらに発展させることへの期待をも含意していると解する。

「濁世の勝鬨誓ひ 新しき鬨に進かむ」——この寮歌に限ったことで

はないが、寮外の世間（大学を含めて）は全て「濁世」であると位置づけ、

寮で得た自己をひっさげて新たな人生の戦いに出てゆく覚悟を述べている。

【解説】《第五節については、全く言及されていない。なお本寮歌が「新壘」

のように愛唱歌とならなかった原因について、詩句の一部に難解な箇所が

存在することと、作曲は同じ服部正夫の手に成るものの、高誦される歌と

しての魅力の点で「新壘」に及ばなかったこと、の二点を挙げている。《

【私見】「過りゆく青春も我等と」——「過りゆく青春」は難解で、「過ぎ去っ

てゆく春」のことか、「再びめぐってくる春」を指すのか、はっきりしな

い。「過」を「かへる」と訓ませることも不審である。「青春も我等と」は

昭和12年1月の「高同窓会報」によれば、「青春し我等と」と表記されてお

り、これに従うのが妥当と考える。（昭和14年版以降昭和42年版までの寮歌集で

は「青春し我等と」、昭和50年版と平成16年版寮歌集では「青春も我等と」とある。）



一 「春尚淺き武蔵野の

籬落かきに雪は残れども

見よ芳草は萌えいでて

新時代あらたなるよを告げむとす

昏迷こゝろの冬今去りて

希望きぼうの曉鐘かは鳴り出でぬ」

【解説】「春尚淺き武蔵野の籬落に雪は残れども」——「籬落」は、竹・柴など

で編んだ垣。その垣にはまだ雪が残っている。

【私見】「春尚淺き武蔵野の籬落に雪は残れども」——西行の次の歌『山家

集』所収)を下敷きにしたものか。

▼「春淺き篠(すず)の籬に風冴えて まだ雪消えぬしがらきの里」

【解説】「新時代」(第一節)、「新世」(第二節)——具体的には説明なし。

【私見】「新時代」(第一節)、「新世」(第二節)——一高の駒場移転、東洋及

び世界の新情勢、皇紀二千六百年が近いことなどによる新時代幕開けの予

感と一高生としての使命感を示す。

二 「嗚呼錦繡の夢醒めて

銀甲鎧ぎんこうふ秋は来ぬ

澆季しやうきの闇に蒼生そうせいは

ひかり無き日を喘ぐとき

我等求道もとみちに懈怠けたいして

【解説】「嗚呼錦繡の夢醒めて 銀甲鎧ふ秋は来ぬ」——奢侈への夢は捨てて

勤儉尚武を第一に尊ぶべき時代との認識。

【私見】「錦繡の夢」は『嗚呼玉杯』の「治安の夢」と同じ趣旨。「銀甲鎧ふ」

は解説の説く如く「勤儉尚武」を意味する。なお、晩翠に次の詩がある。

▼「銀甲堅くよろこども」《晩翠・「天地有情」『星落秋風五丈原』

誰が新世界を導かむ」

三「友よ銜氣の語を言ひて

曲學阿世を追従ふ勿れ

慨世の言大呼して

黄吻虹を成す勿れ

熱き祈りに欣求るは

清き眞理の途なれば」

【解説】「澆季の闇に蒼生は ひかり無き日を喘ぐとき」——「澆季」の「澆」は軽薄、「季」は「末」の意。人情軽薄な末の世に、多数の人々は、の意。「ひかり無き日」には言及なし。

【私見】「ひかり無き日を喘ぐとき」は、政治的・思想的・社会的な、当時の時代背景を表現している。寮歌249『緑なす』（昭9）第一節を参照。

▼「光なき夜は來りぬと なげく時代我は生まれて」

【解説】&【私見】 「銜氣の語」「曲學阿世」「黄吻虹を成す」——自分の才能をみせびらかした言葉を吐いたり、時勢におもねったり、大言壮語したりするようなことは、「清き眞理」を求め、道ではないとして、痛烈に批判している。

【解説】「曲學阿世を追従ふ勿れ」——ゆがめた学問を以て時勢や権力者におもねることはないようにせよ。

▼「公孫子務三正學以言 無二曲學以阿レ世」(『史記』儒林伝)『私見』「曲學阿世を追従ふ勿れ」——「曲學阿世」については、113『天龍眠る』(第22回、明治45年)の項の【私見】で詳細に説明してあるので、

「参照をお願いしたい。

四

「海の彼岸に蜂起りたる  
現世快樂と呼ぶ聲は  
燎原の火と燃ゆるとも  
堅き志操の搖がんや  
凜寒霜の威に堪ふる  
松の翠を我知れり」

五

「創業事は難けれど  
塵寰遠き新城に  
闌干星の輝きて  
松籟天に嘯けば  
出陣を誓ふ男の子等の  
断腸夜半の叫びかな」

【解説】「海の彼岸に蜂起りたる 現世快樂と呼ぶ聲は」——何を指すのか、  
具体的には不詳。

【私見】「海の彼岸に蜂起りたる 現世快樂と呼ぶ聲は」——大正末期から昭和  
初期にかけて、主としてアメリカから流れこんできた享樂志向、すなわち

モボモガの出現、エログロ・ナンセンスという世相・風潮を指す。

【解説】「凜寒霜の威に堪ふる 松の翠を我知れり」——《言及なし》

【私見】「凜寒霜の威に堪ふる 松の翠を我知れり」——「凜寒」は厳しい寒

さ。「霜威」は霜の冷気が草木を枯らす威力。

▼「松柏之姿経レ霜猶茂、蒲柳常質望レ秋先零」(晋書「顧悦之伝」)  
《早くから白髪だった東晋の顧悦が同年の簡文帝の問いに答えた言葉。》

【解説】& 【私見】「塵寰遠き新城に」——けがれた俗世間を遠く離れた一  
高駒場の新寮を指す。

【解説】「闌干星の輝きて」——縦横に入り乱れている星があざやかに輝いて  
いる。

【私見】「闌干星の輝きて」——「闌干」には「入り乱れるさま」の意もある  
が、ここでは、星がきらきらと輝くさまをいうと解する。

六 「星霜此處に四十七

今宵祝宴の自治の城

奇しき縁に結ばれて

丘に上りし若人よ

別離の歌を高誦して

羽觴を月に飛ばさなむ

【解説】「羽觴を月に飛ばさなむ」——唐・李白の「春夜宴スルノ桃李園ノ序」

に「開キテ瓊筵ヲ以坐レ花ニ 飛バシテ羽觴ヲ而醉レ月ニ」とある。「羽觴」はさかず

き。もとは雀の形に作った酒杯。その「羽觴」に合わせて「飛ばす」とい

ったが、次々に回す意である。

【私見】「羽觴を飛ばす」というのは、盛んに杯のやりとりをすること。

270 第四十七回記念祭寄贈歌『武藏野の』（昭12東大／山中清一 作詞、一條 茂 作曲）

271 第四十七回記念祭寄贈歌『春の日晷に』（昭12東北大／橋本壽一 作詞、岡村治雄 作曲）

一 春の日晷ひかげに青葉なる

丘のほとりに假睡まじろめば

二 「潤谷たにの鶯うぐひす古聲こせい老らいて

歡喜よろこび傳ひぶ由よしもがな

假寝かりねの旅たびに彷徨たぐひへば

初音はつねの郭公くわくこうに託たくさんか

【解説】「春の日晷に……丘のほとりに假睡めば」——《言及なし》

【私見】「春の日晷に……丘のほとりに假睡めば」——花袋に次の詩がある。

▼「春の日かげのどけきに……うらの山へとのぼりしが」《花袋「眺望」》

【解説】「潤谷の鶯古聲老いて」——「潤」は谷川。「鶯舌」は鶯の鳴き聲。

「初音の郭公に託さんか」——初めて鳴くホトトギスに喜びを託そう。

【私見】「潤谷の鶯古聲老いて……初音の郭公に託さんか」の表現は、次を典

拠としている。

五「星飛ぶ夕べ月黒く

鳥聲闇に喧びすし

人の社會静寂聲もなく  
若き憤慨を誰か知る

▼「潤谷の鶯舌聲老いて、初音ゆかしき郭公／＼」  
かみこて せうごくす ほんごう

▼「やよや待て山郭公ことづてん／われ世の中に住みわびぬとよ」  
をり知りかほにつげわたる へい家物語卷7竹生鳥詣

《古今集・みくにのまち》

【解説】「星飛ぶ夕べ月黒く」——《言及なし。》

【私見】「星飛ぶ夕べ月黒く」——「星飛ぶ」は流れ星、「月黒く」は月食を象

徴していると解されることから、当時のまがまがしい不吉な世相を含蓄し  
ているのであろう。

▼「星々はみだれとびかひ／まがつ気のただよふままに／

ひとのよはゆく／しらぬを」《317『日のしづく』昭24／後藤昌次郎》

【解説】「鳥聲闇に喧びすし」——ふくろうの鳴く声が、闇にうるさく聞こえ  
てくる。

【私見】「鳥聲闇に喧びすし」——「ただけしい悪鳥」とされるフクロウの  
鳴き声が闇にうるさく聞こえる、ということから、昭和11年の二・二六  
事件を起こした当時の軍部に対する怒りを暗喩していると解する。

273 第四十八回紀念祭祭歌『蒼溟の』(昭13 / 服部達也 作詞、井上 孝作曲)

五 「朔北砲音響き」

波騒ぐ黄河の邊

荒鷲は疾風に翔り

長江に血潮彩る」

【解説】「朔北砲音響き 波騒ぐ黄河の邊」——「黄河」の説明のみ。

「荒鷲は疾風に翔り 長江に血潮彩る」——「長江」の説明のみ。

【私見】「朔北砲音響き 波騒ぐ黄河の邊」——前年7月7日に発生した蘆

溝橋事件を含意していると解する。

「荒鷲は疾風に翔り 長江に血潮彩る」——前年12月13日の南京占

領による流血を含意していると解する。

274 第四十八回紀念祭寄贈歌『雪鎖す』(昭13 東大 / 遠藤湘吉・浅原英夫 作詞、柳 宗玄 作曲)

一 「雪鎖す」

限涯の曠野に

仄かなる

道も絶えたり

白き風

地を掠め荒れ

堅氷に

【解説】この二人の作詞者のタイアップはこれが二回目であるが、前作の「遐

けくも」(昭12)と同様の思想的詠歌であり、「雪鎖す」「堅氷」「風」「冬

雲」など冷厳 荒涼たる自然のイメージによって、日支事変に突入した日

本の社会的・思想的状況、自由の抑圧、人間性の抑圧に基く荒廢を暗に批

判的に浮かび上がらせ、これらと闘って充実した生命の輝きを發揮する使

命は一に若き柏樹(＝高生)の熱情にかかっていることを、凝縮的に鋭

く詠出している。

流れも熄みぬ」

二「唯こゝに

孤り雄々しく

愈筋ゆる

熱情を汲みて

生命充つ

根をぞ展ぶ可し

汝こそは

若き柏樹」

三「雪、氷

はたまた嵐

稔りなき

関の最中さなかに

幾そ數

苦闘超えて

冬雲凌くもぎ

榮光によはんひかり」

【私見】この寮歌が作られた前年の昭和12年1月号の「中央公論」に発表さ

れた高村光太郎の『堅氷いたる』という詩の影響を受けたと見られる。

《この点につき、井下登喜男氏（昭26文内）のご示唆を得た。》

▼『堅氷いたる』

「乾の方百四十度を越えて凜冽の寒波は来る

書は焚くべし、儒生の口は箝すべし。

つんぼのやうな萬民の頭の上に

左まんじの旗は瞬刻にひるがへる。

世界を二つに引裂くもの、

アラゴンの平野カタロニヤの丘に満ち、

いま朔風は山西の邊疆にまき起る。

自然の數字は嚴として進みやまない。

漲る生きものは地上を蝕みつくした。

この球体を清淨にかへすため

ああもう一度氷河時代をよばうとするか。

晝は小春日和、夜は極寒。

四「いざさらば

力に狂ふ

永劫とこしへの

冬こそ續け

新芽吹く

春は來ずとも

汝こそは

若き柏樹」

今朝も見渡すかぎり民家の屋根は霜だ。

堅氷いたる、堅氷いたる。

むしろ氷河時代よこの世を襲へ。

どういふほんとの人間の種が、

どうしてそこに生き残るかを大地は見やう。」（傍線は筆者）

高村光太郎は冬の厳しさを愛し、「冬の詩人」と呼ばれるほど冬の詩をたくさん作っている。「道程」の『冬が来た』、『冬の詩』、『冬の送別』、『猛獣篇』の『冬の奴』、『冬の言葉』などであり、『堅氷いたる』もその系列に入ると言えよう。

▼『冬が来た』の一節

「きつぱりと冬が来た……（中略）……

きりきりともみ込むやうな冬が来た

人にいやがられる冬 草木に背かれ、蟲類に逃げられる冬が来た

冬よ 僕に來い、僕に來い 僕は冬の力、冬は僕の餌食だ。」

吉本隆明によれば、『堅氷いたる』の詩は、「ドイツファシズムの文化破壊にたいして、痛烈な批判をかませるとともに、西安事件を中心とする極



275 第四十八回紀念祭寄贈歌『春こそは』（昭13 東大／坂野正高 作詞作曲）

五「今宵こそ友が手をとり

相抱き共に歌はん

「我等こそげに我等こそ

人の世の苦惱に生きん」

東の危機をひとみを凝らして視つめている」とする《講談社文芸文庫、吉本隆明『高村光太郎』141ページ》。その限りでは、『堅氷いたる』にみられる高村の急進的ヒューマニストとしての視座と、本寮歌の作詞者のそれとは共通するものが伺われる。しかし高村は、昭和12年7月にはじまった「支那事変」を契機に、積極的に戦争協力の方針を打ち出した。すなわち高村は、以後、明らかに本寮歌の作詞者とは異なる道を行つたことになろう。吉本によれば、「高村には、ナチスの抬頭も西安事件もひとしなみに歴史的事件というよりも自然の数字のように必然とみえたのである」と述べるとともに、「高村の戦争肯定のモラルとロジック……のきざしを『堅氷いたる』の後半にあらわれている、つよい超越的な倫理感にもとめざるをえない」と指摘している（吉本、同書144ページ）。

【解説】「我等こそ……／人の世の苦惱に生きん」——《言及なし》

【私見】「我等こそ……／人の世の苦惱に生きん」——ゲーテの作品『ファウスト』第一部において、悪魔のメフィストフェレスと手を握ったあとでファウストが語る次の言葉は「考える人」から「行動する人」への変

276 第四十八回記念祭寄贈歌

一 「夕霧は港閉させり

漁火の緋あけに燃えぬる

今宵また出洲の汀に

三つ年の夢路辿りて

高誦さむ故郷の歌」

身（「ゲ」テ自身の人間観）を示しており、これを踏まえた表現であろう。

▼「これから甘んじてどんな苦痛をも迎へて、

人間全体の受くべき咎のものを

この内の我で受けて味はって見やう。

この己の靈で人間の最上のもので深甚のものを捉へて、

歓喜をも苦痛をも此胸の中に積んで、

此自我を即人生になるまで擴大して、

遂にはその人生と云ふものと同じく、滅びて見やう。」《森鷗外訳》

『夕霧は』（昭13 千葉医大／千葉医大一高会 作詞、田崎 茂・内海 淳 作曲）

【解説】「漁火の緋に燃えぬる」——《言及なし》

【私見】「漁火の緋に燃えぬる」——寮歌集初出当時から歌詞では「漁火の」、

楽譜では「いさりびは」と表記が異なっているため論争の種になっている

が、歌詞の通り「漁火の」が正しいと考える。「の」は主語を示し、「の」

に対応する述語は連体形で止まることを原則とする。「ぬる」の次に「い

みじ」又は「をかし」を補って読むとわかりやすい。

▼「ほととぎすの、二声ばかり鳴きて渡る」（源氏・蜻蛉）

二「葛城の丘の静寂に

星屑は木梢に揺れぬ」

三「旅ゆけば房總の荒磯

黒潮は岩頭に猛けぬ

皇軍の雄圖語れば

みづたまに嘯く胸ぞ

雄心を永遠に宿すか」

四「青駒の嘶く里は

緑なす杜の樹蔭に

建設時代の光榮ぞ担へる

若人よ理想に燃えて

謳はなむ紀念の祭」

これに対し「は」は、主題を提示したり、ある事柄を他から区別して取り立てて述べる用法の係助詞で、終止形で止まるのが原則である。この寮歌の第二節の第二句及び第三節の第二句はいずれもその例である。

▼「星屑は木梢に揺れぬ」《第二節の第二句》

▼「黒潮は岩頭に猛けぬ」《第三節の第二句》

【解説】「皇軍の雄圖」「みづたま」——《言及なし》

【私見】「皇軍の雄圖」——「雄図」は「未来」であり、「いさを」は結果としての勲功を指す表現なので、フリガナとして不自然であろう。

「みづたま」——ここでは岩頭に碎け散った「波しぶき」を指す。

ちなみに「嘯く」は「口ずさむ」又は「口笛を吹く」の意。

【解説】「建設時代」——《言及なし》

【私見】「建設時代」——このフリガナも難解である。「継ぐ」あるいは「次ぐ」だとすれば、「新しい一高を作つてゆく」これからの時代」という意味になろう。文字通り「建設」の時代のことだとすれば、その「建設」というのは、当時の国家的スローガンであった「東亜新秩序の建設」をさすとも考えられるので、「建設時代」とは「建設の時代」あるいは「築く」の

五「新草の萌えなむ野邊に

天そめる時計臺仰ぎて

紅の護國旗の下に

若人よ誇りに充ちて

歌はなむ紀念の祭」

277 第四十九回紀念祭寮歌『光ほのかに丘の上

一「光ほのかに丘の上

黙示の星の瞬けば

時代」の意味だと解することは如何であろうか。

▼「建設の鐘は鳴り初めぬ」《287 『瑞雲罩むる九重に』昭15》

▼「朗らかな建設の音 受けつがば榮えを守りて」《284 『清らかに』昭15》

【解説】「天そめる時計臺」「護國旗」——《言及なし》

【私見】「天そめる時計臺」——「天そめる」は不可解な表現。「染む」あ

るいは「初む」ならば活用形は「そむる」となるが、意味不明である。

寮歌集では当初から「天そめる」という表記になっているが、「天そそる」

(「天に向かつてそびえたつ」の誤植であろう。一高寮歌の中にもその判

断の材料となる歌詞がある。

▼「天そより立つ富士の峰の／高き姿を姿にて」《33 「弥生が岡に」明36》

▼「天そよる高き塔／ひたぶるに築き来しかな」《285 「巖白禱の」昭15》

「護國旗」——フリガナはないが、語調からみて、「ミハタ」と訓する

のが好ましい。《参考》「朱燃ゆる護國旗の風に」《307 『嗚呼永久の』昭19》

【解説】第一節には、神秘的に空に瞬く星、暗中に漂う桜花の香り、夢現の

感に人心 を誘う朧月、そしてそれらに合わさって闇を通して低く聞こえ

る

彌生岡に夜は更けて  
風爛漫の花を吹き  
甘き香の流れては  
夢は現か臙月  
低く嘯く歌聲に  
若き心の痛む哉

てくる歌声等が歓喜する、春の夜の彌生岡（現実には駒場の向陵）の雰囲気が、一種の哀感をもって詠み出されている。「黙示の星の瞬けば」には明らかに、『縁もぞ濃き』（明36）の中の「黙示聞けとて星屑は梢こぼれて瞬を踏まえており、したがってこの第一節全体は実景の描写ではなく、半ば夢幻の境を喚起しようとしている。

【私見】「光ほのかに」——「ほのかに」は、ぼんやりと、うっすらと。「光ほのかに」は「黙示の星の瞬けば」を修飾していると解する。また「黙示の星の瞬けば」は、「解説」も指摘するように、『縁もぞ濃き』の歌詞を踏まえている。

▼「灯はほのかにまたたきて」（灯火はかすかにちらちらして）《源氏・夕顔》  
「彌生岡に夜は更けて 風爛漫の花を吹き」——次の寮歌を踏まえたものか。

▼「武香が岡に春長けて……風橄欖の花を吹き」《武香が岡に》（明38）  
なお、「爛漫の花を吹く風」とは、いわゆる「花散らしの風」であろう。

▼「花散らす風の宿りは誰か知る 我に教へよ行きてうらみむ」《古今・素性》  
「夢は現か臙月」——「夢か現か幻か」の情景を「臙月」で表現している。  
「嘯く」——詩歌を吟ずること。ここでは、寮歌を歌っているのであろう。

二「夢遙かなる石山の

瀬田の唐橋仰ぎつゝ

意氣天を衝く若人が

凱歌を擧げし歡びや

祝ひの酒に微酔ひて

せゝらぐ岸邊に佇めば

晝の戦の跡もなく

月影冴えて銀と散る」

【解説】第二節は明らかに、昭和13年8月13日、琵琶湖から流れ出る瀬田川

で行われた対三高戦で、端艇部が圧倒的な勝利を占めた事実に基づいている

が、「せゝらぐ岸邊に佇めば……月影冴えて銀と散る」と詠んでいるのは、

第一節の雰囲気と照応しており、そこにこの作詞者の繊細な詩心の表れが

見て取れる。

【私見】「夢遙かなる石山の……」——「遙かなる」は「夢」の述語ではなく、

「石山」の修飾語であろう。すなわち、「遙かなる石山の瀬田の唐橋」付近

で行われた対三高戦ボートレースでの勝利の歡びを、今でも「夢」である

かのように思い起こしていると解したい。「石山」は「石山の秋月」、「瀬

田」は「瀬田の夕照」として、いずれも近江八景に入っている。

「意氣天を衝く若人が 凱歌を擧げし歡びや」——この年の対三高戦

は、陸運戦は東京、他の三部戦は京都で行うこととなったが、陸運（7月

12日、一高は判定に抗議して棄権、庭球（8月12日）、野球（8月14

日）とも一高が敗れたのに対し、8月13日に瀬田川で行われた端艇戦で

は一高が15艇身差で圧倒的勝利を収め、約二百名の一高応援団は歡喜に

沸いた。

作詞者の千葉保胤（当時理甲2年）は理科端艇部員で、昭和13年の対

三「銀杏も散りぬ彌生道

獨り靜かに逍遙へば

科競漕では理チャンの四番手を、14年には大チャンのマネージャーをつとめた。したがって、対三高戦の勝利に対する思い入れが強いことはいうなずける。

(注) チャンはチャンピオン、大チャンは対外競漕クルーの通称でグラ  
ドチャンピオンの意。

「祝ひの酒に微酔ひて」——一高応援団の祝勝会は、瀬田唐橋近くの  
茶店「広梅」の前庭で開かれた。

「晝の戦の跡もなく」——『向陵誌一高応援団史』によると、瀬田川  
における応援合戦は午後3時頃から始まった。一高応援団は大小三十有  
余の伝馬船に乗り込み、三高応援団の十数艘の和船と対峙し、熱狂的な  
応援合戦を繰り広げた。レースのスタートは午後6時近くとあるから、「晝  
の戦」とは、ここではむしろ、両校の応援団による応援合戦を主眼とした  
表現だと思われる。

「月影冴えて銀と散る」——石山が月の名所であることを踏まえた表  
現であろう。

【解説】第三節は、第一節の春、第二節の夏を受けて、今度ははっきりと駒場  
向陵の寮生が最も散策を好んだ「彌生道」を場に設けて、秋の詩情に駒場

霧しのび寄る秋の暮  
想ひは床し三星霜みせいさう  
時は流れて歳は逝き  
丘を去る日は近けれど  
我は歎息なげかじ柏葉兒  
永遠に慕はん武香陵

移転三年目の感懐を重ね合わせて、秀れたリリシズムを發揮している。作曲は旋律の妙といい、三拍子↓四拍子↓三拍子というリズムの転換といい、品質が高く、当時の音楽好きの寮生には、三番までがよく歌われた。【私見】「光ほのかに」は東大駒場寮でもよく歌われた。「わたしの愛唱する一高寮歌」という詠帰会内のアンケート（平成20年）でも第4位にランクされている。

「銀杏も散りぬ彌生道」——「彌生道」は一高駒場の敷地を東西に走る銀杏の並木道で、農学部時代は農学部中通りあるいは駒場大路と呼ばれた。『東大農学部の歴史・歴史写真館』（東大HP）、「第一高等学校六十年史」によると、一高が駒場に移転した昭和10年9月14日に新寮舎の命名式を行うとともに、「併せて敷地内を東西に走る銀杏の並木道を彌生道と名付くこととせり」とある。これに対し『第一高等学校自治寮六十年史年表』では、昭和11年2月1日に「彌生道」と命名、とあり、どちらが正しいのかは未詳。ちなみに現在の東大駒場では、単に「銀杏並木」と称されているようである。

なお、一高寮歌で「彌生道」をさす表現が登場するのは10篇（「彌生道」系4篇、「銀杏道」系6篇）で、「銀杏道」系の方が優勢である。



▼「彌生道」系①「彌生道」(第49回「光ほのかに」)②「彌生道」(第50回「清らかに」)③「彌生道」(第51回「ほのぼのと」)④「彌生の道」(第52回「彌生の道に」)

▼「銀杏道」系①「公孫樹道」(第47回「新墾の」)②「銀杏の路」(第48回「怪鳥焦土に」)③「銀杏の道」(第49回「上下茫茫」)④「銀杏道」(第51回「あさみどり」)⑤「公孫樹道」(第59回「東の天地」)⑥「銀杏道」(第60回「いづちさうほう」)

「丘を去る日は近けれど」——作詞者はこのとき2年生であったが、1年留年して昭和16年に卒業している。3年生の立場で表現したものであろう。

「永遠に慕はん武香陵」——「武香陵」は向陵の美称。旧著でも触れた(第10回『あを大空を』の項)が、「向ヶ岡」(むぎさか)に好字を当てて「武(む)香(こう)ヶ陵(おか)」、これを音読して「武香陵(むこうりょう)又は(むこうりょう)」が生まれたと解する。『解説書』は、「武陵(＝武蔵の国江戸)の向陵」即ち「武向陵」という呼称を案出したうえ「向」に同音の「香」を当てた、と説く(第10回「あを大空を」の項)が、採らない。

【解説】第四・五節では、一転して日支事変の経過を踏まえて「興亜の偉業成

駒の蹄の音高く

一度劔拂ひては

遮ざるものの影もなぐ

武漢の都早や陥ちて

勝鬨丘にこだまする

興亜の偉業成るは今

立て柏葉の健男兒」

るは今起て柏葉の健男兒」と紋切り型の詩句を連ね、最前線で戦う「丈夫」ますらを勝ち戦の感激と記念祭の祝福とを重ね合わせて詠んでいるのは、当時の寮生一般の、偽らぬ感情の吐露には違いないが、第三節までとは、詩の品質を異にしている。

「武漢の都早や陥ちて」——武漢（市）は、中国湖北省の省都。長江中流の漢水との合流点で、以前は漢口、武昌、漢陽の三市に分かれ、併せて武漢三鎮と称された。昭和13年10月、日本軍により占領された。

【私見】「駒の蹄の音高く」——勢いのよいことの表現。

▼「栗毛の駒にまたがりて 槇尾の山の桜花

駒の蹄の音高く わが駒勇め今しばし」《騎兵第四聯隊歌》

▼「雪齋蘭をととすとも 碎け蹄の音高く」《淡青春に》大7 東北大寄贈歌》

「武漢の都早や陥ちて 勝鬨丘にこだまする」——「武漢の都早や陥ちて」は、昭和13年10月27日に日本軍が武漢三鎮を占領したこと。寮委員会では、武漢が陥落した場合の対応を10月25日に議論したが、武装行進そのものに否定的な見解が強かった。しかし翌26日、学校は文部省の指令に基づき、学校主催で武装行進を行うことを明らかにした。27日夕、

五「ゆららぐ火影なつかしき

今宵紀念祭の自治燈に

あゝ思ひ出の四十九や

故郷遙か何萬里

正義の刃舞りつゝ

征むますらを偲びては

盡きぬ誇りの感激に

宴の宵を祝はなん

武漢陥落が伝えられると、委員は急遽寮歌祭を催し、ついで街頭行進を行った。29日には宮城への武装行進と奉祝式を挙行したが、寮生に熱意なく、帰路では半数が脱落して帰寮した『向陵誌駒場篇』。「勝鬨丘にこだまする」は、武漢陥落を祝う寮歌祭が駒場で催されたことをさす。

【解説】「正義の刃舞りつゝ」——正義の刃に血を塗るように、正しいことを行いつつ。

「征むますらを偲びては」——「征む」は「ゆかむ」であろう。その地を制圧した、ますらおたちを偲んでは。

【私見】「ゆららぐ火影」——「ゆららぐ」という語形は、管見では、古語・現代語の辞典のいずれにも見当たらない。現代語の「ゆらめく」をイメージした造語か。

「正義の刃舞りつゝ」——「舞る」とは、いけにえを殺し、その血を器物に塗って祭ること。ここでは「正義の刃」で敵を討つことと解する。

▼「豎子何するものぞ……鎧袖一触伝家の宝刀に洛孺を舞らん哉」

《対三高戦心機団幹部推戴式》(昭和11年6月)における寮委員の檄文から  
「征むますらを偲びては」——「征」には「ゆく」の外に「うつ」(討

278 第四十九回記念祭寮歌『仄燃ゆる』(昭14 / 栗栖弘臣 作詞、小喜勝美 作曲)

つ」の訓もあることから、「征む」は『解説書』の説く「ゆかむ」ではなく、「うたむ」と訓じて、前項と併せて「正義の刃で敵を討つ」と解するのが妥当であろう。「ますらを」は、一高から初の日支事変への応召者である山田公吏(理甲3年)を指していると思われる。山田は昭和13年の一高端艇部のマネージャーであったが、13年9月15日に召集令状を受け、応召した。9月17日には喫鳴堂で盛大な壮行会が開かれた。作詞者の千葉は端艇部でも理甲でも山田の後輩に当たることから、応召した先輩を偲ぶ気持が伝わってくる。

279 第四十九回記念祭寮歌『上下茫茫』(昭14 / 山上三千生 作詞、一條 茂 作曲)

六 「颯爽として進みゆく

柏葉健兒意氣高し」

【解説】「颯爽」——《言及なし》

【私見】高島俊男氏著『お言葉ですが…⑧』の「六甲おろしに颯爽と」の項によると、昭和十年代は「颯爽」という言葉が大流行した時期にあたるとし、「颯爽」を取り入れた歌の第一号と第二号が次の歌だったと推定している。

▼「六甲風おろしに颯爽と……」《阪神タイガース球団歌》昭11 / 佐藤惣之助

▼「帝都をあとに颯爽と……」《新鉄道唱歌》昭12 / 土岐善麿

280 第四十九回記念祭寄贈歌

『春毎に』(昭14 東大／石垣謙二 作詞、西岡清之助 作曲)

一 「去年の今日鬢華に挿頭せし

緑なす白櫛の香りや

今はたいづこ」

【解説】「鬢華にかざせし」「白櫛」——「鬢華」は上代に髪や冠にさした木葉

葉・花・玉などをいう。作詞者は『助詞の歴史的研究』の著者であり、万葉集に親しんでいたと思われる。「鬢華」「白櫛」など万葉語の使用が多い。

【私見】「鬢華にかざせし」「白櫛」——古事記に次の表現がある。

▼「命の全けむ人は鬘薦平群の山の熊白櫛が葉を鬢華に挿せ……」

《古事記・「思国歌」倭建命》

281 第四十九回記念祭寄贈歌 丘の雲 昭14 東大／堀越邦光 作詞、牧 茂 作曲

282 第四十九回記念祭寄贈歌 ああさ丹づらふ 昭14 東大／福永武彦 作詞、柳 宗玄 作曲

【解説】《青春特有の情感と夢想に満ちた三年間の寮生活を象徴性に富んだ詩

この項に掲げた寮歌『上下茫茫』が発表されたのは昭和14年であるから、まさしく「颯爽」が大流行した時期の作品である。しかし、一高寮歌では、この時期より前に「颯爽」を取り入れた作品として、次の二篇がある。  
▼「桂冠さゝげ颯爽の／英姿一千こゝにあり」《59 「あゝ渾沌の」明39》  
▼「颯爽の意氣眉揚る／戦はん哉矛取れや」《329 「庭球部応援歌」》

一 「ああさ丹づつらぶ色若く

光と香ふ武士が

霓旌高く掲げ来て

首途の夢は覺めざりき

二 「大火は流る幾秋を

虞淵の方に月落ちて

遊子の思ひさびし時

海樓あやに崩れしが

的暗喩をもつて形象化しており、語句の二々を概念的に解釈することはむつかしい。》

【解説】第一節では、人生を一つの戦いと見なし、一高入学と共に自覚的な寮生活を開始する若人の姿を「武士」の戦場への「首途」に喩えている。

【私見】「首途の夢」—— 新入生が一高入学時に抱いた抱負・理想をさす。

作者によれば、「むかし私はロマンチックな青年で、夢は第二の人生であろうと信じていた」(随筆『夢のように』)という。この寄贈歌に、「首途の夢」「夢夢」「夢殿」と「夢」という字が四つも登場するのもその表われであろうか。

【解説】「大火は流る」—— 継続する戦争状態(人生の戦いと中国大陸での実際の戦い・日支事変の両方)を「大火」に喩えている。

【私見】「大火は流る」—— さそり座の首星アンタレスを中国では古くから「大火」と呼んだ。この「大火」が西の空に傾くことを「大火流る」といい、秋の訪れの表現として漢詩にしばしば詠われている。

▼ 「歳落衆芳歇 時当大火流 霜威出塞早 雲色渡河秋」

(李白／太原早秋)

《季節はちようど、「大火」が西の空に傾く秋となった。》

【解説】「虞淵」——中国の伝説で太陽の沈むところと考えられた淵をさす。

【私見】「虞淵の方に……」——太陽の沈む方角（西）に月が沈んでゆく。

【解説】「遊子の思ひさびし時」——「さびし時」はサビシキ時の意。

【私見】「遊子の思ひさびし時」——一高生の内面の孤独をさす。

【解説】「海樓あやに……」——「海樓」は海辺の高殿。「あやに」は、ひどく。

【私見】「海樓あやに……」——「海樓」は蜃気楼のこと。「海市」ともいう。

▼「月下飛天鏡」雲生結「海樓」《李白「渡荊門送別」》

（月が沈むさまは空に鏡が飛ぶようであり雲は湧き出でて蜃気楼を構築する。）  
作者が後年書いた『海市』という小説では、南伊豆における蜃気楼を見に行つた画家がそこで知り合つた若い女性と情を交わすが、幻の蜃気楼のようなその女性は別れを告げぬまま姿を消す。作者は一高生時代に南伊豆に旅行しているが、その時の何らかの原体験が「海樓」云々に反映しているのであらうか。

三三「三年は丘に佇みて

汝が青春の花いくさ

夢夢風（ほろほろ）に融け行きて

【解説】第三節では、三年間の青春の戦いと夢の跡を象徴的に総括している。

【私見】「三年は丘に佇みて」——150『靡に霞む』（大5）第五節の「三とせ

は岡に佇みて」を踏まえる。「丘に佇みて」は「向陵に生活基盤を置いて」

草迷宮に散りかゝれ

の意。

「花いくさ」——花々しい戦い。「夢夢」——遠くて明らかでないさま。

「草迷宮」——作者は一高生のころ泉鏡花を耽読していたことから、鏡花の小説の題名である「草迷宮」という表現を用いたものである。

四「時代のなみに搖ぎつゝ」  
宴の灯またたけよ

今日夢殿に春淡く  
むかしの歌に翼あり

【解説】第四節では、紀念祭の宴で唱われる寮歌の調べに、困苦に満ちた現実からの飛翔と高揚を寿いでいるかのようである。

「時代のなみに搖ぎつゝ」——「なる」は地震。時代のもたらす地震のとき変動に揺られながらも、の意。「夢殿」——寮の隠喩。

【私見】「時代のなみに搖ぎつゝ」——「ユルギつゝ」か「ユラギつゝ」かについて議論がある。現代語ではいずれも「不安定に揺れ動く」意に使われるが、古語では「ユラグ」の原義は「玉や鈴がふれあつて音を立てること」であり、ここでは「ユルギつゝ」をとりたい。なお、福永武彦氏に次の用例がある。

▼「さくら搖すおつてもびくともゆるがなかつた。」『忘却の河』

283 第四十九回紀念祭寄贈歌『おゝ呼ぶ聲す』（昭14 東大／猪野誠治 作詞、小林健夫 作曲）

284 第五十回紀念祭寮歌『清らかに』（昭15／卜部舜一 作詞、樫田計三 作曲）



五「春去りて花に浮き立ち

水流る川のほとりを

空に若さ謳へば

雲雀鳴き雲にかくれし」

七「何時の世もたゞひとりして

旅行くは運命にてある

いざ野行き光追はゞや」

九「御戦も三年めぐりて

【解説】「春去りて……」——初夏の野外の散策に味わう幸福感を詠っている。

【私見】「春去りて……」——「春去りて」は「春になって」の意で、初夏ではない。日本国語大辞典（小学館）によれば、「さる（去）」は移動する意で、季節や時を表わす語のあとに付けて、その時・季節になることを述べる。

▼「風交へ雪は降りつつしかすがに／霞たなびく春去りにけり」  
（まじ）

《万葉集卷10 一八三六》

また、「花に浮き立つ」のは春であらうし、雲雀は春の鳥とされている。

▼「うらうらに照れる春日にひばりあがり」

（こころ悲しもひとりしおもへば）《万葉集卷19 四一九ノ大伴家持》

【解説】「いざ野行き光追はゞや」——《言及なし》

【私見】「いざ野行き光追はゞや」——156『わがたましひの』（大5）の第三

節に「光を追ひて野を行けば」とあるのを踏まえる。旧約聖書において、十年にわたって荒れ野を旅する試練にさらされたことに譬えて、「高卒業後の人生行路を荒れ野にさまよう運命とする表現が、一高寮歌中にも多く出現する。「光」とは、「真理」または「神の栄光」をさすか。

【解説】「御戦も三年めぐりて……建設の音」——《言及なし》。《

285 第五十回記念祭歌『嚴白禱の』(昭15／須藤英士 作詞、小林和美 作曲)

一 嚴白禱の神さびにける  
丘の辺に瑞雲こめて

彌高く御稜威奉りぬ  
朗らかな建設の音  
受けつがば榮えを守りて  
こそり立ち力盡さむ  
東洋の盟主われらは

【私見】「御戦も三年めぐりて……建設の音」——「御戦」は昭和12年にはじまった日中戦争をさす。近衛内閣は、この戦争の目的が「東亜新秩序の建設」にあると声明した(昭和13年11月3日)。「建設の音」はそれを指すと解するが、なお、一高の駒場移転後の「新向陵」の建設を指す可能性もある。

【解説】「東洋の盟主われらは」——《言及なし》。

【私見】「東洋の盟主われらは」——「東亜新秩序」というのは、ヴェルサイユ・ワシントン体制を旧秩序とする立場である。と同時にそれは、中国皇帝の徳治を原則として成立していた東アジア歴史世界の伝統的な国家間の関係を、日本が代わって「盟主」として再生させようとするものであった。《吉川弘文館『国史大辞典』「東亜新秩序」の項参照》

【解説】「嚴白禱の」——イツカシは神聖な榎の木。

【私見】「嚴白禱の」——古事記に次の表現がみられる。

▼「御諸の嚴白禱が本 白禱が本 忌々しきかも」《古事記》

二「八十戈の王師疾みやちほこ みいくさはや

畝傍山木の葉さやがず

秋津島建國あれにし時ゆ

捲去りし時劫の波の

春秋や二千六百

民族の理想は高く

猛鷲の崑崙越えて

三更の月色寒し」

【解説】「畝火山木の葉さやがず」——古事記に神武天皇の皇后イスケヨリヒ

メの歌があり、叛乱の起こるのを示唆した歌と解されている。それを踏まえ、平穏な治政を表現したのであろう。

▼「狭井川よ雲立ち渡り畝火山／木の葉さやぎぬ風吹かんとす」

【私見】「畝火山木の葉さやがず」——神武天皇の皇后イスケヨリヒメは、

天皇の崩御後、先妻の子タギシミミの妻とされるが、タギシミミがイスケヨリヒメの子である二人の弟を殺そうと図っていることを知り、二首の歌を二人の息子に届けて危険を予告した。もう一首は次の歌である。

▼「畝火山昼は雲と居ゐ 夕されば／風吹かむとそ木の葉さやげる」《古事記》

【解説】「猛鷲の崑崙越えて」——「崑崙」は崑崙山。

【私見】「猛鷲の崑崙越えて」——「猛鷲」はソ連軍か日本軍か。この寮歌以

外の一高寮歌で「猛鷲」が登場するのは次の4例である。

【露】▼「シベリア未だ冬にして 猛鷲獨り羽を搏つ」《42『都の空に』明37》

【露】▼「王師一度執る戟に 猛鷲撃たん葉の如く」《343『旅順陥落歌』》

【独】▼「一搏翱翔三萬里 猛鷲されど地に落ちて」《181『一搏翱翔』大8》

【目】▼「猛鷲高く天を搏ち 長鯨海に潮を吹く」《188『嗚呼東海の』大9》

ロシア帝国の国章は「双頭の鷲」であったので、日露戦争当時の明治34年

から38年までの間に、「驚」「荒驚」「大驚」「猛驚」などの表現で一高寮歌9篇に登場する。ソ連になり国章は鎌と槌に変わった。ドイツの国章は黒鷲で、第一次・第二次大戦時に「荒驚」「猛驚」「黒鷲」各1篇の計3篇、日本は「荒驚」「猛驚」が各1篇の計2篇に「驚」が出てくる。

この寮歌の前年に起きたノモンハン事件との関連が推定されるとしても、前述の経緯を考えると、「崑崙を越えた」「猛驚」がソ連軍か日本軍かについて即断はできない。またこの当時、「崑崙」は、崑崙山脈そのものでなく中国のシンボルとして歌われることがしばしばあった。

▼「ああ崑崙の峯の雲 今日くればなるの火と燃えよ ああ森森の揚子江  
今ぞ血潮の色となれ」《亜細亜の曙》西条八十作詞、昭6》

▼雲は行く行く遙かに崑崙越えて 夢の翼よ懂れだよ希望だよ

《崑崙越えて》大木惇夫作詞、昭16》

【解説】「三更の月色寒し」——「三更」は子の刻。午後十一時から午前一時頃まで。万葉集や源氏物語にはヨナカと読む例もある。

【私見】「三更の月色寒し」——「月色寒し」とは、月が寒々と冴え渡っているまをいう。

▼「何人吹<sup>カク</sup>笛<sup>ヲ</sup>秋風外 北固山前月色寒<sup>シ</sup>」《秋夜聞笛》（元・薩都刺）》

286 第五十回記念祭歌『朝日影』(昭15 / 立石 巖 作詞、富田和久 作曲)

(誰か秋風の彼方で笛を吹いている。  
北固山のあたりの月は寒々と冴え渡っている。)

【吉田健彦氏は「猛鷲」をソ連軍、「月寒し」をノモンハン事件での日本軍の完敗を踏まえた表現であるとされる(同氏HP)。】

287 第五十回記念祭歌『瑞雲罩むる九重』(昭15 / 多賀谷吉夫 作詞、小林和美 作曲)

一 「瑞雲罩むる九重に」

映ゆる護国の柏葉旗

咫尺に拜す大君の

かしこきみこと尊みて

若き男の子のはげむなる

丘に五十の春は來ぬ」

【解説】「瑞雲罩むる九重に」——「瑞雲」は、めでたい雲。「九重」は幾重にも重なった門のある天子の御殿。ここでは皇居の意。

も重なつた門のある天子の御殿。ここでは皇居の意。

「咫尺に拜す大君の」——「咫尺」は非常に近い距離。「咫」も「尺」

も周代の長さの単位。

「かしこきみこと尊みて」——《言及なし。》

【私見】「かしこきみこと尊みて」——前年の昭和14年5月22日に発せられた

た「青少年学徒二賜ハリタル勅語」のこと。おもに中等・高等教育課程

に学ぶ学生生徒に向けられた勅語としては唯一のもので、戦時下において

教育勅語とともに重視された。昭和14年5月22日は、陸軍現役将校学

校配属令公布十五周年にあたる日であり、海外領土を含む全国千八百校の学生・生徒代表三万二千五百人が執銃・帯剣・巻ゲートルの軍装で宮城前に参集して親閲式が行なわれ、一高からは護國旗を掲げて三年生代表百人が参加した。「瑞雲罩むる九重に／映ゆる護國の柏葉旗／咫尺に拝す大君の」はこのことを指す。この日、天皇から文相に「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が下賜された。

勅語の内容は、「国本ニ培ヒ国力ヲ養ヒ以テ国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑑ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ氣風ヲ振励シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ」というものであった。この勅語は、学徒勤労働員を權威づけるものとして利用された。また毎年の勅語煥發記念日には、分列行進や神社参拝などを行なうことが指示された。

一 「時は流れぬ五十年  
武香ケ陵の花陰に  
『春爛漫』を歌ひてし  
人の姿を見よや今」

【解説】「武香ケ陵の花陰に」——「武香ケ陵」を「むこうがおか」と読ませた例は珍しい。普通は「むこうりよう」と読む。

【私見】「武香ケ陵」——16 「あを大空を」（明33）の項で「武香ケ陵」の語源について筆者が述べた推論からすれば、「武香ケ陵」を「むこうがおか」と読ませるのは、むしろ当然のことであり、これ以外の読みは考えられない。次の各例についても同様である。

- ▼ 「いかで忘れん／武香ケ陵わが故郷」《64 「春は櫻花咲く」明39 東大》
- ▼ 「武香が陵の若き兒が／つとひ興がる歌の声」《57 「霞かぎれる」明39》
- ▼ 「日出づる國の護りとて／武香が陵の高樓に」《94 「新草萌ゆる」明43》
- ▼ 「健兒の風に花ぞ散る／武香が岡の夕まぐれ」《47 「春燎爛の」明38》
- ▼ 「武香が岡に春長けて／柏の小草もえ出でにけり」  
《54 「武香が岡に春長けて」明38》
- ▼ 「武香が丘にうす霞む／朧は花の怨みなり」《11 「霧淡晴の」明45》  
なお、「むこうりよう」又は「むこうりよう」と読むのは、中間に「ケ」又は「が」の入らない「武香陵」の場合である。

六 「夜もすがら洩るる自治燈はあかり

五十なる丘の齡のサカエ  
光榮ある希望のぞみに満てり」

【解説】「五十なる」——《言及なし》

【私見】「五十なる」——フリガナがついていないため、通常は「こじゆう」と歌っているが、この場合は詩語として「いそぢ」と訓じたほうが和文脈に適合するのではないか。「いそぢ」とは、五十歳または五十年を意味する言葉で、「ぢ」は「ひとつ」の「つ」や「はたち」の「ち」と同じく、和語でその数をあらわす接尾語である。「ぢ」と同音の「路」をあてて「五十路」と書くこともあるため、「いそぢ」を「五十歳台」と解する向きもあるが誤りである。

次の三つの寮歌の場合も同様に考えてはどうであろうか。

- ▼「若き男の子のはげむなる／丘に五十の春は來ぬ」《287「瑞雲罩むる」昭15》
- ▼「苔積みて五十を重ぬ／八寮の並ぶ窓邊に」《288「不知火の」昭15》九大《
- ▼「四十の春の輪廻して／今宵八つ城の花饗宴」《230「溟滓る胸の」昭5》

【参考】

- ▼「懐悩いやす友が手をとり／いまこゝに六十を祝ふ」《316「ささよひは」昭24》
- ▼「三十路にあまる一年の／榮に揺ぐか丘の燈よ」《195「御空に映ゆる」天10》
- 《注》「三十一」は「みそぢ」あまりひとつ」となせる
- ▼「盧生は夢をめて、五十の春秋の榮華も忽ちに」《謡曲「邯鄲」》



291 第五十一回記念祭寮歌 『時計臺に』あじうゝま (昭16 / 齋木千九郎 作詞、眞島英信 作曲)

一 「時計臺あじうゝまに狭霧なせりはこめて  
四つの城しほ静寂まわたりぬ  
黄金あうごんなす落葉おちばさやげば  
ひたぶるの愁おもひすゝろに  
嗚呼あゝ三と廿夢みやひの旅路りぢも  
やがてしも疾はやくぞ盡つきぬる」

▼「かの邯鄲の假枕、夢は五十のあはれ世の、例も誠なるべしや」《謡曲『女郎花』》  
▼「故人眠り早く覺めて 夢は六十の花に過ぎ」《謡曲『養老』》

▼「予もの心を知れりしより、四十余りの春秋を送れる間に世の不思議を見る  
事や度々になりぬ。」《鴨長明『方丈記』、岩波文庫(市古貞次校注)》

▼「三十余りにして、更にわが心と一の庵をむすぶ。」(同上)

▼「すなはち、五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。」(同上)

▼「六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りをむすべる事あり。」(同上)

《謡曲及び方丈記からの引用は、名原晃一郎氏(二高昭22理甲)のご教示による。》

【解説】本寮歌を支配しているのは、晴らしようのない鬱屈感・憂愁・昏迷の思いである。それは、日支事変がますます泥沼に陥るとともに、英・米列強との対立が一層深まり、戦争避けがたしという危機感の深まりによるものである。

「ひたぶるの愁すゝろに」——《言及なし。》

「やがてしも疾くぞ盡きぬる」——《言及なし。》

【私見】井上司朗氏(二高大13文乙)は、『高寮歌私観』の中でこの寮歌を

「沈鬱の秀作」と評する。一高生の間でこの寮歌は「一高ブルース」と呼ばれた。その理由に定説はないが、①当時は「別れのブルース」(昭12)、「雨のブルース」(昭13)などの連続ヒットで「ブルースの女王」と呼ばれた淡谷のり子が活躍し、ブルース曲が普及した時代であること、②「ブルース」とは、もともとアメリカの黒人たちの「憂鬱 (Blues) な気分を表現した音楽」として広まったものであること、などが関係しているのではなかろうか。

ちなみに朽津耕三氏(昭23理甲)によると、世田谷区内の某葬儀場では、寮歌と知らずにこの曲を葬儀のBGMとして使っていたという。

「ひたぶるの愁おもひすゝろに」——「ひたぶる」は一途に心を向けるさま。「すずろに」は、はつきりした根拠・原因もなく事や心が進む様子を表す。

▼「ひたぶるの男の子の苦惱なやみ」(昭12)『新墾の』

「やがてしも疾くぞ盡きぬる」——「やがて」は、近世以降の用法では、まもなく、そのうちに、の意に使われるが、ここでは、本来の「すぐに」、「ただちに」の意に解すべきであろう。「しも」は強調。「疾し」は、ここでは、時間の経過が早い、の意。よって、「やがてしも疾くぞ盡きぬる」は、「三年の期間があつというまに経過して、すぐに終わってしまう」の

意に解する。

二「人の世は辛く悪しきを

【解説】「人の世は辛く悪しきを　このみぞみちの故郷」——言及なし。

このみぞみちの故郷

【私見】「人の世は辛く悪しきを　このみぞみちの故郷」——「辛い」は現

かりそめの奇しき縁しに

代語では「苦痛に感じる」の意に用いられるが、本来は相手の仕打ちのむ

むつびてし心と心

ごい状態や、それをひどいと非難する気持ちをいう。また、「悪し」とは、

まごそこそ榷せじと言ふを

他と比べるまでもなく、本質的に悪い状態を示す。道義的に悪い、荒々し

はたそれも追憶なりしか

い、激しい。「みちの故郷」の「みち」は、学問の道ないし真理探求の道

をさす。

三「ひたすらに心の旅は

【解説】「みやこどり何處いさよふ　言問はんすべあらなくに」——『伊勢物

みやこどり何處いさよふ

語』の「名にしおはばいさ言問はむみやこどり　わが思ふ人はありやなし

言問はんすべあらなくに

やと」の歌を踏まえて、心の旅は何處に行けばよいのか、その目標を定め

ふみ分けぬ先哲の業績

る術もないことを、都を出て故郷を偲んで逡巡する古人になぞらえたとみ

空しくぞ燼燭くちて

られる。「いさよふ」は進もうとして進まない、ためらうの意。

永劫の涙あふれぬ

【私見】「みやこどり何處いさよふ言問はんすべあらなくに」——「みやこど

り」は「言問はん」をいうための枕言葉的に使われたもので、解説のいう

「都を出て云々」とは関係ないと思われる。「何處いさよふ」は万葉集の柿

四「露しとら残月傾きて

しのゝめの黎明は来れり

緑なす丘に迷へば

鶏くだかけは新時代を告ぐるを

嗚呼昏迷かくて失せばや

責任重き柏見ぞわれ」

本人麻呂の歌を踏まえたもので、「心の旅の行方がわからない」ことを、「た  
だよう波の行く先がわからないこと」に喩えている。

▼「もののふの八十字治河の網代木に いさよふ波の行方知らずも」

(万葉卷3 二六四)

【解説】「空しくぞ燼燭くちて 永劫の涙あふれぬ」——先哲に学んでの真理

探究の心の旅も、迷いの解消には至りえぬ空しさに、「永劫の涙」まで流  
している。

【私見】「空しくぞ燼燭くちて 永劫の涙あふれぬ」——真理探究の努力をい  
くら重ねても到達できず、空しく燼燭だけが燃え尽きてゆくと嘆いている。

【解説】「露しとら……黎明は来れり」——《言及なし》

【私見】「露しとら……黎明は来れり」——「露しとら」は露にひどく濡れる

ことだが、ここでは「永劫の涙溢れぬ」を露に濡れることに喩えている。

【解説】「緑なす丘に迷へば……責任重き柏見ぞわれ」——新時代到来に際会

しての覚悟として、護国の旗を掲げる一高生の担う重大責任に触れつつ

も、そこにつきまといてくるのは「嗚呼昏迷かくて失せばや」との感慨で  
あった。

【私見】「緑なす丘に迷へば……責任重き柏見ぞわれ」——「新時代」とは、皇

紀27世紀の幕開けをさすとも考えられるが、前年の寮歌『瑞雲草むる』に次のようにあることを勘案して、「新東亞建設の時代」を意味すると解する。

▼「友よ東亞に朝は来て 雞の音四方に冴ゆるなり」

いざ遅しき腕かひなして 興亞の鐘を撞かん哉」≪287『瑞雲草むる』昭15≪  
「嗚呼昏迷かくて失せばや」の「昏迷」とは、真理探究の心の旅の迷いとどまらず、国の運命への迷いをも指すのであろう。なお「昏迷」には振り仮名がないが、コンメイでは字余りになることと、他の語句が和訓であることを勘案すると、マドヒと訓するほうが調和がとれると考える。

▼「見よ芳草は萌えいでて 新時代を告げむとす」

昏迷の冬今去りて 希望の鐘は鳴り出でぬ」≪269『春尚淺き』昭12≪  
「責任重き柏兒ぞわれ」の「責任」とは、他寮歌にも頻出する「使命」という表現と同じく「寮生の内心から湧き起こった使命感」を指し、その時代における寮生の内面と外界との緊張関係を示す。≪朽津耕三氏の「示唆を得た」

五「男子われ生ける甲斐あり  
あひあひて聖代みよに生れぬ  
國護る旗し掲げて

【解説】「男子われ生ける甲斐あり あひあひて聖代みよに生れぬ——」万葉集(6・996)の「御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆるときに逢へらく思へば」を踏まえたか。この万葉歌は戦時中、しきりに喧伝され、昭和17年11月

柏葉兒起ちて雄叫へば  
高らかに時鐘は巨りて  
東洋はあかく燃えたり」

六 「ふるさととは五十一歳の  
さびたけぬ橄欖の木は

に大政翼賛運動の一環として選定された『愛国百人一首』にも入っている。

【私見】「男子われ生ける甲斐あり あひあひて聖代みやよに生れぬ」——「万葉歌」

については解説書の説くとおり。「あひあひて」は物事を一緒にすること。

「聖代」とは優れた天子が治めるよき時代、転じて現在の天子の治世の尊称。

【解説】「高らかに時鐘は巨りて 東洋はあかく燃えたり」——《言及なし》

【私見】「高らかに時鐘は巨りて 東洋はあかく燃えたり」——「時鐘」は時刻を知らせるために鳴らす鐘だが、この節では、時代の到来を知らせる鐘を指す。「巨る」は鐘が響きわたること。

▼「時代の暁鐘 かき鳴らせ」《232 『鯨波切りて』昭5東大》

「東洋はあかく燃えたり」は戦火ではなく太陽のことであろう。類例を示す。

▼「大陸に流れし血潮 惨として天日赤し」《285 『蔽日禱の』昭15》

▼「嗚呼東の空燃えて 亞細亞の朝は明けむとす」《301 『嗚呼東の』昭17東大

第五節の「護国調」は、検閲等に備えた意識的な韜晦だとする見方が一部にあるが、むしろこの寮歌の場合は、全篇を通じてこの時代に生きる一高生としての極めて純粋な使命感を吐露したものと捉えるべきであろう。

【解説】「橄欖の木は常緑 いよゝさやけく」——《言及なし》

【私見】「橄欖の木は常緑 いよゝさやけく」——「橄欖」は「柏」とともに一

常緑 とこみどり いよゝなやけく

紅顔 くれなゐ の丘の子達は

なつかしき校長 をさ ともなく

あらたなる自治を築かん

高を象徴し、「常緑 とこみどり いよゝなやけく」は一高生がますます「永遠不滅の真理」の探究にいそしむさまを表現している、と解する。

【解説】「なつかしき校長」—— 名校長として皆に敬愛された安倍能成をさす。

【私見】「なつかしき校長」—— 安倍能成校長はなぜ「懐かしい」のか。着任

前すでに寮生たちは、安倍校長の一高生時代のエピソードや自由主義・個人主義の思想について熟知し、親しみを覚えていた。昭和15年9月21日、安倍校長の着任を二百数十名の寮生が東京駅頭に出迎え、「玉杯」を二唱、「安倍校長万歳」を三唱したという。橋田邦彦前校長とは対照的な性格で、倫理学の講義での人気に大差があった。また安倍校長は、軍部や政府に言挙げできる人であり、毅然として丘を守る強さと寮生をかばい受け容れる心配りとを併せ持っていたとされる。

《一高自治寮六十年史》、『向陵誌』の記述などによる。》

【解説】「あらたなる自治を築かん」—— 《言及なし。》

【私見】「あらたなる自治を築かん」—— 自治や自由に対する時代の圧迫が日増しに募りつつあったことから、かつて在学中に個人主義を唱道して向陵に新風を吹きこんだ新校長の登場に寮生は歓喜し、敏腕の新校長及び寮生の連係プレーによって、より高度な自治を実現させることに期待を寄せた。

七「希望こそ胸に充つれど

なみくと玉杯あふるれど

今宵こそ別れのうたげ

しかすがにそらろかなしも

さらば君世をば憂ひつゝ

暫時の別盃ほさんか」

【解説】第七節の表現の基調は、やはり「そらろかなしも」であり、「世をば

憂ひつゝ」であった。そしてこれが当時の心ある一高生が抱懐した思いであつたことは確かである。

【私見】「しかすがにそらろかなしも」——「しかすがに」は「そうはいうものの」で、「希望は胸に充ち酒は十分ある」とはいうものの、やはり「の意である。」「そらろ」は「何となく」、あるいは近世以後の用法で「むやみに」の意。

「世をば憂ひつゝ」——「世を憂ひつゝ」か「世をば憂ひて」でも差し支えないのではと思われるが、なぜか字余りになっているため歌いにくい。

292 第五十一回記念祭寮歌『あさみどり』(昭16／大野晋作詞、吉野亀三郎作曲)

序「あさみどり眞澄みわたれる

ひさかたの天つ光に」

【解説】「あさみどり眞澄みわたれる」——《言及なし》

【私見】「あさみどり眞澄みわたれる」——明治天皇の御製を踏まえる。

▼「あさみどり澄みわたりたる大空の／広きをおのが心ともがな」《明治天皇》

想「ひたよする潮とらると

この丘に迫り濯へば」

【解説】「この丘に迫り濯へば」——万葉集(巻16三八八〇)の「かしまねの机

の島の、小嶼をい拾ひ持ち来て、石もちつつき破り、早川に洗ひ濯ぎ」と



293 第五十一回記念祭歌『ほのほのと明け行く丘に』(昭16 / 平尾邦雄 作詞、吉野龜三郎 作曲)

関係あるか。  
【私見】「この丘に迫り濯へば」——この「濯む」は、洗い清める意味でなく、時代の潮が一高に迫り、寄せては返すの意であるから、解説の指摘する万葉集の歌とは無関係だと思われる。

294 第五十一回記念祭歌『北海浪は』(昭16 / 武内重五郎 作詞、伊藤 宏 作曲)

四 「熊羆東に咆ゆる時」

虎豹の西に號なづびては

嘯く鬼の聲長く

大和島根に雲暗し

【解説】「熊羆東に咆ゆる時」——「熊羆」は熊とひぐま。当時のソ連を指す。

「虎豹の西に號びては」——ドイツの行動を指す。

【私見】「熊羆」・「虎豹」——「熊羆」はもともと「勇猛の士」をさすことばだが、「熊羆」・「虎豹」と対比させて用いる場合は、自分に仇をなす凶暴なものを列挙した表現となる。

▼「熊羆シマ対レ我ニ蹲ニ、虎豹シマ夾レ路ニ啼ク」《魏・曹操『苦寒行』》

(熊や羆が低く身構えて我々を窺い、虎や豹が道の両側から吼えかかる) この詩は、206年、曹操が袁紹の甥高幹を討伐するための遠征途上、嚴冬の太行山脈を越える行軍の苦難をうたったものである。なお、解説のように「熊羆」＝ソ連、「虎豹」＝ドイツと解するとすれば、「嘯く鬼の聲長く」

295 第五十二回記念祭寮歌『彌生の道に』(昭17/山下 浩 作詞、大山哲雄 作曲)

序「彌生の道に風寒く

公孫樹の枯葉音もなく

散りしくあたり忍びかの

春の登音よ近きかな

迷「秋の曠野をひとり往き

ひとり還らふ夕まぐれ

嫋びの牧笛の音も香く

光茫は闇の彼方なる

とは、昭和14年の独ソによる侵入・分割に泣いたポーランドの苦境を指すことになろう。

【解説】「忍びかの」——古く「しのびやか」の例は多いが、「忍びかの」の例は文献には見えない。

【私見】「忍びかの」——原歌詞は「忍びかの」であつたらしい《作詞者から井下登喜勇氏（一高昭26文丙）への来信による》。昭和18年版・昭和42年版寮歌集とも「忍びかの」と表記されており、昭和50年版寮歌集で「忍びかの」と改訂されたもののものである。「しぬぢ」は、「しのぢ」の「の」にあたる万葉仮名の「努」「奴」を江戸時代に「ぬ」と誤つて訓んだことからできた語形であり、「しのぢ」が本来の語形であるが、ここでは作詞者の表記を尊重して「忍びかの」とするのが穏当であらう。

【解説】「嫋びの牧笛の音も香く」——「嫋び」は古例を見ない語。「たをやぐ」「たをやか」（『源氏物語』）などからの新造語であらう。

【私見】「嫋びの牧笛の音も香く」——原歌詞では「嫋び」は「嫋び」であつたらしい（作詞者から井下登喜勇氏への来信による）。同窓会報（昭17・2）

「迷妄まどひに媚ねびし幾夜いくよさも

葦かたみの迭かたみに誘かたみひ哭かたみく

えがての友をわれ得たり

思めくみおほへば恩めくみおほ惠めくみおほ饒めくみおほさかな

情「若わかきを誇たかる甕かめゆゑに

湛なふや紅なまけき美酒なまけは

睦なれにし友なまけ情なまけ君なまけがため

酌なむはわが掌てで銀なの匙な」

や昭和18年版寮歌集では、ともに「媚なまび」と表記されていることを勘案すると、その後の改訂時に生じた誤植であろう。なお北原白秋の『納曾利なそり』という詩に次の用例がある(井下氏による)。

▼「おなじことおなじ媚なまにくりかへし」

舞へる思の／倦める思のにほやかさ」

【解説】「葦かたみの迭かたみに誘かたみひ哭かたみく」——「かたみに」は「互いに」の意で、中占以降多用された副詞。但し「葦かたみの迭かたみ」の続き具合が不明瞭で、「葦かたみ」に

「互」の意があるのかどうか未詳。

【私見】「葦かたみの迭かたみに誘かたみひ哭かたみく」——「葦」はイネ科の多年草で、節ごとに葉がたがいちがいに付いている(互生葉序)ことから、「互いに」の意に用いている。

【私見】事情は不明であるが、この節の三、四行目は、同窓会報(昭17・2)に発表された歌詞では、次のとおりの表現となっている。

▼「睦なれにし君なまけが友情なまけにて／酌なむはわが掌てか銀なの匙な」

この場合、この二句の解釈は、微妙に食い違ってくることになるろう。

【解説】「銀の匙」——中勘助の小説(大正10年)を意識したか。

【私見】「銀の匙」——中勘助の小説『銀の匙』（大正2年）の冒頭部分に、

主人公の少年が茶筭筒の引き出しの中から小さな銀の匙を見つけるが、その匙は、彼が幼少時に大変な腫物を患ったとき、彼の小さな口でも薬が飲めるようにと、伯母さんがどこかから見つけてきてくれたものである、と語られている。中唐の詩人白居易の次の律詩との関連も考えられる。

▼「銀匙封寄レ汝、憶レ我即加レ餐」（ジテサニヘバヲチヘヨニテセテヲあたフニ）  
（今私は旅先から銀の匙を封入して汝に届ける。私のことを思い出し  
たら、すぐさま食事をたつぷり取るんだよ。）

この詩は、白居易が杭州に赴く途中、自分の可愛がっていた姪（弟の娘）の阿亀に銀の匙を送ってやったことを述べた詩である。

以上を踏まえて、この寮歌では、自分の掌を「銀の匙」に喩えて、親しい寮友に対し「君のために俺が注いでやるから、美酒をたつぷり飲め」と勧めているのであろう。

白居易の律詩——「伯父↓姪——銀の匙∥食事を取る

中勘助の小説——「伯母↓甥——銀の匙∥薬を飲む

山下浩の寮歌——「自分↓友——銀の匙∥酒を飲む

因みに中勘助（二高明 38 文科）は、昭和十年代の半ばには『向陵時報』

「友よ哀傷は青けれど  
せめては君が燦かの  
瞳の光にふたたびを  
新たな契り交はせかし」

現「されども友よ思へ、彼の  
波濤越え征く聖戦に  
若き丹潮の騒ぐとき

に詩を何度か寄稿しており、向陵時報の文芸委員（昭和15年5月〜同年10月）や文芸班の委員（同16年度）を務めていた作詞者の山下浩とは面識があつた可能性が高い。

【解説】「友よ哀傷は青けれど」——佐藤春夫の詩による表現か。

【私見】「友よ哀傷は青けれど」——解説の指摘は次の詩のことであろう。  
▼「野ゆき山ゆき海辺ゆき／真ひるの丘べ花を藉き／  
つぶら瞳の君ゆゑに／うれひは青し空よりも」（佐藤春夫『少年の日』）

【解説】「波濤越え征く聖戦に……」——この節の前向きの勇ましげな表現は、あくまで外部からの批判をかわすための韜晦であつたように思われる。

【私見】この節の原歌詞は次のとおりであつたものが、作詞者の了承を得ないまま書き替えられて現行の歌詞になつた由である。

（作詞者から井下登喜勇氏への来信による。）

▼「されども友よ想へ彼の／波濤越えゆく皇師に／  
いかに丹潮は騒ぐとも／君、われ、若き使命あり」

作詞者によると、この場合「みいくさ」とは「聖戦」などではなく、「皇師」すなわち「天皇」のひきいる「軍隊」の意であるという。もし原歌詞

一 「障え散へぬ」

時の流れに

散ゆゆく

丘の萬象

五 「向陵よ

凍てつける

熱く組む

衆星の

魂の故郷

その丘の上に

心と心

共ふ北辰下

に従うとするならば、「どんなに皇軍の出陣に血が騒いだとしても、われわれ若人には(戦争以外に)若人としてなすべき本来の使命(真理の探求)がある」というような意味にならうか。

【解説】「障え散へぬ」—— 障碍を受けず、萎えることのない怒濤のような時

流の意。文法的には「障へ散へぬる」が正しい。

【私見】「障え散へぬ」—— 動詞「さへなふ」は「防ぎきる、拒みとおす」という意味で、「障へに敢ふ」の転とされる。したがって、「障え散へぬ」

は「障へ敢へぬ」の誤植だと思われるこの項、井下登真氏からの「示唆を得た。

万葉集に次の例があるが、原文では「佐弁奈弁奴」となっている。

▼「障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやに悲しも」

(「障へなへぬ」＝拒否できない意。) (≪万葉集巻20 四四三・防人の歌≫

【解説】「衆星の共ふ北辰下」—— 解説書では言及なし。【吉田健彦氏は「北

辰は、北天の星辰の意で、北極星のこと。衆星の中心となり動かない

ので、帝居または天子などに喩える。」とされる(同氏HP)。】

【私見】「衆星の共ふ北辰下」—— 『論語』為政篇の巻頭に次のようにある。

天焦がすかがり 篝火めぐりて  
 上りし子のぼ 去りゆく男をのこ  
 おしなべてかぎりな この一時に  
 無限のおもひ 感慨を籠めて  
 いでや舞ひ いざや歌はん

297 第五十二回記念祭寄贈歌『向ヶ丘に吹き荒るゝ』(昭17京大／直木孝次郎 作詞、直木由太郎 作曲)

298 第五十二回記念祭寄贈歌『駒場野に』(昭17東大／林 陽一 作詞、矢我崎正弘 作曲)

(一)「駒場野に春は萌えたり

柏木の嫩枝手折り

【解説】「柏木の嫩枝手折り」——柏の木の若い枝を手折って。「柏」は「文

武両道の「武」の方のシンボル。

▼「子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共一之。」  
 (あたかも、北辰がその居場所に定まり、あらゆる星がそれを  
 中心に回転しているように、政治も自然にうまく進んでゆく。)

この「北辰」につき、わが国の大方の論語の注釈書では「北極星」と  
 解しているが、福島久雄北大名誉教授の『孔子の見た星空』(大修館書店  
 平成9年)によると、今から約二千五百年前の孔子の時代の北天をコンピ  
 ューターで再現してみると、北極点に星がないばかりか、その周辺にも  
 顕著な星はなく、今の「北極星」である「こぐま座  $\alpha$ 」は、現在の北極  
 から14度半ほど離れた彼方であるという。さらに、中国では古注(鄭玄、  
 何晏、新注(朱子)をはじめとして、論語の「北辰」を北極星とする注  
 釈は見えない(即ち、北辰は北極であり北極星ではない)とされる。

▼「北辰は天の北極、天の枢なり」(朱子『論語集注』)

織り成せよ八重の友垣  
祝ぎ頌へ正義の歌を

〔四〕鹿島なる蘆原漕ぎて  
荒川原軍鼓響けり  
漣や瀬田の唐橋  
勝軍共に讃へぬ

【私見】「柏木の嫩枝手折り」——一高ではふつう「柏」が「武」の、「橄欖」が「文」の象徴とされているが、寮歌の歌詞では必ずしもそのように限られず、いずれも「一高」ないし「一高精神」の象徴として使われた例がしばしばある。この寮歌の場合も、左の例にならって、「柏」は「橄欖」と共に一高を象徴するものであるから、この一句は「一高において学びとつた精神を意味する」と解する。

▼「手折りてし橄欖の枝」≪245『手折りてし』昭8東大≫——解説書には、『橄欖』は、柏葉と共に一高を象徴するものであるから、この一句は一高において学びとつた精神を意味する』とある。

【解説】「鹿島なる蘆原漕ぎて」——「鹿島」は、茨城県南部にある町。鹿島灘のことをさしており、一高の端艇部の行くところをいっている。

【私見】作詞者の林陽一（昭14文甲）と作曲者の矢我崎正弘（昭14文甲）とは、ともに文科端艇部。林は昭和11年度のサード、12年度のセコを務め、矢我崎は11年度のサード、12年度のチャン、13年度の大チャンを務めた。こうしたことから、両名のボートに対する深い思い入れを第四節の歌詞にこめたのであろう。

「鹿島なる蘆原漕ぎて」——「鹿島」は利根川下流の茨城県側の旧鹿島



(五)

「曠野原我流浪へど  
求道の象徴忘れず」

郡地区。この句は、「鹿島灘」(＝海)ではなく、端艇部の、隅田川から利根川下流にかけての遠漕訓練(大利根遠漕)をさしている。なお、昭和11年度夏季の対科選手の合宿時に、セコ(第二「選手」とサード(第三選手)は大利根遠漕を敢行したが、サードであった林・矢我崎の両名とも当然参加したであろう。

【解説】「荒川原」——端艇部が戦った所をいうのであろう。

【私見】「荒川原」——「荒川」の尾久コースのこと。当時は南千住から上流を荒川といった。現在は隅田川の一部。林・矢我崎の在学中、昭和12年の三高戦のレースもこの荒川で行なわれ、一高が勝って11連勝をとげた。【解説】「漣や瀬田の唐橋」——「瀬田」は大津市内の地で、琵琶湖の南端にあり、「唐橋」で西岸と連なる。この地での三高との端艇戦のことをさしている。

【私見】「漣や瀬田の唐橋」——林・矢我崎の在学中、昭和13年度の三高戦は瀬田川で行なわれ、一高が勝って一高の12連勝となった。矢我崎は大チャンとしてこのレースに出場している。

【解説】「茜さす沈淪の深淵に」——中国との戦いのことをさしているか。

【私見】「茜さす沈淪の深淵に」——「茜さす」は、「赤い色がさして光り輝

茜さす沈淪の深淵に  
頭正の両刃を揮ふもろは

299 曙に捧ぐ『月を背にして黙々の』(昭17／樋口芳朗 作詞作曲)

二 「決死猛爆二千里」

神州男子伝来の

破邪の秋水玉ちれば

妖雲忽ちはれわたり

魑魅魍魎は影何處

三 「さはれ決死のつはものゝ

往いてかへらぬ忠魂に

一度思ひよするとき

風蕭々の南海は

く「意から」日「光」昼などにかかる枕詞である。一高寮歌でも「あかねさす日出づる国」という詩句の先例があることから、ここでは「茜さす日出づる国である日本」の嘆かわしい現状を「沈淪の深淵」と表現している」と解したい。

▼「自治の光のあかねさす／日出づる国の護りとて」(94「新草薙ゆる」明43)

【解説】「決死猛爆二千里」——《言及なし》

【私見】「決死猛爆二千里」——ここでは、日本海軍の連合艦隊による昭和

16年12月8日のハワイ真珠湾攻撃を指していると解すべきであろう。

【解説】「風蕭々の南海は／易水寒き朝なりき」——《燕の荊軻が易水のほとり  
で詠じた詩(「風蕭々として易水寒し。壮士一たび去って復た還らず」)  
について解説を加えたのち、》しかしここでは「風蕭々の南海は」といって  
いる。「南海」は、中国の南の方の海のことであるから、当たらない区域を

易水寒き朝なりき」

四「記せよ壯士のをたけびを

「興亡何か夢の跡

消えざるものは只まこと』

八「山雨至つて崑崙に

今大風のみつるとき

迎ふる紀念のまつりこそ

健兒無限の感懐を

涙しうたふとまぎふると」

をさすことになる。あるいは、そこでも河北省の易水の寒さが思われるほどに寒いと述べているのか。

【私見】「風蕭々の南海は／易水寒き朝なりき」——ここにいう「南海」とは、中国の南方の海をいうのではなく、第二節を受けて、ハワイの真珠湾攻撃に係る連合艦隊の作戦海域をさすと解する。

【解説】「興亡何か夢の跡／消えざるものは只まこと」——《言及なし》

【私見】「興亡何か夢の跡／消えざるものは只まこと」——二重かぎ括弧で示されていることから分かるように、土井晩翠の詩からの引用である。

▼「興亡いづれ夢のあと／消えざるものはたゞ誠」

《晩翠「星落秋風五丈原」》

【解説】「山雨至つて崑崙に……」——「崑崙」は中国西南の崑崙山脈をさすが、ここでは中国の象徴として言っている。そして、当時の大東亜戦争と関係して、中国が「今大風のみつるとき」であると述べている。

【私見】「山雨至つて崑崙に……」——唐／許渾の『咸陽城東樓詩』の次の詩句を踏まえているのであろう。

▼「山雨欲<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub> 風滿<sub>レ</sub>樓」

300 寒風颯々『寒風颯々天に吼え』（昭17／三日月章 作詞、別宮貞雄 作曲）

七「東洋今し醒めざれば

正義人道地に伏さば……」

八「金色の民手を把らん

眠れる獅子よ肩あげて

耳かたむけんとよみ出づ

新な世紀の胎動に」

九「人生意氣に感じては

成否を誰か論ふ」

（山からの雨が降りこもうとして、まず一陣の風が棲いっばいに吹き込んで来た。事件が起ころうとする前、何となくおだやかでない形勢がただよったとえ。）

【解説】「人生意氣に感じては／成否を誰か論ふ」——『仇浪騒ぐ』の第四

節の「人生意氣に感じては／たぎる血潮の火と燃えて」によっていると思われるがさらにその原典は唐詩選の魏徴の『述懐』詩に「人生感意氣、功名誰復論」とあるのによる。

【私見】「人生意氣に感じては／成否を誰か論ふ」——晩翠の詩を踏まえる。

▼「人生意氣に感じては／成否をたれかあげつらふ」≪星落秋風五丈原≫

【解説】「金色の民」は日本の外、関係の深かったドイツ（独）・イタリア（伊）

をさすか。あるいは、いわゆる黄色人種（日本の外、中国その他東亜の人たち）をさしているのか、いずれにしても、日本と深い関係にある国の人々をさしている。

「十億」は、東亜の人にインドも加えているのであろう。

【私見】「金色の民」は「黄色人種（アジア人）」を指す。第七節及び第九節の

九 「聞け十億の同胞じゅういひんの

重き鎖を解き放ち……」

表現を見ても、東洋・アジアについて述べていることは明らかで、日独伊三国同盟は関係がない。≪342 『征露歌』及び113 『あゝ平安の』の項参照≫

301 寄贈歌『嗚呼東の空燃えて』(昭17 東大／田村二郎 作詞)

302 第五十三回紀念祭祭歌『運るもの』(昭17・6／清水健二郎 作詞、大山哲雄 作曲)

一 「運めぐるるもの星とは呼びて  
罌粟けしのごと砂子すなごの如く  
人の住む星は轉まわびつ」

【解説】冒頭第一〜三節で、作者は地球を他の天体と同じ星の一つと見なす、いわば宇宙的なパースペクティヴのもとに詩想を展開し、罌粟粒けしつぶの如き地球上における人類の対立抗争の歴史を回顧する。ここには明らかに、ヒューマニズムから来る反戦的思念と感情が、作者の精神を突き動かしているさまが看とれる。

【私見】「運るもの星とは呼びて」——宇宙の根源にある大いなる存在の意志によつて自転・公転を繰り返しながら軌道上を運行して行く天体を「星」と呼ぶ。

「罌粟のごと砂子の如く、人の住む星は轉びつ」——宇宙の中では、人の住む地球は罌粟粒や砂子のような微小な星ではあるが、定められた軌道の上を運行し、確かな時を刻んでゆくのである。「つ」は動作・作用の

実現を確述する助動詞（確かに…する。…するのである。の意）。

▼「第一節から第三節までに見られた、いわば人類と戦争にかかわる巨視的な諦観の抒情に心を打たれたことも忘れられない。」

《清岡卓行（昭19文丙）『寮歌集それは思い出の泉』《向陵》最終号、

氏は第53回寮歌選考委員の一人。》

▼「地球という本来はおおらかに平和であるべきものが、表層の部分で波の中の罌粟粒か砂のようにゆれ動き、国同士が武器をもつて闘い傷つけあう出来事が起こっている。そんなおぞましくもいたましいことを誰が望むものかと、理想と現実の大きな隔たりを痛恨こめて慨嘆している。」

《稲垣眞美『旧制一高の非戦の歌・反戦譜

——めぐるもの星とは呼びびて抄』（平6、昭和出版）》

▼「われわれの住む地球を、毎日自転しつつ遠く太陽の軌道をめぐっている遊星の一つとうたい出しているが、作者の胸奥には、その太陽系の遙か奥から、万象を摂理している大いなる存在に対する意識があったことが（親友岡本哲治氏から私への書簡により）察せられる。それは、吾々はその大きな存在を認識できないので、「国」をその存在のモデルと見る外はなく、現象的には、決定的に国を愛する外はない、とする考え方である。

二「運命ある星の轉べば  
青き月赤き大星も  
の子の血潮浴びけん」

岡本氏によれば、清水氏は極めて確固とした愛国心を持つていたといひ、それを「あきらめの愛国心」と表現している。

《井上司朗（一高大13文乙）『一高寮歌私観』》以下、『私観』と略称

▼「当時のすべての一高生と同じく、彼も戦争の是非を問われれば非とは答えたであろうが、彼は、もつと沈潜・透徹した人間の性を見つめての戦争を運命と受容せざるを得ない考え方のようであった。だからこそ戦争体験を赤裸々にすべく、進んで戦場に赴き、珠玉の寮歌を遺して散華したのである。その意味で、あの寮歌を彼のために、単なる反戦詩とは呼ばれたくない。」

《香川保一（17・9文乙）『一高は教養の躰である』《向陵》H11・10）

【解説】第二節で作者は、地球上では、遙かに遠い昔から堪えず人類が対立抗争を繰返し、血を流してきたと指摘する。

【私見】「運命ある星の轉べば」——人類の対立抗争という悲しい運命を負った地球が時を刻んでゆくと、いつも戦争が起きて血が流される、の意であろう。「轉べば」は、「已然形＋ば」で恒常的条件を表し、「……する」といふも……する」の意。

「青き月赤き大星も……浴びけん」——「青き月」や「赤き大星」

火星」までもが地球上で流された人の子の血を浴びたことであろう、の意と解する。

▼「大きな意志により宿命づけられた地球の運行の過程に、『青き月 赤き大星』おぼしまでも、戦禍によって血をあびたであろうとする」《井上司朗・『私観』》。

初出の昭和18年版寮歌集では「青き月」だが、これを「青き星」の誤植となす説が根強く存在し（井上司朗『私観』、稲垣眞美・前掲書）、今も両説がある。一部に「青き星」とする寮歌集（昭和21年9月版および昭和50年版）もある。ただし、平成16年版の「大寮歌集」（最終版）に至って、再び「青き月」に戻されており、現在ではこれが通説と言ってよからう。

「青き星」説の中には、「青き星」おぼし⇨アメリカ、「赤き大星」おぼし⇨ソ連と見る向きが多いようだが、アメリカの星条旗の50個の星は、青地に「白き星」であって、「青き星」ではない。「米ソ両国の成立までの流血」説もあるが、本寮歌との関連は薄い。また第二次大戦時、米ソは同盟関係にあつたので、「米ソの対立」説も当を得ない。このほか、地球に最も近い惑星である金星と火星を「青き星」と「赤き大星」おぼしに擬する説や、「赤き大星」おぼし⇨地球」とする説もある。



次に、天文学で「赤色巨星」(くじら座のミラ、おうし座のアルデバラ  
ンなど)や「赤色超巨星」(オリオン座のペテルギウス、さそり座のアン  
タレスなど)と呼ばれるものがあるが、いずれも地球からの距離は光年単  
位で余りに遠く、地球上の戦いによって血を浴びる星というイメージから  
は大きく外れる。清水氏と同期の大平成人氏(17・9理乙)は、『寮歌  
に歌われた星、今届いた当時の光』(『向陵』平9・10)の中で、『青き  
月』が正しい。』と断ずるとともに、『赤き大星』とはもちろん火星のこ  
と、地球に近い天体である月にも火星にも、地球で流れた人の子の血が飛  
び散って行ったろう、という作意であろう』とされる。筆者は「青き月」  
および「赤き大星」<sup>おぼし</sup>についての同氏の見解に賛同する。

▼「月とする説では、月を地球の腥惨な争いを俯瞰する点景とみるが、  
星とする説は、一つは青き星、赤き大星と星々の種々相をいったものとし、  
その二は、青き星をアメリカ、赤き大星をソ連邦とみて、共に、その成立  
までの幾多の流血を作者は嘆いていると説く。」《井上司朗・『私観』》

最近になって、平成16年4月に作曲者の大山哲雄氏から当時の一高同  
窓会の橋本十三男事務局長(昭22文一)あてに、『運るもの』の第二節の  
「青き星」は「青き月」が正しいので、平成16年版ではぜひ訂正してほし

三「紫に血潮流れて

ふたすぢの劔と劔

運命とはかくもいたまし」

い旨の書簡が寄せられていたことがわかった。それによると、昭和50年版寮歌集で「青き星」となっているのを知り大変驚いた、今回最終版寮歌集が発行されると聞き、この機会を逸しては、清水氏の歌詞が永久に原作と異ったまま固定されてしまうという危機感からお願いに及んだ、という趣旨が縷々述べられている。

【解説】第三節で作者は、「劔と劔」とを持って戦い合い、血を流し合ってきた人類の歴史を普遍的、人道的観点から通観して、「運命とはかくもいたまし」と単刀直入に痛み悲しんでいる。ここには明らかに、ヒューマニズムから来る反戦的な思念と感情が、作者の精神を突き動かしているさまが看とれる。

【私見】「紫に血潮流れて」——「紫の血潮」が何を象徴しているのか、不詳。「ふたすぢの劔と劔」——検閲への配慮から阿藤教授が手を入れたものとされる（稲垣眞美・前傾書）が、原歌詞は不明で推測の域を出ない。「運命とはかくもいたまし」——地球上で人類が対立抗争を繰り返すことに多くの血が流される。このように人類の運命とは悲しく痛ましいものである。

▼「ふたすぢの劔と劔」とは、思想的対立と採らなくても、世の中の対

四「いたましき運命はあれど」

この星の正義呼ばはん  
陽の民ら命かしこみ

立の常なることを指すと見てよいだろう。それを人類の宿命と見ているところに作詞者の宗教的直観の如きものを感ずる。」(要旨)

《井上司朗・『私観』》

【解説】第四、六節では一転して、立脚点は普遍的人類的なそれから、特殊な日本の国民的なそれへと転換され、今や「この星の正義」の名において始められた戦時下、個人的感情はどうあれ、国民としては大君(＝国家)の命ずるところに背くことはできぬという諦念を強いられていることを表白している。

【私見】「いたましき運命はあれど」この星の正義呼ばはん——人類が血流しあうという運命を悲しくも痛ましいことだと認識しながらも、この地球に正義を実現すべく我が国が世界に呼びかけを続けてゆくべきだ(いざとなれば死を賭して戦いに参加する覚悟もしなければならぬ)。

▼「世界の動きや歴史の流れは人間の意思を超えており、人間の無力とこの世の無常を思い知ったとき、そこに「覚悟」と「あきらめ」が出てくる。この二つは不可分であり、「死」を先駆的に予期したとき、人は「あきらめ」へと歩み寄り、「死への覚悟」という倫理的精神が生み出される。

《佐伯啓思著の『日本の愛国心―序説的考察』(N-T-T出版) 292頁

から筆者が要約した。》

「陽の民ら命かしこみ」——「陽の民ら」は日本の国民。「命かしこみ」は次節の「大君の命かしこみ」と同じ。(しりとり歌の形で詩想が展開される。)

▼「冒頭で『いたましき運命はあれど』と、日本の正義の確立、理想貫徹が、流血の惨を伴うことを嘆いている。《井上司朗・『私観』》

▼「そのいたましい運命に、この国の民たちは、正義の名のもとに、「大君の命」によって出で立つことを強制される。空を仰げば南十字星が美しく招き椰子の木は爽やかにそよいでいるというのに。」《稲垣眞美・前掲書》

五 「大君の命かしこみ  
愛しけ眞子の手離り  
島傳ひゆく」とうたはん

【解説】「大君の命かしこみ 愛しけ眞子の手離り 島傳ひゆく」——助丁すけのよぼろ

秩父郡大伴部少歳(万葉集20・441)の歌の引用。「眞子の手離り」は今の読みでは「眞子の手離り」。「うつくしき」は、古代では、親が子を、また、夫婦が互いにかわいく思い、情愛をそそぐ心持をいう。

【私見】「大君の命かしこみ 愛しけ眞子の手離り 島傳ひゆく」——「大君の命かしこみ」は、天皇のご命令を謹んでお受けして、の意。「眞子」は、いとしい妻。万葉歌の引用についていうと、「眞子の手離り」は「眞子が手離り」が正しい。万葉集の表記では、「麻古我弓波奈利」とある。「……

六「島傳ひゆくとうたひし  
遠つ祖おやいづちますらん  
みんなみの耀かがよふ空や」

とうたはん」は、兵士らがこの防人歌を歌いながら任地に赴くさまをイメ  
ージしている。

【解説】第六く八節では、前出の古歌の「島傳ひゆく」につなげて、これまで  
英・米蘭諸国の統治下にあった南方（フィリピン、マレーシア、シンガポ  
ール、インドネシア）に日本軍が進攻して敵軍を屈服せしめた現状を踏ま  
えつつ、その血なまぐさい現実を「みんなみの耀かがよふ空」「島めぐる椰子の  
葉」等の美しく爽やかな自然のイメージによつて詩化し、臙化している。

「みんなみの耀かがよふ空や」——日本軍の進攻した南方の島々（既出）を  
念頭においてこう歌っている。

【私見】「遠つ祖おやいづちますらん」——「遠つ祖おや」は先祖。「防人であった我々  
日本人の先祖の御霊は、何処にいらっしやるのだろうか」の意。「ます」  
は「あり」または「行く」の尊敬語だが、ここでは前者に解した。稻垣氏  
の前掲書には、「もし『遠つ祖おや』が天皇、皇室の先祖を意味するのであれ  
ば、この場合『遠み祖』でなければならぬ、という五味智英先生の指摘  
があった。」との記述がある。しかし、「島傳ひゆくとうたひし遠つ祖おや」と  
あることからすれば、これが「天皇、皇室の先祖」を意味する可能性は考  
えられず、「五味先生の指摘があった云々」という話は、何かの間違いで

七「みんなみの空十字星

眸あげて民ら仰げば

島めぐる椰子の葉青し」

八「椰子の實の枝を離りて

漂ひし時の流れよ

岸に今我ら立ちたり」

あろう。

「みんなみの耀かがよふ空そらや」——「耀かがよふ」は、きらめく、ちらちらと光つてゆらめく「意」。「や」を文末の疑問の係助詞とみれば、「こ先祖の御霊は、南十字星のきらめく南（日本軍の進攻した南方の島々）の空にいらっしやるのだらうか」の意となる。これに対し、「や」を呼びかけの間投助詞と見るなら、「南十字星のきらめく南の空よ、こ先祖の御霊は何処にいらっしやるのか」の意となろう。

【私見】前節で「遠つ祖とほつそいつちますらん」と南の空に問いかけた「民ら」（＝兵士）が「眸まぶあげて」南十字星を仰ぐということは、「遠つ祖」が南十字星に宿つて、自分たちを守つてくれているというイメージか。また「島めぐる椰子の葉」にも「遠つ祖」の事蹟を投影させている可能性もあろう。

【私見】「椰子の實の枝を離りて……岸に今我ら立ちたり」——第八節の詩句は、島崎藤村の『椰子の実』の詩を下敷きにしたものと考えられる。

▼「名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ

故郷の岸を離れて 汝はそも波に幾月

旧の樹は生ひや茂れる 枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕 孤身の浮寝の旅ぞ」《島崎藤村『椰子の実』》

九「うち寄する波にくだけし

陳ちんきもの光ひかりなきもの

苟こ知る曉あけ來きにけるを」

「遠おとつ祖そ」も椰子の実の如く海を渡って任地の島にたどり着いたのであるが、我ら兵士も今故国を離れてこの南の島に立っていることだ、の意に解する。

【解説】これまで植民地を支配していた「陳ちんきもの光ひかりなきもの」に代って「苟こ知る曉あけ」すなわち真の正義に立脚した新時代（「曉あけ」が到来すべきこと）を示す。

【私見】「苟こ知る曉あけ來きにけるを」——「解説」では「苟こ」を「真の正義」の意に解しているが、辞書には「苟こ」を名詞として用いる例は見当たらない。「かりそめに」または「いやしくも」という副詞として用いるのが普通だが、「まこと」に「と訓ずる場合は、動作に区切りをつける意の副詞として用いられ、「そのつどけりをつけて」「ひとつひとつ」などと訳す。

《漢字源》及び『学研大漢和』による《

▼「苟こ日新にちしん 日日新にちじにちしん 又日新またにちしん」《『大学』第三節》

（一日一日とみずからを新しくし、また一日一日と新しくすること。）

「來き」にける」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形＋助動詞「けり」の連体形。この場合の「けり」は、気付き、詠嘆の助動詞で、今まで気付かずにいた事実気付いて驚き詠嘆する意を表す。以上のことから「苟こ知る曉あけ來き」

十「親あつたなる民のしるべと

雄々しくも岡にのぼれば

柏葉に露ぞしづくす」

にけるを」とは、「日本軍が南方の島々を次々と攻め落とすことに、それぞれの場所が夜明け（＝新しい時代）を迎えたのだなあ、と知ることになった」の意に解する。

【参考】『漢辞海』では、「苟」を「まことに」と訓む場合は、対象を限る意とする。また『字通』は、「たしかに」「実に」という字義を付している。

【解説】第十節では、前節の含意する「新秩序」の指導精神が「柏葉」すなわちわが「高精神」につながると言わんばかりの想念を提示する。

【私見】「親あつたなる民」——一般の漢和辞典では、「親」に「アラタ」という訓を与えていない。ただし諸橋『大漢和』は「親」の第九義として「あつた、あつたにする。新に同じ。」を示し、「親民」の語義として「①民をあつたにする。民を教化して善に導く。大学三綱領の一。親は新。②民に親しむ」としている。なお、『大学』における「親民」の読み方には古来争いがあり、王陽明がそのまま「民を親しむ」と読むのに対して、朱子は「親」を「新」の誤字と認め、「民を新たにする」と読みかえることになる。

▼「大学之道。在明明徳。在親民。在止於至善。」《『大学』第一節》。  
（大学の道は、明徳を明らかにするに在り、民を新た「親を新に改める」にするに在り、至善に止まるに在り。）これに関連して『大学』第三節には



十二「いみじくも露にうつれる

新星の相よかくて

人の世の運命を秘めぬ」

「作新民。」(新たなる民を作せ(育てよ)とある。↓「作新学院」の由来。

「親なる民のしるべ」と——「日本を中心とする大東亜共栄圏の」民を教化し善導するための指針を求めて「くらしいの意味になろうか。

「岡にのぼれば柏葉に露ぞしづくす」——向陵に来てみると、一高の象徴である柏の葉末に、何かを暗示するように露が宿っている。(一高の自治の精神に立ち返れば、今後のあるべき姿が見えてくる、の意であろう。)

【解説】第十一〜十二節では、そこに生まれるはずの「新星の相」(「新しい日本の姿」)に人類の運命が秘められているとする。

【私見】「いみじくも露にうつれる新星の相よ」——すばらしいことに、一高精神を象徴する柏の露には、生まれ変わった新しい地球の姿が映し出されている。

「人の世の運命を秘めぬ」——そこには、人類の今後の輝かしい運命が秘められているに違いない。「ぬ」は、「確述・強意」の助動詞。(

▼「第十一節は象徴的で、葉末の露にうつる新星の相、即ち日本の相には、人間の世の逃れがたい運命が宿っている、とうたう。

《井上司朗・『私観』》

主「矜ほこりかに運命を秘めて

星轉あめつちび民等謳あけはん

天地は朱あけに映あけゆると」

【解説】その「新しい日本の姿」にこそ、「天地は朱あめつちに映あけゆる」輝ほこりかしい人類

の今後の運命が秘められているという暗示的表現をもって、この歌を歌い収めている。

【私見】「矜ほこりかに運命を秘めて星轉あめつちび」——人類の今後の輝ほこりかしい運命を秘めつつ、地球は誇ほこりらしげに軌道上を運行し、時を刻んでゆく。(矜ほこりか(ナリ)は、誇ほこりらしく思う様子。得意そうな様子。)

「民等謳あめつちはん 天地は朱あめつちに映あけゆると」——その地球上においては、天地が輝ほこりかしい未来の栄光によって朱色あめつちに照り映あけえていることを祝ほこりって、日本の、そして世界の人々が、よろこびの歌声を響あけかせることであろう、とうたう。しかし、この明るい表現の裏には、運命を受容せざるを得ないという「悲しみ」と「あきらめ」の美学が秘められているものと考えられる。

なお、「天地は朱あめつちに映あけゆる」については、「天地を朱あけに染めて火柱ほこりの立つ戦の終末」(稲垣眞美・前掲書)と解する向きもあるが、この節では「矜ほこりかに」、「謳あめつちはん」、「映あけゆる」のようにプラスイメージの詩句が並ぶことを勘案すると、「戦による火柱」のようなマイナスイメージの解釈には賛同しがたい。

▼「終節に於て、緒戦の勝利に酔った国民に対し、矜ほこりらしき運命を負つ

## 【補論】

て地球はめぐり、そこに日本の正義は樹立され、その民らは皆今、天地は、自分達の大きいなる栄光を約束するように真紅の暁紅に燃えている、とうたっているが、どこかにニヒルの批判がひそんでいる。」《井上司朗・『私観』》

▼「……抗い難い運命的なものに対して、かつて学びの岡にあった自恃を胸に秘めつつ、天地を朱に染めて火柱の立つ戦の終末にも、魂の叫びを歌い上げようというのである。」《稻垣眞美・前掲書》

大学・高等学校・専門学校の修業年限半年短縮に伴い、一高でも昭和十五年入学の三年生は十七年九月に繰り上げ卒業することになったため、第五十三回記念祭はこの年の六月に繰り上げ開催された。この時に選定された寮歌が、清水健二郎（17・9文丙）作詞、大山哲雄（17・9理乙）作曲の『運るもの』であった。一節の構造は、「五七 五七 五七」と全寮歌中最も短く、他に例はない《黒川 弘氏（25文甲）による》。選者の阿藤伯海教授は清水氏の作品を激賞したが、検閲に備えて、作者と協議の上で若干の補正を加えたとされる。曲は、当初は三拍子であったが、当選後印刷前に、七拍子に改稿したという《大山哲雄『運るもの』の時代》、『向陵駒場』第20号》。

なお清水氏は、終戦直前の七月に、戦艦長門の艦橋で、米軍機の攻撃を受けて散華したことで知られる。

▼「うつし身は刹那に散りて 「運るもの」の歌はわれらの心に残る」《大平成人 戦没学生友追悼文集『碑』より》

『運るもの』は、歌詞・曲ともにぬきんでた名寮歌として一高卒業生や寮歌愛好者の間で長く歌い継がれて

きたが、選者による補正内容、歌詞の正誤、「反戦歌」と位置づけることの当否などをめぐって異論があり、歌詞についても解釈が分かれることが多い。本稿では、先達の論考を極力参照し、限られた紙幅の中でこうした論点についてもできるだけ触れたが、まだ十分とは言いがたい。諸賢のご叱正を賜れば幸いである。

(五)「人種の差異に同胞は  
一字の愛を護る可き」

【解説】「人種の差異に同胞は／一字の愛を護る可き」——「人種の差異があつても世界を一つのものとして愛を護るべきだ。」の意。八紘一字のこと  
も考えたのであろう。

【私見】「人種の差異に同胞は／一字の愛を護る可き」——土井晩翠の『登高賦』(明34『曉鐘』所載)に「有情の天地いつまでか／常に混擾の局として、人種の差異に同胞の／四海の愛を壊るべき」とある。晩翠が「壊る」とした部分に相当する語句は、昭和50年版以前の寮歌集では「護る」とあり、上記の歌詞では「護る」と表記されて、「壊る」とは反対の意味に転化している。「壊る」↓「護る」↓「護る」というプロセスで外見の類似した漢字による誤植が生じたことが見てとれよう。

晩翠の原詩に「いつまでか……壊るべき」とあるように、ここは強い語気の疑問反語の文脈であり、「世界は一つという同胞愛を人種の差異によつ

(六)「あゝ向陵の若人よ

光と愛と誠もて

長く此の世をてらしめよ

東亞新に興る音の

過去を淋しむ曲ならず

光榮の響とかはるまで」

舞

一「榛 薫る野の末に

揚羽蝶舞ふ水無月を

君も舞はずや、生れしは

光を浴びて翔けむため

君と語らむ、世にあるは

笑まひ楽しく歌ふため」

て破壊したままでよいものか、いやよくない」の意に解する。

【解説】「光と愛と誠もて……」——良心のいつわらぬ声を響かせている。

【私見】「光と愛と誠もて……」——第五節の「人種の差異……」に引き続

き、第六節の大半が晩翠の「登高賦」から借用した表現で占められている。

▼「光と愛と詩とをして 永く此世を掩はしめよ

世紀新に替る後、秋風愁の曲ならず

あらしの声も天上の無窮の楽とひびくまで」

《土井晩翠／「曉鐘」・「登高賦」明 34》

はしばみ  
「榛 薫る」(昭17・6東大／林 陽一 作詞、八田真穂 作曲)

【解説】本寮歌は、優雅な文体をもつて、真に人間的な青春の生命的感情を歌

い、戦争の犠牲となった「同窓」<sup>はらから</sup>の死を悼み、その挽歌を暖かい思いをこ

めて奏でている。「舞」と題された第一節では、「笑まひ楽しく歌ふ」とこ

ろに生命の目的があるとする想念を述べている。

【私見】「榛 薫る……水無月を」——「榛」<sup>はしばみ</sup>はカバノキ科の落葉低木。開

花期 は春で、果実は食用になる。大学・高校等の修業年限が半年短縮さ

れたため、第53回記念祭は翌年二月を待たずに、この年の六月に繰り上げ実施された。「水無月」とあるのはこのことをさしている。

「生れしは……翔けむため」「世にあるは……楽しく歌ふため」——後白河院撰の今様集『梁塵秘抄』（一一八〇年頃）所載の有名な次の歌を踏まえて、この世に生れた人間は、子供のようにのびのびと楽しく自由に振舞うのが本来の姿だと主張している。ここでは特に、「君も舞はずや」「君と語らむ」とあることから、戦没した「同窓」（はらかい）に向けたメッセージと解すべきであろう。

▼「遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子供の声聞けば 我が身さへこそ揺るがるれ」

本寄贈歌の「舞」「幻」「曙」の三節はいずれも、戦争の犠牲となった「同窓」（はらかい）がもし向陵に健在であれば、というフィクションの世界を歌ったものであり、第四節の「悼」を含めた四節を「長歌」と見立てれば、それに対する「反歌」として第五節及び第六節の二つの「挽歌」を用意することによって、戦争による「同窓」（はらかい）の死を悼むという構成をとっていると解する。

【解説】「夢の塔影映えて」——「塔」は一高の時計台をさす。

夢の塔あむじょう影映えて

紅き心を白妙の

君が情と競ひなば

あはれ寂はらしきこの丘も

蓮はらすの園に似るらむか

【私見】「夢の塔あむじょう影映えて」——もの皆移り変わる無常の現世であるが、一

高の象徴である時計台の姿は常にあざやかに映えている。

【解説】「紅き心を白妙の 君が情と競ひなば」——「白妙の」は「君が情」の枕詞のようにして、「純白な友情」をいっている。

【私見】「紅き心を白妙の 君が情と競ひなば」——「紅き心」（自分の誠実な心）と「白妙の君が情」（同窓はじかけ）の純粹な友情）とが、紅い蓮の花と白い蓮の花のように咲き競ったならば、の意。「ぬ」は完了の助動詞で、動作・状態の帰結を追認する意を表す。「ば」は接続助詞。

【解説】「蓮はらすの園に似るらむか」——蓮の花は泥中から出て、濁りに染まなるところから清浄なものの喩えに使われるし、「蓮華」は仏教の經典では極楽浄土のシンボルとされる。それで「蓮はらすの園に似るらむか」とは、濁りに染まぬ清浄高潔な精神の支配している向が丘（＝高）を暗に形容した表現であろう。

【私見】「蓮はらすの園に似るらむか」——ああ、向陵から君の姿が消え、寂しくてならないが、我々が紅と白の蓮の花のように互いに咲き競っていると考えらるならば、この向陵も、清浄な蓮の花が咲き誇る蓮の園、すなわち、あらゆる苦しみから解放されて幸福に満ちている極楽浄土のようだといえる

曙

三「夏の祭の曙に

星の宴うたげの散あちけては

冷ひやねく照ひす陽ひの恵めぐみみ

享たのじてままどろむ合あ歡むの蔭かげ

大おほいなるかな安やすらひの

黄こが金ね溢あふるゝ圓まかさよ」

悼

四「精神こころの國くにに目め覺めあひ

丘かみの門かど出での道みちすがら

逝はきて歸かへらぬ同は窓からの

十と指ゆびにも餘あまるその数かずの

幸さい多おほかりし追お憶もひを

我われは代かりて謳うたふなり」

のではないか。

【解説】「夏の祭の曙に 星の宴の散けては」——「夏の祭」とあるのは、紀念祭が六月に行われたことを踏まえる。夏の祭と祝宴の終わつた後の曙に安らぎを見出す休息感、これは戦争とは無縁の真に人間的な心情の謳歌であらう。

【私見】「夏の祭の曙に 星の宴の散けては」——この寄贈歌が作詞されたのは紀念祭より前のことであるから、この節の情景描写は、もし戦没した「同窓」が出征していなければ、自分たちとともに、このように安らかに紀念祭を楽しんだであらうにと偲んでいると解する。

【解説】本寄贈歌で最も読む者、唱う者の胸にしみるのは、「悼」と「挽歌」の二節を通じて吐露されている戦争犠牲者への追悼の念であらう。

【私見】「精神の國」——第一義的には向陵をさすと考へるが、『新墾の』(昭12)「追懷③」の表現に照らすと、「精神の國」が「日本の國」をさす可  
能性も残る。

▼「誇りの歴史あとにして 心の國と別れゆく」《253 『大海原の』昭10 東太



挽歌

五「青き葉の 青きがまゝに  
朽ち果てて」

白き光に 何を夢見る」

▼「東帝國の精神の文化 見よ今し流れ出づるを」《267 『新墾の』昭12》

「逝きて歸らぬ同窓の 十指にも餘るその数の」—— 日支事変から大東亜戦争にかけての一高同窓の戦没者数を一高同窓会報から拾ってみると、第36号(昭13・1)から第48号(昭17・6)までの累計で十二一柱を数える。

「幸多かりし、追憶を 我は代りて謳ふなり」—— 「逝きて歸らぬ同窓」の「幸多かりし追憶」とは本寄贈歌の「舞」「幻」「曙」の三節の内容をさし、フィクションではあるが、共有できたはずの想い出を、作者がこの寮歌において、「逝きて歸らぬ同窓」に代って披露しようといっている。

【解説】「青き葉の 青きがまゝに 朽ち果てて」—— 「青き葉」は、また若い身空での意味の喩えで、まだ将来性に満ちた若々しい時期に、成熟を待たずに戦争の犠牲になって、惜しむべきことに若くして命を失ったことを言い表す。

【私見】「青き葉の 青きがまゝに 朽ち果てて」—— 「同窓」があまりにも若くして戦没し、歸らぬ人となったことを嘆き惜しむ気持ちを表現する。

「白き光に何を夢見る」—— 『仏説阿弥陀經』には「池中蓮華、大如車

六「絆きずなより 解とき放はなたれて

我が友は

今日の祭に

愉たのしみかるらむ」

輪。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光。微妙香潔。」(極楽の池の中の蓮の花は、その大きさは車輪のようで、青い花は青い光、黄色い花は黄色い光、赤い花は赤い光、白い花は白い光を放って、それぞれが個性に満ちた清らかな香を漂わせている、の意)とある。白い蓮の花に比すべき(第三節の「幻」参照)君の靈みたまは、極楽浄土で白い光を放ちながら何を夢見ているのか。

《参考①》「挽歌」は、人の死を悲しみ、故人を偲ぶ歌。

《参考②》齋藤茂吉の第一歌集『赤光』の名は右の「赤色赤光」に基づく。

【解説】「絆きずなより 解とき放はなたれて……愉たのしみかるらむ」——今日の祭では、

国家とか戦争などという世俗の「きずな」から解き放たれてといっている。今は亡き靈への冥福の祈りであろう。

【私見】「絆きずなより 解とき放はなたれて……愉たのしみかるらむ」——戦没した「同窓」の靈みたまは、現世の諸々の呪縛から解き放たれて、今日の記念祭には極楽浄土から向陵に帰って参加し、大いに愉たのしみんでいることであろう。

《参考》井上司朗氏(大13文乙)は『「高寮歌私観」』の中で、「第六節では、時局の圧迫(具体的には軍事教練等)より解放されて、今日、記念祭の一日のみは、自由にその青春をたのしめる寮生を祝福していると指摘

305 第五十四回紀念祭寮歌『天つ日を』(昭18・5/田中正俊 作詞、長内 端 作曲)

(一)「天つ日を見あぐるまなこ

人の子に与えられずて…」

(二)「ときありて仇れる男の児

穹窿に征矢を放てど

白き矢は青きを離り

さだめある生命老いにし

かゝる日のかゝる生命の

追憶とて建てし碑文

いみじかる言葉朽ちにし」

(三)「さはれ見よ星辰は涙びず

そが光大地にそゝげば

われもまた若きひとひを

過失の征矢や放たん

しておられるが、これは恐らく戦没した「同窓」と寮生とを混同されたものであろう。

【解説】「穹窿に征矢を放てど／白き矢は青きを離り」——「時に精神的誇りの高い勇氣ある人物がいて、真の自由(「天つ日」)太陽を目ざして戦いをいどむが、その放つ矢は的を射ぬくことができなのまま、生命を全うせずして終わる宿命を担っている」と解し、反戦的感情を婉曲に表現した寮歌だと見る。

【私見】「穹窿に征矢を放てど／白き矢は青きを離り」——新渡戸校長の退任に際し、大正2年5月1日に嚶鳴堂で開かれた新旧校長歓送迎会の席上、同校長は、アメリカの詩人H・W・ロングフェローの『矢と歌』という詩《後掲》を引用し、「私の言った言葉も空しく大空に消えていった矢かも知れない。しかし誰かの胸にはそれが刺さって、そしてそこから愛と希望と信仰の瑞々しい若い芽が出れば幸いである」と結んだと伝えられる。

《二高魂物語／藻岩豊平》

こうしたことから、本寮歌の作詞者の念頭に、ロングフェローの『矢と歌』

眩 まなくら み盲ひせむとも  
人の子の郷愁担ひて おもひ  
うなじあげかの日殉めん もと  
「たまゆらなればとことほの  
その青春は逝かんとするを」

の詩及び新渡戸校長のエピソードがあつたのではないかと考える。

「白き矢は青きを離り」とは、放つた矢が大地に落ちてしまったことを指す。また「老いにし」は、「老いにき」（＝完了・断定）と違つて連体形だから、「老いにし」にやあらん」のように「推量的判断」と解するほうが意味が通りやすい。『矢と歌』で大地に落ちた矢が、折れずに樫の木に残つていたことが後になつて分つたこととも符合する。「朽ちにし」についても同様である。第三節では、まだ若い我々は、放つた矢（言論）が言論統制により地に落ちて朽ちてしまうとあきらめずに、人の心に必ず残ると信じて、失敗を恐れず、自由の理想をめざして挑戦してゆこうとする決意を歌っていると解したい。

なお、『矢と歌』の詩の「矢」と「歌」はともに「友情」ないし「他者向けられた言葉」を、「矢の刺さつた樫」は「人の心」を象徴しているとされる。

Henry Wadsworth Longfellow (1807-1882)

### The Arrow and the Song

I shot an arrow into the air,

私は空に向かつて矢を放つた

It fell to earth, I knew not where;  
For, so swiftly it flew, the sight  
Could not follow it in its flight.

矢は大地に落ちたが、場所は分らなかつた  
矢はあまりに遠く飛んだので、私には  
行方を追うことなどできなかつたのだ

I breathed a song into the air,  
It fell to earth, I knew not where;  
For who has sight so keen and strong,  
That it can follow the flight of song?

私は空に向かつて歌を歌つた  
歌は大地に落ちたが、場所は分らなかつた  
そんな鋭い視力を誰が持つていよう  
歌の行方を追いかけられるような？

Long, long afterward, in an oak  
I found the arrow, still unbroke;  
And the song, from beginning to end,  
I found again in the heart of a friend.

ずっと、ずっとたつてから、樫の木に  
私は矢を見つけた 矢は折れていなかった  
そしてあの歌もまた、初めから終りまで  
ある友達の心に生きていたのだ

『楽しい英詩集』杉本誠訳編、オセアニア出版

---

※当時、庶務記録委員として寮歌選定の実務を担当した角田泰正氏（一高  
19 文丙）の手記によると、一高においても言論統制・寮自治の危機の嵐  
の中で寮歌選定作業は記念祭よりかなり後までずれこみ、阿藤伯海先生を  
中心とした選定会で「天つ日を」が異論なく選ばれたが、この歌詞に対す

305 のⅡ第五十四回記念祭寄贈歌『春すぎて』(昭18・5東大／橋川文三作詞)

一一「このをかに

柏の若枝を

かざし舞ふ

いのちながなし」

る応募曲に入選曲がなかったことから、作詞者の希望もあって、長内端氏に作曲を依頼した。しかし、届けられた曲が活発すぎたため、「手折りして」に似たものと注文をつけて作曲をやり直してもらった結果ようやくできあがったのがこの曲で、発表会を開いたのは五月の記念祭を半年も過ぎた涼風の身にしてみる頃になってしまったという。

《角田泰正「戦争と寮歌」／『続星霜四十年』一高十九年会、昭60》

【解説】《戦時中であり卒業繰上げなどによる混乱があったことから、この寄歌およびもう一つの寄贈歌『広瀬の流れ』は昭和50年版の寮歌集までは採録されておらず、平成16年版の寮歌集ではじめて採録されたものであるため、解説書では触れられていない。したがって寮歌の番号については、305に枝番を付した形で表示した。

【私見】「いのちながなし」——「いのちなが(命長)なし(無し)」が正しいと思われる。橋川文三全集でも、「命長なし」と表記されている。

「いのちなが(命長)」は、「命の長いこと。又、その人」と日本国語大辞典にある。「いのちながなし」は、「柏の若枝をかざし舞ふ」に象徴され

305 のⅢ第五十四回記念祭寄贈歌『広瀬の流れ』（昭18・5東北大／池田幸男・東 現 作詞）

るような楽しい向陵生活が長くは続かないことを歎いているのであろう。

(一)「柏の蔭の逍遙さうしやうに

三年の夢の生命いのちこそ

去りゆく者の胸に生き

今みちのくの

寂しき野邊に

ひた求む眞理まことの道の

指標しるべとなりぬ」

(三)「今宵故郷祭りなり

盃あげて友よいざ

文運の星護りゆく

柏葉の子の責務つとめ想ひて

朗々と維新叫ばん

陸奥むつの嵐に」

【解説】《この寄贈歌は平成16年版の寮歌集ではじめて採録されたものである

ため、解説書では触れられていない。》

【私見】「去りゆく者の胸に生き」——131『黎明の靄』の第二節を踏まえる。

▼「橄欖の森柏葉下／語らふ春は盡きんとす

嗚呼紅の陵の夢／其の香其の色永劫に

旅行く子等の胸に生き／強き力とならん哉」

【私見】「文運の星護りゆく」——131『黎明の靄』の第四節を踏まえる。

▼「されど望は盡きざりき／紺碧の空白銀の

文運の星瞬けば／今六寮の若き血は

燎原の火の行く如く／亂れし世をば焼き果てん」

【概説】昭和十九年の四月半ばから約半年間、二年生全員が勤労働員により、日立製作所の日立、多賀岡工場と、大甕、栃木の農耕作業に出動したことから、第五十五回記念祭は、七月七日の駒場における記念祭に引き続き、翌八日に、ほぼ同一のプログラムで動員先の日立（多賀）でも記念祭が挙行された。本寮歌は駒場での記念祭に向けて作られたもので、作詞者・作曲者とも当時の三年生であった。また、動員先での記念祭のために作られた寮歌が、二年生の作詞・作曲による307『嗚呼悠久の』であった。

【解説書】は、本寮歌の内容については、「当時の寮生の魂の奥底からの声として強く胸を打つものがある」として高い評価を与えつつも、作詞者が古代語の多用によって「荘嚴味を帯びた詩的世界を現出せしめようとする野心的な企図を十分達成しているかは疑問だ」と指摘する。とりわけ、一般に使われなような恣意的な措辞が多い（\*）ことには批判的である。

\* 「かがよへるひとみ」「水波の道」「呼ばはふ」「海丘」「どよもふ」「うまし子」等々。

なお、この寮歌は、いわゆる「しりとり歌」になっている。また、当局の検閲を警戒しての韜晦も含まれているのか、難解な表現がかなり多いのも特色の一つと言えよう。

序——よろこび

曙の燃ゆる息吹ゆ  
生れ出でし生命の清魂の  
静寂なる神處の森丘に

【解説】「生れ出でし生命の清魂」——《言及なし。》

「静寂なる神處の森丘」——静かな神のいます丘の森。寮のある丘を神の森になぞらえた表現。



久遠くわんげんの悦よろこびこめて

祝いわぎ歌うたふ憧あこが憬めの歌うたは

ほのかなる黒潮くろしほに融流とけて

「ほのかなる黒潮くろしほに融流とけて」——かすかな黒潮の音や香に、歌がとけ流れるさまを表すようだが、詩的効果は疑問である。

【私見】「生あれ出いでし生命いのちの清魂たま」——高生の清き心を表現している。

「静寂しじまなる神處みやとの森を丘か」——明治神宮（代々木の森）にほど近い駒場のキャンパスをさす。「神處みやと」は明治神宮。

▼「神みやとさぶる代々木の森を 仰あやぎ見る駒場の丘邊」

《263 「紫の叢雲尽きて」(昭11) 第一節》

因みに、向陵の情景を「しじま」と形容した他の寮歌の例を挙げてみる。

▼「無言しじまに憩しむ向陵の」《142 『無言しじまに憩しむ』(大4)》

▼「しじまなる丘かべに立てば」《223 『しじまなる』(昭4)》

▼「無音しじまなす森をに反響ひびけば」《283 『丘の雲』(昭14 東大)》

「憧憬あこが憬めの歌」——真理を求め自治を讃える寮歌をさすか。

「ほのかなる黒潮くろしほに融流とけて」——井上司朗氏(大13 文)は、「向陵に生をうけたことに久遠の悦よろこびをうたう歌声が『ほのかなる黒潮くろしほに融流とけて』と結句非凡」と称賛している(『一高寮歌私観』)。

「黒潮激るたぎつ荒磯に  
旅衣しほたれ破れて

一人たつたまゆら生命

かがよへるひとみあぐれば

遙ろかなる水波の道を

眞白なる天鳥翔けり」

【解説】「黒潮激るたぎつ荒磯にく眞白なる天鳥翔けり」——「序」節の「ほ

のかなる黒潮く」を承け、荒磯の情景が詠まれているが、ハシルとタギツ、

シホタレとヤレのような語の重畳はやや煩わしく、また「かがよへるひと

み」「水波の道」などの表現には無理な感じもある。

【私見】「黒潮激るたぎつ荒磯にく一人立つたまゆら生命」——「序」節の時

点（初年次か）には「ほのか」と謳われた黒潮が、卒業を間近に控えた「も

とめ」の第一節では「激る」「たぎつ」と表現され、学生生活を取り巻く

環境の激変を表現している。当時、開戦後すでに2年有余を経過して、戦

況は我に利あらず、学校に対する国家及び軍部の統制・介入はいよいよ厳

しさを増していた。そうした世の風潮と闘うことの厳しさを、人生の旅の

途上で旅衣がぐっしより濡れ、破れてしまったことに喩え、荒磯に一人立

つような「孤高の生命」がいかににはかないものであるかの感慨を歌う（「旅

衣しほたれ破れて一人立つたまゆら生命」）。

「かがよへるひとみあぐればく眞白なる天鳥翔けり」——ふと眼を挙

げると白鳥が空を翔けて行く。あの白鳥は、もしや白鳥伝説の「孤高の英

雄」ヤマトタケルの姿ではないか。（「水波の道」は海路をいう。）

景行天皇の皇子ヤマトタケルは父天皇の命により全国に遠征し、抜群の

二「天鳥の翔け行くなべに

憧憬おもひなる雲し湧き立つ

生靈うみや放け揚ぐる呼ばはひ

海丘うみやにどよもひ荒れて

あめつちの律調しほすしや莊嚴まやに

きらゝなる天あめつ日ひしぶく

功績を挙げたが、負傷のため旅先の伊勢で天折した後、白鳥に姿を変えて翔び去り、大和、河内に立ち寄って、さらにいづくへか天翔けて行つたと伝えられる。作者は、「悲劇の孤高の英雄」と呼ばれるヤマトタケルの心情に自らの境遇を重ね合わせて表現したもののか。

【解説】「天鳥の翔け行くなべに 憧憬おもひなる雲し湧き立つ」——ナベニ（ナヘ

ニ）は、二つの事柄が継起併存することを表す。「憧憬おもひなる雲」は、あこがれの象徴のような雲が湧き立つ意であらう。

「生靈うみや放け揚ぐる呼ばはひ」——「放け」は、遠く放す」意の動詞。

「イクタマサケアグルヨバハヒ」で、生きた御霊に遠くから呼びかけ声をあげることを言うのだらう。

「海丘うみやにどよもひ」——「海丘うみや」どよもひ」とともに、熱さない表現。

「あめつちの律調しほすしや莊嚴まやに」——「スコヤニ」は、「すこやかに」の意。

「天あめつ日ひしぶく」——荒れた海の潮けぶりが天つ日に吹きつけることを表すか。

【私見】「天鳥の翔け行くなべに 憧憬おもひなる雲し湧き立つ」——白鳥が翔んで行く方には、一高生が憧れ求める真理・自治を象徴する雲が湧き立つ。

「生靈うみや放け揚ぐる呼ばはひ」——「生靈うみや」（クシビ）か）は、第1節

おもひ

三「きらくなる陽日に幸きはへし  
夏の木實のうまし子ぞ吾  
みづみづし生命の歌は  
無明なる人生の深淵に  
友と今ひとつころの

の「生命の清魂」と同じく、一高生の清き心をさすのであろう。

「放け」は、解き放つの意。一高生が自分の心を解き放って、憧憬の象徴である雲に向かつて大声で呼びかけることを表現していると解する。

なお、他の寮歌にも、次のような表現が見られる。

▼「旅立ちて茲に三年 情意をば山に涵養ひ

心魂を野にぞ解放ちて 巡礼り来し旅路の際進に」（238 『旧き皇』昭々

▼「はろかなる地平の風に かぐはしき心を放ち

曇日の空にまぎれず 橄欖の花こそ匂へ」（281 『丘の雲』昭14 東大

「あめつちの律調荘嚴に」——天地の四時運行のリズムがしつかりして。

「天つ日しごとく」——日の輝きを比喩的に表現したものであろう。

【解説】「きらくなる陽日に幸きはへし」——「サキハフ」は、生命力の活動が活発に行われる意。きらきらと輝く日光により豊かに栄える意か。

「夏の木實のうまし子ぞ吾」——「夏の木實の」は「うまし」にかかると、  
比喩的枕詞。「ウマシ」は、すばらしい、立派な意味で「子」を修飾し、  
「ウマシコンワレ」と続く。

信なる縁むすびぬ」

#### 四

「巡禮なる星の思想は  
運命なれ黙示の丘に  
灯のほの洩るゝ頃  
紅葉なす莠そよぎて  
縹緲のさしぐめる頬に  
散りそぼつ時雨の愁心

「みづみづし生命の歌は」——ミヅミヅシキ生命の歌の意。

【私見】「きりりなる陽日にうまし子ぞ吾——自己の生命力の礼賛。

「みづみづし生命の歌は」——新鮮で生気に満ちた寮歌。

「無明なる人生の深淵に」——真理に無知な人生の危機にあつて。

「友と今ひとつころの 信なる縁むすびぬ」——向陵において、真

の友人とめぐりあえた大きな喜びを歌う。

【解説】「巡禮なる星の思想は 運命なれ黙示の丘に」——《言及なし。》

「紅葉なす莠そよぎて」——「莠」は水田に生える雑草。

「縹緲のさしぐめる頬に」——「縹緲」は、遠くかすかなさま。「サシグ

ム」は涙などがにじみ出る意。ここは、自治寮のある丘に灯の洩れる頃、

莠がそよぎ、紅葉のようにほんのりと朱の色のさした頬に、という意味

かとも思われるが、難解。

【私見】「巡禮なる星の思想は 運命なれ黙示の丘に」——302『運るもの』

(昭17・6)第1節の「運るもの星とは呼びて」、第2節の「運命なる

星の転べば」、第4節の「いたましき運命はあれど」等を踏まえ、同寮歌

の作詞者の、「戦争で人類が血を流すという運命を悲しく痛ましいと認識

しながらも、国民としての自らは正義実現のために死を賭して戦いに参加

たたかひ

五「どよもせる愁情たぎりて

階音なす創造の久遠

瑞細戈千足之國と

成しまさん精進の日々は

あからひく 血潮に染みて

まくろなる色に光彩ぬ」

するといふ覚悟・諦念」の影響を受けていると解する。

「紅葉なす 莠そよぎて」—— 秋、千草（莠を含む）が赤・黄に色づくことを「草紅葉」と呼ぶ（秋の季語。「さしぐめる頬」の色と直接の関係はないと解する。

【解説】「どよもせる愁情たぎりて」—— ドヨモスは、一面に響きわたらせる

意味のトヨモスの現代語形。ただし、「愁情」の修飾語がドヨモセル、述語がタギルであるのは、そぐわない感じを与える。

「瑞細戈千足之國」—— 「クハシホコチタル」は、日本書紀「神武紀」

に見える表現で、イザナキノミコトがこの国を名付けて「日本は浦安の国、瑞細戈千足国」と言ったと伝える。日本は心安らぐ国であり、良い武器がたくさんある国、の意。

【私見】「どよもせる愁情たぎりて 階音なす創造の久遠」—— これは難解だ

が、「どよもせる愁情」は一高生の憂国の情を、「創造の久遠」は日本書紀「天孫降臨の段」に見える「天壤無窮の神勅」（皇位及び国の発展は天地とともに永遠であるとの趣意）を表したものと解する。そして、この両者が

六「今日よりは顧みなくて

大君の夕星いのち

とば  
鋭刃さやけ肉群すこやけく

仇つ邦醜の腥臊之氣を

攘ふとて散りしみたまら

かみがみ  
神聖し胸に籠りて」

相和すさまを「階音なす」と表現したのであろう。

「瑞細戈千足之國と 成しまさん精進の日々」——日本をよい武器の  
くはしほこちたるのくに  
たくさんある国にしようしと動員先の工場で精進する日々。

「あからひく血潮に染みて まくろなる色に光彩ぬ」——工場で生産  
ひかり  
される武器には、動員学徒の血と汗が染みこんで、黒光りしている。

【解説】「今日よりは顧みなくて」——「万葉集（二十・四三七三）の下野国  
防人歌の中に、「今日よりはかへりみなくて 大君の醜の御楯と出で立つ  
吾は」《今奉与曾布》とある。

「大君の夕星いのち」——大君の、夕星（金星）のように限らない命  
を、の意か。

「肉群すこやけく」——お身体もおすこやかにの意味か。

「仇つ邦醜の腥臊之氣を」——敵国の人の醜くなまぐさいにおいを。

【私見】「今日よりは顧みなくて 大君の夕星いのち」——元歌は「解説」の  
引く通りだが、「夕星いのち」は「大君のいのち」ではなく、「大君の醜の  
御楯と出で立つ吾すなわち「防人たる出征学徒」のはかないいのち」と  
解すべきであらう。

「肉群すこやけく」——「解説」では「大君のいのち」と解したために、

結び——さけび

【神聖し生命の歌を】

夏嶽に絶叫ふ柏葉兒

白雲の夕谿こだま

早瀬なす盟に浴みて

新たな生のかぐはしき實を

つしましく祈らん一日

●「お身体もおすこやかに」と表現したのでろうが、不適切であろう。

「仇つ邦醜の腥臊之氣を 攘ふとて散りしみたまら」——敵軍を撃滅しようとして出征し散華した戦没学徒の英霊たちをさす。

【解説】《本節について言及なし。》

【私見】「神聖し生命の歌を 夏嶽に絶叫ふ柏葉兒」——戦没学徒の英霊に

対する鎮魂歌（挽歌）としての寮歌を寮生が夏山に向かって大声で歌う。挽歌としての寮歌の例を次に挙げる。

▼「青き葉の青きがまゝに朽ち果てて 白き光に何を夢見る」

《304 『榛 薫る』(昭17・9 東大) 第5節〔挽歌〕》

「白雲の夕谿こだま 早瀬なす盟に浴みて」——この句の表現は、第39回寮歌222『白雲の』(昭4) 第一節を下敷きにしたものである。

▼「白雲の向伏す高嶺 七谷を水は落つれど……」

夕谿に瀬の音も冴えて 旅衣に氷雨冷ゆるを

いざ友よ今宵は伏さむ 一つ夢胸に結びて」



307 第五十五回記念祭寮歌『嗚呼悠久の』(昭和19・6 / 吉田和人作詞、山本一郎作曲)

【概説】昭和十九年の四月半ばから約半年間、二年生全員が勤労働員により、日立製作所の日立、多賀岡工場と、大甕、栃木の農耕作業に出動した。このため第五十五回記念祭は、七月七日の駒場における記念祭に引き続き、翌八日には動員先の多賀(多賀会館)において、駒場とほぼ同一のプログラムにより、日立・望瀟寮、多賀・鴻湊寮、大甕・拾鱗寮の三寮合同で記念祭が挙行された。(ただし七月七日のイーブは、それぞれ別の所で行われた。)

本寮歌は、動員先での記念祭のために作られたもので、作詞者・作曲者とも動員中の望瀟寮生であった。岡の上に建つ日立の寮からは広々とした海が見渡され、安倍校長によって「望瀟寮」と命名された。本寮歌の末尾には「昭和十九年六月於望瀟寮」とある。なお、前日の駒場における記念祭で発表された寮歌が、306『曙の燃ゆる息吹に』であった。

望瀟の禱り

一 「嗚呼悠久の夢を孕みて

青霞む潮の流れ

清し風八雲を靡け

天つ日の目覚むる涯に

不知火の幸を覓めつゝ

沖航し西歐の大船

【解説】「清し風八雲を靡け」——すがすがしい風が多く、雲を靡かせ。

「天つ日の目覚むる涯に」——太陽の目覚める極東の(日本の)国に。

「不知火の幸を覓めつゝ」——不知火(すなわち九州)の幸を求めて。

「龍骨の運命悉きけむ」——(西欧の船の)運命も極まったのであろう。

「龍骨」は船底の舳から艫までを貫く梁材。転じて、「船」をいう。

【私見】「嗚呼悠久の」天つ日の目覚むる涯に」——「悠久の夢」「青霞む潮」

龍骨の運命悉きけむ  
民あまた海に亡びぬ

「清し風」などの雅語で、日本の国の情景を描写する。

「天つ日の目覺むる涯に」——遠いかなた（極東）の「日出づる国」である日本のこと。「涯」は、遠いかなた。国・海などが尽きるところ。

「不知火の幸を覚めつ」——「解説」では、「不知火（すなわち九州）の幸を求めて」とするが、意味不明である。筑紫の枕詞としての「しらぬひ」の「ひ」は、上代特殊仮名遣いでは甲類で、乙類の「火」ではないため「不知火」の故事と関係づけるのは無理とされる。「知らぬ日（多くの日教を尽くして行く地）」の意から筑紫にかかるともいう（広辞苑。ここでは、西欧から多くの日を尽くして行く、はるか極東の日本をさすと解する。「幸を覚めつ」沖航（にし）きし西歐の大船」は、日本軍の南下進攻の抑止力とする目的で英国がプリンス・オブ・ウェールズを旗艦とする主力艦隊を東洋に回航したことをさすのであろう。なお「……幸を覚めつ」の句は、よく知られたカアル・ブッセの詩を下敷きにしたものか。

▼「山のあなたの空遠く」「幸」住むと人のいふ。

噫、われひとと尋めゆきて、  
涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く「幸」住むと人のいふ。

《カアル・ブッセ『山のあなた』（上田敏訳詩集『海潮音』）

二「亡び行く民の歴史や

濤幾重朱けに染めけむ

七つ洋怒り轟き

渦炎大地を捲けど

東の靈の島ゆ

葦牙の常萌ゆる子ら

新たな眞實の邦を

(「覚む」と「尋む」は、いずれも「さがし求める」の意である。)

「西歐の大船……民あまた海に亡びぬ」——「西歐の」とあることからすれば、直接的には、マレー沖海戦(昭16・12・10)で日本海軍航空隊の雷撃及び爆撃により、英国新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズ及び巡洋戦艦レパルスが撃沈され、将兵840名を失ったことを指すとみるのが順当であろう。ただし、「西歐文明の没落をうたいつつ、暗に真珠湾の成果やプリンス・オブ・ウェールズの撃沈も頭においている」との見方(井上朗氏『一高寮歌私観』)や、真珠湾攻撃の成果そのものを指すとの説(吉田健彦氏(同氏HP)も)もある。

【解説】「東の靈の島ゆ」——東方の神秘的な力を持つ島から。

「葦牙の常萌ゆる子ら」——葦牙は葦の若芽。「古事記」(神代記)に「葦牙のごとく萌えあがる物によりて成れる神の名は、「うましあしかびひこぢの神」と、葦の若芽の生長力が神格化されているのを見る。

【私見】「亡び行く民の歴史や……」——西歐が世界中で戦争による殺戮を繰り返すことによつて没落の歴史を辿ってきたと指摘する。

「東の靈の島」——日本のこと。

創うみ成なすと御言畏み

三「潮路越え異つ岸邊こしに

征ゆき循めくり威いっの言向け

愛かなし骸がら珊瑚化なしつゝ

打ち寄よする島回み守れば

虐あさけげの人草あさけ今ぞ

甦あさける朝明あさけの園に

華なやぎの孔雀は舞へど

沖はの波は猛もりも止まず

「葦牙あしかびの常とこ萌もゆる子こら」——日本の若者たち。

「新あたらなる眞實まことの邦くにを創うみ成なす」——大東亜共栄圏の建設をさすか。

「御言畏み」——天皇の仰せ（「開戦の詔勅」）を謹んで承つて。

（↓次の第三節に続く）。

【解説】「征ゆき循めくり威いっの言向け」——海をわたつて敵国を征討し、神聖かつ清

浄な力のある言葉により敵を従わせ。「威いっ」は靈威ある、神聖な力ある意。

「愛かなし骸がら珊瑚化なしつゝ」——気の毒な亡骸なきがらがまるで珊瑚のようになつて。

敵の死者のことをいう。

「島回み守れば」——（亡骸の打ち寄せられた）島の周りを守っていること。

「虐あさけげの人草あさけ今ぞ甦あさける朝明あさけの園に」——これまで虐げられてきた人々が、

今や新たな生命にめざめて迎える朝明あさけの園に。

【私見】「征ゆき循めくり威いっの言向け」——異国の地を転戦して、威風堂々と敵軍を平

定し。「言向け」は、言葉で服従させること。

「愛かなし骸がら珊瑚化なしつゝ」——「愛かなし」という表現から推論して、「解説」

の説く「敵の死者」ではなく、散華した日本の将兵に対する追悼の念を表現したものと解する（井上司朗氏、吉田健彦氏も同説）。

「島回み守れば」——島回み（島廻、島曲）＝島のまわり。「み（回、廻、曲）」

四 「驕り立つ醜類を仇と

口疼く我は忘れじ

同胞の涙拭ふと

國護の命は振ひ

文措きつ塔を出で

皇軍の戈の具へと

鍛へ作す雄々しき業に

柏葉の耀ひ新た

は湾曲したところをいう。「守れば」は、守っているので、の意。

「虐げの人草今ぞ甦る」——欧米の植民地支配により虐待されてきたアジアの諸国の民が本来の活力を取り戻している。

「沖の波猛りも止まず」——日本軍の護るアジア各地に対する米英軍の猛攻は止まるところを知らない。

【解説】「口疼く我は忘れじ」——「神武記」の久米歌による。

▼「みつみつし 久米の子等が 垣本に植ゑしはじかみ山椒」 口ひびく  
我は忘れじ 打ちてしまむ

(山椒の実で口がひりひりするように、相手の攻撃の手痛さを  
何時までも忘れまい。今こそ必ず打ち破ろう。)

「國護の命は振ひ」——国を守るわれらの命は振るい立って。

「文措きつ塔を出で……」——《なぜか言及なし》

【私見】「驕り立つ醜類を仇と」——勝ちに驕り高ぶる米英軍を敵として。

「國護の命は振ひ」——「國護」は、護国旗を校旗と仰ぐ一高生。

「文措きつ塔を出で……」——学業はそのままにして勤労働員に参加したこと。「塔」は一高を象徴する時計台のことか。あるいは、現実離れた学究生活や大学などを喩えていう「象牙の塔\*」のことか。

五

「故郷ふるさとのオリヴおひきの老樹おいき  
 永劫とこしほに魂たまの母なれ  
 旅衣りふい早はややも古ふるりつゝ  
 新城しんじょうを守る明あけけ暮くれれ  
 片時かたときも措あはかず慕すへど  
 時ときつ風徒かぜたの荒あらみに

\*十九世紀のフランスの批評家サントリーブが芸術至上主義の詩人ヴィニーの態度を批評した言葉で、日本では厨川白村が紹介し、現実とかけ離れた世界を皮肉る言葉として用いられるようになった。

「皇軍みいくさの戈やの具そなへと 鍛なへ作なす雄々ゆうゆうしき業わざに」——皇軍の武器を十分準備するために、勤労働員で軍需工場に出動し、武器製造に関連した男らしい仕事に従事した。

▼「瑞細くはしほこち戈千足たののくに之國のくにと 成つとまさん精進めいじんの日々ひび」《306 『曙あけぼのの』昭19・6》

（「瑞細くはしほこち戈千足たののくに之國のくに」は日本書紀「神武紀」に見える表現。イザナキノミコトが、この国は「武器がたくさんある国」と言ったと伝える。これを受けて、動員先の工場で精進するさまを歌っている。）

「柏葉かしよの耀あやひ新あらた」——高の栄光の歴史に新たな一頁が加わる。

【解説】「時ときつ風徒かぜたの荒あらみに」——時のいたずらな勢いのままに。

「美うまし枝えだの戦いくさきするか」——すばらしい枝の一つがふるえもしようか。

【私見】「旅衣りふい早はややも古ふるりつゝ」——九月卒業予定の三年生に加えて、動員中の二年生も、修業年限短縮により翌年三月の卒業が決まっていた。

▼「旅衣りふいいろはあせども とほに歩あむ眞理まことの夜途よみち」《243 『風荒かぜあら』昭8》

「新城しんじょうを守る明あけけ暮くれれ 片時かたときも措あはかず慕すへど」——「新城」は、動員先の

美し枝の戦きするか  
幹こそは永世揺がじ

六 「巨浪はどどろに寄せて

赤き月沖を昇りぬ

砂踏み環りて我等

頌め唄ふ先人の榮

あゝ生命若き芽ぐみに

嵐こそ試鍊なりし

幻の昨日には死にて

明日こそは榮え生れなむ

日立・望濤寮などの各寮のこと。動員先にあつても「片時も措かず慕」う対象は、魂の母なる「故郷のオリヴの老樹」である。

▼「罪よ偽善よゆるさじと 新城守の誇りあり」《264 『春や靡の』昭11》

「時つ風徒の荒みにく幹こそは永世揺がじ」——無用で気まぐれな時代の風潮によつて、一高の自治と自由に一時的に影響が及んだとしても、長い伝統に支えられて、その根幹はびくともしないであろう。

▼「風荒ぶ曠野の中に 古木たゞ黙して立てり」《243 『風荒ぶ』昭8》

【解説】「幻の昨日には死にて」——「昨日」はキソと読む（キソ説もある）。嵐の吹き荒れたことはすでに幻のように消えて、の意であろう。

【私見】「砂踏み環りて我等 頌め唄ふ先人の榮」——大波が打ち寄せ赤い月が昇る日立の磯辺に我等寮生が集まり、輪になって、先輩たちの業績を讃える寮歌を歌う。燈火管制のため篝火はない。

「あゝ生命若き芽ぐみに 嵐こそ試鍊なりし」——年若き我等にとつて、今の国難の嵐は、神の与えた試鍊だと受け止めよう。

▼「吾等皆めぐりて唄はん 新しき芽枝に萌えたり」《243 『風荒ぶ』昭8》  
「幻の昨日には死にて 明日こそは榮え生れなむ」——敗戦が続く「昨日」は幻と消え失せて、「明日」こそは勝利の榮光が実現することを期待したい

七 「見はるかす晨黒潮あした

新船の舳かぶに翳かざせし

朱燃あしたゆる護國旗みはたの風かぜに

瞳めも濡ぬれて集あふ丈夫ますらを

大おほなる時代ときの行手ゆきでを

太刀たちの緒いとに掛かけて禱いのらむ

楸櫓とほの永久とほの命いのちを

光ひかりある救すくひ生なまんと」

ものだ。

前節の「幹こそは永世とこ揺ゆがじ」、本節の「嵐あらしこそ試鍊こころみなりし」及び「明日こそは榮さかえ生なれなむ」は、いずれも「こそ十已然形」の係り結びとなるべきところだが、なぜか已然形ではなく終止形または連体形で止めており、作詞者の習慣、あるいは措辞の乱れであろう。

【解説】《本節について言及なし。》

【私見】「見はるかす晨黒潮」——望濤寮からの「望濤」を表現している。

「新船の舳かぶに翳かざせし 朱燃あしたゆる護國旗みはたの風 瞳めも濡ぬれて集あふ丈夫ますらを」——ここに「新船」とは日立・望濤寮など動員先の寮をさす。記念祭前日の七月七日おそくには、駒場から大内委員長ほか二名が、護國旗を奉じて多賀入りし（向陵誌）、七月八日当日には、慣例に従って護國旗入場のもとに記念祭が挙行され、集まった三寮の寮生たちは久々の護國旗との対面に感涙にむせんだ。本寮歌は六月の完成とされているので、記念祭当日のこうした情景を予測して表現したものとと思われる。

「大いなる時代ときの行手ゆきでを 太刀たちの緒いとに掛かけて禱いのらむ 楸櫓とほの永久とほの命いのちを 光ひかりある救すくひ生なまんと」——「太刀の緒に掛けて禱らむ」は、武士の魂である太刀（の下げ緒）に誓って禱らうとの意。「楸櫓の永久の命を 光ある救ひ



308 第五十六回記念祭歌 『日は夢み』(昭20)／今道友信 作詞

(一)「草とほく風にのる

人魚の歌のいざなひに

あゝ雲よ行方知らずに

(二)「澄む魂も喪はれ

愛の花環の火も消えぬ

生まんと」は、243『風荒ぶ』(昭8)終節の「古き木や歴史の榮に……花咲かせ」の句と相通するものがある。

井上司朗氏は本節(最終節)について、次のように評している。

▼「護国旗の下に感激の涙をもつて集う寮生を描出して鮮烈、そして日本の大いなる前途を、万葉ぶりに『太刀の緒に掛けて禱らむ』といい、向陵の永久の命に『光ある救ひ生まん』と期待している。暗澹たる時局に対して何という雄々しく健気な受けとめ方であろう。」

《井上司朗『一高寮歌私観』》

【解説】「人魚の歌のいざなひに」——【言及なし】

【私見】「人魚の歌のいざなひに」——アンデルセン童話などで有名なヨーロッパ

ツパの人魚は、一般に美人で長い髪をなびかせ、月夜に川や海辺に姿を現わし、美しい声で歌をうたう。それに魅せられた船乗りや船が近づくと、水中に引き込まれたり船を沈められたりするという【日本大百科事典】。

【解説】「澄む魂も喪はれ／愛の花環の火も消えぬ」——「丘」(＝向陵)の生活において本来中心であるべき「澄む魂」や「愛の花環」さえもが、戦

あゝ丘は少年の墓……」

争の現実下に喪失され消し去られつつあるのを嘆き悲しんでいる。

【私見】「澄む魂も喪はれ」——「澄む魂」（一高生の「清きみ魂」）が戦死によつて失われたことを指す。

▼「故郷のおもひまどかに／光浴び澄めり魂」≪219『さ霧這ふ』昭3≫

▼「丘ならで誰か抱かん／去りましゝ純きみ魂を」≪311『あくがれは』昭21≫

「愛の花環の火も消えぬ」——篝火をめぐつて寮歌を歌う一高生たちの友愛のきずな」を「愛の花環」に喩え、その火が消えてしまったと嘆く。

当時は戦時中の特殊事情から寮歌祭の篝火は中止されていた。『自治寮六十年史年表』の昭和19年7月7日の項には「篝火なく電灯下の寮歌祭」とある。また、昭和18年から20年までの寮歌に「篝火」の表現は登場しない。

309 第五十六回記念寮歌 『曉星の淡きまきさつらぎ』（昭20／東 洋 作詞）

310 第五十七回記念寮歌 『悲しみに』（昭21／藤井乙美 作詞、廣田哲夫 作曲）

311 第五十七回記念寮歌 『あくがれは』（昭21／宮地 裕 作詞、廣田哲夫 作曲）

一 「あくがれは高行く雲か」

——【解説】「あくがれは高行く雲か」

——「高行く雲」は、ここでは、空高く流

ひたぶるに求めてしもの  
その名 向陵

れ行く雲の形容。

【私見】「あくがれは高行く雲か」——の句は原作では「戀といふ心は知らず」であったものが、選考委員の五味智英先生の意見で「あくがれは……」と修正されたという。

▼『「戀といふ心は知らず」の句は、「戀をしたらばいざ知らず」という気持ちであったが、舌たらずで、しようがないものだったとおもっている。ただ、そのときは、「だれが変えたのだ」と審査員や文芸部の連中に詰問したりしたことをおぼえている。』（作詞者宮地裕氏『歌十二篇』）

六「還り来し故郷の城

【解説】「ひととせに世は危ふくて」——《言及なし》

ひととせに世は危ふくて  
若き兒ら起ちて征けるを

【私見】「ひととせに世は危ふくて」——開戦直後は連戦連勝と伝えられていたが、一年後には、戦況がいちじるしく不利と伝えられたこと。

九「すめらぎのすめらみくには

【解説】「あえかにも美しきもの」——「あえか」は、さわれば落ちるかと思

あえかにも美しきもの  
桐一葉秋待たで散る

【私見】「あえかにも美しきもの」——「あえかにも」は原作では「力なく」であったものが、選考委員会で「あえかにも」と修正された。

▼『これも五味先生が改められたのどうかは知らない。』（宮地氏前掲書）

一 「青旗こほりの小旗こほりにゆれて

あらゝぎに瑞うづつしき光

春甘美あまき五十八年やとせよ

祭り火ともは今ともし燈りて

夕月ゆふつきよ夜丘よこに燎もゆれば

故知はろらね涙ほろひあふるゝ」

二 「香ほろかなる沈淪ほろひの國に

遠くろひつ神人くろひとのらして

狂火くるひの繪巻果くろひつれど

逝くろひきし伴天くろひ歸りこぬ

ふる里かがよの丘かがよを嘆かがよきて

虹かがよのかがよと耀かがよふらむか」

【解説】〈第一節では紀念祭の復活が、涙なしには語りえぬ喜びをもって詠ま

れているが、第二節では天皇の人間宣言により狂信的な超国家主義は消滅したものの、「散華したまま帰らぬ寮友たち」への思いが詠みこまれて

いる。》  
「青旗の小旗にゆれて」——「青旗」は青い幡で、「忍坂山」「葛城山」の枕詞。

「あらゝぎに瑞しき光」——「瑞」は、珍しく尊い意。

【私見】「アラハタノコハタ」だから、「青旗の」は「木幡」にかかる枕詞と解すべきであろう。

▼「青旗の木幡の上を通ふとは／目には見れども直に逢はぬかも」

（青々と樹木の茂る木幡山のあたりを（天智天皇の）魂が行き来なさると目にははつきり見えるのだけれども、現し身にはお逢いできな

らな）

《万葉集卷二148 倭大后》

この寮歌の第一・二節は、春の紀念祭を迎える喜びとともに、戦没した寮友たちの現し身は帰ってこない（逝きし伴天歸りこぬ）が、その魂は一高に帰り（あらゝぎに瑞しき光）、あたかも紀念祭の篝火となって耀いて

三「玉杯たまもひの悪しき濁り世

哀あはれはた何なにに恨うらみむ  
跼ぼく踖しやくの民たみならなくて  
父ちちのみの日ひの本もとつ國くに  
荒あ磯いそゆゆく任まをし呼よひ  
柏かし葉はに光ひかり榮はあらしめ

いるように見える(「祭り火は……丘に燎ゆ」、「虹のごと耀ふらむか」という、自らも入営した作者の屈折した悲しみの心象を、右の古歌に託して述べたものと解する。《井下登喜男氏(二高昭26文丙)によれば、古代中国では青い旗を立てて春を迎えるなどの風習があったという。》

【解説】(第三節では、敗戦に基づく国家・社会の汚濁への恨みは抜きにして祖国への愛情をもって任務を果たし、向陵の栄光を回復せんとすの意欲の甦りを示す。)

「玉杯の悪しき濁り世」——「玉杯」は珠で作った美しい杯。「玉杯の悪しき」の係りかたの意味不明。戦後の混乱した世相を指すか。

【私見】「玉杯の」——「玉杯の」は「悪しき濁り世」に係り、戦後の世相を、寮歌『玉杯』に詠まれている「榮華の巷・濁れる海」になぞらえていんと解する。

【解説】「父のみの日の本つ國」——「父のみの」は意味不明瞭だが、「父として天皇を仰いでいる」という天皇中心の意識の表現と見るべきか。

【私見】「父のみの日の本つ國」——「父のみの」は「父」にかかる枕詞であり、ドイツ語の Vaterland (＝父の国＝祖国)である「日の本つ國」にかかると解する。

五「山いゆき海に失ける

天人の羨しきかなや

凋落にまなこ塞ぎて

群騷を射つる清けさ

人世なる寂しき道を

然すがに遍歴ゆかな

六「衰へは偲び迫りぬ

骨々の悲しきたぎり

響へと唯に舞ひてむ

【解説】(第五節では、純粹な精神をもって国に殉じた若人たちが、敗戦による祖国の凋落に目を塞いで、騷乱の中をけなげに生きた、その爽やかな精神を偲びつつ、この世の寂しい道を遍歴していこうとの決意を述べている。

「凋落にまなこ塞ぎて／群騷を射つる清けさ」——「凋落」は戦争中の爆撃など惨憺たる社会情勢を指し、「群騷を射つる」は、戦時中の多くの騷乱の中で、けなげに生きた友の行動を指すか。「群騷」は、古例を見ない語。

【私見】「凋落にまなこ塞ぎて／群騷を射つる清けさ」——「凋落」はいろいろな解釈ができようが、開戦当初の勢いが衰えて戦況が著しく不利になったことを指すと解する。そうした逆況下にならながら、「ノー文句」で「まなこ塞ぎて」、群がる敵軍に攻撃を挑んだ(群騷を射つる)戦没寮友たちの純粹な精神(清けさ)を偲びつつ、これからの寂しい人生を歩んでいこうとの決意を披瀝している。

【解説】「衰へは偲び迫りぬ 骨々の悲しきたぎり」——食糧不足のために衰弱し、骨々が痛むことを悲しんでいる。

「さゆらげる篝赤けば」——「さゆらげる」は古例は見ない語だが、寮

さゆらげる篝かがり赤けば  
向陵こよひに今宵は酔あひて  
青春はなのいのち華咲け

歌ではよく使われてきた。「赤けば」は上代語の語法で、「赤け」は已然形であり、「赤ければ」の意を表したから、正当な用法である。

【私見】「衰へは偲ほねぼび迫りぬ 骨々の悲ほねぼしきたざり」——食糧難による衰弱と悲しみを心身に強く感じつつも、今宵の紀念祭には祝杯を挙げて、精一杯青春の花を咲かせようと歌う健気さは感動的であり、戦後における旧制高校の寮歌の代表作の一つに挙げることに共感を覚える。

《平成十八年四月、作者から直接お話を伺う機会に恵まれた(詠帰会昼食会スピーチ、参会37名)。それによると、この寮歌は、作者が「やがて、一高を去って京都へ行くことを予期しつつ、いささかの感慨をもってつくったもの」であって、「一高および親友との別れへの悲傷」を歌ったものだから、深読みの必要はなく、単純明快に解釈してもらえばよいとのことであった。また、この寮歌に登場する作者の親友に関するエピソードについても語っていた。

以下は、こうした作者のお話と、当日同氏が配布された『歌十二篇』という小冊子(二〇〇五年二月刊)の記述をふまえながら、いくつかの詩句について筆者なりの解釈を試みたものである。

一 「りょうりょうと笛吹けや友  
愛かしきは追おはよと言ひし

【解説】「りょうりょうと笛吹けや友」——「りょうりょう」は「嘯せう」で、奏樂などが響き渡るさま。管楽器について言ひ。

君のみは寒空を截り  
雄心の調へ鳴らさむ

「丘にも花は咲きにしを  
あてなる花は咲きにしを

二 「くさぐさの想ひに満つる  
春秋は逝きてかへらね

【私見】「りよりようと笛吹けや友」——作者の親友後藤昌次郎氏は草笛の名手だった。そのことを指す。

【解説】「愛しきは追はじと言ひし」——「愛する人を顧みずに出征した」の意か。

【私見】「愛しきは追はじと言ひし」——その親友が、「愛しき」人を追うこととはしないつもりだと言ったこと。

【解説】「君のみは寒空を截り……」——「冬空に飛行機で攻撃に出動した」の意か。

【私見】「君のみは寒空を截り……」——その親友が吹く草笛の調べが寒空に鳴りわたるさまを表現している。

【解説】「丘にも花は咲きにしを」——「嘗ては向陵で、実りある日々を過した友であったのに」の意。

【私見】「丘にも花は咲きにしを」——「嘗ては向陵にも美しい花々が咲き、青春の日々があった」と言っている。「あて」は、上品な美しさをいう。

【解説】「くさぐさの想ひに満つる／春秋は逝きてかへらね」——「亡き友についての多くの尽きせぬ想ひ」をいう。「かへらね」は「かへらねども」の意の上代語法。若くして戦死して帰らぬ友と親しく交わった、かつての



年々をいうのであろう。

【私見】「くさくさの想ひに満つる春秋は逝きてかへらね」——「高でのさままなな思ひ出 青春の想ひに満ちた年月のことを述べたもの。(戦死した友人のことに限っているわけではない。)

【とこととはの月の光は  
ありやなし】

【解説】「とこととはの月の光はありやなし」——亡き友は、月の如く永遠に我が心の中に生きている。

【私見】「とこととはの月の光はありやなし」——「とこととはの月」は第一節の「たまゆらの春」と対比させた表現であらう。「月の光は果して本当に永遠のものであるか」の意。(「亡き友」云々は関係ない。)

三 「み星飛びみ星落ちぬる

この丘に擧ぐる杯」

【解説】「み星飛びみ星落ちぬる」——《言及なし。》

【私見】「み星飛びみ星落ちぬる」——「星落つ」は「名将・偉人などの死」をいうこともある(「星落秋風五丈原」など)が、ここでは、駒場の丘の夜、何かを象徴するかのよう流れ星が流れ落ちて消えて行くさまをイメージした表現であらう。

【離りがたき友になげきは  
ありやなし】

【解説】「離りがたき友になげきはありやなし」——現実には、もはやこの世にいないけれども、心離れられぬ親友についての嘆きは云々、の意。

四 「血塗りてし歌にひらきは

ありやなし

悲傷のさだめ別れこそ

悲傷のさだめ別れこそ

【私見】「離りがたき友になげきはありやなし」——親友と別れなければなら

ないことの嘆きを言っている。

【解説】「血塗りてし歌にひらきはありやなし」——「血塗りてし歌」は、戦場での血なまぐさい歌、即ち軍歌を指すか。

【私見】「血塗りてし歌にひらきはありやなし」——「血塗りてし歌」は、やや誇張した表現で、「戦争の鮮血の時代を経て今ここにある、この歌」の意。軍歌など特定のジャンルの歌のことではない。

【解説】「悲傷のさだめ別れこそ」——友と別れた悲しみ痛みの運命の、消し難いことを言う。

【私見】「悲傷のさだめ別れこそ」——この寮歌には「向陵悲傷訣別の歌」という題がつけられているため、最終句のリフレインに特別な意味（「迫り来る一高廃絶への嘆き」など）を読み取ろうとする向きがあるが、作意はもっとシンプルで、「高及び親友との別れを「悲傷のさだめ」と受けとめたものであり、自分の情感を歌っただけだ、と作者は語っている。

314 第五十九回記念祭寮歌『ふりしきる』(昭23 / 河合英正 作詞)

一 「ふりしきる花のかけなる

【解説】「いとちよきみちもたえたり」——「ちよき」は「小さい」の意。

いとちよきみちもたえたり」

【私見】「いとちよきみちもたえたり」——「ふりしきる花」に道がおおわ

れてしまううちに真理探究の細い道も閉ざされてしまった、の意に解する。

▼「雪鎖す限涯はての曠野に／仄かすかなる道も絶えたり」《274 『雪鎖す』昭13 東大

三「いづ國の野邊を行くとも

【解説】「道こそはともしくてあれ」——「ともしく」には数種の意味があ

道こそはともしくてあれ  
あゝされど拓きすゝまむ」

るが、(一)では、「それに心がひかれようとする、心を向ける」の意と取  
られる。

【私見】「道こそはともしくてあれ」——「ともしく」は「少ない、不足し  
ている」の意味にとるべきであろう。そう解して「そ」なれど拓きすゝま  
む」と意味がつながる。どの国のどんな僻地に行こうとも、真理探究につ  
ながる道はとほしいが、(二)この歌を自分が捧げた相手である兄さんはき  
つと自ら切り拓いて進むことであろう、の意に解する。

315 第五十九回記念祭寄贈歌『東の天地別きて』(昭23／田中隆行 作詞)

316 第六十回記念祭寮歌『いぢささらば』(昭24／大友哲臣 作詞)

六「消え去らむ祭火聖く

【解説】「心むしる音をすみける」——「心むしる音」は「心をかき立てる

心むしる音をすみける

ような寮歌」の意であらうが、「むしる」の語が調和しない。

317 第六十回記念祭寮歌『日のしづく』(昭24／後藤昌次郎 作詞)

丘の最後の記念祭に

夜の歌

(一) 日のしづく

しづくのことごと

たまゆらの

いのちかなしみ

いまはまた幸を祝はむ

いざさらば吾等が故郷

【私見】「心むしる音ぞすみける」——「むしる」は「しむる」の誤植であ

らう。「しむ(染む・浸む)他マ下二」は、「深く心がひかれる」などの意。

▼「花の枝にいとど心をしむるかな／人の咎めむ香をばつつめど」《源・梅枝》

【解説】「日のしづくしづくのことごと」——《言及なし》

【私見】「日のしづくしづくのことごと」——白秋の次の詩を踏まえたか。

▼「滴るものは日のしづく／静かにたまる眼の涙／

人間なれば堪へがたし／真実一人は堪へがたし」

《北原白秋「永日礼賛」》《真珠抄》

⑨この寮歌には、「丘の最後の記念祭に 夜の歌」という前書きがついて

いるが、作詞者はこの寮歌の生まれた状況について、「時代は昼ではなく

夜であった。向陵の運命も夜であった。篝火をめぐる歌う記念祭の宴も

夜であった。私のイメージの中に昭和十八年文甲二組でめぐり会った友

宮地 裕の第五十八回記念祭寮歌の調べがあった。『さらば舞へこの夜一

結「あゝ北斗」

光あれうましふるさと

いぢぢぢば向ヶ丘よ

夜を……』と述べている。

《矢部徹『最後の記念祭寮歌「日のしづく」向陵終刊号H 16・10》

「あゝ北斗」についても作詞者はつぎのように解説している。

『「北斗」とはもともと北斗七星のことで、北極星のことではない。私は詩のリズムと語の歯切れの良さから、北極星の意味で北斗と書いた。

(中略) 宮沢賢治は「星めぐりの歌」の中で、北極星のことを「星のめぐりのめあて」と歌ったが、精密にいうと方角が少し狂っているようだ。私はイメージの中で、私たちがふだん北極星と呼んでいる星ではなく、真正銘「星のめぐりのめあて」となるべき星を求めた。

カントは「実践理性批判」の結論で、「考えれば考えるほど、いつも新たな、いよいよ強い感嘆と畏敬の念とで心を満たすものが二つある。私の上なる星空と私の内なる道徳律である」といったが、カントの「私の上なる星空」は、今や秩序を喪失して変貌したのではあるまいか。「星々はみだれとびかひ まがつ気のただよふまゝに」になっているのではあるまいか。しかし、新しい星の生まれる気配がする。

「あめはるかしろがねのかは たへの音にながれめぐりて

あたらしき星や生れたる あらゝぎをめぐりてもゆる

---

あかあかきほのほのかなた　いつかしき星のまたゝき  
これに続く結びの冒頭に、「あゝ北斗」と歌ったのである。』

《矢部徹『最後の記念祭寮歌「日のしづく」』向陵終刊号H 16・10》

【部歌・應援歌・頌歌】





## 【部歌・應援歌・頌歌】

318 端艇部部歌 『花は櫻木人は武士』（明23／赤沼金三郎 作詞）

319 端艇部應援歌 『嗚呼向陵に正氣あり』（大9／今井常一 作詞、矢野一郎 作曲）

一 「嗚呼向陵に正氣あり」

青春の兒が熱血の

諸手にかざす紅の

護國旗の色君見すや」

【解説】「正氣」——古い中国思想で、広く天・地・人の間に存在するとい  
う正しくて大きな根元の力。

【私見】「正氣」——「正氣」は解説の通り。「正氣の歌」はもともと中国南  
宋末の文天祥が元軍と戦って捕えられ、獄中で作った「天地正氣有り、雜  
然トシテ流形ニ賦ス」で始まる五言古詩であり、忠君愛国の信念と道義で  
悠久の大義に生きる氣概をうたいあげている。日本では幕末の儒者藤田東  
湖が「天地正大ノ氣、粹然トシテ神州ニ鍾ル」あつまで始まる『正氣の歌』（正  
式には『文天祥の正氣歌に和す』）を作り、幕末の志士を鼓舞しただけで  
なく、明治・大正・昭和初期と愛国的な人々に影響を与えた。吉田松陰や  
広瀬武夫にも同じく「正氣の歌」の作がある。一高の運動部の歌では、こ  
の端艇部應援歌以外にも、いくつか登場する。

二「干戈一度戢おさまりて

平和よ暫し春の夢

唯三尺の劍を撫す

丈夫の悲憤幾春秋

飛躍を待ちて幽谷に

臥龍の思ひ幾春秋

越殿の花、我知らず

唯營々の意氣の跡」

▼「天地の正氣向陵に／籠りてこゝに十二年」《323 『野球部部歌』明36》

▼「正氣あふるゝ向陵の／健兒に血あり涙あり」《325 『野球部部歌』大12》

▼「此処正大氣磅礴し／無聲堂裡に丈夫が」《333 『擊劍部部歌』大8》

【解説】「三尺の劍」——《言及なし》

【私見】「三尺の劍」——漢の高祖は、「吾、布衣ヲ以テ三尺ノ劍ヲ提ゲ、天

下ヲ取ル、此レ天命ニ非ズヤ。」と言つた《史記・高祖本紀》。ここでは、三尺の劍を撫して髀肉之嘆をかこつた時代の一高健兒の気持ちを表す。

【解説】「越殿の花」——中国古代の越王が建てた豪華な宮殿のこと。

【私見】「越殿の花」——「越殿」は越王勾踐の建てた宮殿のことだが、「越

殿の花」となれば、越王勾踐が呉を破つて凱旋した時、その宮殿に花のように美しく満ち溢れていた宮女たちのことを喩えている。

▼「越王勾踐破ツテレ呉ヲ帰ル、義士還ルニ錦衣ヲ、

宮女ハ如クレ花ノ滴シガニ春殿ニ、只今惟ダ有ルニニ鷓鴣ノ飛ブ」

《李白『越中覽古』》

（ここでは、勝に驕つて亡びた越王の轍をふむことなく、宮々努力を重ねて飛躍の機を待つた一高健兒の臥龍の思いを歌っている。

四「さはれ高眠永からず

今壯快の晴れ軍」

320 祝勝歌『あゝ我勝ちぬ』

(作詞年、作詞者とも未詳。曲は『敵は幾萬』《明24》からの借譜)

「あゝ我勝ちぬ 白勝ちぬ

隅田河原の 晴軍

赤旗亂れ 影もなく

破れし様ぞ あはれなる

流るゝ水に 涙して

幾度血をぞ すゝりけん

彌生半ばの 雲晴れて

日もつらゝかに 風薫る

花満堤に 咲き亂れ

いざや祝はん 我が勝利

いざや歌はん 諸共に！」

【解説】「高眠永からず」——「高眠」は枕を高くして安らかに眠ること。

【私見】「高眠永からず」——晩翠に次の詩がある。

▼「高眠遂に永からず／＼／君が三たびの音づれを」

《土井晩翠／「天地有情」・「星落秋風五丈原」明32》

【解説】この歌は対三高の戦いに端艇部が勝利を占めたときの祝勝歌である。

……それがいつの三高戦であったのか、記述がないため確定しがたい。

「彌生半ばの」とあるが、大正十三年から始まった対三高ボートレースは

常に八月に行われており、三月半ば隅田川で行われたことは、記録を見

る限り皆無である。しかし、「彌生半ば」を旧暦と解し、次句に「花満堤

に……」とあるのを踏まえれば、第一回全国高等学校対校競漕大会(大

正九年四月六日、於隅田川)の予選で三高に勝った際に生まれた「祝勝歌」

と見ることが可能である。恐らく本歌はこの大会での勝利を予想して作ら

れた凱歌であろう。

【私見】解説書では対三高戦での勝利の歌と断定しているが、早計であろう。

そもそも一高のボートレースで赤白といえ、高商の赤と一高の白を指す

のが通例だったはずである。

④ 41 『亞細亞の東蒼溟の』(明37南寮 第三節)

「春墨水のはな吹雪 紅葩こぼるゝ白旗や」

また、大正九年のレースでは、一高は三高に予選で勝ち、決勝戦で二高に勝って優勝したのだから、もし大正九年のレースを取り上げるのなら、対三高戦ではなく対二高戦を取り上げるのが順当であろう。

さらに、大正九年四月六日は旧暦では二月十八日で如月半ばであり、花の時期や風薫る時期ともかけはなれている。(この点については、京大OB岩辻賢一郎氏からの問題提起があった。)

私見では、この祝勝歌は、対高商第六戦(最終戦)《明治三十二年四月三十日》での勝利を歌ったものと考えたい。このレースは、一高が対高商戦六連勝を飾った歴史的な一戦である。この場合、「流るゝ水に涙して幾度血をぞすゝりけん」で「幾度も血をすゝった(＝勝利を、心に固く誓った)」のは一高側ではなく、連敗を重ねていた高商端艇部側であり、その苦しい心境を一高側が思いやっているさまと解することになろう。

当日は旧暦では三月二十一日でほぼ彌生半ばと言ってよく、「花満開」はちよっと苦しいけれども「風薫る」五月は目前である。

321 遠漕歌『紅香ふ朝霧に』(大11/千葉四郎 作詞作曲)

また、この祝勝歌の曲が軍歌『敵は幾萬』(明治二十四年)からの借譜であることを考え合わせると、大正期の作とすることには、かなり違和感を覚える。

322 理端遠漕歌『戊戌の昔残したる』(明34、作詞者・作曲者未詳)

【理端遠漕歌について】

一 高端艇部は、明治32年の第6回対高商戦後は対外試合が中止されたため、以後はもっぱら学内のクラスタ対抗戦(「組選」)や、一部(英法、独法、仏法、文科)、一部(工、理、農科)、三部(医科)の対抗戦に力を注ぎ、各部において切磋琢磨と実力の向上に努めたが、その訓練の一つが隅田川から利根川下流にかけての遠漕(「大利根遠漕」)であった。大正8年の学制改革で文科と理科の2学科に変わったことに伴い、端艇部も「文端」と「理端」の二部構成に切り替えられ、三部対抗戦は文科と理科の対抗戦に変更された。本遠漕歌は、明治34年に『「一部遠漕歌」』として作られたものだが、作詞者・作曲者とも未詳である。遠漕歌ゆえ、その歌詞も「道行文」的風物詩の性格を特色としているが、同時に対抗レースのための猛練習の様を表現している。なおこの歌は、当初は手書きによる複写などによって伝承されていたが、昭和10年版の寮歌集において『理端遠漕歌』とタイトルを変えて、初めて寮歌集に掲載された。

一 「**戊戌**の昔ぼしゅう残したる旗の印の慕はしや  
長蛇を逸す茲こゝ二歳  
恨は常に骨にしむ」

五 「**運河**を破る一千本  
二里八丁にりやちやうを物とせず  
越ゆれば早くも  
日は落ちて  
坂東太郎水廣し」

【解説】「**戊戌**の昔」——明治31年、二部選手の対部レース優勝の年を指す。

【私見】「**戊戌**の昔残したる旗の印」——「**戊戌**の昔」は解説の通り。「旗の印」は、その年に優勝した「二部」の旗の色（白）を指すのであろう。「二部」と「三部」の旗の色は、それぞれ青と赤であった。

【解説】「長蛇を逸す茲二歳」——「長蛇を逸す」は、目ざす敵を破りそこなうことをいう。ここでは、文科（二部）端艇部に敗北したこと。

【私見】「長蛇を逸す茲二歳」——二部が優勝した年の翌年、翌々年の二年連続で三部が優勝し、二部は苦杯を嘗めたことをいう。因みにこのあと二部は、明治39年に、久々の優勝を果たした。

【解説】「**運河**」「二里八丁」——言及なし。

【私見】「**運河**」「二里八丁」——大利根遠漕のルートは、隅田川から江戸川の下流に出て上流へ向かい、流山から利根運河を遡って利根川本流（坂東太郎）に達した後、取手、布佐、佐原等を経て銚子を目ざして下るのが通例であった。第五句の「**運河**」および「二里八丁」は、利根運河（延長8.5km）を指す。ちなみに利根運河は、竣工した明治23年には江戸川から利根川へ流れていたが、明治29年7月の台風による洪水で利根川の川底が上がり、運河の水流がそれまでとは逆（利根川から江戸川へ）になった。

六 「星を落せる彼の早瀬

枯蘆しげき其の中を

夜泊の船に言問へば

行手は遠し取手町」

九、船の歩みを速めつゝ

行手の希望は牛堀や

二十世紀の初日出

祝ふや利根の波の上

十 「瀉千里に下りたる

往時の快も夢なれや

日頃鍛へし此の腕

【解説】「星を落せる」「夜泊の船」——言及なし。

【私見】「星を落せる」「夜泊の船」——次の有名な唐詩を踏まえたものか。

▼『楓橋夜泊』（張継）

月落<sup>チ</sup>烏啼<sup>イテ</sup>霜滿<sup>ツ</sup>天<sup>ニ</sup> 江楓漁火對愁眠<sup>ニ</sup>

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到<sup>ル</sup>客船<sup>ニ</sup>

【解説】二十世紀の初日出——言及なし。

【私見】二十世紀の初日出——二十世紀の初め（一九〇一年、明治34年）の元

日を利根川で迎えたことを表現する。昭和50年版寮歌集まではこの遠漕歌の作

成年は記載されていなかったが、本節の「二十世紀の初日出」と第二節の「長

蛇を逸す茲二歳」とを勘案すれば、明治34年の作であることは自明であると

の二部端艇部OBの指摘を踏まえて、平成16年版寮歌集で明治34年作と明記

された。

《林半一郎氏（二高大7工科）『寮歌集雑感』『向陵』昭60・4）参照》

【解説】「往時の快」——言及なし。

【私見】「往時の快」——『理端遠漕歌』は、昭和9年までは寮歌集に収録され

ず、理端の部員が先輩や友人のノートから書き写して伝えてきたが、はじめは

「往佐の快」とあったものがいつからか「往佐の快」に変わり、初めて寮歌集に載った昭和10年版の寮歌集から昭和42年版の寮歌集までは「往佐の快」と表記されてきた。

これに対し、昭和50年の「大寮歌集」編纂の際に、「往佐の快」は不自然な表現だとして寮歌委員会で熟議した結果、「往時」または「往路」の誤植であろうと決定し、「往時の快」と改訂したとされる。

《井上司朗氏『一高寮歌私観拾遺』、『向陵』昭51/10）参照》

「往佐」については「造語説」、「誤写説」や「後人の改竄説」などがあったものの、多くの理端関係者の間では、「往佐の快」という語句は、「一瀉千里云々」という前句と結び、「佐原を指して往く途中、利根川を一瀉千里に漕ぎ下ったときは非常に愉快であった」と解すれば一応筋が通るため、「往佐」の「佐」は佐原の「佐」であると考えられていた。この外、「布佐」の「佐」だとする意見（逆瀬川貞幹氏〈昭9理乙〉）もあったという。

《林半一郎氏（一高大7工科）『寮歌集雑感』、『向陵』昭60・4）及び

同氏『再び「往佐の快」について』、『向陵』昭60・10）参照》

昭和50年版の寮歌集の発刊後、「往時の快」への変更について、寮歌集編集委員会等に対し、端艇部OBから賛否両論の意見が寄せられた（賛成論の例Ⅱ



前出の林半一郎氏、反対論の例に八田晃夫氏（昭17理こ）が、平成16年版の寮歌集では、「往時の快」を踏襲した上で、巻末（478頁）に、次の注をつけている。

\* 335 『戊戌の昔』 表題の「理端遠漕歌」は、もと「二部遠漕歌」。

10 節中「往時」は、もと「往佐」または「往さ」（佐原または布佐へ行く意の造語といわれる）。

11 節中「理科の爲」はもと「二部の爲」

しかしながら、私見では、もともと「往さの快」と書かれていたという原点到に立ち返って考えるならば、「往さ」は「往佐」でも「往時」でもなく、「ゆくさ」と読ませるのが妥当だと考える。「往くさ」（「行くさ」とは、「行くとき。行きしな。」という意味の古語で、「行くさ来さ」（行く時と来る時、行きしなと来しな）の形でも使われる。遠漕の往路で利根川を一気に下る爽快さを「往さの快」と表現し、帰途の逆流にもひるんでなるものか（逆流何ぞひるむべき）という健児の意気を謳ったものと解したい。

▼「ゆくさには二人我が見しこの崎を」

独り過ぐれば心悲しも 〔万葉集 3・四五〇〕大伴旅人

（行く時には二人で見たこの岬を、妻が死んで帰りには一人で通り

323 野球部部歌 『天地の正氣向陵に』(明36 / 山内冬彦 作詞 楠正一・大塚巖・山脇正吉 作曲)

一 「天地の正氣向陵に

籠りてここに十二年

その春秋に磨き來し

文武の道は數あれど

殊に優れし野球部の

譽は世々に盡きざらむ」

過ぎるので、悲しいことだ。

▼「青海原風波なびきゆくさくさく」

つつむことなく舟は早けむ」(『万葉集 20・四五二四 / 大伴家持』)

(青海原の風も波も静まり、行く時も帰る時も事故にもあわず、

あなたの舟は早く進むことでしょう。)

【注】第10節の「往時の快」、「往佐の快」については、旧著の記述をもとにして増補を加えたものである。

【解説】「正氣」——古い中国思想で、広く天・地・人の間に存在するというう正しくて大きな根源の力(既出の『端艇部応援歌』における解説)。

【私見】「正氣」——「正氣」は解説の通り。「正氣の歌」はもともと中国南宋

末の文天祥が元軍と戦って捕えられ、獄中で作った「天地正氣有り、雑然

トシテ流形ニ賦ス」で始まる五言古詩であり、忠君愛国の信念と道義で悠

義に生きる気概をうたいあげている。日本では幕末の儒者藤田東湖が「天

地正大ノ氣、粹然トシテ神州ニ鍾ル」(あつま)で始まる「正氣の歌」(正式には、

二「彌生ヶ岡の春の夕  
ノツクの響雲に入り  
向ヶ臺の冬の朝

『文天祥ノ「正氣歌」(二和ス)』を作り、幕末の志士を鼓舞しただけでなく、明治・大正・昭和初期と愛国的な人々に影響を与えた。吉田松陰や広瀬武夫にも同じく「正氣の歌」の作がある。(『端艇部応援歌』の項に既出)  
一高の運動部の歌には、この外にも「正氣」の表現が登場する。

▼「嗚呼向陵に正氣あり」／青春の兒が熱血の」《端艇部応援歌・大9》

▼「正氣あふるゝ向陵の／健兒に血あり涙あり」《野球部応援歌・大12》

▼「此處正大氣磅礴し／無聲堂裡に丈夫が」《擊劍部部歌・大8》

「籠りてここに十二年」——「籠りて」の主語は「天地の正氣」である。

また「十二年」は、校友会の結成(明治23年10月24日)から起算して十二年余り経過したことを指すと解する。

「その春秋に磨き來し／文武の道は數あれど……」——校友会は、文芸、9部で発足し、それぞれ研鑽を重ねたが、その中でもベースボール部(野球部)の実績が特に優れていると誇っている。

【解説】第二節には、野球部の栄えある歴史を支えた猛練習の様相が詠みこまれて  
れている。

【私見】「彌生ヶ岡の春の夕／ノツクの響雲に入り」——土井晚翠の次の詩を下敷

霜を碎きて球競ふ

雨に嵐に鎌習の

苦心を積みし年月や」

三 風雲いかる校庭に

寄せ来る敵は多けれど

鎧の袖の一觸ふれに

物も言はさで逐ひ返し

覇者の譽の年々に

上り行くこそ嬉しけれ」

四 「名も勇ましきケンタッキー

ヨークタウンやデトロイト

きにしたものであろう。

▼「管弦の音雲に入る／舞殿の春の夕まぐれ」

〔晚翠「晝鐘」〕「万里長城の歌」明 34)

【解説】「鎧の袖の一觸ふれに」——頼山陽「日本外史」(源氏正記・源氏上)に

「至リテハレ如キニニ平清盛輩ノヤカラノ、臣、鎧袖一觸、皆自倒耳」とある。

弱い相手を簡単にうち負かすこと。また弱い相手に一撃を加えること。

【私見】「風雲いかる校庭に／寄せ来る敵は多けれど……」——明治 23 年

24 年に明治学院白金倶楽部、溜池倶楽部および溜池・白金連合軍を連破して覇業を確立した一高野球部が、その後挑戦を受けて一高球場に迎え撃ったチームは、慶應義塾、白金・関西合同倶楽部、郁文館中学、西片倶楽部、赤坂倶楽部、二高、郁文倶楽部、横浜商業等々、多数に及んだが、時に二軍選手を出して不覚をとったり、学年末試験中のために手薄な戦力で対戦して敗れたりしたほかは、ほとんど負けを知らず、国内では天下無敵を誇っていた。《向陵誌》「二高応援団史」78 頁以下参照

【解説】第四節では対アメリカ人チームの対戦成績が詠み込まれている。」

【私見】「軍艦勢も力盡き……」——ケンタッキー、ヨークタウン、デトロイトは

軍艦勢も力盡き

風切るバット勇猛の

兜を脱ぎて陣中に

降りしさまぞ 哀れなる」

## 五 「懸軍十里南濱に

勇み振ひて進み行き

國技に誇るアマチュアの

亜米利加人と戦ひて

物も見事にスコウクの

勝どき擧げし様を見よ

いずれも米国軍艦の名前。対戦成績は次の通り。

明 29・6・27 デトロイト号乗員と試合（一高球場） 22―6 で勝つ。

明 30・6・8 ヨークタウン号乗員と試合（二高球場） 18―7 で勝つ。

明 35・5・17 ケンタッキー号乗員と試合（一高球場） 34 A―7 で勝つ。

なお、野球部部歌の発表された2か月後の明治36年5月20日に再びケンタッキー号乗員チームと一高球場で対戦し、27―0で一高が勝利している。

《注》当時のケンタッキー号とヨークタウン号は戦艦、デトロイト号は巡洋艦であった。なお、ヨークタウン号の名は、後の航空母艦に受け継がれた。

【解説】「懸軍」――後続の援軍がなく、独り深く敵地に進み入る軍や兵。

「南濱」――東京の南方、横浜のこと。横浜のアメリカ人野球チームとの試合に赴いたことを指している。

【私見】「國技に誇るアマチュアの亜米利加人」――明治23年11月に明治学院

白金倶楽部に大勝して以来天下無敵を誇った一高野球部は、横浜アマチュアクラブのアメリカ人チームに求めて挑戦したが、初めは「野球は吾輩の

國技なり、吾輩の軀幹亦諸君に倍す、敢て辭す」（『向陵誌』「野球部部史」663頁）として相手にされなかったことを指す。

同チームは明治29年になってようやく挑戦に応じ、同年5月23日に

六「あゝ名譽ある吾部史よ

あゝ光榮の十年よ

此武威永く地に墮ちず

いよゝ光を打ち添へて

太平洋のかなたまで

吾部のほまれ輝かせ」

横浜において一高が29 A—4で大勝して天下を湧かせた。以来明治37年に至るまで、同アマチュアクラブには8戦して6勝2敗、前出の軍艦勢及び海軍病院には5戦全勝、合計でアメリカ人チームに対しては、13戦して11勝2敗という好成績を収めた。

【解説】「物も見事にスコンクの」——「スコンク」は *skunk* で、アメリカの俗語。零敗させることと零敗する事との両意があるが、ここでは前者。

【私見】「物も見事にスコンクの」——明治35年5月10日に横浜アマチュアクラブと横浜で対戦し、4 A—0で完封勝利したことを指す。

【解説】最終節では、野球部のこれまでの実績を踏まえた上での、今後への期待が詠まれている。

【私見】「太平洋のかなたまで／吾部のほまれ輝かせ」——明治29年に一高野球部が国際試合に連勝したとの報は遠く米本国に達し、当時エール大学に留学中の白洲氏（白金倶楽部）の周旋により、同年冬、エール大学からの挑戦状が一高野球部に届いたが、先方の指定する試合期日では一学年を放擲せざるをえなくなるため、涙を吞んで見合わせたという。

▼「実に我連捷の光名は遠く海波三千里、野球の本国たる北米合衆国に響及するに至り、同年（明治29年）冬天外一声、米国エール大学の挑戦状

324 野球部新部歌『風が丘に』（平木恵治詞、鈴木充形曲）

325 野球部應援歌『正氣あふるゝ向陵の』（大12／深田久彌詞、弘田龍太郎曲）ぎ

326 野球部凱歌『古都千年の夢つゝむ』（明41／田中木又詞、廣田守信曲）

327 陸上運動部部歌『柏の旗の行くところ』（明42／吉植庄亮作詞、日足誠作曲）

一「柏の旗の行くところ

桂冠こゝに二十年

わが光榮と輝きて

遮るものなかりしに

あな、あだ人の関の聲

友よ矛とれ戦はむ」

は吾部を驚かしぬ。……」《向陵誌》「野球部部史」671～672頁

《参考》この歌は急速に普及し、全寮茶話会や記念祭の最後の締めくくりの歌として、全寮寮歌、端艇部部歌とともに唱われるようになった。

【解説】「桂冠こゝに二十年」——「桂冠」は「月桂冠」。古代ギリシャで競技などの優勝者にかぶらせた。転じて最も名譽ある地位をいう。

陸上運動部の活躍は大学予備時代からすでに顕著であったが、明治23年9月校友会の設立とともに、端艇部・野球部・柔道部などと共に一高運動部の中心的存在として名をなし、天下に覇を唱えた。

「あだ人」——古くは「あだ人」。「あだ」は敵対する者の意。

【私見】「遮るものなかりしに／あな、あだ人の関の聲」——一高陸上運動

二「墨田河原や南濱や」

勝たねばやまぬ雄心に  
血を啜りけむ凄惨の  
誓の跡を今日こゝに  
またくり返す勝軍

部は明治24年に東京工業学校の運動会で諸官立学校来賓競走に優勝した。明治26年以降帝大運動会に出場、同31年からは農科大学駒場運動会に参加して、両運動会で抜群の強さを示すなど、十年間にわたって常勝軍の名をほしいままにした。しかし同34年ころから群雄ようやく四方に台頭し始める。『第一高等学校自治寮六十年史』68〜69頁。

明治34年から39年ころにかけて、学習院の三島彌彦、高等商業の川崎肇など他校のヒーロー選手の登場により、一高は、帝大・駒場の両運動会において、しばしば敗辱の憂き目を蒙った。一高陸上運動部はそれ以降陣容の立て直しを果たし、明治42年の駒場運動会・帝大運動会では、ともに一高選手が優勝した。そして11月7日の駒場運動会当日夕の祝勝晩餐会の席上、新作のこの部歌が披露された。『向陵誌』『陸上運動部史』、「一高応援団史」参照。

【解説】第一節では、激しい猛練習ぶりの一端がよく示されている。

【私見】「墨田河原や南濱や」——「墨田河原」は端艇部の、「南濱」は野球部の、たゆまぬ努力による活躍を指し、それを引き合いに出して、陸上運動部も必勝の誓いを新たにして戦いに臨むことよって、勝利を重ねようと呼びかける。



友よ矛とれ戦はむ」

### 三「駒場臺のはれ軍」

見よ雄たけびの只中かまてに  
迅風のたける如くにも  
砂を飛ばす柏葉の  
威風凜々わが戦士  
友よ矛とれ戦はむ」

### 四「秋風吹いて柏葉旗」

易水寒きながめかな

「血を啜る」——(昔、中国で、盟ちがひに際して、生贄を殺してその血を啜ったことから)心から堅く誓うことをいう《礼記、曲礼下》。

【解説】「駒場臺のはれ軍」——明治年間から大正前半期まで、陸上運動部の最も重要な試合は、農科大学のあった駒場で年中行事として開催された、駒場運動会であったことをこの語句は示している。

【私見】「駒場臺のはれ軍」——「はれ軍」の「はれ」は「け」(≡日常)の対義語で、「特に改まった、正式の」という意味であるから、「はれ軍」とは「特に重要な大試合」を指すと解する。「はれ軍」という表現自体には、「勝利」という意味はない。

一高の運動部の歌で「はれ軍」が登場するのは、陸上運動部部歌以外に7例あるが、このうちの3例を次に挙げる。

- ▼「さはれ高眠永からず／今壯快の晴れ軍」《318 端艇部応援歌(大9)》
- ▼「日頃の力示すべき／今日丘の上の晴軍」《325 野球部応援歌(大12)》
- ▼「きたへしかひな今よ今／力にうなるはれ軍」《326 野球部凱歌(明41)》

【解説】「易水寒きながめかな」——中国戦国時代の刺客・荊軻が燕の太子丹の頼みにより、秦王政(始皇)を刺殺するため、秦の都・咸陽に向けて出

友よ矛とれ戦はむ

覇権を譲る事なかれ

われ等一千こゝにあり

覇権を譲る事なかれ

発、見送りに来た太子らと易水のほとりに至った際、「風蕭々として易水

寒し、壯士一たび去つて復た還らず」と歌つて別れたという故事に基づく。

ここでは大試合に臨まんとする選手たちの決死の覚悟を暗示している。

【私見】「秋風吹いて柏葉旗」——陸上運動部の二大イベントである駒場運動

会と帝大運動会は何れも秋に開催されていたことを踏まえる。

「易水寒き」——「易水」は「柔道部部歌」にも登場する。

▼「壯士白衣の肌寒く／易水の風蕭々と」《31 柔道部部歌（明43）》

「われ等一千こゝにあり」——「明治35年秋、総代会議長山内冬彦は、

従来、駒場でのわが応援者が寥々としていたことを歎き、『およそ対外試合

は、先輩、選手、校友の三位一体で敵に当たつてこそ、初めて勝利の栄冠

を手にすることができ』とし、挙校一致の応援を要請した。そして、飯

田町停車場から応援団のため臨時列車を仕立てて渋谷停車場に向かうこと

を計画した。《中略》飯田町からの臨時列車は、その後数年間続いたと思わ

れるが、正確な記録は残っていない。運動会の競走が終わると、応援隊は

いつも選手をかついで渋谷まで行った。《向陵誌》「高応援団史」145頁。《

このように、陸上運動部の対外試合における選手と一千人の校友との絆が

年ごとに強くなつたことを踏まえて、『われ等一千こゝにあり』と表現した

ものであろう。

「陸上運動部部史」の一節にもつぎの記述がある。

▼「……あゝされど嘗ては、秋風浙瀝たる夕一千の校友が白旗を擁し、選手と共に紅涙に咽びしことも忘る可からず、即ち此事を歌ひ、併せて選手を鼓舞せんとして、吉植庄亮氏吾部の為に部歌を作る。」

《向陵誌》「陸上運動部部史」1032頁

328 庭球部部歌『向ふが岡の新草に』（久米正雄 作詞、山田耕作 作曲）

329 庭球部應援歌『歴史は古りし』（橋爪克己 作詞、梁田 貞 作曲）

330 対三高戦四部全勝歌『橄欖永久に香る下』（昭9／佐藤竹雄 作詞、本田巨範 作曲）

331 柔道部部歌『時乾坤のうつろひに』（明43／小林俊三 作詞、新居一郎 作曲）

一一「春千山の花ふぐき

秋落葉の雨の音」

【解説】「春千山の花ふぐき 秋落葉の雨の音」——《言及なし》

【私見】「春千山の花ふぐき 秋落葉の雨の音」——土井晚翠の「暮鐘」の

詩句からそのまま借用している。作詞者である小林俊三氏自身の解説によると、当初「春燎亂の花ふぐき、秋落莫の雨の音」という句を構想したが、

あまりに焼き直したものでいっそのまま「本歌取り」として拝借した方がすつきりすると思ひ直して現在の歌詞にしたという。

《小林俊三氏『わが向陵三年の記』 p 117 による》

※あまり知られていないことだが、小林俊三氏（弁護士、最高裁判事）は川崎市歌の作詞もしている。川崎市によると、川崎市歌は、市制10周年を記念して、昭和9年に歌詞を公募し、東京市麻布区在住の弁護士小林俊三氏の作品が当選したものである。以下に、第一節だけご紹介しよう。

川崎市歌（作詞 小林俊三、作曲 高階哲夫）

一 「見よ、東に ひんがし 寄する あけ 暁潮

富士の姿を 眞澄に仰ぎ

かがやく雲を いろどる多摩川

希望満つる 朝風（原詞は「響き渡るサイレン」、平成16年に改訂）

今ぞ明けゆく わが川崎市」

『瑞雲映ゆる旭日に』（大8／横溝光暉 作詞、「東皇回る」の譜）

一 「瑞雲映ゆる旭日に

檄檀香る武香陵

此處正大氣磅礴し

無聲堂裡に丈夫が

大和魂培ひし

幾春秋の花紅葉

【解説】「磅礴し」—— 広くゆきわたる。あまねくひろがる意。

【私見】「此處正大氣磅礴し」—— 『端艇部応援歌』の項でも触れた文天祥

「正氣の歌」の一節に「是レ氣ノ磅礴スル所、凜烈トシテ万古存ス」とあ

り、広瀬武夫の「正氣の歌」にも「見ル可シ正氣ノ乾坤ニ満ツルヲ、一氣

磅礴万古ニ存ス」とある。

【解説】「無聲堂」—— 高では柔剣道場を「無聲堂」と名づけた。

【私見】「無聲堂」—— 「無聲」は孫子『虚實篇』の「神ナルカナ乎 神ナルカナ乎、

至ルニ於無聲ニ」からとった。「神」は人知で測り知れないこと。「至於無聲

とは敵に作戦計画などが知られないように、軍のたてる音を一切ひそめて

しまうこと。

【解説】「幾春秋の花紅葉」—— 《言及なし》

【私見】「幾春秋の花紅葉」—— 中島喜久平の『花草鞋の記』（『校友会雑誌』

第146号）に「つるぎの道の修煉こゝに果して、幾春秋の紅葉ぞや」とある。

【解説】「流風」「遺芳」—— 《言及なし》

【私見】「流風」—— 先人の残した美風。

二 「流風餘韻永久に

遺芳萬葉の花に見る」

三「九重の雲深けれど

眞誠まこと聞ゆる時つ風

明治の半やすみしゝ

我大君を迎へけり

恩賜の洞の燦然と

輝く光仰がずや」

五「名も懐かしき彌生つむぎの

西に東に花草鞋」

「遺芳」——後世に残る名譽。

▼「眞我の覺醒はぐくめば／不滅の余韻とことには」《210》『しろがね遠く』

▼「残暉に春はよみがへり／遺芳萬朶の花と咲く」《121》『あゝ炳日の』

【解説】《皇太子の行啓について、簡略な説明を加えている。》

【私見】「我大君を迎へけり」「恩賜の洞」——明治32年5月6日、皇太子嘉

仁親王（後の大正天皇）が、倫理講堂で行なわれた第11回撃剣部大会に行

啓、その折のご下賜金百円で「恩賜の洞」を製作した（明治36年）。

この寮歌が作られた大正8年には嘉仁親王はすでに天皇となつておられたため、「やすみしゝ」(「我大君の杖綺 我大君」)と表現している。

【解説】「花草鞋」——彌生会の各地武者修行のこと。

【私見】「花草鞋」——前出『花草鞋の記』（明治38年4月）にも、「東台墨堤

の花嬢研人を蕩せんとする時、つれなくも花草鞋ひきしめて」とある。

334 水泳部舊部歌『都の南三十里』（明36／満井信太郎 作詞、「混濁の浪」の譜）

335 水泳部部歌『狭霧はれゆく』（明43／末弘巖太郎 作詞、Guck 原曲、加福均三 作曲）

336 弓術部部歌『あゝ日は昇る東海の』（大14／郡 祐一 作詞、弘田龍太郎 作曲）

337 弓術部遠征歌『西のくらしいのに』(郡 祐一 作詞)

二「坂東太郎で生湯を使ひ

関東八州の息を吸ひ

育った俺等は

伊達には行かぬ

過ぎた欣求のあと見やれ」

【解説】「過ぎた欣求のあと」——《言及なし》

【私見】「過ぎた欣求のあと」——「欣求」は仏教語で「願い求める」意。

ここでは寮歌『見よ鞆に』第四節の「欣求不断の精進に」を踏まえて、弓術部員が弓術の奥義を願い求めて、不断の精進を重ねてきた成果を見てほしいと胸を張っているのであろう。

▼「欣求不断の精進にともす法火の清ければ」《141『見よ鞆に』大4》

▼「緑なす眞理欣求めつゝ萬巻書索るも空し」《267『新墾の』昭12》

▼「熱き祈りに欣求るは清き眞理の途なれば」《269『春尚浅き』昭12》

▼「向陵三年夢とはいへど胸に刻みし欣求心」《315『東の天地』昭23》

【解説】「行きて歸らぬ梓弓」——《言及なし》

【私見】「行きて歸らぬ梓弓」——楠木正行の辞世の歌「かへらじとかねて

思へば梓弓／なき數に入る名をぞととむる」(『太平記』卷26)を踏まえ  
ている。「梓弓」は「かへる」の枕詞。「返る」と「歸る」とをかける。

四「大為朝には及びもないが

弓矢執る身の意地じやもの

西へ西へと白旗すゝむ

行きて歸らぬ梓弓」

339 御大典奉祝歌『不二が嶺に』（昭3／宇佐美重長作詞、長内 端作曲）

340 御大典奉祝歌『神の代ながらに』（昭3／郡 祐一作詞、鶴田三郎作曲）

341 立太子奉祝歌『いやさかえゆく』（大5／清野暢一郎作詞、根村當勇作曲）

342 征露歌『ウラルの彼方風あれて』（明37・2／青木得三作詞、「アムール川」の譜）

【経緯】

作詞者の青木得三は、『征露歌』の経緯について次のように述べている。

「明治37年2月、日露戦争の起った時に、当時寄宿寮委員、総代会議長であった杉村陽太郎先輩から頼まれて作った。杉村君は後の駐伊大使、駐仏大使である。曲はとっさの間で作曲を依頼する暇がなかったので、塩田環先輩の作歌『アムール川の流血や』の譜を借用した。作曲は栗林宇一先輩である。」

《青木得三『寮歌集を作った話』向陵駒場同窓会『向陵駒場』No.18（一九六八年一月）》

五「荒鷲今や南下しつ

八道の山後に見て

大和島根を衝かむとす

金色の民鏝とれや」

【解説】「八道」——東海道・東山道・北陸道・北海道・山陰道・山陽道・

南海道、西海道をいう。

【私見】「八道」——「八道の山後に見て」といっているのだから、日本で

はなく、朝鮮の八道（京畿道・江原道・咸鏡道・平安道・黄海道・忠清



九「いふ勿れ唯清人と

金色の民彼れもまた

嗚呼怨なり残虐の

蠻族いかでゆるすべき

七「かくて揚がらむわが国威

かくてはれなんかの怨

金色の民銚とれや

大和民族太刀はげや

八「金色の民いざやいざ

大和民族いざやいざ

戦はむかな時機至る

戦はむかな時機至る

【注】五九、十七、二十の各節については、「金色の民 関連で、以上にまとめて記述した。」

六「十年の昔大丈夫が

血潮に染めし遼東の

山河欺き奪ひてし

あゝその怨忘れめや

道・慶尚道・全羅道 〓朝鮮〓を指している。

【解説】「金色の民」——《寮歌初出の表現であるのに、なぜか言及なし。》

【私見】「金色の民」——「黄色人種」、ひいては「アジア人」を含蓄して

いると見るのがもつとも素直な解釈である。第九節の「いふ勿れ唯清人と

金色の民彼れもまた」とあり、清人も日本人と同じく金色の民だと表現

していることから理解できよう。なお、300『寒風颯颯』（昭17）参照。

▼「黄禍論」——日清戦争末期にドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が日本の

進出に対する反感から黄禍論を主張したのが有名であり、遼東半島還付

の「三国干渉」はこの構想の最初の具体化であったとされる。「金色の

民」は、この黄禍論を意識した表現か。

▼第二十節の歌詞は、そのまま長野県立諏訪中学の応援歌に使われ、現在

の諏訪清陵高校に受け継がれている（ただし、「金色の民」と読ませる）。

【解説】「十年の昔……その怨忘れめや」——《言及なし。》

【私見】「十年の昔……その怨忘れめや」——日清戦争後の明治28年4月、

下関条約に基づき清国から日本に割譲された遼東半島について、「三国干

渉」（ロシアが主導し、ドイツ、フランスと手を組んだ勸告）により、清

八「西暦一千九百年

怨は長きアムールや

魯人の暴に清の民

罪なく逝けり數五千」

国への還付を余儀なくされたことに対する怨み。日本政府は「臥薪嘗胆」をスローガンに軍拡を進めた。「三國干渉」は約十年後の日露戦争に対し直接・間接に影響を与えたとされる。

▼「十年の恨み雲晴れて ひかりはそはん大八洲」≪50『春長江の』明38

▼「臥薪嘗胆また更に 十年待つ間の平和かな」≪58『波は逆巻き』明39

【解説】「西暦一千九百年……罪なく逝けり數五千」——「言及なし。」

【私見】「西暦一千九百年……罪なく逝けり數五千」——西暦一千九百年（明治33年）、中国で義和団の反乱事件が勃発した。関連して七月中旬には中国国境を流れるアムール川（黒龍江）流域のロシア人と中国人（清国人）が混在する地域で紛争が起こり、清国人三千名がアムール川の岸边に集められ、河に突き落とされるという悲劇が発生した。清国人の被害者は五千人ともいわれる。この事件（「ブラゴヴェシチェンスク事件」とも呼ばれる。）で、ロシアの暴虐性は、世界中からの非難の的となった。

▼明治34年の一高寮歌19『アムール川の流血や』（塩田環作詞、栗林宇一作曲）でも取り上げられている。

▼「記せよ——西暦千九百年、なんじの水は墓なりき、

五千の生命罪なくて、ここに幽冥の鬼となりぬ」

十「玉なす御手に劍とり

華顔潮に湿して

高麗の半島さだめにし

神宮皇后君みずや

【解説】「さだめにし」——《言及なし》

【私見】「さだめにし」——大正9年版の寮歌集までは「きたためにし」とあつたが、大正14年版の寮歌集では「さだめにし」となっている。この間のいづれかの改訂時に、「きたためにし」では意味不明だとして「平定する」の意の「さだめにし」に変更したらしい。しかし、「きたむ（懲む）」は「懲らしめる」の意の古語であり、変更は勇み足だったのではないか。

▼「常世の神を打ちきますも」《皇極紀》

343 旅順陥落歌『北、窮髮の風寒く』（青木嗣夫 作詞、「大空ひたす」の譜）

344 青島陥落捷歌『寒燈夜は暗うして』（阿部龍夫 作詞、「都の空に」の譜）

六「あゝ山東の一角に

今日しも立ちぬ常勝旗

将士聲なく降りては

不落も遂に人の名ぞ

【解説】「不落も遂に人の名ぞ」——《言及なし》

【私見】「不落も遂に人の名ぞ」——ドイツ軍の青島要塞は、日露戦争時將のロシア軍の旅順要塞を小ぶりにしたような難攻不落の要塞といわれていた。「人の名」が何を指すのかは難解であるが、当時のドイツ軍関係者の中に、「不落」にかかわる人名は見当たらない。私見では、「人の名」と

345 新渡戸校長惜別歌『慕へどあはれ行く春を』(大2・5/石井 満作詞、龜井貫一郎作曲)

【経緯】

新渡戸稻造は明治三十九年九月二十八日に一高校長に就任し、大正二年四月二十二日に健康上の理由もあつて辞任するまで、約六年半在任した。アメリカ仕込みの近代的ソシアルティーの主唱で一高に新風を吹きこみ、当初は寮生ならびに卒業生の一部から糾弾されたが、次第にその高邁かつ懐の深い見識と人格により生徒の信頼を一身に集めた。辞任を聞いた寮委員および生徒一同は留任運動を行うが新渡戸校長の辞意の固いことを知って断念し、五月一日に新旧校長の歓送迎会を嚶鳴堂で開催した。その晩、全寮晚餐

は具体的な人名をいうのではなく、実質を伴わない「人の空名」が長続きしないのと同様に、難攻不落といわれた要塞も遂に落ちてしまったと揶揄したものと解したい。

▼「棄てよ此の世の空し名は」(71 『あゝ大空に』明40東大)

▼「あだし此の世の名は墜ちよ」(74 『譬へば海の』明41)

なお、工藤康氏(一高昭26理甲)からは、「人の名」とは、「人の名付けた名」という意味で、所詮は人が「不落」と称していたに過ぎず、難攻不落は絶対的なものではなかったということではないかとのご示唆をいただいたが、あるいはこの説の方が正しいのかもしれない。

会が開かれ、終わると寮生数百名（全寮生の約半数）が、雨後の泥濘のなか、校長を小日向台町の私邸まで送り、『新渡戸校長借別歌』を歌い、花束を贈呈、三年生の矢内原忠雄が代表して送別の辞を述べた。【一高寮歌解説書の記述を要約した。】

《森下注》この歌は、一高において校長に対する惜別の歌が作られた唯一の例である。

一 「慕へどあはれ行く春を

誰かは仇に止め得む

若葉は枝にちぎるとも

萌ゆる緑は長からじ

【解説】「慕へどあはれ行く春を／誰かは仇に止め得ん」——《言及なし》

【私見】「慕へどあはれ行く春を／誰かは仇に止め得ん」——藤村及び晩翠の詩を踏まえていると考えられる。

▼「人はあかねど行く春を／いつまでこゝにとどむべき」

《藤村・夏草》『晩春の別離』

（岩辻賢一郎氏〈京大OB〉の二示唆を得た。）

▼「嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん」

《晩翠・暁鐘》『弔吉国樟堂』

◎【参考】「慕へどあはれ逝く春を／誰かは永久に留め得ん」

《弘前高校第3回記念祭歌『霞の影に萌え出でし』大13》

（大瀧清氏〈高昭25文甲〉の二示唆を得た。）

【解説】「若葉は枝にちぎるとも／萌ゆる緑は長からじ」——《言及なし》

【私見】「若葉は枝にちぎるとも／萌ゆる緑は長からじ」——藤村の次の詩を

踏まえている。

▼「青葉は枝に契るとも／緑は永くとらまらじ」

《藤村・「落梅集」『枝うちかはす梅と梅』》

二「溢るゝ許り湧き出づる

深きなさけの感激に

若き血潮のたぎりけん

心の窓も閉ぢはてぬ」

【解説】「溢るゝ許り湧き出づる」——《言及なし》

【私見】「溢るゝ許り湧き出づる」——藤村の次の詩を踏まえている。

▼「あふるゝばかり湧き出づる／血潮と遠き望みとは……」

《藤村・「夏草」『農夫』『深夜』》

【解説】「心の窓も閉ぢはてぬ」——《言及なし》

【私見】「心の窓も閉ぢはてぬ」——藤村の次の詩を踏まえている。

▼「慕ひあへりしはらからに

永き分れを告げんとて

深き情にかぐやまし

心の窓も閉ぢはてぬ」

《藤村・「夏草」『終焉しまはの夕ゆふ』》

三「濁るも水のならひぞ」と

『高嶺の月』は照すとも

教への君にわかれては

【解説】「濁るも水のならひぞ」と／『高嶺の月』は照すとも——師（新

渡戸校長をさす）の詠歌「おり折は濁るも水の習ひぞと／思ひ流して月は

澄むらむ」と、「見る人のこころ心にまかせおきて／高嶺にすめる秋の夜

の月」に基いており、このような高潔な精神に輝く「教への君にわかれては／何を光のわれ等ぞや」と、いわく言い難いほどの惜別の情を歌い、最後の第四節につないでいる。

【私見】『濁るも水のならひぞ』と／『高嶺の月』は照すとも——解説書

では、元になった二首の歌を「師の詠歌」としているが、この二首は、いずれも新渡戸稲造校長の作ではない。十和田市立新渡戸記念館の作成した「新渡戸稲造関連和歌データベース」でも、二首とも作者未詳とされている。

▼「折々は濁るも水の習ひぞと／思ひ流して月は澄むらん」

《新渡戸校長愛吟の歌、作者未詳》

▼「見る人の心ごころにまかせおきて／高嶺に澄める秋の夜の月」

《前歌と同じく、新渡戸校長愛吟の歌である。『小学唱歌（三三）』（明治17年6月、文部省音楽取調掛編）の『四季の月』第三節に採録されているが、作者は未詳である。》

【注①】この歌の作詞者が鈴木弘恭であるとの推論がネット上で散見される。これは『小学唱歌（四）』（文部省検定・大日本図書発行）（明26）所収の『四季の月』の作詞者が鈴木弘恭と記載されていることを根拠としているようだが、これらの二つの『四季の月』は同名異曲（歌詞も曲も全く別

四 「心」ころに思ひ出の

古き夢路を覺め出でて

別れの宴催せば

あくとしもなき今宵哉

物)なので、こ注意いただきたい。

【注②】 自宅近隣の神社でオミクジを引いたら、49番「吉」で「見る人

のころころく<sup>こす</sup>にまかせおきて 木末にすめる月の影かな」という歌が添え

られていた。これは明らかに『四季の月』の歌を下敷きにしたものであろう。

【解説】 「何を光のわれ等ぞや」——《言及なし》

【私見】 「何を光のわれ等ぞや」——藤村の次の詩を踏まえている。

▼ 「ふゆやまこえてきみゆかば／なをひかりのわがみぞや」

《藤村・若菜集『四高樓』》

【解説】 「あくとしもなき今宵哉」——《言及なし》

【私見】 「あくとしもなき今宵哉」——藤村の次の詩を踏まえている。

▼ 「かくうるはしき月の夜に

自然の業を眺めつゝ

岸のほとりにさまよへば

飽くとしもなき今宵哉

《藤村・「夏草」「農夫」序「利根川のほとりにて」》

以上のように、島崎藤村の詩を踏まえた表現が六箇所にも及び、藤村の影響が大きいことが知られるが、いずれも巧みな本歌取りだと言えよう。



- 346 嘯雲寮寄贈歌『芙蓉の峰に雪映えて』(大14 / 千葉四郎 作詞作曲)
- 347 対三高戦應援歌『蒼穹深くはた極みなく』(昭7 / 畑 耕一 作詞、堀内敬三 作曲)
- 348 一高音楽班班歌『駒場の原に淺緑』(昭16 / 箕作秋吉 作詞作曲)
- 349 春は春は『春はく 櫻咲く向島』(明43 / 御手洗文雄 作詞)
- 350 マーナンジャエー『艇庫出る時は』
- 351 一つとせ『一つとせ 人のいやがる』(大7 / 千葉四郎 作詞)
- 352 體がデツカイばかり『身體がデツカイばかりで』(大11 / 千葉四郎 作詞)
- 353 一つと出たわいな『一つと出たわいなヨサホイノホイ』(千葉四郎 作詞)
- 354 あゝ愉快なり『あゝ愉快なり愉快なり』(大11)
- 355 上村中將の歌『荒浪吼ゆる』(佐々木信香 作詞、佐藤茂助 作曲)
- 356 漢の高祖『漢の高祖も秀吉も』

357 河童踊の歌『河童やめらりよか』

358 銀波歌『大海原月夜の景色』(明35/山内冬彦作詞、小峰昇二作曲)

359 一高卒業四十年記念歌『日日なべて』(昭35・氷室吉平作詞、矢野一郎作曲)

【経緯】大正九年一高英法卒同窓会(「柏影会」)の卒業四十年記念会合(昭和三十五年三月)の記念歌として、氷室吉平作詞・矢野一郎作曲で作られ、同年十月開催の「大正九年卒一、二、三部合同同窓会」において、同会(井上萬壽藏氏の提案を受け「大白会」と命名)の会歌とすることが承認されたものである。この歌は卒業後の回顧の情切々たるものが溢れた名歌であることから、方々の同窓会で歌われ、適宜その時の会合に応じて「四十年」というところを他に置き換えて歌われる。なおこの歌は、最終の平成16年版寮歌集で初めて収録されたもので、昭和50年版寮歌集を底本とした「解説書」では取り上げられていない。ちなみに氷室氏は『のどかに春の』の作詞、矢野氏は『春甦る』などの作曲で著名であるが、一高同期生である両氏による作詞・作曲のコンビは、本歌で初めて実現した。

【参照】①矢野一郎・「大正九年一高卒業四十年記念歌について」(『向陵駒場』一九六一年二月号)  
②氷室吉平・「日日なべて四十年昔」(『向陵駒場』一九六一年二月号)

一 「日日なべて」

四十年昔

【私見】「日日なべて」——「一説に「日々並べて」の意とされ、通常は

若き日の われらあこがれ

「かがなべて」と訓する」日数を重ねて。「か」は一日、三日などの

あゝ向陵に つどひ学びき

「か」で、「日」の意。四十年も前の若き日に、向陵にあこがれ、ともに向陵に学んだ思い出を歌う。

▼「日日並べて夜には九夜(きよ)日(ひ)には十日を」《古事記・中》

二「人の生の 四十年長く

【私見】向陵時代から今日まで四十年もの長きにわたる、友人たちとの

交はりし かの日かの時

交友の、懐かしくも生々しい思い出を語る。

あゝ昨日のこと 今も思ほゆ

「昨日のこと」——「きぞ」【昨、昨日】(「きぞ」とも)は、「昨日」、また「昨夜」のことをいう。

三「年移り 四十年今は

【私見】卒業して四十年の今日までに先立った友の数々を偲ぶ。

去りゆきし 友よいくたり

学友(寮友)の告別式の折などにこの節が歌われることも。

あゝ柏ぐに しのび悼まへ

四「いざわれら 百年までも

【私見】学友(寮友)の健在をよろこび、さらなる長寿を願う。

友情に 生くるよろこび

寮歌祭などの集まりで、出席された大先輩の長寿を祝福するとき

あゝ春の夜を 祝酒酌まん

などにもこの節が歌われる。

361 高水泳部の歌『舟の上より筏より』（千葉四郎 作詞作曲）

362 ラグビー部部歌『T r a Ra Ra Ra』（渡辺 諒 作詞、堀内 安 作曲）

363 桃太郎踊りの歌『昔、昔、その昔』

【以上のうち305のⅡ、305のⅢ、および359から363まで、あわせて七篇は平成十六年版寮歌集で初めて掲載されたものである。これにより、同寮歌集に掲載された寮歌・奇贈歌・部歌・応援歌・頌歌等は、合計三六五篇となった。】

【歌い出し索引】



【歌い出し索引】

(あ)

あゝ朝潮の……………235  
 あゝ大空に……………129  
 あゝ如月の  
 嗚呼玉杯に……………34  
 あゝ香蘭の……………219  
 嗚呼向陵に……………559  
 あゝ渾沌の……………102  
 あゝ牡丹にづらふ……………467  
 あゝ新緑の……………234  
 あゝ青春の……………255  
 嗚呼先人の……………416  
 嗚呼東海の……………303  
 嗚呼悠久の……………535  
 あゝ日は昇る  
 嗚呼東の……………ひんがし

あゝ平安の……………189  
 あゝ炳日の……………197  
 あゝ紫の……………308  
 あゝ愉快なり  
 嗚呼繚亂の……………366  
 あゝ我勝ちぬ……………561  
 ああわれら  
 あを大空を……………18  
 青く澄みたる  
 青旗の……………546  
 青葉山  
 暁がたの……………75  
 あかつきつづる……………304  
 黎明の靄……………211  
 暁寄する新潮の……………60  
 暁星の光消えゆき……………330  
 あくがれは……………544

明けぬと告ぐる……………69  
 暁星の淡きあけぼの……………ひんがし  
 曙の燃ゆる息吹ゆ……………526  
 あこがれの唄……………351  
 朝あくる……………382  
 朝日影  
 あさみどり……………486  
 亜細亜の東……………72  
 朝あした金鶏……………127  
 あしたの星の  
 梓弓……………403  
 仇浪騒ぐ……………105  
 天路のかぎり……………149  
 天つ日を……………521  
 アムール川の……………19  
 彩雲は……………373  
 荒潮の……………192

嵐を孕み……………129  
 嵐が丘に  
 荒浪吼ゆる  
 時計臺に……………479  
 ありとも分かぬ……………198  
 暗雲西に  
 (い)  
 いざさらば……………553  
 いざ行かむ……………138  
 漁火消えゆきいさりび  
 巖白禱の……………472  
 一搏いっぱく翱翔……………284  
 生命の泉……………343  
 いま京近き……………279  
 いやさかえゆく  
 (う)  
 潮高鳴り……………143

薄霧こむる

宴して……………331

空洞なる……………403

うらゝにもゆる……………271

ウラルの彼方……………582

愁ひに悲し

(え)

榮華は古りし……………322

(お)

王師の金鼓……………76

大海原月夜の景色

大海原の……………411

大空ひたす……………52

大空舞ひて

おゝ呼ぶ声す

丘の雲

丘邊の春に

をぐろき雲は

朧月夜に仄白く……………272

朧月夜の花の蔭……………151

朧に霞む……………237

思ひ出づれば……………75

思ふ昔の

思へば遠し……………13

オリムパスなる

(か)

日日なべて……………592

輝き渡る……………31

柏の濃緑

柏の下葉……………104

柏の旗の……………573

霞かぎれる……………97

霞薫する……………136

霞一夜の……………278

風荒ぶまさ

河童やめらりよか

かつら花咲く……………63

悲しみに

彼は誰の……………365

神の代ながらに

華陽の夢の……………163

身體がデツカイばかりでからだ

かをりのみたま……………209

寒燈夜は……………585

漢の高祖も

寒風颯々……………498

寒風香る……………410

橄欖永久に

橄欖のかげ

橄欖の梢の尖に……………332

橄欖の森……………228

(き)

北、窮髪の

仇敵北に

今日回り来る

巨大の天靈……………135

清らかに……………470

霧淡晴の……………181

(く)

溟洋る胸のくも

草より明けて

颯風を孕み……………89

雲ふみ分けて

雲巻き雲舒ぶ……………175

雲や紫……………178

紅香ふにほ

(け)

鯨波切りて



藝文の花……………159  
けりてう  
 怪鳥焦土に  
 煙り争ふ……………336  
 煙に似たる……………157  
 (二)  
 紅雲映ゆる……………145  
 香雲深く……………86  
劫風寄する  
 劫風寄する  
 姑蘇の臺は……………33  
古都千年の  
 古都千年の  
 木の芽も春の……………52  
 小萩露けき……………367  
 駒場野に……………250  
駒場の原に  
 駒場の原に  
 混濁の浪……………49  
 (三)  
 障え散へぬ……………492

狭霧はれゆく  
 狭霧はれゆく……………196  
 さ霧這ふ……………196  
 さくら流れの……………193  
さ緑庭に  
 さ緑庭に……………119  
 (し)  
しこん あやは  
 紫金の彩羽……………119  
しじま  
 しじまなる……………358  
 無言に憩ふ……………226  
しづかに沈む  
 しづかに沈む……………178  
 慕へどあはれ……………586  
 自治の流れは……………314  
しげ  
 愁雲稠き……………224  
しんせん  
 春蟾かすむ……………119  
しやうか  
 上下茫茫……………456  
 白雲の……………356  
 白波騒ぎ……………395

しらぬひ  
 不知火の……………410  
しらび  
 白陽に映ゆる……………332  
 しろがね遠く……………332  
 (す)  
こ  
 瑞雲單むる……………475  
 瑞雲映ゆる……………579  
 (せ)  
正氣あふるる  
 正氣あふるる……………31  
 世紀の流れ……………153  
 青鸞精を……………153  
 (そ)  
蒼穹深く  
 蒼穹深く……………133  
蒼江遠く  
 蒼江遠く……………135  
 袖が濱邊の……………133  
 そよく橄欖……………410  
 (た)  
たいふう  
 大風荒れて……………284

太平洋の……………92  
 手折りてし……………401  
たそがれどき  
 黄昏時の……………241  
 譬へば海の……………6  
 たなびきわたる……………144  
うてな  
 玉の臺の……………144  
 たまゆらの……………17  
 淡青春に……………343  
 忠と勇との……………496  
 千代呼ぶ聲に……………164  
散りし櫻を  
 散りし櫻を……………284  
 散り行く花の……………496  
 (つ)  
 月を背にして……………164  
 月は朧に……………284  
 月は老ゆるを……………496

筑紫の富士に……………190  
 筑波根あたり……………68  
 坤うらゝかに……………  
 つめたき冬の……………269  
 劍の前に……………126  
 (て)  
 艇庫出る時は  
 天日はるかに  
 天地の正氣……………568  
 天龍眠る……………188  
 (と)  
 偷安の春も……………313  
 東海染むる  
 東海波は  
 東皇回る……………288  
 東天淡し……………424  
 時永劫の……………220

時乾坤の……………577  
 時の流れもゆるやかに  
 時は流れて十四歳  
 時は流れぬ五十年……………242  
 とこよのさかえに……………165  
 としはや巳に……………76  
 圖南の翼……………152  
 トラ・ラ・ラ・ラ  
 (な)  
 流れ行く……………183  
 波は逆巻き……………53  
 (に)  
 新草萌ゆる……………85  
 ニコライの  
 濁りよ深き  
 西に富士……………5  
 西のくらのいに……………581

新墾の……………428  
 (ね)  
 眠れる獅子の  
 (の)  
 野路の小百合の……………234  
 希望の光  
 のどかに春の……………302  
 (は)  
 榛薫る……………515  
 花の香むせぶ……………103  
 櫻萌ゆる……………420  
 花は櫻木  
 花は櫻と  
 退けくも……………442  
 春こそは……………455  
 春毎に……………467  
 春二月の……………70

春すぎて……………524  
 春長江の……………89  
 春東海の……………368  
 春尚淺き……………447  
 春の臺の  
 春の廳のよひにして……………162  
 春の思ひの……………197  
 春の日晷に……………450  
 春の光の……………251  
 春の日背を……………68  
 春は來ぬ  
 春は櫻花咲く  
 春は春は  
 春は萬朶の……………394  
 春まだあさき……………67  
 春未だ若き……………313  
 春や廳の夕まぐれ……………424

春や加茂の

春甦る……………294

春より暮れて……………187

春爛漫の……………26

春燎爛の花霞……………79

春、縹爛の夕まくれ……………205

晴るるおもひに……………229

杳かなる日の

(ひ)

比叡の山に雪消えて……………260

比叡の山に我立ちて

比叡の山の石だたみ……………88

緋絨着けし……………148

光ほのかに……………458

光まばゆき……………171

一度搏てば

一つと出たわいな

一つとせ

人の世の小昏き山路

人の世の岨しき路に……………477

一夜の雨を……………297

日のしづく……………554

陽は黄梢に……………427

日は眠る

日は夢み……………543

悲風惨悴

東の天地別きて

廣瀬の流れ……………525

廣野をわたる……………222

(ふ)

笛の音迷ふ……………150

吹く木枯に……………385

不二が嶺に

富士の高峰の

武成の昔……………10

舟の上より

芙蓉の峯に

芙蓉の雪の

ふりしきる……………552

古りし榮ある……………398

ふりつめる

舊き星……………387

ふるさこの

(へ)

平沙の北に……………82

(ほ)

暮靄罩れる……………207

暴風轟然

北海浪は……………487

戊戌の昔……………563

ほのぼのと明けゆく丘に

仄々と朝明けにけり……………355

仄燃ゆる

(ま)

またうらわかき

まじろみ深き

眞闇の影は

(み)

身を捨てて……………8

御空に映ゆる

緑なす……………409

緑もぞ濃き……………54

實の橄欖……………240

都の空に……………73

都の南

都是春の……………103

見よ甘泉の

みよしのの

見よ鞆しうせんに……………226  
 見よや見よや……………399  
 御代諒闇の……………208  
 (む)  
 昔、昔、その昔  
 武香が岡に春長けて  
 向ヶ丘に吹き荒るる  
 向ヶ丘に冬籠る……………88  
 向が陵の自治の城……………69  
 向ふが岡の新草に  
 向が岡の春風に……………16  
 武藏野の  
 武藏野分きて……………161  
 群り猛る……………91  
 群雲を紅染めて……………372  
 紫淡あざき春霞  
 紫淡く……………141

紫霧あざふ……………276  
 紫烟る……………316  
 紫の暁  
 紫の叢雲あざつききて  
 運あるもの……………499  
 (め)  
 (や)  
 八重汐路  
 八島を洗くふ……………169  
 闇くに陰くれる……………229  
 闇の醜雲しういん  
 闇の中なる……………3  
 彌生が岡に地を占めて……………66  
 彌生が岡にまかれにし  
 彌生ヶ丘に洩れ出づる……………307  
 彌生ヶ岡の花がすみ……………133  
 彌生が岡の夕まぐれ

彌生の丘四十五年  
 彌生の道に……………488  
 (ゆ)  
 夕霧は……………456  
 夕月丘に……………326  
 雪ゆきこそよけれ  
 雪鎖ゆきす……………452  
 雪ふらばふれ……………6  
 夢ゆたかなる……………202  
 ゆれて漂うふ……………212  
 (よ)  
 妖雲瘴霧……………167  
 蘇する春の  
 (り)  
 りよりりようと……………549  
 (れ)  
 歴史は古りし

(わ)  
 我一高は  
 若わかき愁しみひに……………347  
 我わが寄よ宿舎しゆくを……………8  
 若草もえて  
 若駒わかの  
 わがたましひの……………242  
 嫩葉わか萌もゆ  
 若緑わか濃のき……………514  
 若紫に……………247  
 わが行く方は……………143  
 蒼溟わだつみの……………452  
 われらの命の  
 我等われはいかなる……………9

## 【あとがき】

平成十六年十一月に一高同窓会から『第一高等学校寄宿寮寮歌 解説』が上梓されたが、同解説書は一高卒業生はもとより、一高同窓会会友や寮歌愛好者が久しく渴望していた貴重な労作であり、正しく千天の慈雨であった。執筆された諸先生のひとかたならぬご尽力に心からの敬意と感謝の念を捧げたい。

かねてから一高寮歌の歌詞の典拠や歴史的・思想的背景に関心を持っていた筆者は、同解説書によって、一高寮歌のすばらしさ、奥深さについて認識を新たにし、それに触発されて、一高寮歌の歌詞の典拠や解釈について、僭越ながら、今日までささやかな研究を続けて来た。

周知のように一高寮歌の作詞は、そのほとんど全てが十代後半から二十才くらいまでの一高生（寄贈歌は大学の学生）自身の手によるものであることが大きな特色であり、その完成度からみても、文学、芸術、歴史、思想など多岐に亘る一高生の教養レベルの高さを如実に物語っているといえよう。

筆者は昭和三十年に東大に入学し、教養学部の駒場寮に在寮していた当時から寮歌に親しんできたが、最近では、一高寮歌を歌い継ぐ目的で平成十四年一月にスタートした「詠帰会」（谷田昌夫代表）に所属し、一高同窓会の会友にも加えていただいている。詠帰会の例会は毎月一回東大駒場キャンパスで開催され、新制東大の卒業生を主体とし一高の先輩を交えた四十人以上のメンバーが毎回集まって一高寮歌を歌い、交流を深めている。

そして平成十七年六月以降、筆者は、詠帰会の例会の場で、①右に述べた解説書において「未詳」、「不明」な

いし「後考を待つ」とされた事項、②同じく言及がなされていない事項、および③寮歌の典拠・解釈に関する研究結果等について、『一高寮歌解説書の落穂拾い』と題して研究報告を重ねており、本年十一月で三十四回、取り上げた一高寮歌は二百篇強に及ぶ。

最近になって、幾人もの一高の先輩や詠帰会の友人たちから、一高同窓会も募引きを迎えたこの時期に、これまで発表したものを一冊にまとめてはどうか、との強いお勧めをいただいたことから、本書を出版する運びとなった。一高をはじめとする旧制高校の伝統と精神文化に関心を寄せ、寮歌を愛好する方々に「ご利用いただければ幸いである。一高寮歌解説書の「落穂」を丹念に拾い集めることによつて、一高寮歌のすばらしさを味わい、さらに後世に伝えるために、いくらかでも貢献できたとするならば、筆者としてこれに過ぎる喜びはない。

もとより寮歌の解釈に絶対はない。一高に在籍した経験を持たないうえ、国文学・中国文学専攻でもない素人である筆者のつたない考察が、どのレベルまで到達し得たかは疑問であり、ぜひ読者諸賢のご感想やご高見をお寄せくださるようお願い申しあげる。

本稿をまとめるにあたり、園部達郎先輩（一高昭7文甲）をはじめ、朽津耕三（昭23理甲）、大瀧清（昭25文甲）、井下登喜男（昭26文丙）、工藤康（昭26理甲）、佐野清彦（昭26理乙）の各先輩など一高の諸先輩、一高同窓会事務局、および詠帰会の親しい友人たちから、多くの「教示と暖かいお励ましをいただき、一高同窓会・元理事長の園部達郎先輩からは、貴重な序文を賜った。そして、井上司朗先輩（大13文乙）の「一高寮歌私観」

をはじめ、園部達郎先輩の「寮歌こぼればなし」、井下登喜男先輩の「一高寮歌メモ」、一高同窓会の会誌「向陵」に掲載された一高諸先輩の論考など、先学の研究成果からも大きな刺激と啓発を受けた。また、詠帰会の例会の貴重な時間の一部を、筆者のつたない研究発表のために割いてくださった、同会の友人たちのご好意も忘れることができない。さらに、本文の校閲については一高の朽津耕三先輩および詠帰会の盛田勳武氏、印刷については詠帰会の深谷晋氏および谷田和夫氏に、格別のご支援をいただいた。

以上、お世話になった方々に対し、この場をお借りして心からの感謝の気持ちを捧げる次第である。

平成二十一年十二月

森下達朗 記

### 【増補新版あとがき】

本書の母体は、旧版と同じく、一高寮歌を歌い継ぐことを目的とする「詠帰会」の例会における筆者の研究発表である。詠帰会（深谷晋代表幹事）の会員数はすでに百人に達し、最近では毎月の例会の出席者も五十人を数える盛況となっている。例会の貴重な時間を割いて筆者に研究発表の場を与えてくださった同会の友人たちに改めて謝意を表したい。

なお、旧版の序文を頂戴した元・一高同窓会理事長の園部達郎先輩(昭7文甲)は、平成二十四年に天寿を全うされた。ご生前に賜ったご厚情に深く感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第である。

本稿の執筆については、橋本十三男(昭22文乙)、名原晃一郎(昭22理甲)、朽津耕三(昭23理甲)、辻幸一(昭24文甲)、故・大瀧清(昭25文甲)、黒川弘(昭25文甲)、井下登喜男(昭26文丙)、工藤康(昭26理甲)、一高玉杯会代表幹事の各先輩など一高諸先輩、および詠帰会の親しい友人たちから多くのご教示とご声援を賜った。また、一高の諸先輩の論考や『向陵誌』の記事等の恩恵を蒙ったことはもとより、詠帰会の南部直樹氏および吉田健彦氏の優れた研究からも、さまざまに啓発を受けた。

先般来、先輩・友人各位からの熱心なお勧めもあり、このたび旧版の内容とその後五年間に発表した研究成果とを併せて編纂した「増補新版」を刊行させていただくこととした。旧版の記述を大幅に増補・改稿するとともに、新たに三十七篇の寮歌を追加して、ページ数も倍増したことから、より充実した内容になったと実感していただければ幸いである。出版の具体的な準備等については、詠帰会の深谷晋氏、山本浩氏および谷田和夫氏の格別のご支援を賜り、装幀等については詠帰会の熊谷晃氏のご助力を頂戴した。

お世話になった方々に心からお礼を申し上げます。

平成二十七年三月

森下達朗 記



〈著者略歴〉

森下 達朗（もりした・たつろう）

詠帰会幹事、一高同窓会会友、一高玉杯会幹事。

昭和 11（1936）年 11 月生まれ、岐阜市出身。

昭和 30（1955）年 岐阜県立岐阜高等学校卒業

昭和 34（1959）年 東京大学法学部卒業。

元・日本国有鉄道勤務。

住所：〒216-0033 川崎市宮前区宮崎 6-5-47

増補新版

一高寮歌解説書の落穂拾い

〈虫の目と鳥の目で寮歌を読み解く〉

《非売品》

---

平成 21（2009）年 12 月 25 日 初版発行

平成 27（2015）年 3 月 20 日 増補新版発行

著者・発行人 森下達朗

〒216-0033 川崎市宮前区宮崎 6-5-47

印刷・製本 有限会社 愛幸堂

〒273-0011 千葉県船橋市湊町 2-8-8